空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

空港跡地遺跡 III

１９９８．１０

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香　川　県　土　地　開　発　公　社

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊

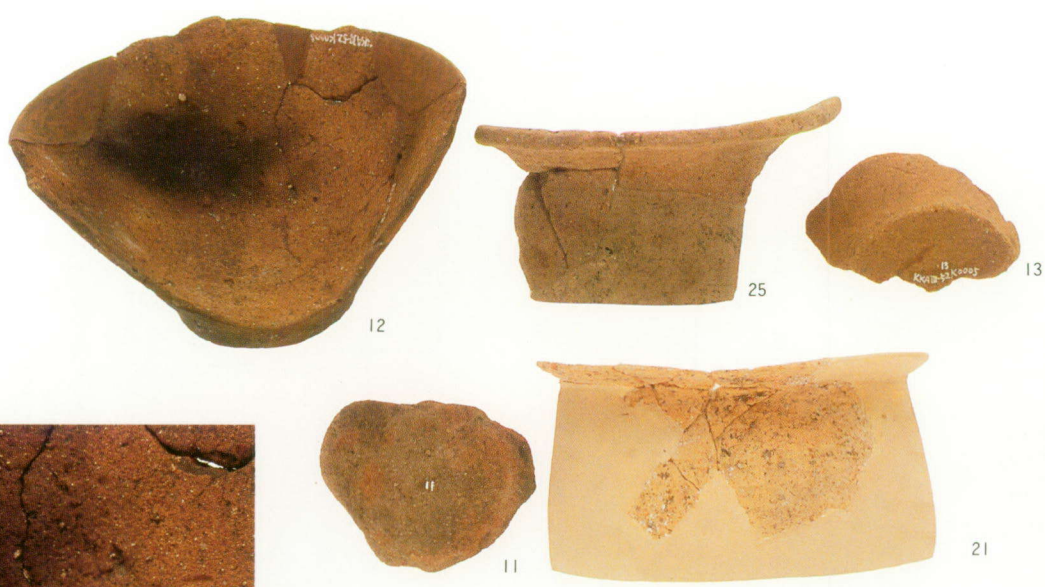
空港跡地遺跡 III

１９９８．１０

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香　川　県　土　地　開　発　公　社

空港跡地遺跡 I 地区（III—24・30 区調査風景）西から

空港跡地遺跡 I 地区出土近世陶磁器



胎土Ⅰa類土器胎土　12

江戸時代胎土Ⅰa類土器　335・382・288・321・326・327
江戸時代胎土Ⅰb類土器　287・366・367
弥生時代胎土Ⅰa類土器　12・25・13
弥生時代胎土3類土器　11・21

序　　文

平成元年12月の新高松空港の開港に伴って高松市林町の高松空港跡地は，研究情報機能および文化機能を有する技術・情報・文化の複合拠点，香川インテリジェントパークとして生まれ変わることになりました。

香川県教育委員会では，高松空港跡地の整備事業に伴い，平成２年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきたところであります。また，平成６年度からは同センターにおきまして，出土文化財の整理研究業務を行っており，その成果につきましても，平成８年度から調査報告書の刊行を行い，今後順次継続する予定にいたしております。

このたび，「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ」として刊行いたしますのは，香川県土地開発公社より委託されました，空港跡地遺跡東端の調査についてであります。同地域の調査では，弥生時代から近世までの多くの遺構・遺物が出土しておりますが，とくに近世の多様な陶磁器などの出土により，同時期の土器の消費実態が明らかになろうとしています。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間，香川県土地開発公社及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成10年10月30日

香川県教育委員会

教育長　　金　森　越　哉

例　　言

1．本報告書は，空港跡地開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第3冊であり，香川県高松市林町に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，予備調査を平成2年4月から同年9月まで実施し，本調査を平成3年1月から平成9年11月まで実施した。本報告書に収録された地区については，平成3年11月から平成6年3月まで調査を実施している。

発掘調査の担当は，本文中に記したとおりである。

4．調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土地開発公社，高松市教育委員会，明善学園高等学校，林地区開発協議会，地元各自治会，地元水利組合

5．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本書の編集および第3章を除く各章の執筆は森下友子が担当した。

また，出土土器の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所白石　純氏に依頼し，頂いた玉稿を第3章第2節に掲載した。

6．発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教授を得た。記して感謝を表したい。（順不同，敬称略）

大橋康二，家田淳一，盛　峰雄，船井向洋，福原　透，豊田　基，村上泰樹，白神典之，仲野泰裕，森　達也，藤澤良祐，金子健一，佐野　元，山下俊郎，稲垣正宏，伊藤　晃，市川正史，長砂古真也，北條ゆうこ，橋本達也，山本哲也，浜田恵子，藤方正治，奥田　尚，谷山　穣

7．本報告書で用いる方位は，国土座標系第Ⅳ系による。標高は，T.P.を基準としている。また，遺構は下記の略号により表している。

SA 柵列	SB 掘立柱建物	SD 溝	SE 井戸	SH 竪穴住居
SK 土坑	SP 柱穴	SX 不明遺構	SR 河川	SZ その他の遺構

8．挿図の一部に建設省国土地理院地形図高松南部（1：50,000）を使用した。

9．遺物量の表記で，整理用コンテナについては28リットル入りのもので表した。

10. 土器・陶磁器については，遺物番号の横に産地と種類を次のように表示した。

黒	黒色土器	須	須恵器	肥陶	肥前陶器	肥磁	肥前磁器
肥青	肥前青磁	肥白	肥前白磁	肥磁色	肥前磁器色絵	肥系陶	肥前系陶器
肥系磁	肥前系磁器	肥系白	肥前系白磁	松尾	松尾焼陶器	備前	備前焼
富田	富田焼	源内	源内焼	大谷	大谷焼	三田	三田青磁
丹波	丹波焼	堺	堺または明石	明石	明石	京風	京焼風陶器
京系	京・信楽系	信楽	信楽焼	瀬陶	瀬戸美濃陶器	瀬磁	瀬戸美濃磁器
中染	中国産磁器染付	中白	中国産白磁	中青	中国産青磁	陶	産地不明陶器
磁	産地不明磁器	磁色	産地不明磁器色絵				

11. 土器胎土については含有物と色調によって以下のように分類した。

胎土１ａ類　茶褐色系の色調を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を多く含む土器胎土

胎土１ｂ類　灰色系の色調を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を多く含む土器胎土

胎土２類　結晶片岩を含む土器胎土

胎土３類　その他の土器胎土

目　　次

巻頭図版
序文
例言

第１章　調査の経緯
　１．発掘調査の経過……1
　２．整理及び報告書作成作業……2

第２章　調査の成果
　第１節　調査の方法と各調査区の概要
　　１．調査の方法……9
　　２．土層の堆積状況……9
　　３．各地区の概要……9
　第２節　遺構・遺物
　　１．弥生時代から古墳時代……19
　　２．平安時代から鎌倉時代……41
　　３．江戸時代以降……59

第３章　自然科学調査の成果
　第１節　空港跡地遺跡におけるプラント・オパール分析……159
　第２節　空港跡地遺跡出土近世陶磁器の胎土分析……165

第４章　まとめ
　１．遺構の変遷……178
　２．明治21年地籍図と遺構の変遷……192
　３．出土遺物……193

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図(1/100,000) …… 2
第 2 図　報告地区割図(1/12,000)…… 5
第 3 図　調査区割図(1/4,000) …… 7～8
第 4 図　Ⅰ地区南壁土層断面図
(天地1/50・左右1/250)……11～12
第 5 図　弥生時代から古墳時代遺構配置図
(1/600) ……13～14
第 6 図　平安時代から鎌倉時代遺構配置図
(1/600) ……15～16
第 7 図　江戸時代以降遺構配置図(1/600)
……17～18
第 8 図　SBi 01平・断面図(1/100) ……19
第 9 図　SBi 02平・断面図(1/100) ……19
第10図　SBi 03平・断面図(1/100) ……20
第11図　SBi 04平・断面図(1/100) ……20
第12図　SPi 27出土遺物実測図(1/3)……20
第13図　SKi 01平・断面図(1/50) ……20
第14図　SKi 02平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……21
第15図　SKi 03平・断面図(1/50) ……21
第16図　SKi 04平・断面図(1/50) ……21
第17図　SKi 05平・断面図(1/20),
出土遺物実測図1(1/3)……22
第18図　SKi 05出土遺物実測図2(1/3) …23
第19図　SKi 06平・断面図(1/50) ……23
第20図　SKi 07平・断面図(1/50) ……23
第21図　SKi 08平・断面図(1/20),
出土遺物実測図(1/3)……24
第22図　SKi 09平・断面図(1/50) ……24
第23図　SKi 10平・断面図(1/50) ……24
第24図　SKi 11平・断面図(1/50) ……24
第25図　SKi 12平・断面図(1/50) ……25
第26図　SKi 13平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/2)……25
第27図　SKi 14平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……25
第28図　SKi 15平・断面図(1/50) ……26
第29図　SDi 01平・断面図(1/40)……26
第30図　SDi 02断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……26
第31図　SDi 03断面図(1/40)……26
第32図　SDi 04断面図(1/40)……26
第33図　SDi 05断面図(1/40)……26
第34図　SDi 06断面図(1/40)……27
第35図　SDi 07断面図(1/40)……27
第36図　SDi 08断面図(1/40)……27
第37図　SDi 09断面図(1/40)……27
第38図　SDi 10断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……27
第39図　SDi 11断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……28
第40図　SDi 12断面図(1/40)……28
第41図　SDi 13断面図(1/40)……28
第42図　SDi 14断面図(1/40)……28
第43図　SDi 15断面図(1/40)……29
第44図　SDi 16断面図(1/40)……29
第45図　SDi 17断面図(1/40)……29
第46図　SDi 18断面図(1/40)……29
第47図　SDi 19断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/2)……29
第48図　SDi 20断面図(1/40),
出土遺物実測図1(1/3)……31
第49図　SDi 20出土遺物実測図2(1/3)……32
第50図　SDi 20出土遺物実測図3(1/3)……33
第51図　SDi 21断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……34
第52図　SDi 22断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……35
第53図　SDi 23断面図(1/40)……35
第54図　SDi 24断面図(1/40),

出土遺物実測図(1/3)……35
第55図 SRi 01・SRi 02断面図(1/60)……36
第56図 SRi 01出土遺物実測図(1/3)……37
第57図 SRi 02出土遺物実測図(1/3・1/2)
……38
第58図 SXi 01断面図(1/50) ……39
第59図 SXi 02断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/2) ……39
第60図 SXi 03断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……39
第61図 SXi 04平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……39
第62図 弥生時代包含層出土遺物実測図
(1/3・1/2) ……40
第63図 SBi 05平・断面図(1/100) ……41
第64図 SBi 06平・断面図(1/100・1/20),
出土遺物実測図(1/3)……42
第65図 SBi 07平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……42
第66図 SBi 08・SBi 09平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……43
第67図 SBi 10平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……44
第68図 SBi 11平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……45
第69図 SBi 12平・断面図(1/100),
出土遺物実測図1(1/3)……46
第70図 SBi 12出土遺物実測図2(1/3)……47
第71図 SBi 13平・断面図(1/100) ……47
第72図 SPi 121平・断面図(1/20),
出土遺物実測図(1/3)……48
第73図 SPi 122平・断面図(1/20),
出土遺物実測図(1/3)……48
第74図 平安・鎌倉時代柱穴出土遺物実測図
(1/3・1/4) ……49
第75図 SKi 16平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……50
第76図 SKi 17平・断面図(1/50) ……50
第77図 SKi 18平・断面図(1/50) ……50
第78図 SKi 19平・断面図(1/50) ……51
第79図 SKi 20平・断面図(1/50) ……51
第80図 SKi 21平・断面図(1/50) ……51
第81図 SKi 22平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……51
第82図 SKi 23平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……52
第83図 SKi 24平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……52
第84図 SKi 25平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……53
第85図 SKi 26平・断面図(1/50) ……53
第86図 SKi 27平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……53
第87図 SKi 28平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……53
第88図 SKi 29平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……54
第89図 SKi 30平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……54
第90図 SKi 31平・断面図(1/20),
出土遺物実測図(1/3)……54
第91図 SKi 32平・断面図(1/50) ……54
第92図 SDi 25断面図(1/40)……55
第93図 SDi 26断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……55
第94図 SDi 27断面図(1/40)……56
第95図 SDi 28断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……56
第96図 SDi 29断面図(1/40)……56
第97図 SDi 30断面図(1/40)……56
第98図 SDi 31断面図(1/40)……56
第99図 SDi 32断面図(1/40)……56
第100図 SDi 33断面図(1/40)……56
第101図 SDi 34断面図(1/40)……56
第102図 SDi 35断面図(1/40)……57
第103図 SDi 36断面図(1/40)……57

第104図　SDi 37断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……57
第105図　SDi 38断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……58
第106図　SDi 39断面図(1/40)……58
第107図　SDi 40断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3)……58
第108図　平安・鎌倉時代包含層出土遺物実測図
(1/3)……58
第109図　SBi 14平・断面図(1/100)……59
第110図　SBi 15平・断面図(1/100)……59
第111図　SBi 16平・断面図(1/100)……59
第112図　SBi 17平・断面図(1/100)……60
第113図　SBi 18平・断面図(1/100)……60
第114図　SBi 19平・断面図(1/100)……60
第115図　SBi 20平・断面図(1/100)……61
第116図　SBi 21平・断面図(1/100)……61
第117図　SBi 22平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……62
第118図　SBi 23平・断面図(1/100)……62
第119図　SBi 24平・断面図(1/100)……62
第120図　SBi 25平・断面図(1/100)……63
第121図　SBi 26平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……63
第122図　SBi 27平・断面図(1/100)……64
第123図　SBi 28平・断面図(1/100)……64
第124図　SBi 29平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……65
第125図　SBi 30平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……65
第126図　SBi 31平・断面図(1/100)……66
第127図　SBi 32平・断面図(1/100),
出土遺物実測図(1/3)……66
第128図　SBi 33平・断面図(1/100)……67
第129図　SBi 34平・断面図(1/100)……68
第130図　SBi 35平・断面図(1/100)……68
第131図　SBi 36平・断面図(1/100)……69
第132図　SBi 37平・断面図(1/100)……69
第133図　SBi 38平・断面図(1/100)……70
第134図　SBi 39平・断面図(1/100)……70
第135図　SBi 40平・断面図(1/100)……71
第136図　江戸時代柱穴出土遺物実測図(1/3)
……72
第137図　SEi 01平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/4)……73
第138図　SEi 02平・断面図(1/50)……74
第139図　SEi 03平・断面図(1/50)……74
第140図　SEi 04平・断面図(1/50),
出土遺物実測図1(1/3)……75
第141図　SEi 04出土遺物実測図2(1/6)……76
第142図　SEi 05平・断面図(1/50),
出土遺物実測図1(1/3・1/4)…77
第143図　SEi 05出土遺物実測図2(1/3)……78
第144図　SEi 05出土遺物実測図3(1/3)……79
第145図　SEi 06平・断面図(1/50),
出土遺物実測図1(1/3)……80
第146図　SEi 06出土遺物実測図2(1/6)……81
第147図　SEi 07平・断面図(1/50)……82
第148図　SEi 07出土遺物実測図(1/3)……82
第149図　SEi 08平・断面図(1/50)……82
第150図　SEi 09平・断面図(1/50)……83
第151図　SKi 33平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……83
第152図　SKi 34平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……83
第153図　SKi 35平・断面図(1/50)……83
第154図　SKi 36平・断面図(1/50)……84
第155図　SKi 37平・断面図(1/50)……84
第156図　SKi 38平・断面図(1/50)……84
第157図　SKi 39平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……85
第158図　SKi 40平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……86
第159図　SKi 41平・断面図(1/50)……87
第160図　SKi 42平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……88

第161図　SKi 43平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……88
第162図　SKi 44平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……89
第163図　SKi 45平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……90
第164図　SKi 46平・断面図(1/50)　……90
第165図　SKi 47平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……90
第166図　SKi 48平・断面図(1/50)　……90
第167図　SKi 49平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……91
第168図　SKi 50平・断面図(1/50)　……91
第169図　SKi 51平・断面図(1/50)　……92
第170図　SKi 52平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/6)……92
第171図　SKi 53平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……93
第172図　SKi 54平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/6)……93
第173図　SKi 55平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/6)……94
第174図　SKi 56平・断面図(1/50)　……94
第175図　SKi 57平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……94
第176図　SKi 58平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……95
第177図　SKi 59平・断面図(1/50)　……95
第178図　SKi 60平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/2)……96
第179図　SKi 61・SKi 62・SKi 63・SKi 64平・断面図(1/50),出土遺物実測図
(1/3)……97
第180図　SKi 65平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/6)……98
第181図　SKi 66平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……99
第182図　SKi 67平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……99
第183図　SKi 68平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……99
第184図　SKi 69平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/6)……100
第185図　SKi 70平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……101
第186図　SKi 71平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……102
第187図　SKi 72平・断面図(1/50)……102
第188図　SKi 73平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……102
第189図　SKi 74平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……103
第190図　SKi 75平・断面図(1/50)……103
第191図　SKi 76平・断面図(1/50)……103
第192図　SKi 77平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/4)……104
第193図　SKi 78平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……104
第194図　SKi 79平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……104
第195図　SKi 80平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/6)……105
第196図　SKi 81平・断面図(1/50),
出土遺物実測図1(1/3・1/6)…106
第197図　SKi 81出土遺物実測図2(1/6)…107
第198図　SKi 82平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……108
第199図　SKi 83平・断面図(1/50),
出土遺物実測図1(1/3・1/6)…108
第200図　SKi 83出土遺物実測図2(1/6)…109
第201図　SKi 84平・断面図(1/50)……109
第202図　SKi 85平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/4)……110
第203図　SKi 86平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3)……111
第204図　SKi 87平・断面図(1/50),

出土遺物実測図(1/3) ……112
第205図 SKi 88平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/2)……112
第206図 SKi 89平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……113
第207図 SKi 90平・断面図(1/50) ……113
第208図 SKi 90出土遺物実測図(1/3) ……114
第209図 SKi 91平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……114
第210図 SKi 92平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3・1/4)……115
第211図 SKi 93平・断面図(1/50) ……115
第212図 SKi 94平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……116
第213図 SKi 95平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……116
第214図 SKi 96平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/4) ……116
第215図 SKi 97平・断面図(1/50) ……117
第216図 SKi 98平・断面図(1/50) ……117
第217図 SKi 99平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……117
第218図 SKi 100平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……118
第219図 SKi 101平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……118
第220図 SKi 102平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……118
第221図 SKi 103平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……119
第222図 SDi 41平・断面図(1/40),
出土遺物実測図1(1/3) ……120
第223図 SDi 41出土遺物実測図2(1/3) …121
第224図 SDi 41出土遺物実測図3(1/3) …122
第225図 SDi 41出土遺物実測図4(1/3) …123
第226図 SDi 41出土遺物実測図5(1/3) …124
第227図 SDi 41出土遺物実測図6(1/3) …125
第228図 SDi 41出土遺物実測図7(1/3) …126
第229図 SDi 41出土遺物実測図8(1/3) …127
第230図 SDi 41出土遺物実測図9(1/3) …128
第231図 SDi 41出土遺物実測図10(1/3) …129
第232図 SDi 41出土遺物実測図11(1/3) …130
第233図 SDi 41出土遺物実測図12(1/3・1/4)
……131
第234図 SDi 41出土遺物実測図13(1/6・1/4)
……132
第235図 SDi 42平・断面図(1/40),
出土遺物実測図1(1/3) ……138
第236図 SDi 42出土遺物実測図2(1/3) …139
第237図 SDi 42出土遺物実測図3(1/3) …140
第238図 SDi 42出土遺物実測図4(1/3) …141
第239図 SDi 42出土遺物実測図5(1/3・1/4)
……142
第240図 SDi 42出土遺物実測図6(1/3) …143
第241図 SDi 43断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3) ……145
第242図 SDi 44断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3) ……146
第243図 SDi 45断面図(1/40) ……146
第244図 SDi 46・SDi 47断面図(1/40),
SDi 46出土遺物実測図(1/3) ……147
第245図 SDi 48断面図(1/40) ……148
第246図 SDi 49断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3) ……148
第247図 SDi 50断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3) ……148
第248図 SDi 51断面図(1/40) ……148
第249図 SDi 52断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3) ……148
第250図 SDi 53断面図(1/40) ……149
第251図 SDi 54・SDi 55平・断面図(1/40・1/200), 出土遺物実測図(1/3) ……150
第252図 SXi 05・SXi 06平・断面図(1/80) 151
第253図 SXi 05出土遺物実測図1(1/3) …152
第254図 SXi 05出土遺物実測図2(1/3) …153
第255図 SXi 06出土遺物実測図(1/3) ……154

第256図　SXi 07平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……156
第257図　SXi 08平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/3) ……156
第258図　江戸時代包含層出土遺物実測図(1/3)
……156
第259図　SZi 01・SZi 02・SZi 03平・断面図
(1/200)……157
第260図　試料採取地点……161
第261図　空港跡地遺跡出土の陶器と富田焼,信楽焼との比較……167
第262図　空港跡地遺跡出土の京焼風陶器碗と尾戸窯，鍋島藩窯との比較……167
第263図　空港跡地遺跡出土の陶磁器と富田焼,信楽焼，尾戸窯，鍋島藩窯との比較…168
第264図　富田・信楽・肥前産陶磁器胎土分析資料
(1/3) ……175
第265図　空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料1(1/4) ……176
第266図　空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料2(1/4) ……177
第267図　高知市尾戸窯跡採集陶磁器胎土分析資料(1/3) ……177
第268図　遺構の変遷1(1/1,500)……179
第269図　遺構の変遷2(1/1,500)……180
第270図　遺構の変遷3(1/1,500)……181
第271図　遺構の変遷4(1/1,500)……182
第272図　遺構の変遷5(1/1,500)……183
第273図　弥生時代，平安・鎌倉時代の掘立柱建物の棟方向……183
第274図　明治21年地籍図(1/5,000) …187～188
第275図　明治21年地籍図(1/10,000)…189～190
第276図　明治21年地籍図……191
第277図　江戸時代以降の焙烙と羽釜……195
第278図　空港跡地遺跡E地区出土遺物(1/6)
……196
第279図　東山崎・水田遺跡C地区SE 03出土遺物
(1/6) ……197
第280図　永井遺跡SK 060出土遺物(1/6)…198
第281図　永井遺跡SK 096出土遺物(1/6)…199
第282図　永井遺跡SK 105出土遺物(1/6)…200
第283図　薬王寺遺跡SE 04出土遺物1(1/6)
……201
第284図　薬王寺遺跡SE 04出土遺物2(1/6)
……202
第285図　I地区出土遺物の組成1……212
第286図　I地区出土遺物の組成2……213
第287図　I地区出土遺物の組成3……214
第288図　I地区出土遺物の組成4……215
第289図　高知県小籠遺跡・陣山遺跡出土陶磁器の器種組成……215
第290図　高知県陣山遺跡出土陶磁器の産地別組成……216

付　図　目　次

付図　空港跡地遺跡I地区遺構配置図(1/200)

図 版 目 次

巻頭図版１　空港跡地遺跡Ｉ地区(III－24･30区調査風景)西から
　　空港跡地遺跡Ｉ地区出土近世陶磁器
巻頭図版２　江戸時代胎土１ａ類土器・胎土１ｂ類土器
　　弥生時代胎土１ａ類土器・胎土３類土器
　　胎土１ａ類土器胎土
図版１　III－11区・III－12区全景
図版２　III－12区・III－13区全景
図版３　III－11区全景　北西から
図版３　III－11区北部全景　南西から
図版４　III－12区西部全景　西から
図版４　III－12区東部全景　西から
図版５　III－13区北部全景
図版６　III－13区南部全景
図版７　III－21区全景
図版８　III－22区 SRi 01・SRi 02全景
図版９　III－22区・III－23区北部全景
図版10　III－23区東部全景　南西から
図版10　III－22区・III－23区北部全景　南から
図版11　III－23区・III—26区全景
図版12　III－23区南部・III—26区全景　北西から
図版12　III－26区全景　北から
図版13　III－26区全景　西から
図版13　III－24区全景
図版14　III－24区全景　北東から
図版14　III－25区全景
図版15　III－24区全景　北東から
図版15　III－25区全景
図版16　III－27区全景　西から
図版16　III－30区全景
図版17　III－20区(H地区)・III－28区・III－31区全景
図版18　III－28区・III－31区全景
図版18　III－31区全景
図版19　III－29区・III－32区全景
図版19　III－30区全景　北西から
図版20　III－51区第１面全景　南西から
図版20　III－51区第２面全景　西から
図版21　III－51区西部第２面全景　北から
図版21　III－51区東部第２面全景　北から
図版22　III－52区全景　西から
図版22　III－52区西部全景　北から
図版23　III－52区東部全景　北西から
図版23　SBi 01完掘状況　西から
図版24　SBi 04完掘状況　西から
図版24　SKi 05遺物出土状況　西から
図版25　SKi 05遺物出土状況　北東から
図版25　SKi 08遺物出土状況　南から
図版26　SKi 08土層堆積状況　南から
図版26　SDi 04・SDi 01土層堆積状況　南から
図版26　SDi 20土層堆積状況　南西から
図版27　SDi 08・SDi 07・SDi 27・SDi 06完掘状況　北西から
図版27　SDi 11遺物出土状況　南から
図版28　SRi 02遺物出土状況　西から
図版28　III－25区 SRi 01･SRi 02完掘状況　北東から
図版29　III－25区 SRi 01･SRi 02完掘状況　北東から
図版29　III－25区 SRi 01･SRi 02完掘状況　南から
図版30　III－26区 SRi 01･SRi 02完掘状況　北から
図版30　III－26区 SRi 01･SRi 02土層堆積状況　北西から
図版30　SBi 08・SBi 09完掘状況　南西から
図版31　SBi 10・SBi 11・SBi 12完掘状況　北西から

図版31　SBi 13完掘状況　北西より
図版32　SBi 06(SPi 34)遺物出土状況　北東から
図版32　SPi 121遺物出土状況　南から
図版33　SPi 122遺物出土状況　南から
図版33　SDi 35土層堆積状況　南から
図版33　SDi 37土層堆積状況　西から
図版34　SDi 38土層堆積状況　北から
図版34　SDi 39土層堆積状況　南から
図版34　SBi 21(III－24区部分)完掘状況　北東から
図版35　SBi 27完掘状況　西から
図版35　SBi 21(III－24区部分)完掘状況　西から
図版36　SBi 26完掘状況　西から
図版36　SBi 27完掘状況　西から
図版36　SBi 28・SBi 29完掘状況　西から
図版37　SBi 28・SBi 29完掘状況　東から
図版37　SBi 30完掘状況　西から
図版38　SBi 31完掘状況　東から
図版38　SBi 31・SBi 32完掘状況　東から
図版39　SBi 33完掘状況　東から
図版39　SEi 04検出状況　北から
図版40　SEi 05遺物出土状況　南から
図版40　SEi 05遺物出土状況　東から
図版41　SEi 06井戸枠検出状況
図版41　SKi 39土層堆積状況　南から
図版42　SKi 39検出状況　西から
図版42　SKi 65遺物出土状況　南東から
図版43　SKi 81遺物検出状況　南東から
図版43　SKi 85遺物出土状況　東から
図版43　III－29区 SDi 46・SDi 47土層堆積状況
南から
図版44　SDi 41土層堆積状況　北から
図版44　SZi 03・SDi 54・SDi 55検出状況　北から
図版45　SXi 05・SDi 41検出状況　北から
図版45　SZi 01検出状況　北から
図版46　SZi 01・SDi 42検出状況　北西から
図版46　発掘体験学習風景
図版47～88　出土遺物
写真1　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真1　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真1　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真2　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真2　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真2　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
写真3　空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料
写真3　空港跡地遺跡出土陶磁器胎土分析資料
写真4　信楽・富田焼胎土分析資料
写真4　富田焼胎土分析資料
写真5　肥前・尾戸焼胎土分析資料
写真5　肥前・尾戸焼胎土分析資料
写真5　肥前・尾戸焼胎土分析資料
写真5　肥前・尾戸焼胎土分析資料

表　目　次

第１表　平成９年度整理作業工程表
第２表　空港跡地遺跡各地区の調査概要
第３表　試料１ｇ中のプラント・オパール個数
第４表　空港跡地遺跡出土近世陶磁器・土師質土器の胎土分析結果(%)
第５表　近世陶磁器の胎土分析結果（%）
第６表　平安時代から江戸時代の掘立柱建物の棟方向
第７表　土器・陶磁器の種類
第８表　土器・陶磁器の産地
第９表　皿の種類
第10表　碗の種類
第11表　陶磁器の器種
第12表　陶器の産地
第13表　磁器の産地
第14表　陣山遺跡出土一括破棄遺物の器種別出土点数と組成比
第15表　小籠遺跡出土遺物産地別組成
第16表　遺物観察表

第1章　調査の経緯

1．発掘調査の経過

空港跡地遺跡は高松市林町に所在し，高松平野の中央部に位置する。現在，付近は高松市のベッドタウンとして急速に都市化が進み，開発の波が押し寄せている。空港跡地遺跡は陸軍の軍用飛行場として昭和19年から建設が進んでいた高松飛行場の跡地に所在する。高松飛行場は終戦までに完成せず，南北滑走路もできないままに終わってしまった。戦後，飛行場の南部については農地として解放されたが，北部には高松航空標識所が設置され，昭和30年代には高松空港となった。[1] 近年には，路線が拡大したため，従来の空港では手狭になったことから，平成元年12月香川郡香南町に高松空港は移転した。空港移転に伴って林町の高松空港は供用が廃止され，約32万haを有する広大な跡地が生まれた。香川県は，跡地を香川県土地開発公社が取得したことに伴い，空港跡地開発整備事業計画を策定した。香川県教育委員会では，このような経過を受け，埋蔵文化財に包蔵状況やその取り扱いについて検討を進め，遺跡の所在が確認された範囲については財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに発掘調査を委託することとなった。詳細な経緯・経過については，本報告書シリーズ第１冊並びに第２冊に詳述しているため，本報告書では省略する。

以下，本報告書に所収する遺跡東部のＩ地区の調査（平成３～５年度）の経緯を記す。

平成３年度

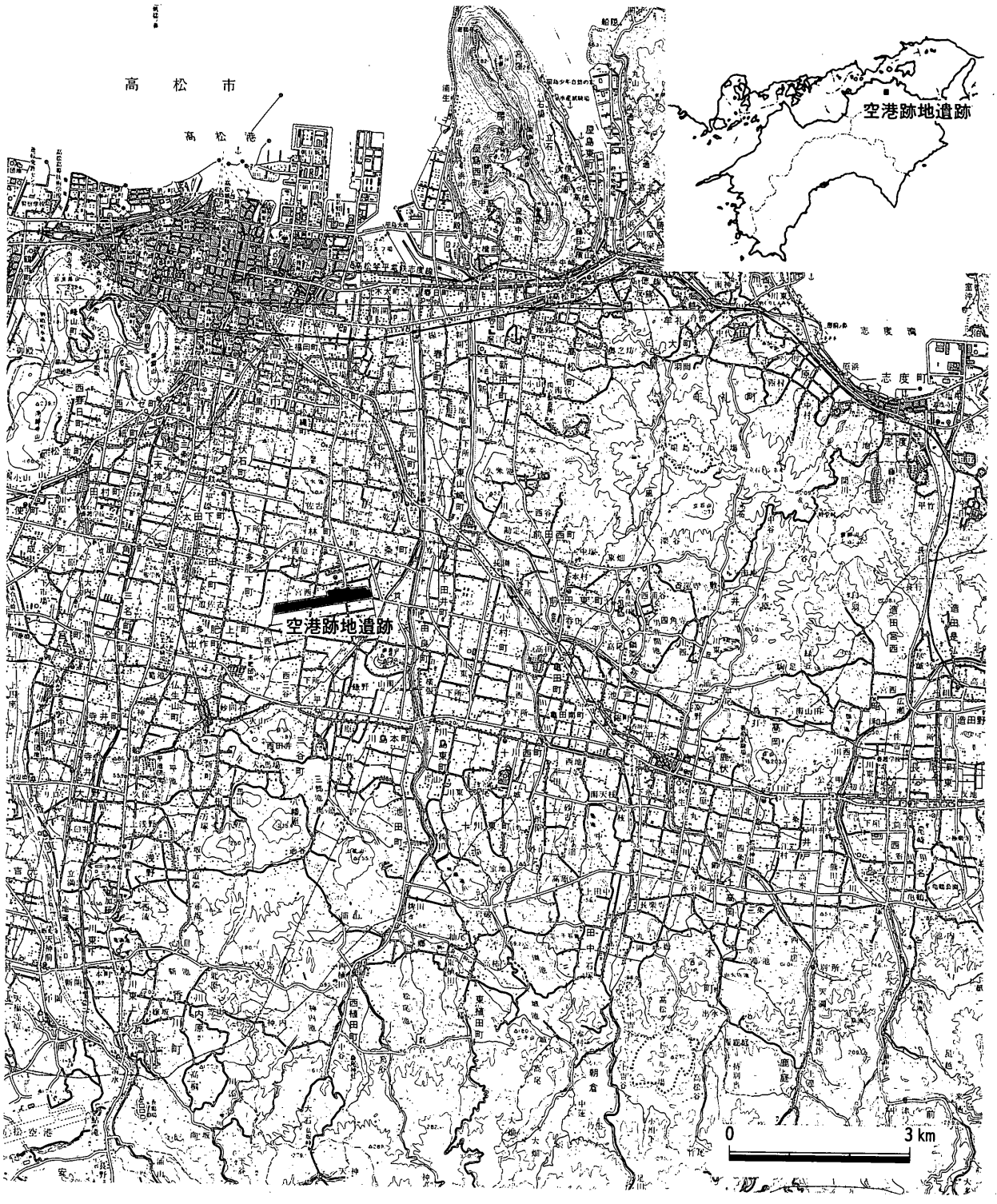
本年度はＩ地区の北端部で跡地の北辺部を東西方向に貫く，幅員25mの県道成合町六条線部分（III—11・12区）と，Ｉ地区の東端部で整備事業工事の排水用沈殿池部分（III—13区）の調査を実施した。III—11・12区は平成４年１月調査に着手し，同年３月に調査を終了した。III—13区は平成３年12月に調査に着手し，平成４年３月に調査を終了した。調査面積は合計5,405m²である。調査に当たっては工事請負方式を採用した。

平成４年度

本年度は跡地の南辺部を東西方向に貫く，幅員８mの市道上林町六条線（III—23・26・29・32区の南部）と民間分譲地部分（III—21～32区）の調査を実施した。平成４年４月調査に着手し，平成５年３月調査を終了した。調査面積は合計12,000m²である。調査に当たっては工事請負方式を採用した。

平成５年度

本年度は民間分譲地部分（III—51・52区）の調査を実施した。平成５年11月に調査に着手し，平成６年３月調査を終了した。調査面積は合計2,800m²である。調査に当たっては直営方式を採用した。



第１図　遺跡位置図（１/100,000）

２．整理及び報告書作成作業

本遺跡の整理作業は平成６年より開始され，既にＣ地区・Ｅ地区の報告書が刊行されている。既に刊行されている報告書にも詳述しているとおり，調査時での調査区割り以外に，新たに作成した報告区割りによって報告を行う（第２図)。報告の記載方法や遺物・図面の収納・保管方法については統一した基準が設けられているが，詳細については本報告書シリーズ第１冊に詳述しているので，参照されたい。

本報告書に掲載する遺跡東部Ｉ地区の整理及び報告書作成作業は，平成９年４月１日から平成10年３

月31日まで，職員１名と整理補助員４名，整理作業員４名で実施した。基礎整理作業は発掘調査段階で一部終了しており，遺物の注記・接合・図化・写真撮影，遺構図面の整理・浄書作業を行い，報告書を作成した。

なお，遺物写真撮影は外部に委託し，出土土器の胎土分析は岡山理科大学　白石　純氏に依頼した。

平成３年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	中村　仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克己（6.1～）
係長	宮内憲生
係長	藤好史郎

（財）香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	安藤道雄
係長	加藤正司（～5.31）
係長	土井茂樹（6.1～）
主査	山地　修（～5.31）
係長	今田　修（6.1～）
主任主事	斎藤政好
参事	篠丸　博
係長	廣瀬常雄
主任技師	植松邦浩
主任技師	西岡達哉
主任技師	真下拓也
技師	佐藤竜馬
調査技術員	白川悦代

平成４年度調査体制

香川県教育委員会文化行政課

課長	中村　仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克己
係長	宮内憲生（～5.31）
係長	源田和幸（6.1～）
係長	藤好史郎

（財）香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	市原敏則
係長	土井茂樹
係長	今田　修
主任主事	斎藤政好
参事	糸目末夫
係長	大山真充
技師	森下友子
技師	市村拓二
調査技術員	白川芳彦

平成５年度調査体制

香川県教育委員会文化行政課

課長	中村　仁
主幹	菅原良弘
課長補佐	小原克己
係長	源田和幸
係長	藤好史郎

（財）香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本豊胤
次長	真鍋隆幸

平成９年度整理体制

香川県教育委員会文化行政課

課長	菅原良弘
課長補佐	北原和利
副主幹	渡部明夫

（財）香川県埋蔵文化財調査センター

所長	大森忠彦
次長	小野善範
係長	前田和也（～5.31）
副主幹兼係長	田中秀文（6.1～）

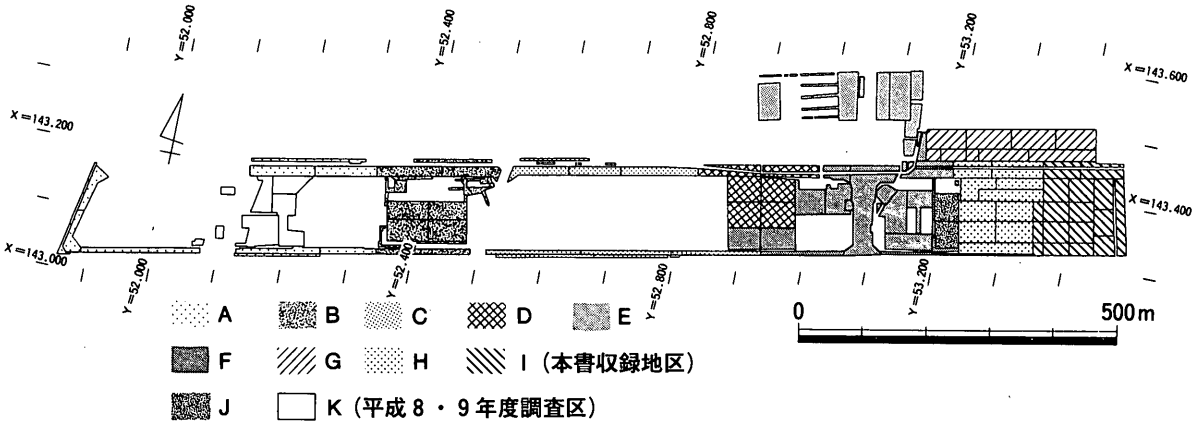
係長	土井茂樹	主事	佐々木隆司
係長	今田　修（～5.31）	主事	細川信哉（6.1～）
係長	上林和明（6.1～）	主任文化財専門員	廣瀬常雄
主任主事	斎藤政好（～5.31）	文化財専門員	森下友子
主任主事	西村厚二（6.1～）	整理補助員	東條俊子
参事	糸目末夫	整理補助員	若山淳子
係長	大山真充	整理補助員	山地真理子
主任技師	山元素子	整理補助員	陶川真由美
技師	山本主税	整理作業員	吉田育代
調査技術員	森澤千尋	整理作業員	秋山容子
		整理作業員	佐々木博子
		整理作業員	堀口知子

註

(1)　宮井政雄「林の昭和時代　上」『福祉はやし』11　1989

作業内容	平成9年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成10年 1月	2月	3月
遺物注記												
遺物接合												
遺物実測図作成												
遺構実測図作成												
浄書												
原稿執筆												
編集												

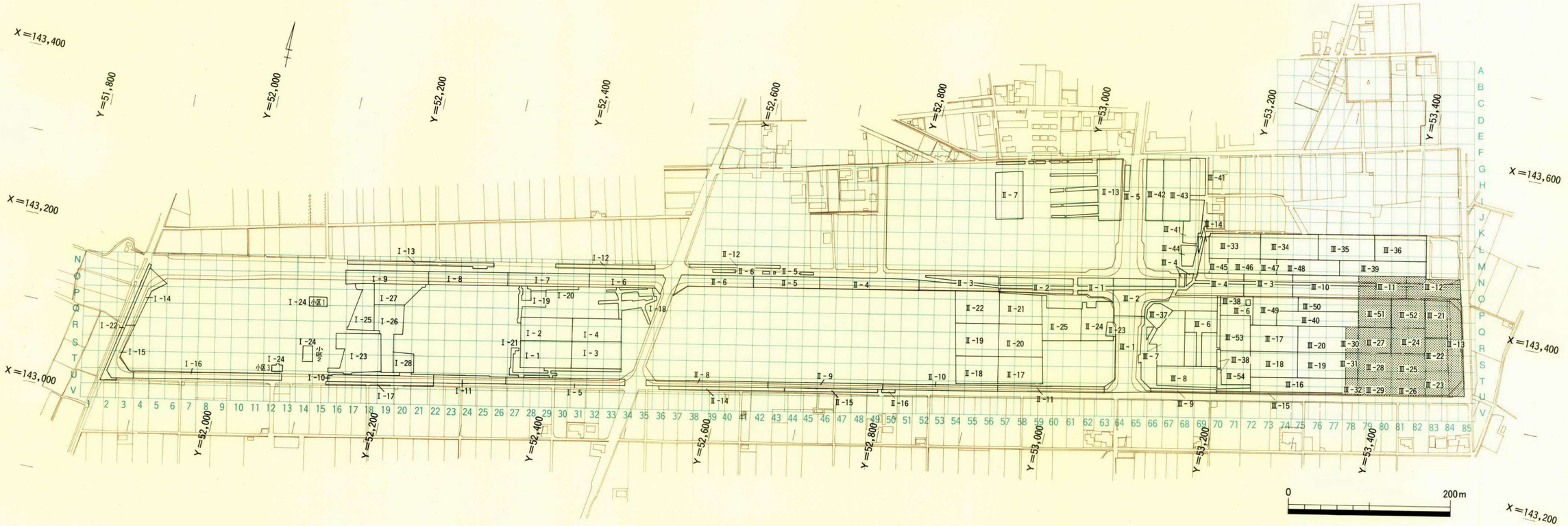
第1表　平成9年度整理作業工程表



第2図　報告地区割図（1/12,000）

地区名	面積(m²)	主　要　遺　構　等	遺物等	報　告　書
A地区	12,200	弥生時代　竪穴住居，溝，土坑，自然河川 古墳時代　竪穴住居，前方後円・前方後方・方形周溝墓 古代　溝，土坑，水田 中世　溝，土坑，水田 近世　溝，土坑	銅剣転用銅鏃	未刊
B地区	16,033	弥生時代　竪穴住居，掘立柱建物，溝，土坑 古墳時代　竪穴住居 古代　掘立柱建物，溝，土壙墓 中世　掘立柱建物，溝，土坑，井戸 近世　溝，土坑		未刊
C地区	11,890	弥生時代　竪穴住居，掘立柱建物，溝，土坑 古墳時代　竪穴住居，掘立柱建物，土坑 古代　掘立柱建物，溝，井戸，土坑 中世　掘立柱建物，溝，土坑，井戸，自然河川 近世　掘立柱建物，溝，土坑	二彩陶器	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　空港跡地遺跡Ⅰ』1996.12
D地区	12,567	弥生時代　掘立柱建物，溝 古代　溝 中～近世　掘立柱建物，溝，土坑		未刊
E地区	14,599	弥生時代　掘立柱建物，溝，土坑 古墳　溝 中世　掘立柱建物？ 近世　溝，土坑，井戸，出水状遺構	人形土製品	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　空港跡地遺跡Ⅱ』1997.9
F地区	27,836	弥生時代　竪穴住居，掘立柱建物，溝 古代　溝 中世　掘立柱建物，溝，土坑，井戸，出水状遺構 近世　掘立柱建物？　溝，土坑，井戸		未刊
G地区	13,280	弥生時代　竪穴住居，掘立柱建物，溝，粘土採掘土坑群 古代　溝 中世　掘立柱建物，溝，土坑，井戸 近世　掘立柱建物，溝，土坑		未刊
H地区	19,375	弥生時代　竪穴住居，掘立柱建物，溝，土坑，出水状遺構 古代　溝 中世　掘立柱建物，溝 近世　溝，土坑，井戸	鏃形木製品	未刊
I地区	20,205	弥生時代　掘立柱建物，溝，自然河川 中世　掘立柱建物，溝，土坑 近世　掘立柱建物，溝，土坑		『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　空港跡地遺跡Ⅲ』1998.10
J地区	2,780	古代　掘立柱建物，溝 中世　掘立柱建物，土坑 近世　掘立柱建物，土坑		『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡』1997.3

第2表　空港跡地遺跡各地区の調査概要



第３図　調査区割図（1/4,000）

第2章　調査の成果

第1節　調査の方法と各調査区の概要

1．調査の方法

本地区は空港跡地遺跡の東端に位置し，東西約150m，南北140m，面積20,205m²を測る。本地区の調査区は工事の着手時期などの都合上から，第3図のように設定した。また，各調査区の割付は東西に直線的に延びる県道成合町六条線の中心線を東西ラインの基準とし，中心線上の工事用基準杭№5を基点として，20m間隔ごとに，基準杭を打設し，小区画を設定した。各小区画名は第3図に示すように南北にアルファベット，東西にアラビア数字を用い，各小区画をアルファベットと数字の両方で表した。また，小区画の北西隅の基準杭も同名で表した。遺構の測量は航空測量で平面図（1/50・1/100）を作成し，国土座標と対応させた。

また，南壁沿いなど，一部の深掘りを行い，下層遺構の有無を確認した。

2．土層の堆積状況

空港跡地遺跡最東部のⅠ地区の発掘調査前の地表面の標高は本遺跡内で最も低く，13.4～14.5mを測る。一方，空港跡地遺跡の西端では，発掘調査前の地表面の標高は23mを測り，本遺跡内で最も高い。本遺跡では西から東に向かって緩く傾斜しており，東西1.6km間で約10mの高低差が存在する。

Ⅰ地区では南端付近を除いて厚さ約1mの花崗土の盛土が存在した。盛土下の地表面はⅠ地区の南壁で，西端は標高14.0m，東端は標高13.4m，Ⅰ地区の北部で，西端は標高13.9m，東端は標高13.0mである。南北間は150mを測るが，0.1～0.4m程度北が低くなっていることがうかがわれる。空港造成以前の表土・耕作土層の下には0.2～0.5mの厚さで淡灰色・橙色砂質シルト層が堆積する。この層は旧耕作土の床土層である。その下層には黄色・灰黄色粘質シルト層が堆積する。この層からは遺物は出土しておらず，この層の上面が遺構面となる。また，Ⅰ地区の北東部では黄色・灰黄色粘質シルト層の上層に厚さ0.05～0.15mの暗灰褐色粘質シルト層が堆積しており，この層からは弥生土器が少量出土した。

江戸時代以降の遺構については昭和19年に廃絶した溝SDi 41は盛土直下で検出されたが，井戸SEi 09などは旧床土層（淡灰色・橙色砂質シルト）の下で検出された。なお，暗灰褐色粘質シルト層が存在する部分については同層の上面と黄色・灰黄色粘質シルト層上面の2面で遺構の検出を行った。

3．各地区の概要

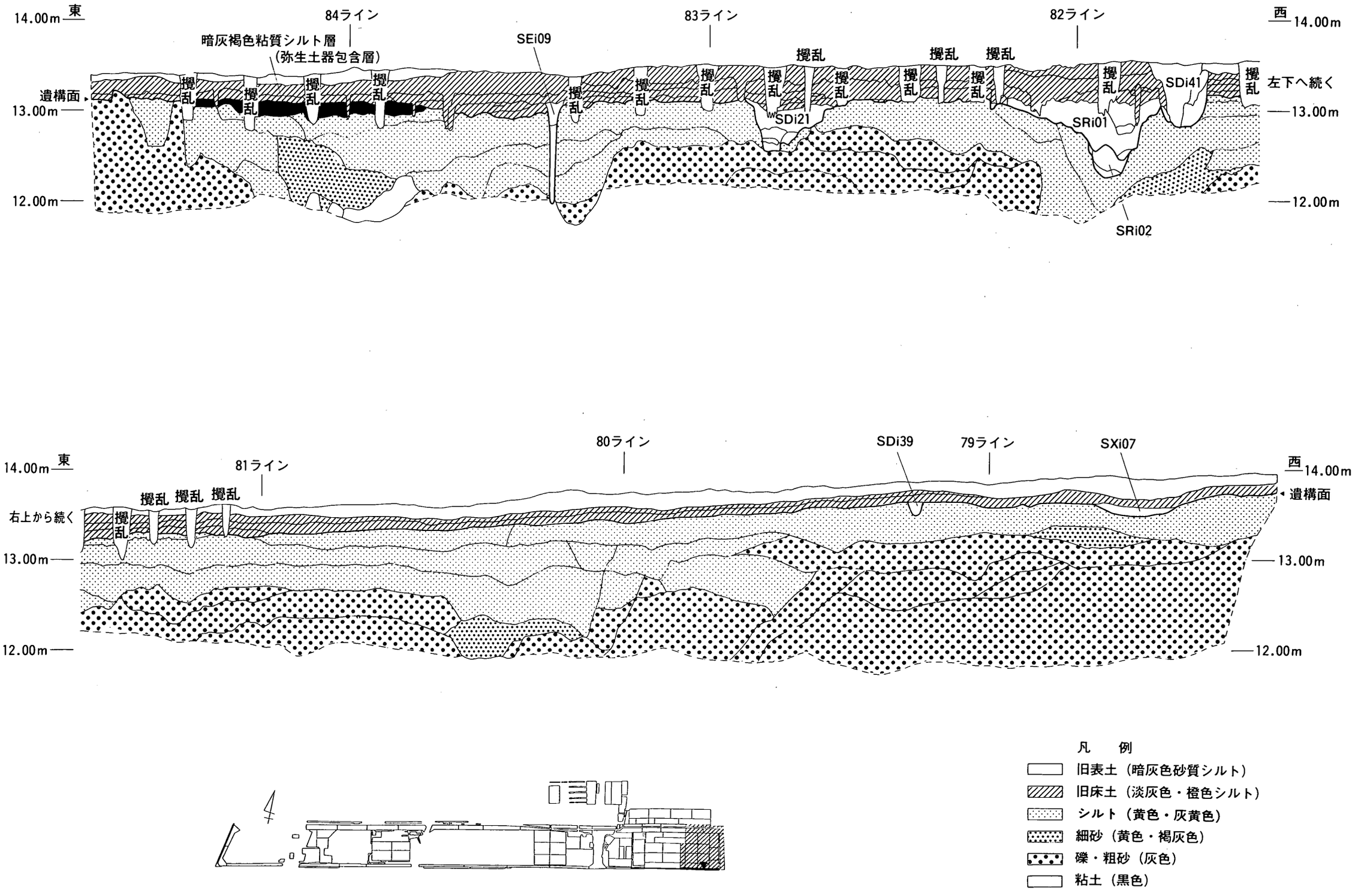
Ⅰ地区では弥生時代から昭和19年までの遺構・遺物が検出された。遺物は整理用コンテナに134箱出土した。弥生時代から古墳時代，平安時代から鎌倉時代，江戸時代以降の3時期に分かれる。また，遺構埋土も，黒色系，灰色または灰褐色系，淡灰色または黄色ブロック混じり灰色粘質シルト系の3種類の埋土に分かれ，それぞれの埋土から弥生時代から古墳時代，平安時代から鎌倉時代，江戸時代以降の遺物が出土した。出土遺物がみられない遺構も埋土の特徴から，この3時期に分類して，報告した。

次に時期別に遺構の概要を記す。弥生時代の遺構は掘立柱建物・柱穴・溝・河川等が検出された。遺構密度は比較的希薄である。Ⅰ地区の北西部は居住域になっており，掘立柱建物がみられる。一方，Ⅰ

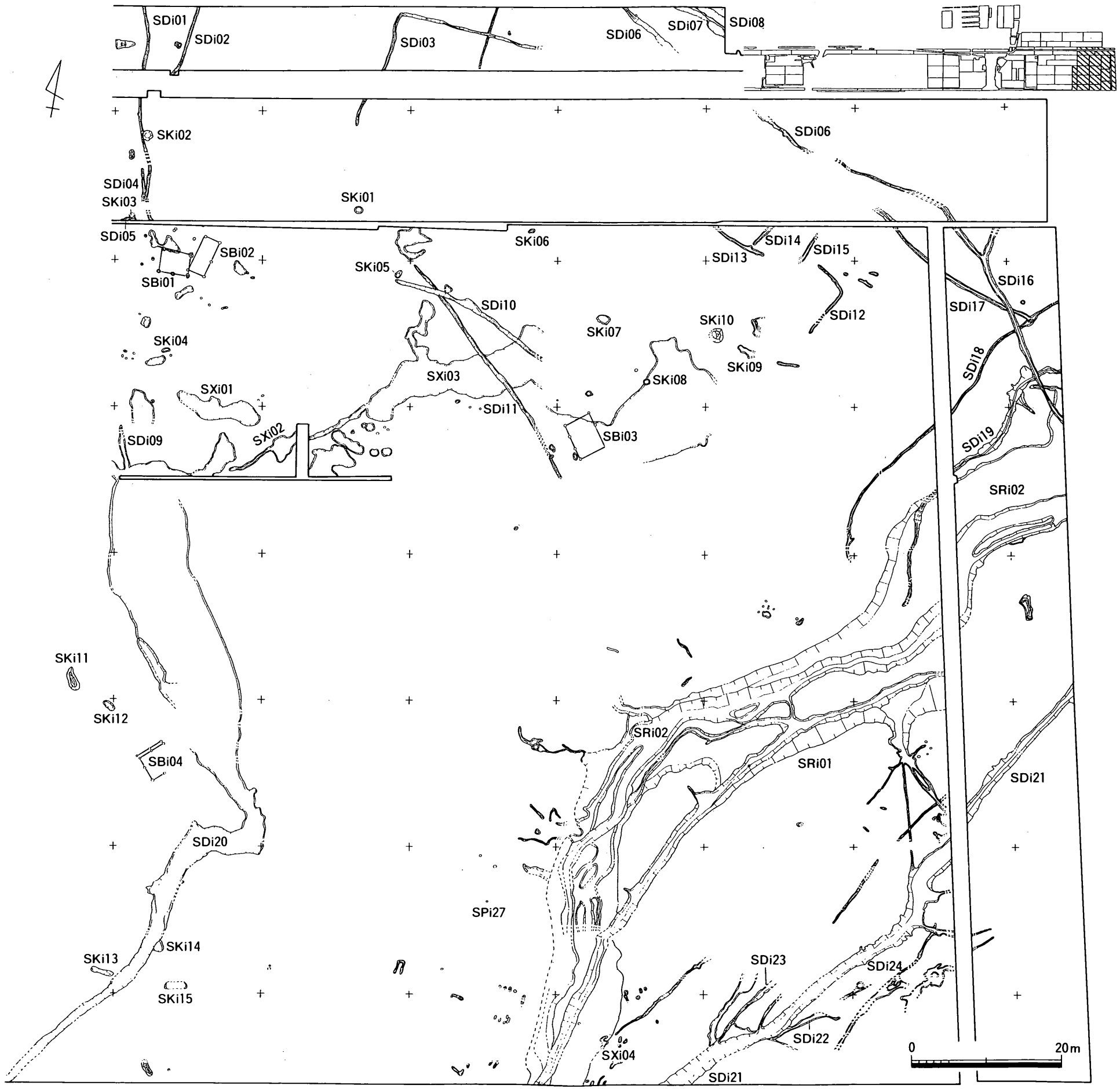
地区の南東部では河川や溝がみられる。河川は南西から北東に向かって走り，溝も同方向に走るものが多い。

平安時代から鎌倉時代の遺構は掘立柱建物・柱穴・溝・土坑がある。遺構密度は希薄である。掘立柱建物はＩ地区の北部と，南西部の２箇所で検出された。溝は遺跡周辺にみられる条里形地割りに平行して走るものと，条里形地割りの方向とは無関係に南から北に向かって走るものがみられる。

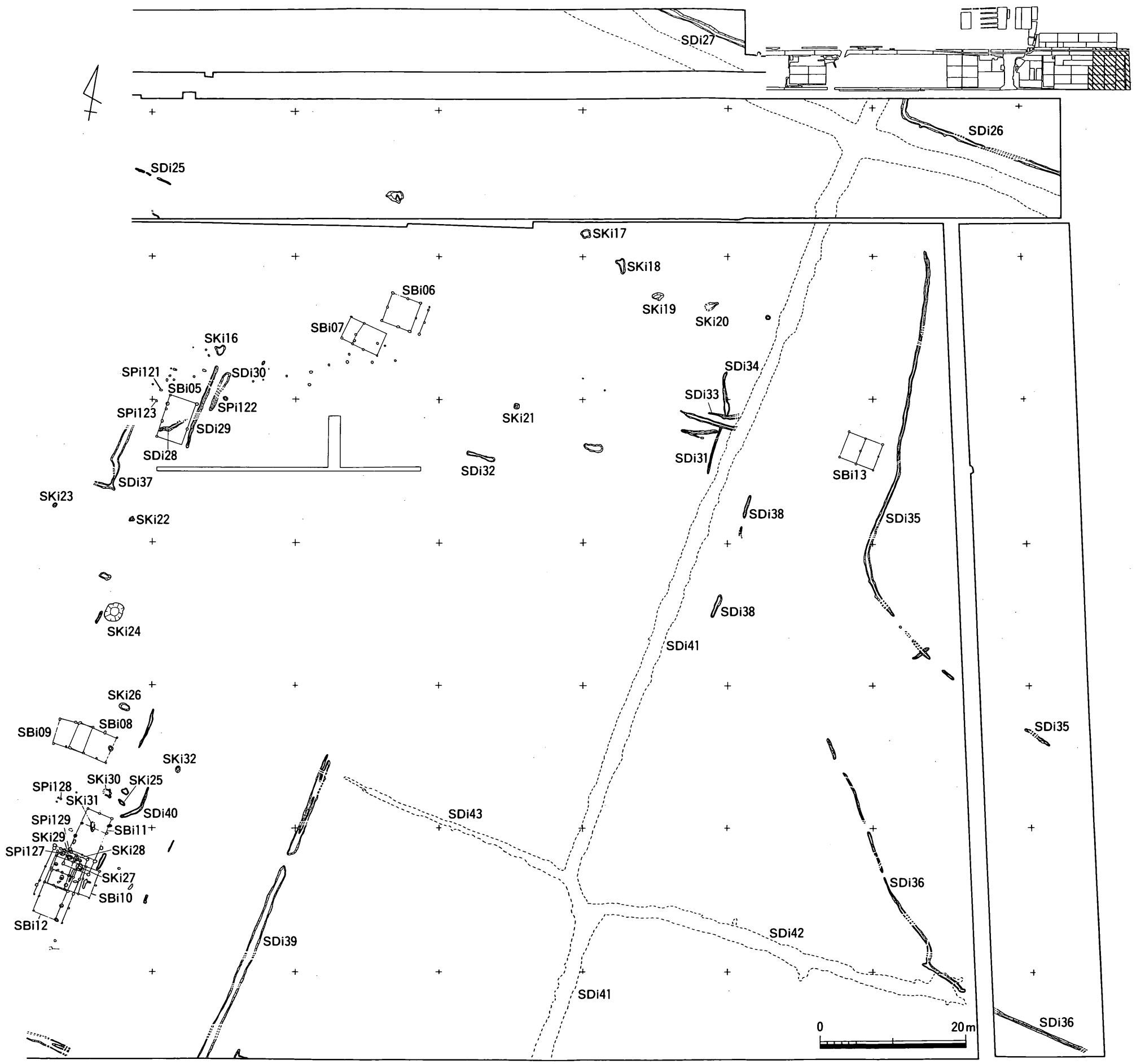
江戸時代以降の遺構はＩ地区全体に広がる。Ｉ地区で検出された遺構は江戸時代以降のものが最も多い。空港造成以前まで存在した条里形地割りに沿った溝が縦横に走り，掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑等が検出された。



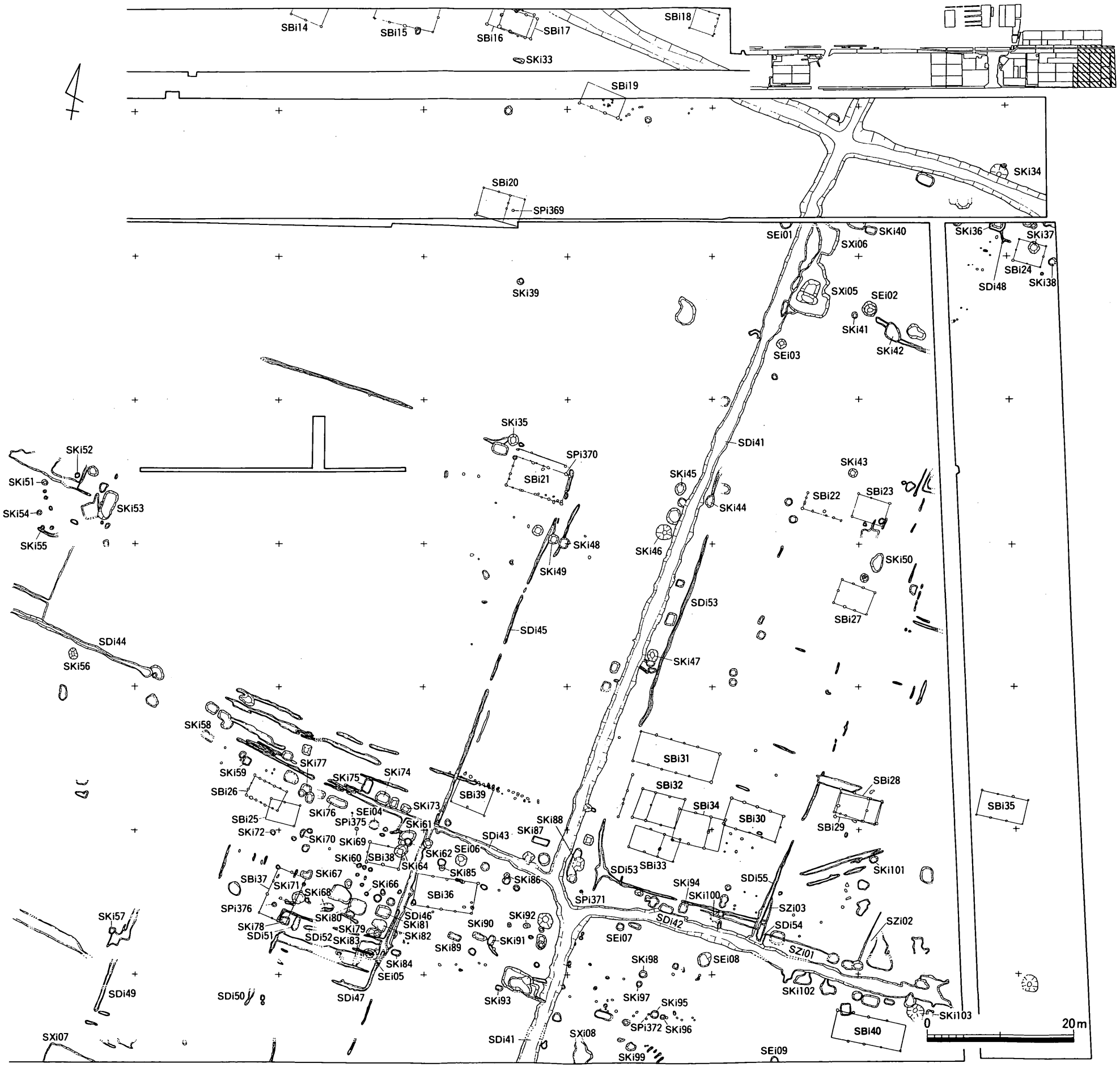
第４図　Ⅰ地区南壁土層断面図（天地1/50・左右1/250）



第５図　弥生時代から古墳時代遺構配置図（1/600）



第６図　平安時代から鎌倉時代遺構配置図（1/600）



第７図　江戸時代以降遺構配置図（1/600）

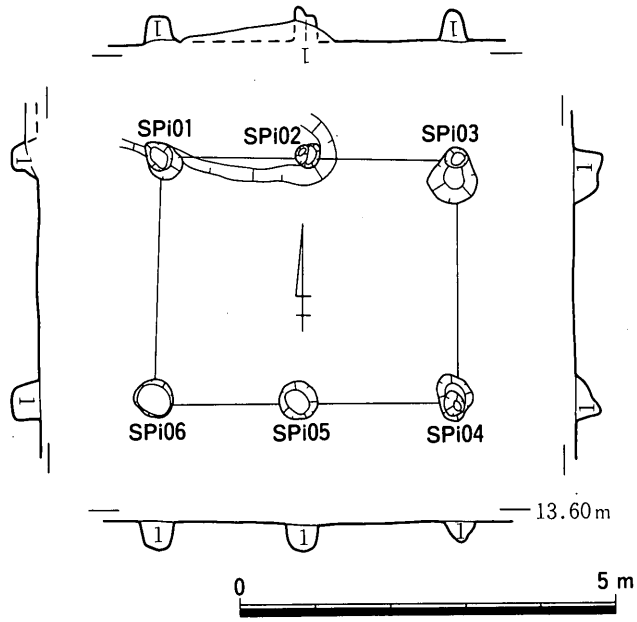
第2節　遺構・遺物

1．弥生時代から古墳時代

① 掘立柱建物

SBi 01（第8図，図版23）

III—51区で検出された掘立柱建物である。建物の東部はSBi 02と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物の規模は桁行2間（4.0m），梁間1間（3.2～3.4m），棟方向は東西（WE）を測る。桁行の柱間は1.9～2.1mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.4～0.5m，深さ0.3～0.4mを測る。柱穴埋土からは茶褐色を呈する胎土1a類の弥生土器片が数点出土した。空港跡地遺跡で，胎土1a類土器が出土するのは弥生時代後期である[1]ことから，この建物は弥生時代後期頃のものと考えられる。

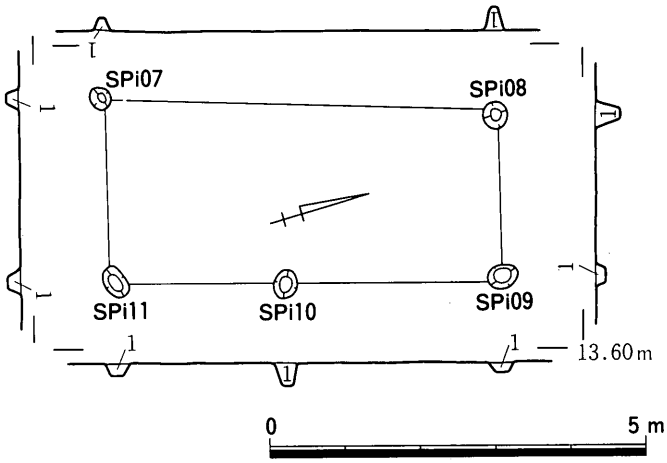


1．暗茶褐色細砂混じり粘質土

第8図　SBi 01平・断面図（1/100）

SBi 02（第9図）

III—51区で検出された掘立柱建物である。建物の南西部はSBi 01と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物の規模は桁行2間（5.1～5.2m），梁間1間(2.2～2.4m)，棟方向はN16°Eを測る。桁行の柱間は2.2～2.9mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.1～0.3mを測る。遺物は出土しなかったが，柱穴埋土の特徴から，弥生時代のものと考えられる。



1．暗茶褐色細砂混じり粘質土

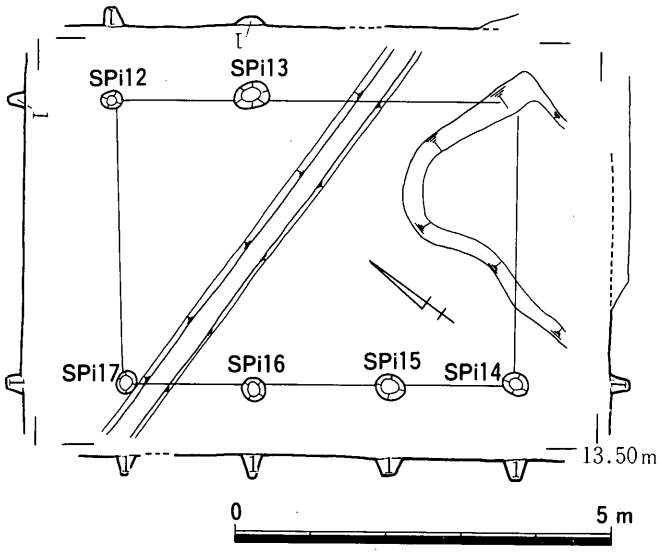
第9図　SBi 02平・断面図（1/100）

SBi 03（第10図）

III—52区で検出された掘立柱建物である。建物の南東部は攪乱を受けるため，建物の全体は不明である。建物の規模は桁行3間(5.2m)，梁間1間(3.7m)，棟方向はN35°Wを測る。桁行の柱間は1.7～1.8mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかったが，柱穴埋土の特徴から，弥生時代のものと考えられる。

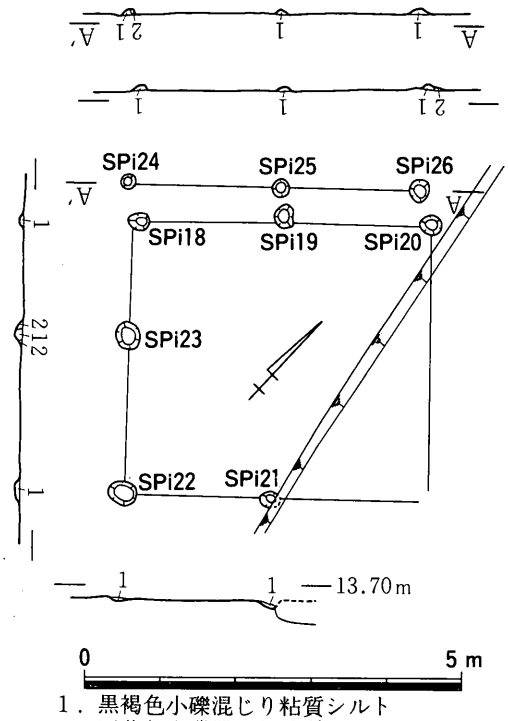
SBi 04（第11図，図版24）

III—28区で検出された掘立柱建物である。建物の北西部に庇が付く。建物の規模は桁行2間以上(4.0



1．暗茶褐色細砂混じり粘質土

第10図　SBi 03平・断面図（1/100）



1．黒褐色小礫混じり粘質シルト
2．灰黄色小礫混じり砂質シルト

第11図　SBi 04平・断面図（1/100）

m以上），梁間2間(3.5m)，棟方向はW38°Sを測る。桁行の柱間は1.9～2.0m，梁間の柱間は1.5～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかったが，柱穴埋土の特徴から，弥生時代のものと考えられる。

② 柱穴

SPi 27（第12図）

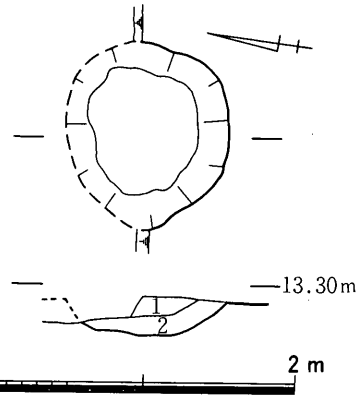
III—26区，SRi 02の西側で検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで，弥生土器甕（1），高杯（2）が出土した。いずれも茶褐色を呈する胎土1a類である。弥生時代後期に属する。出土遺物から，この柱穴は弥生時代後期のものと考えられる。

第12図　SPi 27出土遺物実測図（1/3）

③ 土坑

SKi 01（第13図）

III—11区で検出された土坑である。遺構の北部は一部攪乱を受ける。平面形は円形を呈し，推定径1.3m，深さ0.3mを測る。茶褐色を呈する胎土1a類土器など数点の土器片が出土したことから，弥生時代後期のものと考えられる。

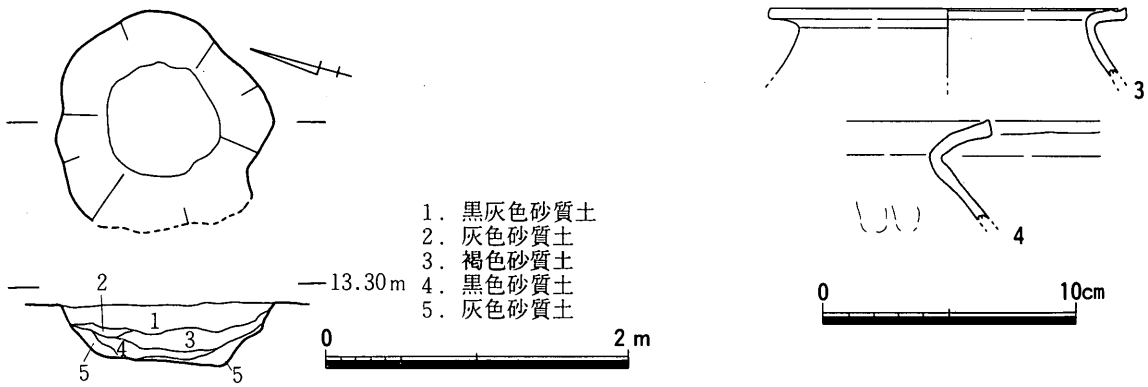


1．黒灰色砂質土
2．砂礫

第13図　SKi 01平・断面図（1/50）

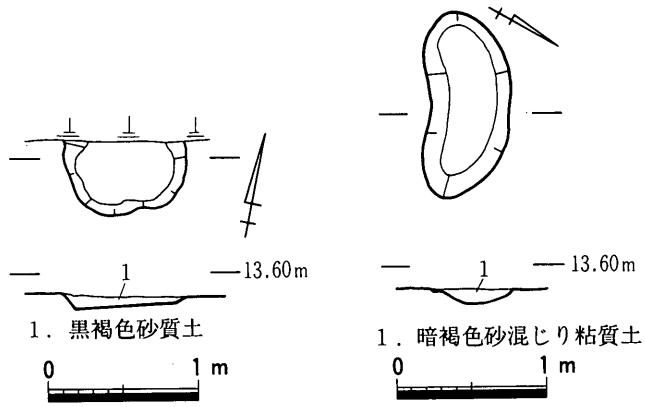
SKi 02（第14図）

III—11区，I地区の北西端で検出された土坑である。平面形はややいびつな円形を呈し，径1.2～1.5



第14図　SKi 02平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

m，深さ0.4mを測る。弥生土器甕（3・4），胎土1a類の弥生土器片数点が出土した。3は胎土1a類である。3・4はいずれも弥生時代後期に属する。出土遺物から，この土坑は弥生時代後期のものと考えられる。



第15図　SKi 03平・断面図(1/50)　　第16図 SKi 04平・断面図(1/50)

SKi 03（第15図）

III—11区の南西端で検出された土坑である。遺構の北部は攪乱を受け，全体は不明である。平面形はほぼ円形を呈するものと推定され，推定径0.8m，深さ0.1mを測る。弥生土器片が数点出土したことから，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 04（第16図）

III—51区で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸1.2m，短軸0.5m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 05（第17・18図，図版24・25）

III—52区で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.45mを測る。埋土中位以下からは弥生土器壺（5），甕（6・7・9），高杯（14），焼土塊数点などが出土した。5は頸部外面に沈線がらせん状に巡る。5・7～9・12～14が胎土1a類である。これらの遺物は弥生時代後期中葉に属することから，この土坑は同時期のものと考えられる。

SKi 06（第19図）

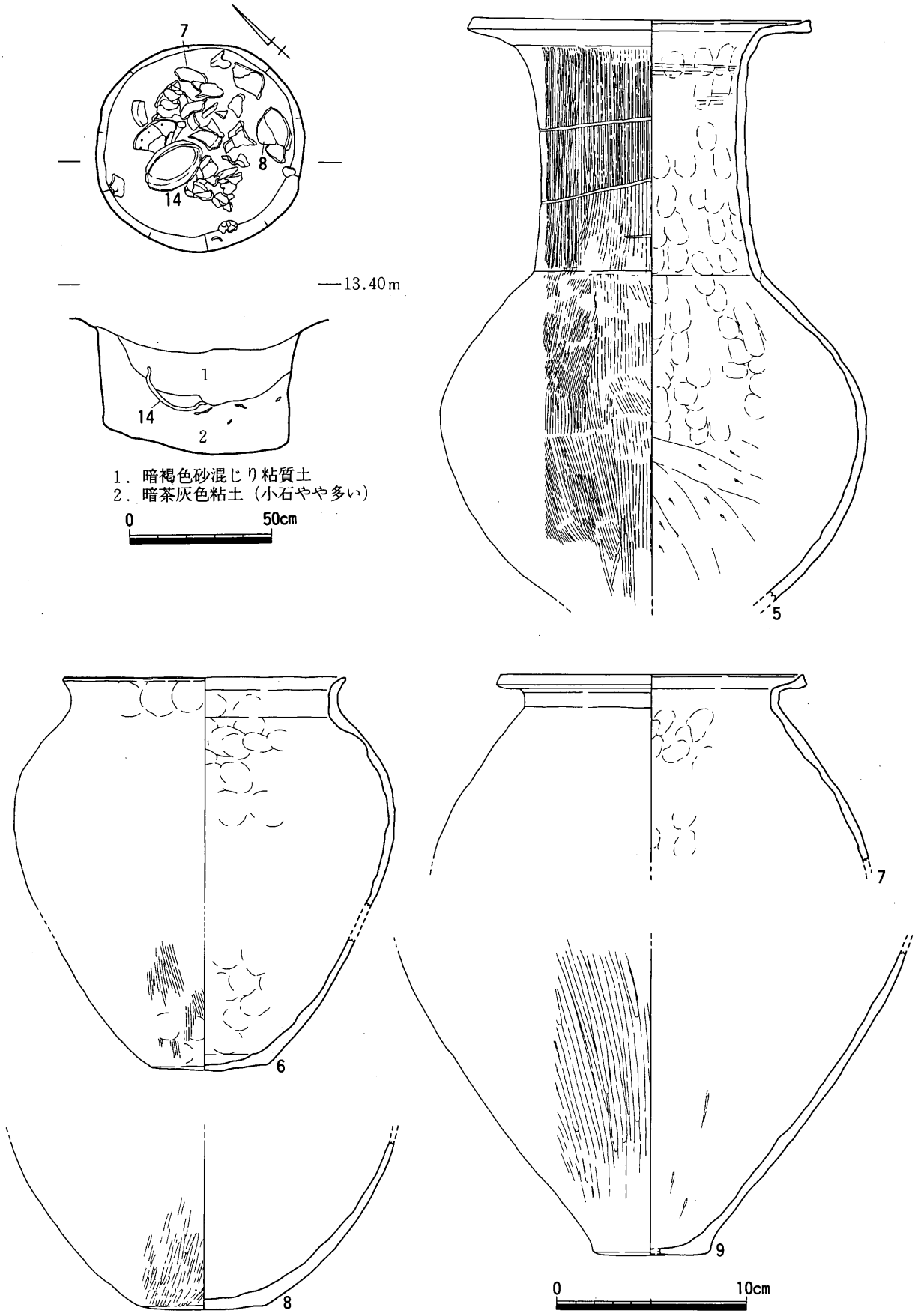
III—52区で検出された土坑である。平面形はいびつな隅丸方形を呈し，長軸0.9m，短軸0.5m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 07（第20図）

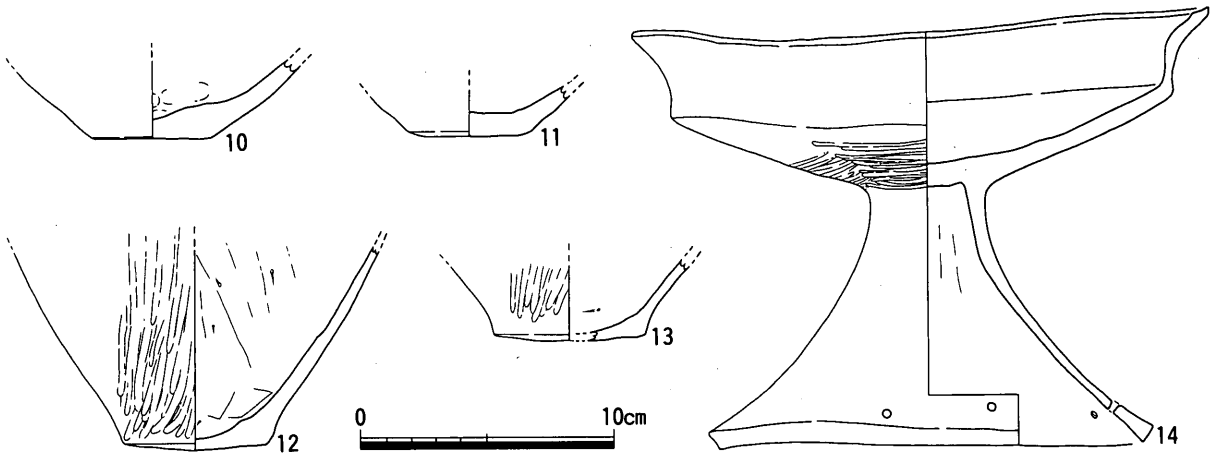
III—52区で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸1.8m，短軸1.2m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 08（第21図，図版25・26）

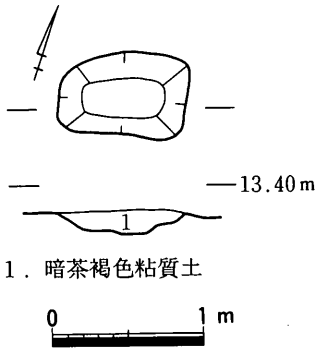
III—52区，SKi 07の南東部で検出された土坑である。平面形はほぼ円形を呈し，長径0.9m，短径0.75



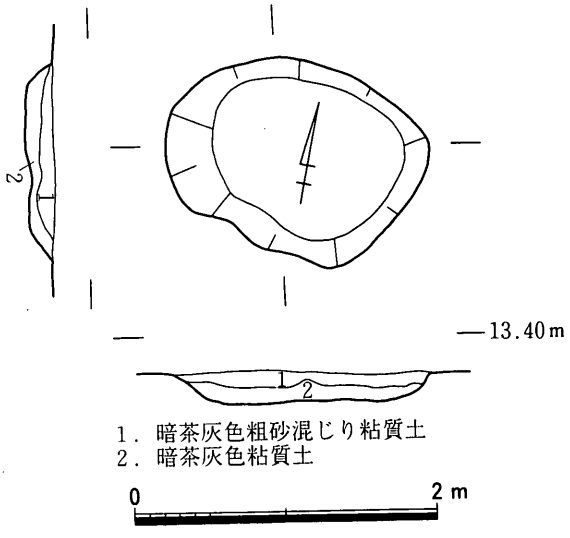
第17図　SKi 05平・断面図（1/20），出土遺物実測図1（1/3）



第18図　SKi 05出土遺物実測図２（１/３）



第19図　SKi 06平・断面図（１/50）



第20図　SKi 07平・断面図（１/50）

m，深さ0.35mを測る。埋土下部からは弥生土器壺（15・16），高杯（17），鉢（18）が出土した。17は胎土１ａ類である。これらの遺物は弥生時代後期後半に属することから，この土坑は同時期のものと考えられる。

SKi 09（第22図）

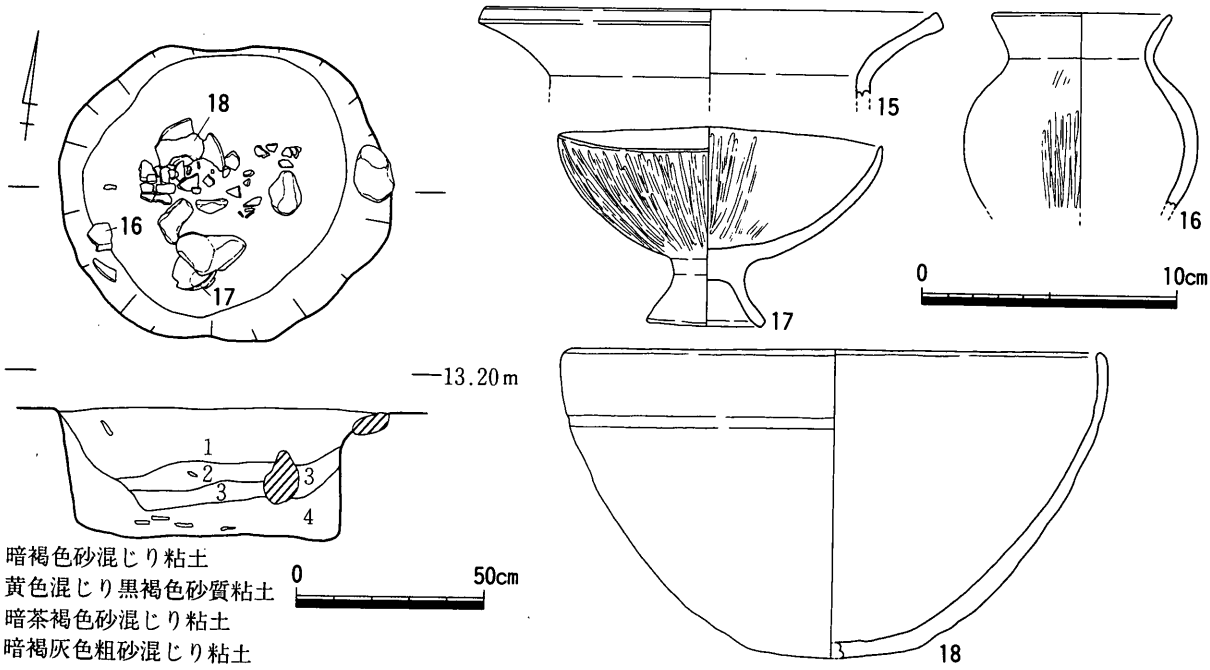
III—21区で検出された土坑である。江戸時代の溝SDi 41と重複しているため，東部は不明である。平面形はいびつな方形を呈し，長軸の残存長は2.1m，短軸0.7m，深さ0.25mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 10（第23図）

III—21区西端で検出された土坑で，遺構の西部は調査区外に連続する。平面形は隅丸方形を呈し，南北軸2.0m，深さ0.5mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

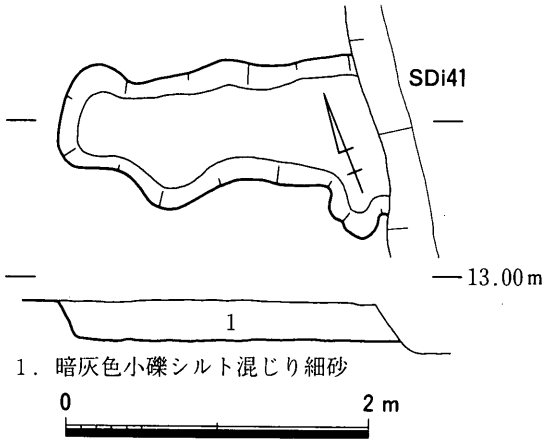
SKi 11（第24図）

III—30区，Ｉ地区の西端で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸3.3m，短軸1.2m，深さ0.6mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考え



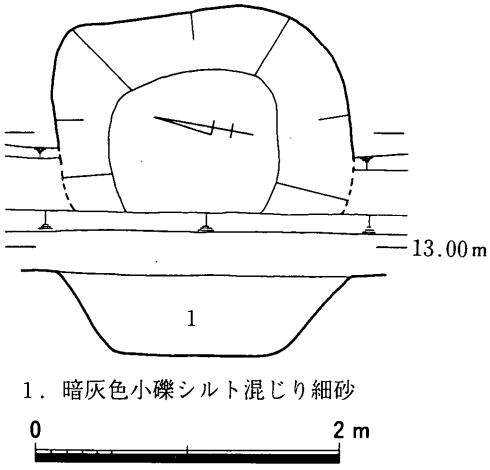
1．暗褐色砂混じり粘土
2．黄色混じり黒褐色砂質粘土
3．暗茶褐色砂混じり粘土
4．暗褐灰色粗砂混じり粘土
5．褐灰色砂

第21図　SKi 08平・断面図（1/20），出土遺物実測図（1/3）



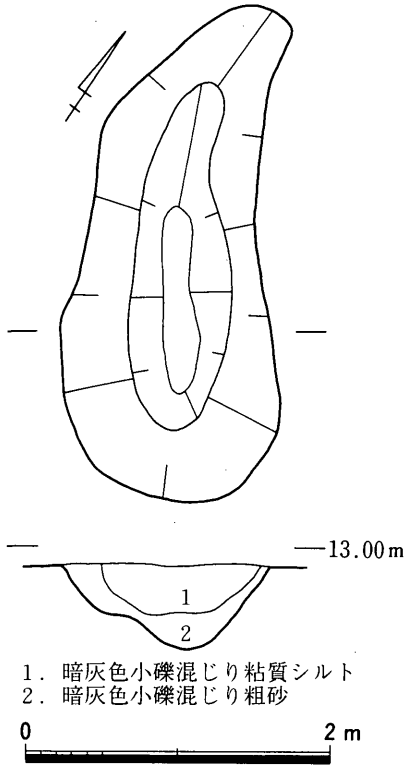
1．暗灰色小礫シルト混じり細砂

第22図　SKi 09平・断面図（1/50）



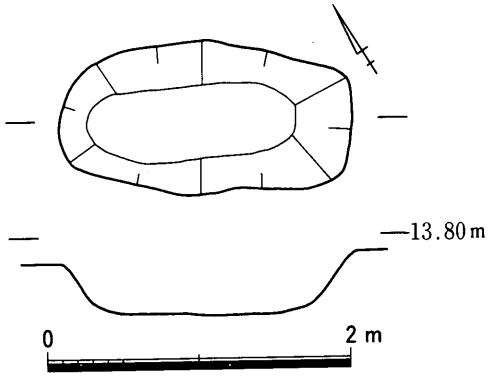
1．暗灰色小礫シルト混じり細砂

第23図　SKi 10平・断面図（1/50）

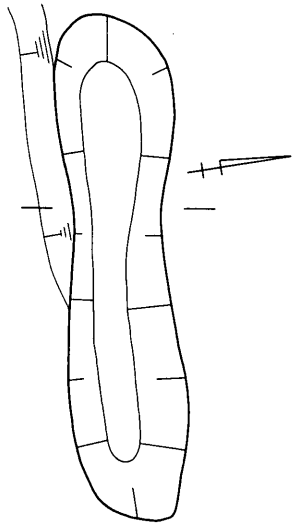


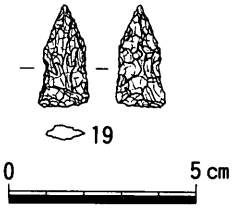
1．暗灰色小礫混じり粘質シルト
2．暗灰色小礫混じり粗砂

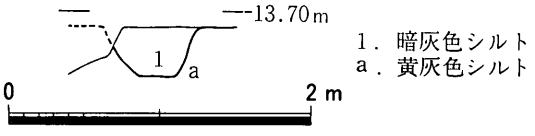
第24図　SKi 11平・断面図（1/50）



第25図　SKi 12平・断面図（1/50）







第26図　SKi 13平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/2）

られる。

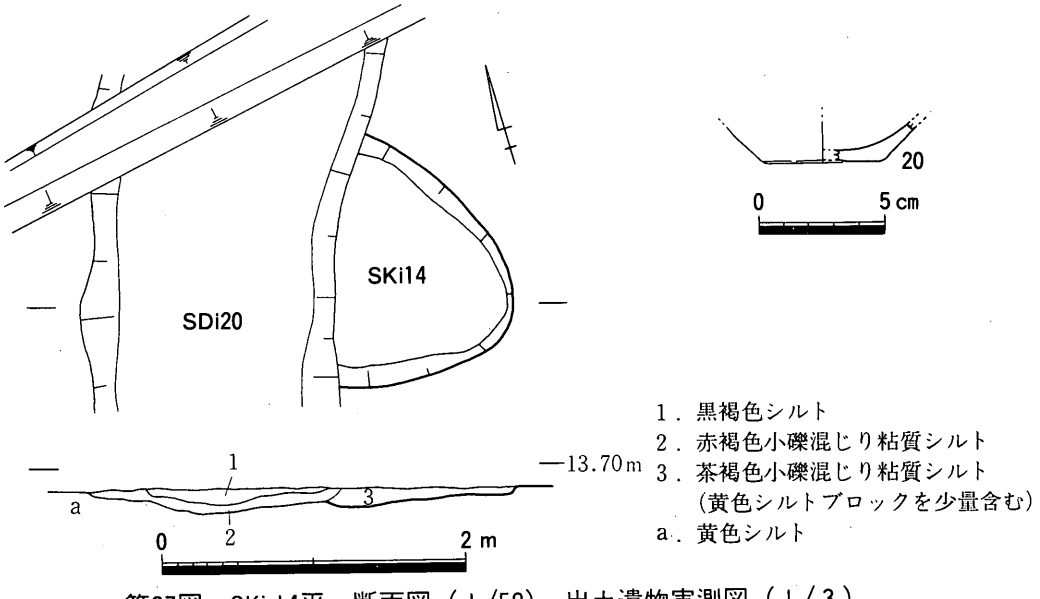
SKi 12（第25図）

III—31区，SKi 11の南東部で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.9m，短軸1.0m，深さ0.4mを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 13（第26図）

I地区の南部，III—32区で検出された土坑である。南部は一部攪乱を受ける。平面形は楕円形を呈し，長軸3.2m，短軸0.6m，深さ0.3mを測る。埋土からは石鏃（19）が出土した。出土遺物や埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

SKi 14（第27図）



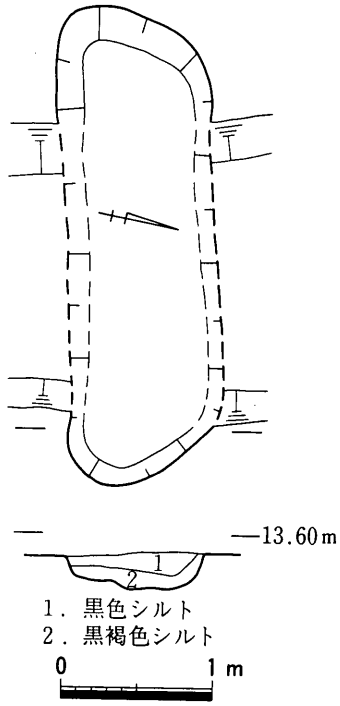
第27図　SKi 14平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

III—29区，SKi 13の東部で検出された土坑である。遺構の西部はSDi 20と重複する。土層の堆積状況より，SKi 14が古いものと考えられる。平面形はいびつな円形を呈すると思われ，推定径1.7m，深さ0.1

mを測る。弥生土器甕（20）のほか，胎土１ａ類土器を含む少量の弥生土器が出土した。20は底部破片のため詳細な時期は不明であるが，胎土１ａ類土器で，弥生時代後期に属すると考えられる。出土遺物から，この土坑は弥生時代後期のものと考えられる。

SKi 15（第28図）

Ⅲ—29区，SKi 14の南部で検出された土坑である。遺構の中央部は攪乱を受ける。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸3.1m，短軸1.0m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は弥生時代のものと考えられる。

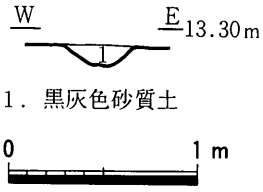


第28図　SKi 15平・断面図（1/50）

④　溝

SDi 01（第29図，図版26）

Ⅲ—11区，Ⅰ地区の西部で検出された南北に走る溝である。幅0.4m，深さ0.1m，検出長28mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。



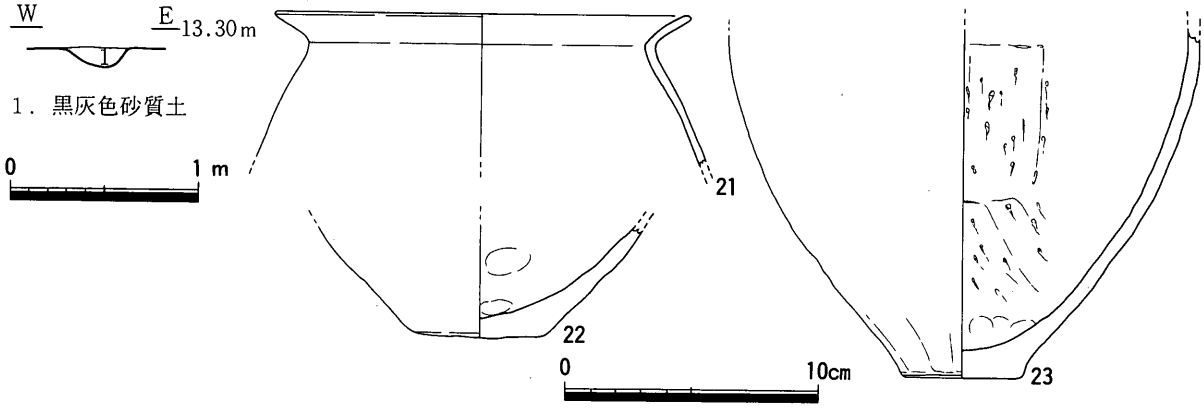
第29図　SDi 01平・断面図（1/40）

SDi 02（第30図）

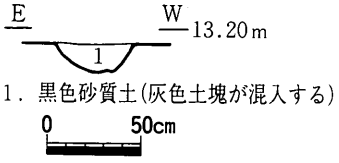
Ⅲ—11区，SDi 01の東部で検出された南北に走る溝である。幅0.3m，深さ0.1m，検出長10mを測る。弥生土器甕(21・23)，弥生土器底部(22)，弥生土器片などが数点出土した。22は胎土１ａ類である。出土遺物から，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 03（第31図）

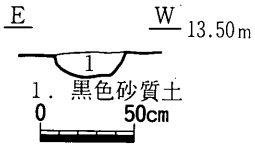
Ⅲ—11・12区で検出された溝である。南から北，西から東に向かってＬ字状に屈曲して走る。幅0.4m，深さ0.15m，検出長34mを測る。胎土１ａ類土器を含む弥生土器片少量が出土した。出土遺物から，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。



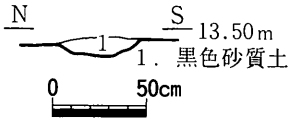
第30図　SDi 02断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



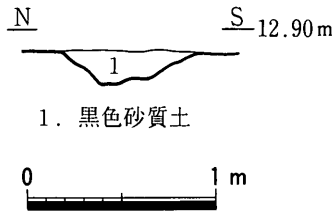
第31図　SDi 03断面図（1/40）



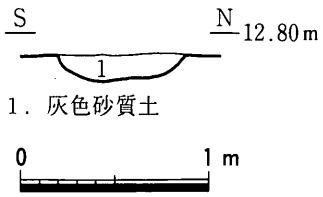
第32図　SDi 04断面図（1/40）



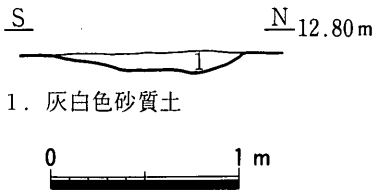
第33図　SDi 05断面図（1/40）



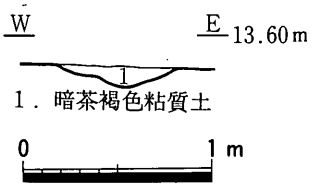
第34図　SDi 06断面図（1/40）



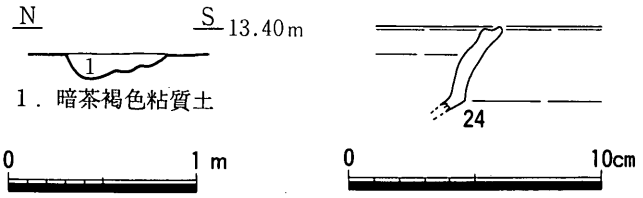
第35図　SDi 07断面図（1/40）



第36図　SDi 08断面図（1/40）



第37図　SDi 09断面図（1/40）



第38図　SDi 10断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SDi 04（第32図，図版26）

III—11区の西部，SDi 01の西側で検出された南北に走る溝である。幅0.4～0.5m，深さ0.15m，検出長5mを測る。胎土1a類の弥生土器片が数点出土した。出土遺物から，この遺物は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 05（第33図）

III—11区の南西端で検出された溝である。SDi 01・SDi 04のいずれかと連続する可能性がある。幅0.4～0.5m，深さ0.1mを測る。胎土1a類土器を含む弥生土器片が数点出土した。出土遺物から，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 06（第34図，図版27）

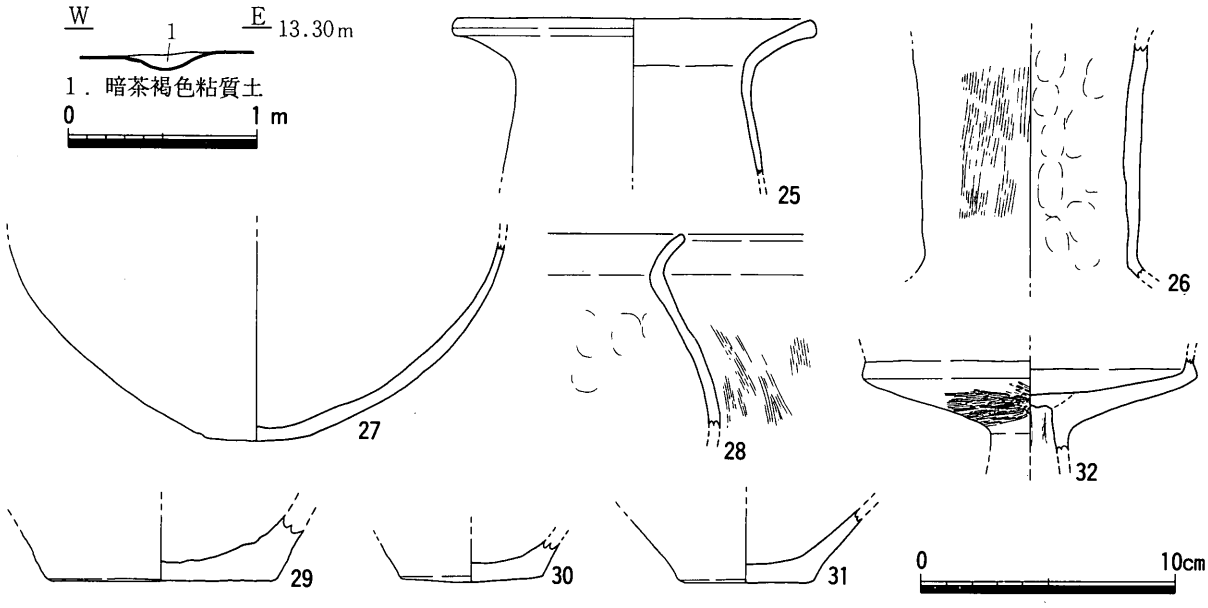
III—12区で検出された南東から北西方向に向かって走る溝である。幅0.7m，深さ0.2m，検出長8mを測る。溝の南東部は攪乱や江戸時代の溝SDi 41によって削平を受けており，遺構は中断されているが，ほぼ同方向に走る溝SDi 16・SDi 17のいずれかと連続するものと考えられる。SDi 17の堆積土がSDi 06と類似することから，SDi 17と連続する可能性が高い。SDi 06からは胎土1a類の弥生土器片が1点出土した。出土遺物から，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 07（第35図，図版27）

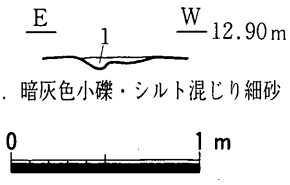
III—12区の北東隅で検出された溝である。南東から北西に向かって走る。幅0.5～1.0m，深さ0.1m，検出長7mを測る。遺物は出土しなかった。北接するG地区（III—39区）では，SDi 07から連続すると考えられる溝群が検出されている。これらの溝からも遺物はほとんど出土しておらず，時期の決め手に欠ける。流路の方向は不規則で，条里形地割りには平行していないことから，中世の可能性は少ないものと思われる。とりあえず，本報告書では弥生時代のものとして報告するが，G地区の整理時に再検討を要する。

SDi 08（第36図，図版27）

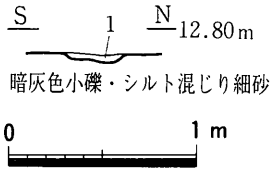
III—12区の北東隅，SDi 07の北側で検出された溝である。SDi 07同様南東から北西に向かって走る。幅1.0m，深さ0.1m，検出長5mを測る。遺物は出土しなかった。この溝もSDi 07と同様の理由から，弥生時代のものとして報告する。G地区の整理時に再検討を要する。



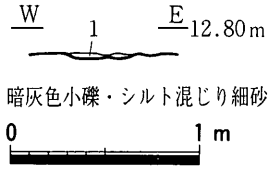
第39図　SDi 11断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第40図　SDi 12断面図（1/40）



第41図　SDi 13断面図（1/40）



第42図　SDi 14断面図（1/40）

SDi 09（第37図）

III—51区の南西隅で検出された溝である。南から北に向かって走る。幅0.6m，深さ0.1m，検出長6mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 10（第38図）

III—52区で検出された溝である。東から西に向かって走る。一部SDi 11と重複するが，土層堆積より，SDi 10のほうが新しいことがわかる。幅0.5～1.0m，深さ0.1～0.2m，検出長23mを測る。弥生土器高杯（24），胎土1a類土器を含む弥生土器数点が出土した。24は胎土1a類である。出土遺物から，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 11（第39図，図版27）

III—52区で検出された溝である。南東から北西に向かって走る。一部SDi 10と重複するが，土層堆積よりSDi 11のほうが古いことがわかる。幅0.4m，深さ0.1m，検出長33mを測る。遺物は埋土中位付近から出土した。弥生土器壺（25・26），甕（28），高杯（32），弥生土器底部（29～31）のほか，胎土1a類土器を含む弥生土器片が少量出土した。25・26・32は胎土1a類である。これらの遺物は弥生時代後期中葉に属することから，この溝は同時期のものと考えられる。

SDi 12（第40図）

III—21区で検出された溝である。南西から北東方向へ，南東から北西方向へL字状に屈曲して走る。幅0.3～0.4m，深さ0.1m，検出長12mを測る。弥生土器片が少量出土したが，図化できるものはなかった。出土遺物から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 13（第41図）

III—21区，SDi 12の北西部で検出された溝である。南東から北西に向かって走る。幅0.3m，深さ0.05m，検出長7mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 14（第42図）

III—21区，SDi 13の北部で検出された溝である。南西から北東に向かって走る。幅0.4m，深さ0.05m，検出長3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 15（第43図）

III—21区，SDi 14の東部，SDi 12の西部で検出された溝である。南西から北東に向かって走る。幅0.4m，深さ0.05～0.1m，検出長4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 16（第44図）

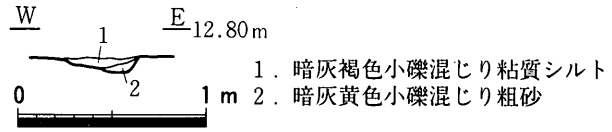
III—13区の北部・III—12区の東部で検出された溝である。南東から北西に向かって走るが，III—13区の北部で北東に分流する。弥生時代の溝SDi 17・SDi 18と一部重複するが，土層堆積よりSDi 16が新しいことがわかる。幅0.6～0.8m，深さ0.1～0.3m，検出長50mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 17（第45図）

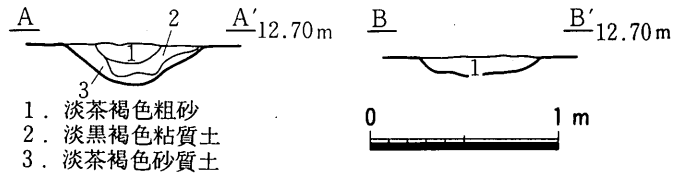
III—13区の北部・III—12区の東部で検出された溝で，南西から北東に向かって走るSDi 18の北部から，北西に向かって分流する溝である。幅0.6m，深さ0.2mを測る。攪乱・他遺構の存在のため連続して検出されなかったが，遺構埋土からSDi 06に連続するものと推定される。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 18（第46図）

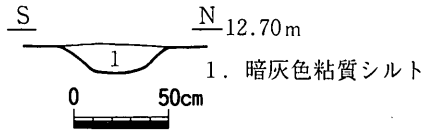
III—21区・III—13区で検出された溝である。南西から北東に向かって走るが，III—13区北部でSDi 17と分流する。SDi 16と重複するが，土層堆積より，SDi 18のほうが古いこ



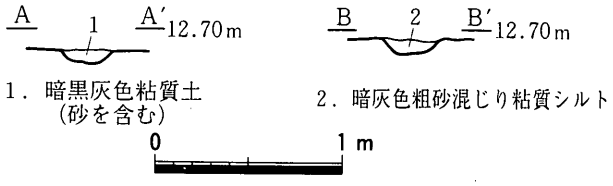
第43図　SDi 15断面図（1/40）



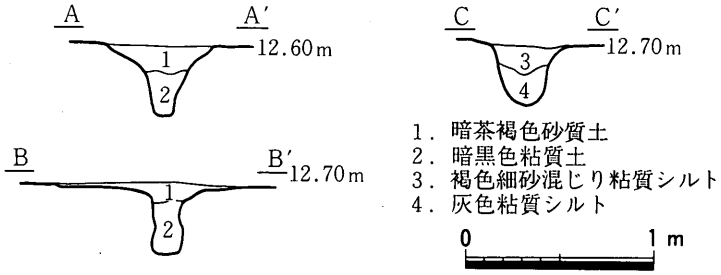
第44図　SDi 16断面図（1/40）

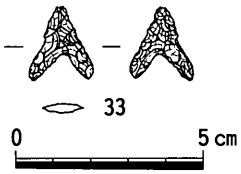


第45図　SDi 17断面図（1/40）



第46図　SDi 18断面図（1/40）





第47図　SDi 19断面図（1/40），出土遺物実測図（1/2）

とがわかる。幅0.2～0.3m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 19（第47図）

III—21区・III—13区で検出された溝である。南から北東に向かって蛇行しながら走る。南部はSRi 01と重複するが，SRi 01の上面からは掘り込みが認められず，埋土も同じであることから，SRi 01と同時期か古いものと推定される。断面形はU字形を呈し，幅0.3～1.0m，深さ0.3～0.4m，検出長40mを測る。石鏃（33）のほか，弥生土器片が数点出土した。出土遺物から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 20（第48～50図，図版26）

III—32区・III—29区・III—28区・III—30区で検出された溝である。南西から北東方向，南東から北西方向に蛇行しながら走り，検出長80mを測る。最南部のIII—32区では幅1.0m，深さ0.2mを測るが，III—32区に接するIII—29区では幅広になり，幅1.7m，深さ0.2mを測る。また，北部のIII—28区では大きく蛇行しており，最北部では幅10m，深さ0.1m未満と平面的に大きく広がって浅くなり，落ち込み状の遺構に変化する。弥生土器壺（34～44），甕（45～57），甑（84），高杯（85～102），ミニチュア壺（103）のほか弥生土器の破片が多量に出土したが，完形品はみられなかった。これらの遺物は弥生時代後期前半のものも少量みられるが，大部分が後期中葉のものである。図化した土器70点のうち37点が胎土１ａ類である。器種別では壺11点のうち６点が胎土１ａ類，甕13点のうち３点が胎土１ａ類，高杯18点のうち13点が胎土１ａ類である。出土遺物から，この溝は弥生時代後期中葉のものと考えられる。

SDi 21（第51図）

III—26区からIII—23区・III—13区にかけて検出された溝である。南西から北東に向かって走る。途中でSDi 22・SDi 23など数条の溝に分流する。幅1.5～3.0m，深さ0.3～0.6m，検出長75mを測る。北東部に向かって徐々に浅くなる。弥生土器壺(104～108)，甕(109～111)，高杯(112～115)，土師器甕(116)，高杯（117・118)，須恵器杯蓋（119）のほか弥生土器片，土師器片，須恵器片が少量出土した。埋土下部からは弥生土器，埋土上部からは弥生土器・土師器・須恵器が出土した。106・107・109・111～115が胎土１ａ類土器である。114・115は弥生時代後期前半に属するが，他の弥生土器は後期中葉から後葉のものが大部分である。また，116・119は古墳時代中期のものである。埋土の堆積状況からも再掘削がうかがわれることから，この溝は弥生時代後期に掘削され，古墳時代中期に再掘削されたものと考えられる。

SDi 22（第52図）

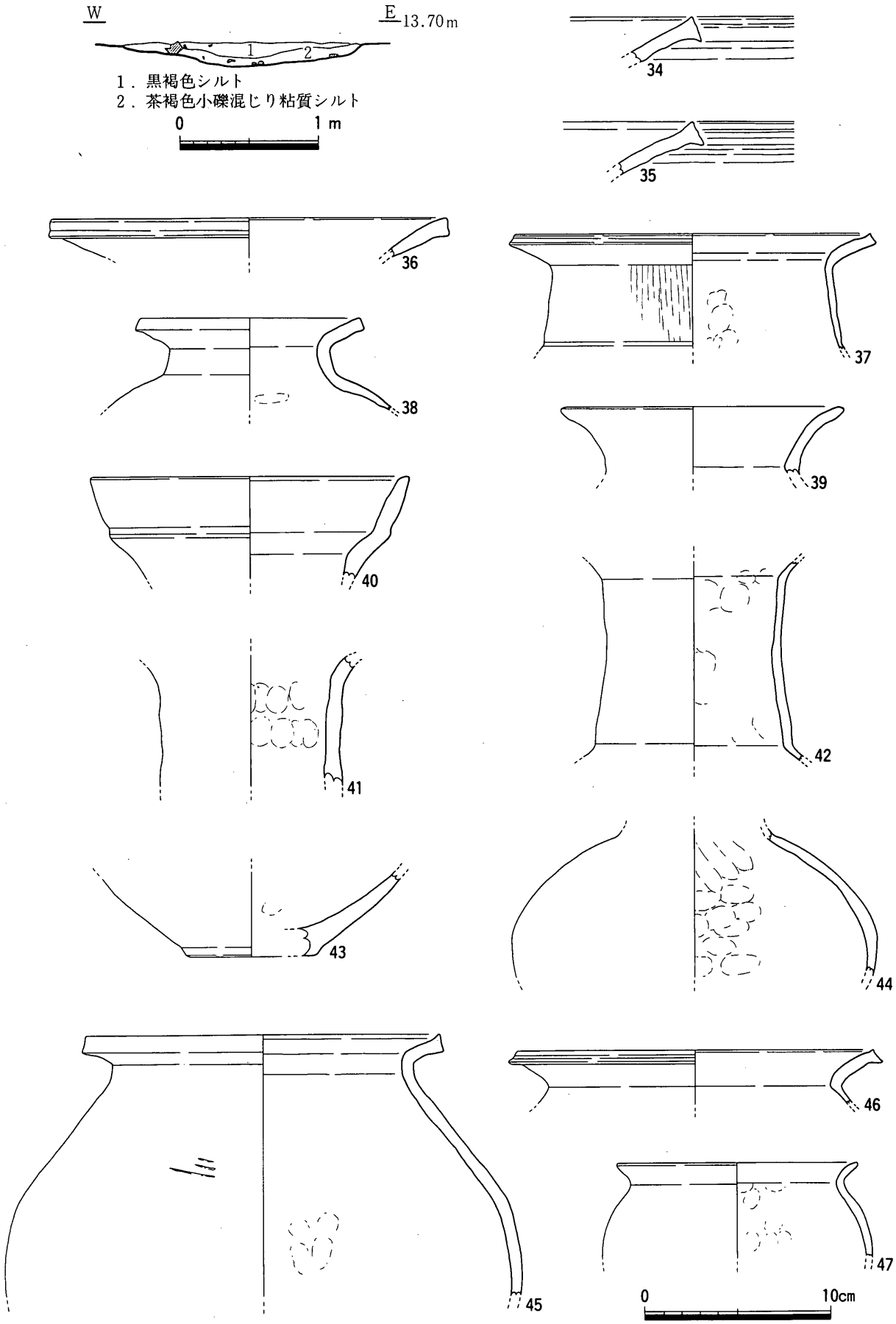
III—23区で検出された溝である。SDi 21から分流し，南西から北東に向かって走る溝である。幅0.5～0.8m，深さ0.1m，検出長15mを測る。弥生土器甕（120）のほか弥生土器が少量出土した。120は胎土１ａ類土器で，弥生時代後期に属することから，この溝は弥生時代後期のものと考えられる。

SDi 23（第53図）

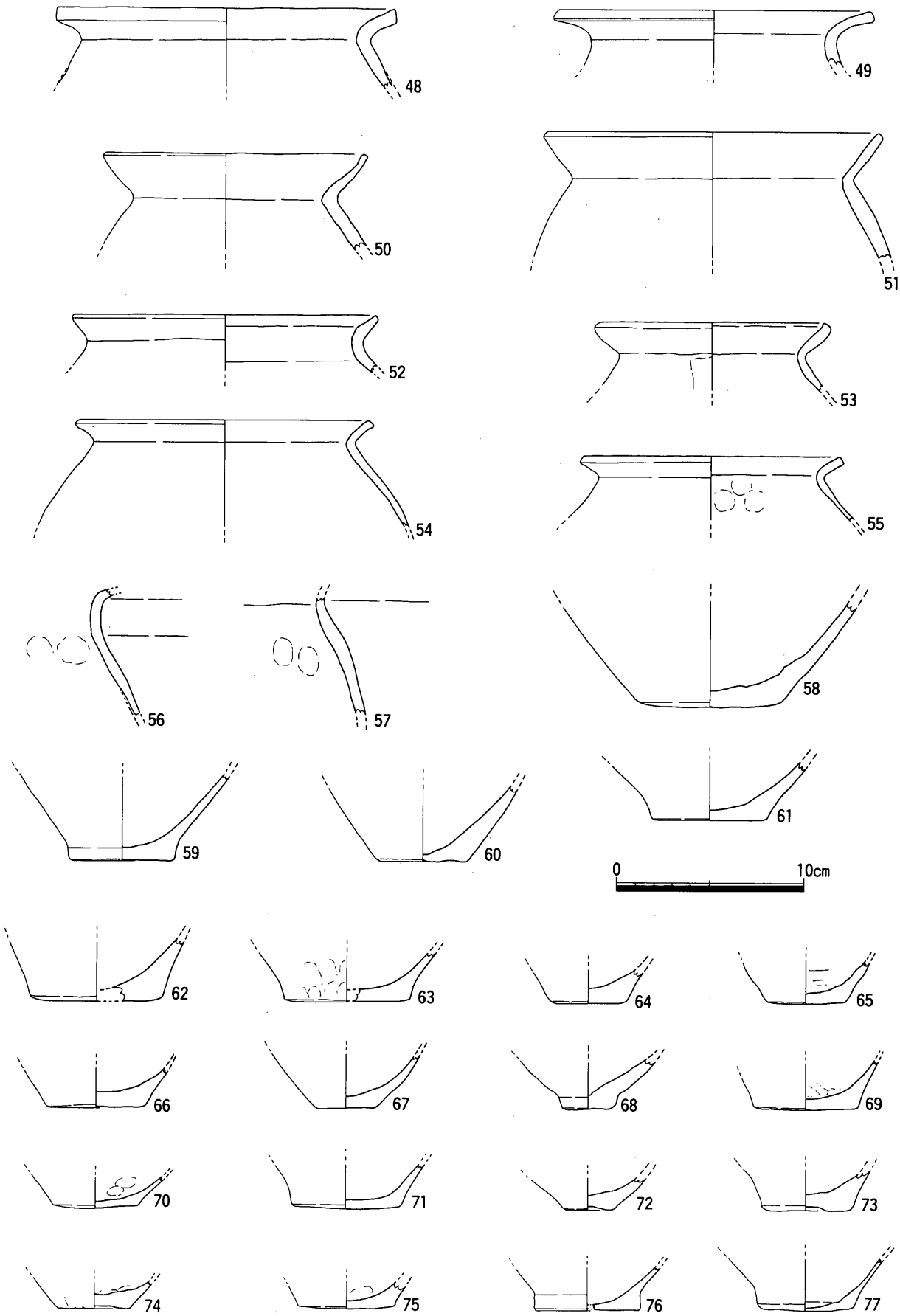
III—23区で検出された溝である。SDi 23から分流し，南西から北東に向かって流れる溝である。幅0.3～0.5m，深さ0.2m，検出長10mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は弥生時代のものと考えられる。

SDi 24（第54図）

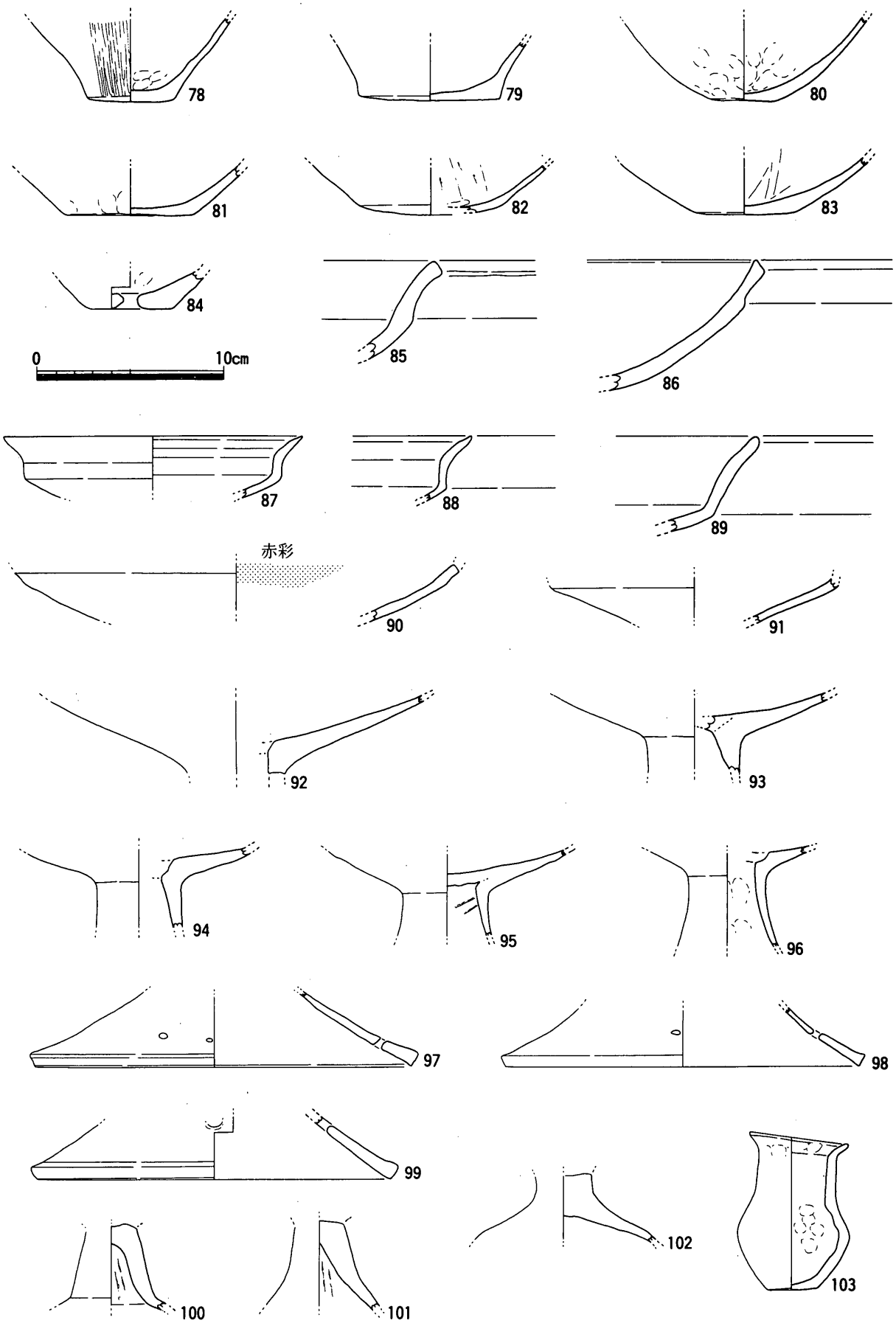
III—23区，SDi 22の東部で検出された溝である。南西から北東に向かって流れる溝である。幅0.4～0.5m，深さ0.2m，検出長20mを測る。溝の北部はSDi 21から分流する溝と交差するが，埋土の差異により，



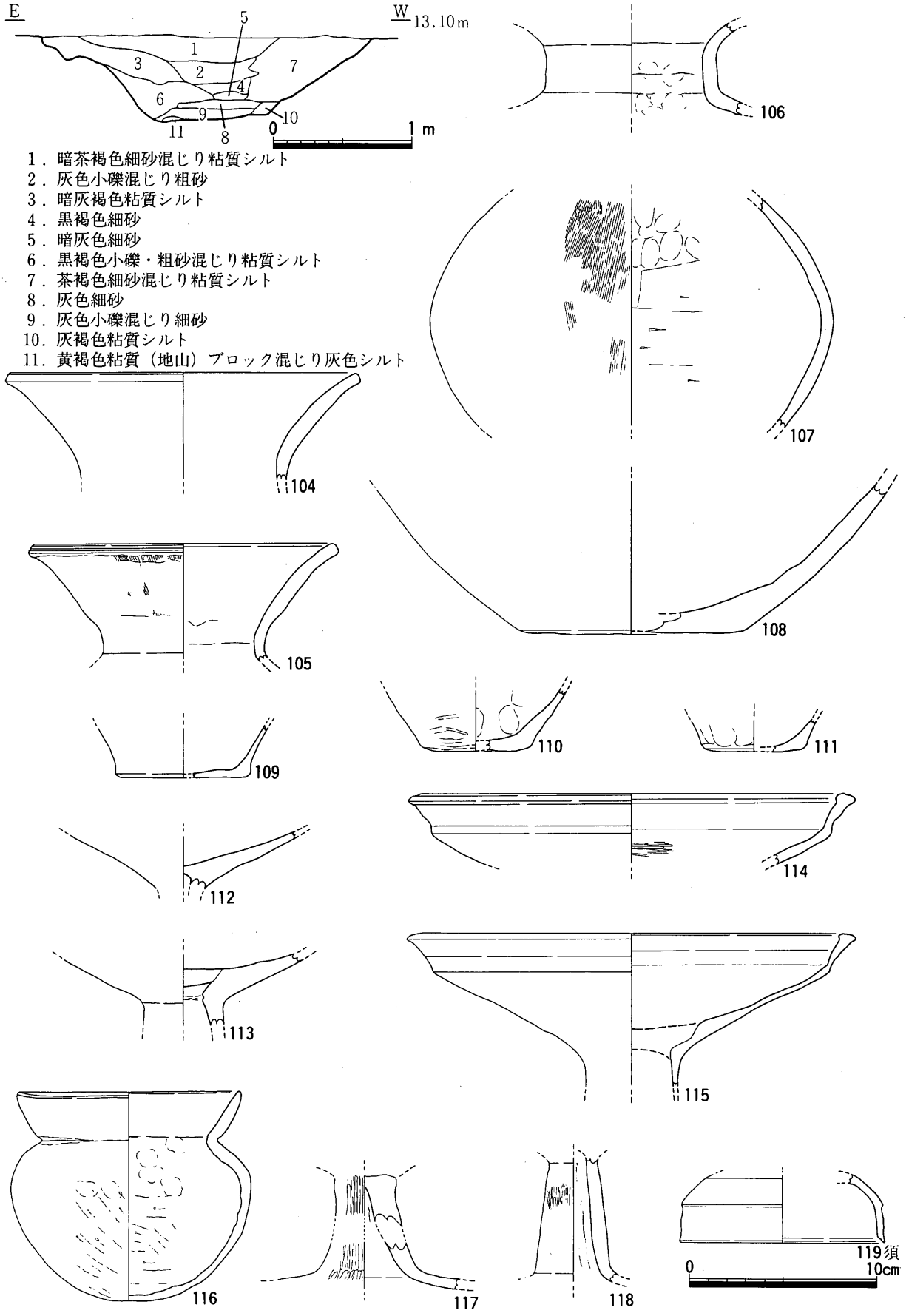
第48図　SDi 20断面図（1/40），出土遺物実測図1（1/3）



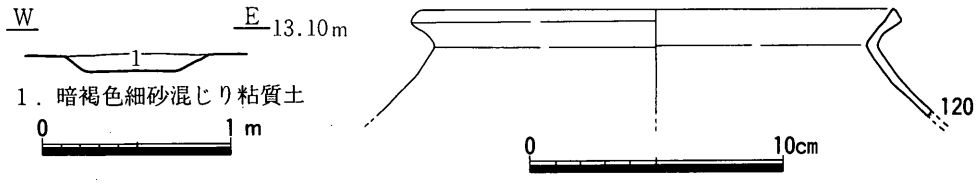
第49図　SDi 20出土遺物実測図２（１／３）



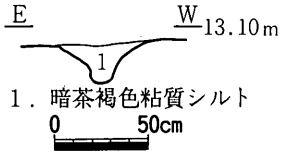
第50図　SDi 20出土遺物実測図３（１／３）



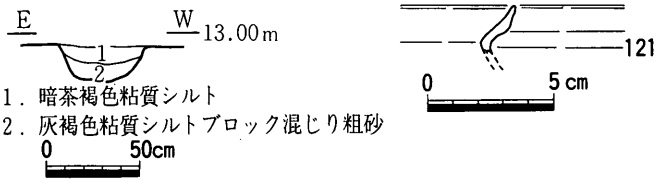
第51図　SDi 21断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第52図　SDi 22断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第53図　SDi 23断面図（1/40）



第54図　SDi 24断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SDi 24のほうが古いものと推定される。弥生時代後期から古墳時代初頭の甕(121)のほか弥生土器または土師器片が少量出土した。出土遺物から，この溝は弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

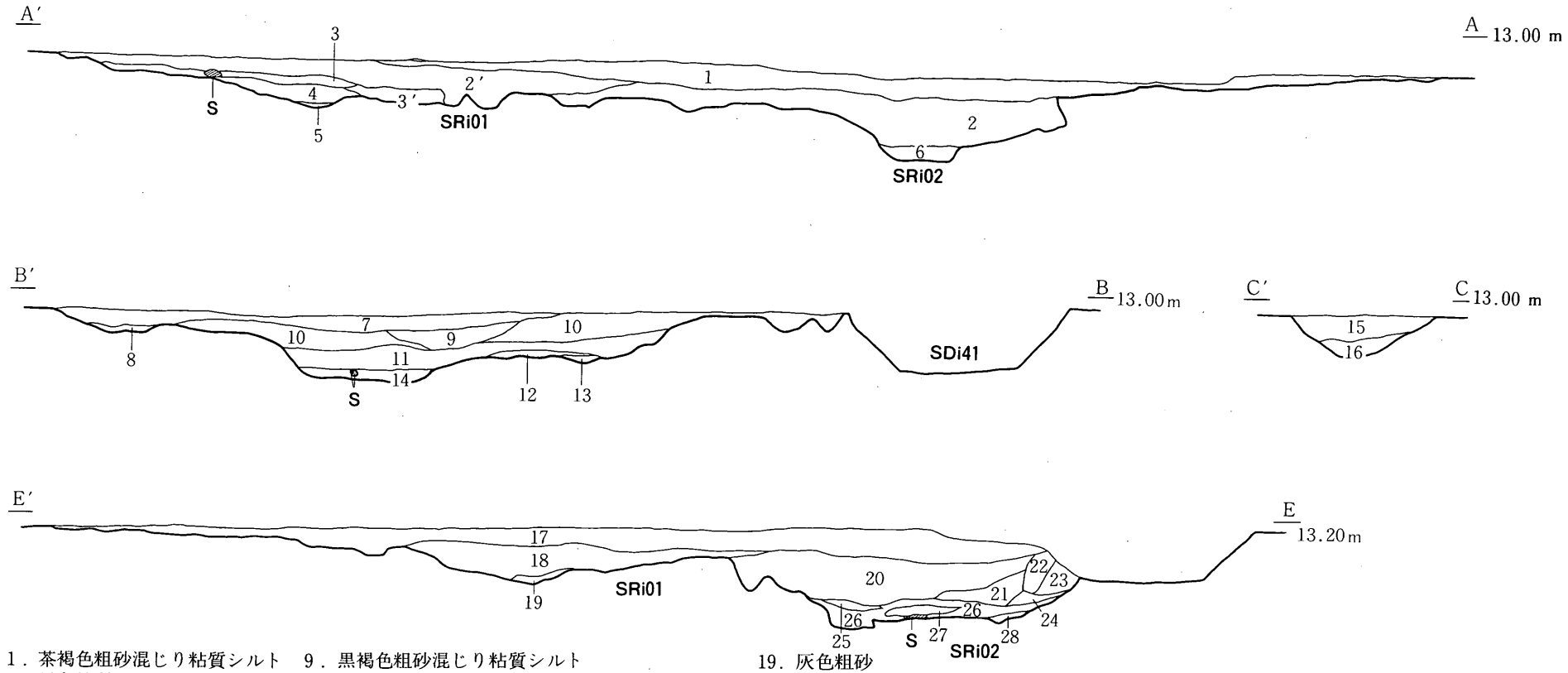
⑤　河川

SRi 01（第55・56図，図版8・28～30）

III—26区・III—25区・III—22区で検出された河川である。検出長は80mを測る。南端のIII—26区ではSRi 02と重複するが，土層堆積よりSRi 01が新しいことが観察された。下流に当たるIII—13区では河川は浅くなり，消滅する。最南部のIII—26区では幅1.5m，深さ0.6mを測るが，北東部のIII—22区では幅1.6～5.5mと幅広くなり，深さ0.3～0.5mを測る。また，隣接して流れるSRi 02から分流する流れの一部もSRi 01に流れ込む。SRi 01の埋土からは弥生土器甕(122～124)，高杯(128～132)，製塩土器(133)，弥生土器片が少量出土した。126・129・131はIII—26区の底面付近，128はIII—22区の底面付近，123・125・127・130・132・133はIII—22区埋土上位・中位，122・124はIII—26区埋土上位・中位より出土した。122・124・128～133は胎土1a類土器である。いずれも弥生時代後期中葉に属することから，SRi 01は同時期のものと考えられる。

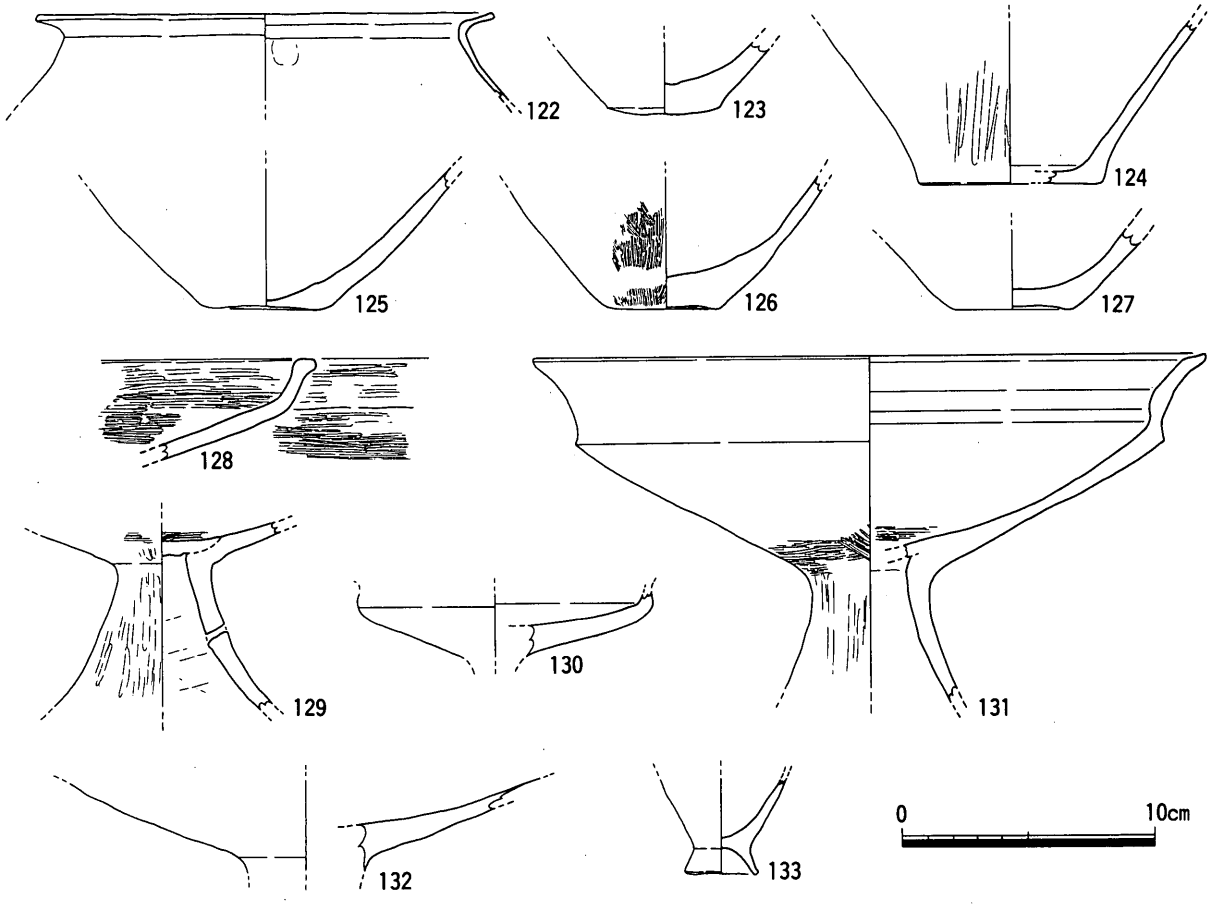
SRi 02（第55・57図，図版8・28～30）

III—26区・III—25区・III—22区・III—13区で検出された河川である。南西から北東に向かって蛇行しながら流れる。検出長は115mを測る。III—26区ではSRi 01と重複するが，土層堆積よりSRi 02が古いことがわかる。上流のIII—26区では幅10.0m，深さ1.0mを測り，下流のIII—13区では幅12.0m，最深部で深さ0.3mを測る。また，上流のIII—26区では流路は一条だけであったが，北部のIII—25区では数条に分岐し，SRi 01に流れ込む流路も存在する。遺物は弥生土器壺（134～139），甕（140・141），蓋（142），高杯（143），弥生土器または土師器甕（144），石包丁（145・146），石鏃（147）のほか弥生時代土器片が少量出土した。135・136・138・141・142・147はIII—26区，134・137・139・143・146はIII—25区，140・144・145はIII—22区で出土した。134～142は弥生時代前期後半に属するものである。いずれも胎土3類土器である。143・145は弥生時代後期から古墳時代に属する。143は胎土1a類である。出土遺物から，この河川は弥生時代前期後半には存在し，その一部は弥生時代後期から古墳時代まで存在したものと考えられる。



1．茶褐色粗砂混じり粘質シルト
2．黒色粘質シルト
2′．暗灰褐色粘質シルト
3．褐灰色粘質シルト混じり粗砂
3′．褐灰色粗砂混じり粘質シルト
4．褐灰色粘質シルト
5．灰色粗砂
6．灰色粗砂・小礫
7．褐灰色小礫混じり粘質シルト
8．暗灰褐色粘質シルト
9．黒褐色粗砂混じり粘質シルト
10．黒褐色粘質シルト
11．黒褐色粗砂混じり粘質シルト
12．灰色粘質シルト混じり粗砂
13．灰色小礫混じり粗砂
14．黒色小礫粘質シルト混じり粗砂
15．褐灰色粗砂混じり粘質シルト
16．暗褐色粗砂・小礫混じり粘質シルト
17．黒褐色粘質シルト（細砂・小礫少量混じる）
18．黒褐色粘質シルト（細砂・小礫やや多量混じる）
19．灰色粗砂
20．黒褐色粘土
21．黒褐色細砂混じり粘質シルト
22．黒褐色粘土（褐色み強い）
23．淡灰黄色粘質シルト
24．黒色粘土
25．灰色粗砂
26．黒色細砂混じり粘質シルト
27．灰色粗砂
28．黒色粘土

第55図　SRi 01・SRi 02断面図（1/60）



第56図　SRi 01出土遺物実測図（1/3）

⑥　不明遺構

SXi 01（第58図）

III—51区で検出された落ち込みである。平面形はいびつで，細長く，最長軸12.5m，最短軸2.0mを測る。中央部が深く，最深部で深さ0.3〜0.4mを測る。埋土から胎土1a類土器を含む弥生後期土器片が少量出土した。出土遺物から，この落ち込みは弥生時代後期のものと考えられる。

SXi 02（第59図）

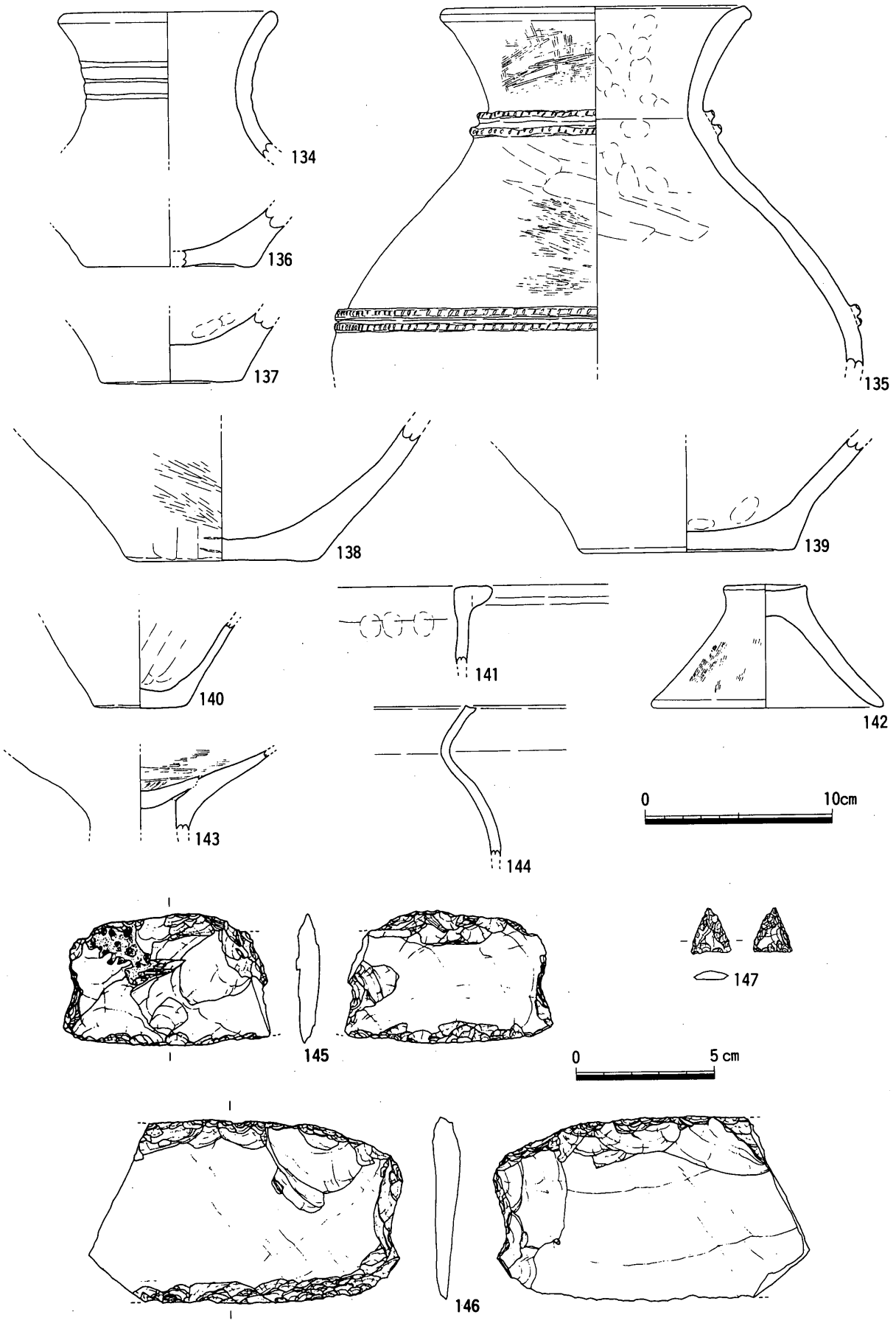
III—51区，SXi 01の南東部で検出された落ち込みである。弥生時代の溝（幅0.5m，深さ0.1m）と連続する。平面形はいびつで，細長く，最長軸4.0m，最短軸1.1m，深さ0.1mを測る。弥生土器甕(148)，石鏃（150）のほか，胎土1a類土器を含む弥生後期土器片が少量出土した。148は胎土1a類土器である。出土遺物から，この落ち込みは弥生時代後期のものと考えられる。

SXi 03（第60図）

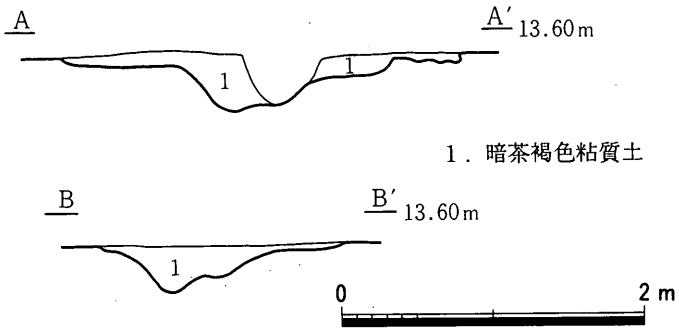
III—52区で検出された落ち込みである。SXi 02とは幅0.5m，深さ0.1mの溝で連続する。平面形はいびつで細長く，最長軸26.0m，最短軸3.5m，深さ0.1mを測る。弥生土器甕（151）のほか胎土1a類土器を含む弥生後期土器片が少量出土した。151・152は胎土1a類土器である。出土遺物から，この落ち込みは弥生時代後期のものと考えられる。

SXi 04（第61図）

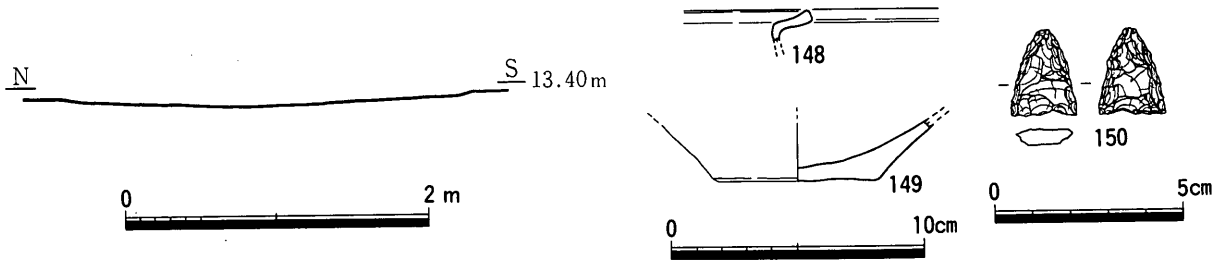
III—26区で検出された落ち込みである。平面形はいびつなS字状を呈し，最長軸1.8m，最短軸0.5m，深さ0.3mを測る。埋土から弥生土器甕（153），高杯（154）のほか胎土1a類の弥生後期土器が出土し



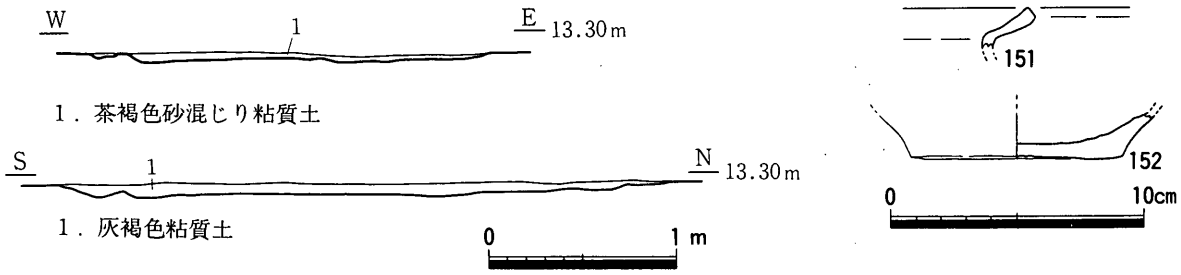
第57図　SRi 02出土遺物実測図（1/3・1/2）



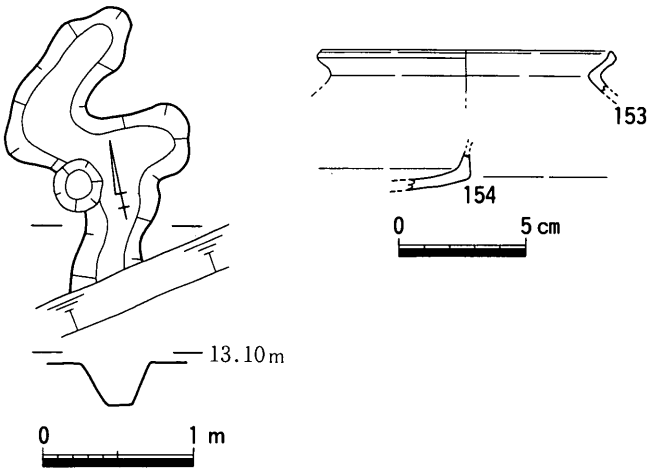
第58図　SXi 01断面図（1/50）



第59図　SXi 02断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/2）



第60図　SXi 03断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

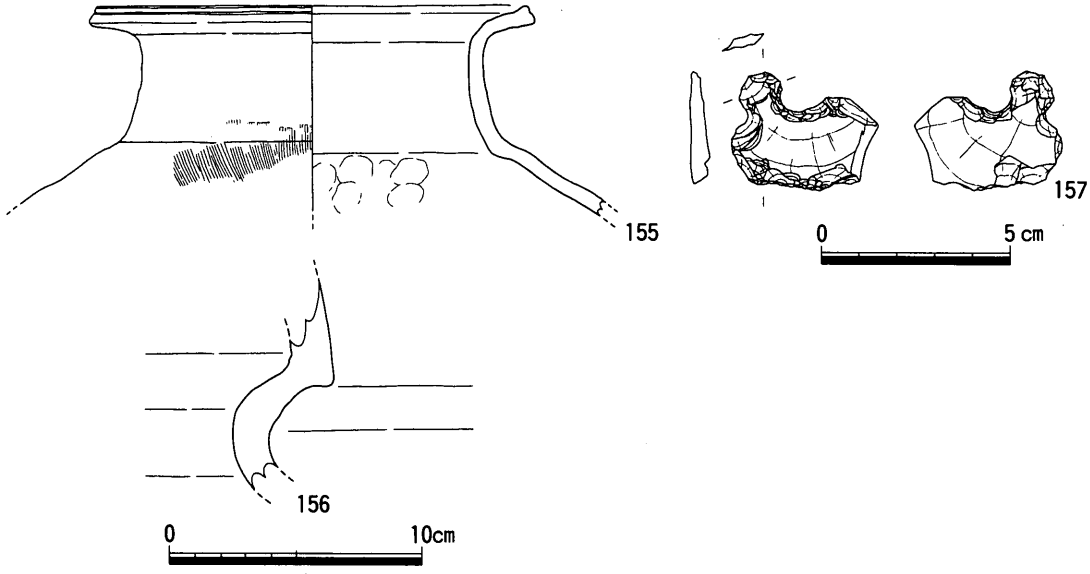


第61図　SXi 04平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

た。153・154は胎土1ａ類土器である。出土遺物から，この落ち込みは弥生時代後期のものと考えられる。

⑦　包含層出土土器（第62図）

Ⅲ—12区からは弥生土器壺（155・156），Ⅲ—28・31区の暗褐色粘質シルト層からは石匙（157）が出土した。155は胎土1ａ類土器である。



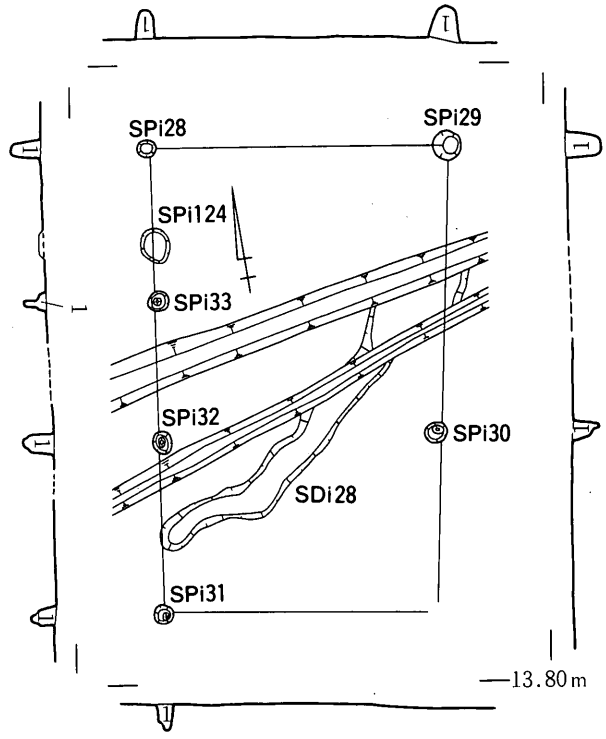
第62図　弥生時代包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

2．平安時代から鎌倉時代

① 掘立柱建物

SBi 05（第63図）

III—51区の西部で検出された掘立柱建物である。建物の中央部を攪乱溝が走る。建物の規模は桁行3間（6.0m），梁間1間（3.6～4.0m），棟方向はN 9°Eを測る。桁行の柱間は1.8～2.2mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.3～0.4mを測る。柱穴埋土からは土師器小皿・椀の小片が数点出土した。



1．褐灰色粘質土

0　5 m

第63図　SBi 05平・断面図（1/100）

SBi 06（第64図，図版32）

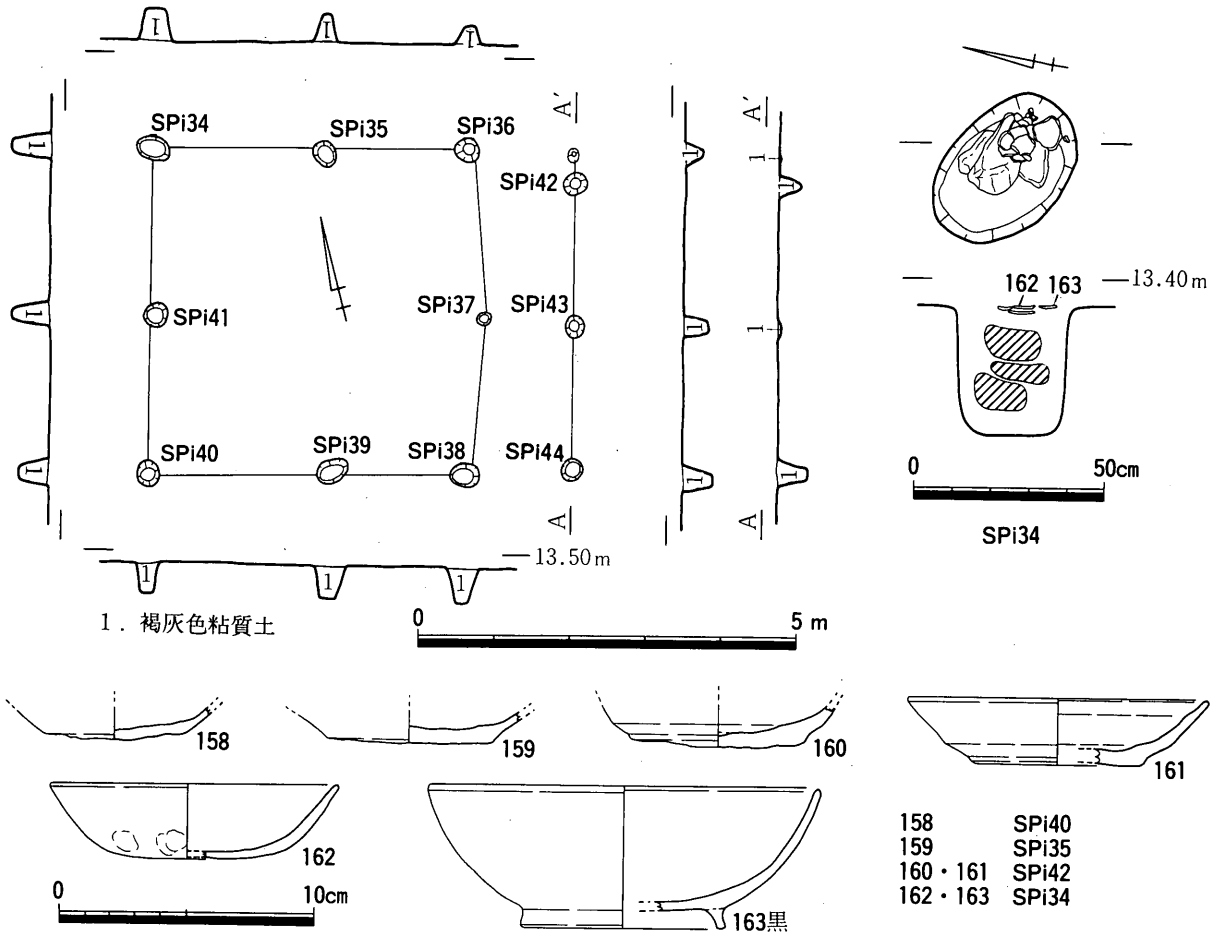
III—51区の東部で検出された掘立柱建物である。建物の規模は桁行2間（4.2m），梁間2間（4.2m）で，東側には庇が付く。棟方向はW 9°N，桁行・梁間の柱間は1.6～2.4mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2～0.4mを測る。SPi 34は径0.15mの円礫3個が詰まり，その上部には土師器杯（162），黒色土器椀(163)がつぶれた状態で出土した。SPi 35からは土師器杯(159)，SPi 40からは土師器小皿（158），SPi 42からは土師器杯（160・161）が出土した。また，図化できなかったが，SPi 39・SPi 43以外の柱穴埋土からは土師器小皿・杯・椀の小片が数点ずつ出土した。163は黒色土器A類椀である。摩滅しており，調整は不明であるが，その形態から，片桐氏分類による黒色土器椀B 1類で，[2] 10世紀後半のものと考えられる。出土遺物から，この掘立柱建物は10世紀後半のものと考えられる。

SBi 07（第65図）

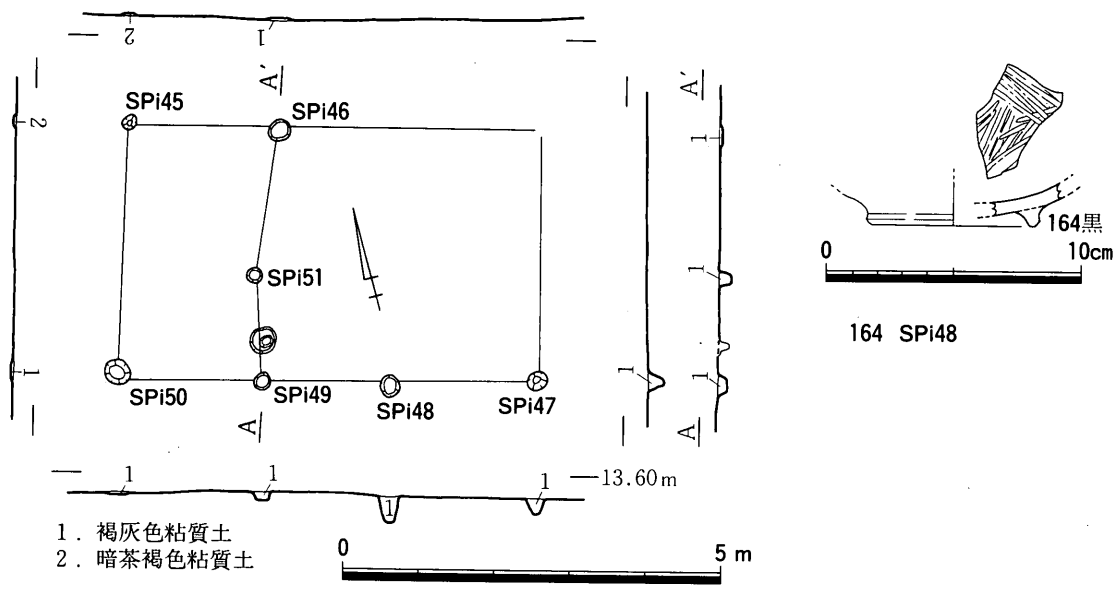
III—51区の東部，SBi 06の南部で検出された掘立柱建物である。建物規模は桁行3間(5.6m)，梁間1間（3.3m）である。棟方向はW15°N，桁行の柱間は1.6～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.05～0.4mを測る。SPi 48からは黒色土器椀（164），土師器片，SPi 49・SPi 50・SPi 51からは土師器片が出土した。164は黒色土器B類椀である。11世紀から12世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この掘立柱建物は11世紀から12世紀前半のものと考えられる。

SBi 08（第66図，図版30）

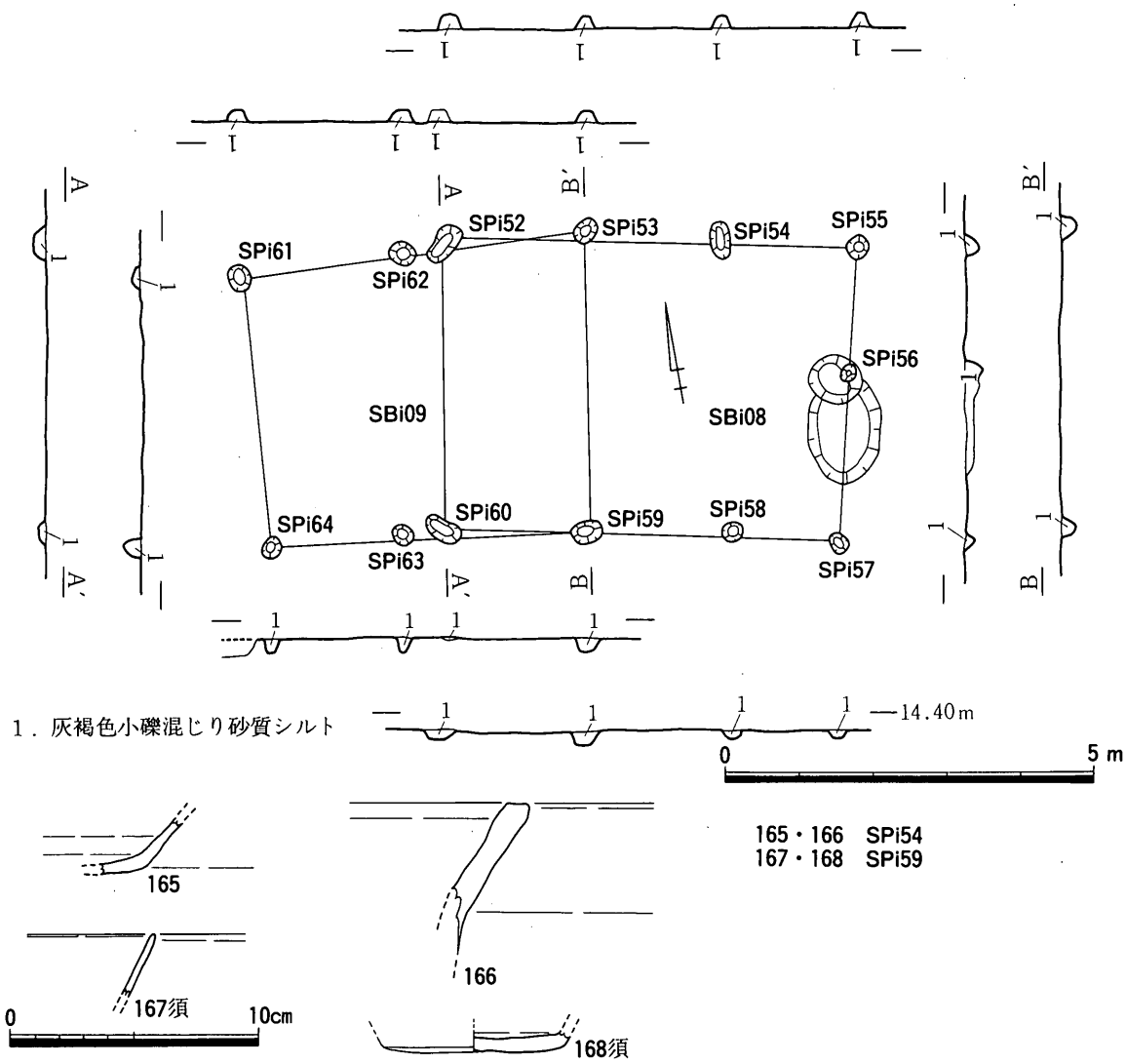
III—31区で検出された掘立柱建物である。西部はSBi 09と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。柱穴SPi 53・SPi 59はSBi 09と共有する。建物規模は桁行3間（5.4～5.7m），梁間2間(3.9m)，棟方向はW12°Nを測る。桁行の柱間は1.4～2.0m，梁間の柱間は1.7～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2～0.4mを測る。SPi 54からは土師器杯(165)，土鍋(166)，土師器片数点，SPi 59からは須恵器杯（167・168），土師器数点，SPi 52・SPi 56・SPi 58からは土師器片が数点出土した。167・168は須恵器杯である。167は体部がほぼ直線的に延びることから，10世紀代の



第64図　SBi 06平・断面図（1/100・1/20），出土遺物実測図（1/3）



第65図　SBi 07平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）



第66図　SBi 08・SBi 09平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

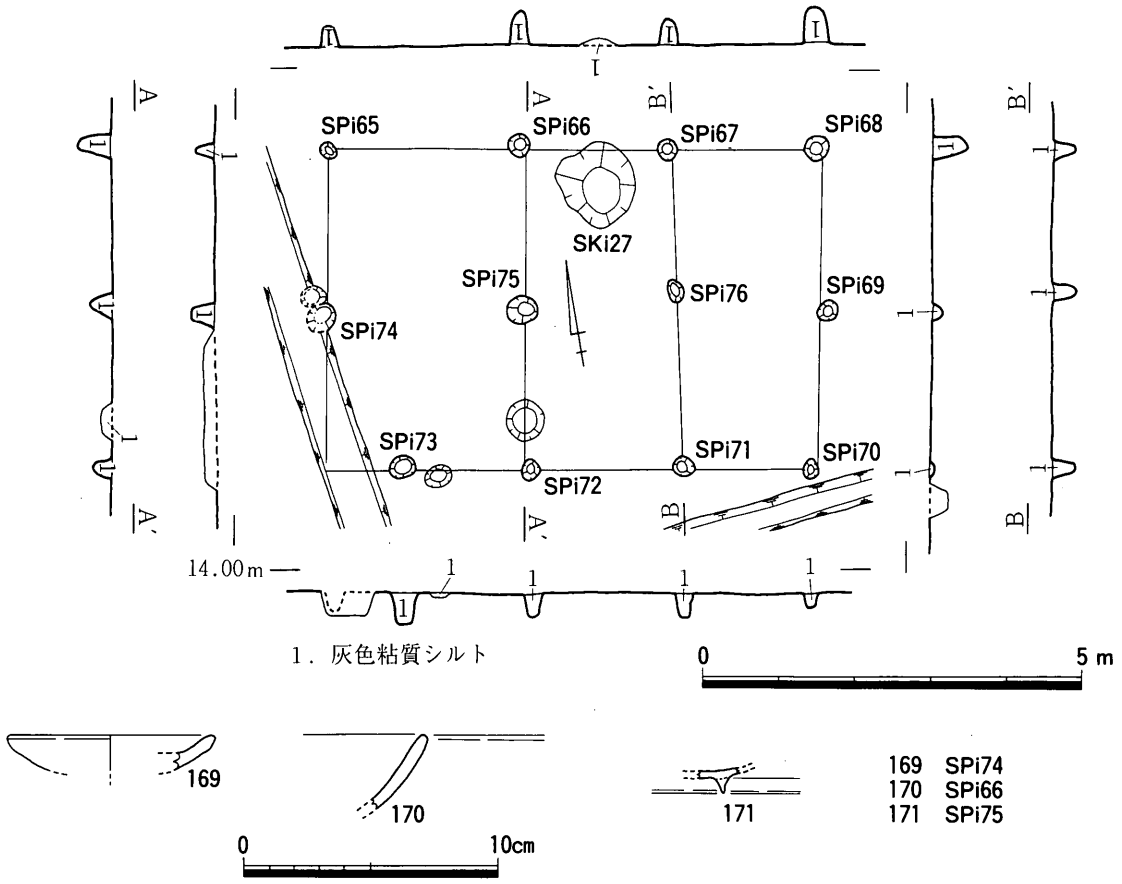
ものと考えられる。168も底部の形態から，ほぼ同形態であると思われる。出土遺物から，この掘立柱建物は10世紀代のものと考えられる。

SBi 09（第66図，図版30）

III—31区で検出された掘立柱建物である。東部はSBi 08と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物規模は桁行2間(4.3～4.7m)，梁間1間(3.6～4.0m)，棟方向はW5°Nを測る。桁行の柱間は1.8～2.5mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2mを測る。SPi 62からは土師器片が出土した。前述のようにSPi 59からは10世紀代の須恵器杯（167・168），土師器数点が出土した。この掘立柱建物も10世紀代のものと考えられる。

SBi 10（第67図，図版31）

III—31区で検出された掘立柱建物である。SBi 11・SBi 12と重複する。建物規模は桁行3間（6.4m），梁間2間(4.0m)，棟方向はW9°Nを測る。桁行の柱間は1.7～2.5m，梁間は2.0～2.1mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.4mを測る。SPi 66からは土師器杯(170)，土師器片・亀山焼片が数点，SPi 74からは土師器小皿(169)，土師器片が数点，SPi 75からは土師器椀(171)，土師器・須恵器片が数点出土した。SPi 65・SPi 67・SPi 68・SPi 72・SPi 73からは土師器片数点，SPi 76か



第67図　SBi 10平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

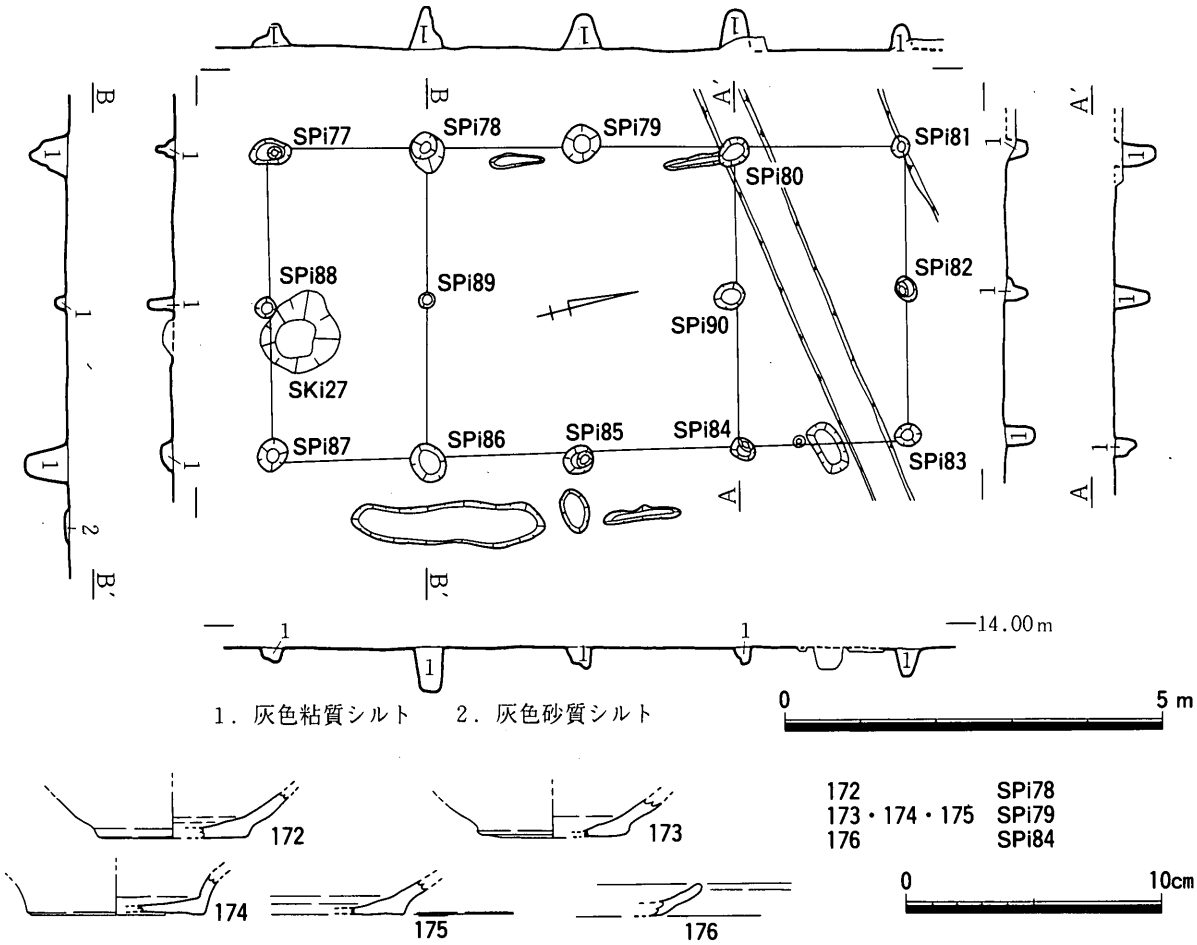
らは土師器・須恵器片が数点出土した。171は胎土にやや大きめの白色砂粒を含有することや，高台部の形態から，主に岡山県南部から広島県東部にかけて分布する早島式土器椀であると考えられる。高台部の形態から13世紀代のものと考えられる。[3] 出土遺物から，この掘立柱建物は13世紀代のものと考えられる。

SBi 11（第68図，図版31）

III—31区で検出された掘立柱建物である。SBi 11・SBi 12と重複する。新旧関係は不明である。建物規模は桁行4間（8.3～8.5m），梁間2間（3.7～3.9m），棟方向はN13°Eを測る。桁行の柱間は2.0～2.3m，梁間は1.8～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.2～0.6mを測る。SPi 78から土師器杯（172），土師器片数点，SPi 79から土師器杯（173～175），土師器片数点，SPi 84から土師器小皿（176），土師器片数点が出土した。SPi 77・SPi 80・SPi 87・SPi 88・SPi 89からは土師器片，SPi 85・SPi 86からは土師器・須恵器片が数点出土した。172～175は土師器杯である。いずれも底部が突出する。これらの形態から，10世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この掘立柱建物は10世紀代のものと考えられる。

SBi 12（第69・70図，図版31）

III—31区で検出された掘立柱建物である。SBi 11・SBi 12・SKi 27・SKi 28・SKi 29・SPi 27と重複する。建物規模は桁行4間（8.9～9.0m），梁間2間（3.5m），西・北・東の3面に庇をもつ。棟方向はN12°Eを測る。桁行の柱間は2.1～2.5m，梁間は1.7～1.8mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.3～0.6m，深さ0.3～0.5mを測る。SPi 91からは土師器小皿(177)，土師器片数点，SPi 92からは土師

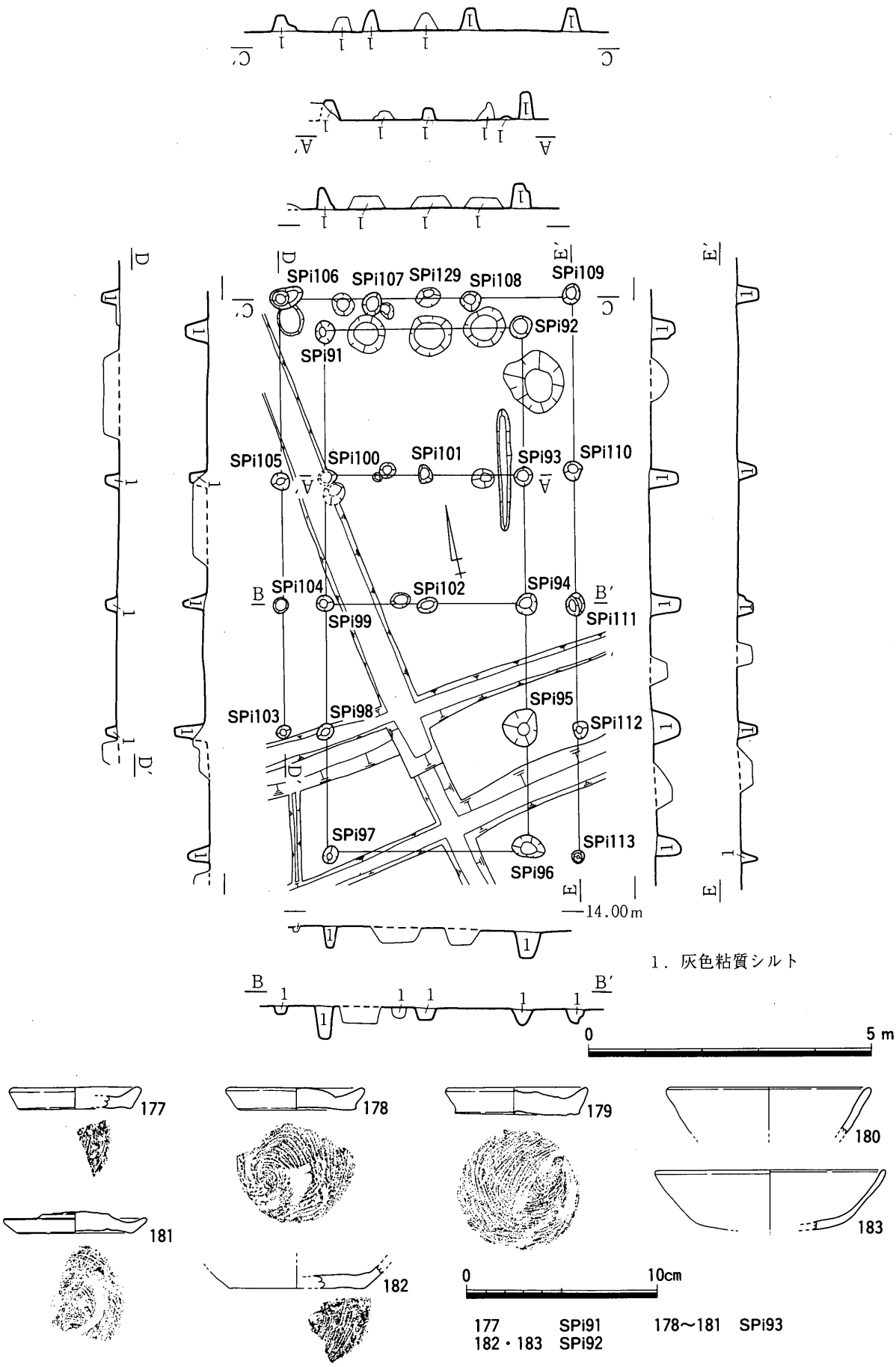


第68図　SBi 11平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

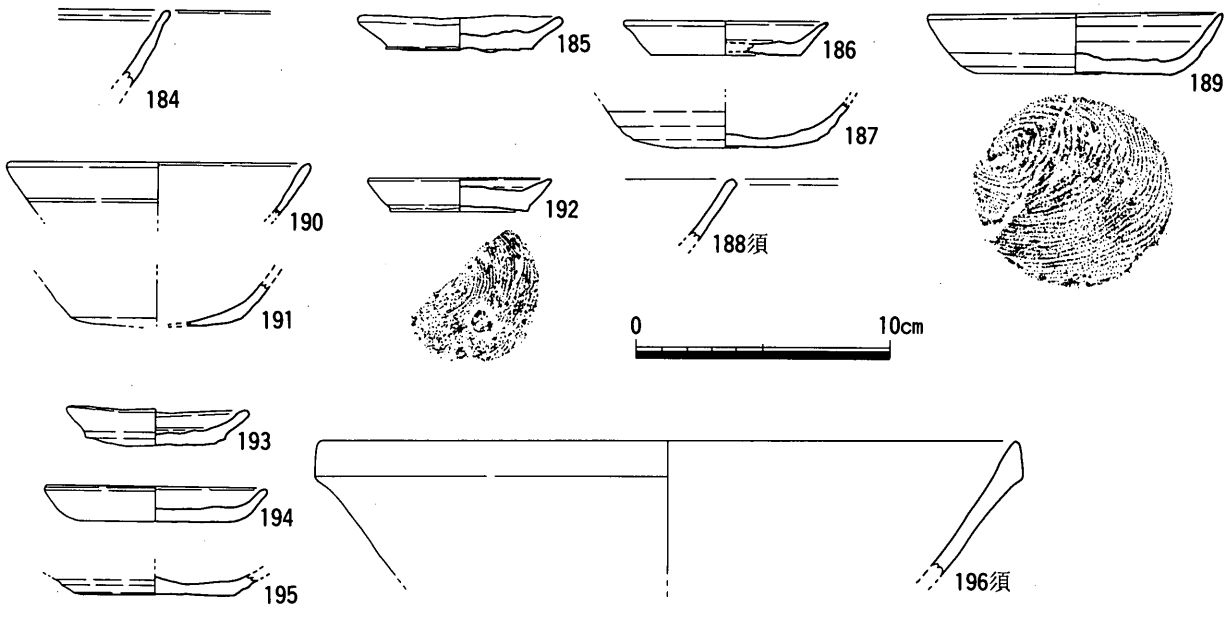
器小皿(182)，土師器杯(183)，土師器片数点，SPi 93からは土師器小皿(178・179・181)，土師器杯(180)，土師器片数点，SPi 94からは土師器小皿(185)，土師器数点，SPi 96からは土師器杯(189)，土師器数点，SPi 110からは土師器杯（184・190・191)，土師器数点，SPi 112からは土師器小皿(186・192)，土師器杯（187)，須恵器椀（188)，土師器片数点，SPi 113からは土師器小皿（193～195)，須恵器こね鉢（196)，SPi 95・SPi 98・SPi 99・SPi 101・SPi 102・SPi 107・SPi 108からは土師器片数点，SPi 109からは土師器・須恵器片数点が出土した。188は軟質の須恵器碗である。口縁部の形態から，12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。196は東播系の須恵器こね鉢である。口縁部外面が黒色化する。口縁部内面はほぼ直線的で，口縁端部に面をもつことから，12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。[4] 出土遺物から，この掘立柱建物は12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。

SBi 13（第71図，図版31）

III—21区で検出された掘立柱建物である。建物の南部で江戸時代の土坑 SKi 43と重複する。建物規模は桁行2間（5.0m)，梁間2間（3.8m)，棟方向はW10°Nを測る。桁行の柱間は2.5m，梁間の柱間は1.8～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1～0.2mを測る。SPi 116・SPi 118からは土師器片数点が出土した。出土遺物から，この掘立柱建物は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

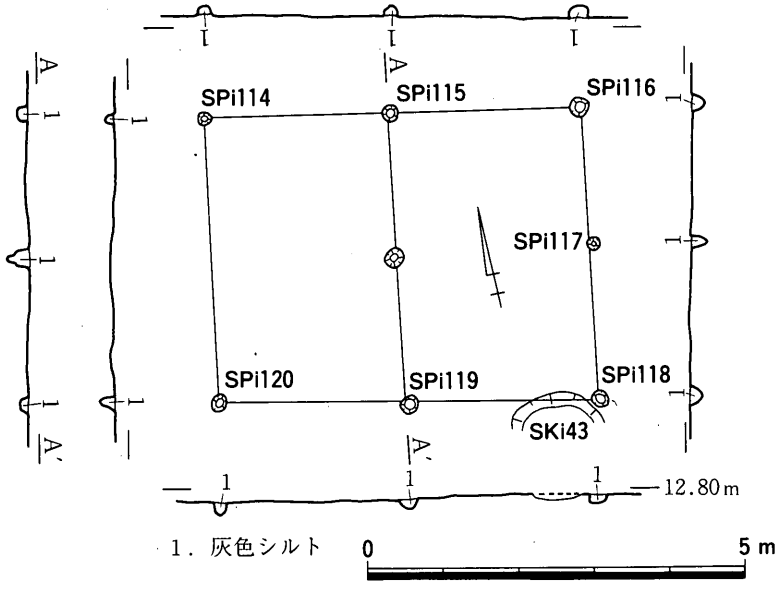


第69図　SBi 12平・断面図（1/100），出土遺物実測図1（1/3）



184・190・191　SPi110　　189　　SPi96
185　　SPi94　　193～196　SPi113
186～188・192　SPi112

第70図　SBi 12出土遺物実測図２（１/３）

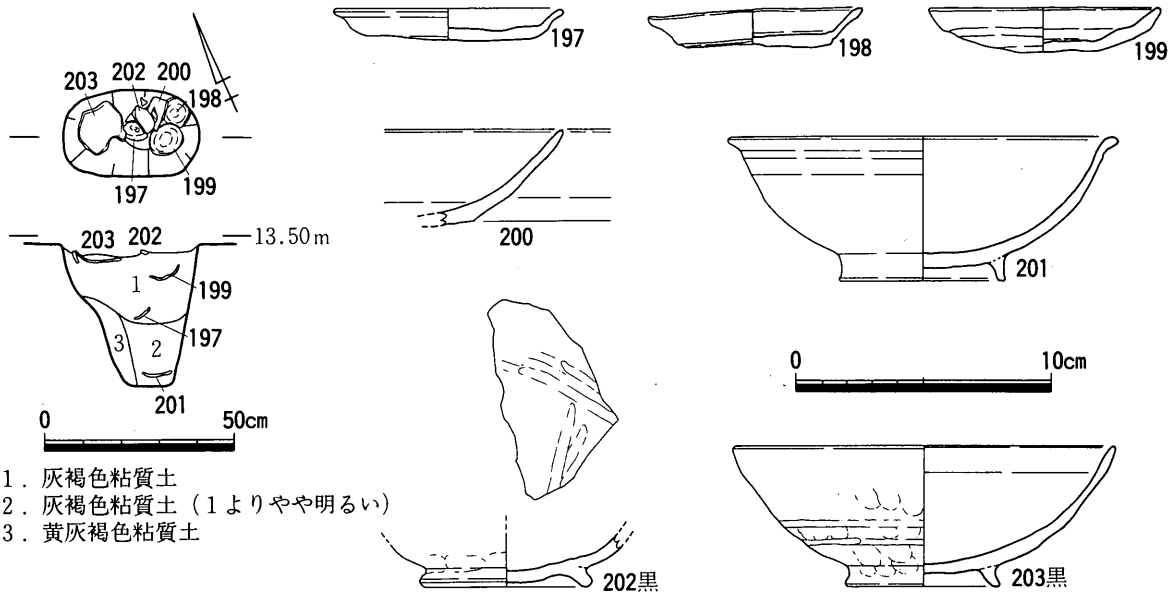


第71図　SBi 13平・断面図（１/100）

② 柱穴

SPi 121（第72図，図版32）

III—51区の西端，SBi 05の西側で検出された柱穴である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.35m，短軸0.2m，深さ0.4mを測る。埋土上部からは黒色土器椀（202・203），土師器小皿（198・199），土師器杯（200），その下位には土師器小皿（197），埋土下部からは土師器椀（201）が出土した。201は早島式土器椀である。法量や形態から，12世紀代のものと考えられる。[3] 202・203は黒色土器A類椀である。綾歌郡綾南町西村遺跡[5]の周辺で生産されたものである。形態から，12世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この柱穴は12世紀代のものと考えられる。



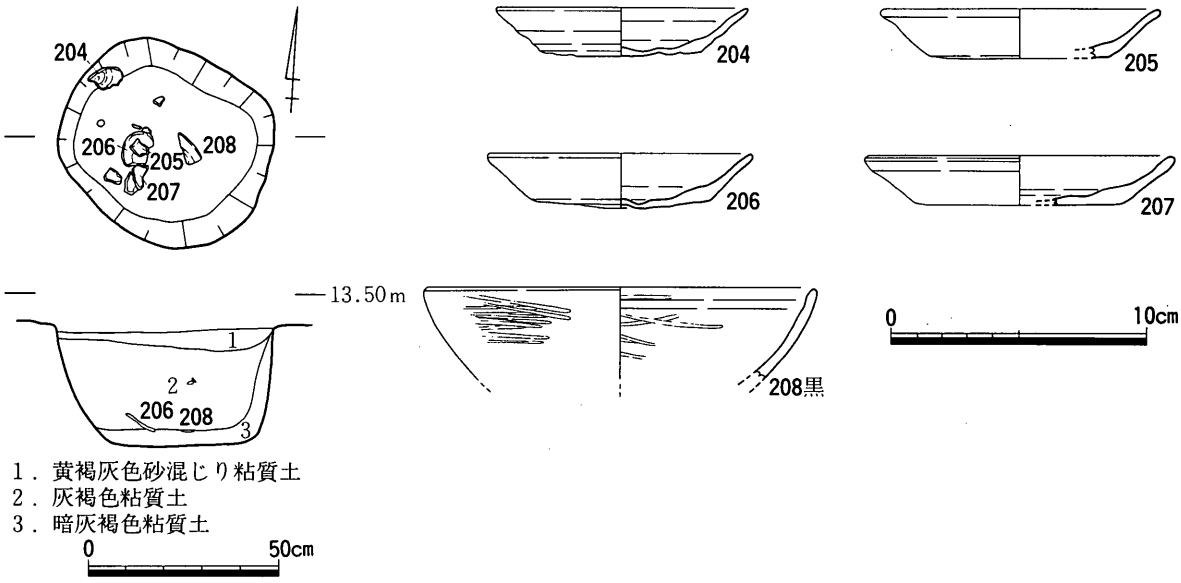
第72図　SPi 121平・断面図（1/20），出土遺物実測図（1/3）

SPi 122（第73図，図版33）

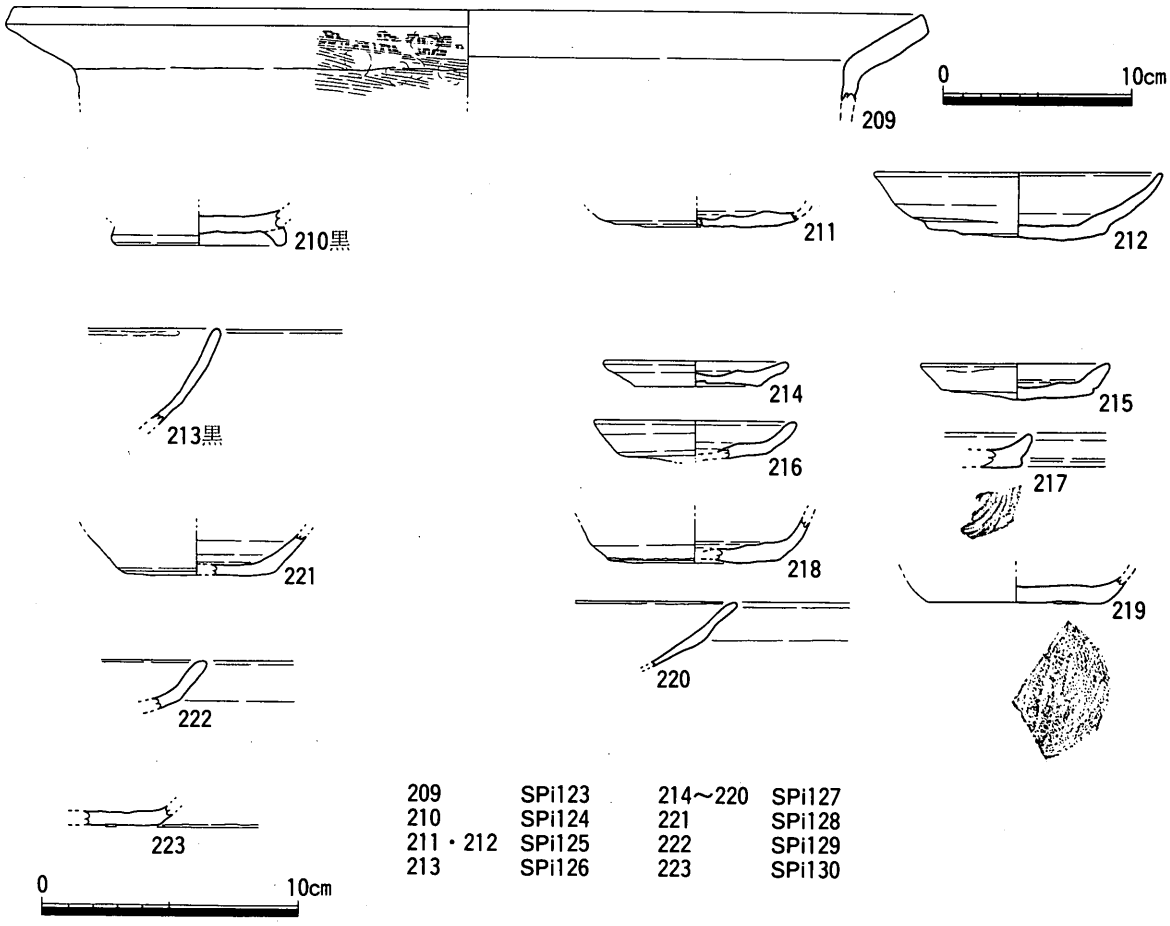
III—51区の西部，SBi 05の東側で検出された柱穴である。平面形はややいびつな円形を呈し，長軸0.6m，短軸0.5m，深さ0.3mを測る。埋土中位からは土師器小皿(204)，下位からは土師器小皿(205～207)，黒色土器椀(208)，土師器小皿片数点が出土した。208は黒色土器B類椀である。形態から，11世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この柱穴は11世紀代のものと考えられる。

SPi 123（第74図）

III—51区の西端，SBi 05の西側で検出された柱穴である。平面形は円形で，径0.3m，深さ0.5mを測り，埋土は褐灰色粘質土である。埋土中位から土師器土鍋（209）が出土した。出土遺物から，この柱穴は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。



第73図　SPi 122平・断面図（1/20），出土遺物実測図（1/3）



第74図　平安・鎌倉時代柱穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

SPi 124（第74図）

III—51区の西端，SBi 05と重複して検出された柱穴である。平面形は円形で，径0.3m，深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色粘質土で，黒色土器椀(210)，土師器片が出土した。210は黒色土器B類椀で，11～12世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この柱穴は11～12世紀代のものと考えられる。

SPi 125（第74図）

III—51区の中央部，SBi 07の南側で検出された柱穴である。平面形は円形で，径0.25mを測る。埋土は褐灰色粘質土で，底面から土師器小皿（211），土師器杯（212）が出土した。平安時代のものである。出土遺物から，この柱穴は平安時代のものと考えられる。

SPi 126（第74図）

III—51区の東部，SBi 06の北部で検出された柱穴である。平面形は円形で，径0.25m，深さ0.25mを測る。埋土は褐灰色粘質土で，黒色土器椀(213)，土師器片が出土した。213は12世紀代のものである。出土遺物から，この柱穴は12世紀代のものと考えられる。

SPi 127（第74図）

III—31区の西部，SBi 12と重複して検出された柱穴である。新旧関係は不明である。平面形は円形で，径0.6m，深さ0.25mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器小皿（214～220）が出土した。鎌倉時代のものである。出土遺物から，この柱穴は鎌倉時代のものと考えられる。

SPi 128（第74図）

III—31区の西端で検出された柱穴である。平面形は楕円形で，長軸0.3m，短軸0.2m，深さ0.25mを

測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器小皿（221）が出土した。221は10世紀代のものである。出土遺物から，この柱穴は10世紀代のものと考えられる。

SPi 129（第74図）

III—31区の西部，SBi 12と重複して検出された柱穴である。新旧関係は不明である。平面形は楕円形で，長軸0.4m，短軸0.2m，深さ0.3mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器小皿（222）が出土した。出土遺物から，この柱穴は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

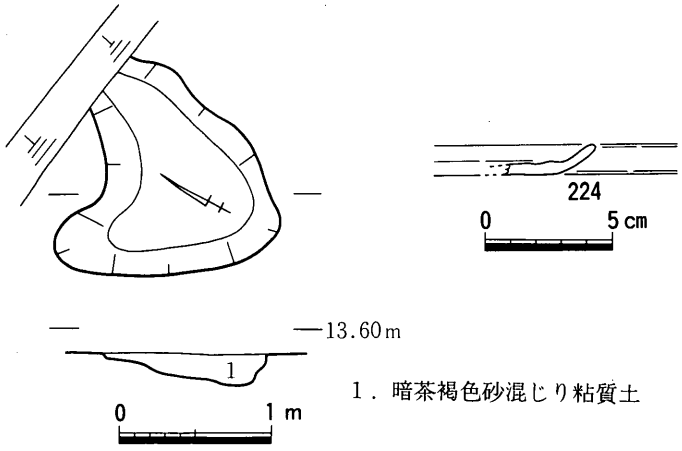
SPi 130（第74図）

III—32区の西端で検出された柱穴である。西部は攪乱溝によって削平を受ける。平面形は円形で，推定径0.3m，深さ0.45mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器小皿（223）が出土した。出土遺物から，この柱穴は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

③　土坑

SKi 16（第75図）

III—51区の西部で検出された土坑である。北部は攪乱のため削平を受ける。平面形はいびつなハート形を呈し，長軸1.5m，短軸1.0m，深さ0.2mを測る。埋土からは土師器小皿（224）が出土しただけである。出土遺物から，この土坑は12世紀から13世紀のものと考えられる。



第75図 SKi 16平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 17（第76図）

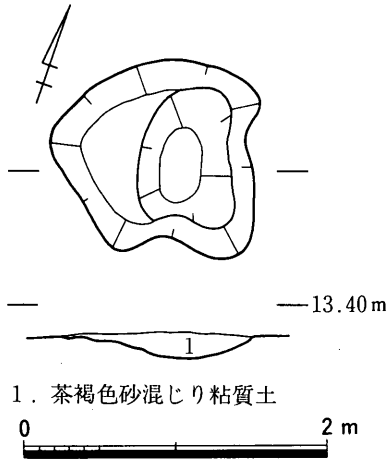
III—52区の北部で検出された土坑である。平面形はいびつな形を呈し，長軸1.4m，短軸1.2m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 18（第77図）

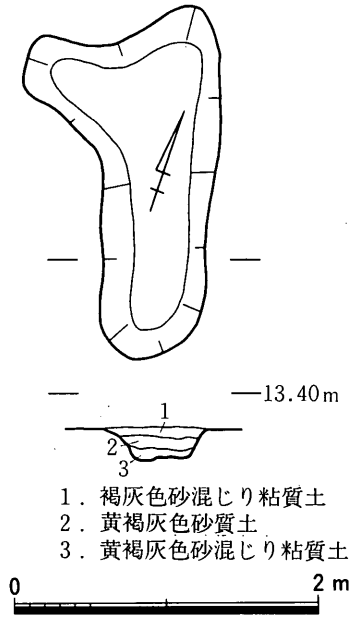
III—52区の北部SKi 17の南東部で検出された土坑である。平面形は張り出しをもつ，いびつな楕円形で，長軸2.3m，短軸0.7m，深さ0.25mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 19（第78図）

III—52区，SKi 18の南東で検出さ



第76図 SKi 17平・断面図（1/50）



第77図 SKi 18平・断面図（1/50）

れた土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸0.9m，深さ0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 20（第79図）

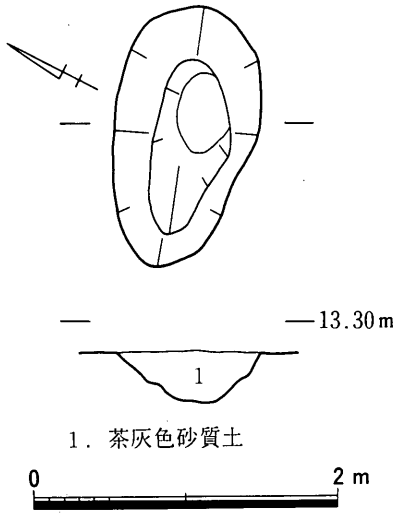
III—52区，SKi 19の東部で検出された土坑である。遺構の西部は江戸時代の土坑により削平を受ける。平面形はいびつな楕円形を呈するものと推定され，長軸1.4m以上，短軸1.1m，深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 21（第80図）

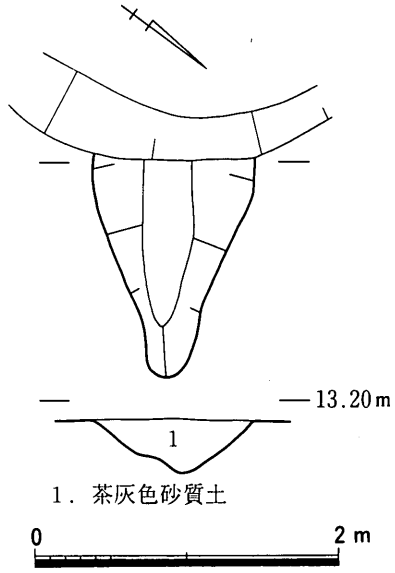
III—52区の西部で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.5mを測る。土師器片数点が出土した。埋土や出土遺物の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 22（第81図）

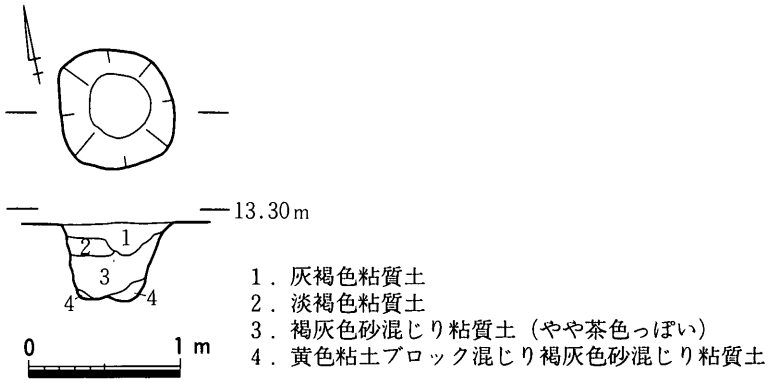
III—30区で検出された土坑である。平面形はいびつなハート形を呈し，長軸0.9m，短軸0.5m，深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，弥生時代から古墳時代前期の製塩土器（225），土師器小皿（226）が出土した。226は13世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は13世紀代のものと考えられる。



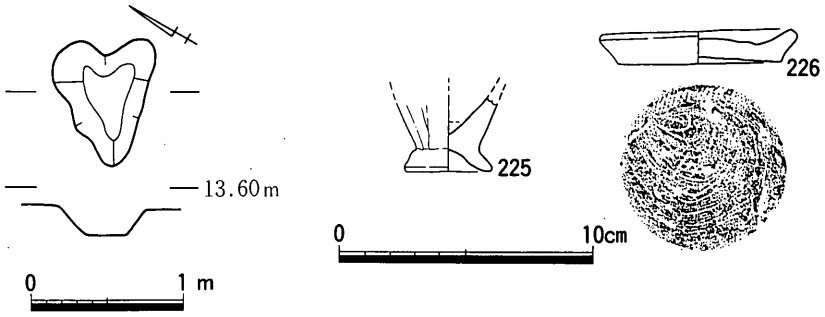
第78図　SKi 19平・断面図（1/50）



第79図　SKi 20平・断面図（1/50）



第80図　SKi 21平・断面図（1/50）

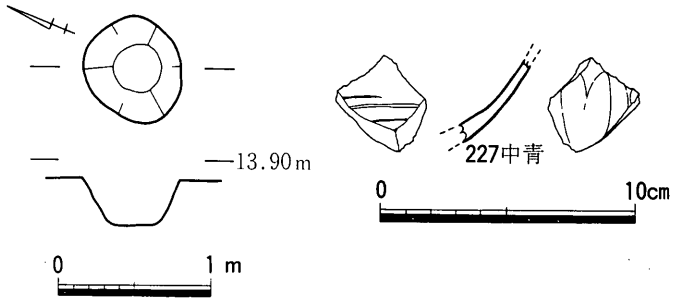


第81図　SKi 22平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 23（第82図）

III—30区で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.3mを測る。埋土は灰色粘質シルトである。中国産青磁碗（227），土壁（228）が出土した。227は外面に鎬連弁を施す。横田・森田氏のI—5・b類である[6]ことから，13世紀代のものと考えられる。228（図版掲載）は土壁の小片で

ある。径1㎜前後の筋状の痕跡が数条残る。出土遺物から，この土坑は13世紀代のものと考えられる。



第82図　SKi 23平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 24（第83図）

III－30区で検出された土坑である。平面形はほぼ楕円形を呈し，長軸3.0m，短軸2.5m，深さ0.6mを測る。土師器椀(229)，黒色土器椀（230・231），須恵器壺（232）が出土した。229は土師器椀である。229は高台部の形態から，12世紀代のものと考えられる。230・231は黒色土器椀A類である。いずれも形態から12世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は12世紀代のものと考えられる。

SKi 25（第84図）

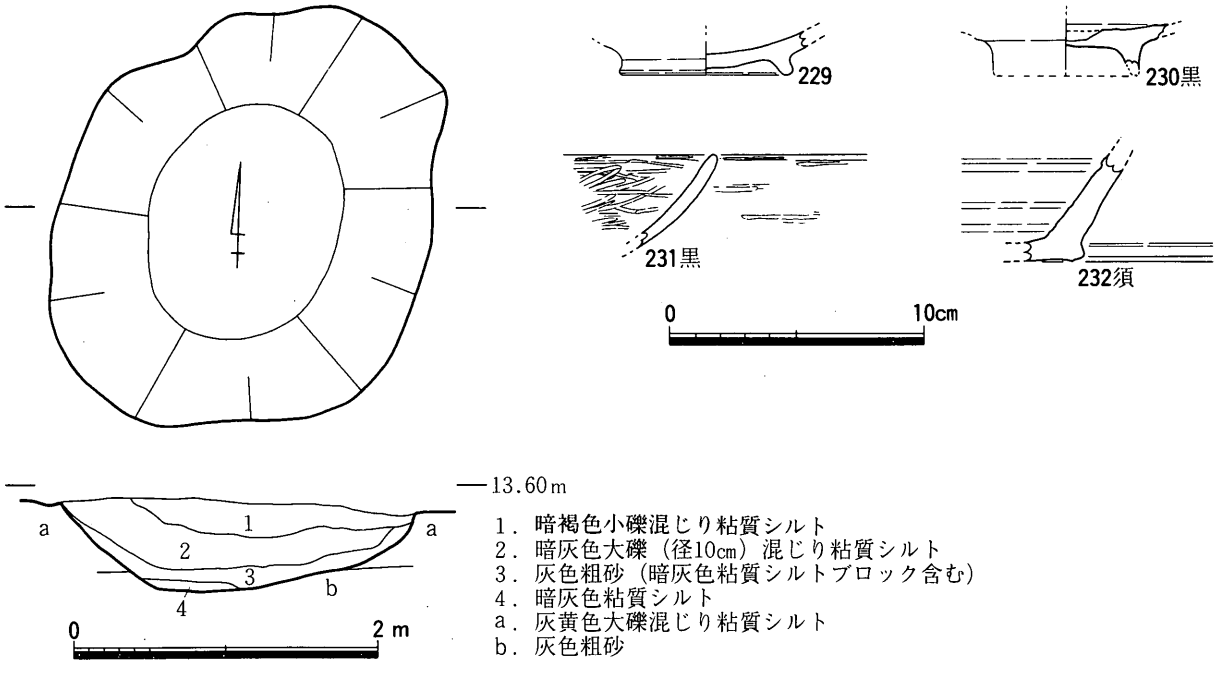
III－31区で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸1.3m，短軸0.5m，深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器杯（233）が出土した。出土遺物から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 26（第85図）

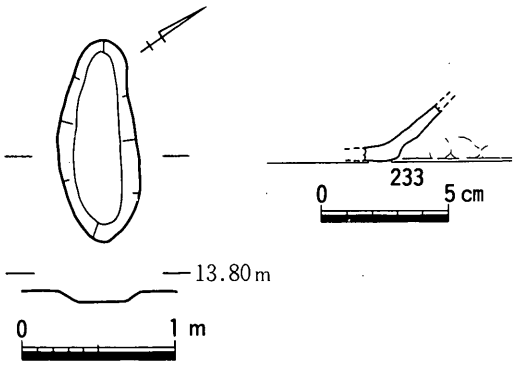
III－31区，SBi 08の北部で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸1.0m，深さ0.1mを測る。埋土は灰褐色小礫混じりシルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SKi 27（第86図）

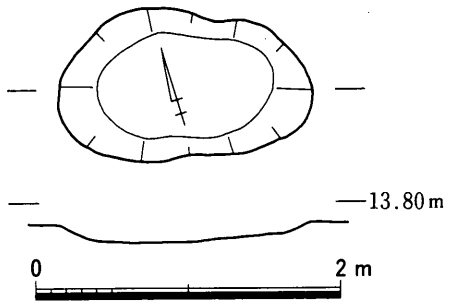
III－31区で検出された土坑である。SBi 10・SBi 11・SBi 12と重複するが，新旧関係は不明である。平面形はややいびつな円形を呈し，長軸1.1m，短軸0.9m，深さ0.5mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，



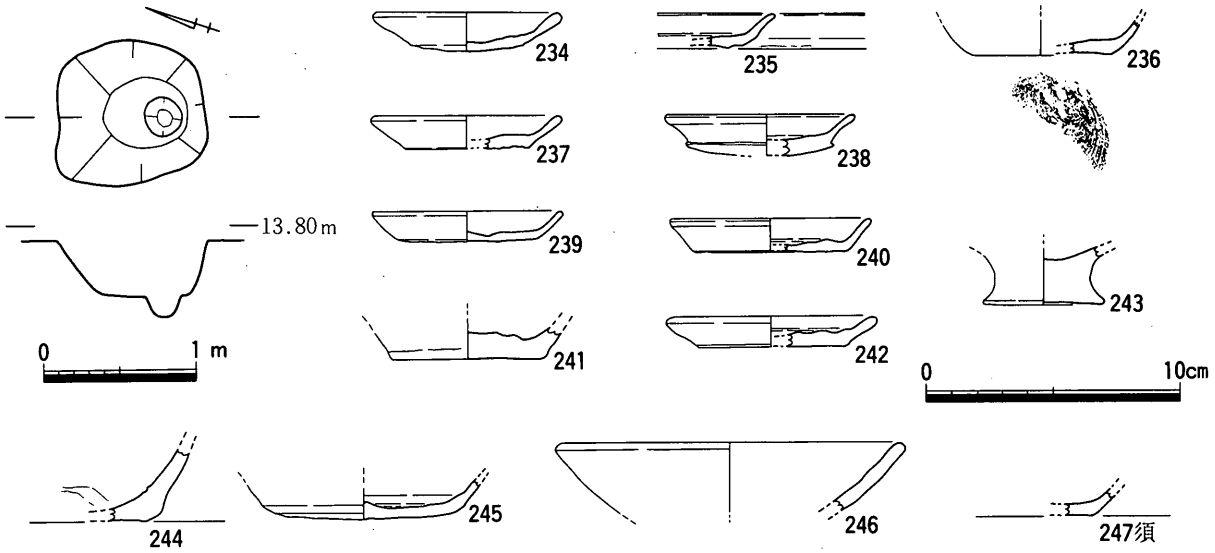
第83図　SKi 24平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



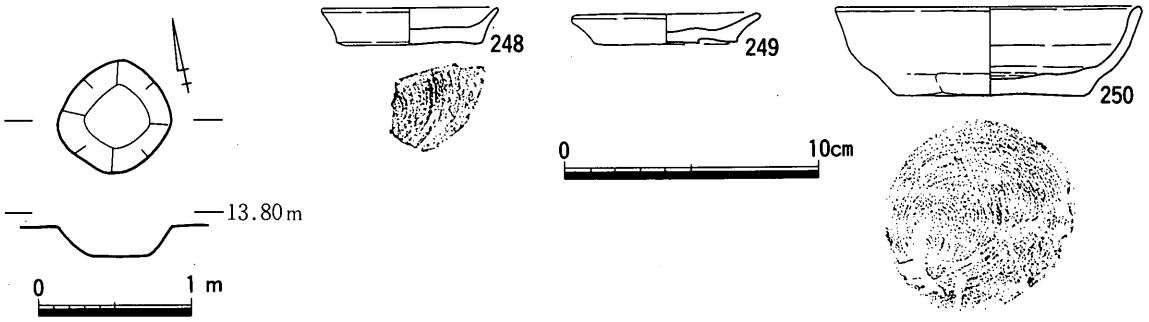
第84図　SKi 25平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)



第85図　SKi 26平・断面図(1/50)



第86図　SKi 27平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

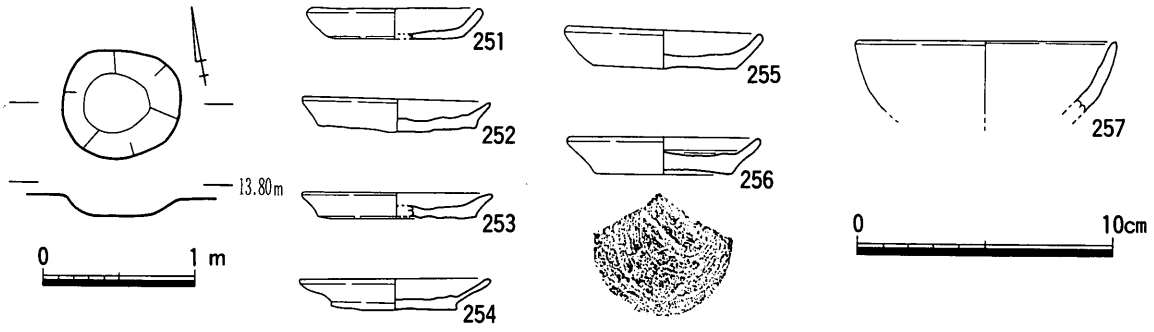


第87図　SKi 28平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

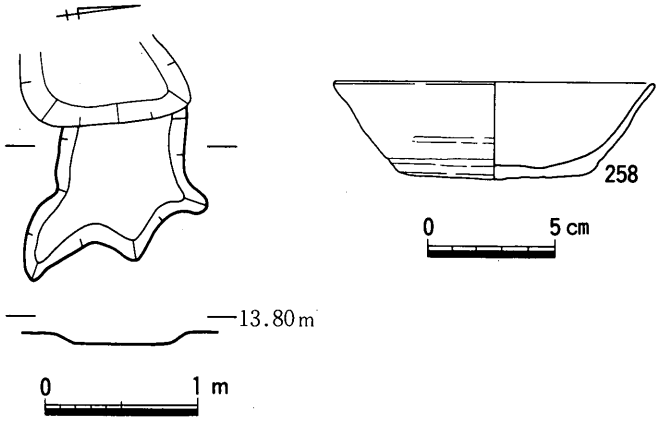
土師器小皿（234～242），土師器杯（243～246），須恵器杯（247）などが出土した。243は円盤状の高台をもつ。形態から，12世紀後半から13世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は12世紀後半から13世紀代のものと考えられる。

SKi 28（第87図）

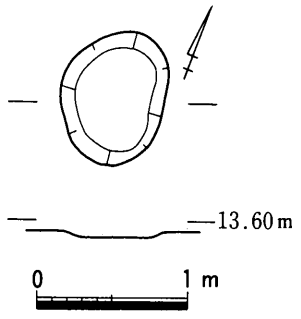
III—31区で検出された土坑である。SBi 10・SBi 11・SBi 12と重複するが，新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し，径0.7～0.8m，深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘質シルトである。土師器小皿(248・249)，土師器杯（250）が出土した。250は13世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は13世紀代のものと考えられる。



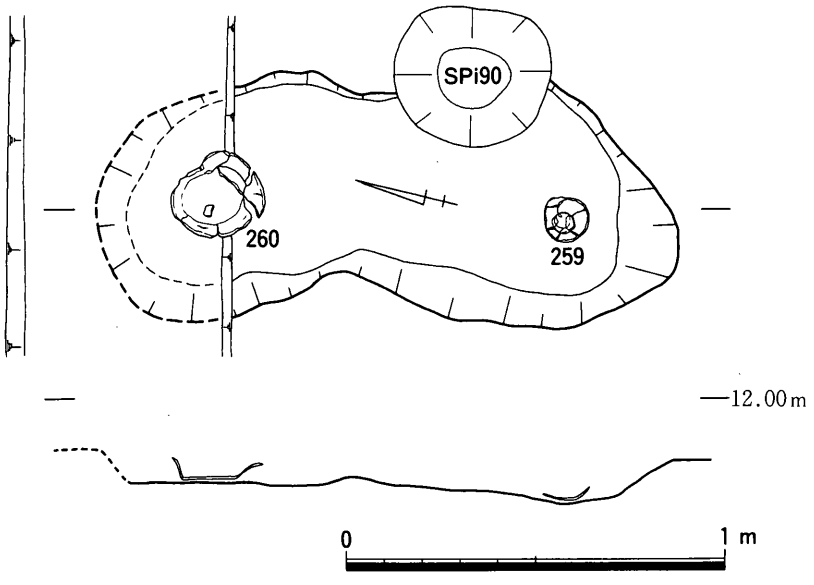
第88図　SKi 29平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

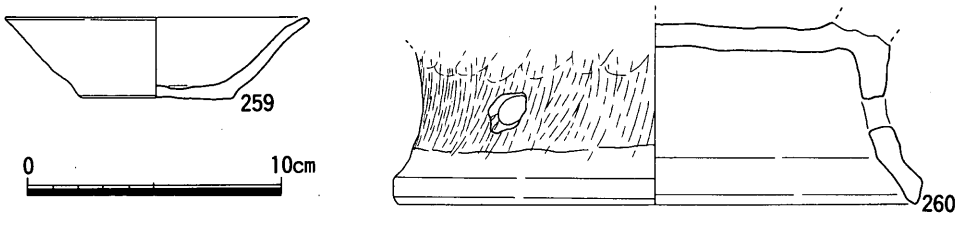


第89図　SKi 30平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)



第91図 SKi 32平・断面図(1/50)





第90図　SKi 31平・断面図（1/20），出土遺物実測図（1/3）

SKi 29（第88図）

III—31区で検出された土坑である。SBi 10・SBi 11・SBi 12と重複するが，新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.15mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器小皿（251～256），土師器杯（257）のほか土師器片が少量出土した。出土遺物から，この土坑は13世紀代のものと考えられる。

SKi 30（第89図）

III—31区，SBi 11の北側で検出された土坑である。土坑の西部は江戸時代以降の土坑に削平される。平面形はいびつで，長軸1.0m以上，短軸0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，土師器杯（258），須恵器片が出土した。258は10世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は10世紀代のものと考えられる。

SKi 31（第90図）

III—31区で検出された土坑である。土坑の北部は攪乱溝によって削平される。SBi 11を構成する柱穴SPi 90と重複する。埋土の差異から，SPi 90が新しく，SKi 31が古いことがうかがわれる。平面形はいびつな楕円形で，長軸推定1.5m，短軸0.5m，深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで，土師器杯（259）が口縁部を上に向けた状態で，土師器器種不明（260）が底部を下に向けた状態で出土した。259は10世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は10世紀代のものと考えられる。

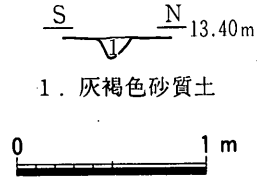
SKi 32（第91図）

III—28区の西端，弥生時代の掘立柱建物SBi 01の西側で検出された土坑である。平面形はややいびつな楕円形で，長軸0.9m，短軸0.7m，深さ0.05mを測る。埋土は灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

④　溝

SDi 25（第92図）

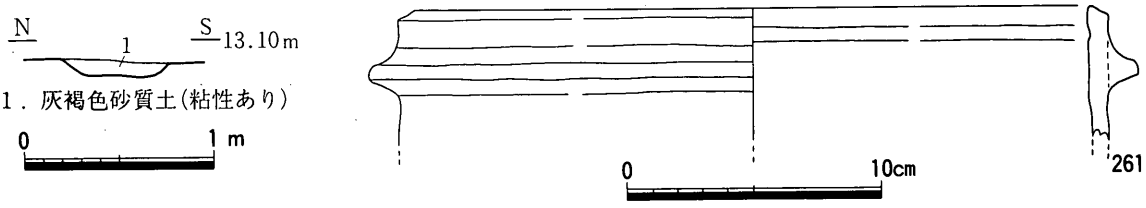
III—11区の西端で検出された溝である。東西に走り，溝の西部はH地区に連続する。一部途切れているが，幅0.15m，深さ0.1m，検出長5mを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。



第92図　SDi 25断面図（1/40）

SDi 26（第93図）

III—12区の東部で検出された溝である。東から西，南から北に向かってL字状に走る。溝の東端は調査区外に連続する。幅0.6m，深さ0.1m，検出長25mを測る。土師器羽釜（261）が出土した。261は口縁部の形態から，12世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この溝は12世紀代のものと考えられる。



第93図　SDi 26断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SDi 27（第94図，図版27）

III—12区の北部で検出された溝である。東から西に向かって走る。溝の東端は調査区外に，西端はG地区に連続する。幅0.8m，深さ0.2m，検出長13mを測る。土師器片数点が出土した。埋土や出土遺物の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 28（第95図）

III—51区の南西部で検出された溝である。南西から北東に向かって走る。幅0.3m，深さ0.1m，検出長5mを測る。土師器杯（262），土師器椀（263），須恵器片が出土した。263は高台部の形態や胎土に白色砂粒を含むことから早島式土器椀と考えられる。高台部の形態から，13世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この溝は13世紀代のものと考えられる。

SDi 29（第96図）

III—51区の西部で検出された溝である。南から北に向かって走る。幅0.6m，深さ0.1m，検出長9mを測る。土師器羽釜・小皿片数点が出土した。出土遺物から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 30（第97図）

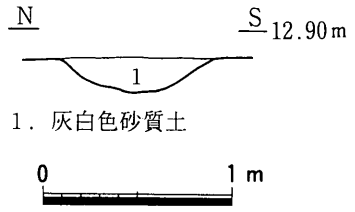
III—51区の西部，SDi 29の南部で検出された溝である。南から北に向かって走る。幅0.8m，深さ0.05m，検出長4mを測る。土師器片が出土した。埋土や出土遺物の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 31（第98図）

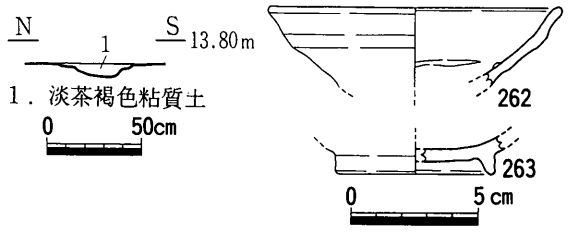
III—52区の東端で検出された溝である。南から北に走る。北部は小溝（幅0.5m，深さ0.1m）と重複するが，土層の堆積状況からSDi 31のほうが古いことがうかがわれる。幅0.2m，深さ0.05m，検出長6.6mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 32（第99図）

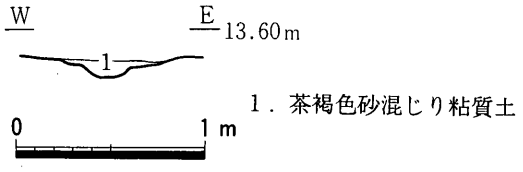
III—52区の西部で検出された溝である。東西に走



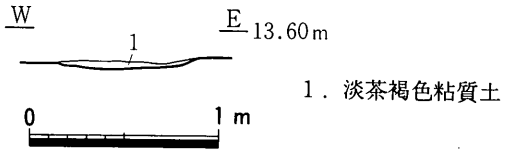
第94図　SDi 27断面図（1/40）



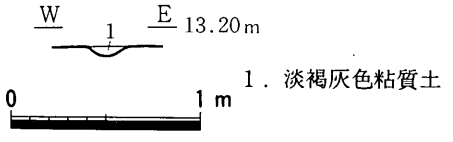
第95図　SDi 28断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



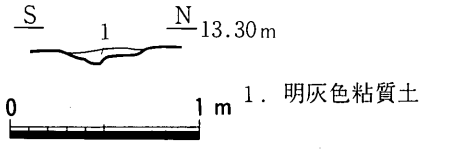
第96図　SDi 29断面図（1/40）



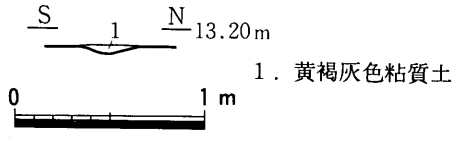
第97図　SDi 30断面図（1/40）



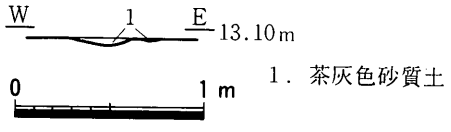
第98図　SDi 31断面図（1/40）



第99図　SDi 32断面図（1/40）

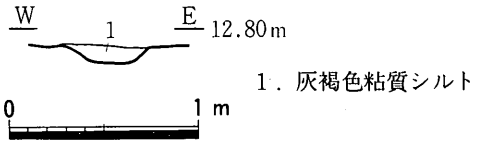


第100図　SDi 33断面図（1/40）

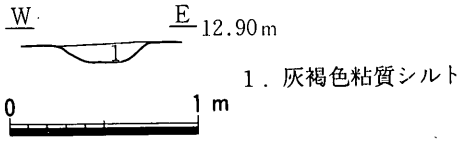


第101図　SDi 34断面図（1/40）

る。幅0.4m，深さ0.1m，検出長４mを測る。土師器椀片が出土した。出土遺物から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。



第102図　SDi 35断面図(１/40)



第103図　SDi 36断面図(１/40)

SDi 33（第100図）

III—52区南東部で検出された溝である。東西に走る。SDi 34と重複するが，埋土の差異から，SDi 33が新しいことがうかがわれる。幅0.3m，深さ0.05m，検出長3.5mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 34（第101図）

III—52区東部で検出された溝である。南から北に向かって走る。SDi 33と重複するが，埋土の差異から，SDi 34が古いことがうかがわれる。幅0.3m，深さ0.1m，検出長6.5mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 35（第102図，図版33）

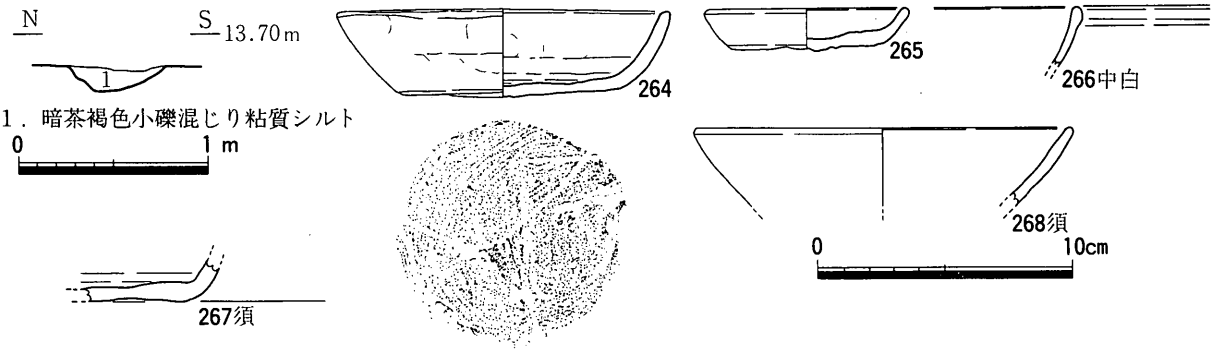
III—13区南部からIII—22区・III—21区東部で検出された溝である。III—13区とIII—22区の間で途切れるが，同じ埋土で，同じ方向に走ることから，同一溝であると考えられる。南東から北に向かってやや東向きに湾曲しながら走る。幅0.4～0.6m，深さ0.1m，検出長85mを測る。土師器片・黒色土器片が数点出土しただけで，図化できるものはなかった。出土遺物から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 36（第103図）

III—13区南東端からIII—23区東部，III—22区南部で検出された溝である。III—13区とIII—23区の間で途切れるが，同じ埋土であることや，同じ方向に走ることから，同一溝であると考えられる。南東から北西に向かってやや湾曲しながら走る。幅0.4～0.5m，深さ0.1m，検出長58mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 37（第104図，図版33）

III—30区で検出された溝である。西部は江戸時代の土坑SKi 52に削平される。西から北に向かってL字状に屈曲して走る。検出長11m，幅0.3～0.8m，深さ0.1mを測る。土師器杯(264)，土師器小皿(265)，中国産白磁碗（266），須恵器杯（267），須恵器椀（268），土師器片数点，中国産青磁片が出土した。266は中国産白磁碗で，口縁部が玉縁である。横田・森田氏分類の白磁II類で，11世紀から12世紀のものと

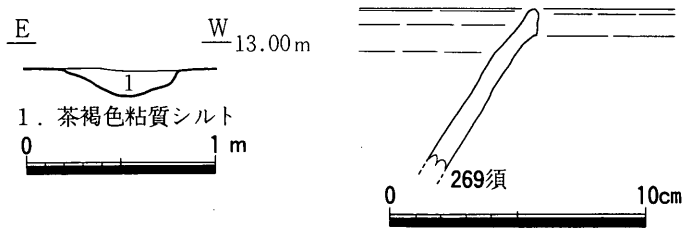


第104図　SDi 37断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３）

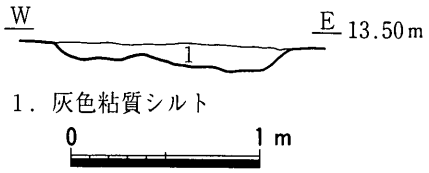
考えられる。268は須恵器椀である。12世紀後半のものと考えられる。出土遺物から，この溝は12世紀後半のものと考えられる。

SDi 38（第105図，図版34）

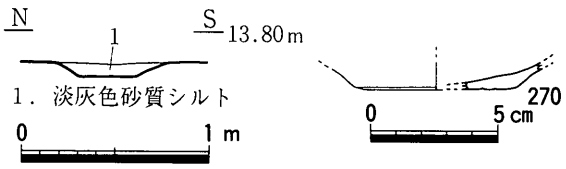
III—24区・III—21区で検出された溝である。南から北に向かって直線的に走る。III—24区とIII—21区の間で途切れるが，同じ埋土であることや，同方向に走ることから，同じ溝であると考えられる。幅0.6m，深さ0.15m，検出長18mを測る。遺物は須恵器こね鉢（269）が出土しただけである。269は軟質である。香川県綾歌郡綾南町付近で生産されたものである。口縁端部に面をもち，体部が直線的であることから，12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。出土遺物から，この溝は12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。



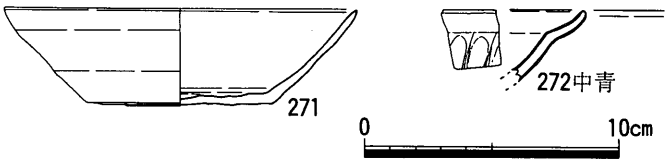
第105図　SDi 38断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第106図　SDi 39断面図（1/40）



第107図　SDi 40断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第108図　平安・鎌倉時代包含層出土遺物実測図（1/3）

SDi 39（第106図，図版34）

III—28区・III—29区で検出された溝である。III—29区で一部途切れる。南から北に向かって走る。III—29区での断面形をみると2個の凹みがみられ，III—28区では溝は近接して2条に分岐することから，本来は2条の溝であったと考えられる。検出長46m，幅0.3～1.2m，深さ0.1～0.15mを測る。土師器・須恵器片が少量出土した。出土遺物から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

SDi 40（第107図）

III—31区，SBi 11の北東部で検出された溝である。南西から北に向かって湾曲しながら走る。検出長5m，幅0.5m，深さ0.1mを測る。土師器小皿（270）が出土した。出土遺物から，この溝は平安時代から鎌倉時代のものと考えられる。

⑤　包含層出土遺物（第108図）

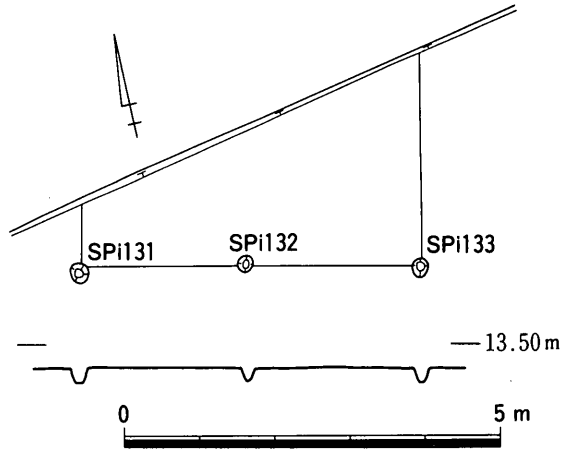
III—31区では江戸時代の遺構面である暗褐色粘質シルト層から土師器杯（271），III—27区の同層からは中国産青磁杯（272）が出土した。271は10世紀代のものと考えられる。272は口縁部が外方に屈曲し，上方につまみ出す。横田・森田分類の龍泉窯系杯III—3類で，[6] 13～14世紀のものと考えられる。

3．江戸時代以降

① 掘立柱建物

SBi 14（第109図）

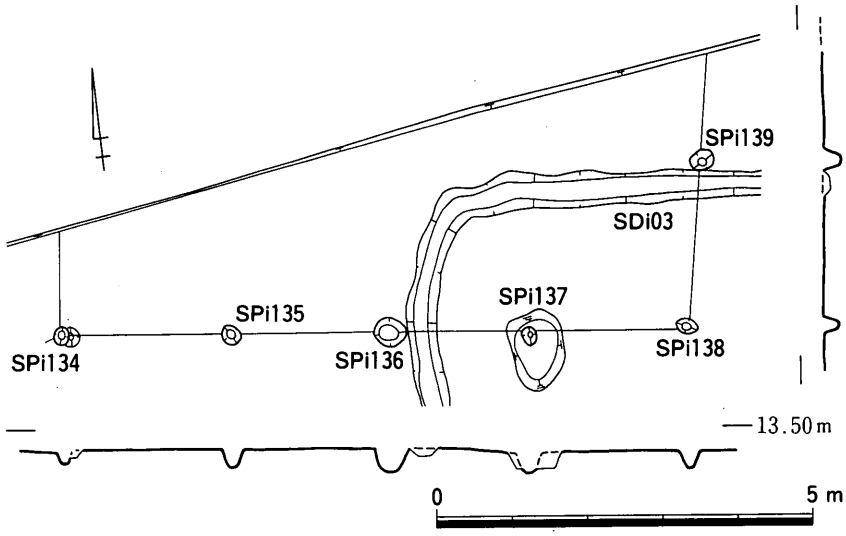
III—11区の北部で検出された掘立柱建物である。北部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物規模は桁行2間（4.5m）で，梁間は2.7m以上，棟方向はW13°Nを測る。桁行の柱間は2.2～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



第109図　SBi 14平・断面図（1/100）

SBi 15（第110図）

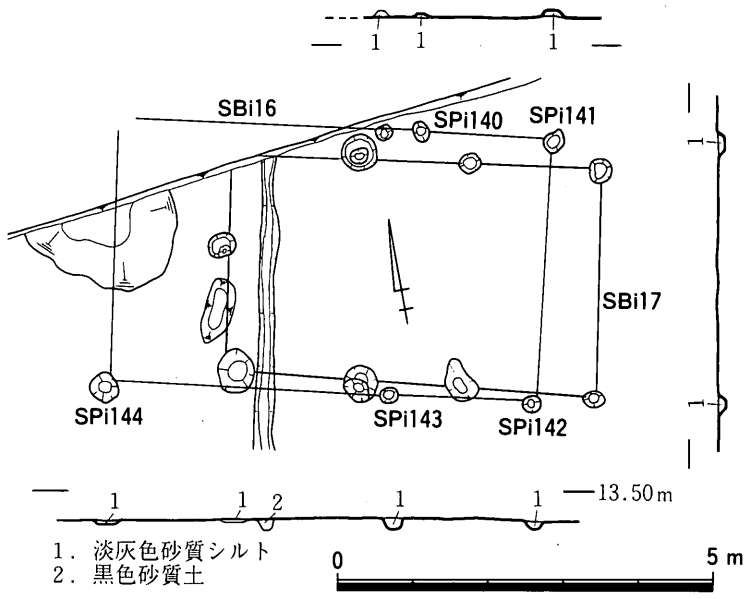
III—11区で検出された掘立柱建物である。北部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物の中央部を弥生時代の溝SDi 03が走る。建物規模は桁行4間（8.3m），梁間1間以上（3.6m以上），棟方向はW5°Nを測る。桁行の柱間は1.9～2.2m，梁間の柱間は2.2mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 139から江戸時代以降の土師質土器片1点が出土したことから，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



第110図　SBi 15平・断面図（1/100）

SBi 16（第111図）

III—11区で検出された掘立柱建物である。北西部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物の中央部を弥生時代の溝が南北に走る。また，江戸時代の掘立柱建物SBi 17と重複するが，柱穴が重複しないため



第111図　SBi 16平・断面図（1/100）

新旧関係は不明である。建物規模は桁行3間（5.7m），梁間1間（3.4m），棟方向はW12°Nを測る。桁行の柱間は1.8～1.9mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.4m，深さ0.1mを測る。SPi 142からは国産磁器染付片1点が出土したことや埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 17（第112図）

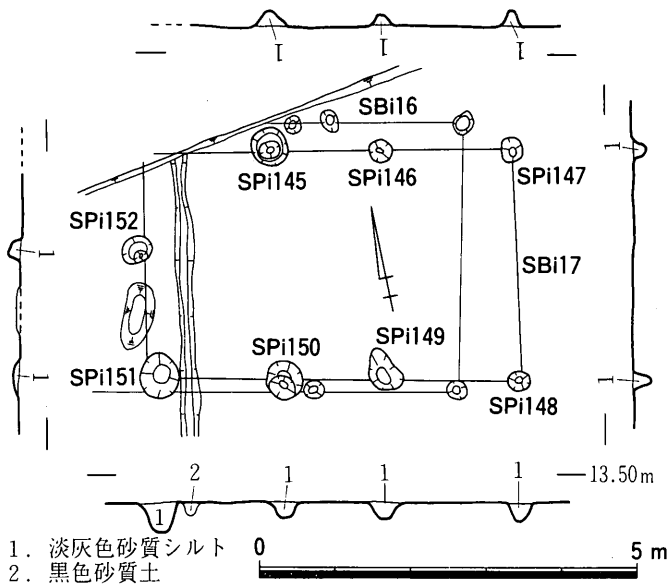
III—11区で検出された掘立柱建物である。北西部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物の西部を弥生時代の溝が南北に走る。また，江戸時代の掘立柱建物SBi 16と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物規模は桁行3間(4.8m)，梁間2間(3.0m)，棟方向はW12°Nを測る。桁行の柱間は1.3～1.8mを測る。梁間の柱間は1.6mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.2～0.4mを測る。SPi 145からは土師質土器片が出土した。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 18（第113図）

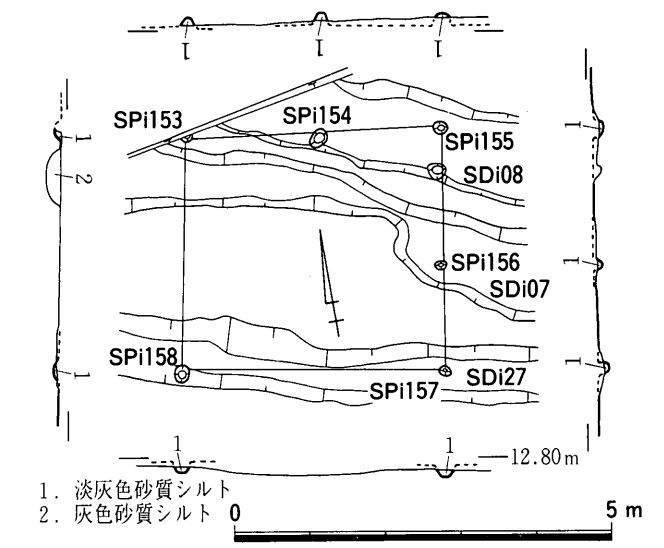
III—12区，北東隅で検出された掘立柱建物である。建物の北部を弥生時代の溝SDi 07・SDi 08が東西に走り，建物の南部を平安時代から鎌倉時代の溝SDi 27が東西に走る。建物規模は桁行2間(3.5m)，梁間2間（2.9～3.1m），棟方向はW10°Nを測る。桁行の柱間は1.6～1.7mを測る。梁間の柱間は1.3～1.7mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.1～0.2m，深さ0.1～0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 19（第114図）

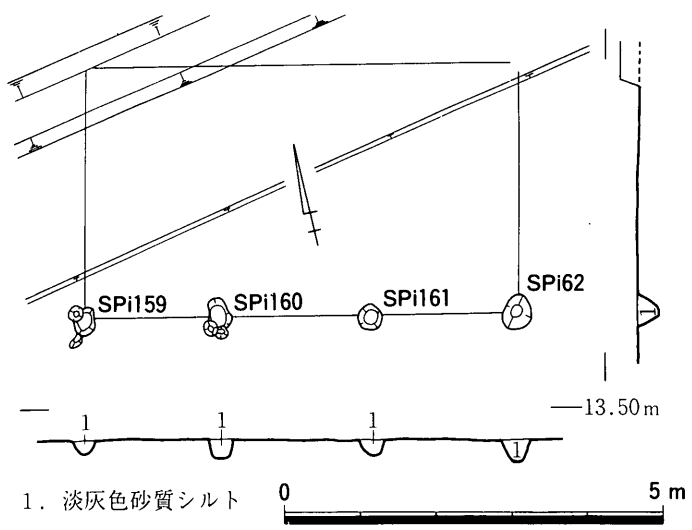
III—12区で検出された掘立柱建物で



第112図　SBi 17平・断面図（1/100）



第113図　SBi 18平・断面図（1/100）

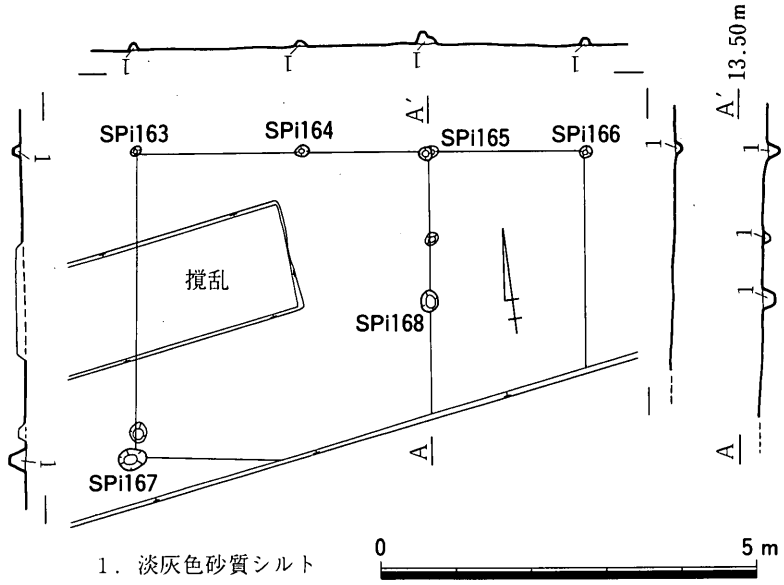


第114図　SBi 19平・断面図（1/100）

ある。建物の北部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物規模は桁行３間（5.7m），棟方向はW13°Nを測る。桁行の柱間は1.8～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.3～0.4m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 162から国産磁器染付片が１点出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 20（第115図）

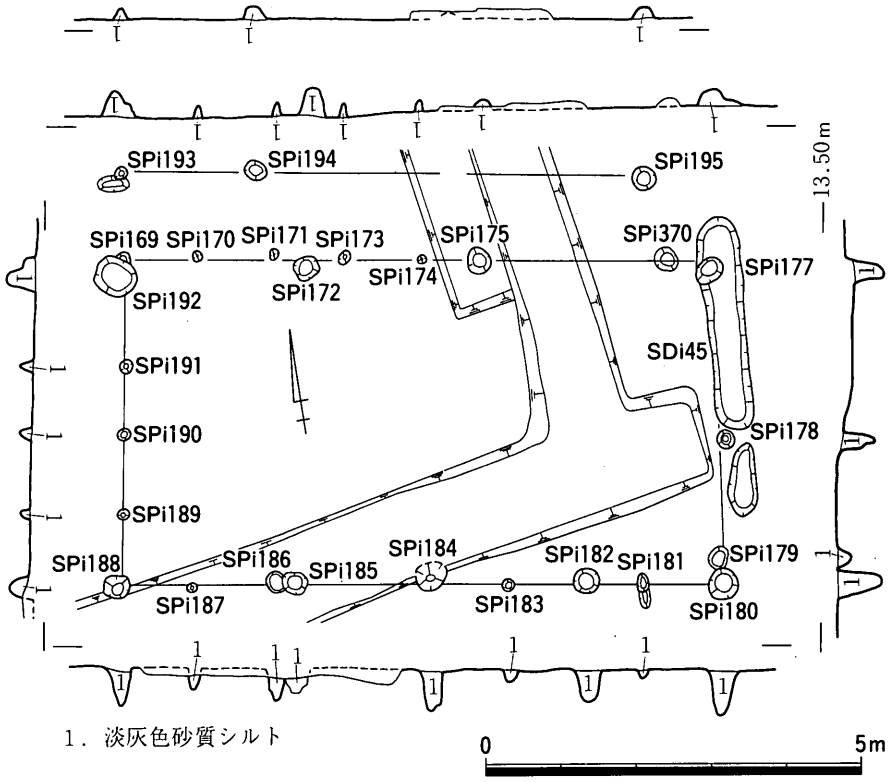
III—11区で検出された掘立柱建物である。建物の南部は調査区外に連続するため全体は不明である。建物規模は桁行３間（6.0m），梁間１間（4.0m），棟方向はW６°Nを測る。桁行の柱間は1.7～2.2mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.1～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。SPi 166からは土師質土器焙烙片１点が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



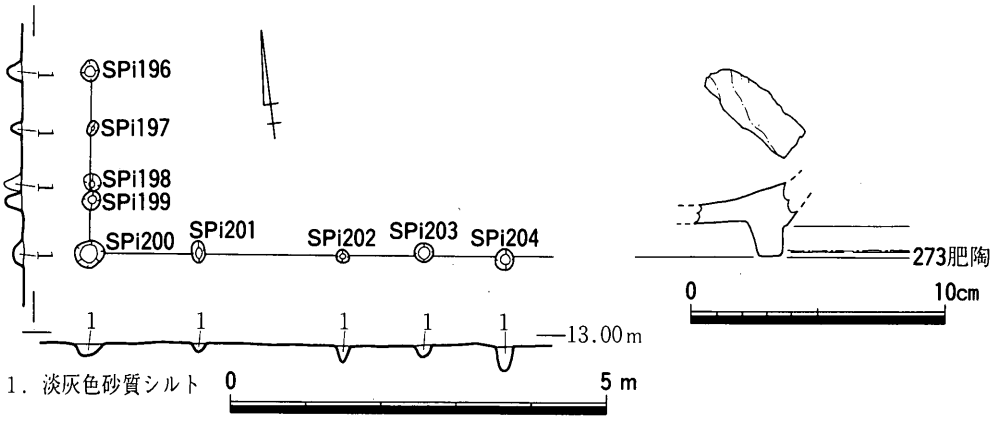
第115図　SBi 20平・断面図（1/100）

SBi 21（第116図，図版34・35）

III—24・III—52区で検出された掘立柱建物である。建物の中央部をＬ字状に深さ0.1～0.2の撹乱溝が走るため，建物の一部は不明である。北側には庇が付き，建物規模は桁行４間(7.8～8.0m)，梁間２間（4.2m），棟方向はW８°Nを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。桁行は大（径0.3～0.5m，深さ0.4～0.6m）・小（径0.1m，深さ0.1～0.2m）の２種類の大きさの柱穴で構成される。梁間の柱穴も大・小２種類の大きさがみられる。SPi



第116図　SBi 21平・断面図（1/100）



第117図　SBi 22平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

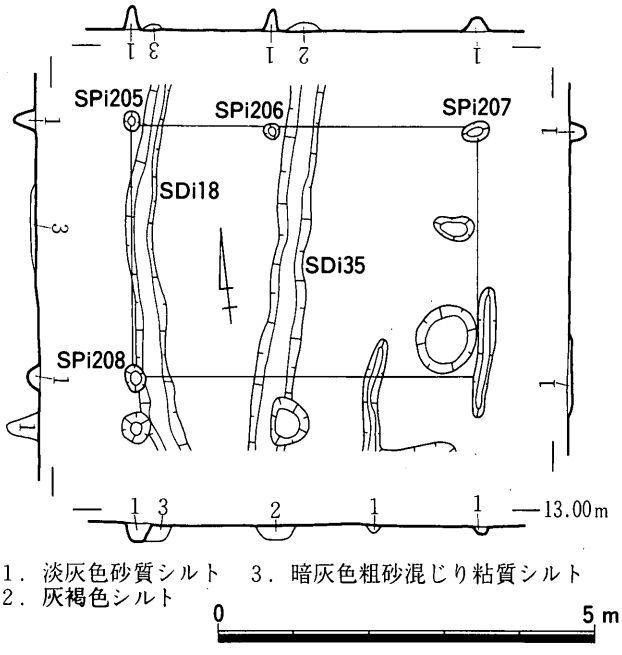
193から土師質土器片1点が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 22（第117図）

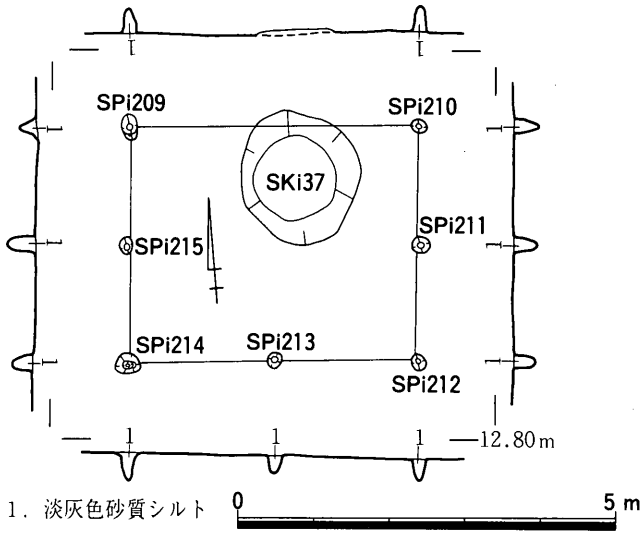
III—21区で検出された掘立柱建物である。建物の北側・東側は検出できなかった。建物規模は桁行4間以上（5.5m以上），梁間3間以上（2.3m以上），棟方向はW 8°Nを測る。桁行の柱間は1.1～2.0m，梁間の柱間は0.7～1.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.15～0.3m，深さ0.15～0.3mを測る。SPi 202から肥前陶器鉢(273)が出土した。273は高台部の断面形が方形であることから，17世紀後半から18世紀初頭のものと考えられる。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は17世紀後半以降のものと考えられる。

SBi 23（第118図）

III—21区，SBi 22の東側で検出された掘立柱建物である。建物西部は弥生時代の溝SDi 18，中央部を平安時代から鎌倉時代の溝SDi 35が走る。建物規模は桁行2間(4.6m)，梁間1間（3.3m），棟方向はW 8°Nを測る。桁行の柱間は1.8～2.6mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



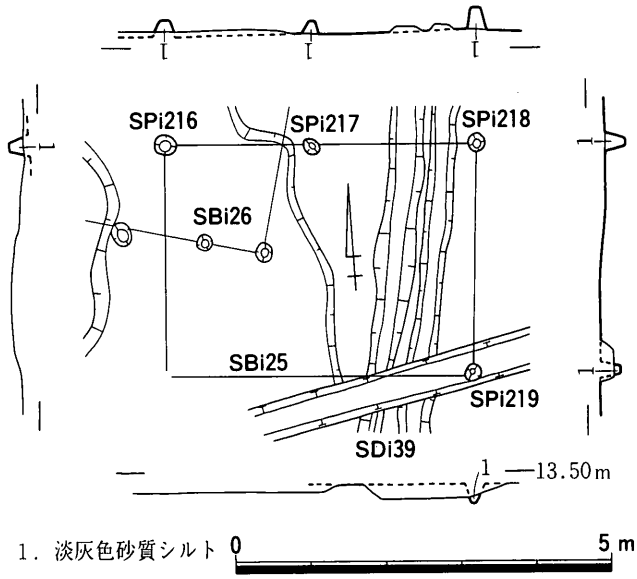
第118図　SBi 23平・断面図（1/100）



第119図　SBi 24平・断面図（1/100）

SBi 24（第119図）

III—13区の北端で検出された掘立柱建物である。建物北部には江戸時代の土坑SKi 37が重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物規模は桁行2間（3.8m），梁間2間(3.0～3.1m)，棟方向はW 5°Nを測る。桁行の柱間は1.9m，梁間は1.5mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.3～0.4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



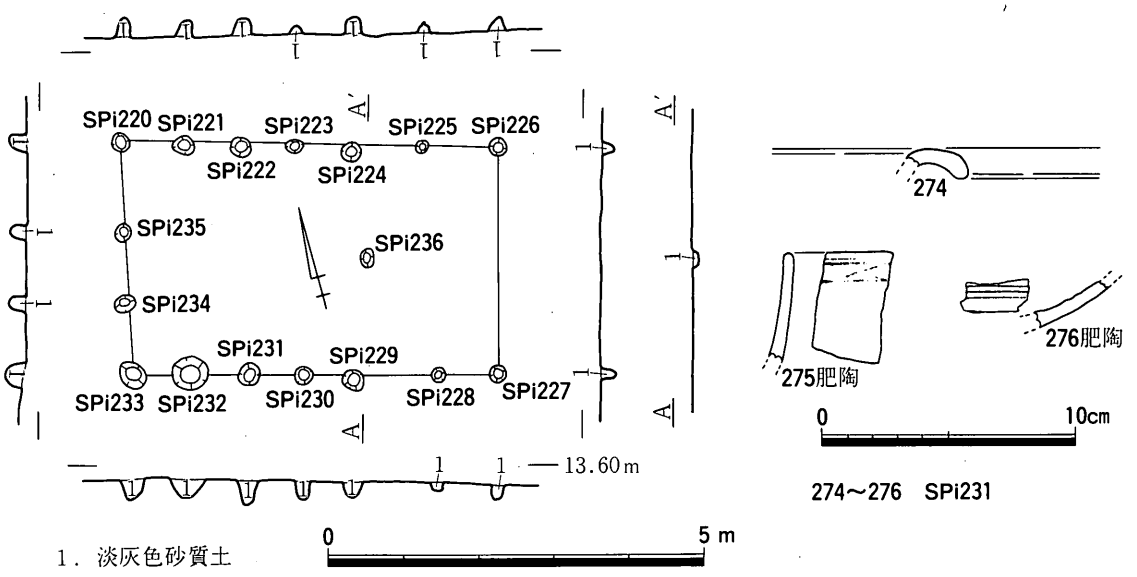
第120図　SBi 25平・断面図（1/100）

SBi 25（第120図）

III—28区で検出された掘立柱建物である。建物北西部では江戸時代の掘立柱建物SBi 26と重複するが，新旧関係は不明である。また，建物の東部には平安時代から鎌倉時代の溝SDi 39が走る。建物規模は桁行2間（4.1m），梁間1間（3.0m），棟方向はW 3°Nを測る。桁行の柱間は2.0～2.2mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 219から土師質土器片が1点出土した。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 26（第121図，図版36）

III—28区で検出された掘立柱建物である。建物の南東部で江戸時代の掘立柱建物SBi 25と重複するが，新旧関係は不明である。建物規模は桁行6間（4.8～5.0m），梁間3間（3.0～3.1m），棟方向はW 14°Nを測る。桁行の柱間は0.7～1.0m，梁間は0.9～1.1mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 231からは土師質土器焙烙（274），肥前陶胎染付碗（275），肥前陶器刷毛目皿(276)，土師質土器片，SPi 233からは陶器片・土師質土器片が出土した。275は18世紀前

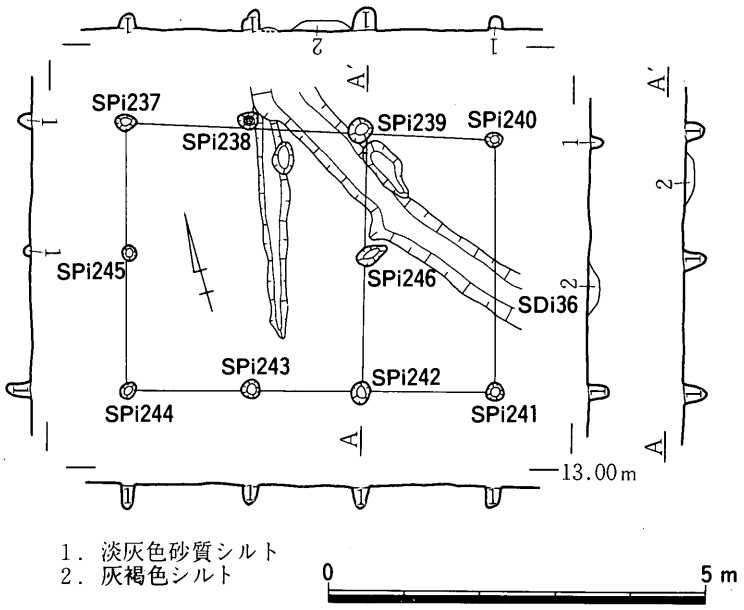


第121図　SBi 26平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

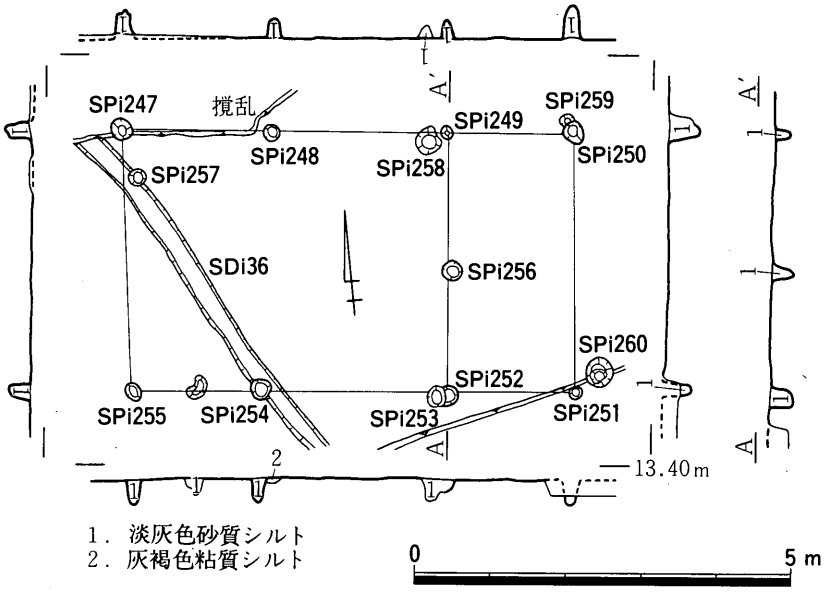
半，276は体部破片であるため詳細な時期は不明であるが，17世紀後半から18世紀前半のものである。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は18世紀前半以降のものと考えられる。

SBi 27（第122図，図版35・36）

III—22区北部で検出された掘立柱建物である。建物の北東部を平安時代から鎌倉時代の溝SDi 36が東南から北西に向かって走る。建物規模は桁行3間（4.9m），梁間2間(3.3～3.5m)，棟方向はW10°Nを測る。桁行の柱間は1.5～1.8m，梁間は1.7～1.8mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



第122図　SBi 27平・断面図（1/100）



第123図　SBi 28平・断面図（1/100）

SBi 28（第123図，図版36・37）

III—22区南部で検出された掘立柱建物である。江戸時代の掘立柱建物SBi 29と重複する。また，建物の南西部を平安時代から鎌倉時代の溝SDi 36が走る。建物規模は桁行3間（5.9～6.0m），梁間2間（3.4～3.5m），棟方向はW4°Nを測る。桁行の柱間は1.7～2.5mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2～0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

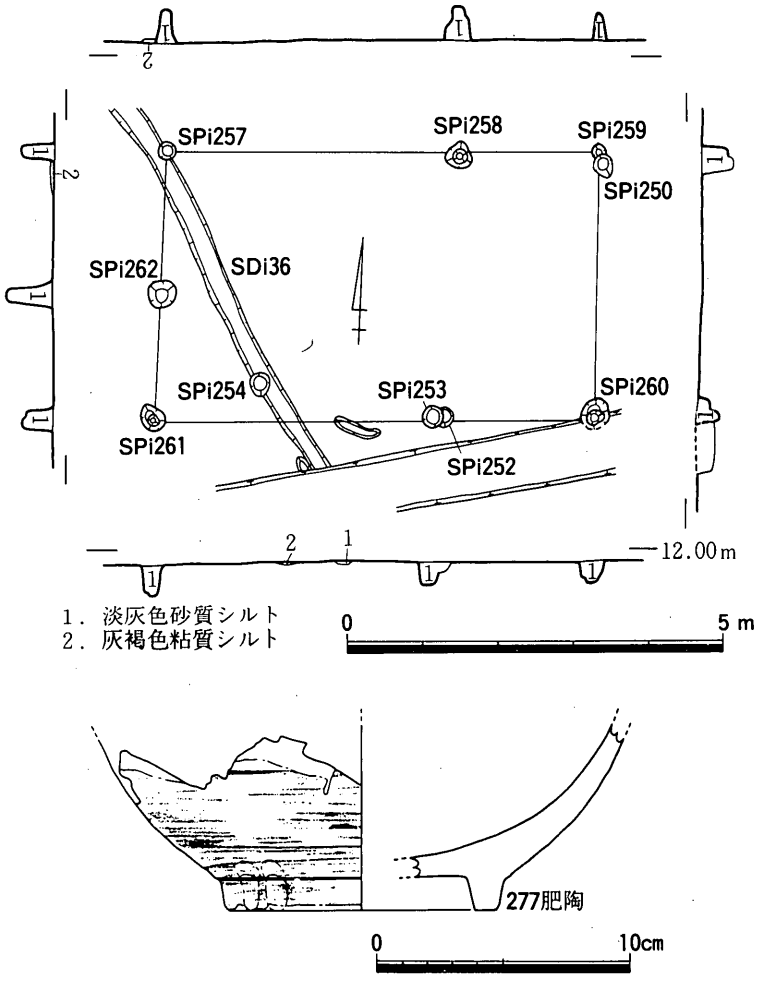
SBi 29（第124図，図版36・37）

III—22区南部で検出された掘立柱建物である。江戸時代の掘立柱建物SBi 28と重複する。また，建物の南西部を平安時代から鎌倉時代の溝SDi 36が走る。建物規模は桁行2間（5.7～5.9m），梁間2間（3.3～3.5m），棟方向はW3°Sを測る。桁行の柱間は1.9～4.0m，梁間は1.6～3.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.4～0.6mを測る。SPi 259からは肥前陶器鉢(277)，SPi 257からは土師質土器片が出土した。277は高台部の断面形から17世紀後半から18世紀初頭に生産されたもの

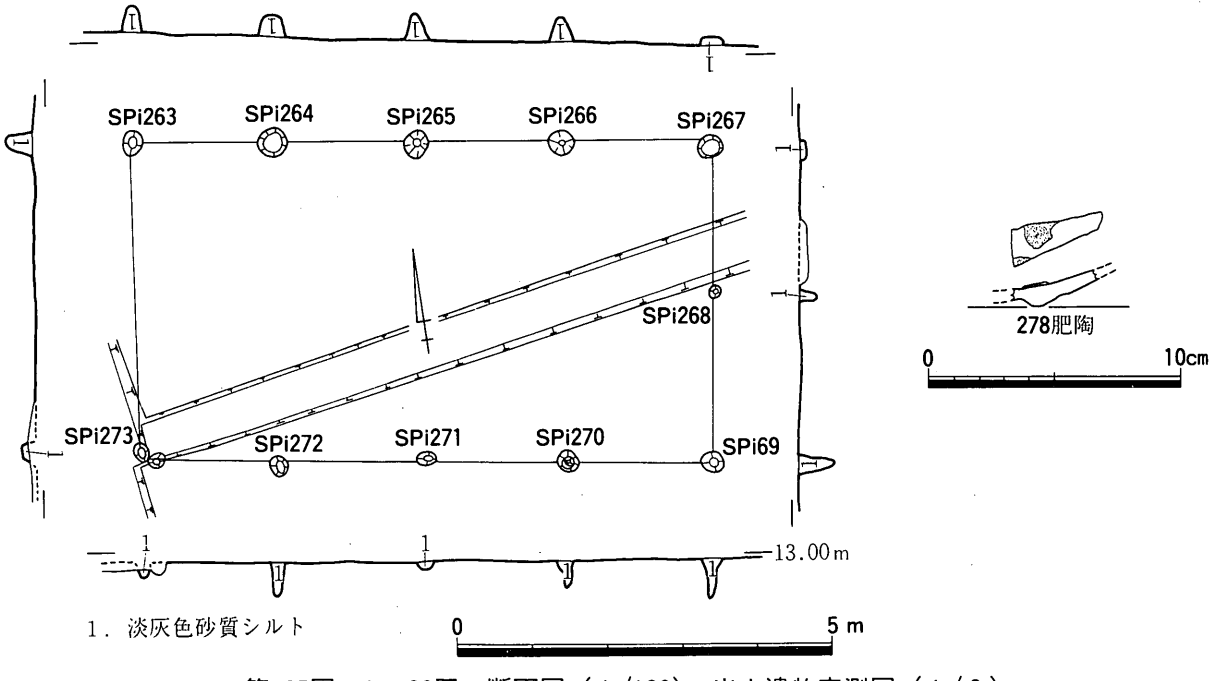
と考えられる。出土遺物から，この建物は17世紀後半以降のものと考えられる。

SBi 30（第125図，図版37）

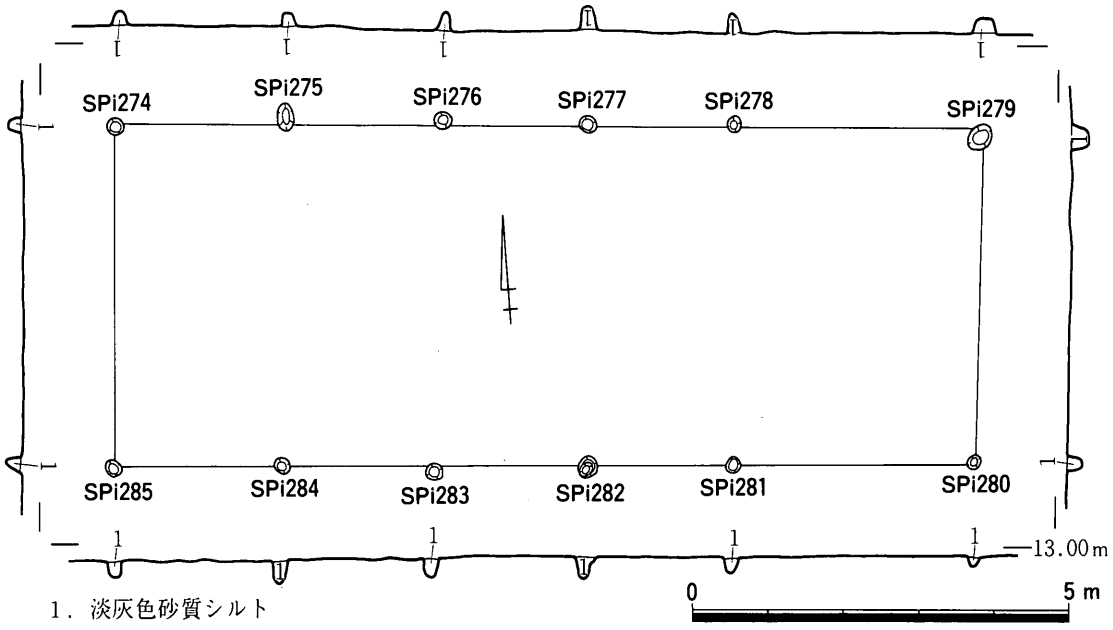
III—22区・III—23区で検出された掘立柱建物である。江戸時代の掘立柱建物SBi 34と重複するが，柱穴が重複しないため，新旧関係は不明である。建物規模は桁行4間（7.6～7.7m），梁間2間（4.2m），棟方向はW 8°Nを測る。桁行の柱間は1.9～2.0m，梁間は1.9～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.5mを測る。SPi 263からは肥前陶器鉄釉皿（278），土師質土器片，SPi 263からは土師質土器片，SPi 267からは陶器片が出土した。278は砂目積みがみられることから，1600～1630年に生産されたものと考えられる。出土遺物から，この建物は17世紀前半以降のもの



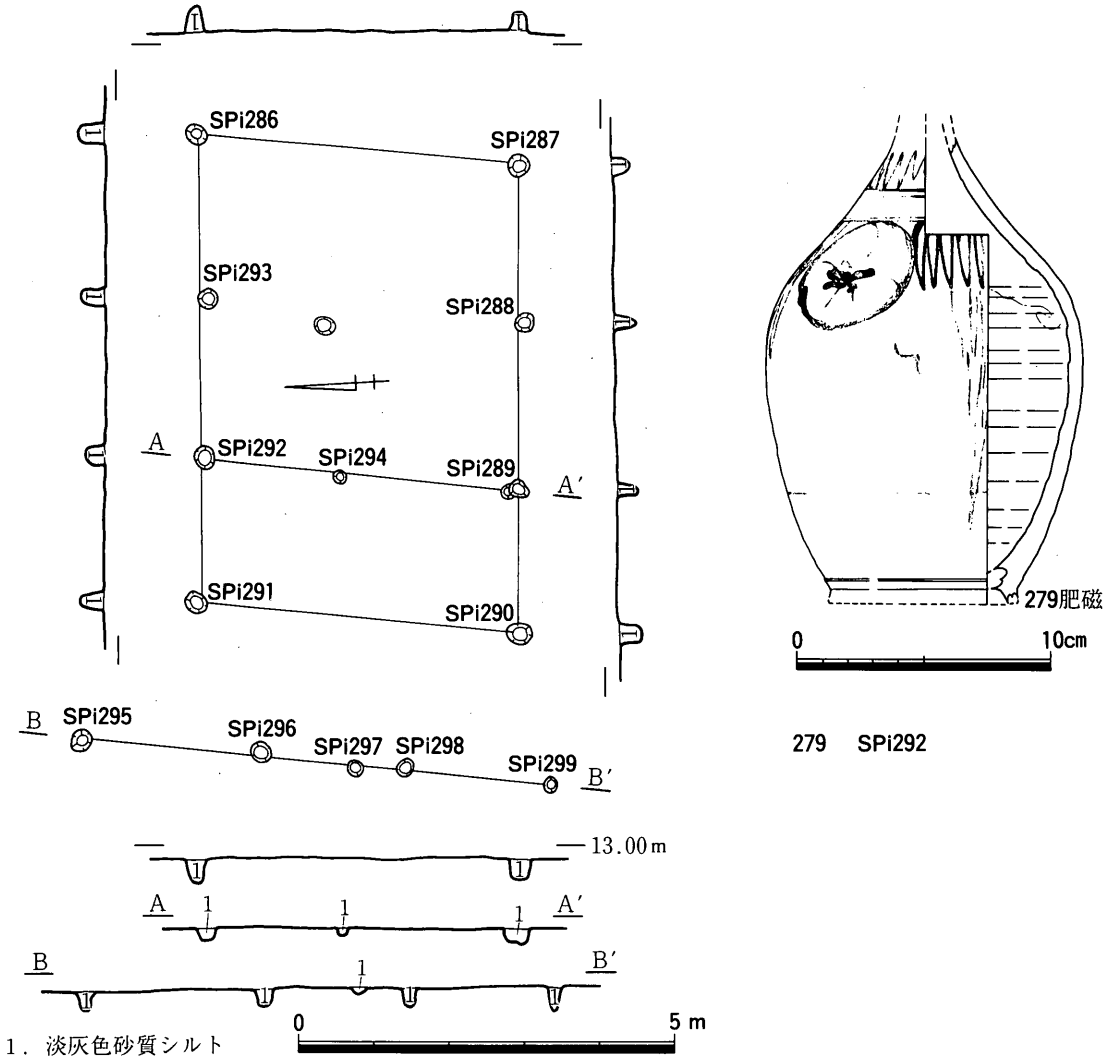
第124図　SBi 29平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）



第125図　SBi 30平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）



第126図　SBi 31平・断面図（1/100）



第127図　SBi 32平・断面図（1/100），出土遺物実測図（1/3）

と考えられる。

SBi 31（第126図，図版38）

III—25区で検出された掘立柱建物である。建物規模は桁行5間（11.4～11.5m），梁間（4.2～4.4m），棟方向はW 4°Nを測る。桁行の柱間は2.0～3.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2～0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 32（第127図，図版38）

III—25区，SBi 31の南側で検出された掘立柱建物である。江戸時代の掘立柱建物SBi 34と重複するが，柱穴が重複しないため，新旧関係は不明である。建物の西側には庇または柵が付く。建物規模は桁行3間（6.1～6.2m），梁間1間（4.3m），棟方向はW 5°Nを測る。桁行の柱間は1.9～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 292から肥前磁器染付徳利（279），巻貝が出土した。279の一部はSBi 32の14m南に位置する江戸時代の土坑SKi 100からも出土し，接合した。279は網目文と丸文を施すことから，17世紀後半に生産されたものと考えられる。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は17世紀後半以降のものと考えられる。

SBi 33（第128図，図版39）

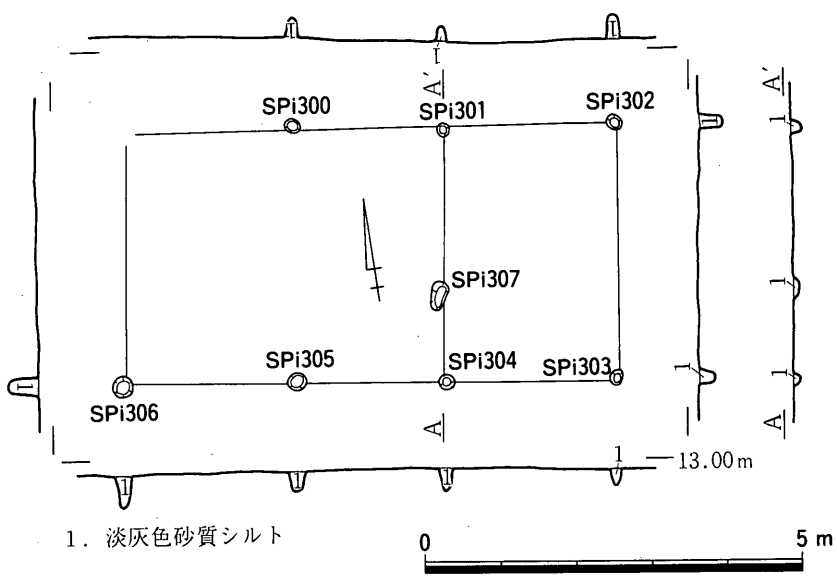
III—25区，SBi 32の南側で検出された掘立柱建物である。江戸時代の掘立柱建物SBi 34と重複するが，柱穴が重複しないため新旧関係は不明である。建物規模は桁行3間（6.6m），梁間1間（3.4m），棟方向はW 7°Nを測る。桁行の柱間は2.0～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2～0.4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 34（第129図）

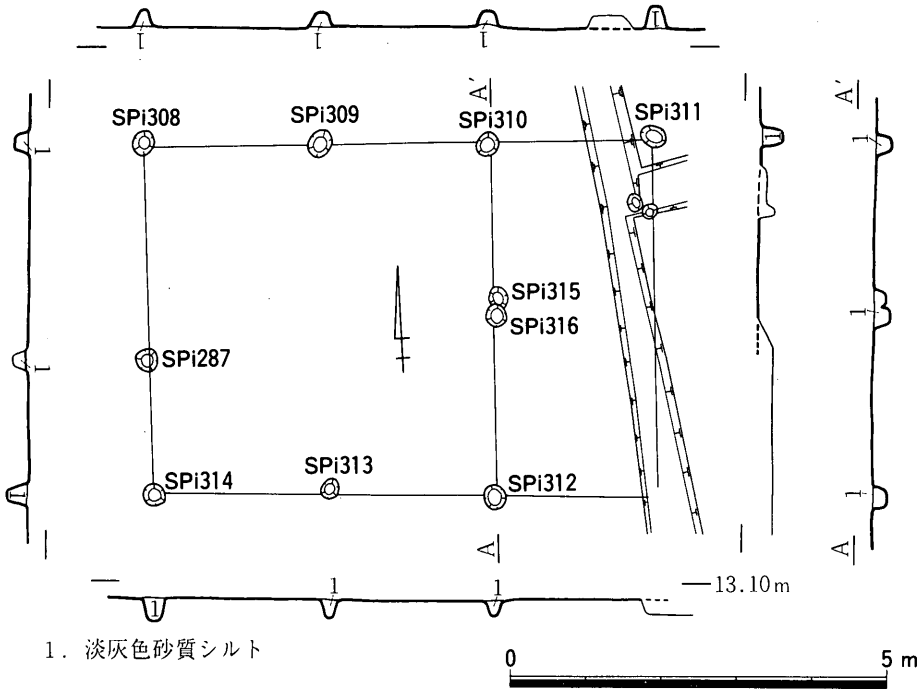
III—25区からIII—22区にかけて検出された掘立柱建物である。建物の東部を攪乱溝が走るため一部不明な箇所がみられる。江戸時代の掘立柱建物SBi 32・SBi 33・SBi 30と重複するが新旧関係は不明である。建物規模は桁行3間（6.8m），梁間（4.5m），棟方向はW 4°Nを測る。桁行の柱間は2.2～2.3mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。SPi 311からは土師質土器片が出土した。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 35（第130図）

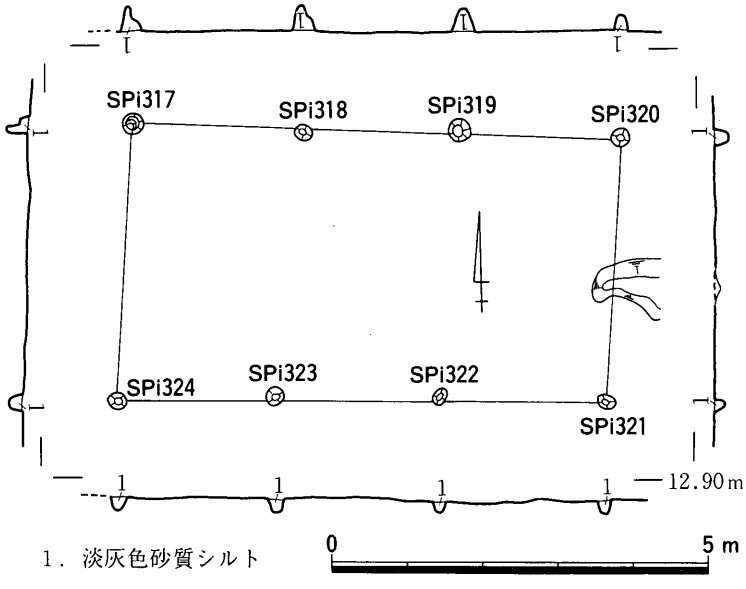
III—13区南部で検出された掘立柱建物である。建物規模は桁行3間（6.5m），梁間1間(3.4～3.6m)，棟方向はW 3°Nを測る。桁行の柱間は2.1～2.3mを測



第128図　SBi 33平・断面図（1/100）



第129図　SBi 34平・断面図（1/100）

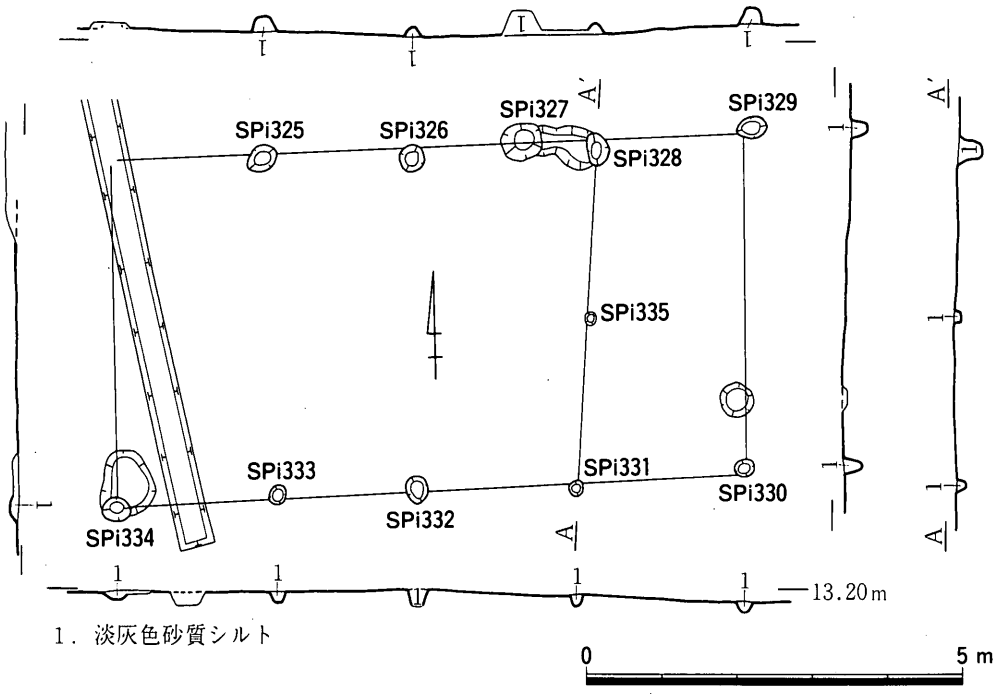


第130図　SBi 35平・断面図（1/100）

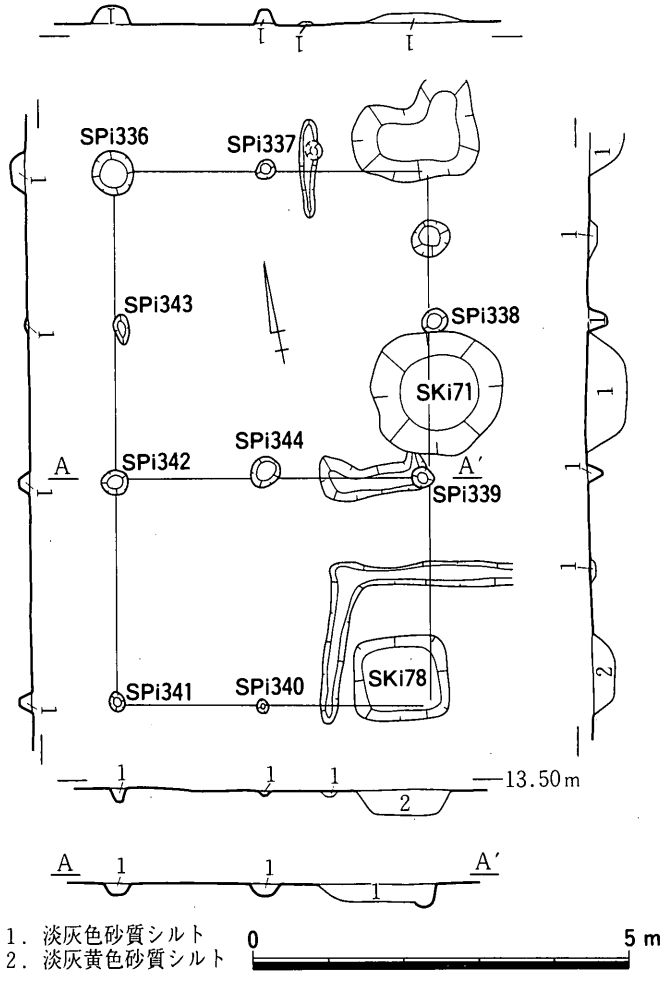
る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 36（第131図）

III—25区南西端・III—26区北西端・III—28区南東端で検出された掘立柱建物である。建物規模は桁行4間（8.3m），梁間1間（4.3m），棟方向は東西（WE）を測る。桁行の柱間は1.9～2.5mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.5mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



第131図　SBi 36平・断面図（1/100）



第132図　SBi 37平・断面図（1/100）

SBi 37（第132図）

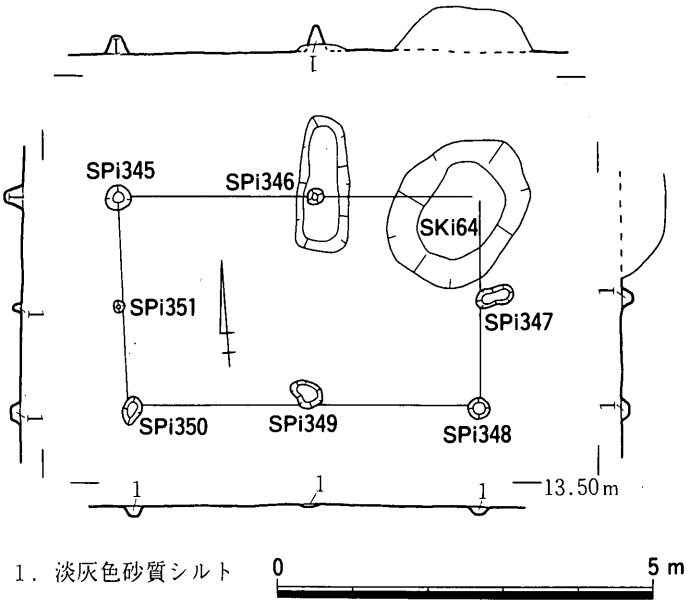
III—28区南部・III—29区北部で検出された掘立柱建物である。建物東部で江戸時代の土坑 SKi 71, SKi 78と重複する。建物規模は桁行３間（7.0m），梁間２間(4.1m)，棟方向はN11°Eを測る。桁行の柱間は2.0～2.9m，梁間は1.9～2.0mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.1～0.5m，深さ0.1～0.3mを測る。SPi 343から土師質土器大甕の口縁部片が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 38（第133図）

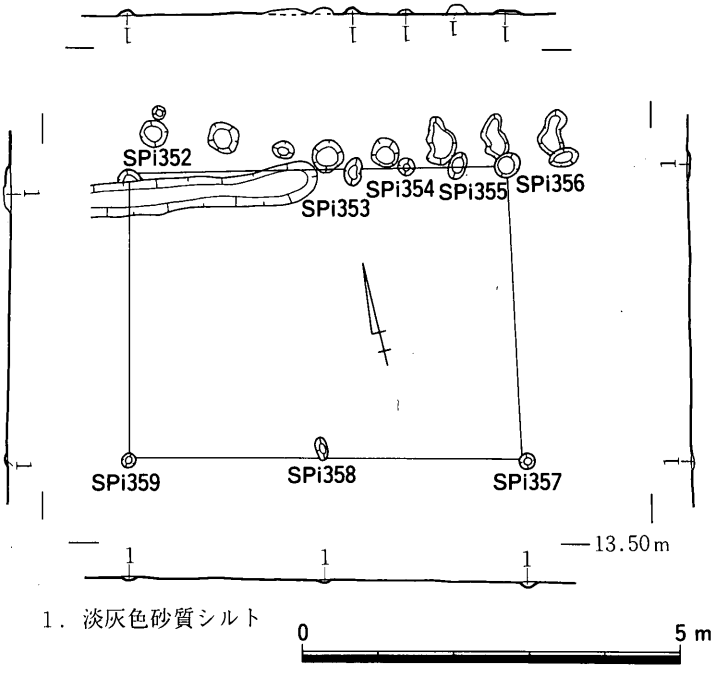
III—28区南東部で検出された掘立柱建物である。建物の北東部は江戸時代の土坑 SKi 64と重複するため，削平を受け，柱穴の一部は不明である。建物規模は桁行２間(4.6m)，梁間２間(2.7m)，棟方向はW５°Nを測る。桁行の柱間は2.3～2.6m，梁間は1.4mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.1～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

SBi 39（第134図）

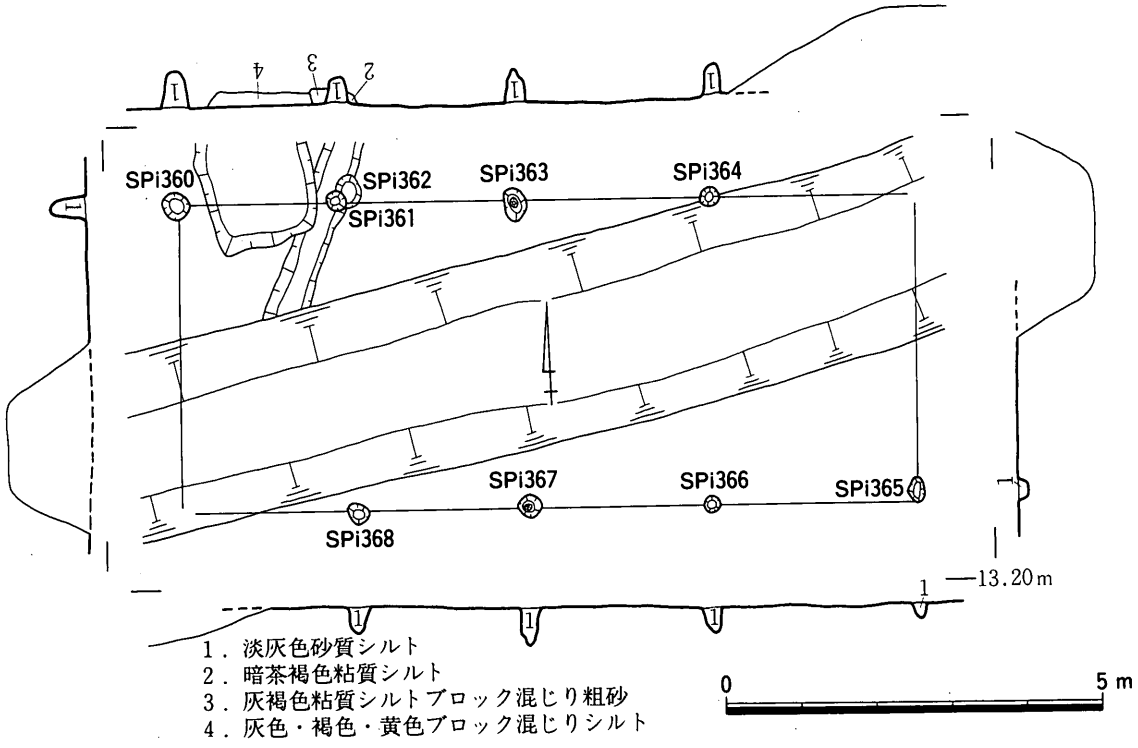
III—25区西部で検出された掘立柱建物である。建物の北部は江戸時代の溝（幅0.4m，深さ0.1m)が東西に走る。建物規模は桁行２間(5.0～5.3m)，梁間１間（3.7～3.9m)，棟方向はW12°Nを測る。桁行の柱間は2.6～2.7mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。



第133図　SBi 38平・断面図（1/100）



第134図　SBi 39平・断面図（1/100）



第135図　SBi 40平・断面図（1/100）

SBi 40（第135図）

III—23区で検出された掘立柱建物である。建物の中央を攪乱溝が走るため建物の一部は削平を受ける。建物規模は桁行4間（9.8m），梁間4.0m，棟方向はW 2°Nを測る。桁行の柱間は2.1～2.8mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.5mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この建物は江戸時代以降のものと考えられる。

② 柱穴

SPi 369（第136図）

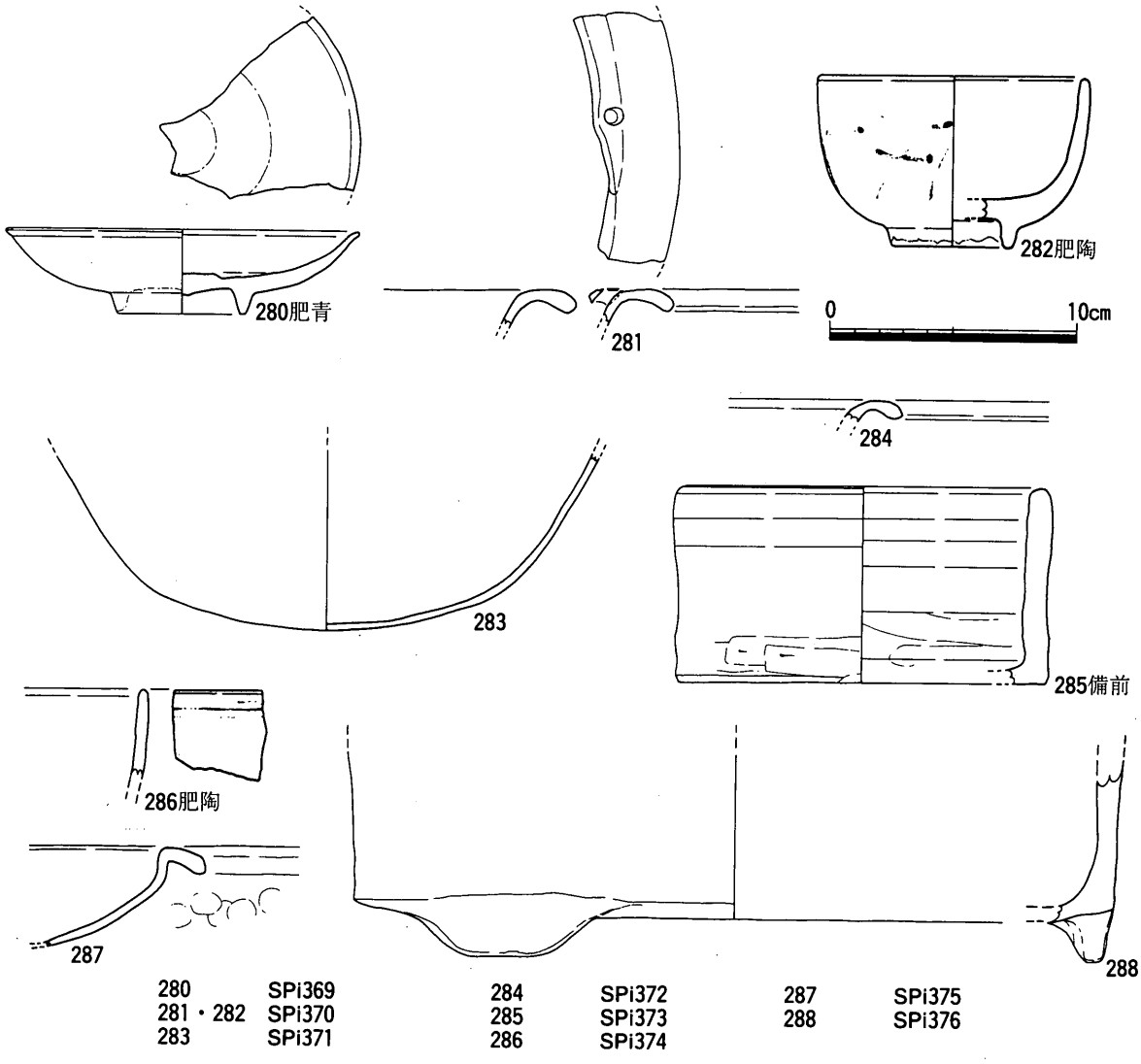
III—11区の南東部で検出された柱穴である。江戸時代の掘立柱建物SBi 20と重複する。平面形は円形で径0.3m，深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，肥前青磁皿（280），SKi 39で掲載した肥前陶器甕（344）の一部が出土した。280は見込みに蛇の目釉剝ぎを施しており，高台部無釉であることから，17世紀中葉から17世紀末の波佐見産のものと考えられる。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は17世紀中葉以降のものと考えられる。

SPi 370（第136図）

III—24区の北端で検出された柱穴である。江戸時代の掘立柱建物SBi 21と重複する。平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，土師質土器焙烙（281），肥前陶胎染付碗（282）が出土した。282は18世紀前半のものである。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は18世紀前半以降のものと考えられる。

SPi 371（第136図）

III—25区の南部，SKi 88の南部に位置する柱穴である。平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，瓦質土器焙烙（283）が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この



第136図　江戸時代柱穴出土遺物実測図（1/3）

柱穴は江戸時代以降のものと考えられる。

SPi 372（第136図）

III—26区の南部，SKi 95の西側に位置する柱穴である。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，瓦質土器焙烙（284）が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は江戸時代以降のものと考えられる。

SPi 373（第136図）

III—28区の東部，SEi 09の南東側に位置する柱穴である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.7m，短軸0.5m，深さ0.4mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，備前焼鉢（285）が出土した。285の本来の用途は窯道具で，灯明皿を入れて焼くサヤ鉢である。詳細な時期は不明であるが，17世紀後半から19世紀代のものであろう。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は江戸時代以降のものと考えられる。

SPi 374（第136図）

III—28区，江戸時代の掘立柱建物SBi 38の西側に位置する柱穴である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.3m，短軸0.2m，深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトで，肥前陶胎染付碗（286）が出土した。286は18世紀前半のものである。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は18世紀以降のものと考えられる。

SPi 375（第136図）

III—28区，江戸時代の土坑SKi 76の東側に位置する柱穴である。平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。埋土は黄色シルトブロック混じり灰色砂質シルトで，土師質土器焙烙（287）が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は江戸時代以降のものと考えられる。

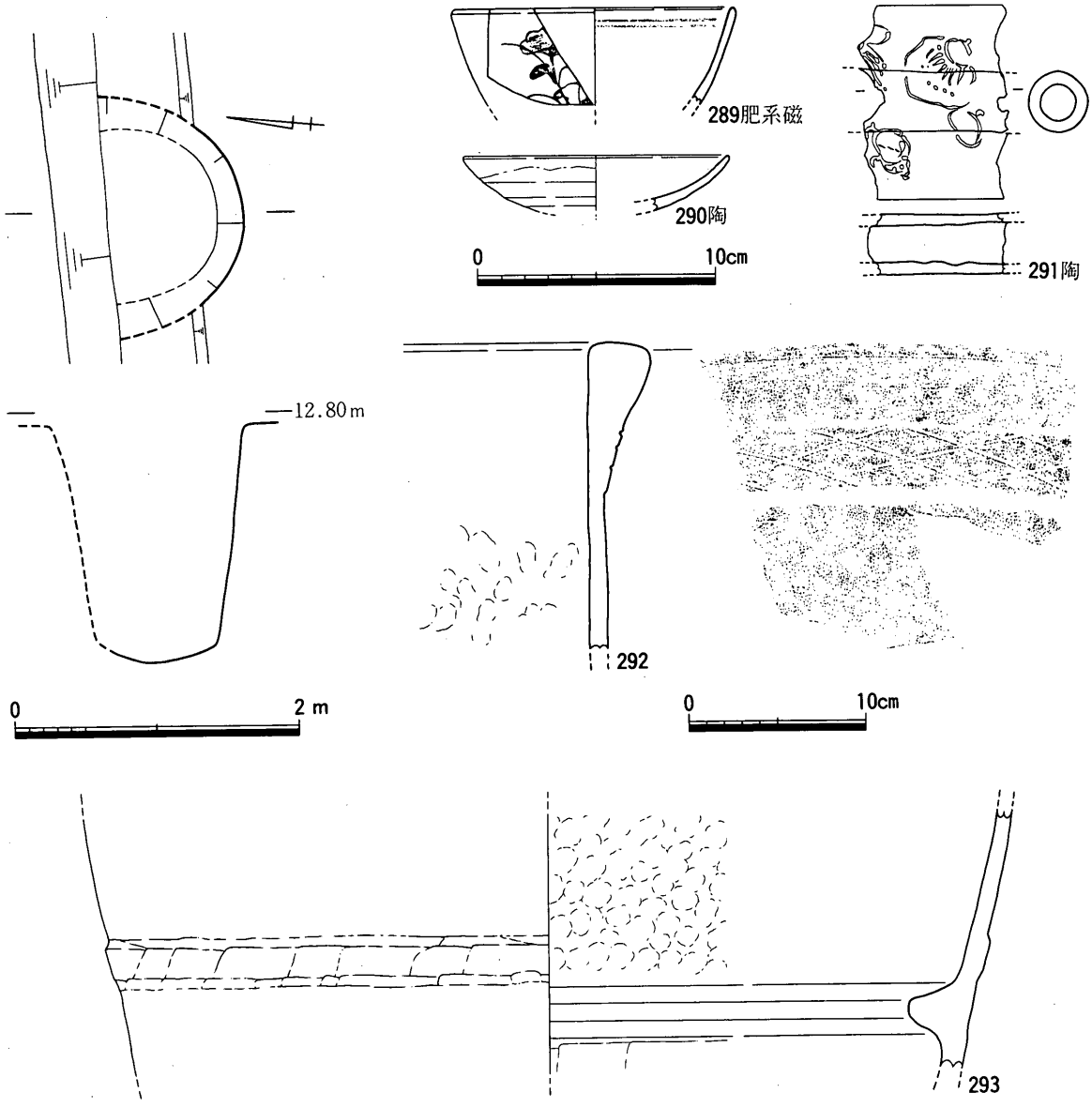
SPi 376（第136図）

III—28区の南部，江戸時代の掘立柱建物SBi 37と重複する柱穴である。平面形は円形を呈し，径0.6m，深さ0.3mを測る。埋土は黄色シルトブロック混じり灰色砂質シルトで，土師質土器火鉢（288）が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この柱穴は江戸時代以降のものと考えられる。

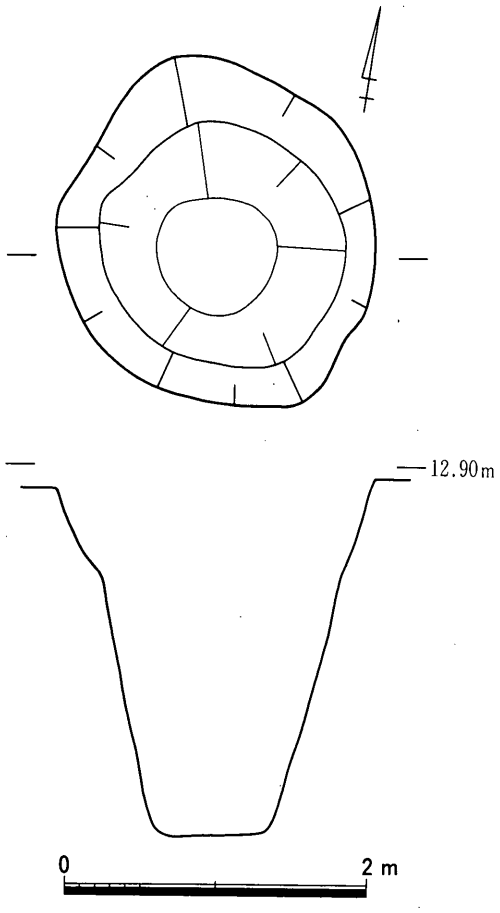
③　井戸

SEi 01（第137図）

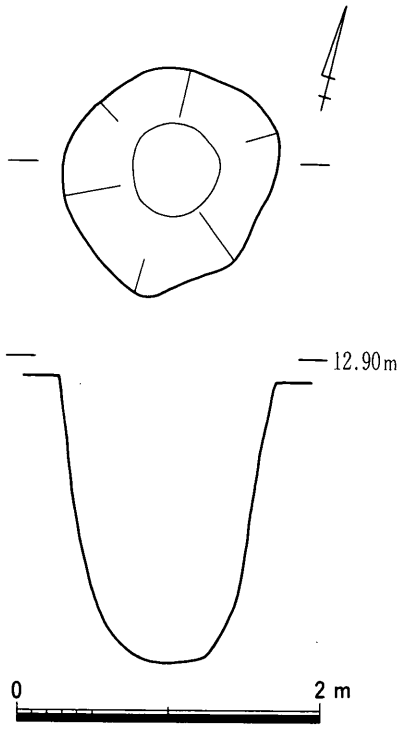
III—21区の北壁沿いで検出された井戸である。北部は調査区外に連続する。平面形は円形を呈し，推



第137図　SEi 01平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/4）



第138図　SEi 02平・断面図（1/50）



第139図　SEi 03平・断面図（1/50）

定径1.7m，深さ1.5mを測る。周囲には径0.1～0.2mの河原石による石組が施され，上部には井筒が設置されていた。埋土は礫・褐色粘質シルトブロック混じり淡灰色シルトである。遺物は肥前系磁器染付碗（289），陶器灯明受皿（290），陶器行平鍋か急須の把手（291），土師質土器井筒（292），土師質土器風呂釜(293)，国産磁器染付片が少量出土した。289は染付文様や体部の形態から広東形を呈すると考えられる。19世紀前半のものであろう。290は陶器灯明受皿である。産地は不明である。軟質で，胎土は淡い橙色である。富田焼か信楽焼の可能性が考えられる。291は陶器の把手である。行平鍋か急須の把手であろう。外面には筒書きで線書き文様が施される。出土遺物から，この井戸は19世紀以降のものと考えられる。

SEi 02（第138図）

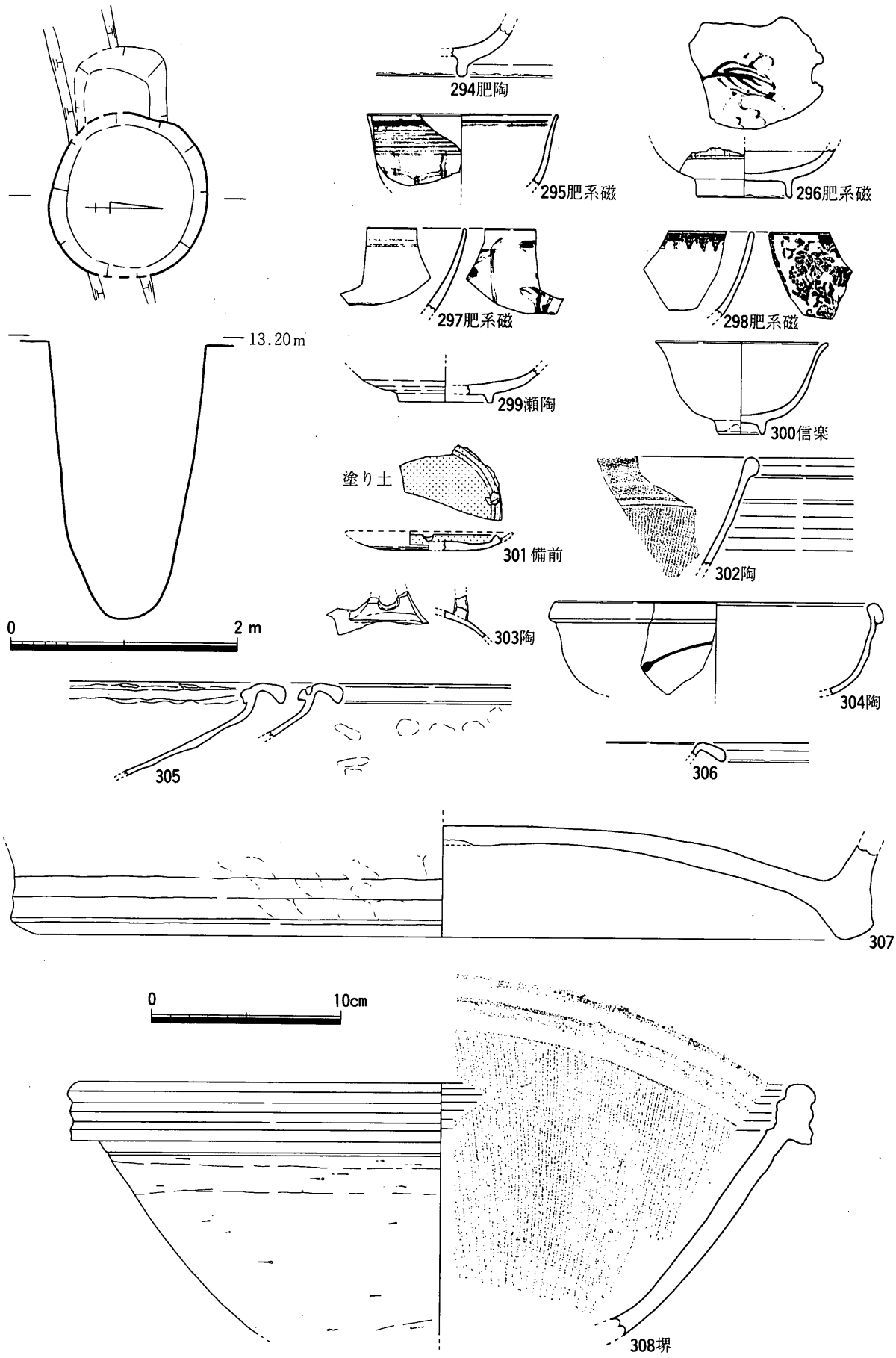
III—21区北部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し，径2.1～2.3m，深さ2.2～2.3mを測る。周囲には径0.1～0.2mの河原石による石組が施されていた。埋土は礫・褐色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この井戸は江戸時代以降のものと考えられる。

SEi 03（第139図）

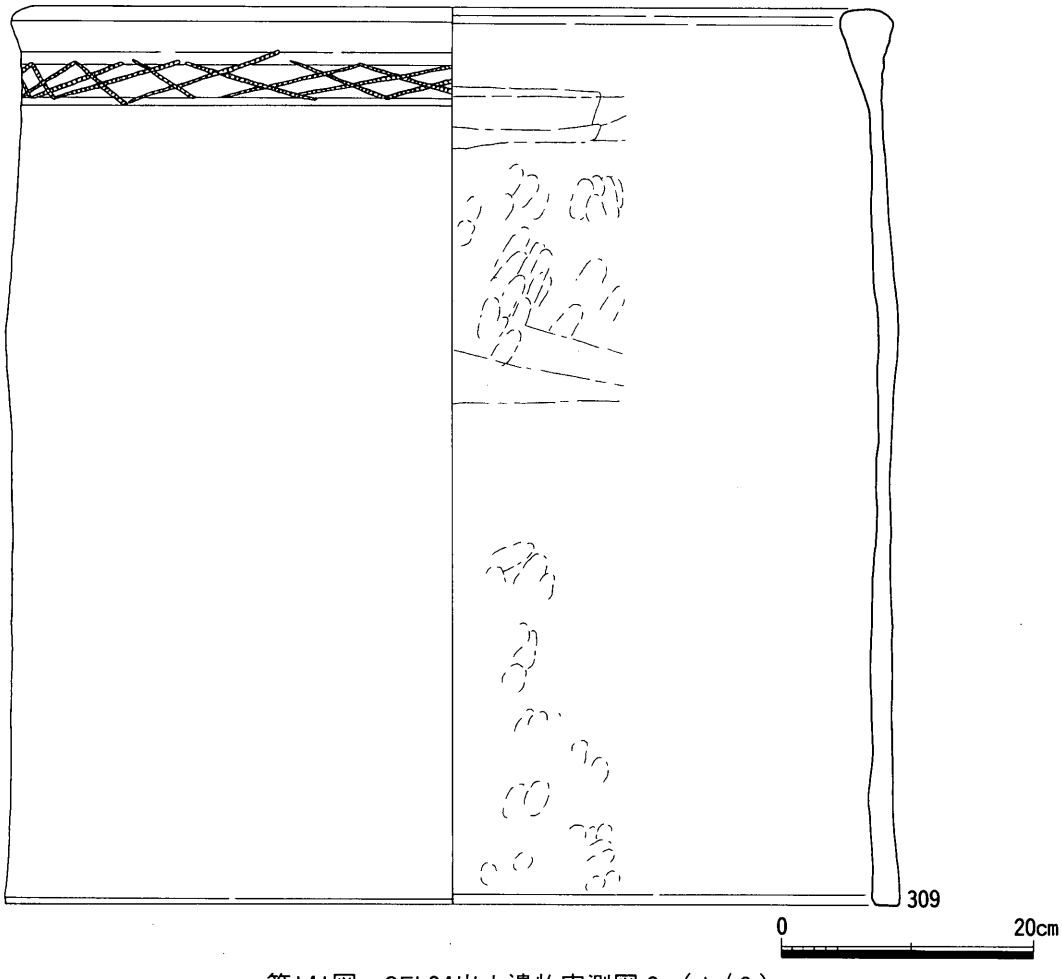
III—21区中央部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し，径1.4～1.5m，深さ1.85mを測る。周囲には石組がみられず，素掘りである。埋土は礫（径0.1m以下）・褐色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この井戸は江戸時代以降のものと考えられる。

SEi 04（第140・141図，図版39）

III—28区東部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し，径1.4m，深さ2.4mを測る。周囲には

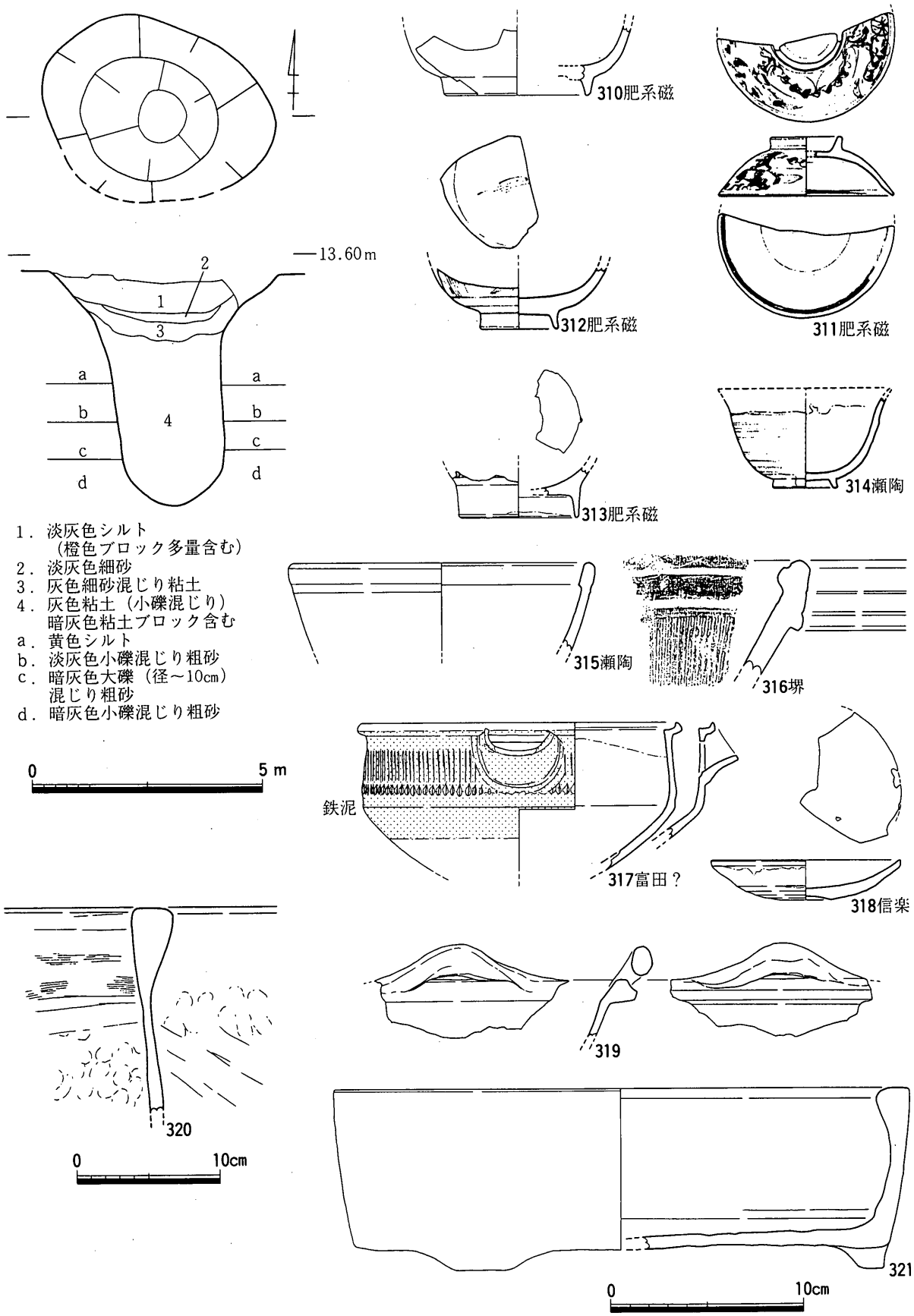


第140図　SEi 04平・断面図（1/50），出土遺物実測図1（1/3）

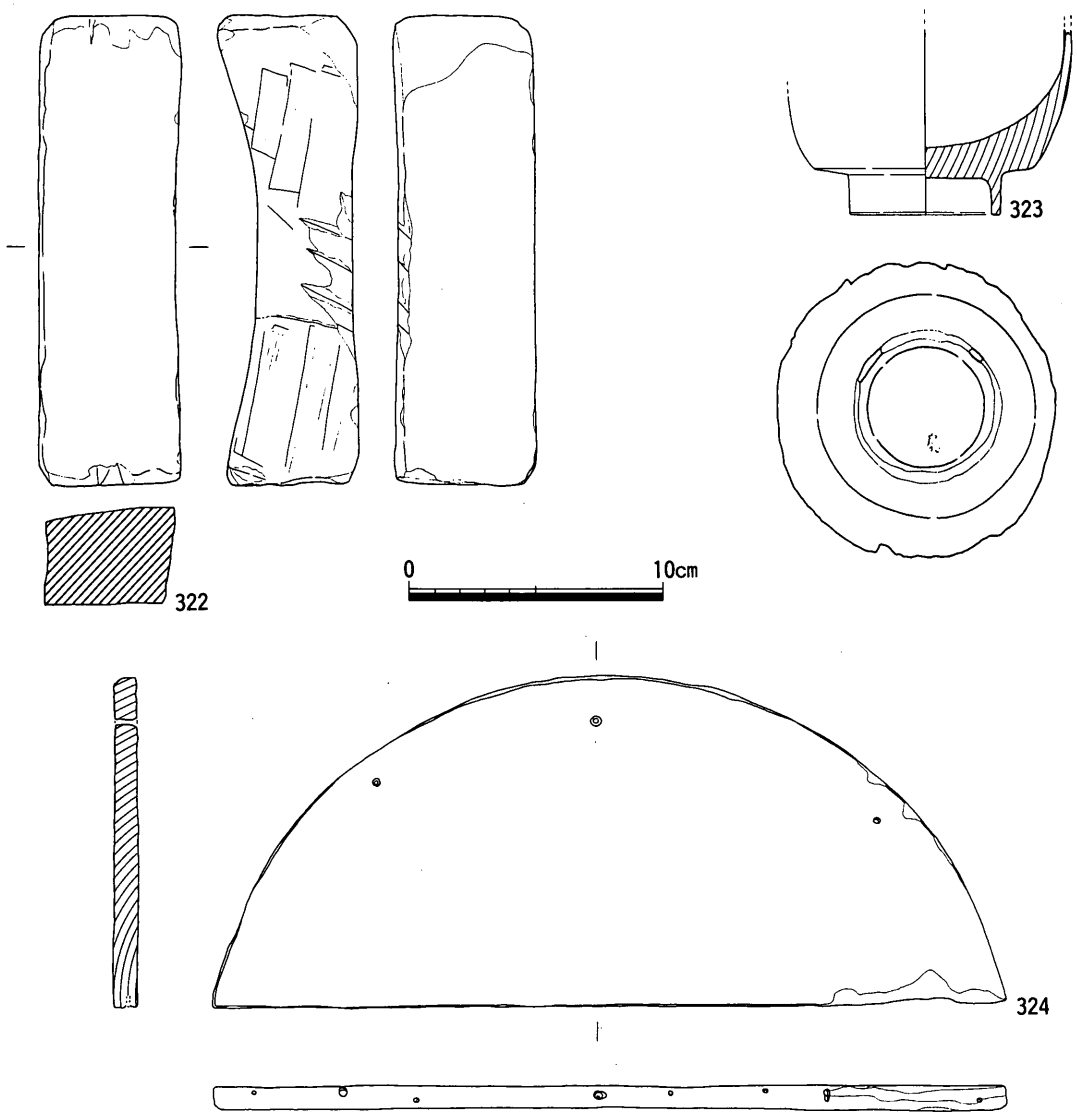


第141図　SEi 04出土遺物実測図２（１/６）

径0.1～0.2mの河原石による石組が施され，上部には井筒が設置されていた。埋土は黄色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は肥前陶胎染付碗（294），肥前系磁器染付碗（295～298），瀬戸美濃陶器灰釉皿（299），信楽陶器碗（300），備前焼灯明受皿（301），陶器擂鉢（302），陶器透明釉土瓶（303），陶器鉢（304），土師質土器焙烙（305･306），土師質土器風呂釜（307），堺または明石擂鉢（308），土師質土器井筒(309)，磁器色絵片，瓦片などが少量出土した。294は肥前陶胎染付碗である。18世紀前半のものである。295～298は肥前系磁器染付碗である。295は端反り形を呈する。296も文様から端反り形であると考えられる。内面には木の葉の宝物が描かれる。いずれも1820～1860年のものである。297は体部の形態や染付文様から，広東形であると考えられる。外面には荔枝文が描かれる。19世紀前半のものである。298は型紙摺で，明治・大正時代のものである。299は瀬戸美濃陶器灰釉皿である。18世紀末から19世紀前半のものであろう。300は信楽陶器碗である。端反り形であることから，18世紀末から19世紀のものと考えられる。301は備前焼灯明受皿である。内面に塗り土が施される。桟が付く。18～19世紀代のものであろう。302は陶器擂鉢である。明治時代以降のものであろう。304は陶器鉢である。胎土は緻密で，灰色を呈する。分析を行っていないが，富田焼の可能性が高い。308は堺または明石擂鉢である。口縁部外縁帯の張りが大きいことから，白神分類のII型式に当たり，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。[7] 出土遺物から，この井戸が廃絶したのは明治時代以降と考えられる。



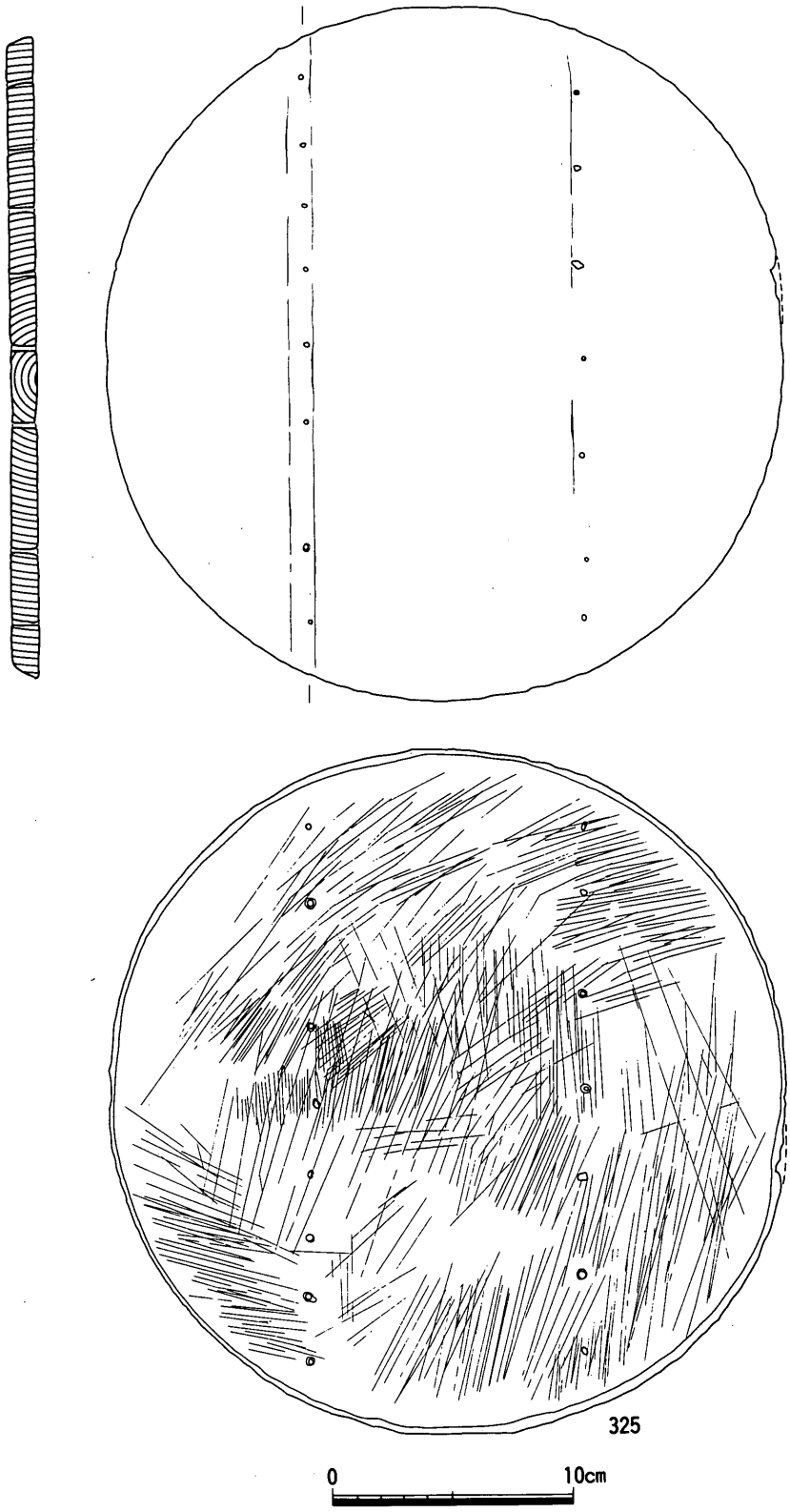
第142図　SEi 05平・断面図（1/50），出土遺物実測図1（1/3・1/4）



第143図　SEi 05出土遺物実測図２（１/３）

SEi 05（第142～144図，図版40）

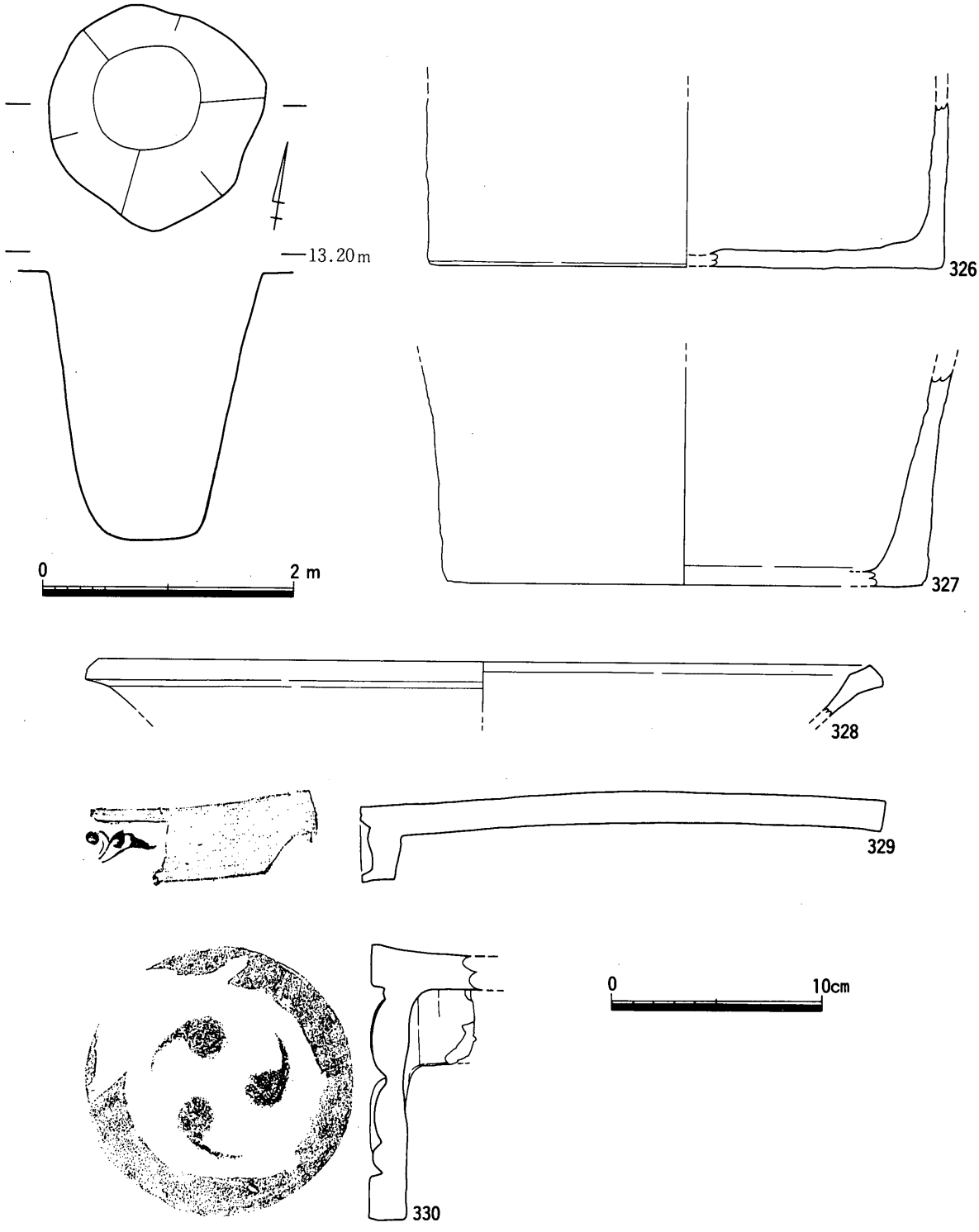
Ⅲ―29区の北東部で検出された井戸である。幅0.2m，深さ0.1mの溝と重複するが，土層堆積から，溝のほうが新しいことがうかがわれる。SEi 05の平面形は楕円形を呈し，径1.6～2.1m，深さ2.0mを測る。石組はみられず，素掘りである。肥前系磁器染付皿（310），肥前系磁器染付蓋（311），肥前系磁器染付碗（312・313），瀬戸陶器刷毛目碗（314），瀬戸美濃陶器鉢（315），堺または明石擂鉢（316），富田焼？陶器行平鍋（317），信楽陶器灯明受皿（318），瓦質土器鍋（319），土師質土器大甕（320），土師質土器火鉢（321），砥石（322），漆器椀（323），底板（324・325），磁器染付端反り碗片・土師質土器大甕片・土師質土器焙烙片が少量出土した。310は肥前系磁器染付皿である。畳付に釉が掛かることから，蛇の目凹形高台になると考えられる。18世紀後半から19世紀代のものである。311は肥前系磁器染付蓋である。端反り形の碗の蓋で，1820～1860年のものである。312・313は肥前系磁器染付碗である。体部の形態や文様から，端反り形で，1820～1860年のものである。313は広東形で，19世紀前半のものであろう。314は瀬戸陶器刷毛目碗である。体部には白化粧土による刷毛目を施し，口縁部内外面に深緑色釉を掛ける。315は瀬戸美濃陶器鉢である。おそらく片口であろう。314・315は幕末頃のものである。316は堺ま



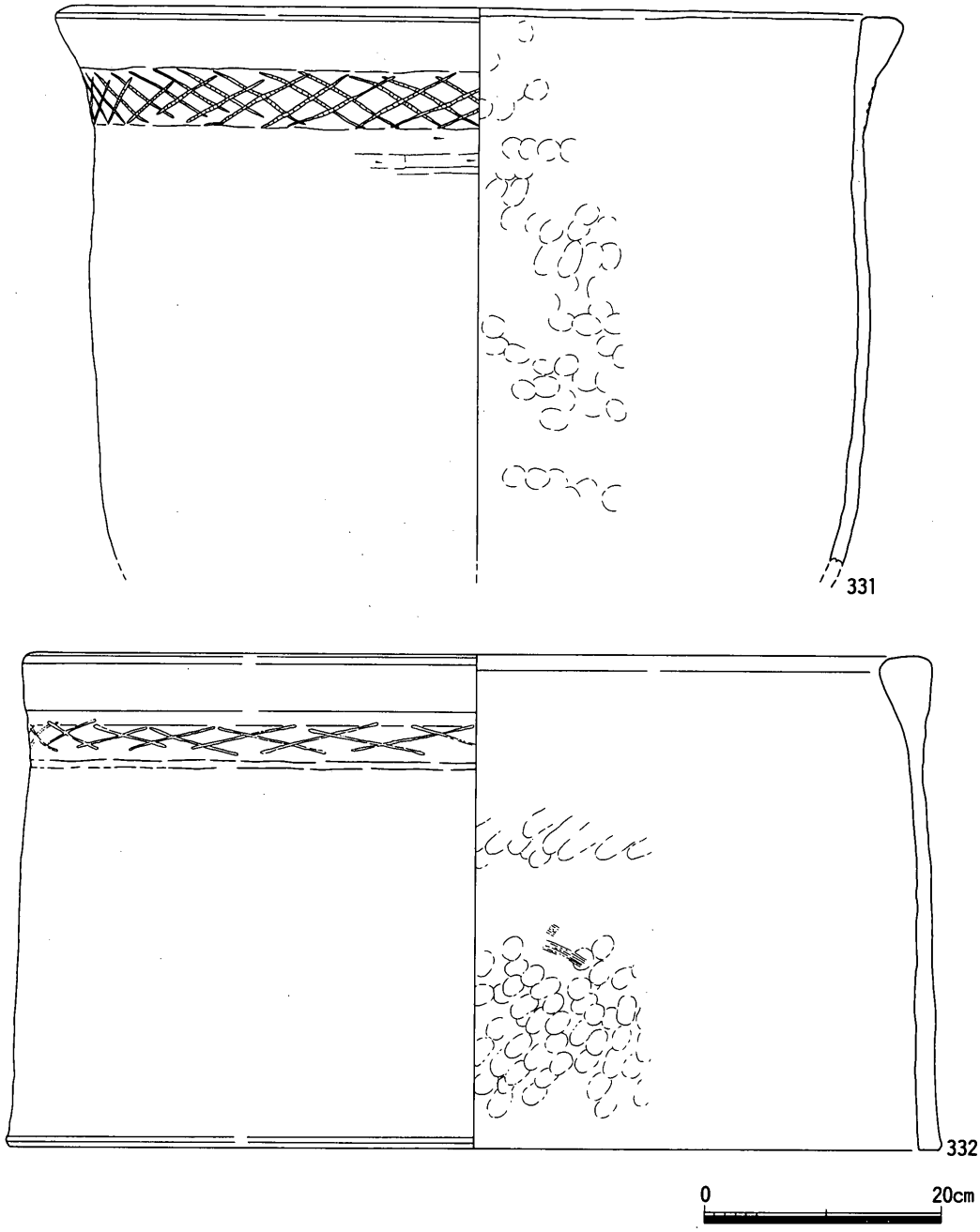
第144図　SEi 05出土遺物実測図３（１／３）

たは明石擂鉢である。口縁部外縁帯の張りが大きいことから，白神分類のII型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。317は陶器行平鍋である。片口で，外面に飛鉋を施し，鉄泥を塗布する。内面は口縁部は無釉で，体部には灰釉を施す。317は胎土分析によって富田焼と特定した行平鍋（637）と形態・技法・胎土が類似することから，富田焼と推定される。318は信楽の灯明受皿である。見込みに目跡が残る。出土遺物から，この井戸は19世紀以降のものと考えられる。

SEi 06（第145・146図，図版41）



第145図　SEi 06平・断面図（1/50），出土遺物実測図1（1/3）

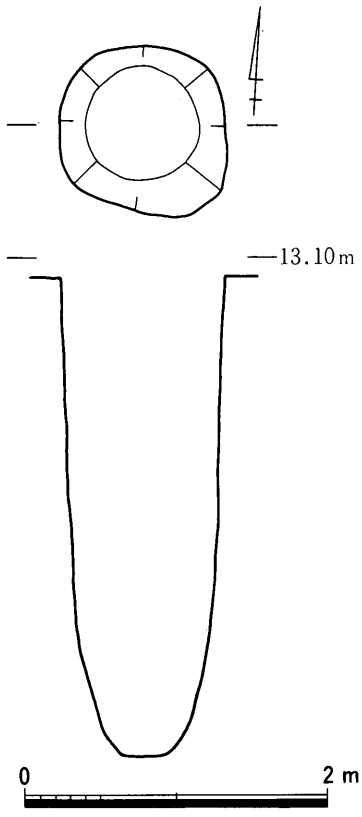


第146図　SEi 06出土遺物実測図２（１/６）

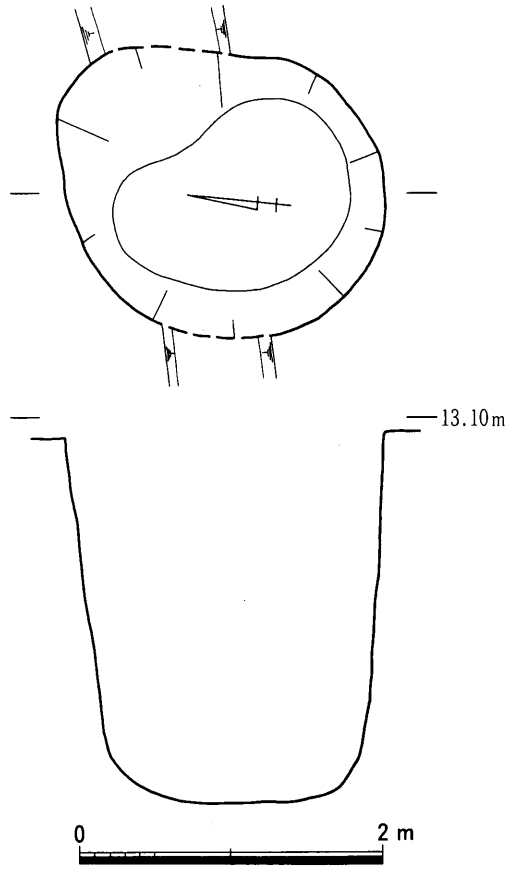
III—25区西部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し，径1.6～1.7m，深さ2.1mを測る。周囲には径0.1～0.2mの河原石による石組が施され，上部には井筒が設置されていた。埋土は褐色ブロック混じり灰色シルトである。土師質土器甕(326・327)，土師質土器焙烙(328)，軒平瓦(329)，軒丸瓦(330)，土師質土器大甕（331)，土師質土器井筒（332)，陶器片が少量出土した。出土遺物から，この井戸は江戸時代以降のものと考えられる。

SEi 07（第147・148図）

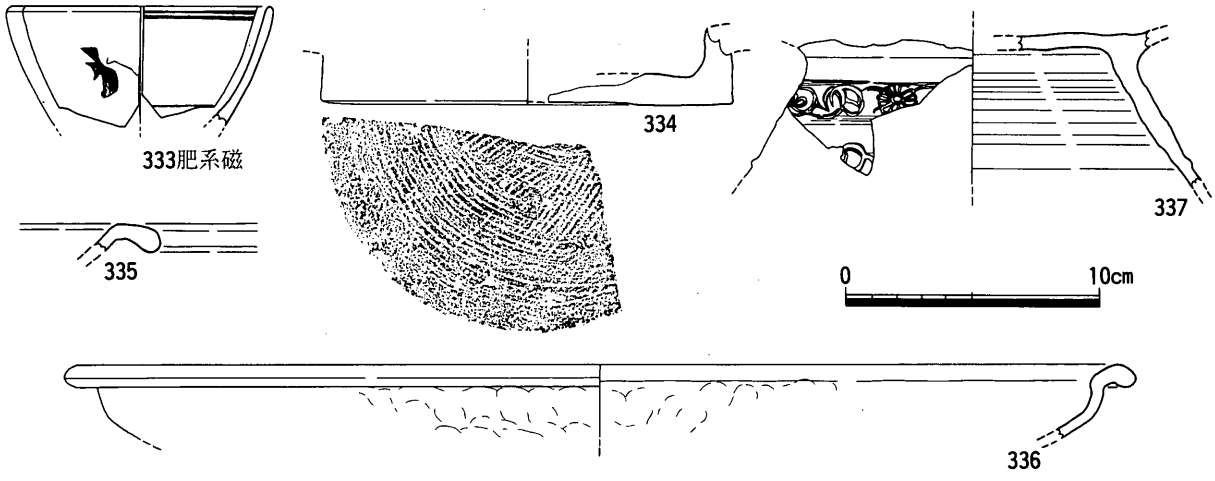
III—26区北部で検出された井戸である。平面形は円形を呈し，径1.1～1.2m，深さ3.1mを測る。周囲には径0.1～0.2mの河原石による石組が施される。埋土は褐色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は肥前系磁器染付碗（333)，土師質土器蓋（334)，土師質土器焙烙（335・336)，瓦質土器器種不明



第147図　SEi 07平・断面図（1/50）



第149図　SEi 08平・断面図（1/50）

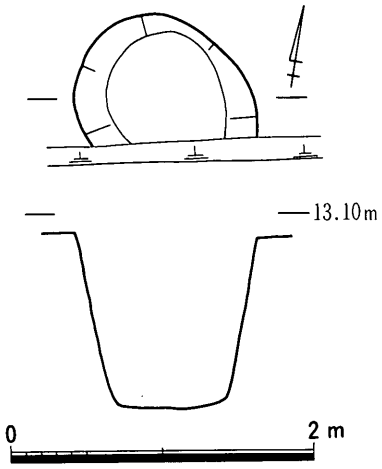


第148図　SEi 07出土遺物実測図（1/3）

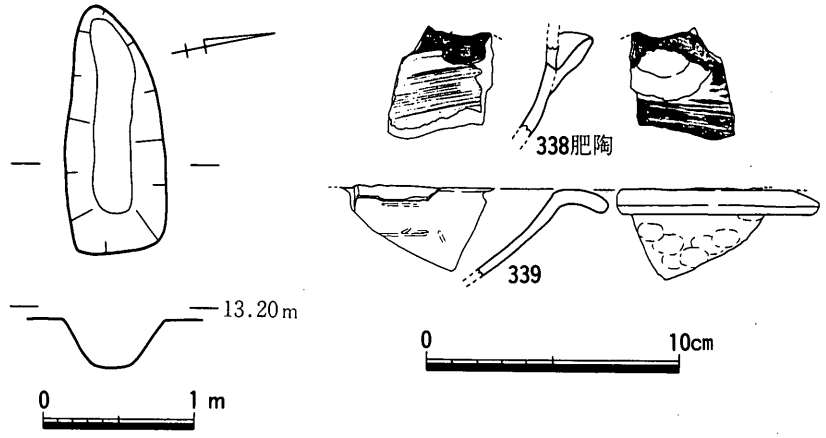
(337)，国産磁器染付片が少量出土した。333は体部の形態や染付文様から広東形を呈し，19世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この井戸は19世紀以降のものと考えられる。

SEi 08（第149図）

III—26区東部で検出された井戸である。平面形はややいびつな円形を呈し，径1.8～2.2m，深さ2.4mを測る。周囲には径0.1～0.2mの河原石による石組が施される。埋土は褐色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この井戸は江戸時代以降のものと考えられる。



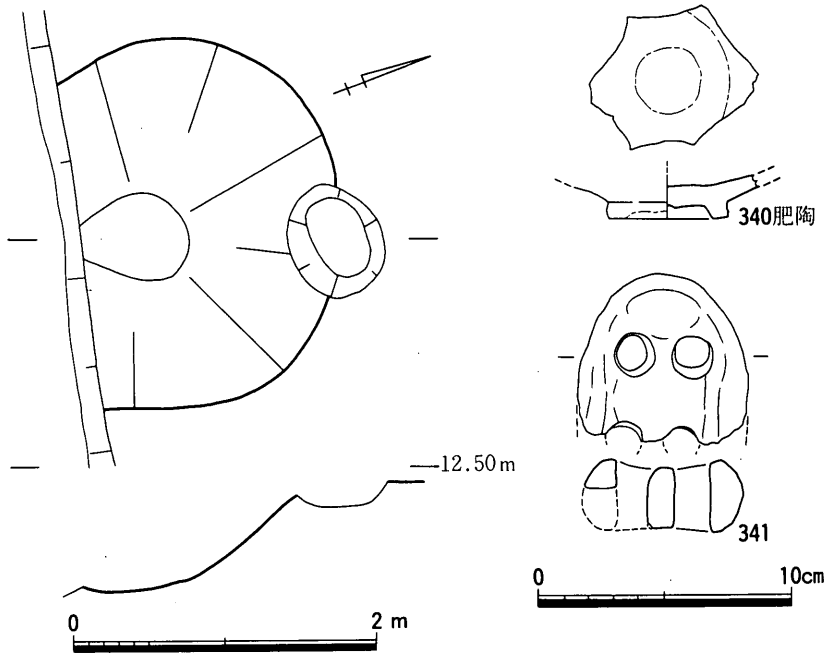
第150図　SEi 09平・断面図（1/50）



第151図　SKi 33平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SEi 09（第150図）

III—23区南壁沿いで検出された井戸である。南部は調査区外に連続するため全体は不明である。径1.2m，深さ1.1mを測る。埋土は褐色シルトブロック混じり灰色シルトである。遺物は出土しなかった。埋土から，この井戸は江戸時代以降のものと考えられる。



第152図　SKi 34平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

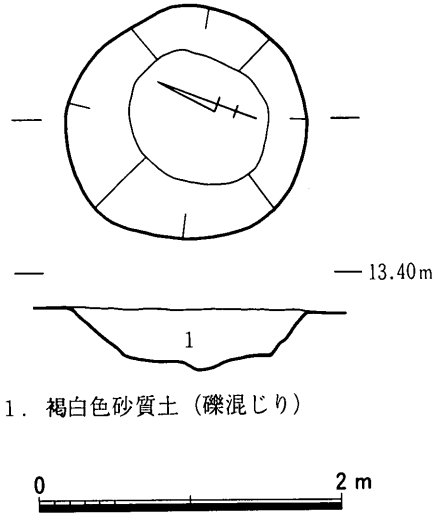
④　土坑

SKi 33（第151図）

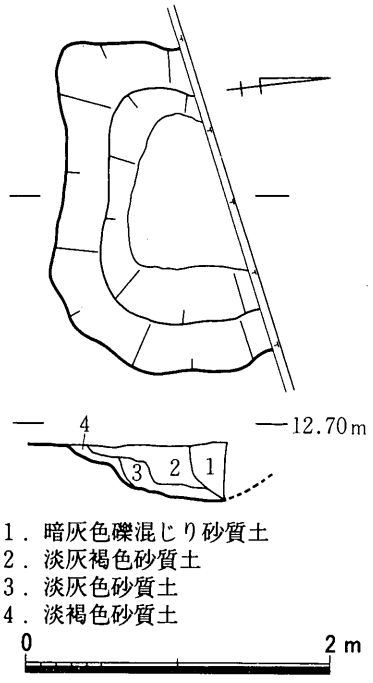
III—11区東部，江戸時代の掘立柱建物SBi 16・SB i17の南部に位置する土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸1.6m，短軸0.7m，深さ0.3mを測る。埋土は黄灰色シルトである。肥前陶器刷毛目片口鉢（338），土師質土器焙烙（339）が出土した。338は口縁部破片のため詳細な時期は不明であるが，17世紀後半から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。

SKi 34（第152図）

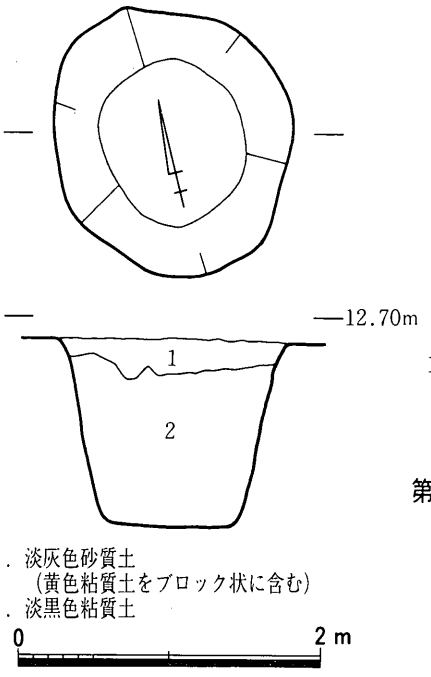
III—12区東部に位置する土坑である。南部は江戸時代の溝によって削平され，北部は江戸時代の柱穴が重複する。平面形は円形を呈するものと推定され，径2.4m，深さ0.7mを測る。肥前陶器青緑釉皿（340），土錘（341）が出土した。340は17世紀



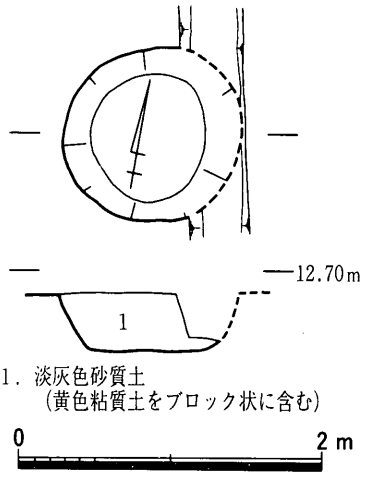
第153図　SKi 35平・断面図（1/50）



第154図　SKi 36平・断面図（1/50）



第155図　SKi 37平・断面図（1/50）



第156図　SKi 38平・断面図（1/50）

後半から18世紀前半に佐賀県嬉野町内野山窯[8]で生産されたものである。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。

SKi 35（第153図）

III—52区の南部で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径1.6m，深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 36（第154図）

III—13区の北端で検出された土坑である。遺構の北部は調査区外に連続するため全体は不明である。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し，長軸2.1m，短軸1.4m以上，深さ0.4mを測る。埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 37（第155図）

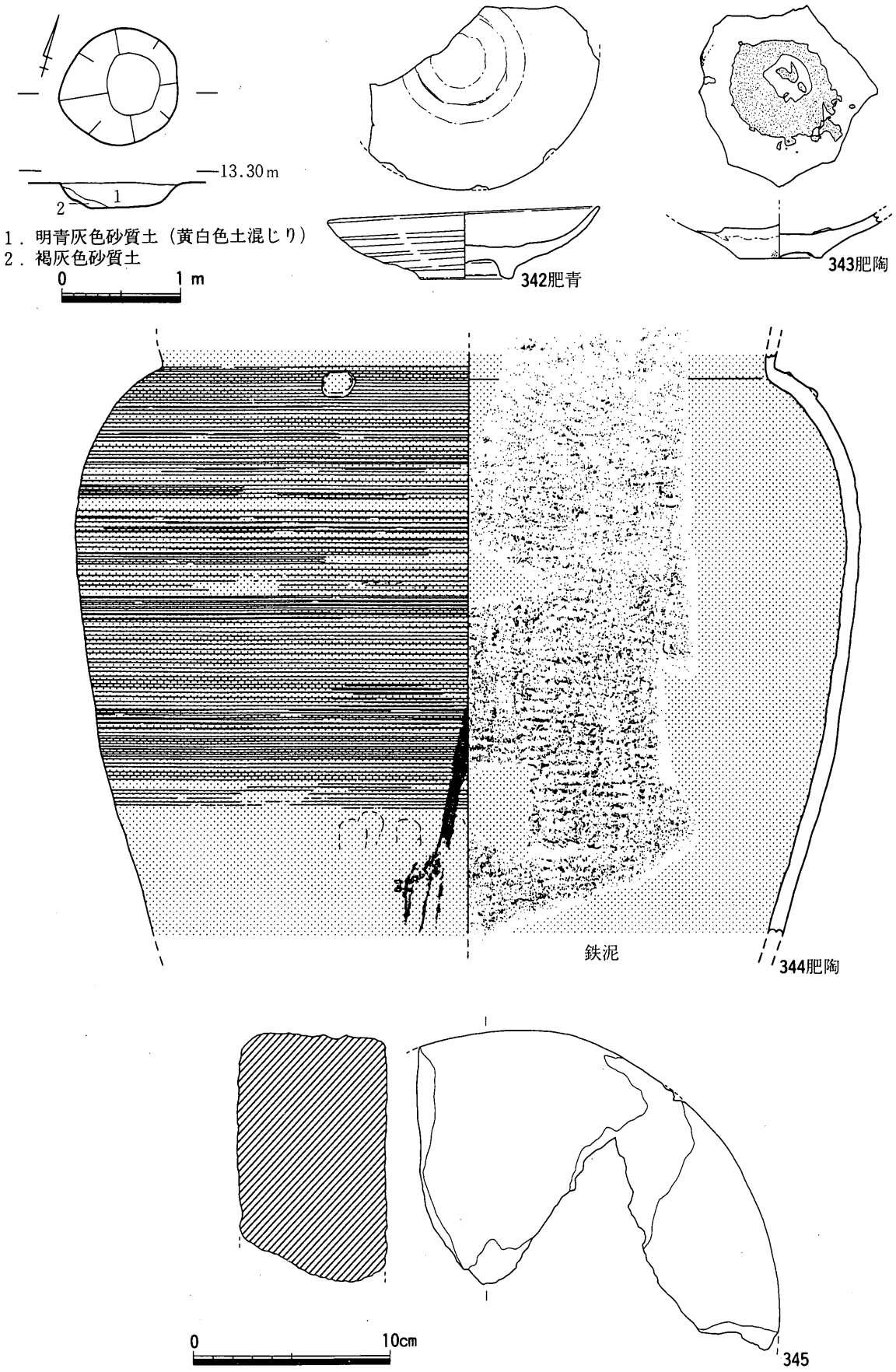
III—13区の北部で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 24と重複するが，柱穴と重複しないため新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し，径1.5～1.7m，深さ1.2mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 38（第156図）

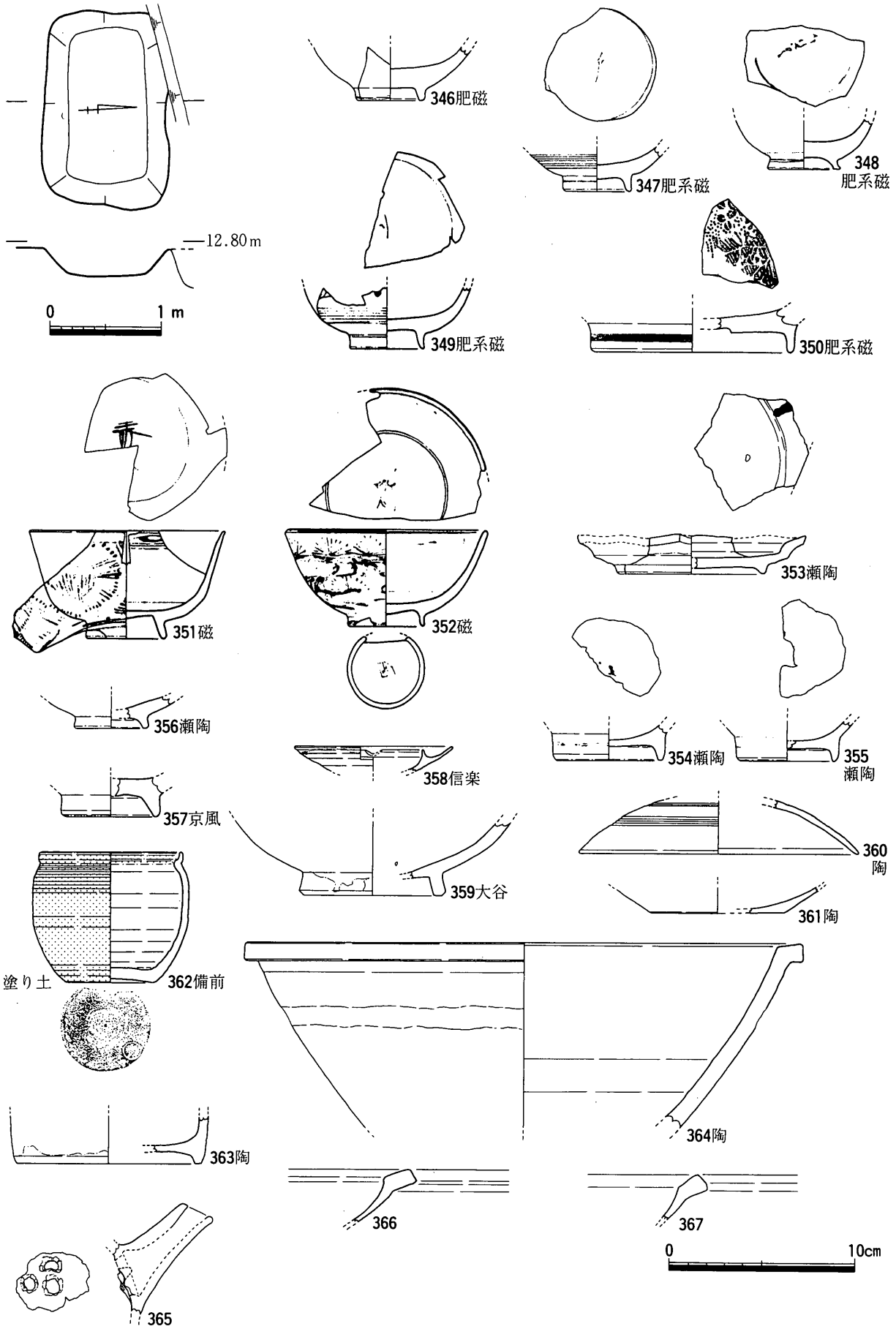
III—13区の北東部で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 24の東側に位置する。平面形は円形を呈し，径1.1～1.2m，深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 39（第157図，図版41・42）

III—52区の北西部で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 20の南側に位置する。平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.2mを測る。埋土下部には径0.1～0.2mの河原石がぎっしりと詰まっていた。埋土中からは肥前青磁皿（342），肥前陶器灰釉皿（343），肥前陶器甕（344），石臼（345）が出土した。344の一部は11m北に位置するIII—11区SPi 369からも出土し，接合した。342は肥前青磁皿で，見



第157図　SKi 39平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第158図　SKi 40平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

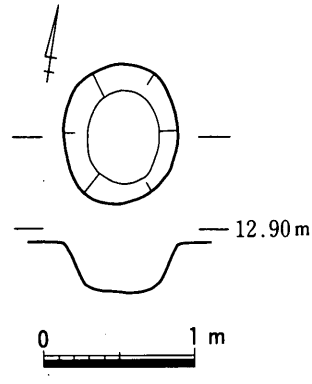
込みに蛇の目釉剝ぎを施しており，畳付無釉である。17世紀前半から中葉のものである。343は肥前陶器灰釉皿である。砂目積みで，鉄絵で圏線を描く。1600～1630年のものである。344は内外面に鉄釉が塗布されており，肩部外面に円形浮文を貼り付け，内面に格子目タタキが残る。口縁部が残存しないため詳細な時期は不明であるが，1630年以降のものである。肥前陶器甕は84m南に位置するIII—38区の土坑SKi 60からも出土した。SKi 60出土肥前陶器甕410は口縁部破片で，胎土も344と非常に類似する。同一個体の可能性も考えられるが，接合しなかった。410は形態から，17世紀後半から18世紀前半のものと考えられるが，344も同時期のものである可能性は高いものと思われる。345は石臼で，石質は凝灰岩である。屋島や五色台産の可能性が高い。出土遺物はいずれも17世紀代のものであることから，この土坑は17世紀代のものと考えられる。

SKi 40（第158図）

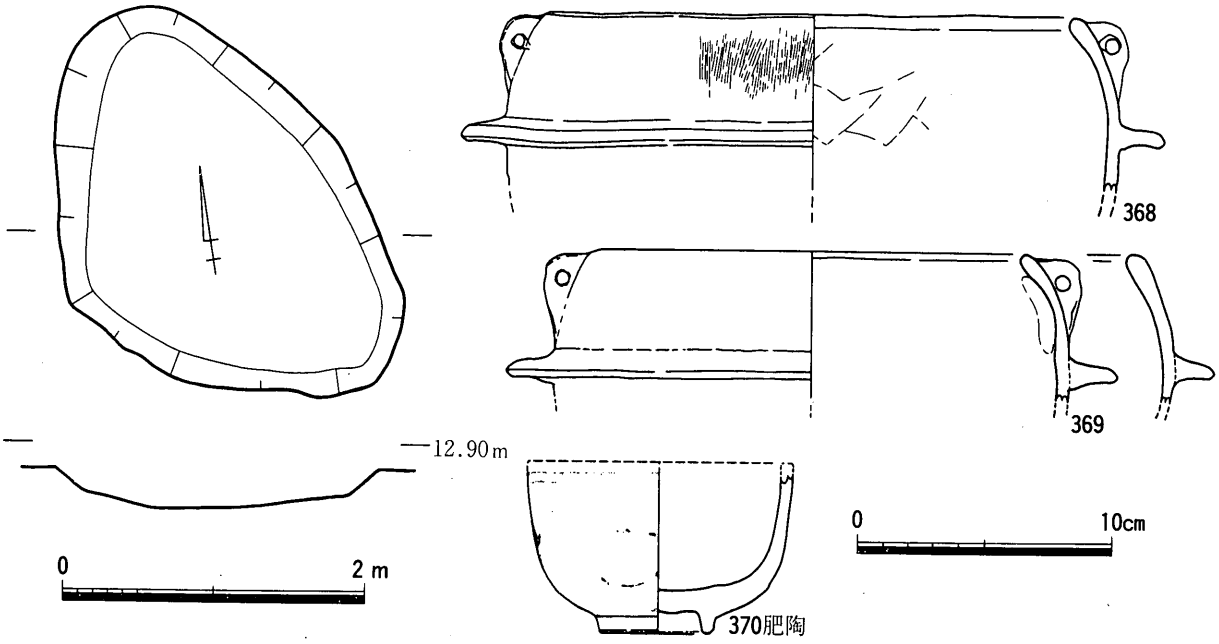
III—21区の北端で検出された土坑である。北部は調査時の排水用の側溝により削平を受ける。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.7m，短軸1.1m，深さ0.2mを測る。埋土は褐色礫混じり粗砂である。遺物は破片ばかりで，肥前磁器染付碗（346），肥前系磁器染付碗（347～349），磁器染付碗（351・352），肥前系磁器染付鉢(350)，瀬戸美濃陶器皿(353)，瀬戸美濃陶器染付碗(354・355)，瀬戸美濃陶器腰錆碗(356)，京焼風陶器碗（357），信楽陶器灯明受皿（358），大谷焼鉢（359），陶器透明釉蓋（360），陶器透明釉土瓶（361），備前焼甕（362），陶器鉢（363・364），瓦質土器土瓶（365），瓦質土器焙烙（366・367），土師質土器大甕片が出土した。346は肥前磁器染付碗であるが，焼成不良で，呉須の発色が悪く，表面は白濁する。18世紀後半の波佐見産であろう。347～349は肥前系磁器染付碗である。いずれも口縁部を欠損するが，見込みや体部の染付文様から端反り形であると考えられる。1820～1860年のものであろう。351・352は磁器染付碗である。351は4m西側に位置するSXi 06からも破片の一部が出土し，接合した。351・352は346～349と呉須の色調が異なり，明るい青色を呈する。352は明治時代の瀬戸美濃産の可能性が高い。350は肥前系磁器染付鉢である。蛇の目凹形高台で，型紙摺，呉須は明るい青色を呈する。明治から大正時代のものである。351は産地不明磁器染付碗で，幕末頃のものである。353は瀬戸美濃陶器皿である。多角形を呈する。口縁部内面に鉄絵を描く。18世紀中葉から18世紀末のものである。354・355は瀬戸美濃陶器染付碗である。いずれも底部破片であるが，高台部が高いことから，広東形碗であろう。19世紀前半から中葉のものと考えられる。356は瀬戸美濃陶器腰錆碗である。高台部の形態から，19世紀前半のものと考えられる。357は京焼風陶器碗である。高台部内面がアーチ状の形態を示すことから，17世紀後半から末のものと考えられる。359は大谷焼鉢である。359の一部は40m南に位置するIII—24区の溝SDi 41からも出土し，接合した。362は備前焼甕である。底部に陶印がみられる。この陶印は元和年間（1615～1624）に西窯9人の惣四郎，寛永（1624～1644）の頃に金重宗四郎，文政8年（1825）頃に西窯10人の羽介，嘉永2年（1849）に西竈組羽介が使用した陶印である。[9] 364は陶器鉢である。重ね焼きのため体部外面が帯状に剝離する。産地・生産年代は不明である。出土遺物から，この土は明治時代以降のものと考えられる。

SKi 41（第159図）

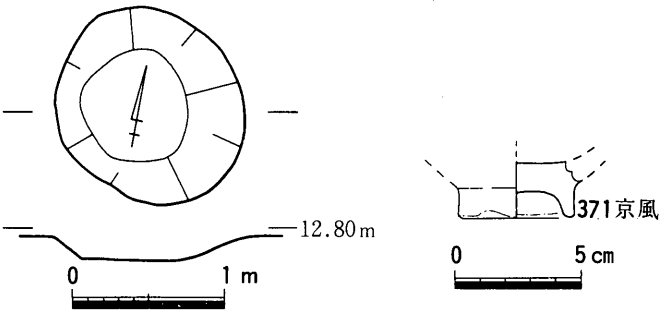
III—21区の北部で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.9m，短軸0.7m，深さ0.3mを測る。埋土は褐色粘質シルトブロック混じり淡灰青色砂質シルトである。瀬戸美濃陶器腰錆碗片が出土した。



第159図 SKi 41平・断面図(1/50)



第160図　SKi 42平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第161図　SKi 43平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)

出土遺物から，この土坑は19世紀前半以降のものと考えられる。

SKi 42（第160図）

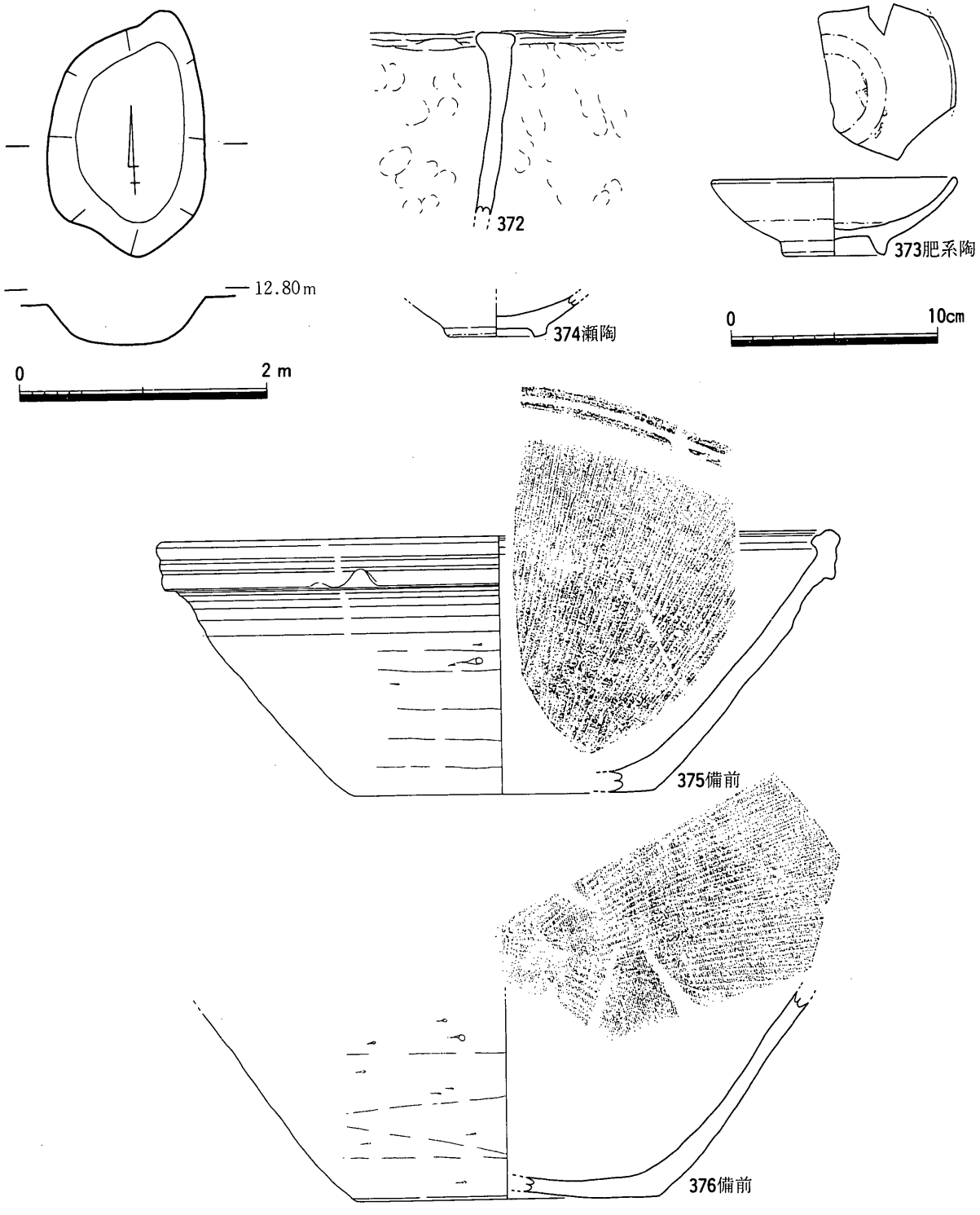
III—21区の北部で検出された土坑である。平面形はいびつな隅丸三角形を呈し，長軸2.9m，短軸2.0m，深さ0.3mを測る。埋土は褐色粘質シルトブロック混じり淡青灰色シルトである。瓦質土器羽釜（368・369），肥前陶胎染付碗（370），瓦片が出土した。370は18世紀前半のものである。出土遺物と埋土から，この土坑は18世紀前半以降のものと考えられる。

SKi 43（第161図）

III—21区の南部で検出された土坑である。平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物SBi 13の南部に位置する。平面形は円形を呈し，径1.2～1.3m，深さ0.15mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。京焼風陶器碗（371）が出土した。371は焼成が悪く，外面の釉は白濁する。17世紀後半から18世紀前半のものである。出土遺物から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。

SKi 44（第162図）

III—24区の北東部で検出された土坑である。SDi 41の東側に位置する。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸2.0m，短軸1.2m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土師器土鍋（372），肥前系陶器皿（373），瀬戸美濃陶器腰錆碗（374），備前焼擂鉢（375・376）が出土した。373は肥前系陶器皿である。内面蛇の目釉剝ぎの皿である。18世紀代のものであろう。374は瀬戸美濃陶器腰錆碗である。高台部が低く，断面方形を呈することから，18世紀後半から末のものと考えられる。375と376はいずれも白色砂粒・橙色砂粒を多量に含むなど胎土が非常に類似することから，同一個体の可能性が高い。18世紀後半のものである。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものと



第162図　SKi 44平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

考えられる。

SKi 45（第163図）

III—24区の北東部で検出された土坑である。SDi 41の西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸1.8m，短軸1.5m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付猪口（377），肥前系磁器染付瓶（378）が出土した。377は焼成不良で，表面が白濁する。18世紀中葉から末のものと考えられる。378も焼成不良で，表面が白濁する。江戸時代後期のものと考えら

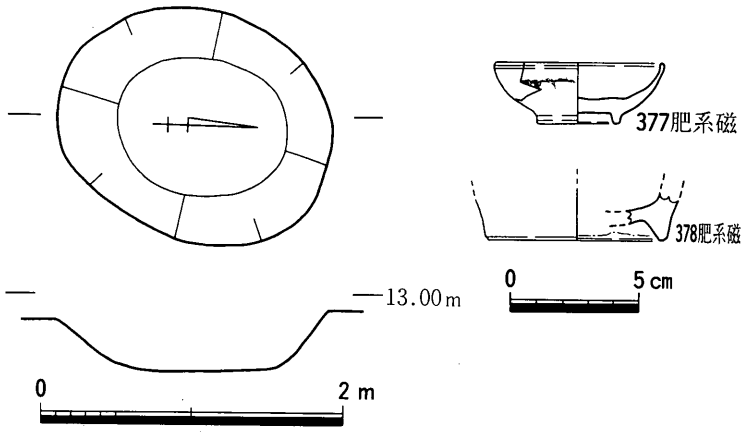
れる。出土遺物から，この土坑は18世紀後半以降のものと考えられる。

SKi 46（第164図）

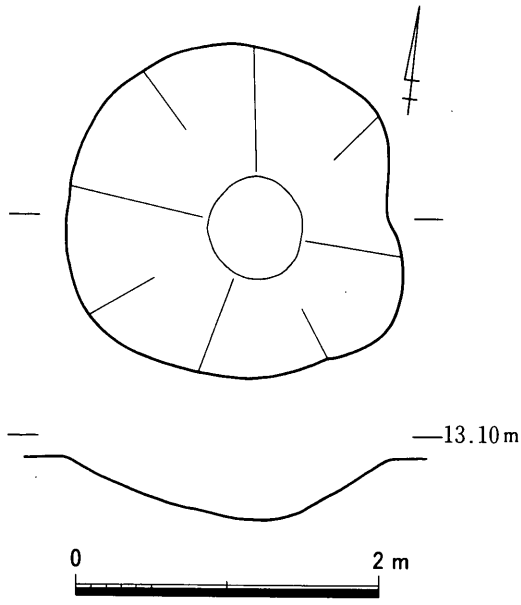
III—24区の北東部で検出された土坑である。SKi 45の南側に位置する。平面形はややいびつな円形を呈し，径2.15～2.3m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。国産陶器片が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 47（第165図）

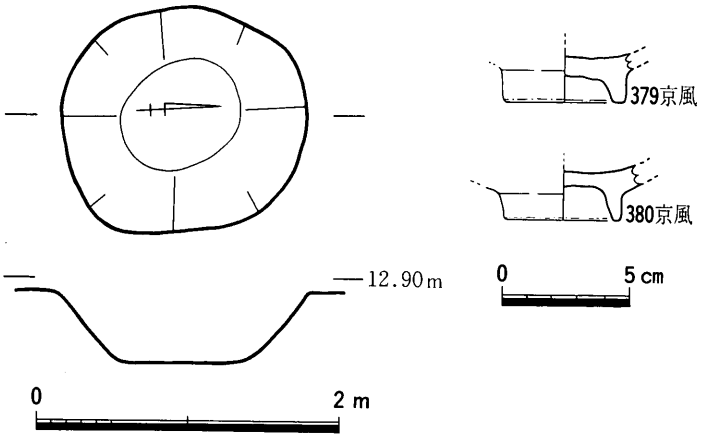
III—24区の南部で検出された土坑である。SDi 41の東側に位置する。平面形は円形を呈し，径1.5～1.6m，深さ0.5mを測る。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。京焼風陶器碗（379・380），土師質土器片が出土した。379・380は高台部の形態から17世紀後半から18世紀初頭のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。



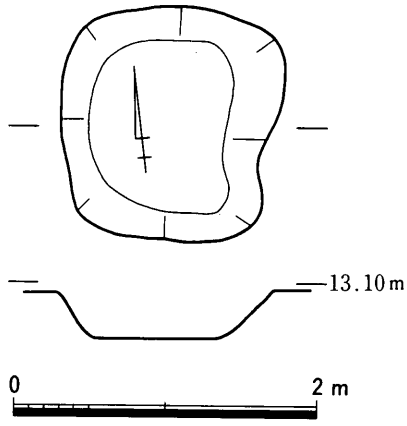
第163図　SKi 45平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



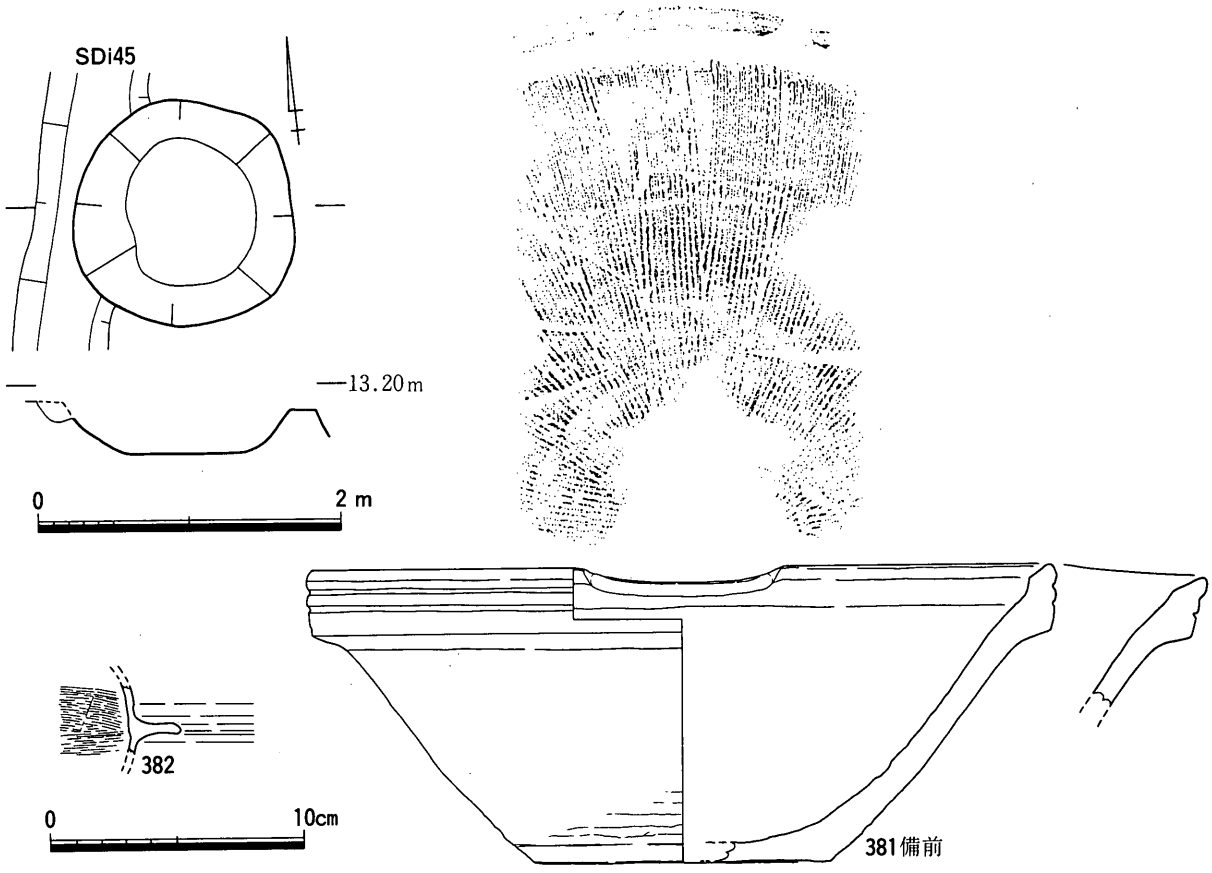
第164図　SKi 46平・断面図（1/50）



第165図　SKi 47平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第166図　SKi 48平・断面図（1/50）



第167図　SKi 49平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 48（第166図）

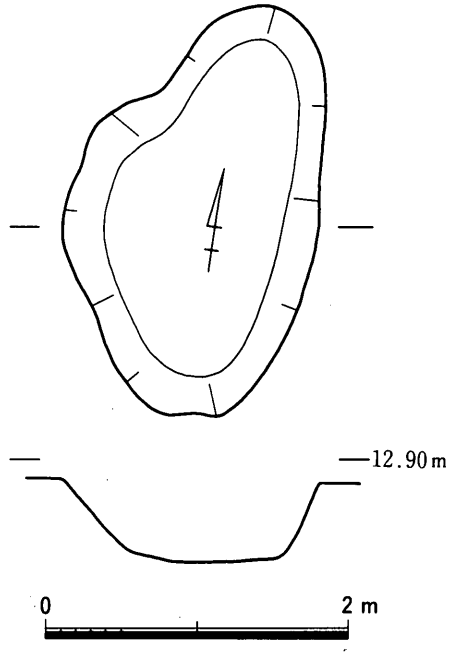
III—24区の北部で検出された土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し，長軸1.6m，短軸1.3m，深さ0.35mを測る。埋土は暗褐色粘質シルトブロック混じり淡灰色砂質シルトである。色絵磁器片が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は19世紀以降のものと考えられる。

SKi 49（第167図）

III—24区の北部で検出された土坑である。遺構の西部は江戸時代の溝SDi 45と重複する。平面形はほぼ円形を呈し，径1.4～1.5m，深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色粘質シルトブロック混じり淡灰色砂質シルトである。備前焼擂鉢（381），瓦質土器羽釜(382)，国産磁器染付片，瓦片が出土した。381は17世紀末から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀末以降のものと考えられる。

SKi 50（第168図）

III—22区の北部で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸2.8m，短軸1.7m，深さ0.5mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。国産磁器染付片が出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑

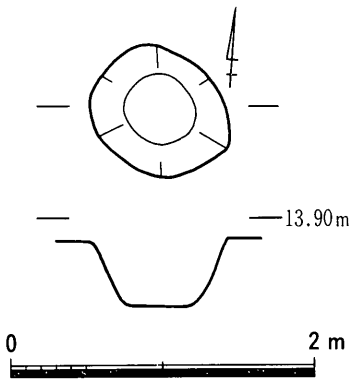


第168図　SKi 50平・断面図(1/50)

は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 51（第169図）

Ⅰ地区の北西部，Ⅲ—30区の北西部で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径0.8～0.9m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土師質土器大甕・瓦質土器片が少量出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



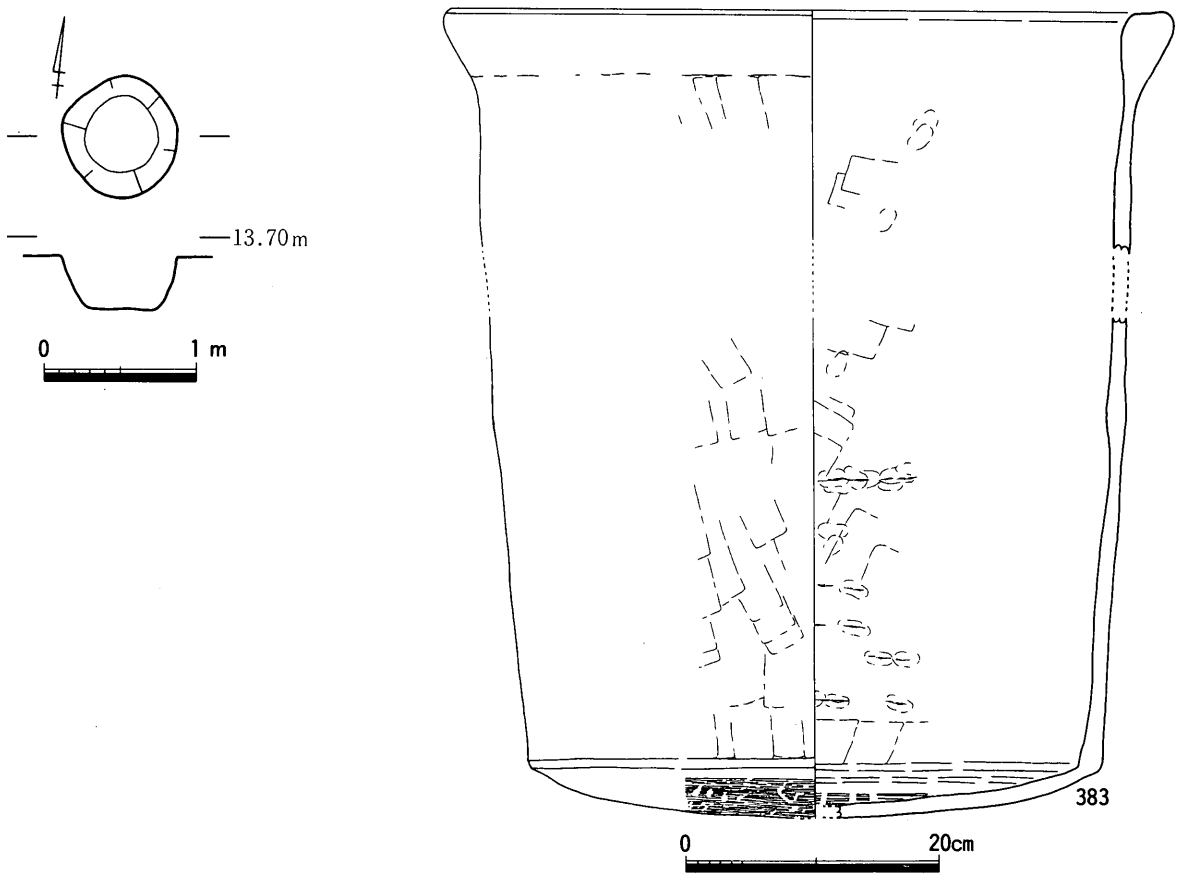
第169図 SKi 51平・断面図（1/50）

SKi 52（第170図）

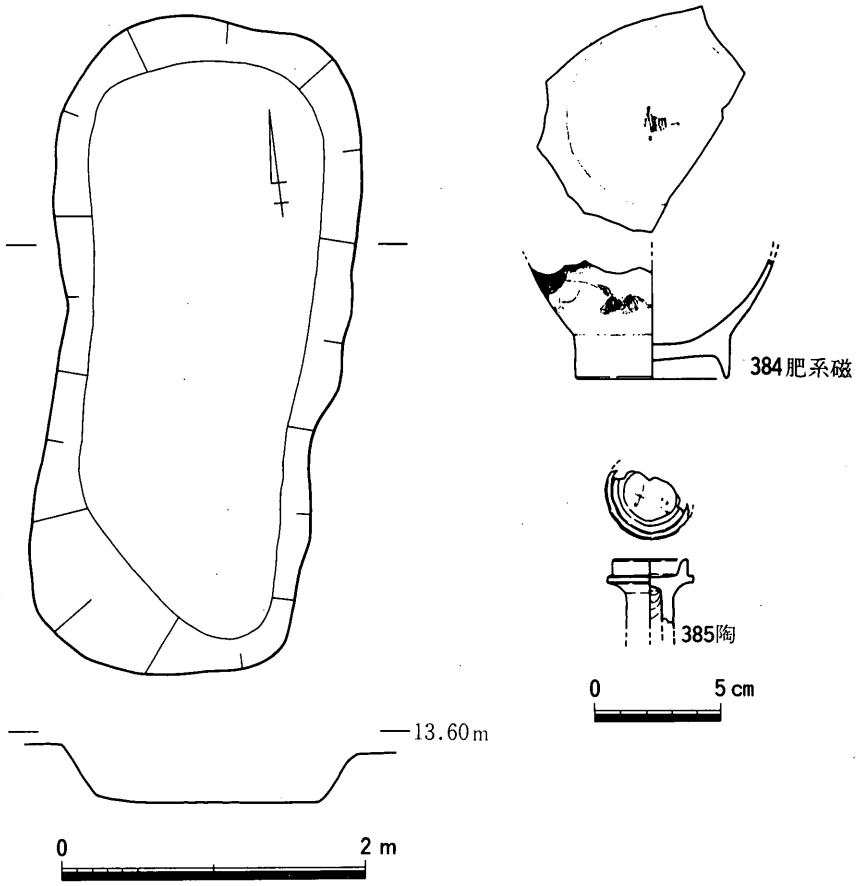
Ⅲ—30区の北西部で検出された土坑である。SKi 51の東側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.35mを測る。土坑には土師質土器大甕（383）が据えられていた。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 53（第171図）

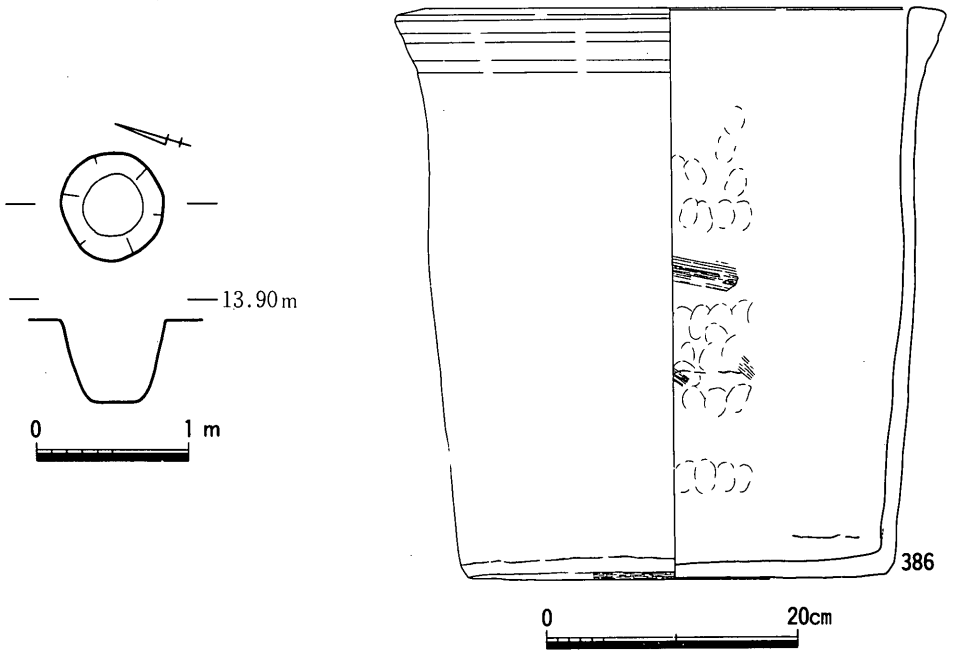
Ⅲ—30区で検出された土坑である。SKi 52の東部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸4.2m，短軸1.7～2.0m，深さ0.25mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付碗（384），陶器蓋（385），土師質土器片が少量出土した。384は広東形碗で，19世紀前半のものである。385はコバルト釉を使用しており，明治時代以降のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。



第170図　SKi 52平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/6）



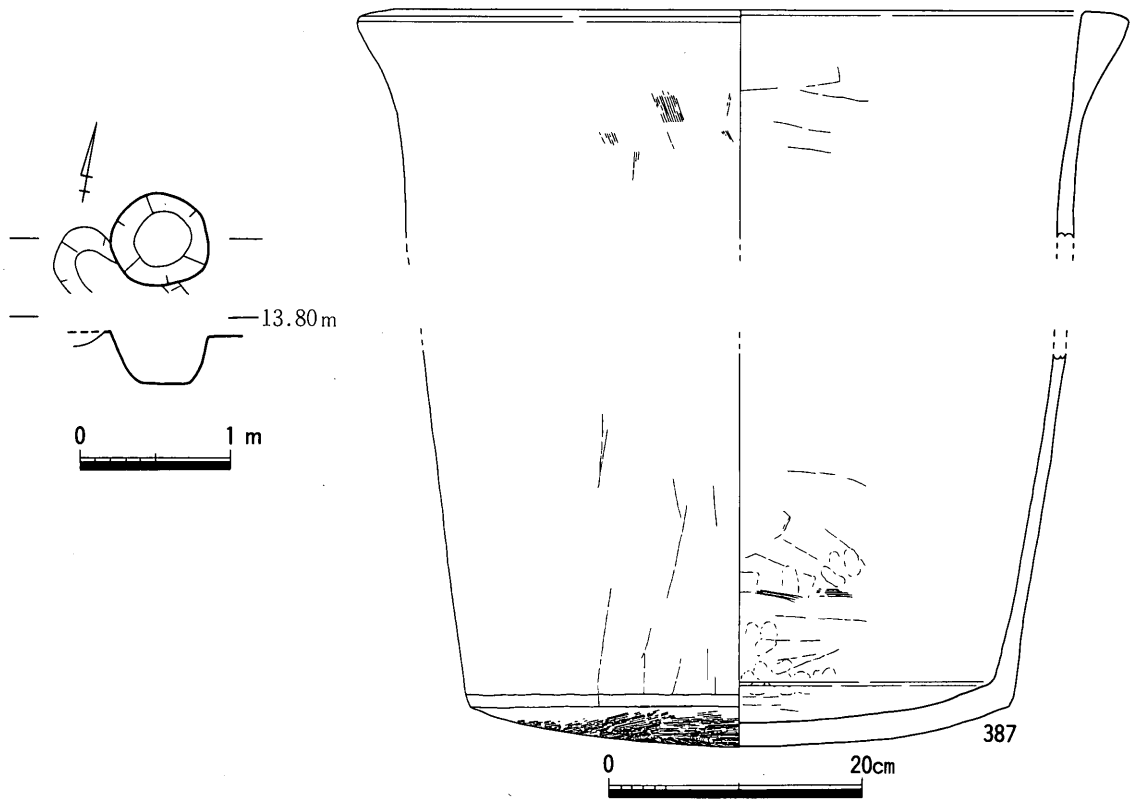
第171図　SKi 53平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第172図　SKi 54平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/6）

SKi 54（第172図）

III—30区の北西部で検出された土坑である。SKi 51の南側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.6mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土師質土器大甕(386)が据えられていた。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



第173図　SKi 55平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/6）

SKi 55（第173図）

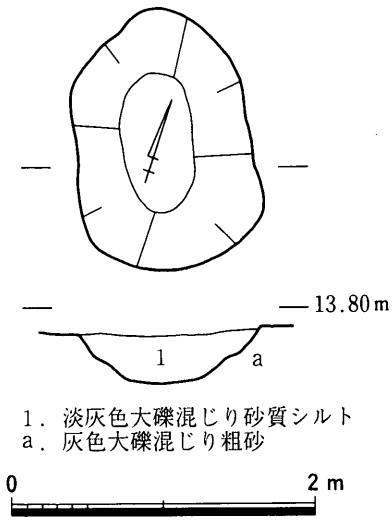
III—30区の北西部で検出された土坑である。SKi 54の南側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.6m，深さ0.3mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土師質土器大甕（387）が底部を下に据えられていた。国産色絵磁器片も出土した。出土遺物から，この土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

SKi 56（第174図）

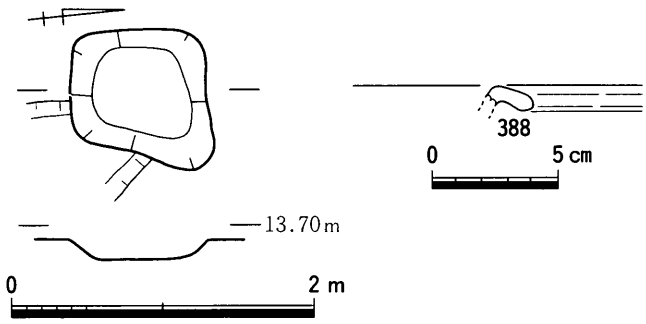
III—30区の南部で検出された土坑である。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸1.2m，深さ0.3mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 57（第175図）

III—32区の北部で検出された土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し，長軸0.95m，短軸0.8m，深さ0.15mを測る。



第174図　SKi 56平・断面図（1/50）

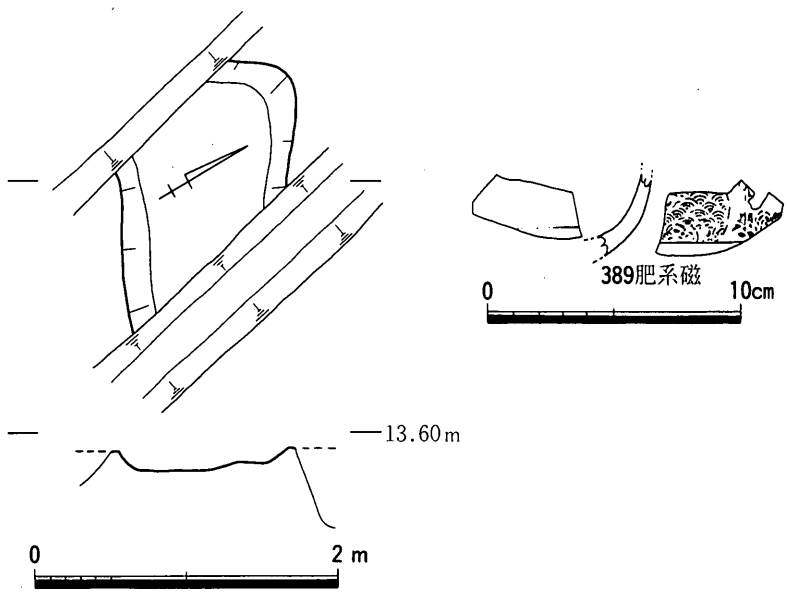


第175図　SKi 57平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

埋土は淡灰色砂質シルトである。瓦質土器焙烙（388），土師質土器片・陶器片少量が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 58（第176図）

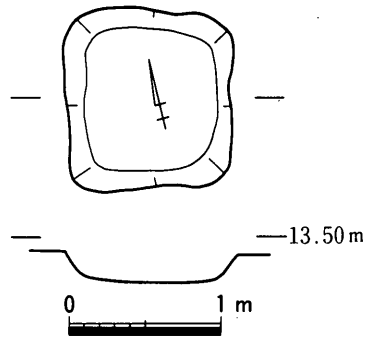
III—28区で検出された土坑である。攪乱溝に挟まれており，遺構の両端は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され，長軸1.6m以上，短軸1.1m，深さ0.15mを測る。埋土は褐色粘質シルトブロック混じり淡灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付碗（389），土師質土器片が出土した。389は胎土の色調が灰色みを帯びる。型紙摺で，明治・大正時代のものである。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。



第176図　SKi 58平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 59（第177図）

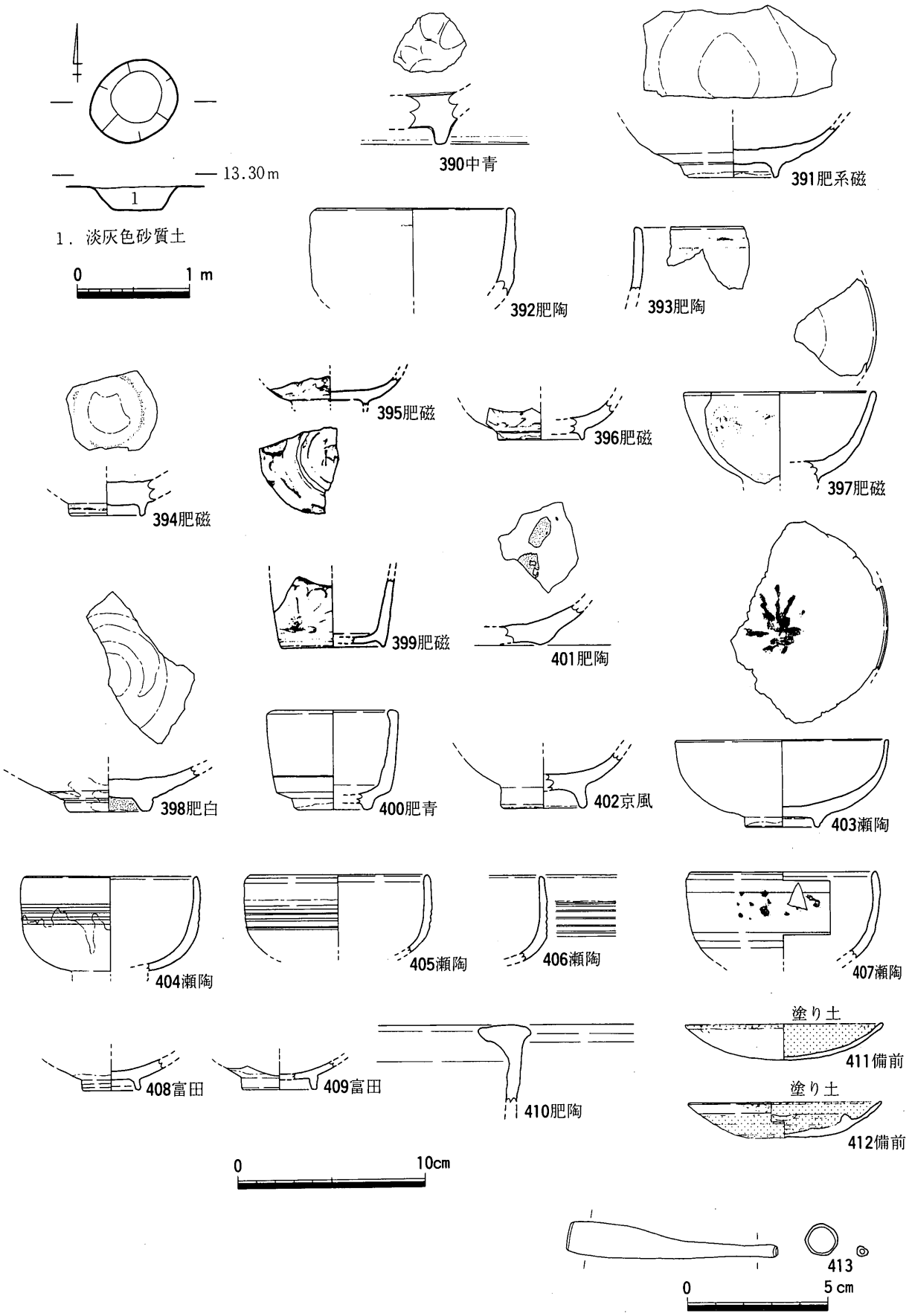
III—28区で検出された土坑である。SKi 58の南東部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.2m，短軸1.1m，深さ0.2mを測る。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。国産白磁片が出土した。埋土から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



第177図　SKi 59平・断面図（1/50）

SKi 60（第178図）

III—28区で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 38の南側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸0.8m，短軸0.65m，深さ0.2mを測る。中国産青磁鉢（390），肥前系磁器染付皿（391），肥前陶胎染付碗（392・393），肥前磁器染付碗（394～397），肥前白磁鉢（398），肥前磁器染付猪口（399），肥前青磁火入れ（400），肥前陶器灰釉皿（401），京焼風陶器碗（402），瀬戸美濃陶器染付皿（403），瀬戸美濃陶器腰錆碗（404～406），瀬戸美濃陶器染付碗（407），富田焼陶器碗（408・409），肥前陶器甕（410），備前焼灯明受皿（411・412），煙管（413），土壁片が出土した。390は中国産青磁鉢である。畳付は無釉であることから，横田・森田分類の龍泉窯系青磁III類で，13世紀後半から14世紀中葉のものと考えられる。[6] 391は肥前系磁器染付皿である。焼成不良で，表面は白濁し，細かい貫入が入る。見込みに蛇の目釉剝ぎが施され，アルミナ砂が付着することから，19世紀代のものであろう。392・393は肥前陶胎染付碗で，18世紀前半のものである。394～397は肥前磁器染付碗である。394も見込みに蛇の目釉剝ぎが施され，砂が付着する。底部が分厚いことから，波佐見産で，18世紀後半のものと考えられる。395は底部外面に「大明年製」の崩れ銘が描かれる。395・396は18世紀前半から中葉のものである。397は胎土が灰色を呈し，染付の発色が緑みを帯び，弾けたようになる。底部が分厚く，見込み蛇の目釉剝ぎが施されることから，18世紀中葉から末の波佐見産のものと考えられる。398は肥前白磁鉢である。体部下半から底部外

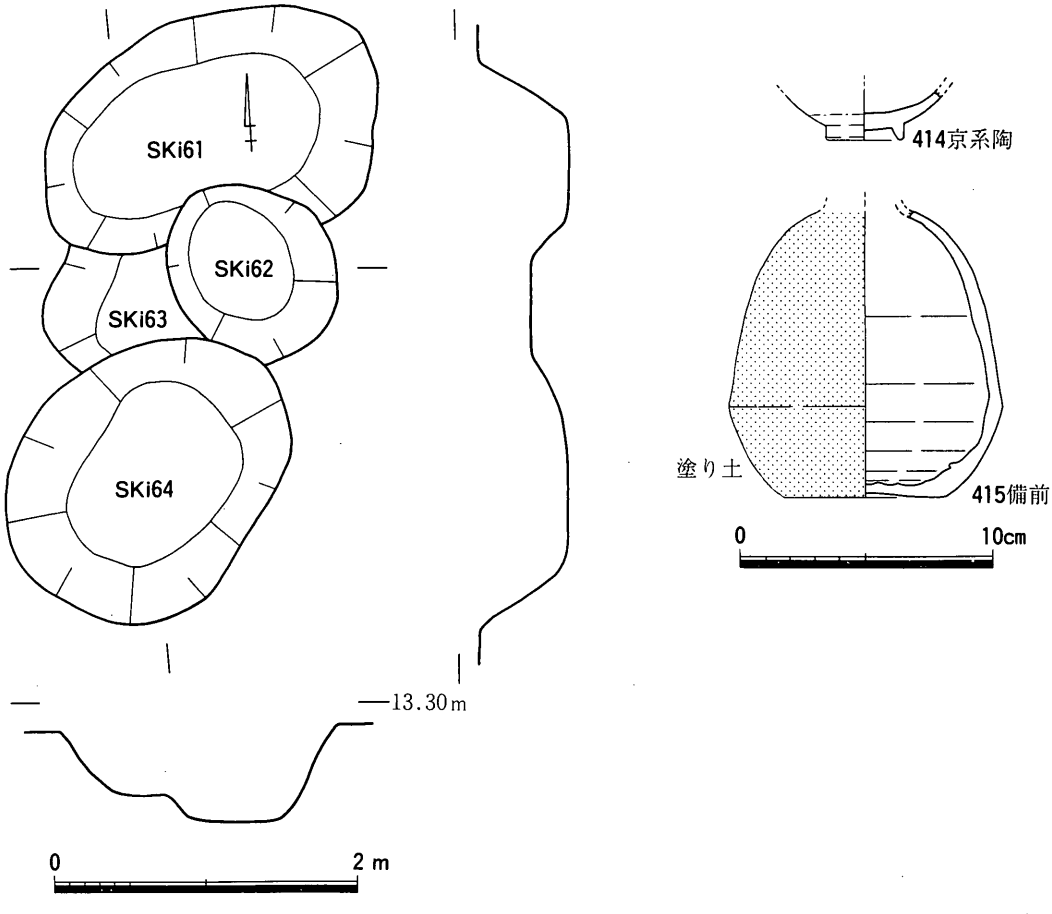


第178図　SKi 60平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/2）

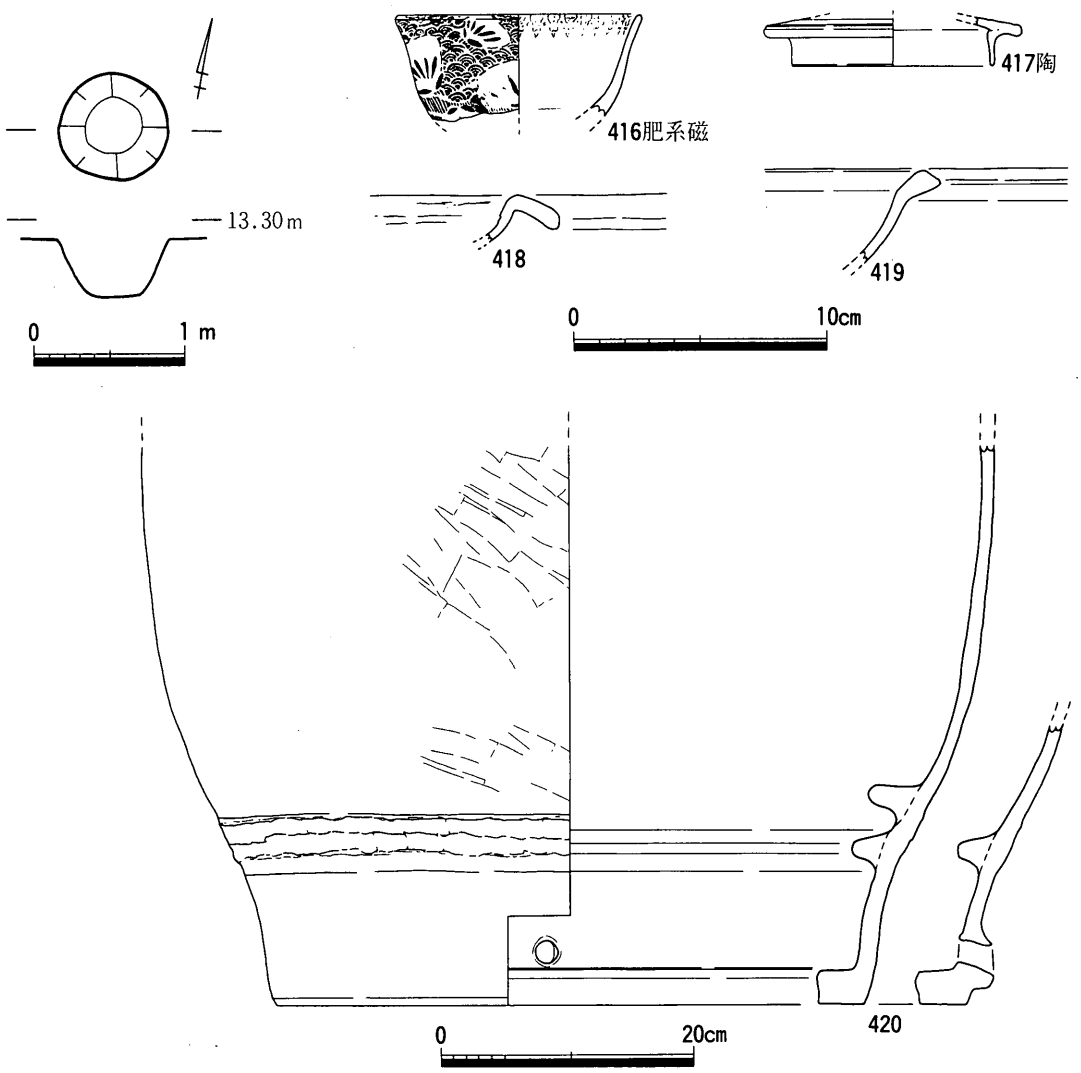
面にかけ無釉である。釉の掛け方は雑である。高台内には砂が付着する。見込み蛇の目釉剝ぎが施されており，粗雑な作りであることから，17世紀後半から18世紀前半の波佐見系のものであろう。399は肥前磁器染付猪口である。氷裂文・花が描かれる。18世紀中葉から末のものである。400は肥前青磁火入れである。外面体部下半の釉がムラになる。やや暗い緑色を呈する。18世紀頃のものである。401は肥前陶器灰釉皿である。砂目積みで，1600～1630年のものである。402は京焼風陶器碗である。17世紀後半から18世紀前半のものである。403は瀬戸美濃陶器染付皿である。見込みに鉄釉と呉須により草花文を描く。18世紀末から19世紀前半のものである。404～406の瀬戸美濃陶器腰錆碗はいずれも19世紀前半のものである。407は瀬戸美濃陶器染付碗である。外面に呉須による梅花文を施す。19世紀前半のものである。408・409はいずれも胎土分析で香川県大川町の富田焼と特定したものである。410は肥前陶器甕の口縁部破片である。口唇部を内外面に肥厚させ，断面形がT字形となる。17世紀後半から18世紀前半のものである。前述のように410は344と同一個体の可能性も考えられるが，接合しなかった。411・412は備前焼灯明受皿である。411は内面に塗り土が施される。桟は付かない。412は桟付きで，口縁部内外面以外に塗り土が施される。いずれも18世紀から19世紀代のものであろう。遺物は13世紀から14世紀のものが混じるが，19世紀代のものがかなり多くみられることから，この土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

SKi 61・SKi 62・SKi 63・SKi 64（第179図）

III—28区の東部で検出された土坑である。4基の土坑が連続して重複するが，埋土もほぼ同一で，新旧関係は不明である。SKi 61の平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸2.3m，短軸1.5m，深さ0.6m



第179図　SKi 61・SKi 62・SKi 63・SKi 64平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第180図　SKi 65平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3・1/6）

を測る。SKi 62の平面形はほぼ円形を呈し，径1.1～1.2m，深さ0.65mを測る。SKi 63の平面形は不明であるが，深さ0.4mを測る。SKi 64の平面形は楕円形を呈し，長軸2.0m，短軸1.6m，深さ0.6mを測る。埋土はいずれも黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。京焼系陶器碗(414)，備前焼徳利(415)，瀬戸美濃陶器腰錆碗片，瓦片が出土した。414は産地・時期とも不明である。おそらく，19世紀代以降のものであろう。415は外面に塗り土が施される。出土遺物から，これらの土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

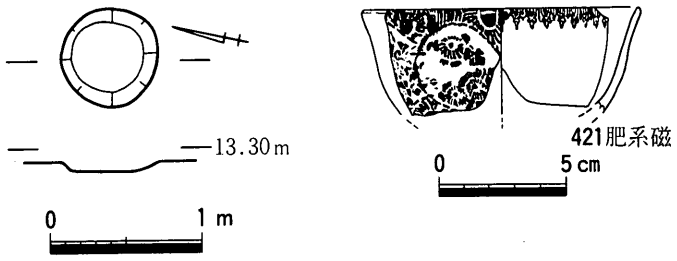
SKi 65（第180図，図版42）

III—28区で検出された土坑である。SKi 61の西側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土坑底面には土師質土器風呂釜(420)が底部を下に据えられていた。その他，埋土からは肥前系磁器染付碗(416)，陶器透明釉蓋(417)，土師質土器焙烙（418），瓦質土器焙烙（419），瓦片が出土した。416は型紙摺で，明治・大正時代のものである。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。

SKi 66（第181図）

III—28区で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物 SBi 38の南西側に位置する。平面形は円形

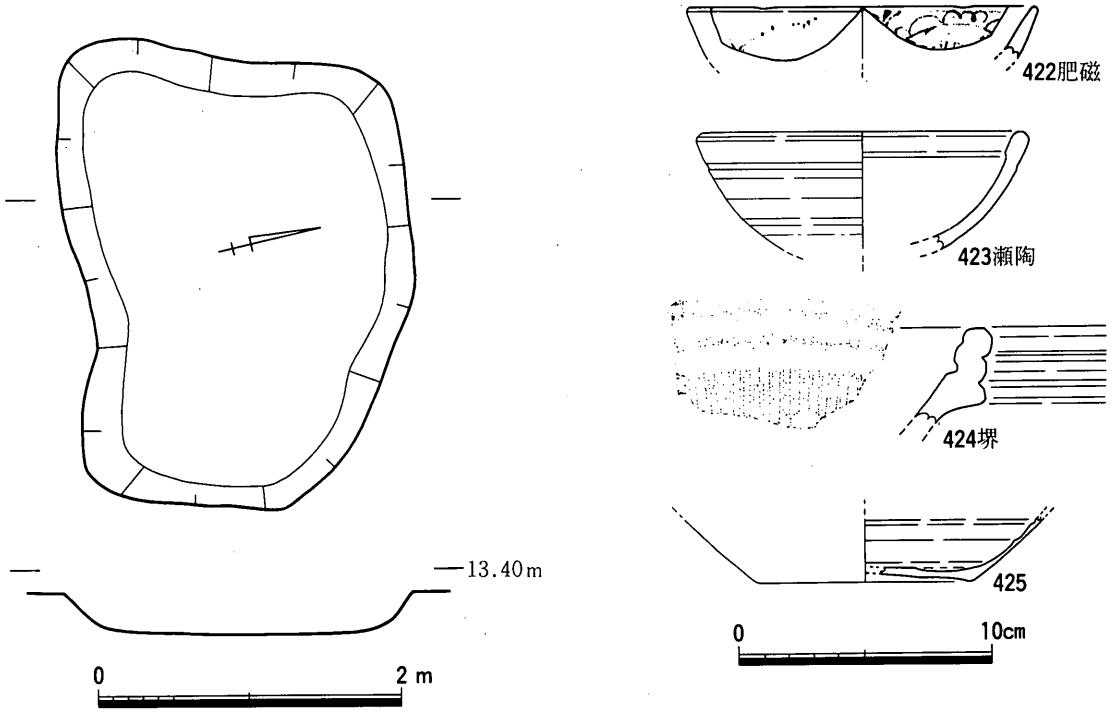
を呈し，径0.65m，深さ0.1mを測る。埋土は褐色粘質シルト混じりブロック淡灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付碗（421），備前焼系擂鉢が出土した。421は型紙摺で，明治・大正時代のものである。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。



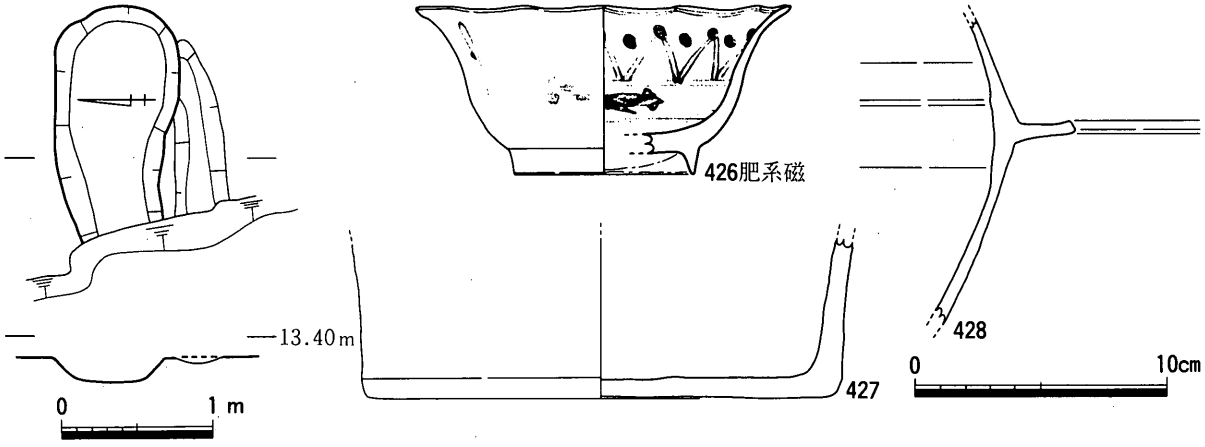
第181図　SKi 66平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

SKi 67（第182図）

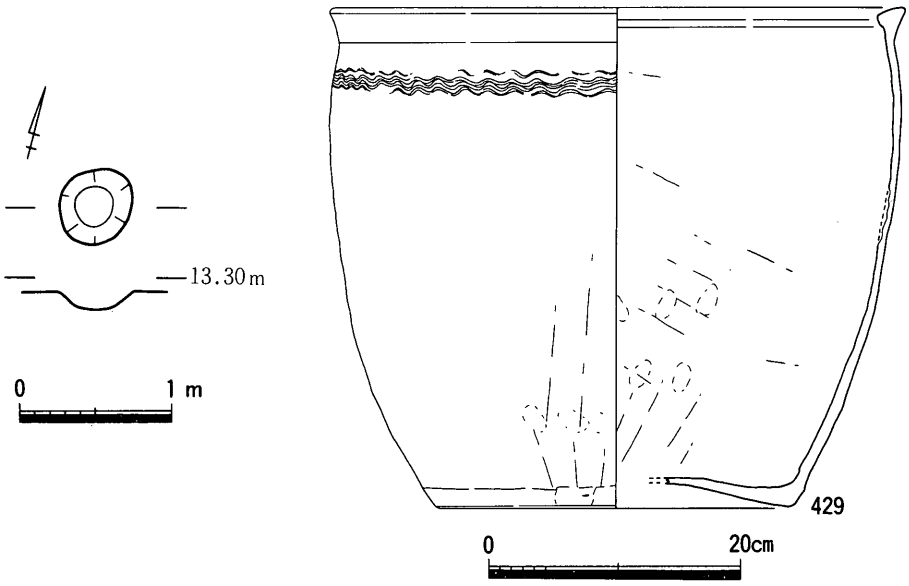
III—28区で検出された土坑である。SKi 66の南側に位置する。平面形はいびつな隅丸台形を呈し，長軸3.1m，短軸1.9m，深さ0.25mを測る。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。肥前磁器染付皿（422），瀬戸美濃陶器片口鉢（423），堺または明石擂鉢（424），土師質土器土瓶（425），瀬戸



第182図　SKi 67平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）



第183図　SKi 68平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）



第184図　SKi 69平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/6）

美濃陶器腰錆碗片が出土した。422は肥前磁器染付皿である。外面に唐草，内面に扇を描く。波佐見系で，18世紀後半のものであろう。423は瀬戸美濃陶器片口鉢である。幕末頃のものであろう。424は堺または明石擂鉢である。口縁部外縁帯の張りが大きく，内面に2条の沈線状の凹みが巡ることから，白神分類のII型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は19世紀以降のものと考えられる。

SKi 68（第183図）

III—28区で検出された土坑である。SKi 67の南側に位置する。遺構の西部は攪乱によって削平されているため，全体は不明である。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸1.5m以上，短軸0.7m，深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付鉢（426），土師質土器甕（427），瓦質土器羽釜(428)，国産磁器染付片，土師質土器片が少量出土した。426は肥前系磁器染付鉢で，19世紀初頭から幕末のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

SKi 69（第184図）

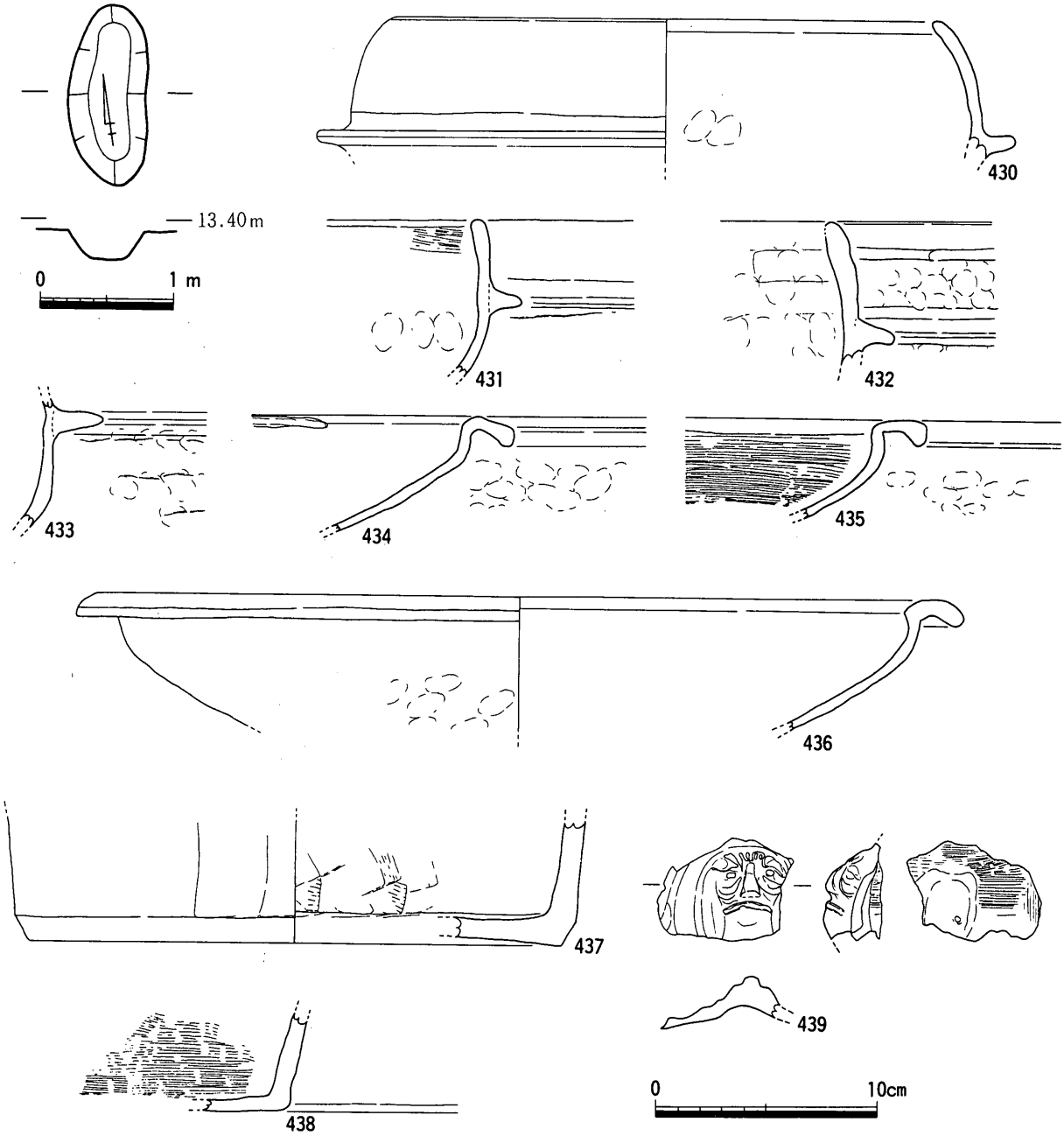
III—28区で検出された土坑である。SEi 09の西側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.1mを測る。土坑には土師質土器甕（429）が底部を下に据え付けられていた。埋土は淡灰色砂質シルトである。その他，瀬戸美濃陶器片が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 70（第185図）

III—28区で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸1.3m，短軸0.5m，深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。江戸時代の掘立柱建物SBi 25の南東側に位置する。瓦質土器羽釜（430～433），瓦質土器焙烙（435），土師質土器焙烙（434・436），土師質土器甕（437・438），土師質土器器種不明（439），土師質土器片が少量出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 71（第186図）

III—28区で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 37と重複する。平面形は円形を呈し，

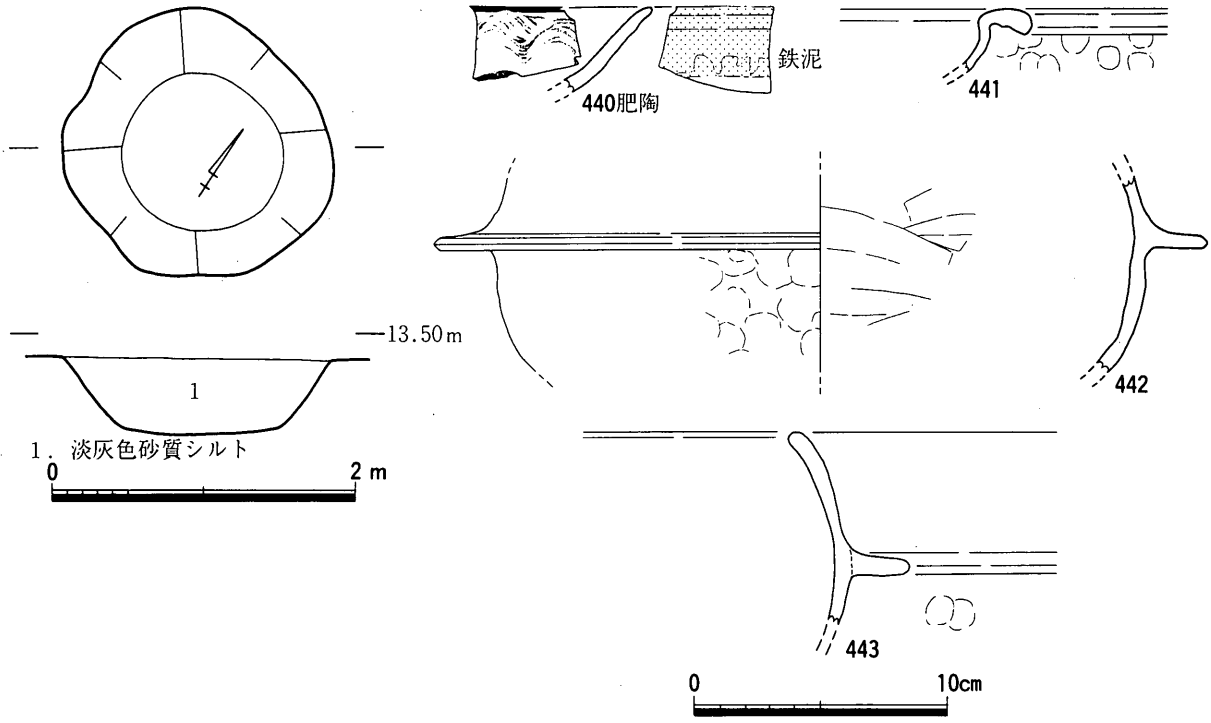


第185図　SKi 70平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

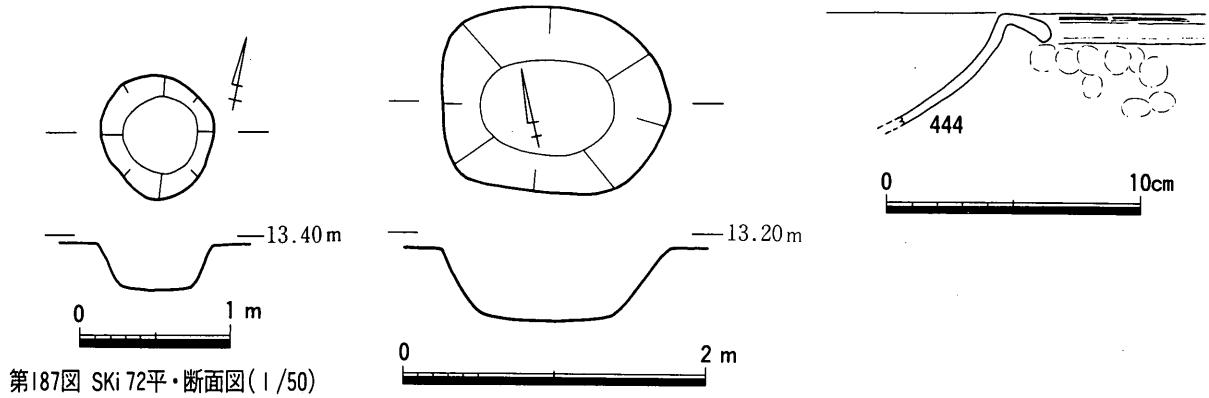
径1.6～1.7m，深さ0.5mを測る。肥前陶器刷毛目皿(440)，瓦質土器焙烙(441)，瓦質土器羽釜(442・443)，瓦質瓦・陶器・磁器片少量が出土した。440は肥前陶器刷毛目皿で，18世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものと考えられる。

SKi 72（第187図）

III—28区で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物SBi 25の南側に位置し，弥生時代の溝SDi 20と重複する。平面形は円形を呈し，径0.7～0.8m，深さ0.3mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。肥前陶胎染付片・土師質土器焙烙片が出土した。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものと考えられる。



第186図　SKi 71平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）



第187図 SKi 72平・断面図(1/50)

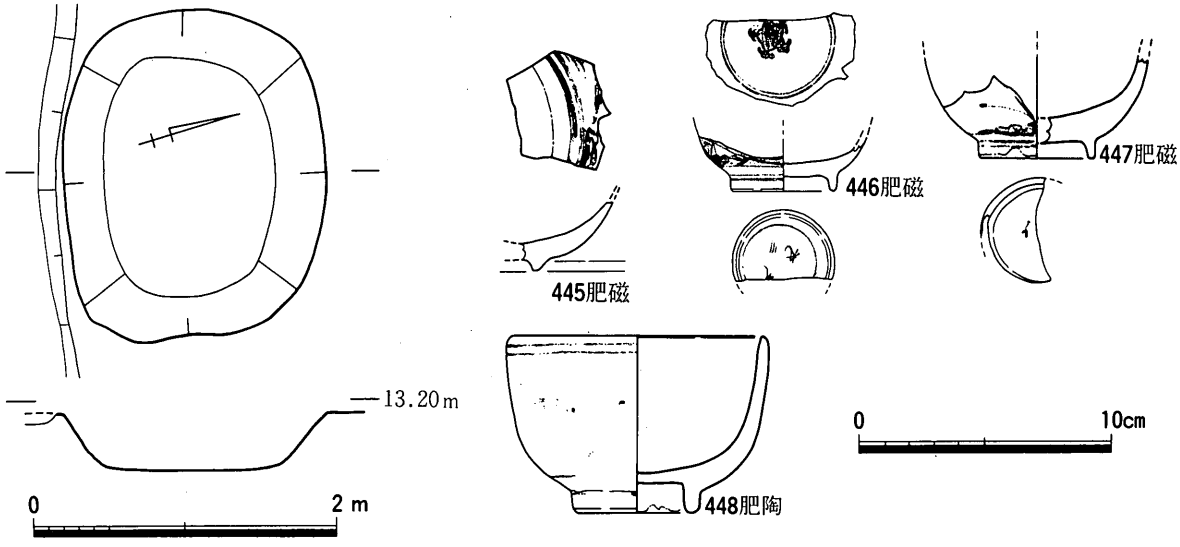
第188図　SKi 73平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

SKi 73（第188図）

III—28区の東部で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，長軸1.5m，短軸1.2m，深さ0.5mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。土師質土器焙烙（444）が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 74（第189図）

III—28区で検出された土坑である。SKi 73の西側に位置する。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸2.1m，短軸1.7m，深さ0.4mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。肥前磁器染付皿（445），肥前磁器染付碗（446・447），肥前陶胎染付碗（448），土師質土器焙烙片が少量出土した。445は肥前磁器染付皿で，見込蛇の目釉剝ぎを施す。18世紀前半から中葉のものである。446・447は肥前磁器染付碗である。446はコンニャク印判で見込に五弁花文を施す。17世紀末から18世紀前半のものである。447は胎土が灰色みを帯び，底部が分厚く，作りも粗雑である。底部外面に「大明年製」

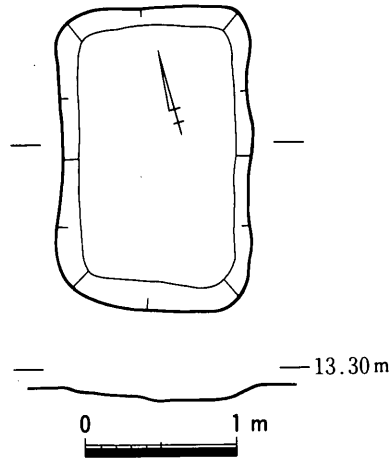


第189図　SKi 74平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

の崩れが描かれる。波佐見系で，18世紀後半のものと考えられる。448は肥前陶胎染付碗で，18世紀前半のものである。出土遺物から，この土坑は18世紀以降のものと考えられる。

SKi 75（第190図）

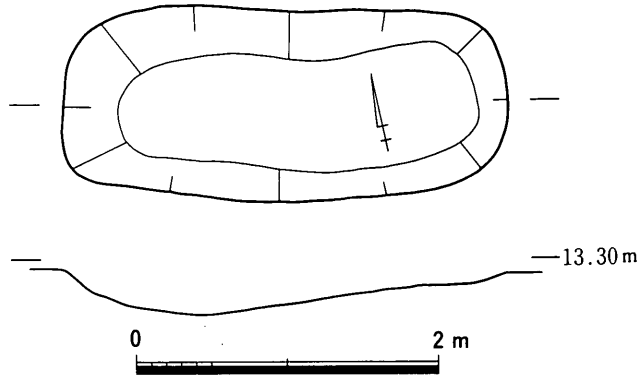
III—28区で検出された土坑である。SKi 74の西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸2.0m，短軸1.2m，深さ0.1mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。瓦質土器片少量，国産磁器染付片が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



第190図　SKi 75平・断面図(1/50)

SKi 76（第191図）

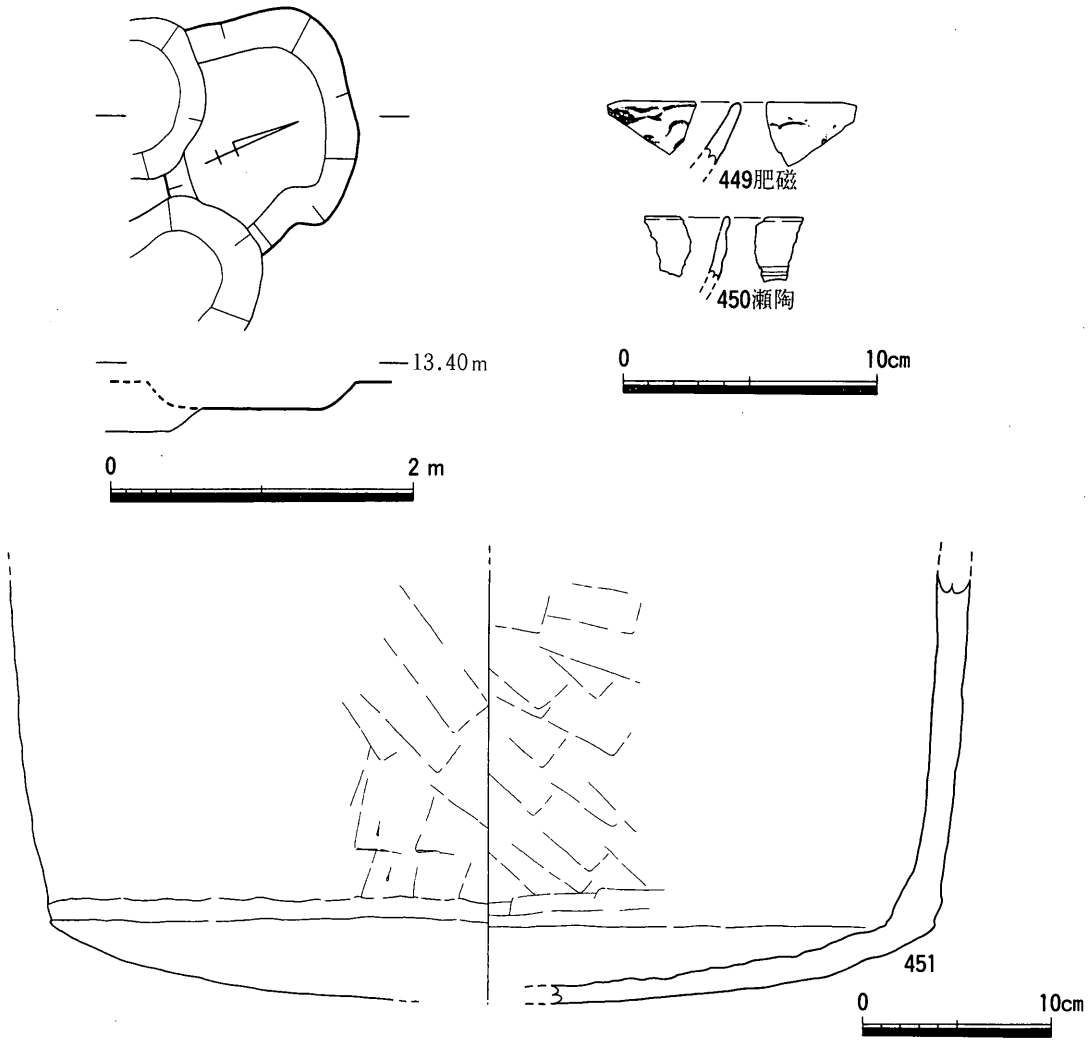
III—28区で検出された土坑である。SKi 175の南西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸3.0m，短軸1.3m，深さ0.3mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色粘質シルトである。国産磁器染付片が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



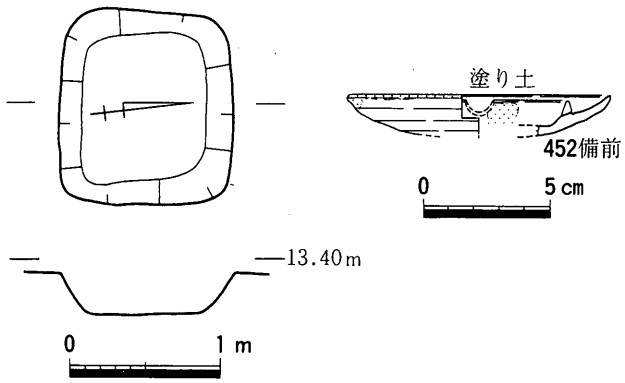
第191図　SKi 76平・断面図(1/50)

SKi 77（第192図）

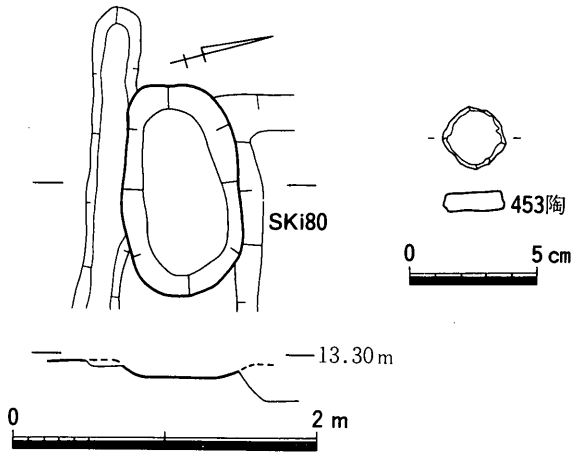
III—28区で検出された土坑である。SKi 76の西側に位置する。遺構の西部は平安時代から鎌倉時代の溝SDi 39と重複し，南部は江戸時代の土坑2基と重複する。平面形はいびつな隅丸方形を呈し，長軸1.5m，短軸1.3m，深さ0.2mを測る。肥前磁器染付皿（449），瀬戸美濃陶器腰錆碗（450），土師質土器大甕（451）が出土した。449は肥前磁器染付皿である。内面に宝物を描く。胎土は灰色みを帯びる。波佐



第192図　SKi 77平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3・1/4）



第193図 SKi 78平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)

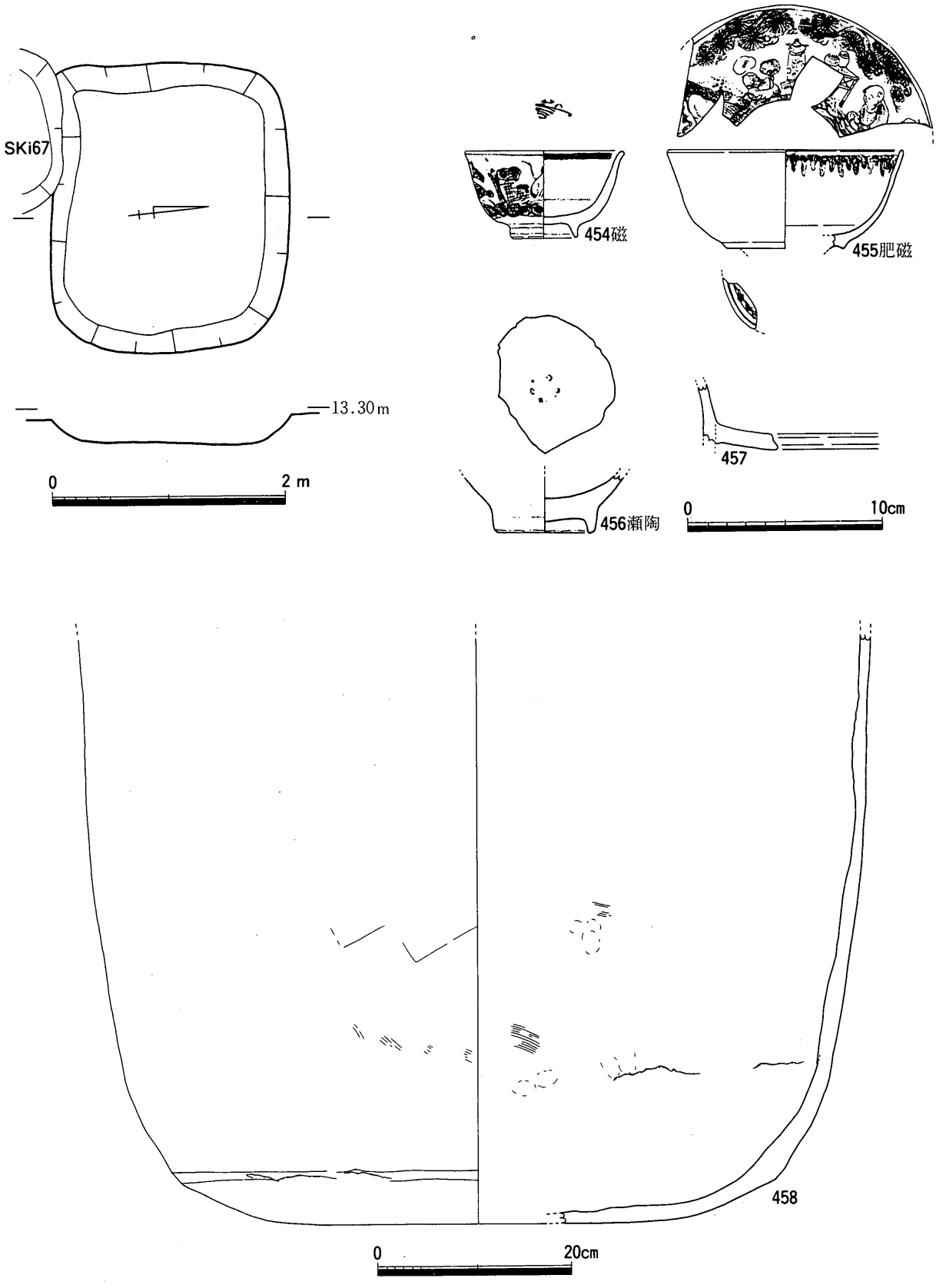


第194図 SKi 79平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)

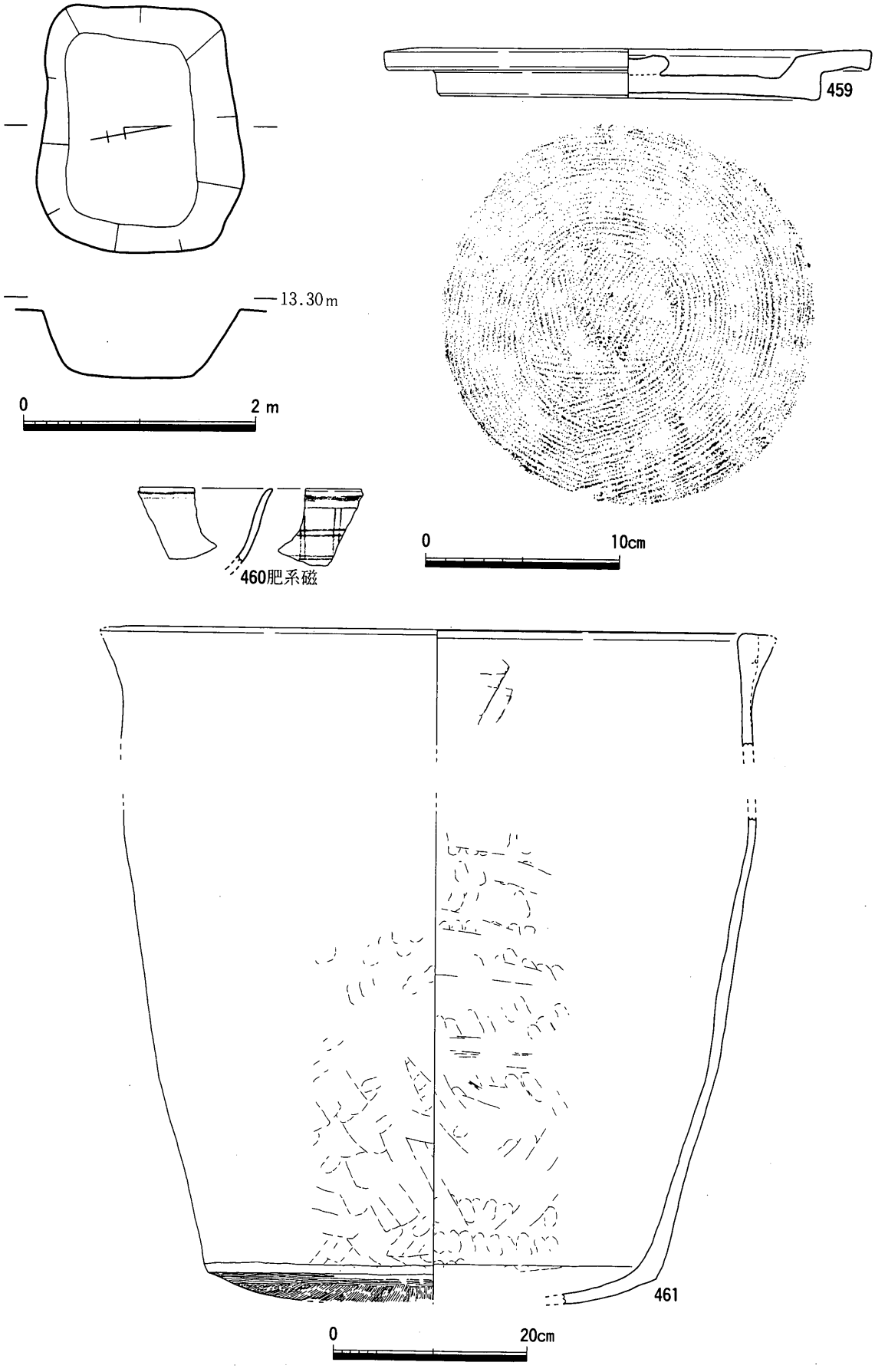
見系で，18世紀後半のものと考えられる。450は瀬戸美濃陶器腰錆碗の口縁部小破片である。外面の沈線が浅いことから，19世紀前半のものであろう。出土遺物から，この土坑は19世紀前半以降のものと考えられる。

SKi 78（第193図）

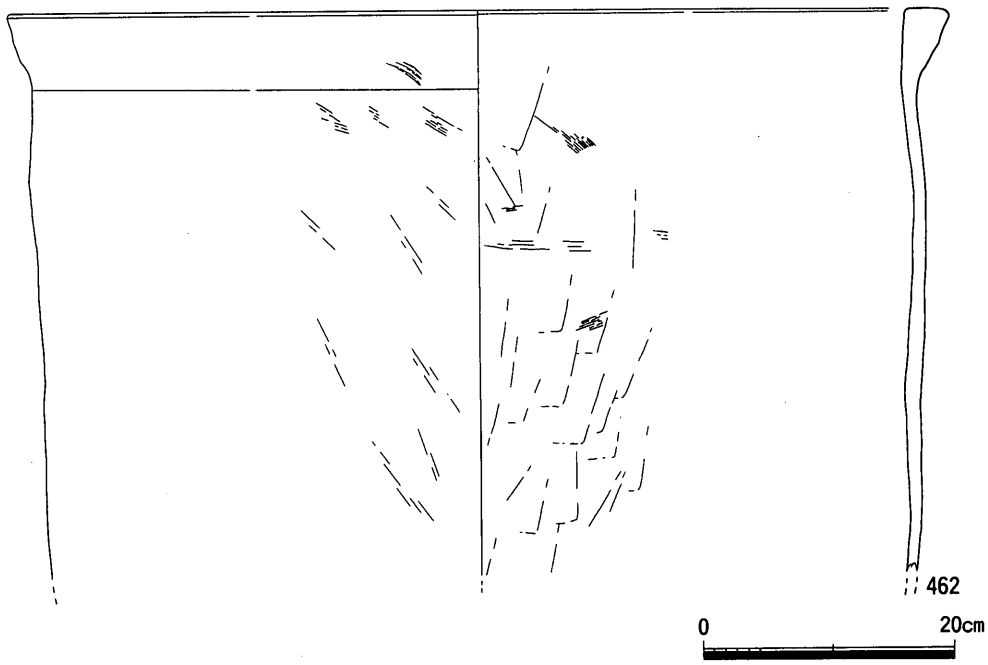
III—29区の北部で検出された土坑である。江戸時代の掘立柱建物 SBi 37と重複する。平面形は隅丸方



第195図　SKi 80平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/6）



第196図　SKi 81平・断面図（1/50），出土遺物実測図1（1/3・1/6）



第197図　SKi 81出土遺物実測図２（１/６）

形を呈し，長軸1.3m，短軸1.1m，深さ0.3mを測る。備前焼灯明受皿(452)，瓦片，土師質土器片，陶器片が少量出土した。452は塗り土が施される。桟が付くことから，18世紀以降のものであろう。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものであろう。

SKi 79（第194図）

III—29区で検出された土坑である。SKi 80の南側に隣接する。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸1.4m，短軸0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり黒褐色小礫混じりシルトである。円盤状土製品（453），瓦片・土師質土器大甕片が少量出土した。453は陶器破片を再利用したものである。胎土は赤褐色を呈し，内外面に鉄泥が施されることから，肥前陶器の破片を打ち欠いて整形したものと考えられる。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 80（第195図）

III—28区とIII—29区の境界付近で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.5m，短軸2.0m，深さ0.25mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。磁器染付碗（454），肥前磁器染付碗(455)，瀬戸美濃陶器染付碗(456)，瓦質土器羽釜(457)，土師質土器大甕(458)が出土した。なお，458の一部は1.5m東に位置するSKi 81からも出土し，両者は接合した。454は磁器染付碗である。呉須の発色が悪く，染付の一部が淡くなっている。産地は不明であるが，端反りになることから，幕末頃のものと考えられる。455は肥前磁器染付碗である。体部下半に突帯が付き，鉄釉が塗布される。外面に唐子を描く。19世紀初頭から幕末頃のものであろう。456は瀬戸美濃陶器染付碗で，広東形を呈する。19世紀代のものである。出土遺物から，この土坑は19世紀代以降と考えられる。

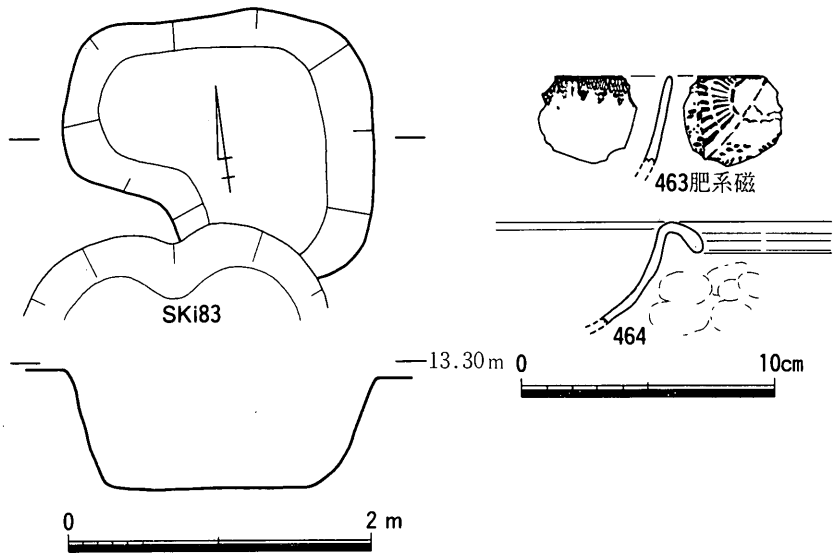
SKi 81（第196・197図，図版43）

III—29区の北端で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，長軸2.1m，短軸1.6m，深さ0.6mを測る。土坑内西部には土師質土器大甕（461）が底部を下に据えられており，内部には土師質土器蓋（459）が立て掛けられていた。また，土坑内東部には土師質土器大甕（462）がつぶれた状態で出土した。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。その他には肥前系磁器染付碗（460）が出土し

た。460は端反り形で，1820～1860年のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

SKi 82（第198図）

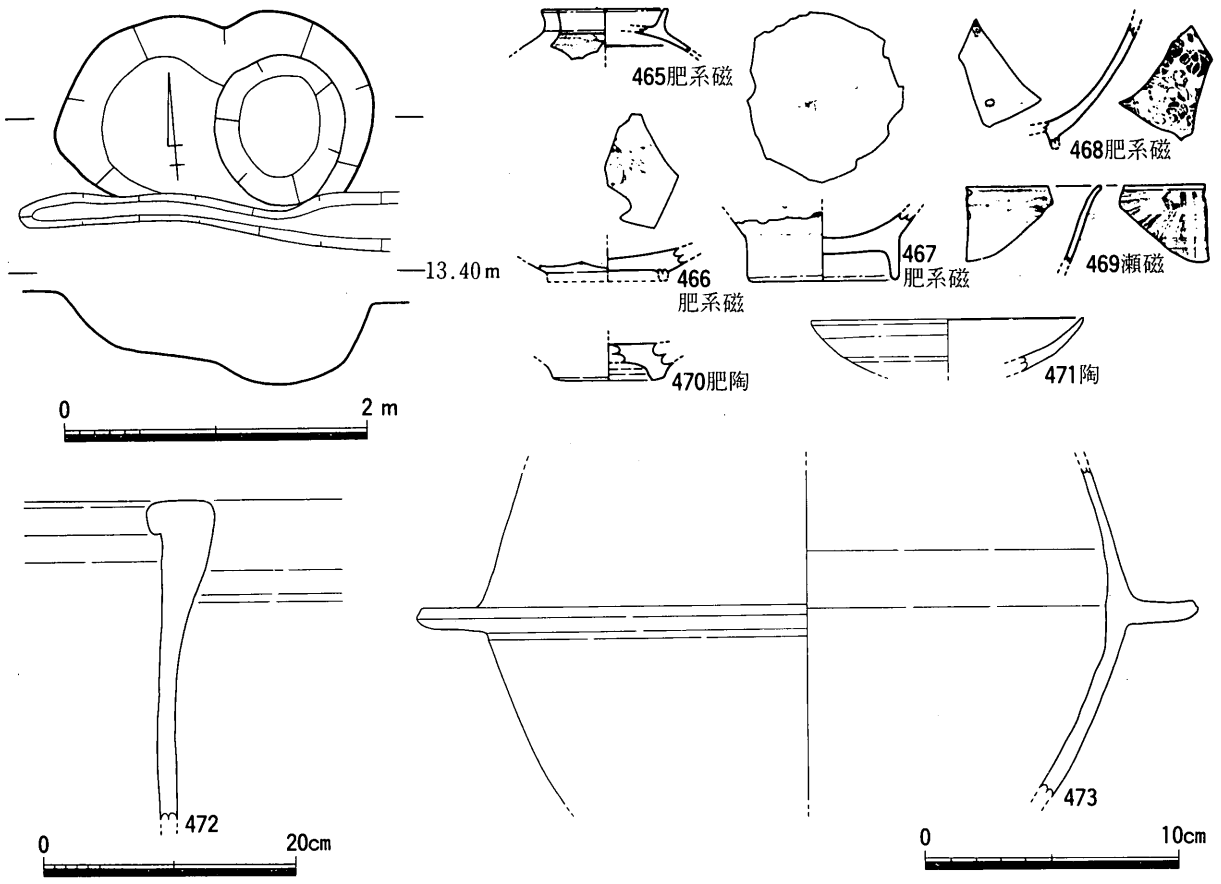
III—29区の北部で検出された土坑である。SKi 81の南部に位置する。平面形はいびつなハート形を呈し，長軸2.25m，短軸1.6m，深さ0.7mを測る。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付碗（463），瓦質土器焙烙（464）が出土した。463は型紙摺で，明治・大正時代のものである。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。



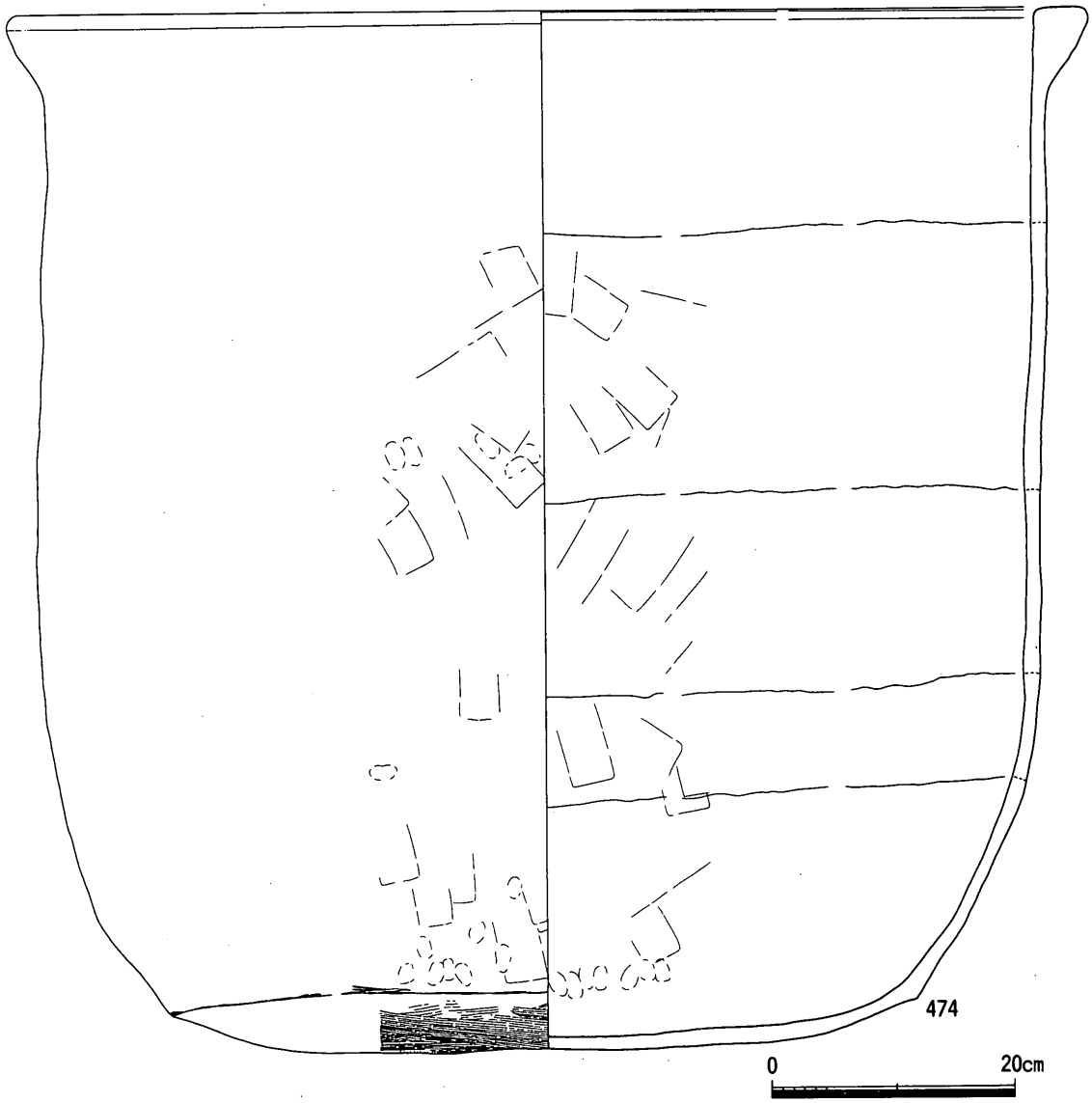
第198図　SKi 82平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

SKi 83（第199・200図）

III—29区の北部で検出された土坑である。SKi 82の北部に位置する。遺構の南部は東西に走る溝（幅0.15～0.4m，深さ0.1m）と重複するが，土層堆積よりSKi 83のほうが古いことがうかがわれる。平面

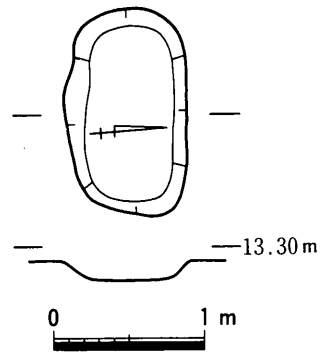


第199図　SKi 83平・断面図（1/50），出土遺物実測図1（1/3・1/6）

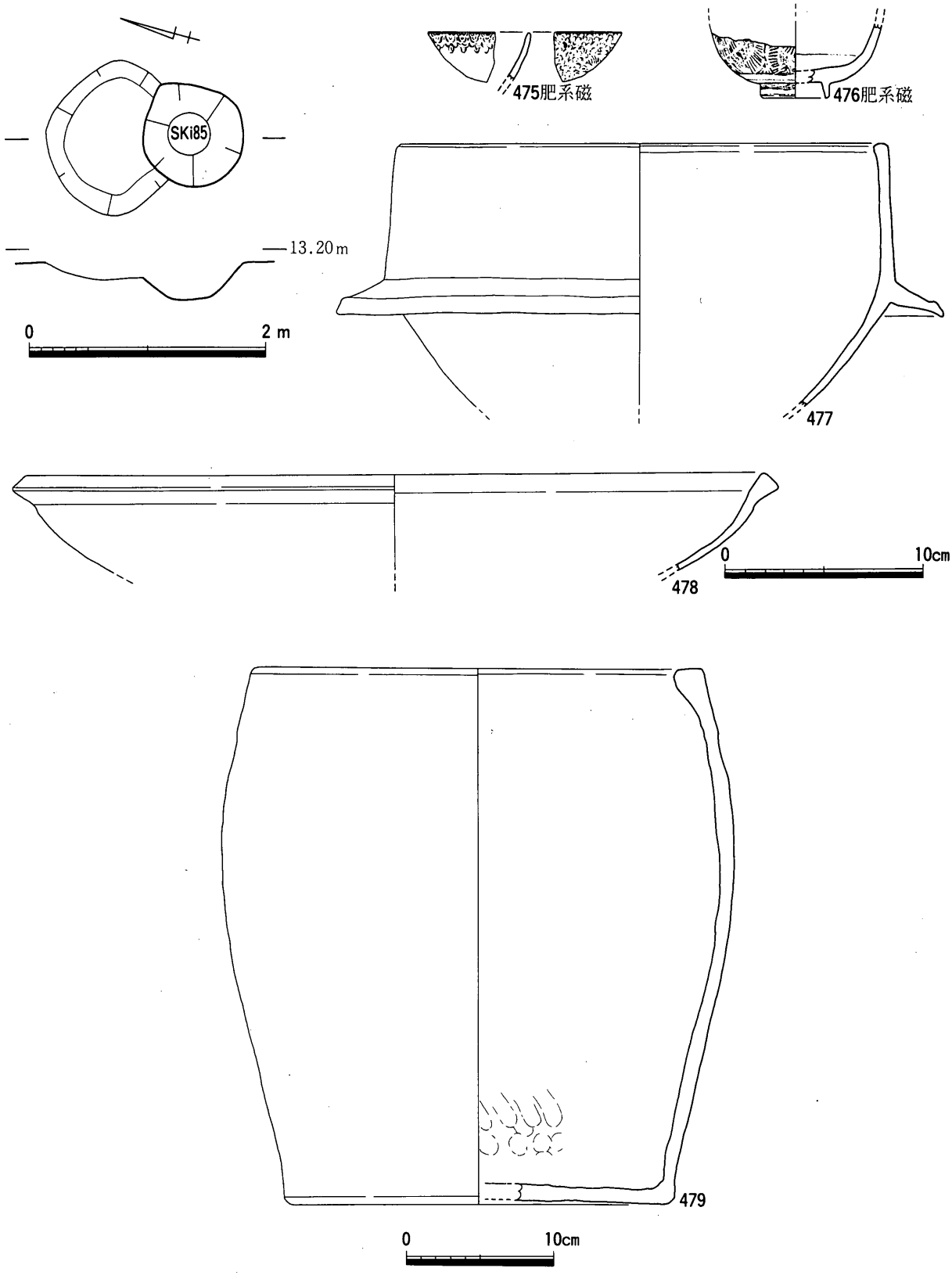


第200図　SKi 83出土遺物実測図２（１/６）

形は雪だるま形を呈することから，本来は２基の土坑が重なりあったものであると考えられる。長軸2.1m，最深部で深さ0.5mを測る。埋土は黄色粘質シルト混じり灰色砂質シルトである。土坑内東部からは土師質土器大甕（474）がつぶれた状態で出土した。その他，肥前系磁器染付蓋（465），肥前系磁器染付碗（466～468），瀬戸美濃磁器染付碗（469），肥前陶器灰釉皿（470），陶器灯明受皿（471），土師質土器大甕（472・474），瓦質土器羽釜（473），丸瓦片，平瓦片が少量出土した。465は肥前系磁器で，広東形碗の蓋である。19世紀前半のものである。466～468は肥前系磁器染付碗である。466は底部破片であるが，端反り形の可能性が高い。1820～1860年のものと考えられる。467は広東形を呈する。19世紀前半のものである。胎土が灰色を呈することから，地方窯の可能性が高い。468は型紙摺で，外面の染付は薄くにじみ出す。明治・大正時代のものである。469は端反り形を呈する。胎土に光沢があり，染付は明るい青色で，太い線描きであることから，瀬戸美濃産で，幕末頃のものと考えられる。470は肥前陶器灰釉皿である。釉は白く発色するが，



第201図　SKi 84平・断面図（１/50）



第202図　SKi 85平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/4）

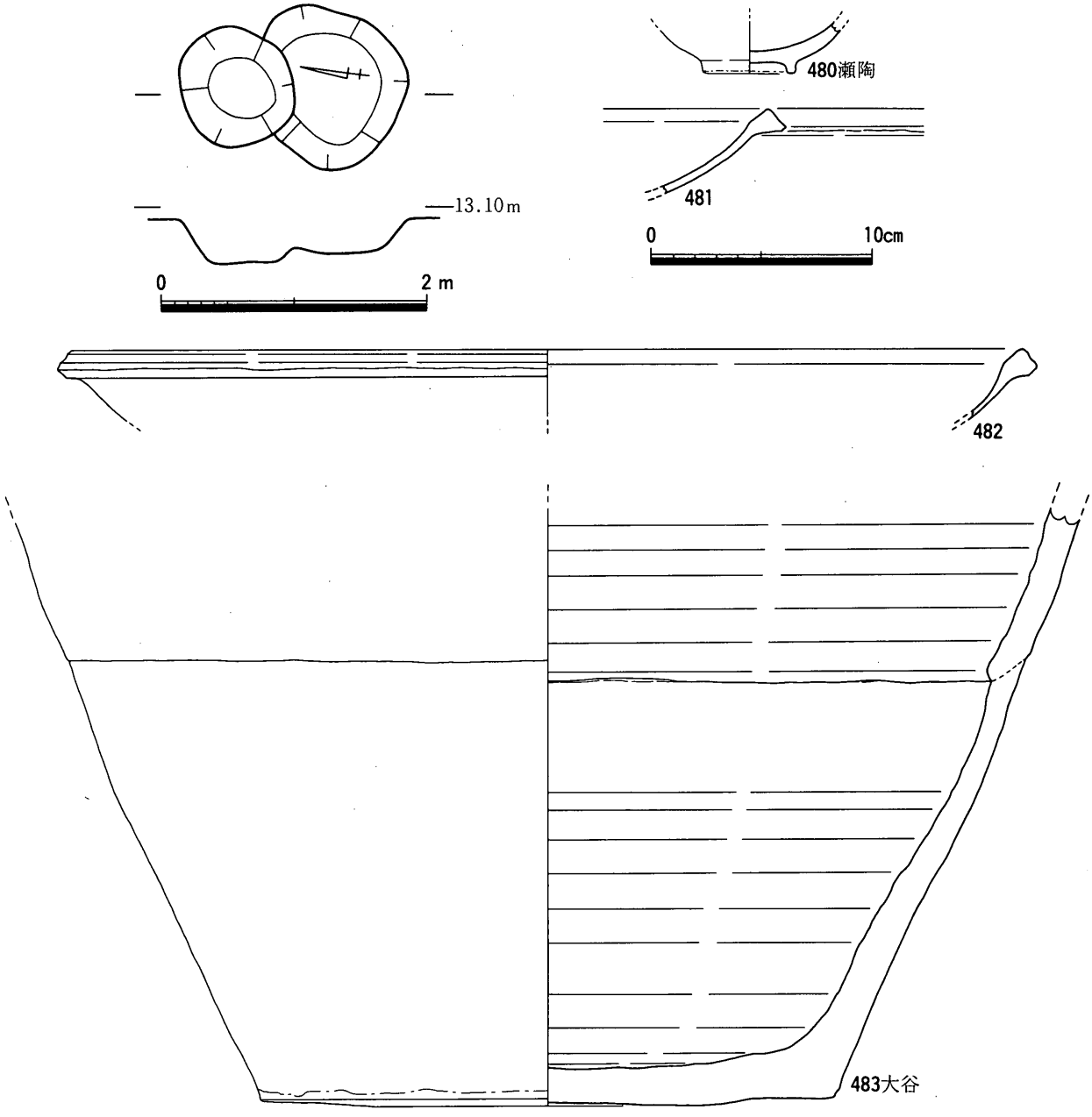
灰釉である。底部の形態から，砂目積み段階の灰釉皿で，1600～1630年のものと考えられる。471は陶器灯明受皿である。細かい貫入が入り，京焼の胎土に類似するが，産地不明である。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。

SKi 84（第201図）

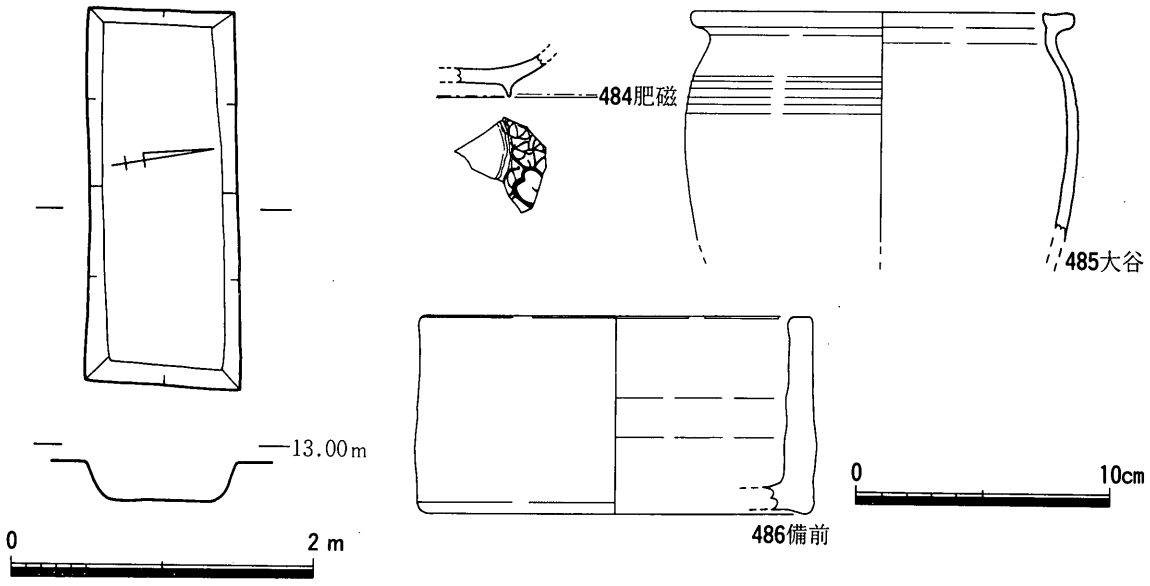
III—29区の東部で検出された土坑である。SDi 46の東部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.4m，短軸0.7m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。瓦片が少量出土した。出土遺物・埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 85（第202図，図版43）

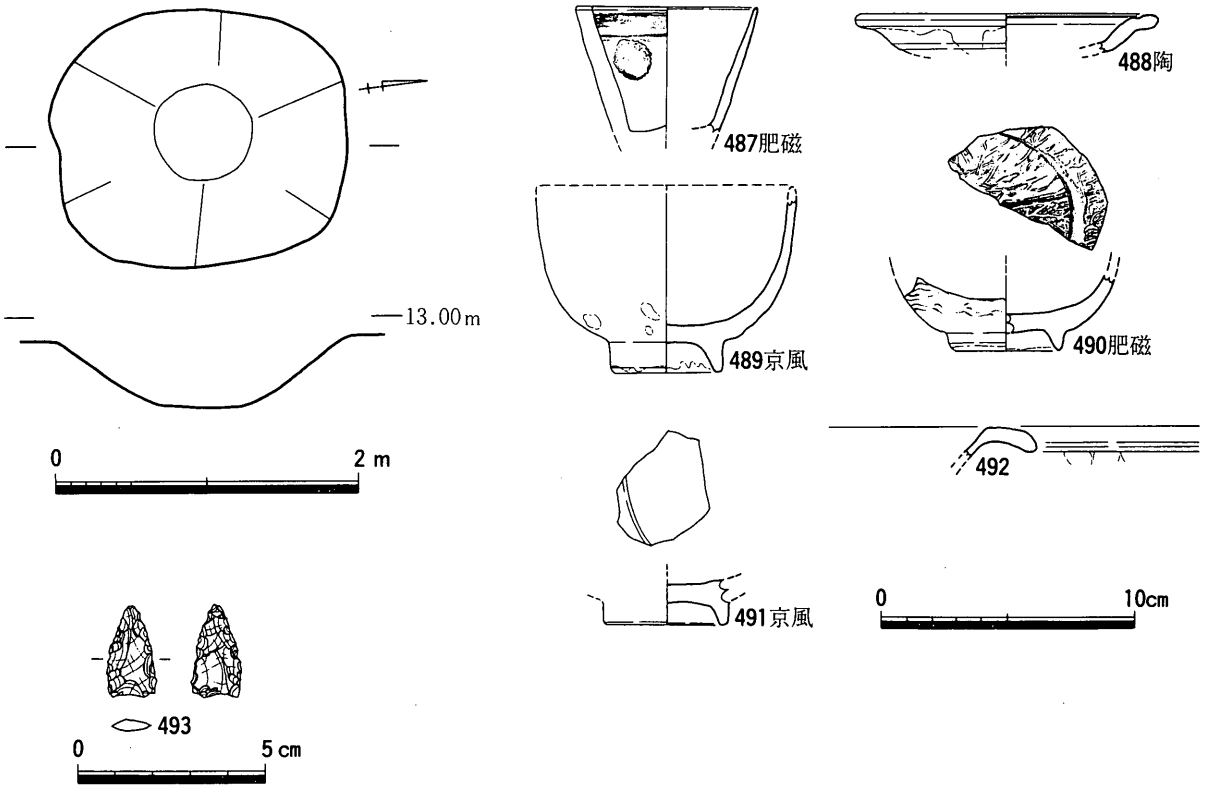
III—25区の南部で検出された土坑である。遺構の北部は江戸時代以降の土坑（径1.3m，深さ0.15m）と重複する。平面形は円形を呈し，径0.8m，深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。土坑



第203図　SKi 86平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第204図　SKi 87平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）



第205図　SKi 88平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/2）

の底面近くからは瓦質土器羽釜（477）が口縁部を下に向けた状態で出土した。そのほか，肥前系磁器染付碗（475・476），瓦質土器焙烙（478），土師質土器甕（479），銘入り（林善右門）丸瓦片が出土した。475・476は型紙摺で，明治・大正時代のものである。出土遺物から，この土坑は明治時代以降のものと考えられる。

SKi 86（第203図）

III—25区の南部で検出された土坑である。平面形はだるま形を呈することから，本来は2基の土坑が

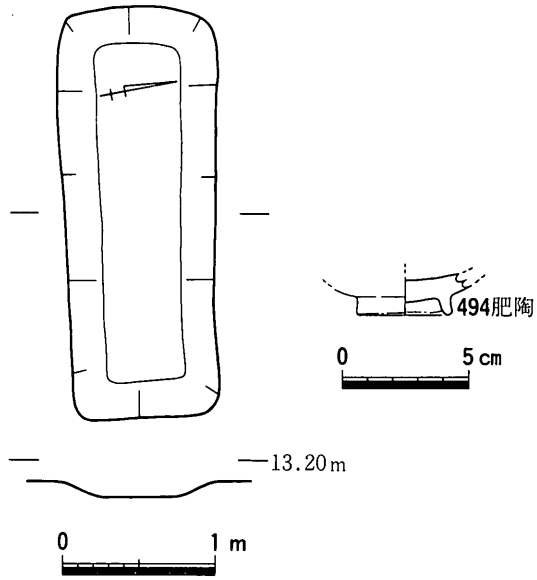
重なりあったものであると考えられる。長軸1.7m，最深部の深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。瀬戸美濃陶器腰錆碗（480），瓦質土器焙烙（481・482），大谷焼大甕（483）が出土した。480は底部付近の形態から，19世紀代前半のものと考えられる。483は内外面に粘土の接合痕が段状に残る。出土遺物から，この土坑は19世紀以降のものと考えられる。

SKi 87（第204図）

III—25区で検出された土坑である。平面形は長方形を呈し，長軸2.4m，短軸1.0m，深さ0.25mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。肥前磁器染付碗(484)，大谷焼甕(485)，備前焼鉢（486），色絵陶器片，肥前系磁器染付片，土師質土器片が出土した。484は肥前磁器染付碗で，氷裂文を描く。18世紀前半から中葉のものと考えられる。486は備前焼で，前述のように本来はサヤ鉢として使用されたものである。出土遺物から，この土坑は19世紀以降のものと考えられる。

SKi 88（第205図）

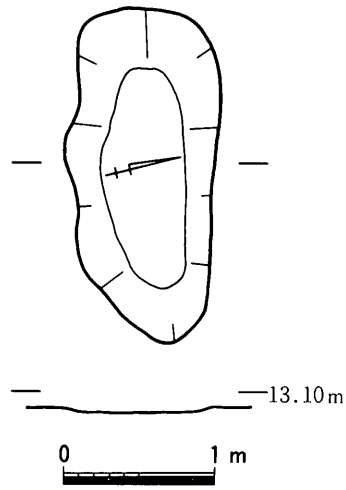
III—25区で検出された土坑である。SDi 44の東側に位置する。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長軸1.9m，短軸1.7m，深さ0.5mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。肥前磁器染付猪口（487），陶器鉄釉皿（488），京焼風陶器碗（489・491），肥前陶器刷毛目碗（490），瓦質土器焙烙（492），石鏃（493）が少量出土した。487は猪口で，胎土は灰色みを帯び，染付は黒青色を呈する。コンニャク印判が施されることから，18世紀前半から中葉のものと考えられる。488は産地不明である。胎土は肥前産陶器に似て，灰色を呈し，粗い砂粒を多量に含む。489・491は17世紀後半から18世紀初頭のものと考えられる。490は肥前陶器刷毛目碗で，体部がチョコレート色を呈することから，18世紀前半のものと考えられる。493は弥生時代の遺物が混在したものであろう。出土遺物から，この土坑は18世紀前半以降のものと考えられる。



第206図 SKi 89平・断面図(1/50)，出土遺物実測図(1/3)

SKi 89（第206図）

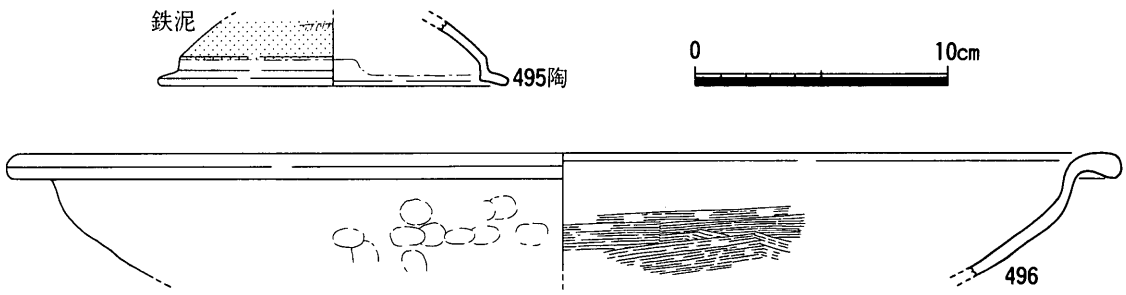
III—26区で検出された土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸2.7m，短軸1.0m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前陶胎染付碗（494）が出土した。底部破片である。18世紀前半のものである。出土遺物から，この土坑は18世紀前半のものと考えられる。



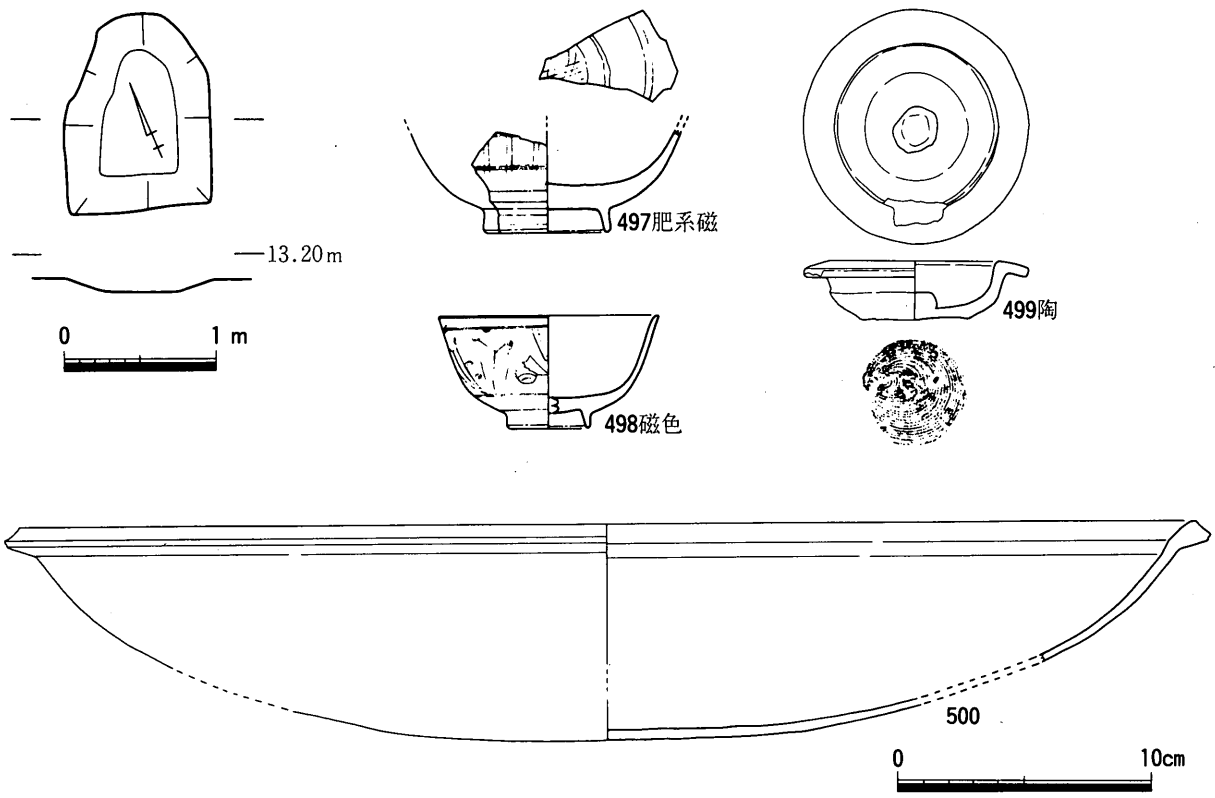
第207図　SKi 90平・断面図(1/50)

SKi 90（第207・208図）

III—26区で検出された土坑である。SKi 89の東側に位置する。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸2.2m，短軸0.9m，深さ0.05mを測る。埋土は淡灰色砂質



第208図　SKi 90出土遺物実測図（1/3）



第209図　SKi 91平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

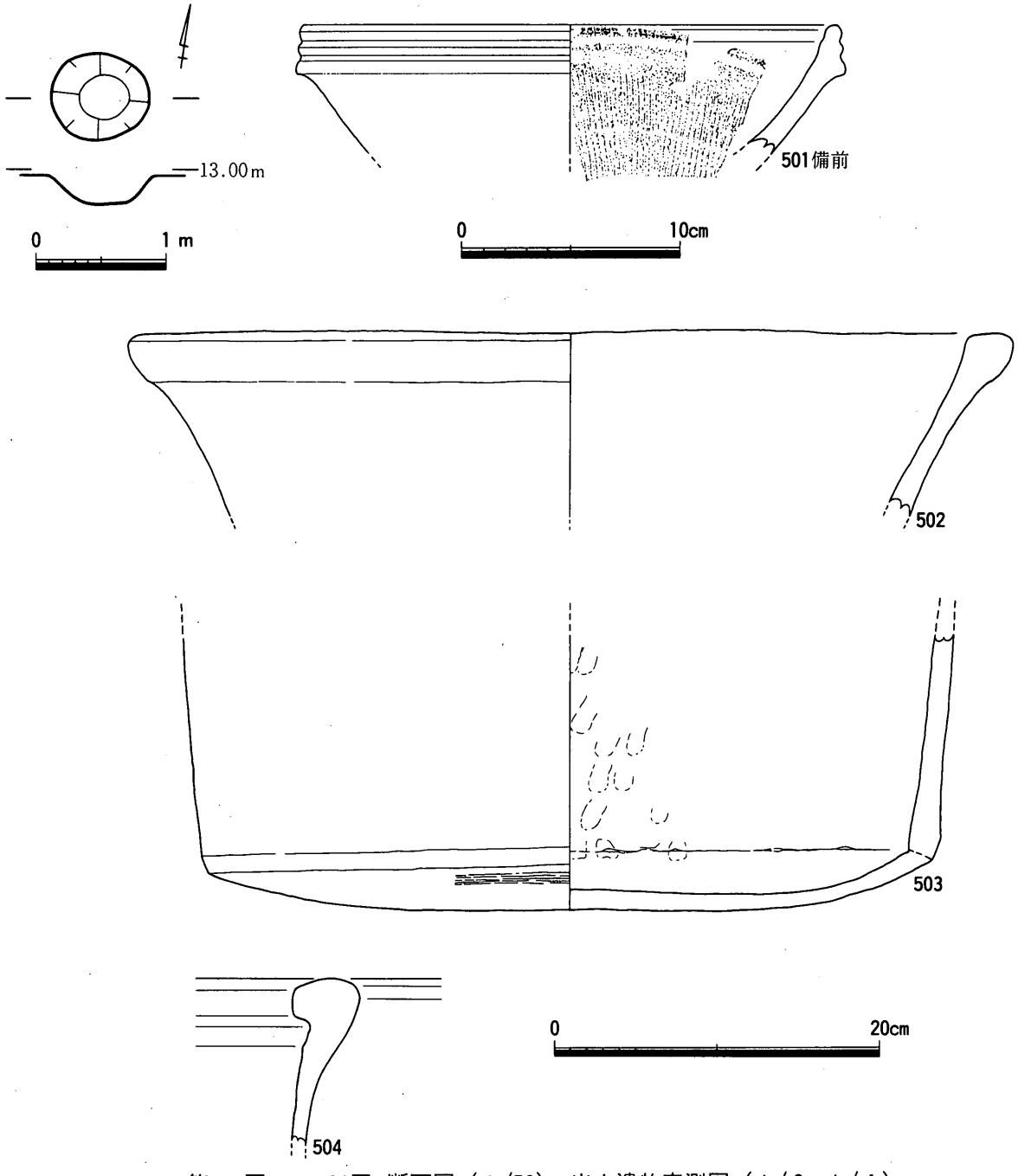
シルトである。陶器蓋（495），瓦質土器焙烙（496），瓦片少量が出土した。495は産地不明である。土鍋の蓋で，19世紀代のものであろう。出土遺物から，この土坑は19世紀代以降のものと考えられる。

SKi 91（第209図）

III—26区で検出された土坑である。SKi 90の東側に位置する。平面形はいびつな台形を呈し，長軸1.3m，短軸1.0m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前系磁器染付碗（497），磁器色絵碗（498），陶器透明釉蓋（499），瓦質土器焙烙（500），陶磁器片・土師質土器片少量が出土した。497は肥前系磁器染付碗で，見込みに蛇の目釉剝ぎが施される。染付の文様や体部の形態から，端反り形を呈するものと考えられる。1820～1860年のものであろう。498は磁器色絵碗で，口唇部と体部に赤色の圏線を施し，黒褐色の線描きの中を薄緑色と明るい青色で塗りつぶす。産地不明であるが，端反り形を呈し，色絵が施されることから，幕末頃のものであろう。出土遺物から，この土坑は幕末以降のものと考えられる。

SKi 92（第210図）

III—26区で検出された土坑である。SDi 44の東側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.65～0.75m，

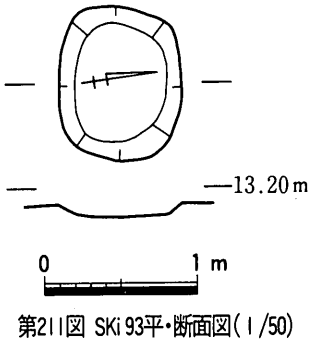


第210図　SKi 92平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3・1/4）

深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。備前焼擂鉢（501），土師質土器大甕（502～504），国産色絵磁器片が出土した。501は口縁部内面に明確な段を持たず，卸目の単位に隙間がないことから，19世紀代のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は19世紀以降のものと考えられる。

SKi 93（第211図）

III—26区で検出された土坑である。SDi 44の西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸1.0m，短軸0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は

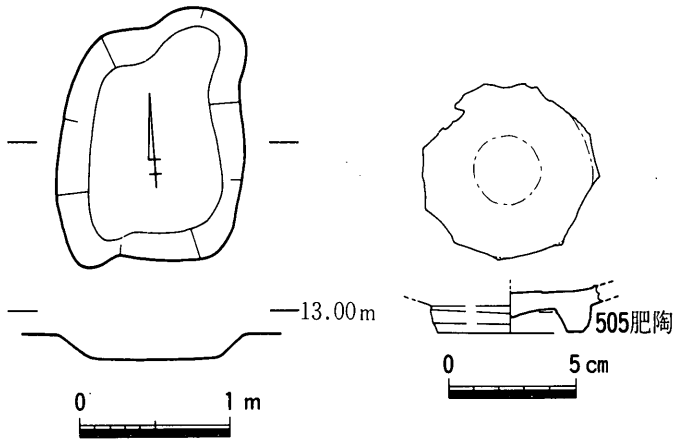


第211図 SKi 93平・断面図(1/50)

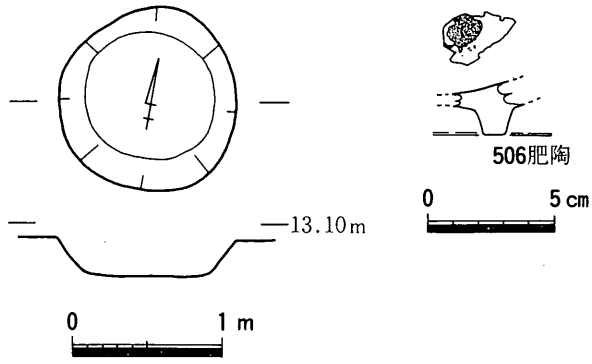
淡灰色砂質シルトである。瓦質土器羽釜片が出土した。出土遺物・埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。

SKi 94（第212図）

III—25区で検出された土坑である。SDi 42の北側に位置する。平面形はいびつな隅丸方形を呈し，長軸1.8m，短軸1.25m，深さ0.15mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前陶器青緑釉皿（505）が出土した。505は見込み蛇の目釉剝ぎが施される。青緑釉の発色は悪く，淡いオリーブ色を呈する。佐賀県嬉野町内野山産で，17世紀後半から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。



第212図　SKi 94平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）



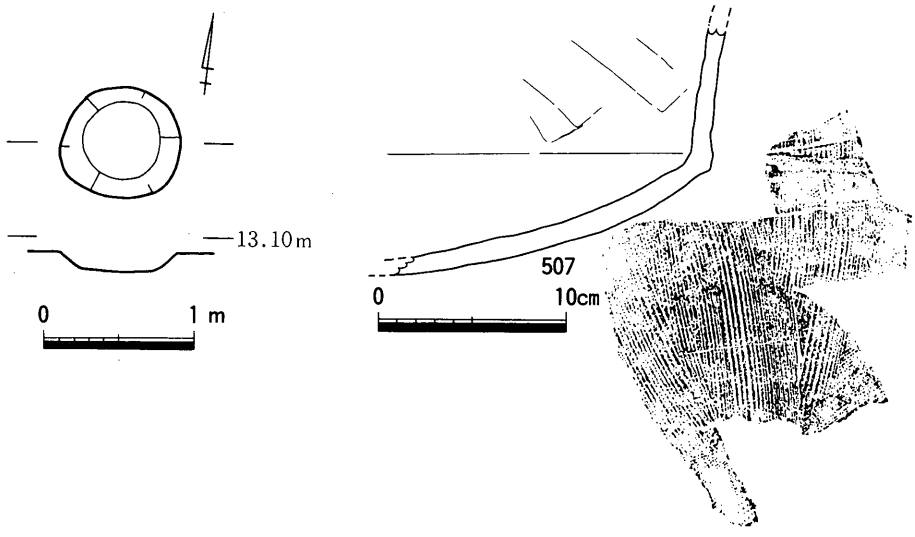
第213図　SKi 95平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

SKi 95（第213図）

III—26区の東部で検出された土坑である。平面形は円形を呈し，径1.2m，深さ0.25mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色粘質シルトである。肥前陶器鉄釉鉢（506），土師質土器片少量が出土した。506は肥前陶器鉄釉鉢で，見込みに砂が付着する。砂胎土目積みの痕跡である。高台部の断面形が方形を呈することから，17世紀中葉から末のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀以降のものと考えられる。

SKi 96（第214図）

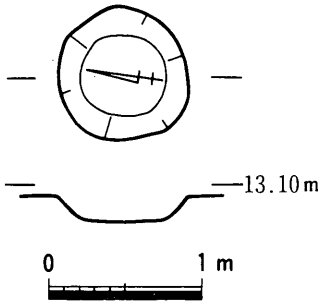
III—26区で検出された土坑である。SKi 95の東側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.7～0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。土師質土器大甕（507）が出土した。出土遺物から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。



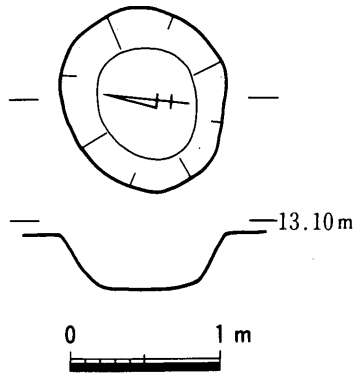
第214図 SKi 96平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/4）

SKi 97（第215図）

III—26区で検出された土坑である。SKi 96の北西側に位置する。平面形は円形を呈し，径0.9m，深さ0.15mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。京焼風陶器片・陶器片少量が出土した。京焼風陶器は17世紀後半から18世紀前半のものであることから，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。



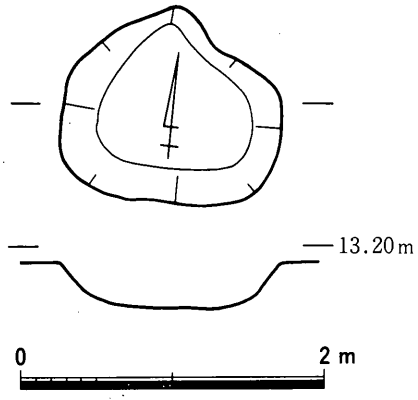
第215図 SKi 97平・断面図(1/50)

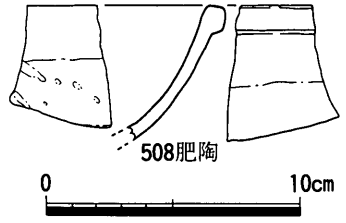


第216図 SKi 98平・断面図(1/50)

SKi 98（第216図）

III—26区で検出された土坑である。SKi 97の北側に位置する。平面形は円形を呈し，径1.1～1.2m，深さ0.35mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。土師質土器片が少量出土した。出土遺物と埋土の特徴から，この土坑は江戸時代以降のものと考えられる。





第217図　SKi 99平・断面図(1/50)，出土遺物実測図（1/3）

SKi 99（第217図）

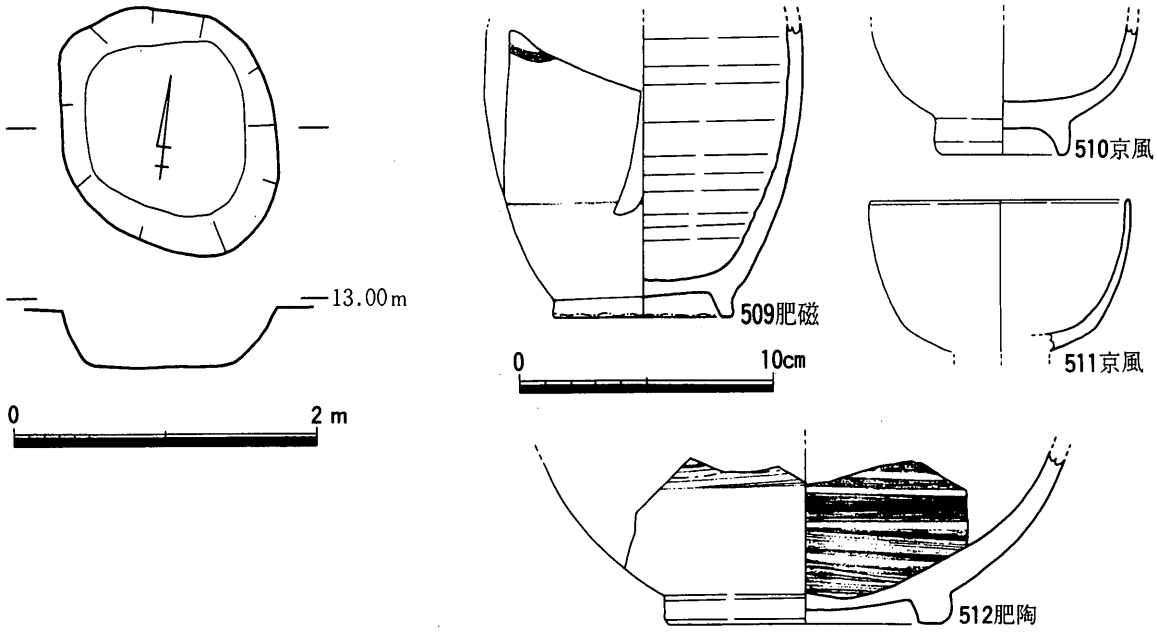
III—26区で検出された土坑である。平面形は不整五角形を呈し，長軸1.5m，短軸1.3m，深さ0.3mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前陶器鉢（508）が出土した。508は口縁部内外面に鉄釉が塗布される。おそらく片口で，18世紀前半頃のものであろう。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものと考えられる。

SKi 100（第218図）

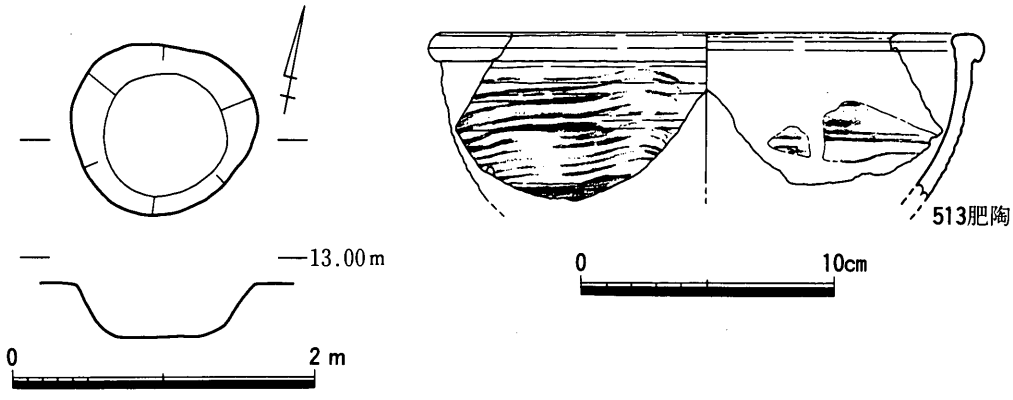
III—23区で検出された土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し，長軸1.7m，短軸1.4m，深さ0.4mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前磁器染付徳利(509)，京焼風陶器碗(510・511)，肥前陶器刷毛目鉢(512)，SBi 32で報告した肥前磁器染付徳利(279)の一部が出土した。509は外面に丸文が描かれることから，1650～1670年のものと考えられる。510は高台内がアーチ状を呈することから，17世紀後半のものと考えられる。511は高台部が残存しないため，詳細な時期は不明であるが，17世紀後半から18世紀初頭のものと考えられる。512は17世紀後半から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。

SKi 101（第219図）

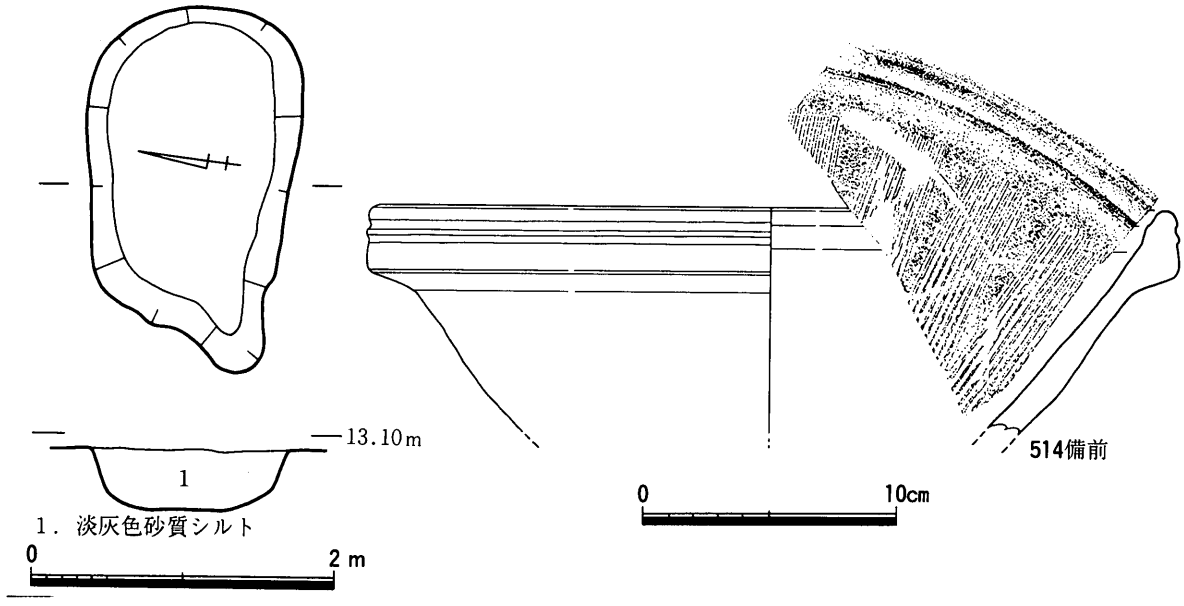
III—23区で検出された土坑である。平面形はややいびつな円形を呈し，径1.1～1.2m，深さ0.35mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。肥前陶器刷毛目鉢(513)，土師質土器片が少量出土した。513は内外面刷毛目後，白化粧土が掛かる。底部がないため詳細な時期は不明であるが，17世紀後半から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀後半以降のものと考えられる。



第218図 SKi 100平・断面図(1/50), 出土遺物実測図 (1/3)



第219図 SKi 101平・断面図(1/50), 出土遺物実測図 (1/3)



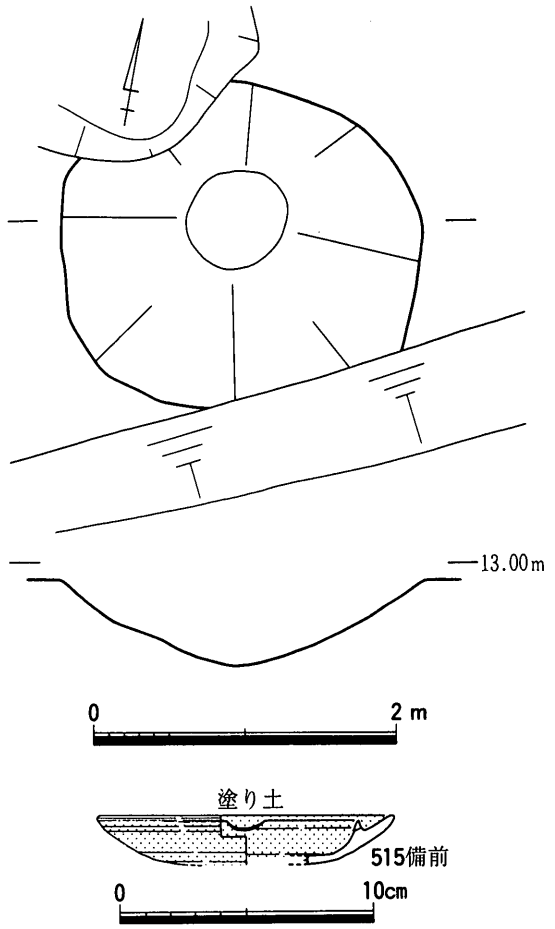
第220図 SKi 102平・断面図(1/50), 出土遺物実測図 (1/3)

SKi 102（第220図）

III—23区南部で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し，長軸2.45m，短軸1.3m，深さ0.4mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。備前焼擂鉢（514）が出土した。514は卸目の単位の間に隙間がみられることや，口縁部の形態から，17世紀末から18世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は17世紀末以降のものと考えられる。

SKi 103（第221図）

III—23区南部で検出された土坑である。南部は攪乱溝によって削平され，北部は江戸時代の土坑（長軸2.4m，短軸2.0m，深さ0.5m，埋土SKi 103と同一）と重複する。平面形は円形を呈し，径2.1～2.3m，深さ0.6mを測る。埋土は黄色粘質シルトブロック混じり灰色砂質シルトである。備前焼灯明受皿（515），陶器片（緑色釉）の小片が出土した。515は内外面に塗り土が施される。桟が付くことから，18世紀以降のものと考えられる。出土遺物から，この土坑は18世紀代以降のものと考えられる。

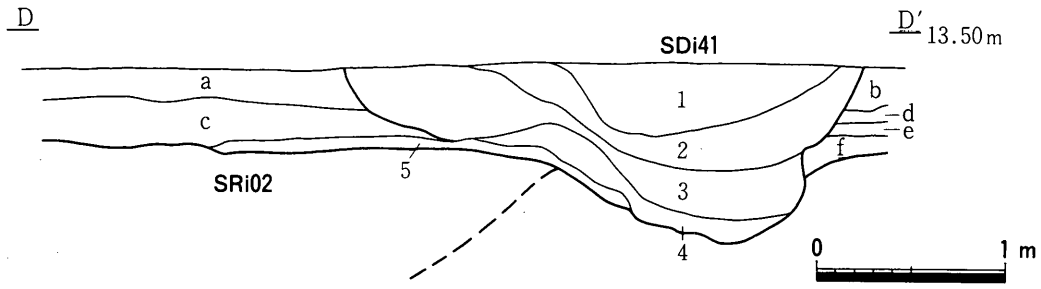


第221図 SKi 103平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/3）

⑤ 溝

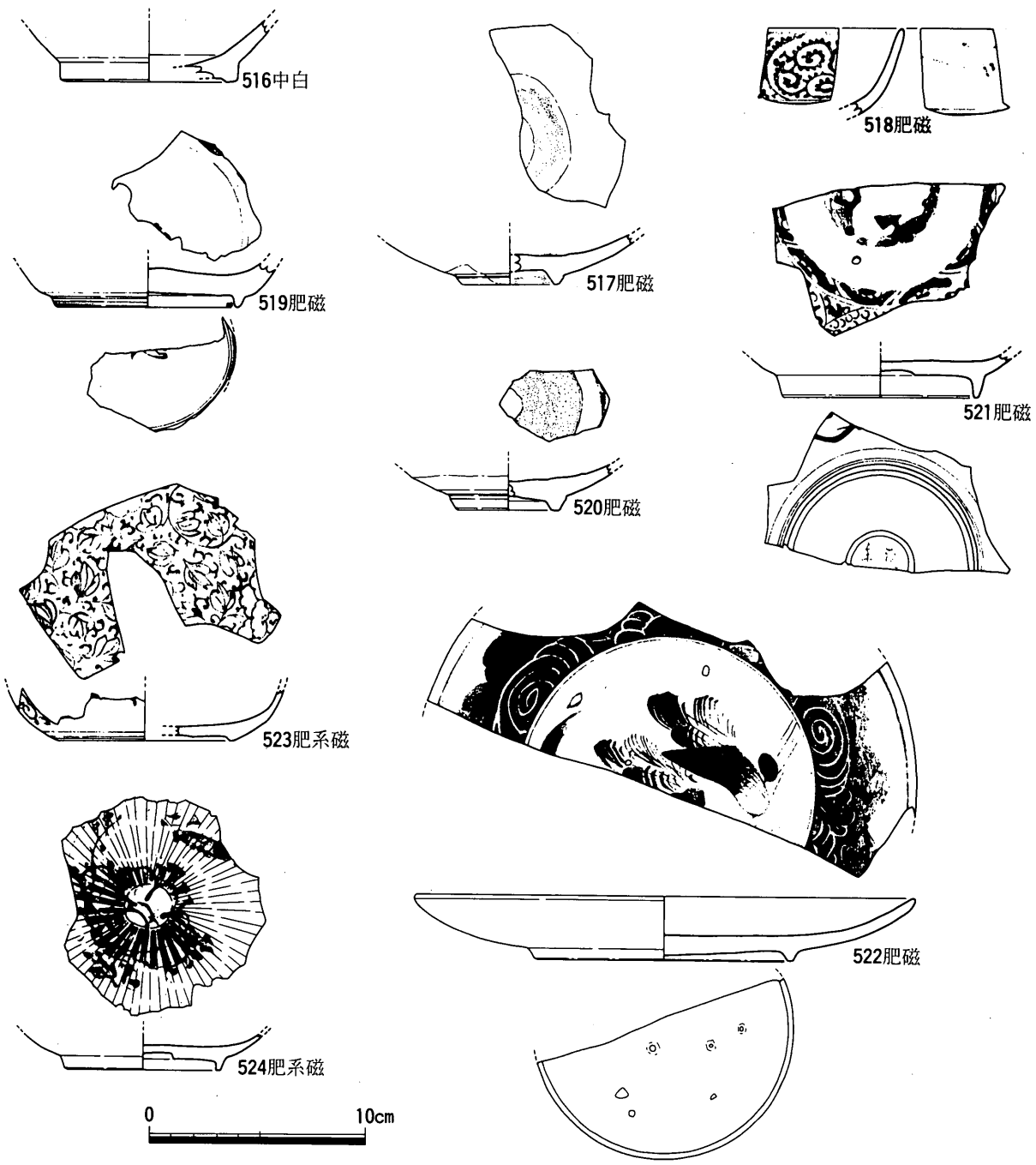
SDi 41（第222～234図，図版44・45）

III—12区・III—21区・III—52区・III—24区・III—25区・III—26区で検出された溝である。南から北に向かって走る。南部のIII—25区・III—26区では溝SDi 42・SDi 43と合流する。III—25区・III—26区では弥生時代の河川SRi 01・SRi 02と重複する。SDi 41の溝幅は1.5～4.5m，深さ0.3～0.9m，検出長130mを測る。III—24区・III—25区では両岸に石（1辺0.3～0.7m）を一列に配置し，護岸する。遺物は多量に出土し，整理用コンテナ26箱を数える。中国産白磁碗（516），肥前磁器染付皿（517～522），肥前系磁器染付皿（523・524），三田青磁皿（525），瀬戸美濃磁器染付皿（526），中国産磁器染付皿（527），磁器色絵皿（528），肥前系磁器染付蓋（529），肥前陶胎染付碗（530），肥前系磁器染付碗（531～546），磁器染付碗（547・548），瀬戸美濃磁器染付碗（549），肥前青磁鉢（550），肥前磁器染付鉢（551），肥前系磁器染付鉢（552・553），肥前系白磁鉢（554），三田青磁鉢（555），肥前磁器染付段重（556），肥前磁器色絵小杯（557），瀬戸美濃磁器染付小杯（558），肥前磁器紅猪口（559），肥前磁器染付瓶（560），瀬戸美濃磁器染付小杯（561），肥前磁器染付仏飯器（562），肥前磁器色絵神酒徳利（563），肥前系磁器染付仏花瓶（564），肥前陶器灰釉皿（565），肥前陶器鉄釉皿（566），肥前陶器青緑釉皿（567），松尾焼陶器皿（568），瀬戸陶器馬の目皿（569），瀬戸美濃陶器皿（570），瀬戸美濃陶器染付皿（571），瀬戸美濃陶器灰釉皿（572），陶器皿（573），陶器鉢（578），源内焼陶器皿（574），京・信楽系陶器皿（575），信楽陶器碗（576），陶器染付皿（577），肥前陶器刷毛目碗（579），京焼風陶器碗（580・581），瀬戸美濃陶器腰錆碗（582～584），瀬戸美濃陶器染付碗（585），信楽陶器碗（586），肥前陶器鉢（587），肥前陶器刷毛目

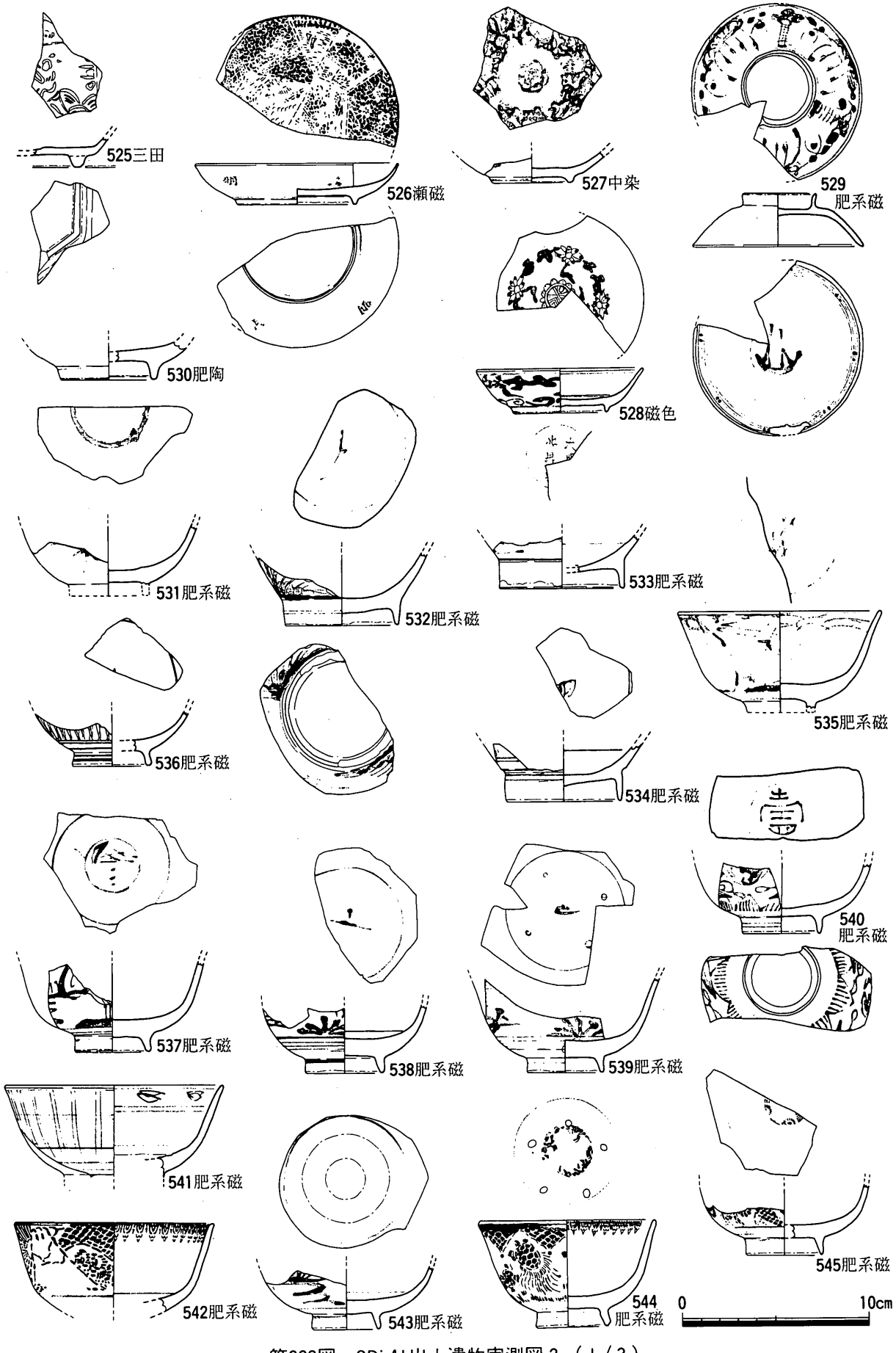


1．灰色大礫（径10cm以下）混じり砂質シルト
2．大礫粗砂混じり灰色細砂
3．大礫混じり灰黄色粘質シルト（灰色粗砂混じり）
4．灰色粗砂～細砂
5．淡灰色砂質シルト

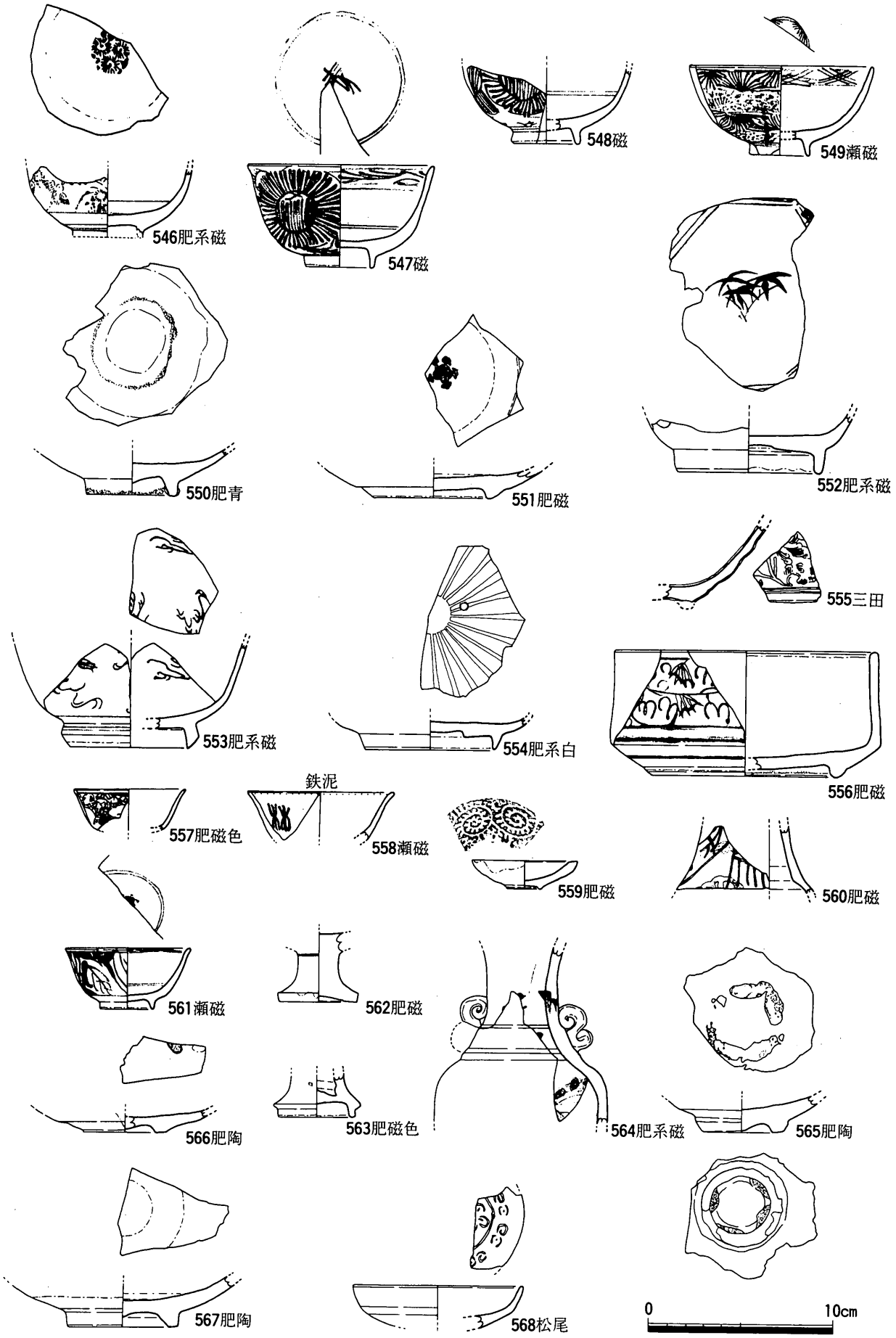
a．暗灰色小礫混じり砂質シルト
b．暗灰色砂質シルト
c．灰色砂質シルト
d．淡灰色砂質シルト
e．乳黄色砂質シルト
f．暗褐色粘質シルト



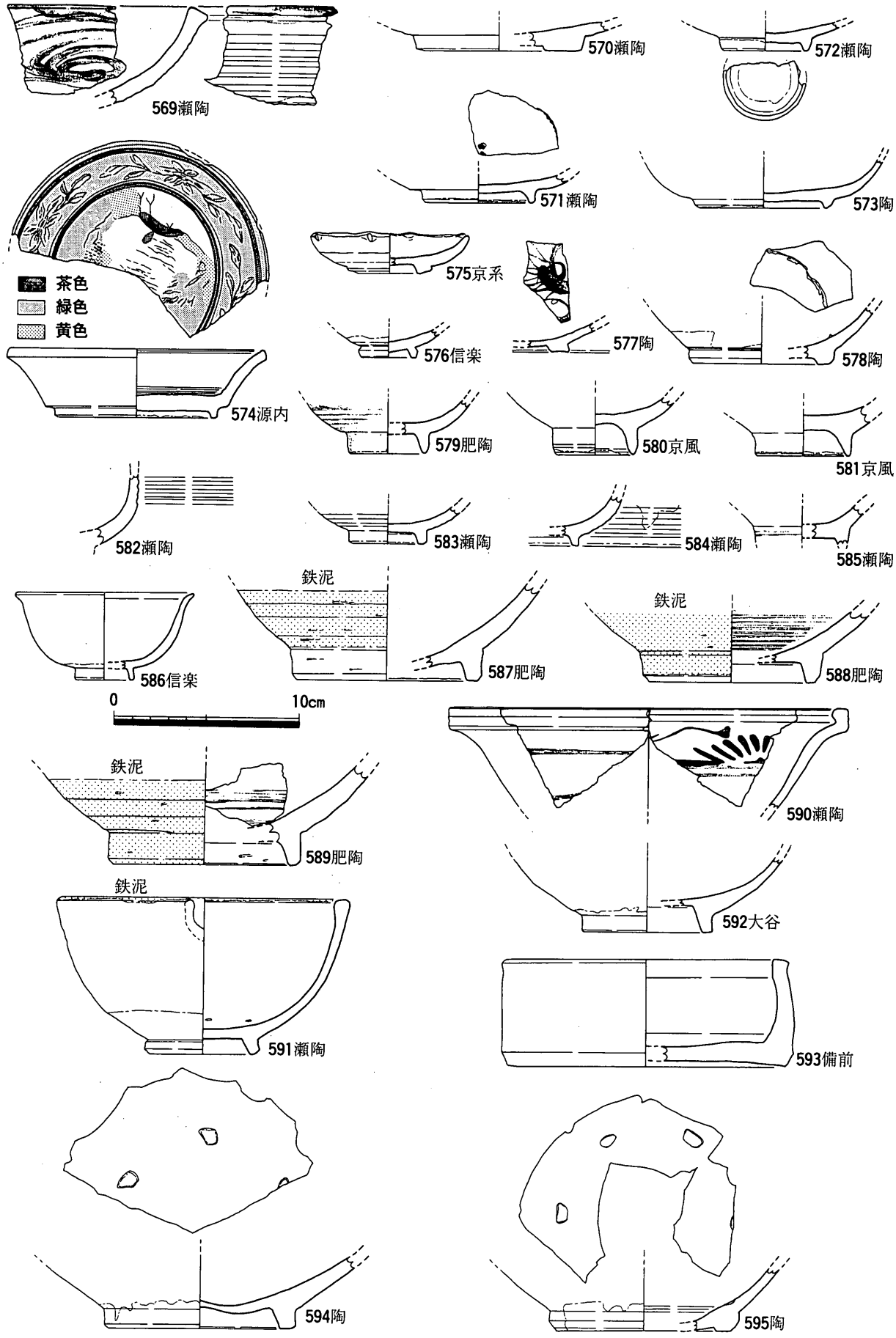
第222図　SDi 41平・断面図（1/40），出土遺物実測図1（1/3）



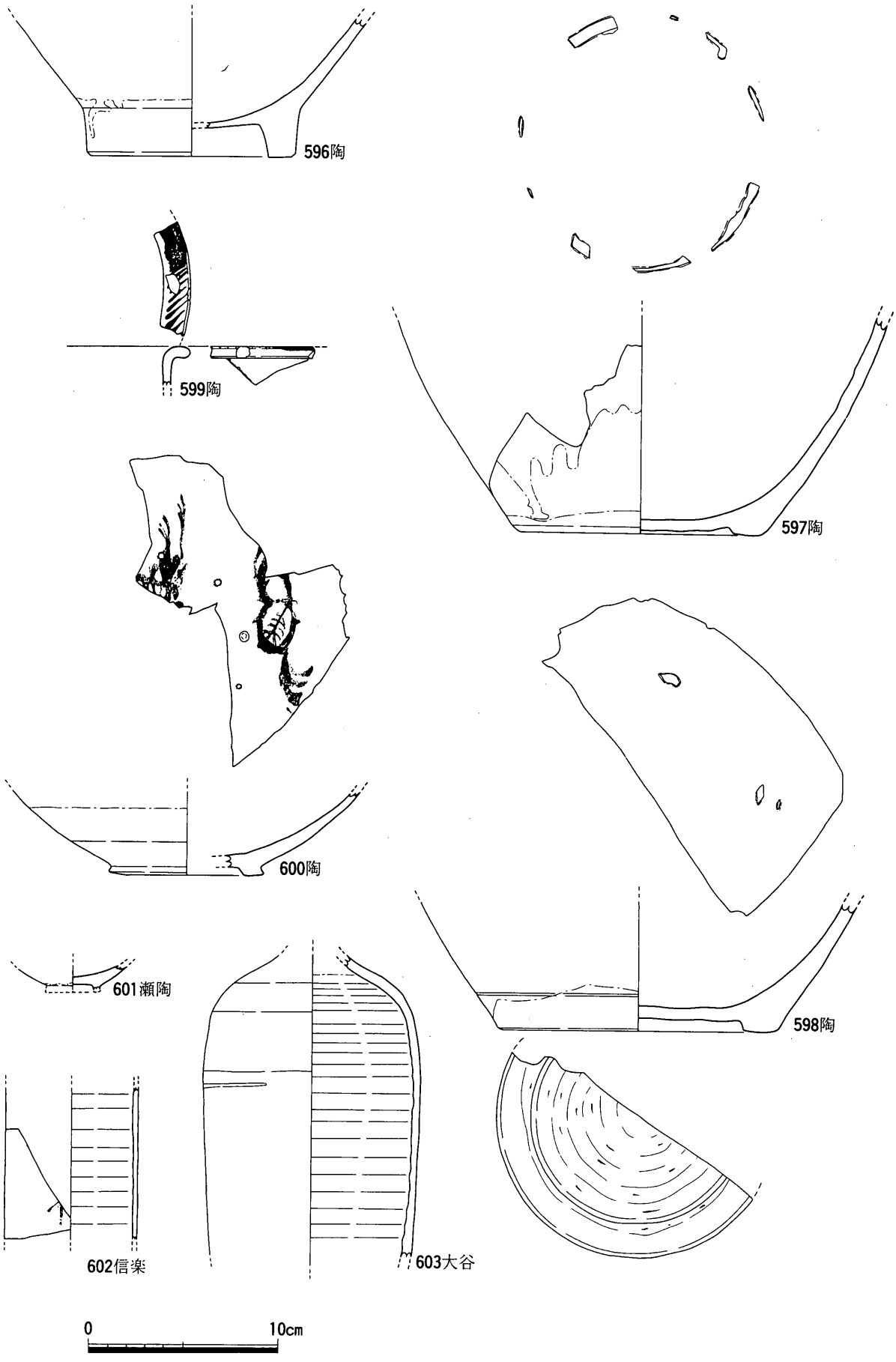
第223図　SDi 41出土遺物実測図２（１/３）



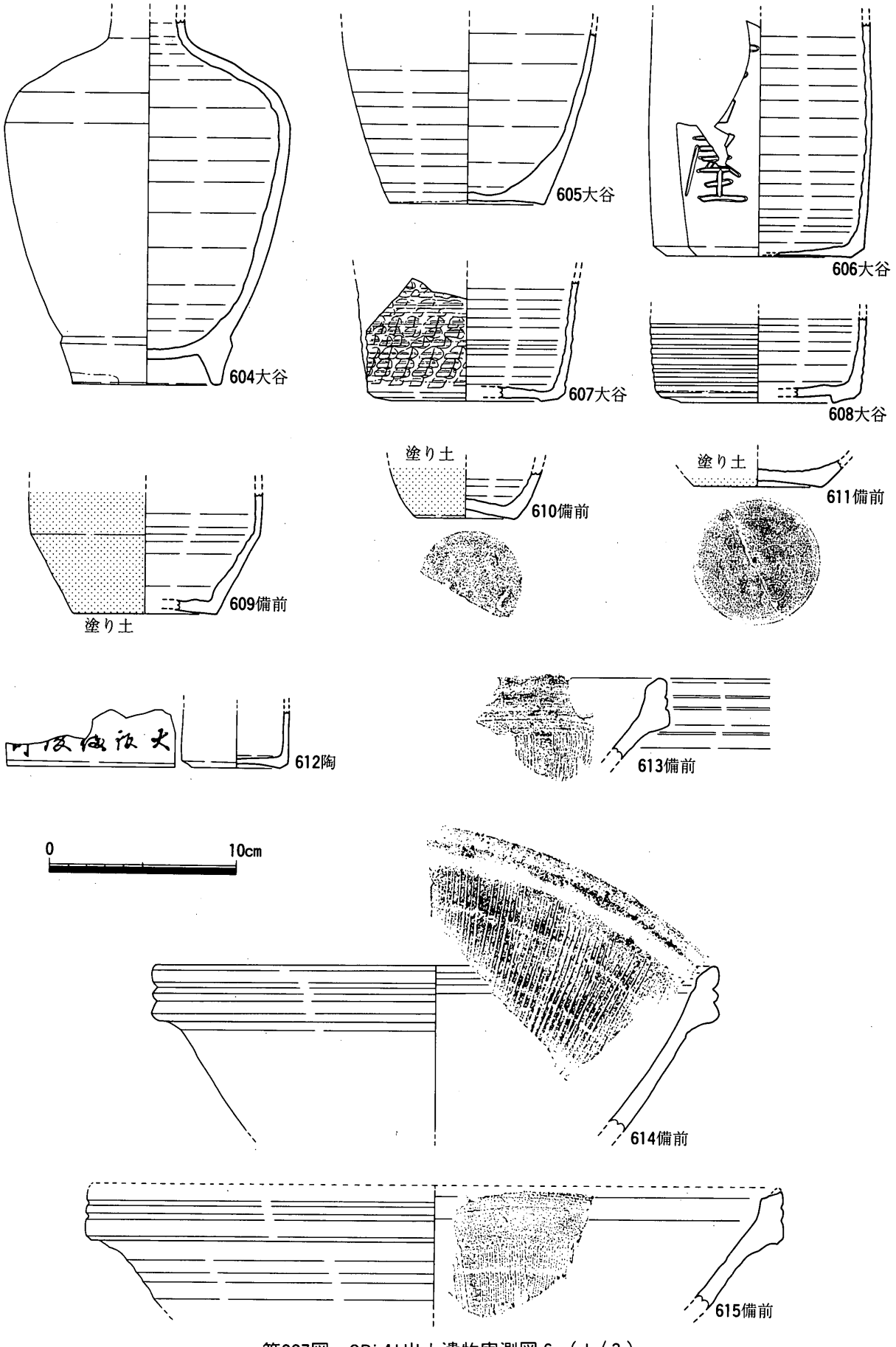
第224図　SDi 41出土遺物実測図3（1/3）



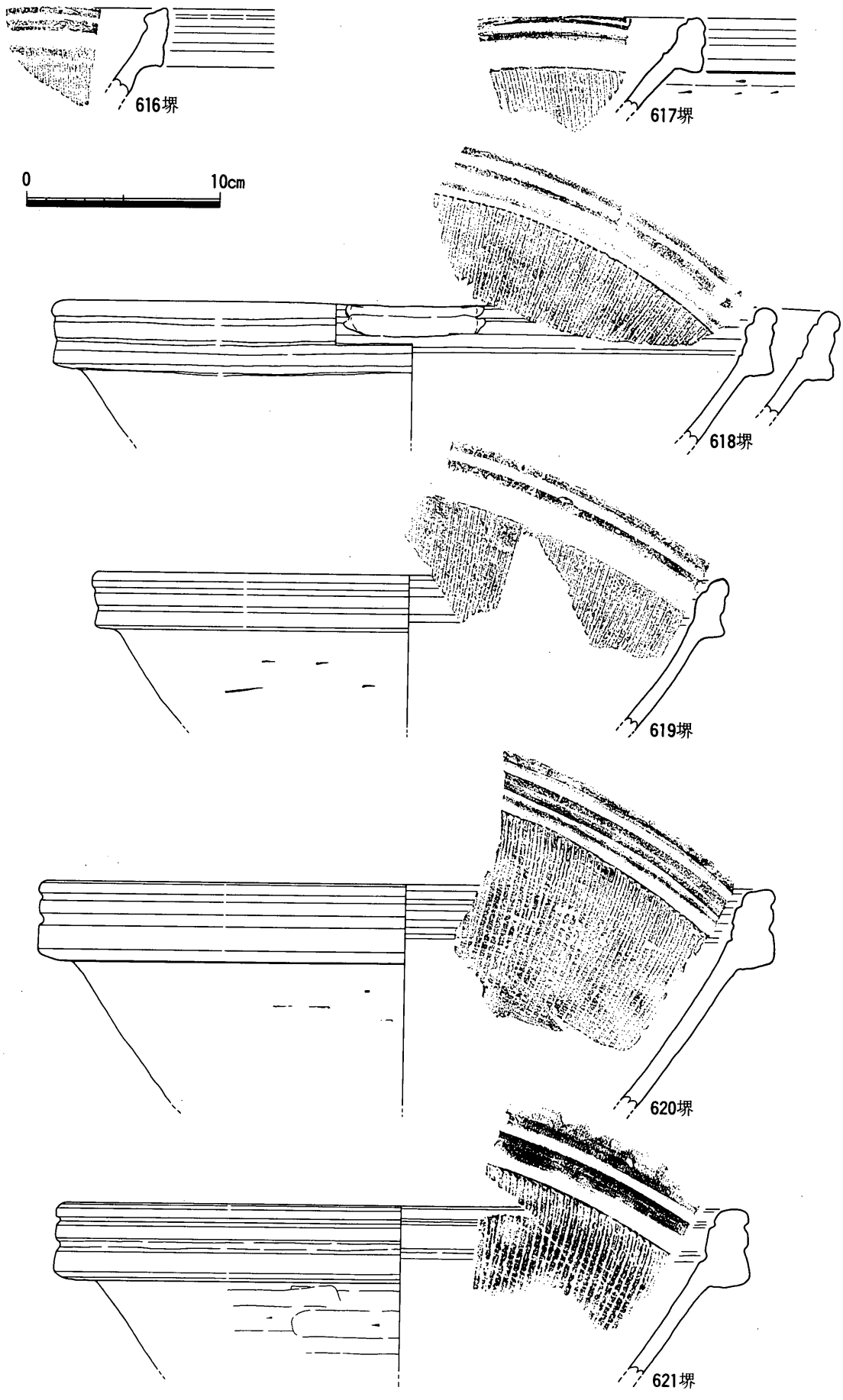
第225図　SDi 41出土遺物実測図 4 （1 / 3）



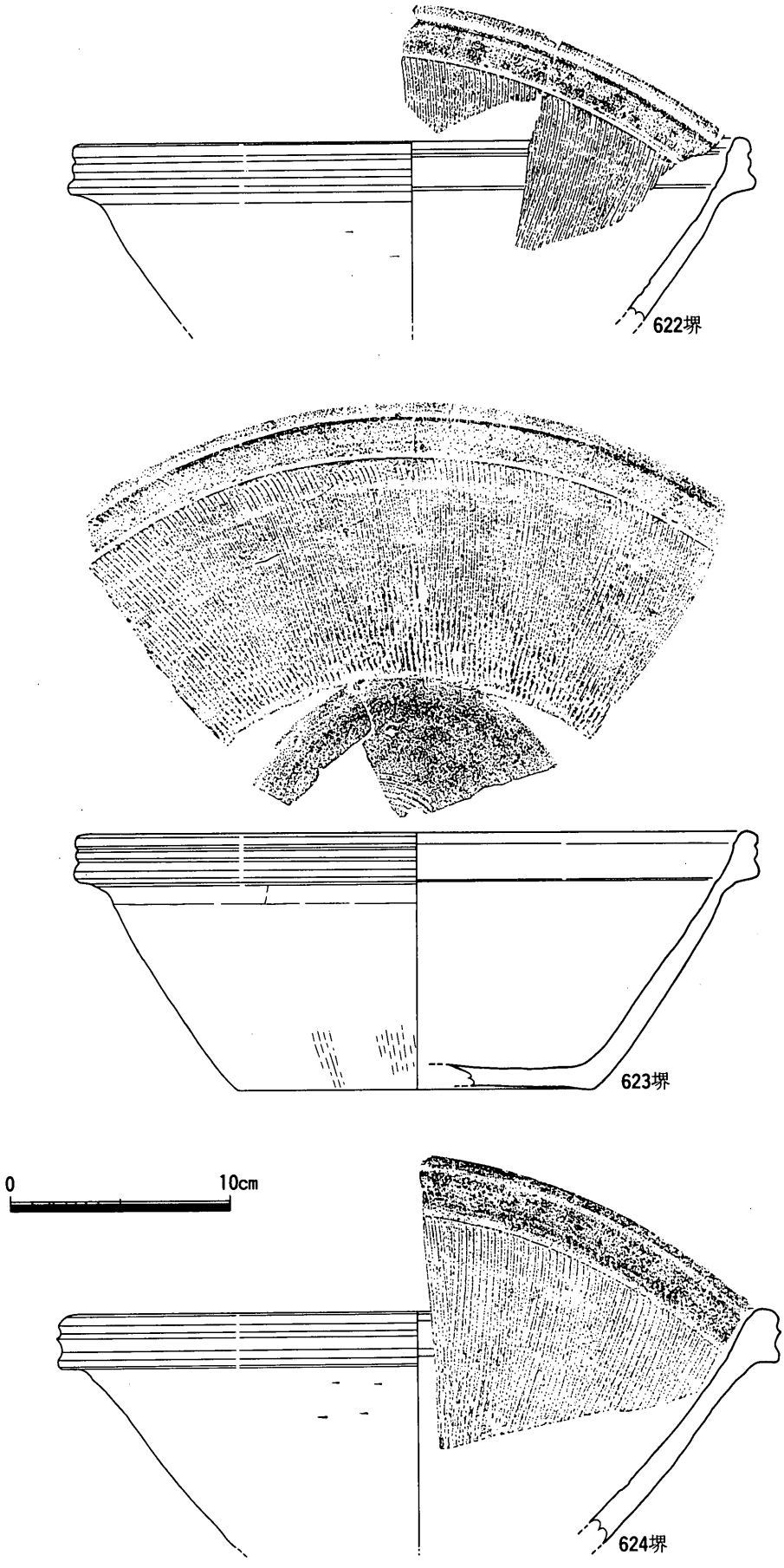
第226図　SDi 41出土遺物実測図５（１／３）



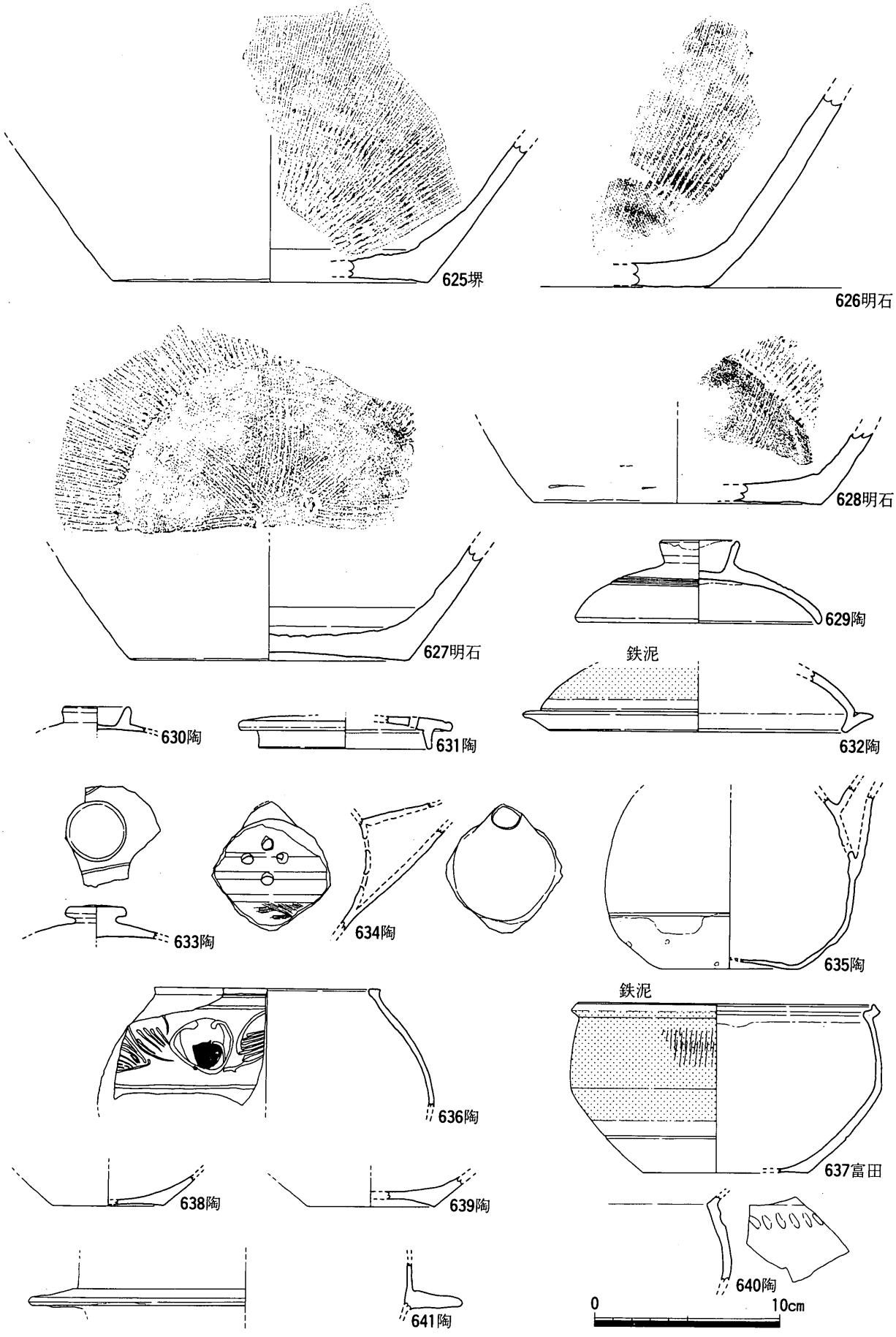
第227図　SDi 41出土遺物実測図6（1/3）



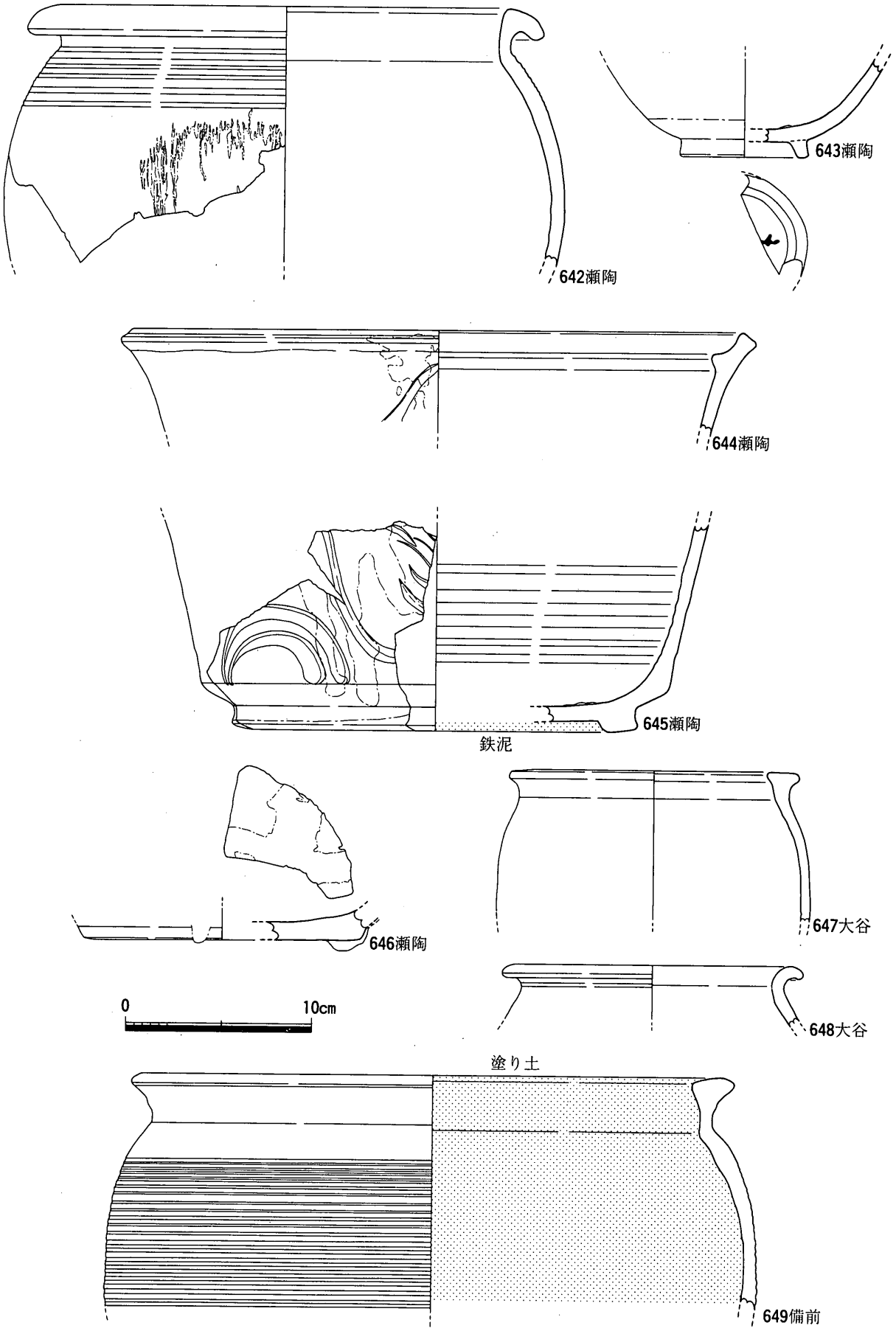
第228図　SDi 41出土遺物実測図 7 （1 / 3）



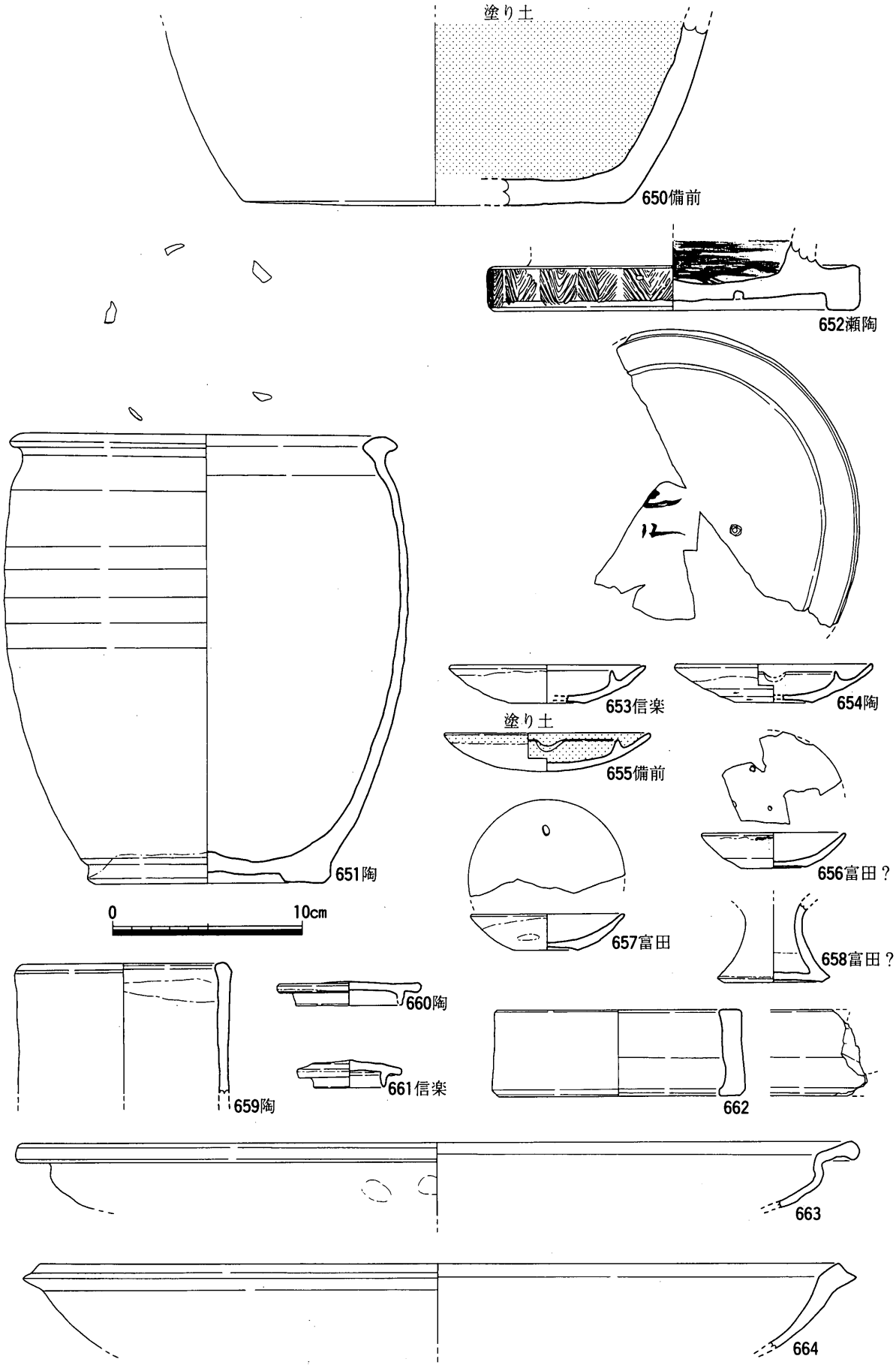
第229図　SDi 41出土遺物実測図 8 （1 / 3）



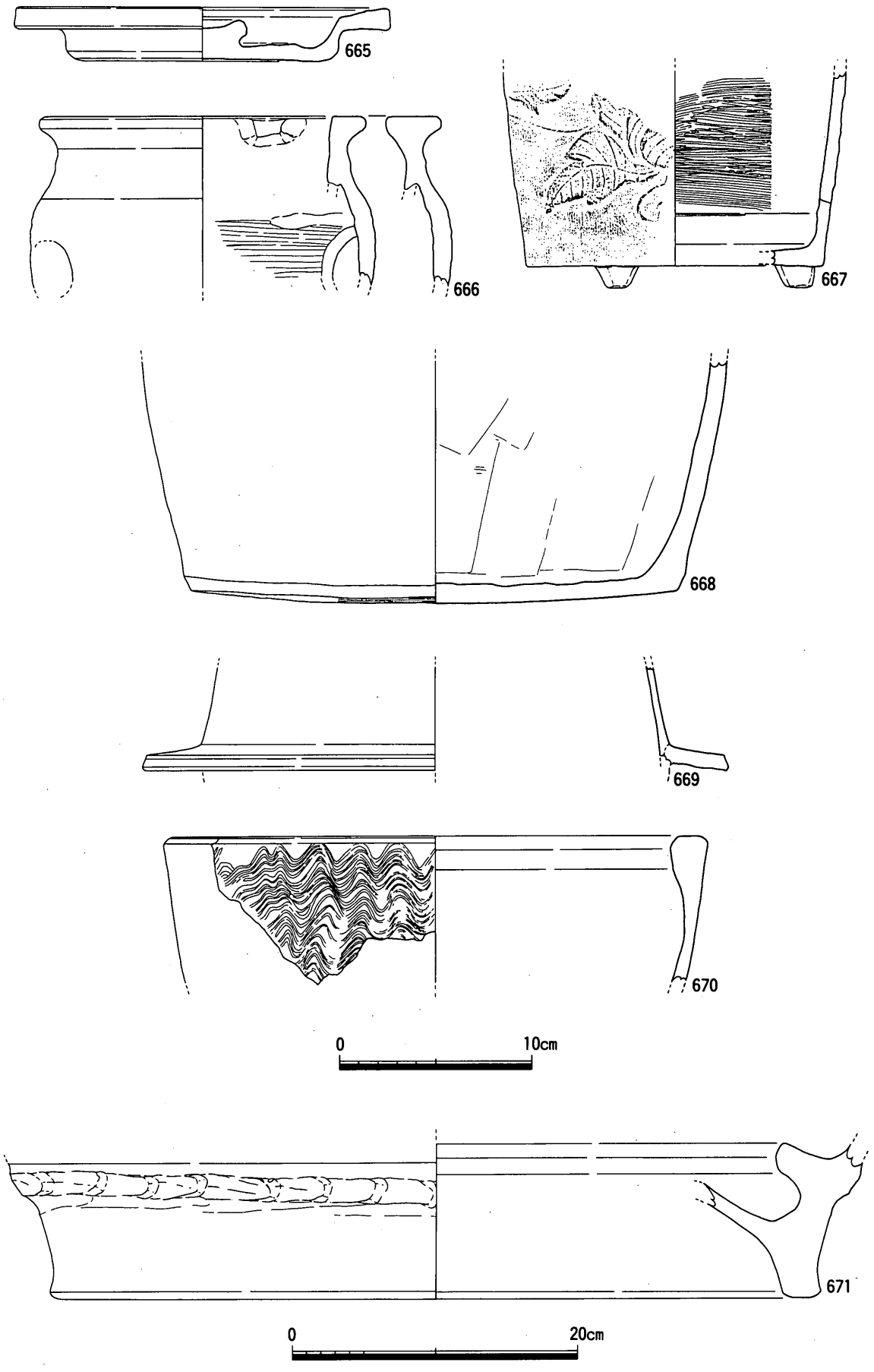
第230図　SDi 41出土遺物実測図 9 （1／3）



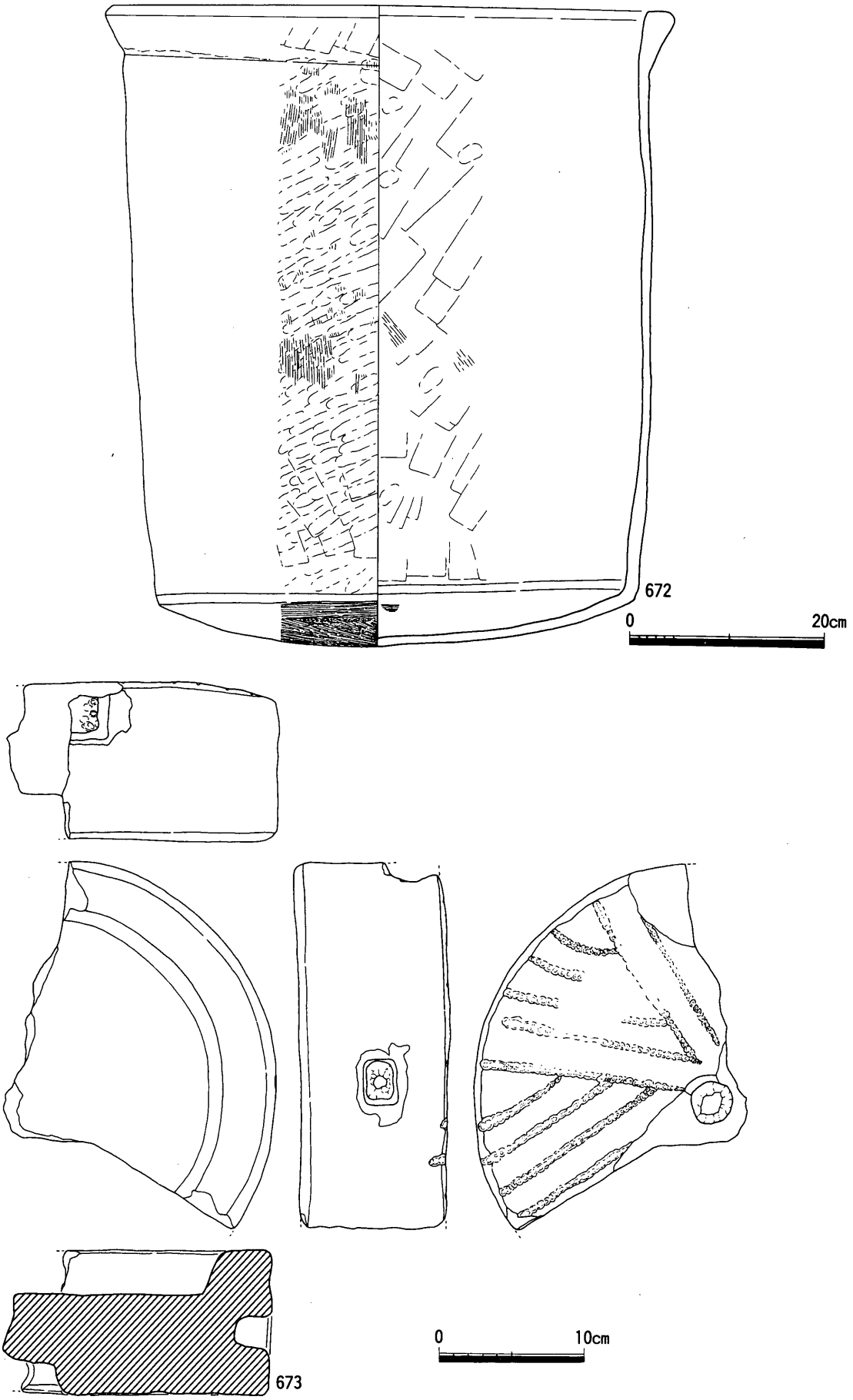
第231図　SDi 41出土遺物実測図10（1/3）



第232図　SDi 41出土遺物実測図11（1/3）



第233図　SDi 41出土遺物実測図12（1/3・1/4）



第234図　SDi 41出土遺物実測図13（1/6・1/4）

鉢（588・589），瀬戸陶器鉢（590），瀬戸美濃陶器片口鉢（591），大谷焼鉢（592），備前焼鉢（593），陶器鉢（594～596・599・600），陶器鉢または甕（597・598），瀬戸美濃陶器小杯（601），信楽陶器徳利（602），大谷焼徳利（603～606），備前焼徳利（609～611），陶器徳利（612），大谷焼火入れ（607・608），備前焼擂鉢（613～615），堺または明石擂鉢（617～622・624），堺擂鉢（616・623・625），明石擂鉢（626～628），陶器透明釉蓋（630・631），陶器蓋（629・632・633），陶器透明釉土瓶（634），陶器土瓶（635・636），富田焼陶器行平鍋(637)，陶器土鍋または急須(638・639)，陶器透明釉土鍋(640)，陶器透明釉羽釜(641)，瀬戸美濃陶器甕（642・643），瀬戸陶器水甕（644・645），瀬戸陶器甕または壺（646），大谷焼甕（647・648），備前焼水屋甕（649），備前焼甕（650），陶器甕（651），瀬戸陶器瓶掛火鉢（652），信楽陶器灯明受皿（653），陶器灯明受皿（654），備前焼灯明受皿（655），富田焼陶器灯明受皿（657），富田焼？陶器灯明受皿(656)，富田焼？陶器台付灯明受皿(658)，陶器火入れ(659)，陶器蓋(660)，信楽陶器蓋(661)，土師質土器五徳（662），土師質土器焙烙（663），瓦質土器焙烙（664），土師質土器蓋（665），土師質土器焜炉（666・667），土師質土器甕（668），瓦質土器羽釜（669），瓦質土器火鉢または火消し壺（670），土師質土器風呂釜（671），土師質土器大甕（672），石臼（673），SKi 40で掲載した大谷焼鉢（359）の一部のほか陶磁器等が多量に出土した。516は中国産白磁碗であるが，高台部が幅広で，分厚く，削り出しが浅いことから，横田・森田分類のⅣ類で，12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。517～522は肥前磁器染付皿である。517は見込み蛇の目釉剝ぎが施され，高台部に砂が付着する。透明釉が分厚く塗布される。外面には塗りムラが生じ，内面の染付は不明瞭である。高台径が小さいことやその形態から，17世紀後半のものと考えられる。518は蛸唐草文が内面に施される。蛸の足が短いことから，18世紀後半のものと考えられる。519は見込みには五弁花文コンニャク印判が施される。底部が分厚く，波佐見系のもので，18世紀後半のものと考えられる。520は胎土は灰色みを帯び，釉には細かい貫入が入り，一見陶器風であるが，磁器である。見込みに蛇の目釉剝ぎが施され，アルミナ砂が塗布される。体部下半から底部外面は無釉で，18世紀頃のものと考えられる。521は底部から体部破片である。体部があまり残存していないため，明瞭ではないが，型打成形と考えられる。蛇の目凹形高台で，見込みには松竹梅が施され，底部外面には「成○年○」が描かれる。「成化年製」か「成化年造」のどちらかであろうが，不明である。18世紀末から19世紀前半のものである。522は佐賀県塩田町志田窯産の皿である。[10] 墨弾き技法を用いる。また，染付全体が不鮮明な感じを受ける。外面には化粧土が流れ，底部内外面に目跡がみられる。19世紀代のものである。523・524は肥前系磁器染付皿である。523は胎土がやや灰色みを帯び，底部は蛇の目凹形高台である。内外面には牡丹唐草文が描かれ，体部の割れ口には焼き継ぎがみられる。18世紀末から19世紀初頭のものと考えられる。524は型打成形で，蛇の目凹形高台である。胎土は灰色みを帯び，呉須の色調も明るい。明治時代のものであろう。525は多角形を呈する三田青磁皿である。型打ち成形で，高台は貼り付けによる。青磁釉は白濁する。19世紀代のものであろう。526は胎土に光沢があることから瀬戸美濃産の磁器染付皿であろう。型紙摺で，外面には「明治」と描かれることから，明治時代のものと考えられる。527は中国産染付皿である。焼成不良で，胎土は軟質である。染付は印青花で，釉は分厚く塗布され，不鮮明である。18世紀代の清朝のもので，福建省付近で生産されたものと考えられる。528は磁器色絵皿である。胎土は緻密で，灰色を呈し，黒色砂粒は含まない。色絵で文様を描き，底部には呉須で「大明成化年製」を描く。胎土は肥前や瀬戸の製品のどちらとも違い，産地は不明である。なお，胎土・呉須の色調，「大明成化年製」の筆跡に類似する色絵磁器碗が徳島市常三島遺跡出土資料にみられる。[11] この碗は端反りで，外面に褐色釉が塗布される形態より19世紀代のものと考えられる

ことから，528も同時期のものであろう。なお，徳島県にも出土例があることから，四国地方で生産された可能性も考えられる。529は肥前系磁器染付蓋である。端反り碗の蓋で，1820～1860年のものと考えられる。530は底部破片であるが，18世紀前半の陶胎染付碗である。531は肥前系磁器染付碗である。胎土・透明釉が灰色みを帯び，内面に蛇の目釉剝ぎが施される。体部の形態から，端反り形になると考えられることから，19世紀前半から中葉のものと考えられる。また，肥前ではこの時期に見込み蛇の目釉剝ぎがみられないことから，地方窯で生産されたものであろう。532～534は肥前系磁器染付碗で，広東形を呈する。19世紀前半のものと考えられる。535～541も肥前系磁器染付碗である。535は端反形を呈する。536も染付文様や高台部の形態から端反り形になると考えられる。537も体部形態から，端反り形になると考えられる。538・539は釉の掛け方にムラがみられ，焼成が悪く，胎土の一部が橙色に発色する。いずれも少々雑な作りで，外面の染付文様も非常に類似する。539は見込みに目跡が残る。538・539は体部・底部の形態や染付文様から，端反り形になると考えられる。同じ産地で，1820～1860年のものと考えられる。540も端反り形を呈すると考えられる。1820～1860年のものである。541も端反り形を呈する。胎土が灰色みを帯び，見込み蛇の目釉剝ぎが施されることから，541は肥前産ではなく，地方窯で生産されたものと考えられる。1820～1860年のものである。543は肥前系磁器染付碗である。見込み蛇の目釉剝ぎが施される。呉須は明るい青色である。作りから，明治・大正時代のものと考えられる。542・544～546は肥前系磁器染付碗である。型紙摺で，明治・大正時代のものである。547・548は磁器染付碗である。呉須は明るい青色を呈し，いずれも太い線で花を描く。同じ文様である。547・548は胎土の発色が明るい白色であることから，瀬戸美濃産の可能性が高い。端反り形を呈することから，19世紀中葉から末のものであろう。549は瀬戸美濃磁器染付碗である。呉須の色調は明るい青色で，胎土は明るい白色である。染付は太い線書きである。丸碗で，19世紀代のものである。[12] 550は肥前青磁鉢である。内面に蛇の目釉剝ぎが施され，高台部は無釉であることから，17世紀中葉から末のものと考えられる。[13] 551は肥前磁器染付鉢である。胎土は灰色みを帯びる。見込みは蛇の目釉剝ぎが施され，コンニャク印判により五弁花が装飾される。波佐見系で，18世紀後半のものである。552は八角形を呈し，蛇の目凹形高台の鉢である。胎土が灰色みを帯びる。地方窯で生産された可能性が強い。19世紀初頭から幕末のものである。553は肥前系磁器染付鉢である。内外面に雲と鳥を描く。高台部外面を削る。おそらく，19世紀代のものであろう。554は肥前系白磁鉢である。型打ち成形で，内面が放射状に波打つ。釉の発色は青みがかる。蛇の目凹形高台で，見込みには目跡が残る。19世紀初頭から末のもので，砥部焼の可能性がある。555は青磁鉢である。型押し成形で，内外面に青磁釉が厚く塗布される。高台部は欠損するが，貼り付けであることから，三田青磁で，19世紀代のものと考えられる。なお，体部に焼き継ぎ痕がみられる。556は口縁端部が無釉であることから，段重と考えられる。外面には唐草と薄葉が表現される。18世紀末から19世紀前半のものである。557は肥前磁器色絵小杯である。外面には赤色で，唐子を描く。体部の形態は端反りである。長崎県佐世保市の三河内産で，19世紀中葉から後半のものである。558は瀬戸美濃磁器染付小杯である。愛知県瀬戸市かみた第1・2号窯跡に類似品がみられる。[14] 端反りで，体部に同じ文字が描かれる。19世紀代のものである。559は肥前磁器紅猪口で，型押し成形である。外面には蛸唐草が表される。蛸唐草の足が長いことから，19世紀初頭から後半のものと考えられる。560は肥前磁器染付瓶で，17世紀後半から18世紀前半のものである。561は磁器染付小杯である。太い線書きで文様が描かれる。おそらく，瀬戸美濃産で，19世紀代のものであろう。562は肥前磁器染付仏飯器である。脚部の破片である。18世紀代のものである。563は肥前磁器色絵神酒徳利で，外面にかすかに色絵が残る。19世紀前半から幕末のものであ

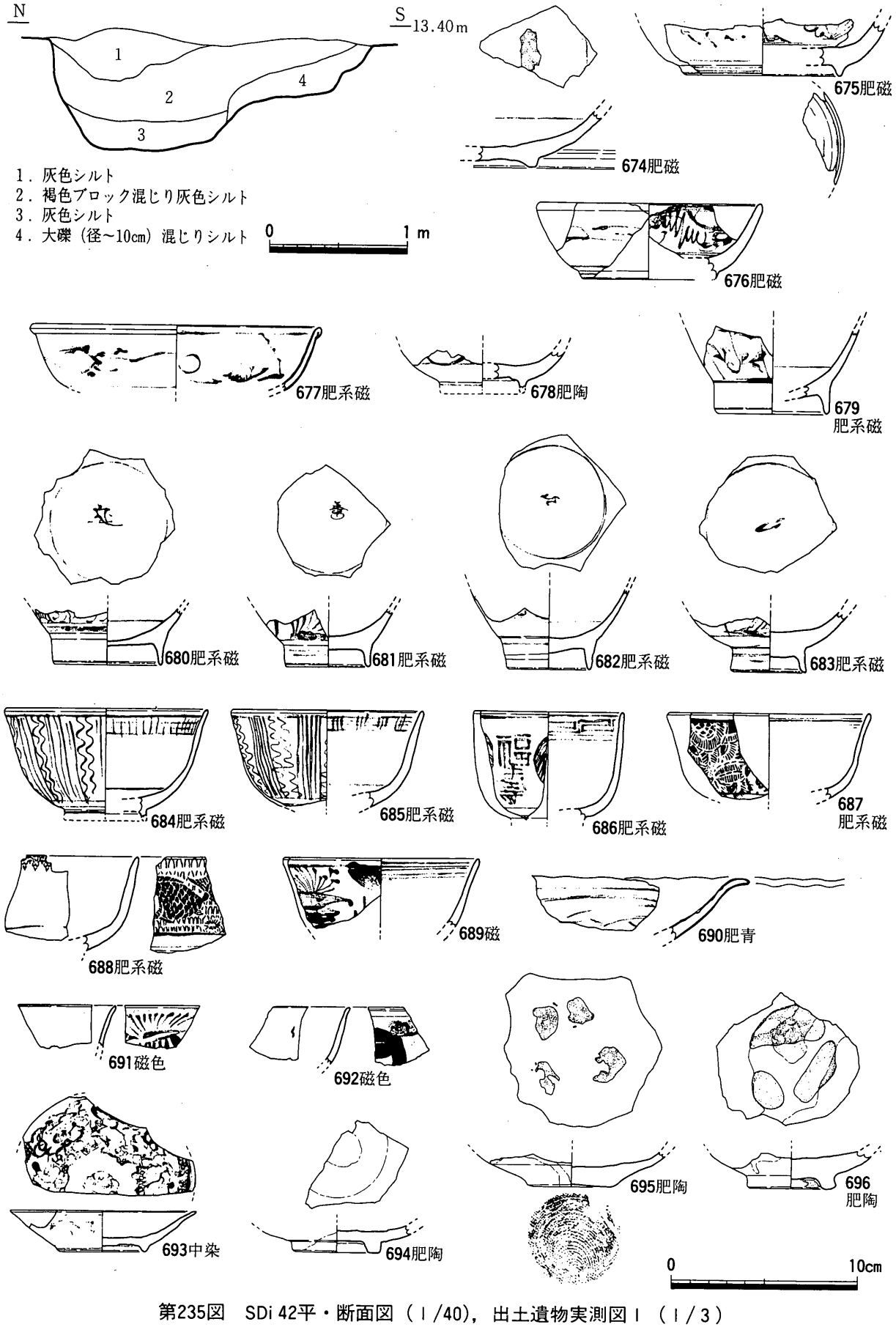
ろう。564は肥前系磁器染付仏花瓶である。胎土は灰色みを帯び，釉は緑みを帯びる。18世紀後半から19世紀前半のものであろう。565は肥前陶器灰釉皿で，砂目積みである。1600～1630年のものである。566は肥前陶器鉄釉皿である。砂目積みで，1600～1630年のものである。567は肥前陶器青緑釉皿で，見込み蛇の目釉剝ぎが施される。17世紀後半から18世紀前半のものである。568は肥後の松尾焼陶器皿である。胎土は赤褐色を呈し，内面には象嵌が施される。象嵌は二重に巡り，内側の象嵌は桜の花が施される。19世紀代のものである。[15] 569は瀬戸陶器馬の目皿で，19世紀代のものである。570は瀬戸美濃陶器皿である。いわゆる石皿で，19世紀前半から中葉のものであろう。571は瀬戸美濃陶器染付皿である。見込みに文様を描き，体部上半にも染付が施される。19世紀代のものである。572は瀬戸美濃陶器灰釉皿である。底部中央に高台部内外面に釉はみられず，底部中央外面に施釉される。19世紀代のものである。573は陶器皿である。胎土は瀬戸美濃に類似するが，産地不明である。574は源内焼陶器皿で，内面の文様は陽刻で，型打ち成形である。内外面ともに緑釉が塗布され，底部内面には三彩により絵付けされるが，残りが悪く不明瞭である。18世紀後半のものである。575は京・信楽系陶器皿である。細かい貫入が入り，口縁端部を数カ所つまみ上げる。産地は不明である。576は信楽陶器碗である。胎土がやや黄みを帯びた白色を呈する。白色釉が施釉される。577は陶器染付皿で，産地不明である。明治時代以降のものである。578も産地不明陶器鉢である。胎土は黄色を呈し，黒色砂粒を少量含む。578はIII—21区出土である。SDi 41に隣接するIII—21区 SXi 05出土の陶器鉢（791）と胎土・形態・目跡が非常に類似する。接合は不可能であるが，同一個体の可能性も考えられる。また，SXi 05出土富田焼陶器鉢（790）は578・791と胎土の色調は異なり，灰色を呈するが，高台部の形態や目跡が578・791と非常に類似する。790は胎土分析で富田焼と特定できた資料である。焼成温度の差異により，橙色に発色することも考えられるので，578・791は790と同様富田焼の可能性も考えられよう。579は肥前陶器刷毛目碗で，17世紀後半から18世紀前半のものである。580・581は京焼風陶器碗で，17世紀後半から18世紀前半のものである。582～584は瀬戸美濃陶器腰錆碗で，582は18世紀後半，583・584は19世紀前半のものである。[16] 585は瀬戸美濃陶器染付碗で広東形を呈する。高台部の形態から，19世紀後半のものと考えられる。586は信楽陶器碗である。口縁部は端反りで，18世紀末から19世紀代のものである。587は肥前陶器鉢である。17世紀末から18世紀代のものである。588・589は肥前陶器刷毛目鉢である。588は17世紀末から18世紀前半，589は17世紀末から18世紀代のものである。590は瀬戸陶器鉢で，鉄絵が描かれる。19世紀後半のものである。591は瀬戸美濃陶器片口鉢である。口唇部に鉄釉を施す。19世紀後半のものであろう。592は大谷焼鉢である。詳細な時期は不明であるが，19世紀代のものである。593は備前焼鉢で，サヤ鉢を転用したものである。594・595は産地不明の陶器鉢である。594の見込みには径0.7㎜の目跡が4.5～5.0cm間隔で残る。595は594とほぼ同じ大きさの目跡が4.5～5.0cm間隔で残る。596も産地不明陶器鉢である。597・598は鉄釉の陶器鉢または甕である。おそらく甕であろう。産地は不明である。598は底部外面に墨書がみられるが，文字不明である。599は陶器鉢の口縁部である。淡い緑色と明るい青色で絵付けされることから，明治時代以降のものであろう。産地は不明である。600も陶器鉢である。灰色の胎土で，白化粧土塗布後，明るい青色と暗褐色で絵付けされた陶器鉢である。明治時代以降のものであろう。産地は不明である。601は瀬戸美濃陶器小杯である。底部外面は無釉である。18世紀末から19世紀代のものである。602は信楽陶器徳利である。外面に細かい貫入が入り，鉄絵が施される。器壁は2～3㎜と薄い。603～606は大谷焼徳利である。いずれも詳細な時期は不明であるが，大谷焼陶器は1784年以降生産されたものである[17]ことから，18世紀末から19世紀代のものであろう。高い高台が付くもの（604）と，高台の付かないもの（605・606）がみ

られる。606は掘り字に白化粧土を施す。「○○屋」と掘られることから，屋号が書かれていると推定されるが，欠損のため不明である。607・608も大谷焼である。高台の形態から火入れであると考えられる。607は体部外面に押し引きによる凹みによって装飾される。609～611は備前焼徳利である。いずれも外面に塗り土を施す。609は18世紀前後のものである。610・611の底部外面には陶印がみられる。610の陶印は文政8年（1825）頃，北窯17人の1人，安右衛門，嘉永2年（1849）では北竈組長次郎が用いた。また，611の陶印は永禄（1558～1570）の頃木村吉右衛門，嘉永2年（1849）西竈組の大饗千吉が用いた。[9] 612は産地不明陶器徳利である。体部外面に「大阪○○町」と書かれる。明治時代以降のものであろう。613～615は備前焼擂鉢である。613は卸目の単位間にやや広い隙間がみられることから，17世紀末から18世紀前半のものであろう。614・615は卸目の単位間の間隔がやや狭くなることから，18世紀代のものと考えられる。616は堺擂鉢である。口縁部内面に突帯がみられることから，白神分類のI型式に当たり，18世紀前半から中葉のものと考えられる。617～621は堺または明石擂鉢である。底部がないためどちらか不明である。いずれも口縁部外縁帯の張りが大きいことから，同分類のII型式に当たり，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。622・624も堺または明石擂鉢である。口縁部外縁帯は低く，外へ張り出し，断面形は三角形となることから，同分類のIII型式に当たり，19世紀前半から後半のものと考えられる。623も同様の形態を示し，同時期のものであろうが，底部が残存し，底部の卸目がウールマーク状に入ることから，堺産のものである。625は陶器擂鉢の底部破片である。底部から体部内面に卸目が施される。また，内外面とも底部周縁から体部と，底部中央とでは色調が異なる。焼き台を使用して焼成したためであろうか。このような色調の差異は堺擂鉢に多いことから，625も堺産であろう。626～628は底部内面に卸目が放射状に施されることから，明石擂鉢である。明石擂鉢の出現は18世紀後半であることから，それ以降のものである。626～628は内外面とも底部中央と，底部周縁から体部とでは色調が異なる。629は陶器蓋であるが，産地不明である。透明釉が塗布される。土鍋の蓋で，19世紀代以降のものであろう。630・631も陶器蓋である。赤色系の色調を呈し，透明釉が塗布される。632・633も陶器土鍋の蓋である。産地不明である。635・636は陶器土瓶である。636は灰釉が塗布され，白化粧土で線書きし，呉須を塗る。呉須の色調がコバルトブルーであることから，明治以降のものであろう。産地は不明である。637は胎土分析で富田焼と特定した行平鍋である。外面には飛鉋が施され，鉄泥が塗布される。内面には灰釉が塗布される。642・643は瀬戸美濃陶器甕である。642は内外面に鉄釉が施され，外面に灰釉が流し掛けされる。642は底部外面は無釉で，墨書がみられる。墨書は一部分が残存するのみで，文字は不明である。642・643とも19世紀代のものと考えられる。644・645は瀬戸陶器水甕である。外面には文様がヘラ彫りされる。644は口縁部外面に一部無釉の箇所がみられる。ヘラ彫りの上に青緑色釉を流し掛けする。645は底部外面に鉄泥を塗布する。内面には径1.5～2.0cmの目跡が残る。644・645とも19世紀代のものである。646は瀬戸陶器甕または壺の底部である。底部外面には鉄泥を塗布する。体部外面には青緑色釉を流し掛けし，底部外面に一部垂れる。内面には鉄釉を塗り，灰釉を流し掛けする。19世紀代のものであろう。647・648は大谷焼甕である。18世紀末から19世紀代のものであろう。649は備前焼水屋甕である。内面には塗り土が施される。650は備前焼甕で，内面に塗り土が施される。649・650ともに18世紀代のものである。651は陶器甕である。鉄釉が塗布され，胎土は暗灰色を呈し，一部橙色化している部分がみられる。きめは細かい。瀬戸美濃陶器甕642・726と器形や釉が類似するが，高台部外面が外に突出せず，直立する。見込みに目跡が付くが，目跡は細長く，前述の597と類似する。胎土の色調は異なるが，きめの細かさは類似する。焼成温度の差によって色調が異なる場合もあるので，597と同産地で生

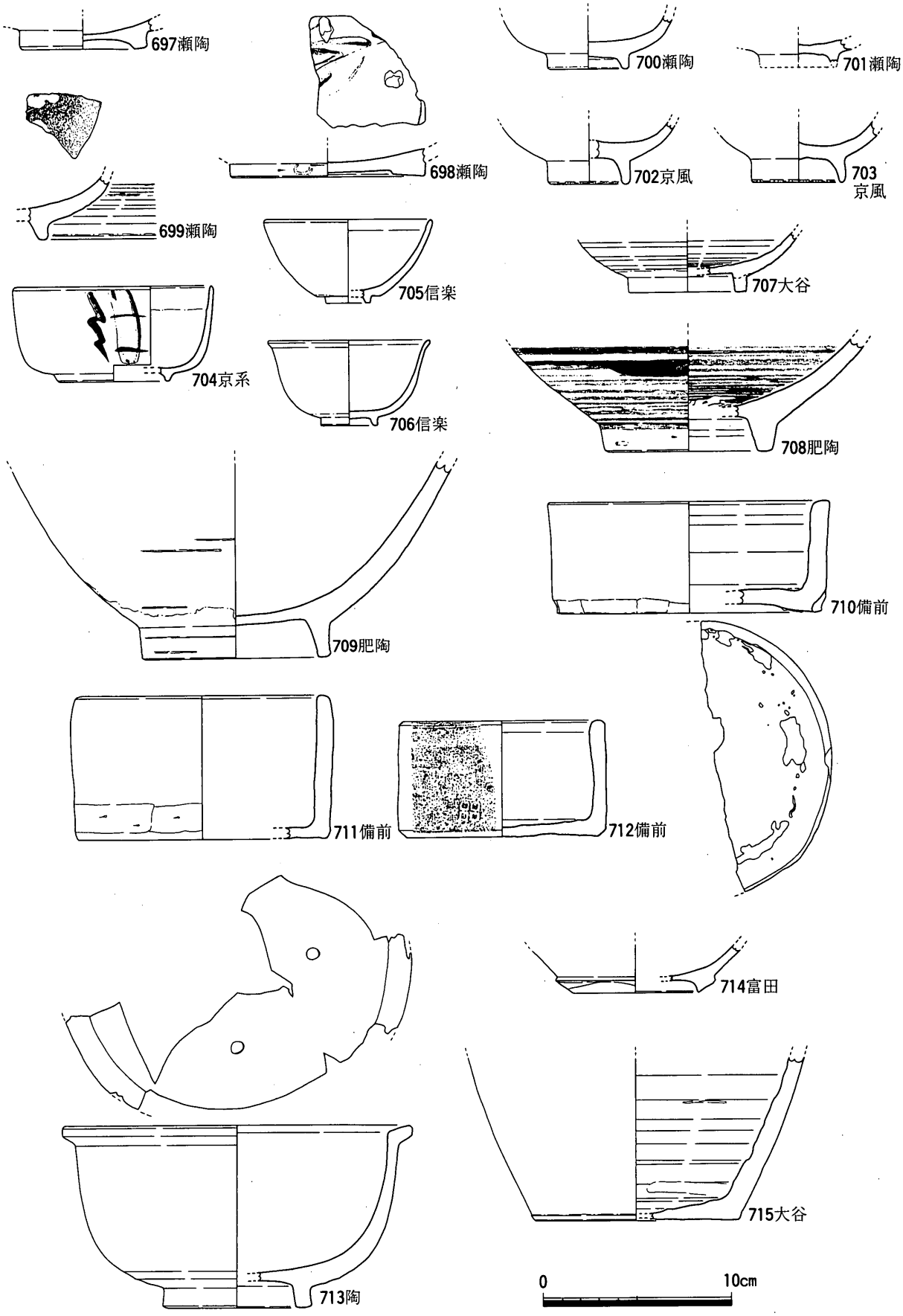
産されたものかもしれない。652は瀬戸陶器瓶掛火鉢である。内面には鉄泥が塗布される。底部外面には木の台を付けるための穴があけられる。墨書がみられるが，文字は不明である。19世紀代のものである。653は信楽陶器灯明受皿である。桟が付く。654は陶器灯明受皿である。653に比べ，釉薬が分厚く，胎土は粘性が強く，わずかに気泡が入る。これらの特徴は653よりも657に類似する。657は胎土分析によって富田焼と特定した資料であることから，653も富田焼の可能性が考えられよう。655は備前焼灯明受皿である。桟が付き，内面と口縁部外面に塗り土が施される。桟が付くことから，18世紀代のものであろう。656は陶器灯明受皿である。見込みに目跡が残る。胎土に細かい気泡がみられ，釉が653に比べ若干分厚く，657に類似する。胎土分析で富田焼の分布領域付近にプロットしているとされたもので，信楽焼の分布領域からも離れていることや，釉や胎土に富田焼の特徴をもつことから，656は富田焼の可能性が非常に高い。657は胎土分析で富田焼と特定した陶器灯明受皿である。目跡が残る。658は陶器台付灯明受皿である。656同様胎土分析で富田焼の分布領域付近にプロットしているとされたものである。656・657と胎土・釉が類似することから，富田焼の可能性が非常に高い。660は陶器蓋である。産地は信楽か富田か不明である。661は信楽陶器蓋である。662は土師質土器五徳である。体部に透かしがみられるが，透かし部分で割れているため全体は不明である。以上のように，遺物は古いもので12世紀後半から13世紀前半，新しいものでは明治以降のものまで含まれる。この溝は昭和19年まで存続しており，昭和時代の遺物も多く出土した。時期別にみると中世の遺物や17世紀前半の遺物は少量で，17世紀後半以降のものが多い。最も多量に出土したのが18世紀後半から19世紀の遺物である。いずれの遺物も完形品ではなく，破片であることから，廃棄されたものと考えられるが，付近には遺物と同時期の集落が存在したものと考えられよう。

SDi 42（第235～240図，図版46）

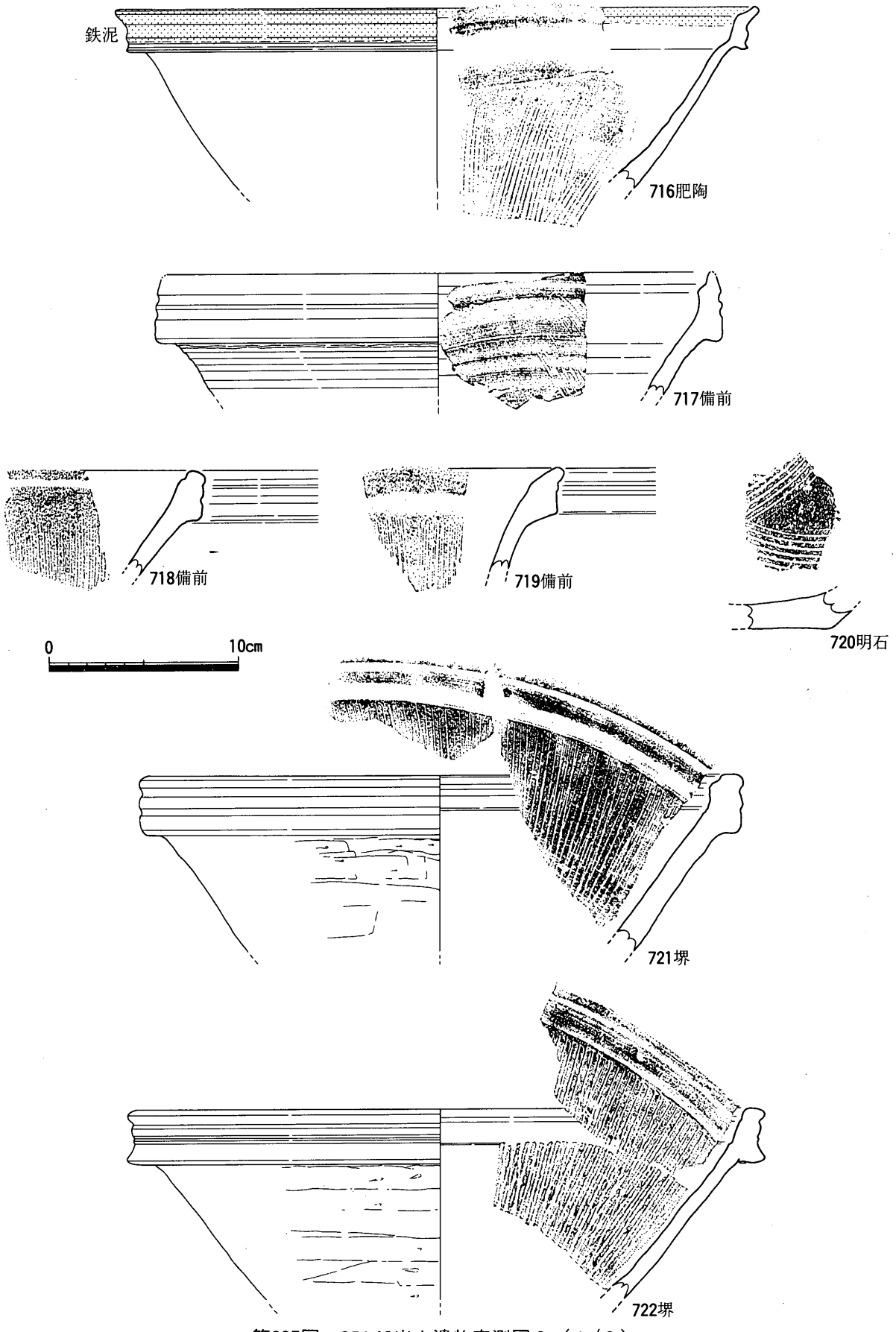
III－23区・III－26区で検出された溝である。東西に走る。III－23区の東部では溝は幅狭く，浅くなり，SDi 40と合流する。III－13区ではSDi 42に連続する溝は見当たらず，III－23区とIII－13区の間で途切れる。溝幅は0.4～2.4m，深さ0.1～0.9m，検出長50mを測る。肥前磁器染付皿(674～676)，肥前系磁器染付皿（677），肥前陶胎染付碗（678），肥前系磁器染付碗（679～688），磁器染付碗（689），肥前青磁鉢（690），磁器色絵碗（691・692），中国産磁器染付皿（693），肥前陶器青緑釉皿（694），肥前陶器鉄釉皿（695），肥前陶器灰釉皿（696），瀬戸美濃陶器皿（697），瀬戸陶器皿（698・699），瀬戸美濃陶器腰錆碗（700・701），京焼風陶器碗（702・703），京焼系陶器碗（704），信楽陶器碗（705・706），大谷焼鉢（707），肥前陶器刷毛目鉢（708），肥前灰釉陶器鉢（709），備前焼鉢（710～712），陶器鉢（713），富田焼陶器鉢（714），大谷焼徳利（715），肥前陶器擂鉢（716），備前焼擂鉢（717～719），明石擂鉢（720），堺または明石擂鉢（721～725），瀬戸美濃陶器甕（726・727），陶器甕または壺（728），陶器甕（729・730），土師質土器五徳（731），土師質土器焙烙（732），土師質土器五徳（733・734），瓦質土器羽釜（735・737），土師質土器瓦灯傘（736），瓦質土器焙烙（738～740），瓦質土器甑（741），瓦質土器器種不明（742）など整理用コンテナ12箱の陶磁器が出土した。674～676は肥前磁器染付皿である。674は見込みに砂目積み痕がみられる。透明釉は均一ではなく，塗り方にムラができる。焼成がやや甘く，釉は白濁し，貫入が入る。1610～1630年のものである。675は胎土が灰色みを帯び，底部が分厚い。内面には扇が描かれる。波佐見系で，18世紀後半のものである。676も胎土が灰色みを帯び，底部が分厚い。内面には葡萄か蔓草，外面には蔓草が描かれる。波佐見系で，18世紀後半のものである。677は肥前系磁器染付皿で，口縁部が玉縁になる。18世紀末から19世紀前半のものである。678は肥前陶胎染付碗で，18世紀前半のものである。



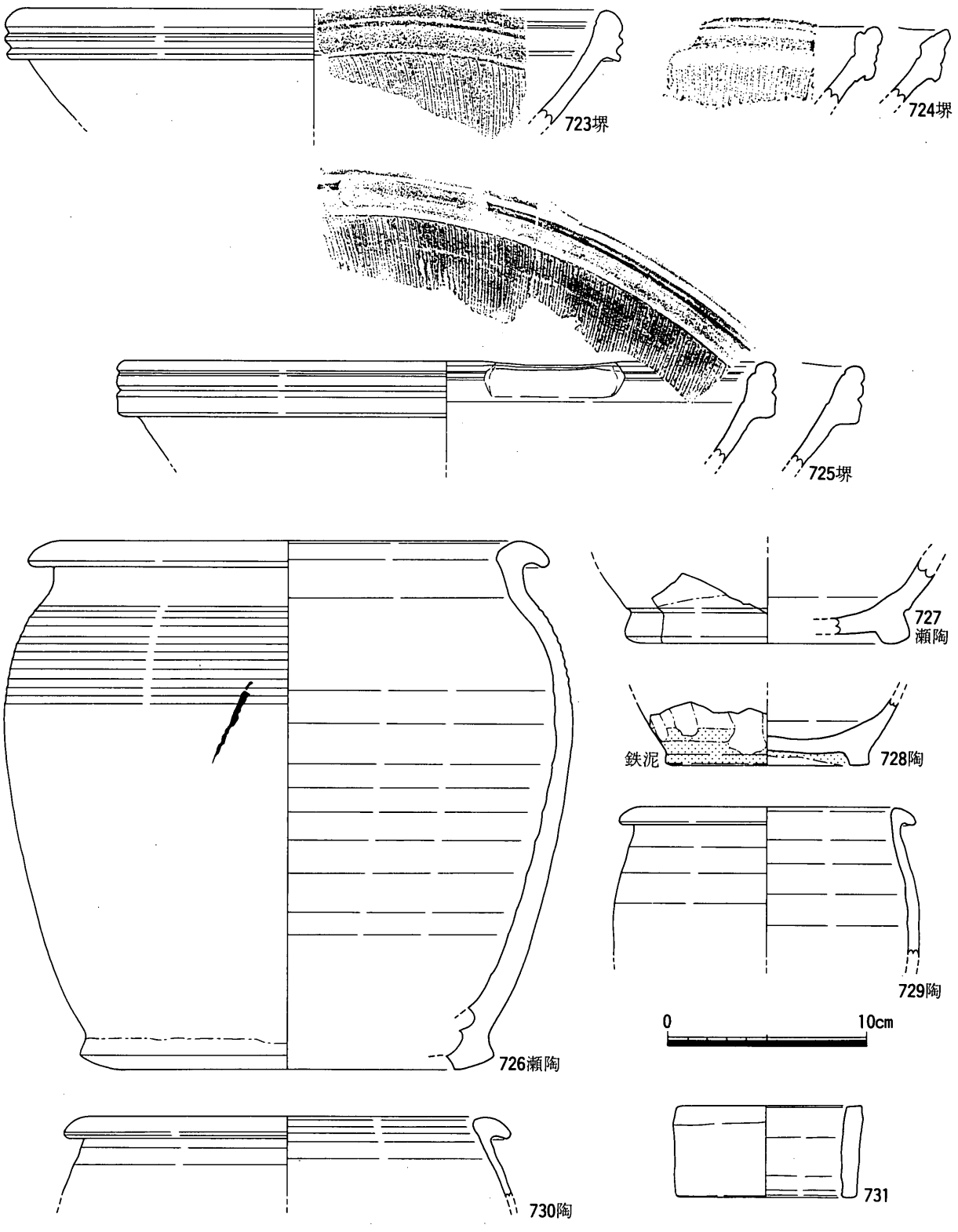
第235図　SDi 42平・断面図（1/40），出土遺物実測図1（1/3）



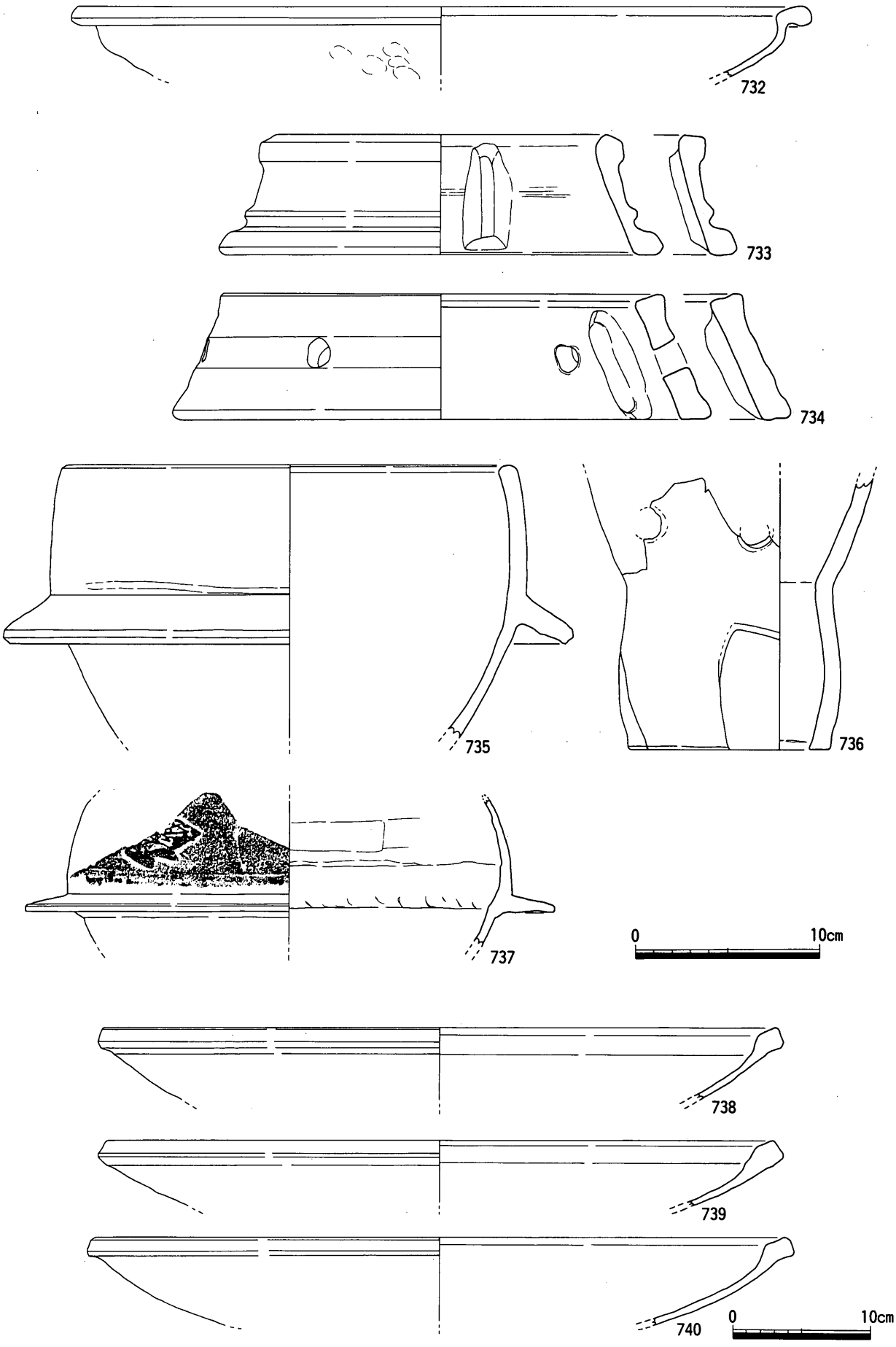
第236図　SDi 42出土遺物実測図２（１／３）



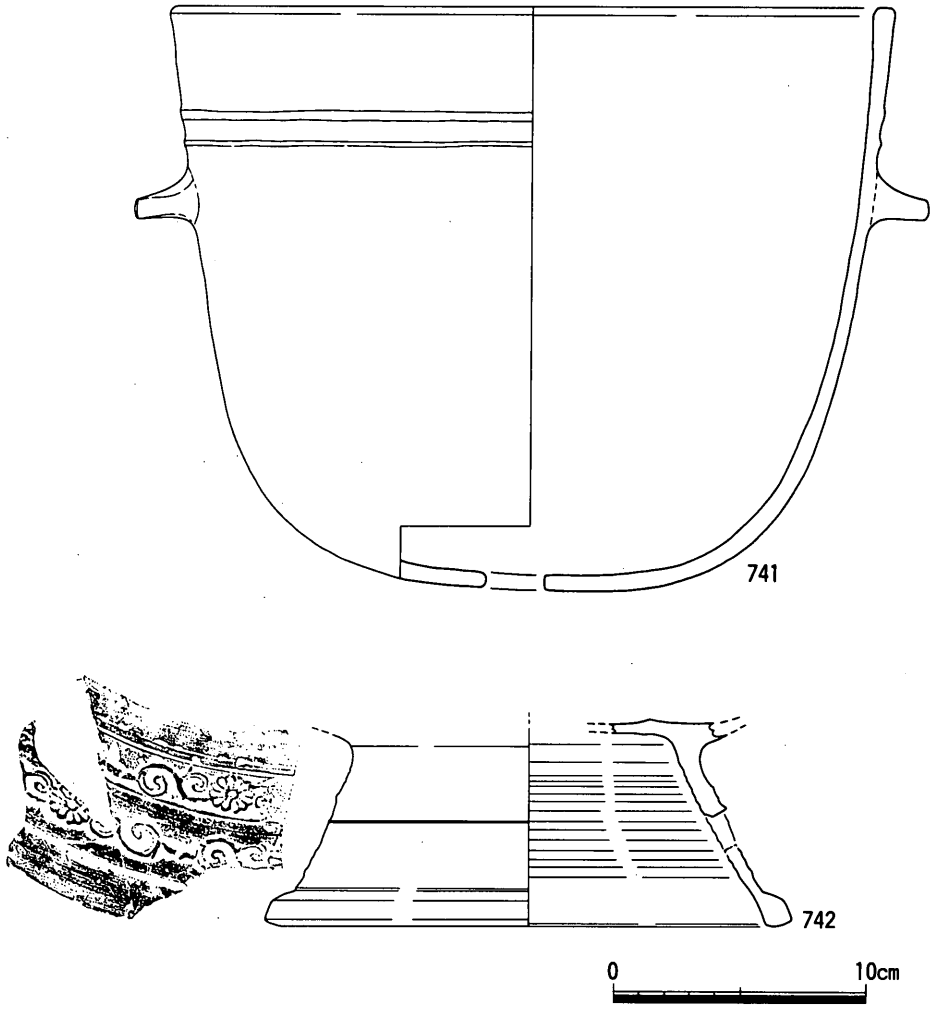
第237図　SDi 42出土遺物実測図３（１／３）



第238図　SDi 42出土遺物実測図４（１／３）



第239図　SDi 42出土遺物実測図５（１/３・１/４）



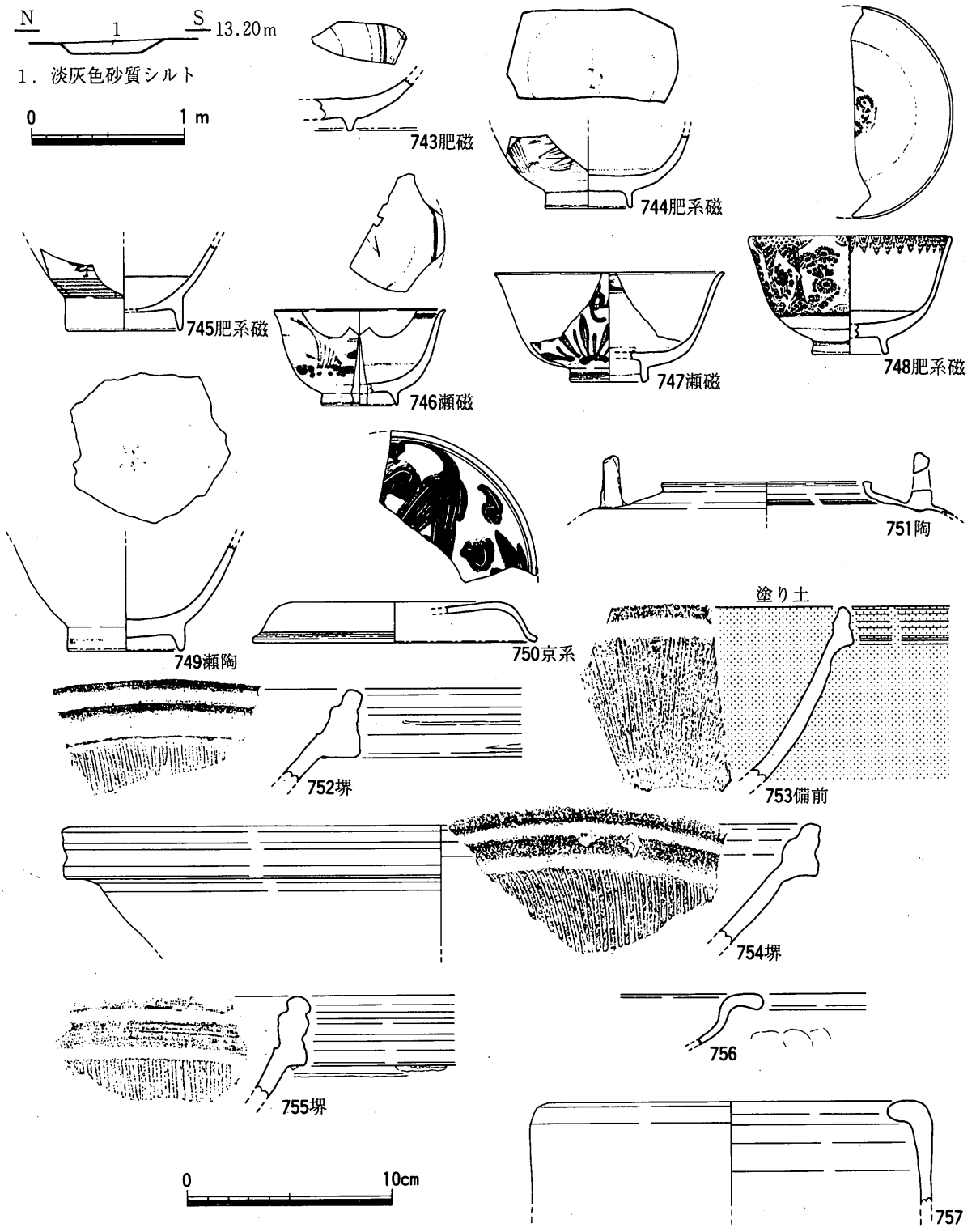
第240図　SDi 42出土遺物実測図 6 （1／3）

679～688は肥前系磁器染付碗である。679～682は広東形を呈することから，19世紀前半のものと考えられる。683～686は端反り形を呈することから，1820～1860年のものと考えられる。683・684は胎土が灰色みを帯びることから，地方窯産の可能性もある。687・688は型紙摺で，明治・大正時代のものである。689は磁器染付碗である。端反り形を呈し，呉須は明るい青色である。産地は不明である。幕末頃のものであろう。690は肥前青磁鉢で，波佐見産のものである。波状口縁で，内面にはヘラ彫りで，文様を描く。1630～1640年のものである。691・692は磁器色絵碗である。691は赤色で，絵付けする。692は緑色・赤色・茶色・青色で絵付けする。691・692とも産地は不明であるが，幕末頃のものであろう。693は中国産磁器染付皿である。焼成は悪く，やや軟質である。染付文様は印青花で，不鮮明である。中国の福建省付近で生産されたもので，18世紀代の清朝のものであろう。694は肥前陶器青緑釉皿である。見込み蛇の目釉剝ぎが施される。高台内の形態から18世紀前半のものと考えられる。695は肥前陶器鉄釉皿である。底部外面は糸切り痕が残り，高台はみられない。砂目積みで，底部内外面に砂が付着する。1600～1630年のものである。696は肥前陶器灰釉皿である。底部内面は無釉である。砂目積みであることから，1600～1630年のものである。697は瀬戸美濃陶器皿である。内面に釉が掛かるが，均一ではなく，一部釉垂れがみられる。698・699は瀬戸陶器皿である。高台部が分厚い。見込みには呉須と鉄により絵付けされ，目跡が残る。698はいわゆる石皿で19世紀前半のものである。699は見込みに吹墨による文様が施さ

れることから，明治時代のものであろう。700・701は瀬戸美濃陶器腰錆碗である。いずれも19世紀前半のものである。702・703は京焼風陶器碗である。703は外面に釉のムラがみられ，白濁する。702は高台部内面がアーチ状を呈することから，17世紀後半から18世紀初頭，703は17世紀後半から18世紀前半のものである。704は京焼系陶器碗である。外面に鉄絵が施される。明治・大正時代のものである。705・706は信楽陶器碗である。705は体部の形態から，18世紀中葉頃のものと考えられる。706は端反り形を呈することから，18世紀末から19世紀代のものと考えられる。708は肥前陶器刷毛目鉢である。17世紀末から18世紀前半のものである。709は肥前灰釉陶器鉢である。おそらく片口であろう。17世紀代のものである。710～712は備前焼鉢である。本来，生産地ではサヤ鉢として利用されていたものである。712は体部外面には陶印がみられる。これは天保年間（1830～1844年）に木村平八郎，嘉永２年（1849）に北竈組の木村平八郎が用いた陶印と同一のものである。713は陶器鉢である。内外面に鉄釉が掛かる。見込みには径0.6～0.7cmの目跡が残る。産地は不明である。おそらく，19世紀代以降のものであろう。714は富田焼陶器鉢である。胎土分析で，富田焼と特定した資料である。内面にはオリーブ色の灰釉が塗られ，見込みには焼き膨れがみられる。高台部は断面三角形を呈する。715は大谷焼徳利である。内面には粘土紐の接合痕の段がみられる。716は肥前陶器擂鉢である。口縁部が折れ曲がり，口縁部内外面には鉄釉が塗布される。卸目との先端は不揃いで，卸目の単位間には隙間がみられる。17世紀前半のものである。717は備前焼擂鉢である。卸目と卸目の間に広い隙間がみられ，卸目が斜めに入ることから，17世紀代のものと考えられる。718は内外面ともに同じ色調を呈するが，卸目の先端が不揃いであることから，備前焼擂鉢と考えられる。18世紀後半のものであろう。719も備前焼擂鉢である。口縁部内外面ともに自然釉が付着し，白濁する。口縁部の形態から，18～19世紀のものと考えられる。720は明石擂鉢である。見込みには卸目が放射状に施される。721～725は堺または明石擂鉢である。721・722・724・725は口縁部外端面の張りが大きいことから，白神分類のII型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。723は口縁部内面の段はほとんどみられず，断面形は三角形となることから，白神分類のIII型式で，19世紀前半から後半のものと考えられる。726・727は瀬戸美濃陶器甕である。いずれも内外面に鉄釉が掛かる。726は体部外面には灰釉を流し掛けする。726・727とも19世紀中葉から後半のものである。728は陶器甕または壺である。産地不明である。胎土は灰色を呈し，白色砂粒・黒色砂粒をやや多く含む。内面は無釉で，体部下半から底部外面は鉄泥が塗布された後，体部には灰釉が塗布され，緑色釉を流し掛けする。729は陶器甕である。内外面に鉄釉が塗布される。胎土は灰色を呈する。産地は不明である。731は土師質土器五徳である。下部は二次焼成を受け，白色化する。以上のように遺物の時期は17世紀前半から明治時代以降までと幅広い。この溝は昭和19年まで存続しているため，昭和時代の遺物も出土した。時期別にみると，17世紀前半のものは少量で，17世紀後半以降のものが多く，最も多いのが18世紀後半以降のものである。いずれの遺物も完形品ではなく，破片であることから，廃棄されたものと考えられるが，付近には遺物と同時期の集落が営まれたものと考えられよう。

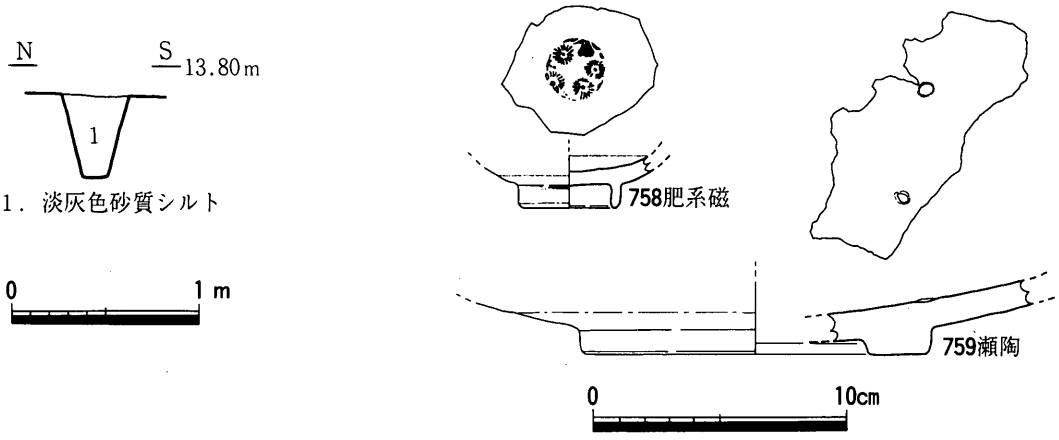
SDi 43（第241図）

III—25区・III—28区で検出された溝である。東西に走る。III—25区でSDi 44と合流する。溝幅0.4～1.7m，深さ0.1～0.5m，検出長33mを測る。肥前磁器染付皿（743），肥前系磁器染付碗（744・745・748），瀬戸美濃磁器染付碗(746・747)，瀬戸美濃陶器染付碗(749)，京焼系陶器蓋(750)，陶器透明釉土瓶(751)，堺または明石擂鉢（752・754・755），備前焼擂鉢（753），瓦質土器焙烙（756），瓦質土器火鉢または火消し壺（757），磁器染付碗（型紙摺）のほか陶磁器が少量出土した。743は肥前磁器染付皿である。見込



第241図　SDi 43断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

蛇の目釉剝ぎが施される。胎土は灰色みを帯びる。底部は分厚く，内面には斜め格子が描かれる。波佐見系で，18世紀後半のものである。744・745・748は肥前系磁器染付碗である。744は体部の形態や染付文様から，端反り形になると考えられる。1820～1860年のものである。745は広東形を呈する。19世紀前半のものである。748は型紙摺であることから，明治・大正時代のものである。746は瀬戸美濃磁器染付碗である。呉須の発色は暗青色を呈し，肥前系に類似するが，胎土から瀬戸美濃と考えられる。太い線



第242図　SDi 44断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

書きで，染付を描き，少し滲む。747も瀬戸美濃磁器染付碗である。染付は太い線書きで描き，色調は明るい青色である。746・747は端反り形を呈することから，19世紀中葉から後半のものと考えられる。749は瀬戸美濃陶器染付碗である。広東形を呈することから，19世紀代のものと考えられる。750は京焼系陶器蓋である。外面に磁州窯写しの文様が描かれる。明治・大正時代のものである。752・754・755は堺または明石擂鉢である。いずれも口縁部内面には段が付き，口縁部外端面の張りは大きいことから，白神分類のII型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。753は備前焼擂鉢である。内外面に塗り土が施される。18世紀代のものであろう。以上のように，遺物の時期は18世紀から明治時代以降と幅広い。この溝は昭和19年まで存続しており，昭和時代の遺物も出土した。遺物は完形品ではなく，破片であることから，廃棄されたものと考えられるが，付近には遺物と同時期の集落が存在したものと考えられよう。

SDi 44（第242図）

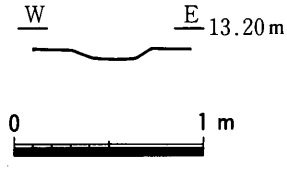
III—30区で検出された溝である。東西に走り，溝の西部はH地区に連続する。幅0.3～0.6m，深さ0.4mを測る。肥前系磁器染付碗（758），瀬戸美濃陶器皿（759）が出土した。758は型紙摺であることから，明治・大正時代のものと考えられる。759は内外面にオリーブ色の灰釉が塗布される。見込みには目跡が残る。19世紀代のものである。出土遺物から，この溝は明治・大正時代まで，存続したものと考えられる。

SDi 45（第243図）

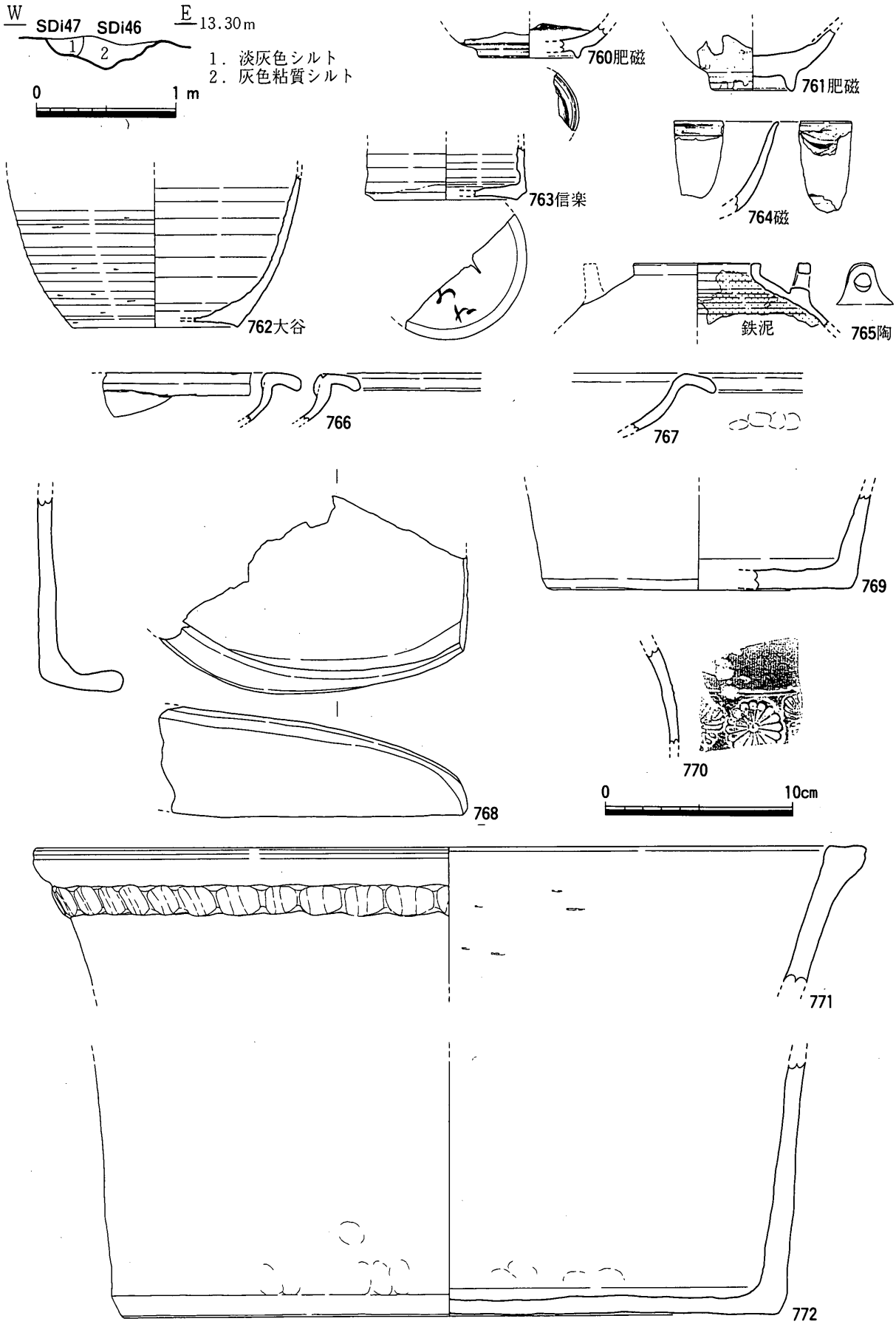
III—24区からIII—28区にかけて検出された溝である。南北に走り，南部はSDi 43と合流する。一部途切れるが，検出長43m，溝幅0.3～0.5m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は江戸時代以降のものと考えられる。

SDi 46・SDi 47（第244図，図版43）

III—25区からIII—28区・III—29区にかけて検出された溝である。両溝とも南から北に走る。III—29区では両溝は重複するが，土層堆積からSDi 47が新しいことがわかる。SDi 47は検出長17m，幅0.2～0.5m，深さ0.15mを測る。SDi 46はIII—28区でSDi 43と合流する。検出長18mを測り，幅0.5～0.8m，深さ0.2mを測る。SDi 47からは遺物は出土しなかった。SDi 46からは肥前磁器染付皿（760），肥前磁器染付碗（761），大谷焼徳利（762），信楽陶器徳利

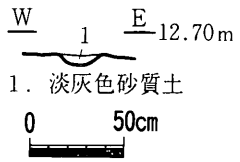


第243図 SDi 45断面図(1/40)



第244図　SDi 46・SDi 47断面図（1/40），SDi 46出土遺物実測図（1/3）

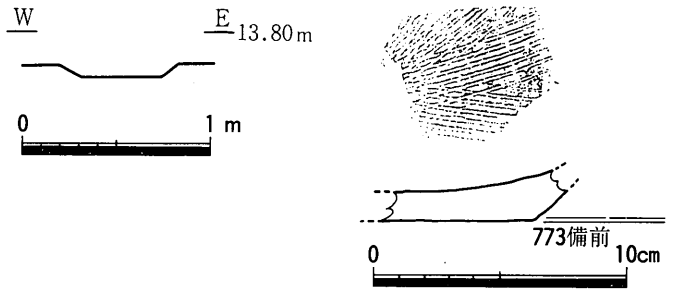
(763)，磁器染付碗（764)，陶器土瓶（765)，瓦質土器焙烙（766)，土師質土器焙烙（767)，土師質土器十能（768)，土師質土器甕（769)，瓦質土器器種不明（770)，土師質土器大甕（771・772)，陶磁器少量が出土した。760は肥前磁器染付皿である。内外面に染付が描かれる。底部が分厚いことから，18世紀代のものであろう。761は外面に二重網目文が描かれる。胎土は灰色みを帯びる。底部が分厚いことから，18世紀後半のものと考えられる。763は胎土分析で信楽産と特定した陶器徳利である。体部外面には透明釉が施釉される。底部外面には墨書がみられるが，全体が残存しておらず，文字は不明である。764は産地不明の磁器染付碗である。内外面ともに表面が剝落する。呉須の発色は明るい青色である。端反り形を呈することから，19世紀代のものと考えられる。765は産地不明の陶器土瓶である。把手は型作りによる。外面には透明釉，内面には鉄泥を塗布する。19世紀代のものであろう。出土遺物から，SDi 46は19世紀代以降のものと考えられることから，SDi 47も19世紀代以降のものであろう。



第245図 SDi 48断面図(1/40)

SDi 48（第245図）

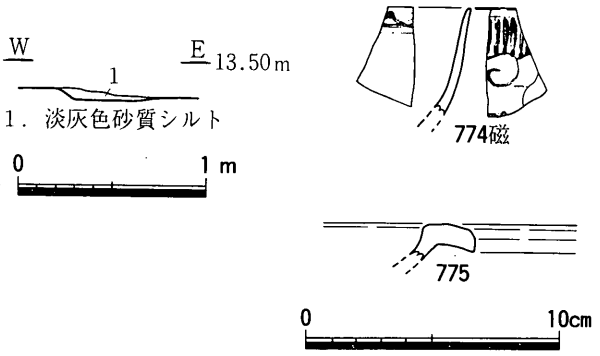
III—13区の北部で検出された溝である。東から北にL字状に屈曲し，SKi 36に連続する。幅0.2m，深さ0.05mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，この溝は江戸時代以降のものと考えられる。



第246図 SDi 49断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3)

SDi 49（第246図）

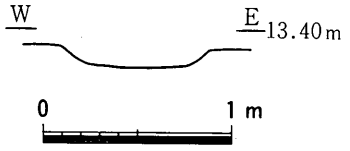
III—32区で検出された溝である。南から北に走り，検出長7m，幅0.5～0.6m，深さ0.1mを測る。備前焼擂鉢(773)，土師質土器片・瀬戸美濃陶器片が少量出土した。773は色調や，赤色粒子が入るなど胎土の特徴から備前焼擂鉢と考えられる。卸目が体部から底部中央付近まで施されることから，18世紀から19世紀のものと考えられる。これらの遺物から，この溝は18世紀以降まで存続したものと考えられる。



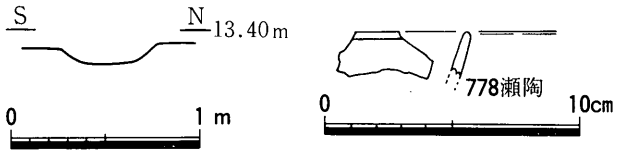
第247図 SDi 50断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3)

SDi 50（第247図）

III—29区で検出された溝である。南から北に走り，検出長2m，幅0.5m，深さ0.05mを測る。磁器染付碗（774)，瓦質土器焙烙（775）が出土した。774は呉須は明るい青色を呈し，太い線書きで文様を描く。胎土も白く輝いており，瀬戸美濃産の可能性が高い。端反り形を呈する



第248図 SDi 51断面図(1/40)



第249図 SDi 52断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3)

ことから，19世紀中葉から末のものと考えられる。出土遺物から，この溝は19世紀中葉以降のものと考えられる。

SDi 51（第248図）

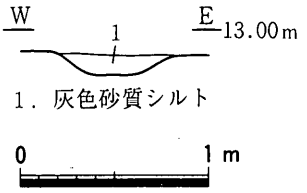
III—29区で検出された溝である。南から北に走り，検出長２m，幅0.7～0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰黄色砂質シルトである。土壁（776・777），陶磁器片が出土した。776・777ともに図化していないが，写真図版に掲載した。いずれも表面には径１～５㎜の藁状の痕跡がみられる。埋土や出土遺物の特徴から，この溝は江戸時代以降のものと考えられる。

SDi 52（第249図）

III—29 区で検出された溝である。東西に走る。東部は攪乱溝によって削平される。検出長1.5m，幅0.5m，深さ0.1mを測る。瀬戸美濃陶器染付碗(778)，陶磁器片少量が出土した。778は口縁部破片である。体部形態は不明であるが，口縁部の形態から，広東形であるものと考えられる。19世紀代のものであろう。出土遺物から，この溝は19世紀以降のものと考えられる。

SDi 53（第250図）

III—24区からIII—25区・III—23区にかけて検出された溝である。SDi 42の北側を平行に東から西に走り，SDi 42とSDi 44との合流部でＬ字状に屈曲し，SDi 44と平行に南から北に走る。III—25区で一部途切れるが，同じ方向に走り，埋土も同じであることから，本来は同じ溝であると考えられる。検出長81m，幅0.3～0.6m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。埋土の特徴から，江戸時代以降のものと考えられる。



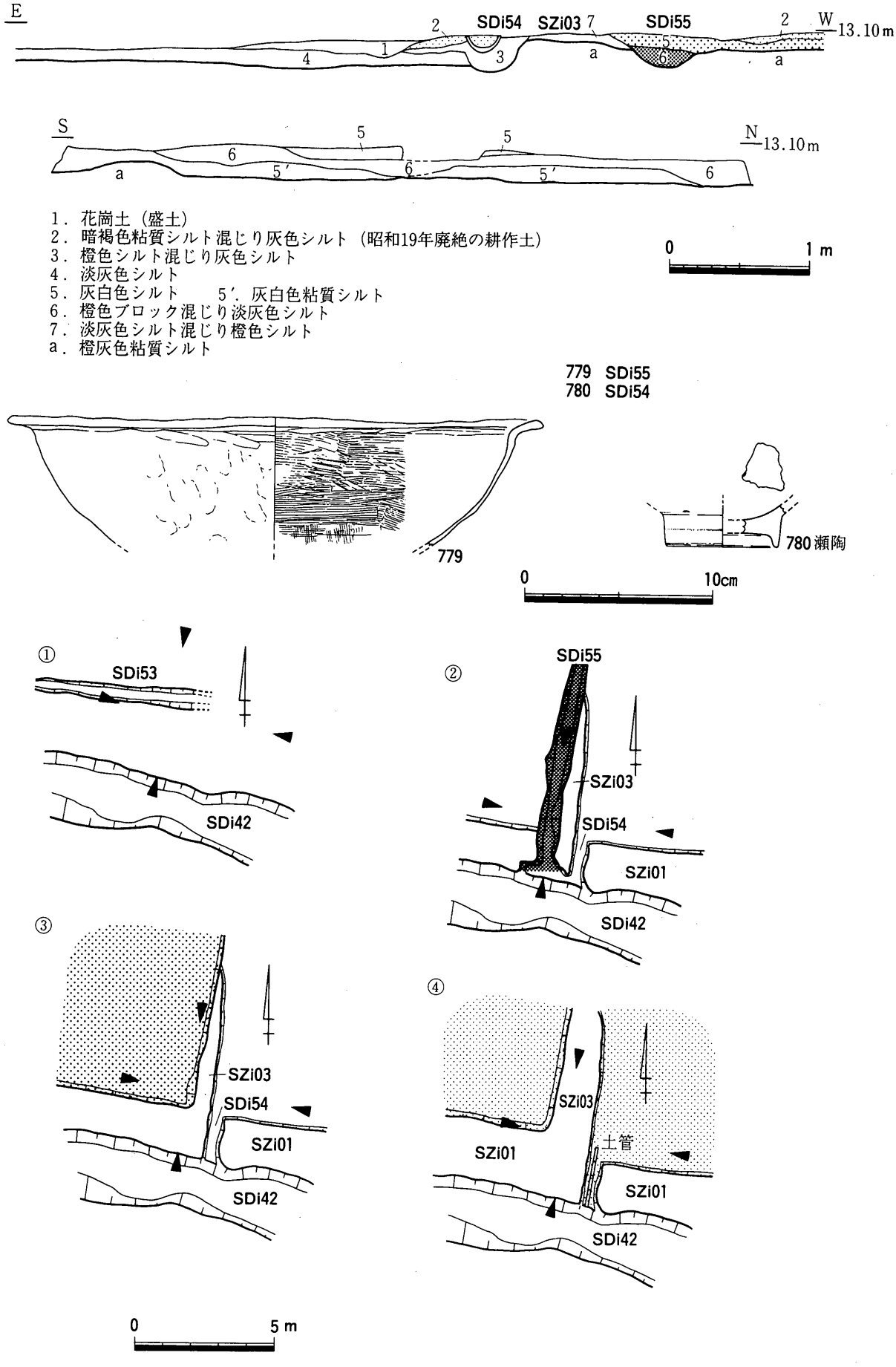
第250図 SDi 53断面図(１/40)

SDi 54・SDi 55（第251図，図版44）

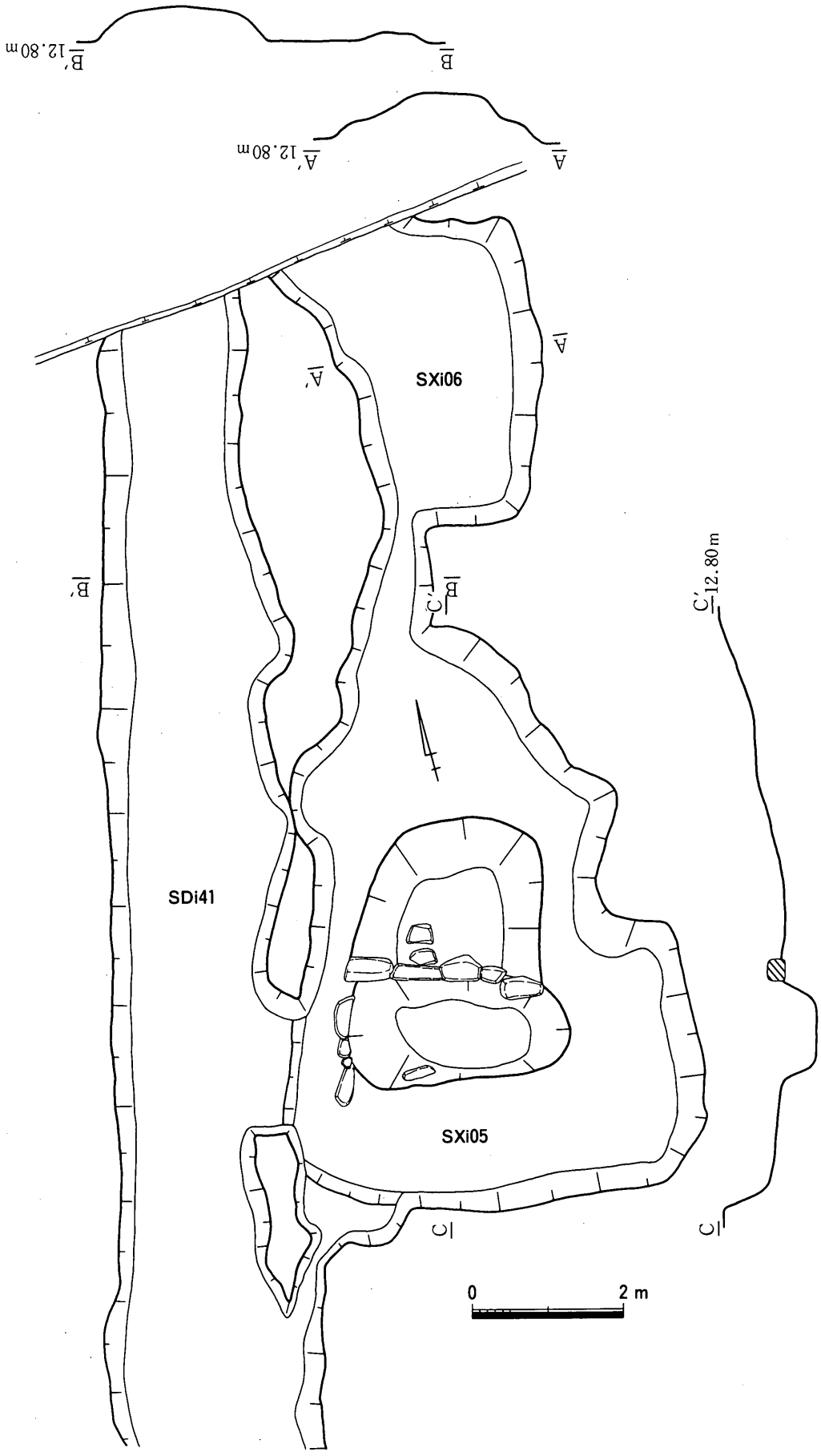
いずれもIII—23区で検出された溝である。SDi 54はSDi 42の北岸から南北に走り，検出長２m，幅0.4m，深さ0.2～0.3mを測る。SDi 42への導排水路であろう。SDi 54最上部には４本の土管が埋められており，土管の埋土は昭和19年廃絶の耕作土である暗褐色粘質シルト混じり灰色シルトである。また，土管の下の埋土は橙色シルト混じり灰色シルトである。SDi 54は江戸時代の掘立柱建物を構成する柱穴の埋土と同一である淡灰色シルトの上層から掘り込まれることから，SDi 54の掘削時期は江戸時代以降で，掘立柱建物よりも後出するものと考えられる。土管の下の埋土からは瀬戸美濃陶器染付碗（780）が出土した。780は体部の形態は不明であるが，高台部の形態から，広東形を呈するものと考えられる。高台部外面が高いことから，19世紀前半のものと考えられる。出土遺物から，SDi 54は19世紀前半以降に廃絶し，それ以後，土管を埋めて使用されたものと考えられる。

SDi 55はSDi 54の西側に位置し，SDi 42の北岸から南北に走る。江戸時代の溝SDi 53と重複するが，埋土からSDi 54のほうが新しいことがうかがえる。検出長15m，幅0.1～0.8m，深さ0.1～0.2mを測る。SDi 55の埋土は橙色ブロック混じり淡灰色シルトで，埋土から土師質土器焙烙(779)が出土した。779は18世紀前半のものであろう。出土遺物から，SDi 55は18世紀代以降に廃絶したものと考えられる。

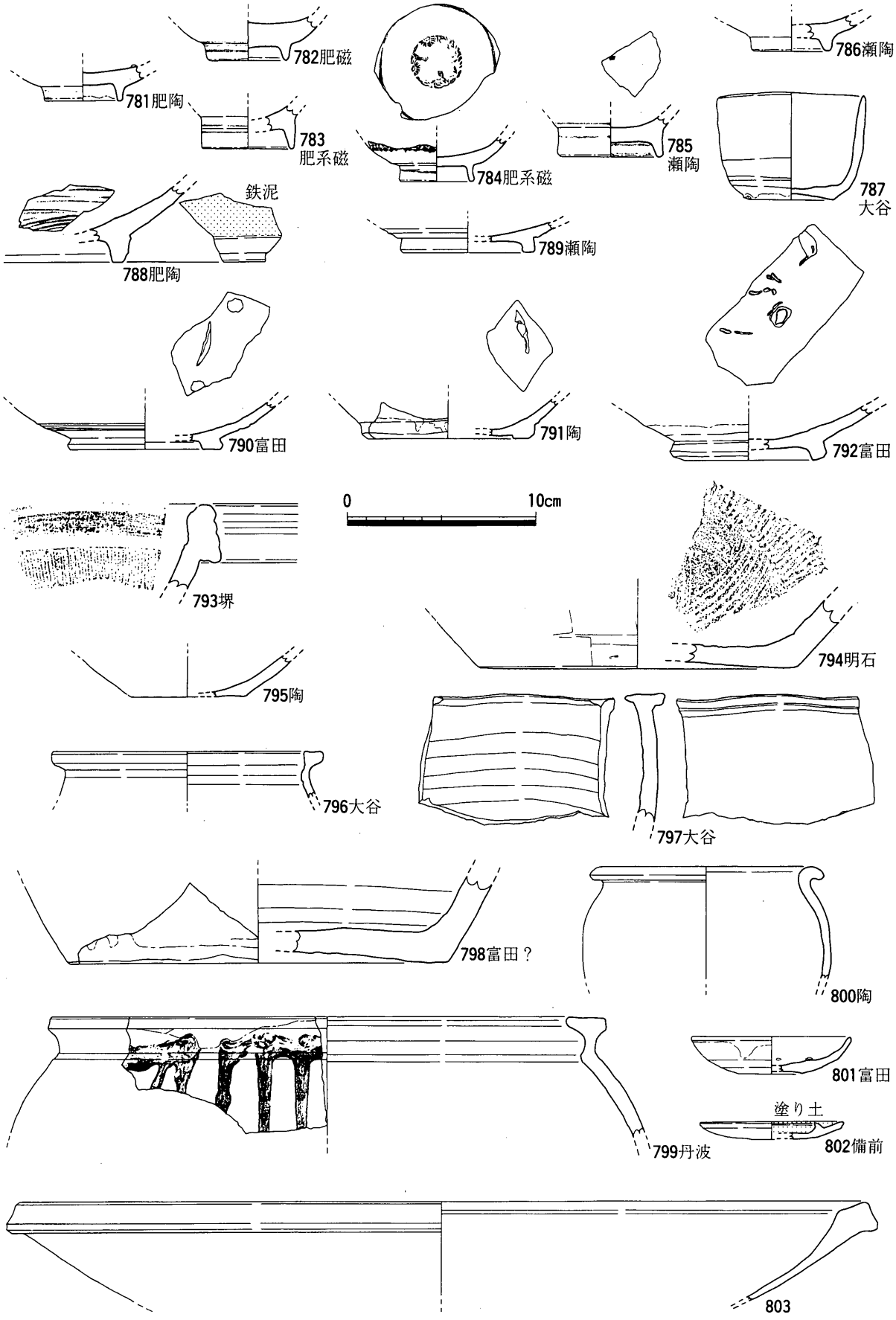
また，SDi 54とSDi 55とに挟まれた高まりは道であると考えられるが，SZi 03として後述する。第251図はSDi 54・SDi 55付近の変遷図で，以下のように遺構が営まれる。① SDi 53が掘削される。② SDi 53埋没後，SDi 55が掘削され，SDi 55とSDi 54の間は道SZi 03となる。③ SDi 55は廃絶するが，依然SZi 03は道として存在し，SZi 03の西部は一段低くなる。④昭和19年の空港造成以前でも道SZi 03は存在し，SZi 03の西部は一段低くなり，田畑となる。また，SDi 54には通水用の土管が埋められる。



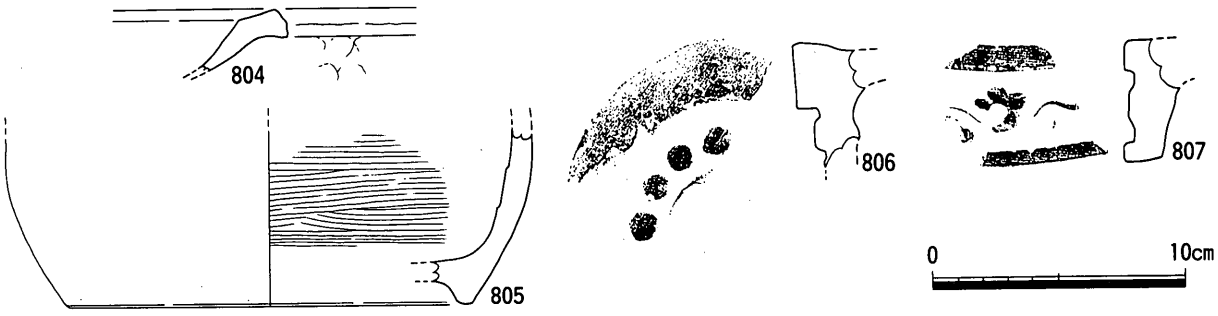
第251図　SDi 54・SDi 55平・断面図（1/40・1/200），出土遺物実測図（1/3）



第252図　SXi 05・SXi 06平・断面図（1/80）



第253図　SXi 05出土遺物実測図Ⅰ（1/3）



第254図　SXi 05出土遺物実測図２（１/３）

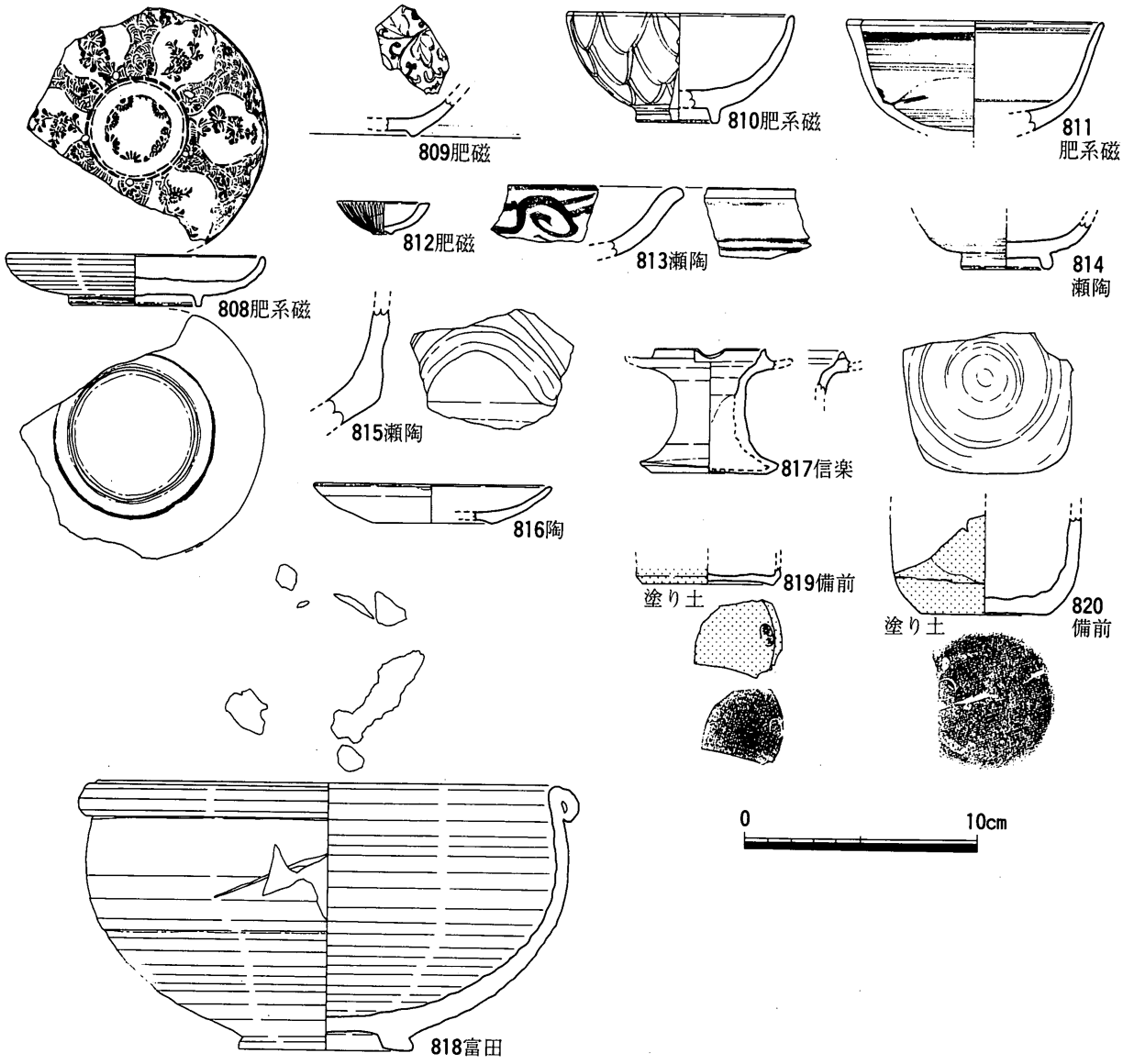
⑥　不明遺構

SXi 05・SXi 06（第252～255図，図版45）

III－21区北部，SDi 41の東岸で検出された遺構である。SXi 05は平面形はいびつで，長軸7.7m，短軸4.9m，最深部で深さ1.3mを測る。SXi 05は三段掘りになっており，最下部の落ち込みは隅丸方形を呈し，長軸3.0m，短軸1.4m，深さ0.5mを測る。一辺長軸0.3～0.6mの河原石によって囲まれる。埋土は淡灰色砂質シルトである。

SXi 06の北部は調査区外に連続しており，全体は不明である。平面形はいびつで，長軸4.0m，短軸2.4m，深さ0.6mを測る。埋土はSXi 05と同じく淡灰色砂質シルトである。SXi 05とSXi 06は小溝（幅0.6～1.0m，深さ0.1～0.2m）によって連続する。また，江戸時代以降の溝SDi 41とSXi 05は２本の溝によって連続する。切り合い関係はみられないことから，いずれも同時期に併存したものであろう。これらの遺構は溝SDi 41と連続することから，上流のSXi 05に水を取り入れ，SXi 06に水を送り込んでいたものと考えられる。遺構の用途は不明であるが，洗い場の可能性が考えられよう。

また，SXi 05からは肥前陶胎染付碗（781），肥前磁器染付碗（782），肥前系磁器染付碗（783・784），瀬戸美濃陶器染付碗（785），瀬戸美濃陶器腰錆碗（786），大谷焼碗（787），肥前陶器刷毛目鉢（788），瀬戸美濃陶器鉢（789），富田焼陶器鉢（790・792），陶器鉢（791），堺または明石擂鉢（793），明石擂鉢（794），陶器土瓶(795)，大谷焼甕(796・797)，富田焼？陶器甕(798)，丹波陶器甕(799)，陶器甕(800)，富田焼陶器灯明受皿（801），備前焼灯明受皿（802），瓦質土器焙烙（803・804），瓦質土器火鉢または火消し壺（805），軒丸瓦（806），軒平瓦（807），型紙摺染付磁器や瓦質瓦など整理用コンテナ３箱の遺物が出土した。SXi 06からは肥前系磁器染付皿（808），肥前磁器染付皿（809），肥前系磁器染付碗（810・811），肥前磁器紅猪口（812），瀬戸美濃陶器皿（813），瀬戸陶器刷毛目碗（814），瀬戸陶器水甕（815），陶器灯明受皿（816），信楽陶器台付灯明受皿（817），富田焼陶器鉢（818），備前焼徳利（819・820），型紙摺磁器片，SKi 40で掲載した磁器染付碗(351)の一部など整理用コンテナ４箱の遺物が出土した。781は肥前陶胎染付碗である。焼成はやや不良で，胎土は軟質で，呉須は暗緑色を呈する。18世紀前半のものである。782は肥前磁器染付碗である。焼成が不良で，外面の染付にムラができ，不明瞭である。胎土は灰色みを帯び，底部は分厚いことから，波佐見系で，18世紀後半のものと考えられる。783は肥前系磁器染付碗である。高台部の形態から，広東形を呈し，19世紀前半のものと考えられる。784は肥前系磁器染付碗で，型紙摺であることから，明治・大正時代のものと考えられる。785は瀬戸美濃陶器染付碗である。高台部の形態から，広東形を呈するものと考えられる。高台部外面が高いことから，19世紀前半のものと考えられる。786は瀬戸美濃陶器腰錆碗で，19世紀前半のものである。787は大谷焼碗である。体部が歪む。788は肥前陶器刷毛目鉢である。17世紀末から18世紀前半のものである。789は瀬戸美濃陶器



第255図　SXi 06出土遺物実測図（1/3）

鉢である。内面には灰釉が施釉される。18世紀末から19世紀代のものである。790は胎土分析によって富田焼と特定した陶器鉢である。見込みには目跡と帯状の剝落が残る。791は産地不明陶器鉢である。前述のように791は胎土色調が異なるが，790と形態や目跡が類似するため，富田焼の可能性が考えられる。792も胎土分析によって富田焼と特定した陶器鉢である。見込みには790同様比較的大きな目跡と帯状の接着痕がみられる。790・792はいずれも胎土は灰色を呈し，オリーブ色の灰釉が施される。793は堺または明石擂鉢である。口縁部内面の段が小さく，口縁部外端面の張りが大きいことから，白神分類のII型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。794は明石擂鉢である。見込みに卸目が放射状に施される。18世紀後半から19世紀代のものと考えられる。795は産地不明の陶器土瓶である。内面には灰釉が施される。796・797は大谷焼甕である。797は口縁端部に粗砂が付着し，歪む。798は陶器甕である。胎土の特徴から，富田焼と考えられる。胎土分析では富田焼の分布領域付近にプロットした。799は丹波陶器甕である。内面には灰釉，外面には鉄釉を施釉し，灰釉を墨流しする。18世紀後半から19世紀代の

ものである。800は産地不明の陶器甕である。内外面に鉄釉が施釉される。801は胎土分析により，富田焼と特定した陶器灯明受皿である。胎土は灰色を呈し，口縁部外面と内面には灰釉が施釉される。灰釉は分厚い。802は備前焼灯明受皿である。内面には塗り土が施される。桟が付くことから，18世紀代以降のものと考えられる。

SXi 06出土808は肥前系磁器染付皿である。型紙摺による染付であることから，明治・大正時代のものと考えられる。809は肥前磁器染付皿である。内面には花唐草文を描く。18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。810・811は肥前系磁器染付碗である。810は胎土が灰色みを帯び，外面には二重網目文が描かれる。底部は分厚い。18世紀後半のものである。811は端反り形を呈することから，1820～1860年のものと考えられる。812は肥前磁器紅猪口である。型押し成形である。外面には縦筋がみられる。19世紀初頭から後半のものと考えられる。813は瀬戸美濃陶器皿である。内面には鉄絵が描かれる。いわゆる絵高麗である。19世紀代のものであろう。814は瀬戸陶器刷毛目碗で，幕末頃のものである。815は瀬戸陶器水甕である。体部破片である。19世紀代のものであろう。816は陶器灯明受皿である。胎土は黄色である。産地は不明である。817は信楽陶器台付灯明受皿である。胎土は灰色で，桟に凹みが付く。818は富田焼陶器鉢である。胎土分析で富田焼と特定した資料である。口縁部は玉縁である。内外面には濃い緑色の釉が施釉される。このような色調の釉が施釉される鉢は富田焼の窯である大川郡大川町の吉金窯跡出土資料にもみられる。[18] 底部外面に墨書がみられるが，不明である。819・820は備前焼徳利である。底部外面には陶印がみられる。「元○○」と３文字みられるが，２文字は不明である。820は上からみると体部が四角形を呈する。底部外面には陶印がみられるが，不明瞭である。出土遺物から，SXi 05・SXi 06は明治時代以降に廃絶したものと考えられる。

SXi 07（第256図）

III—32区の南西端で検出された落ち込みである。南部は調査区外に連続するため不明であるが，平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸6.6m，短軸2.9m以上，深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘質シルトで，肥前陶器灰釉皿(821)，土師質土器片が出土した。821は1600～1630年のものである。遺物から，この落ち込みは江戸時代以降のものと考えられる。

SXi 08（第257図）

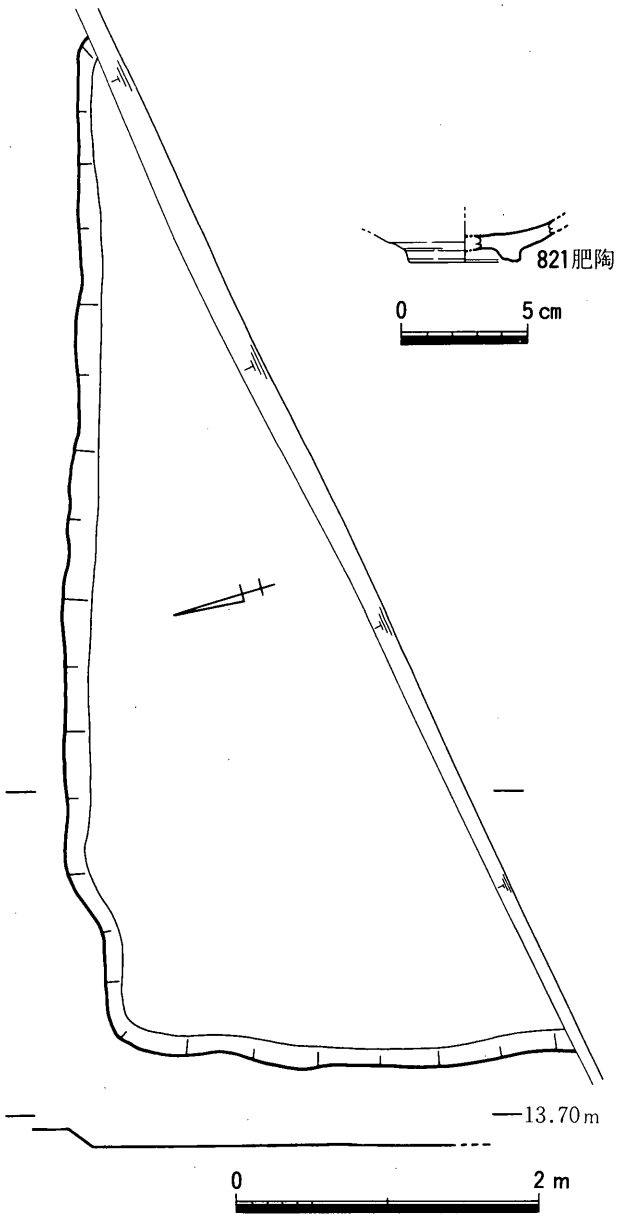
III—26区の南端で検出された落ち込みである。北部は攪乱溝によって削平され，南部は調査区外に連続するため全体は不明である。平面形はいびつで，長軸3.2m以上，短軸2.6m，深さ0.1mを測る。埋土は淡灰色砂質シルトである。備前焼壺(822)，瓦質瓦片，土師器大甕片が出土した。822は塗り土が施される。出土遺物から，この落ち込みは江戸時代以降のものと考えられる。

⑦　その他の遺構

SZi 01・SZi 02・SZi 03（第259図，図版44・45・46）

III—23区の南部で検出された道である。SZi 01はSDi 42の北岸に位置し，SDi 42の北岸は遺構検出面である橙灰色粘質シルトの高まりが東西に細長く連続する。SZi 01は検出長27.5m，幅1.5～1.9m，残存高0.2mを測る。

SZi 02はSZi 01の北側に位置する道である。SZi 01と直交し，南北に走る。SZi 01と同様遺構検出面である橙灰色粘質シルトの高まりが細長く南北に連続する。SZi 02は検出長8.0m，幅1.3m，残存高0.1mを測る。

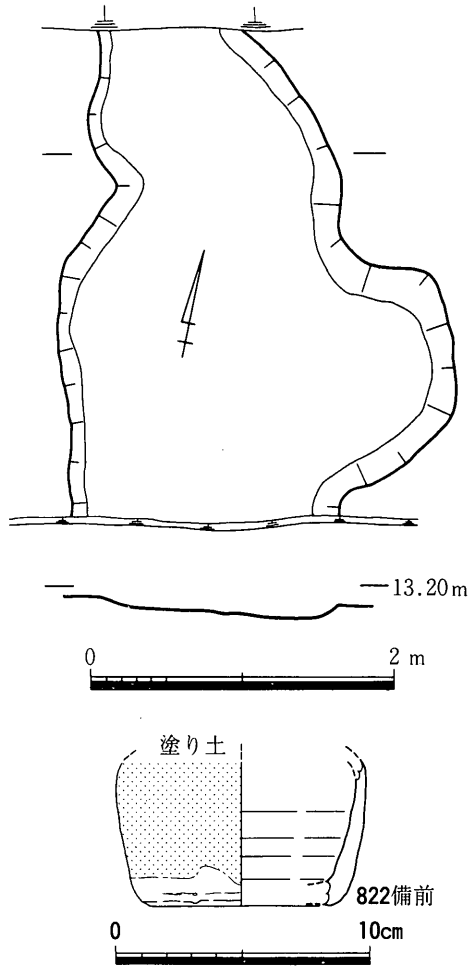


第256図 SXi 07平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/3)

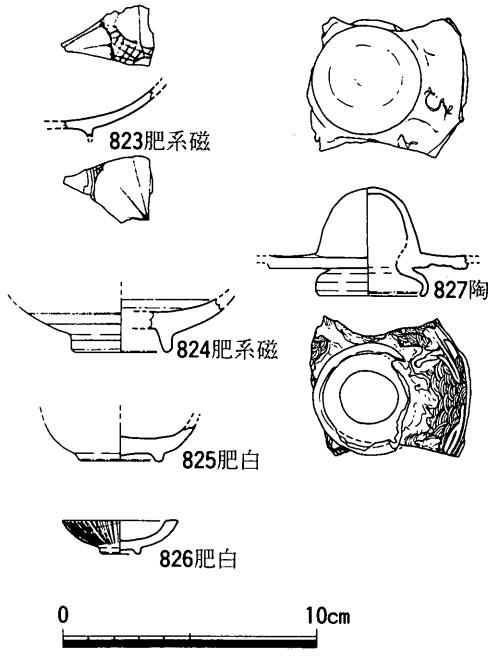
SZi 03はSZi 01に直交し，南北に走る道である。SDi 54とSDi 55に挟まれ，検出長6.3m，最大幅0.6m，最大残存高0.5mを測る。

⑧ 包含層出土遺物（第258図）

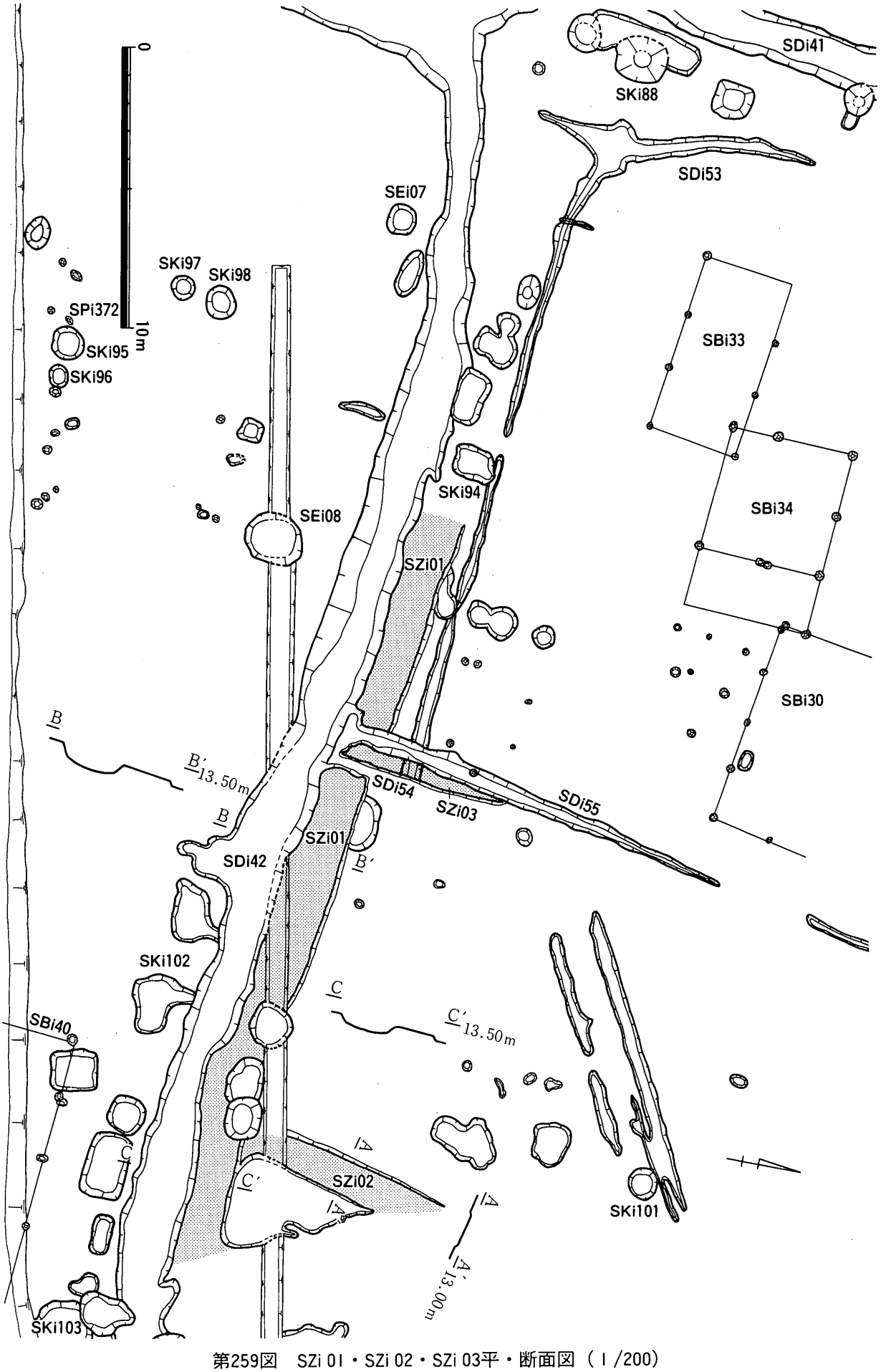
III—21区では肥前系磁器染付皿（823），肥前系磁器染付碗(824)，肥前白磁小杯(825)，肥前白磁紅猪口(826)，陶器器種不明（827）などが出土した。823は肥前系磁器染付皿で，内外面に菊の花と氷裂文を描く。18世紀後半のものである。824は肥前系磁器染付碗で，呉須の発色が明るい青色であることから，明治・大正時代のものであ



第257図 SXi 08平・断面図(1/50)
出土遺物実測図(1/3)



第258図 江戸時代包含層出土遺物実測図（1/3）



第259図　SZi 01・SZi 02・SZi 03平・断面図（1/200）

ると考えられる。825は肥前白磁小杯である。釉が青みがかるが白磁である。18世紀頃のものである。826は肥前白磁紅猪口である。型押し成形で，外面には縦筋がみられる。19世紀初頭から後半のものである。827は器種・時代ともに不明である。外面にはヘラ彫りで文字が書かれるが，不明瞭である。内面には陽刻がみられる。胎土は灰色を呈し，きめ細かいことから，富田焼の可能性が考えられる。

註

(1) 森下友子「胎土1類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995

(2) 片桐孝浩「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大束川改修工事(津ノ郷橋～弘光間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1992

(3) 山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3－第5次調査－』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993

(4) 山仲　進「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会　1989

(5) 『西村遺跡－国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』香川県教育委員会　1980
『西村遺跡II－国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』香川県教育委員会　1981
『西村遺跡III－国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』香川県教育委員会　1982

(6) 横田賢二郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心に－」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

(7) 白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号　1982

(8) 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社　1989

(9) 日幡光顕『備前焼の鑑賞』備前焼鑑賞会　1967

(10) 大橋康二「塩田町志田西山1号窯」『肥前地区古窯跡調査報告書』第8集　佐賀県立九州陶磁文化館　1991

(11) 徳島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査による

(12) 藤沢良祐「本業焼の研究(3)－下品野村・下半田村を中心に－」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』VII　1989

(13) 中野雄二「波佐見町内古窯跡群の調査成果－1990年～95年の調査成果を中心として－」『波佐見青磁展・くらわんか展』世界・焱の博覧会波佐見町運営委員会　1996

(14) 註(12)と同じ

(15) 花岡興輝・前田一洋・錦戸　宏「熊本のやきもの」『日本やきもの集成』12　九州II　沖縄　平凡社　1982
本田秀人「肥後細川藩における御用窯について－松尾焼を中心に－」『熊本史学』53　1979

(16) 仲野泰裕「江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器」『愛知県陶磁資料館紀要』6　1987

(17) 丸山和雄「四国のやきもの」『日本やきもの集成』10　四国　1982

(18) 大川町歴史民俗資料館所蔵

参考文献

『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館　1989
『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会・東京都建設局　1992

第３章　自然科学調査の成果

第１節　空港跡地遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は，ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり，植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は植物によりそれぞれ固有の形態的特徴を持っていることから，これを土壌中より検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境の復原に役立てることができる。プラント・オパール（植物珪酸体）分析と呼ばれるこの方法は，とくに埋蔵水田跡の確認や探査において極めて有効であり，これまでに多くの実績をあげている。

この調査は，プラント・オパール分析を用いて，空港跡地遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

２．試　料

調査地点は，Ⅲ－51区である。試料は，弥生時代後期とされる土層より採取されたNo.１～No.６の６点である。これらはいずれも遺跡の調査担当者によって採取され，当研究所に送付されたものである。第260図に，試料採取地点を示す。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は，「プラント・オパール定量分析法（藤原1976）」をもとに，次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105℃・24時間），仮比重測定

２）試料土約１ｇを秤量ガラスビーズ添加（直径約40μｍ，約0.02ｇ）

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42 KHz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去，乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は，おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下，プラント・オパールと略す）を同定の対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。なお，稲作跡の探査が主目的であるため，同定および定量は，イネ，ヨシ属，タケ亜科，ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は，計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，

計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。

4．分析結果

試料１ｇ中のプラント・オパール個数を下表に示す。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示した。

試料名	イ　ネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
No. 1	700	700	43,300	2,800	0
No. 2	1,400	700	49,000	700	0
No. 3	700	0	58,700	4,500	0
No. 4	700	1,400	66,300	700	0
No. 5	2,100	0	38,100	4,300	0
No. 6	2,200	0	28,500	2,200	0

第３表　試料１ｇ中のプラント・オパール個数（単位：個／ｇ）

試料No.１～No.６について分析を行った。その結果，イネはすべての試料から検出された。密度はいずれもやや低い値である。ヨシ属は試料No.１，No.２，No.４地点から検出されたが，いずれも低い密度である。タケ亜科はすべての試料から高い密度で検出された。ウシクサ族もすべての試料から検出された。このうち，試料No.３とNo.５では高い密度である。キビ族は検出されなかった。

5．考　察

(1)　稲作跡の可能性

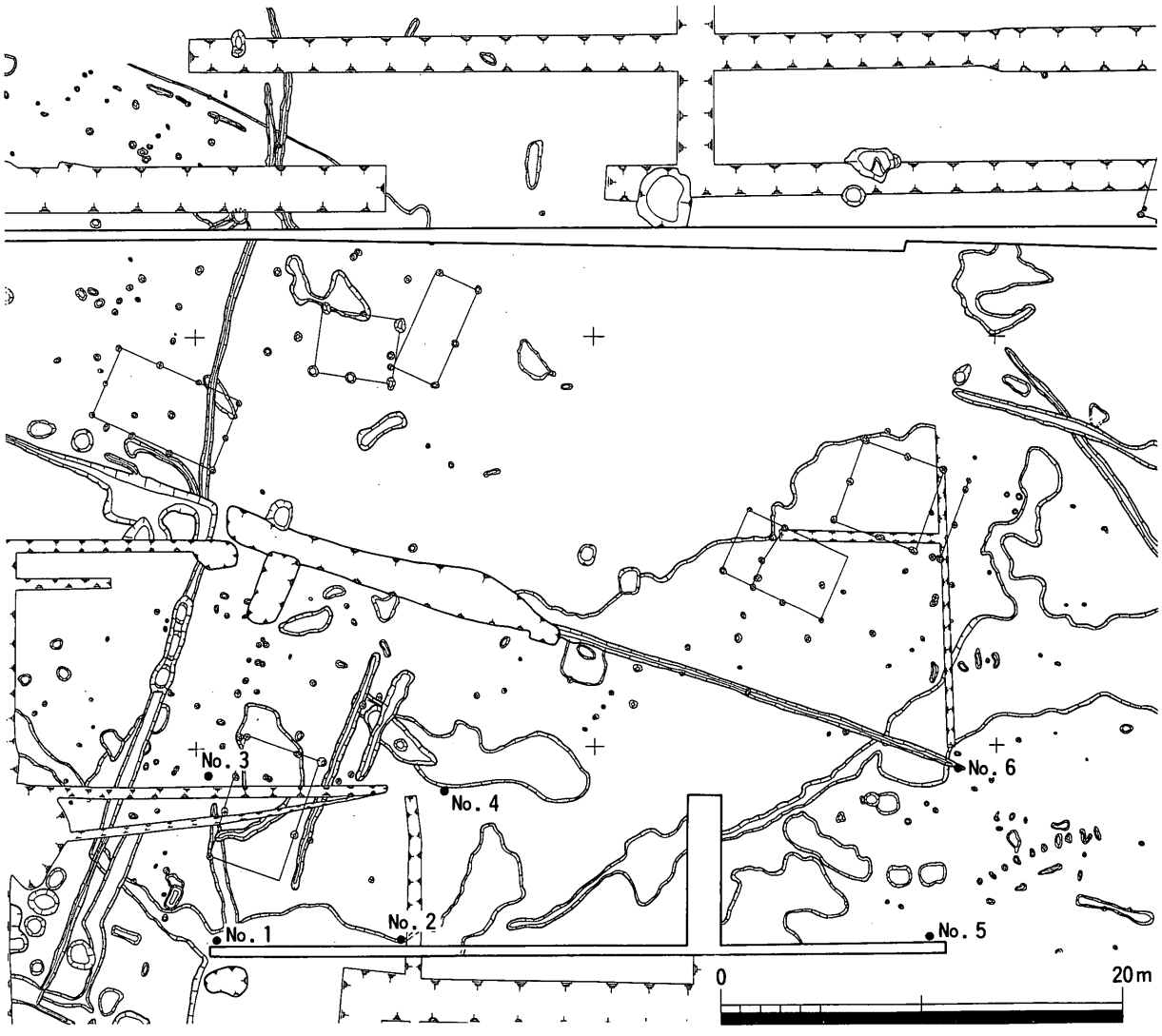
水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また，その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば，上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり，その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

分析を行ったすべての地点においてイネが検出されたことから，同層準で稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし，プラント・オパール密度が700～2,200個／ｇとやや低い値であり，直上層については分析を行っていないことから，上層あるいは他所からの混入の危険性も否定できない。

(2)　古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し，ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから，両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

本層準では，全体にタケ亜科が優占しており，ヨシ属は微量である。したがって，調査区一帯はタケ亜科植物やススキ属などが繁茂するような，比較的乾いた土壌条件であったものと推定される。



第260図　試料採取地点

参考文献

杉山真二・藤原宏志「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山一古環境編一」『川口市遺跡調査会報告』10　1987

藤原宏志「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一」『考古学と自然科学』9　1976

藤原宏志「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)一福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (O. sativa L.) 生産総量の推定一」『考古学と自然科学』12　1979

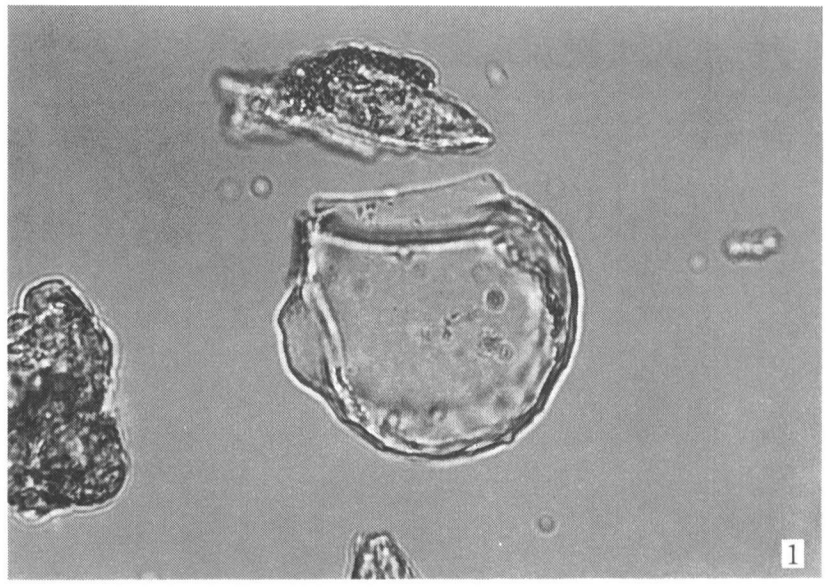
藤原宏志・杉山真二「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)一プラント・オパール分析による水田址の探査一」『考古学と自然科学』17　1984

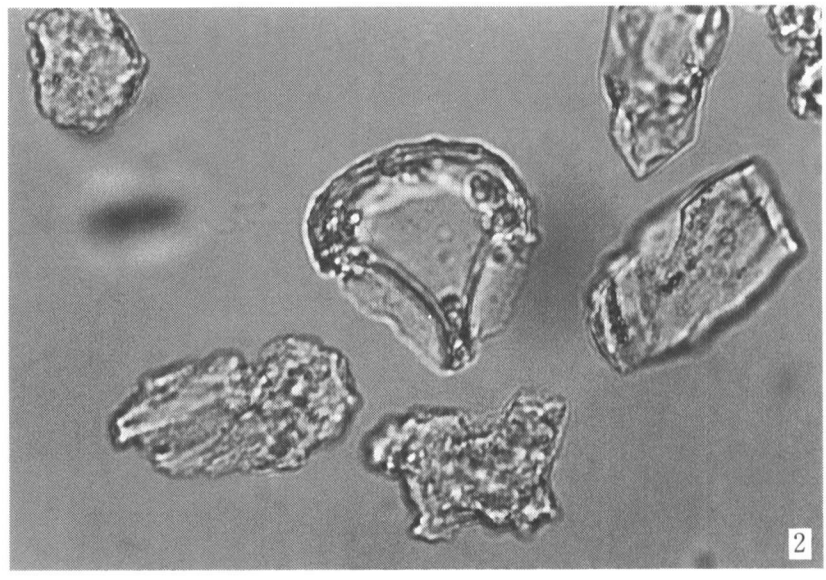
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）

No.	分　類　群	地　点	試料名
1	イネ	III-51区	No. 1
2	イネ	III-51区	No. 2
3	イネ	III-51区	No. 6
4	ヨシ属	III-51区	No. 4
5	タケ亜科	III-51区	No. 4
6	ウシクサ族	III-51区	No. 5

写真1

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）





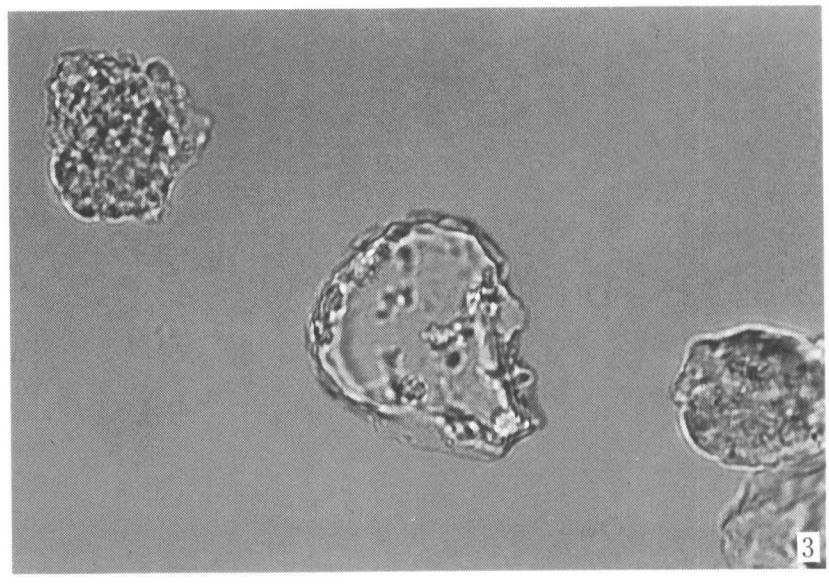
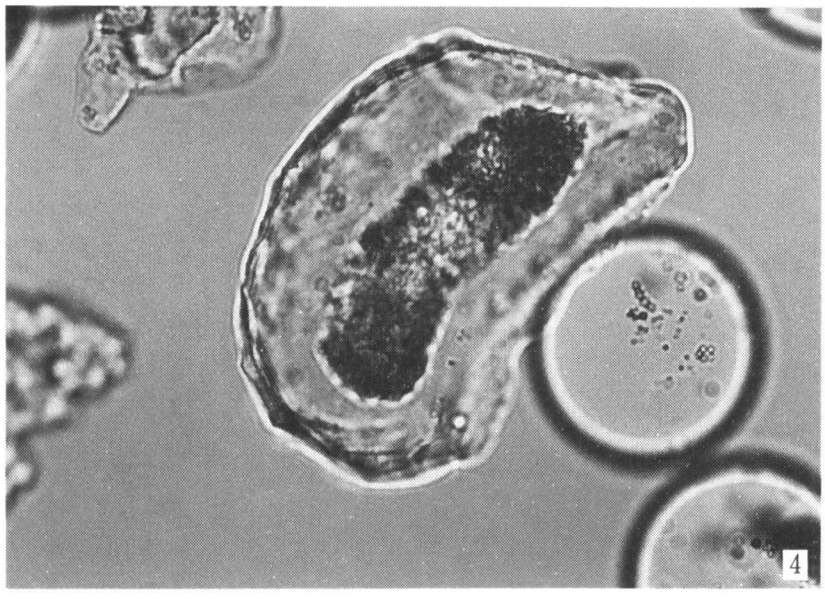
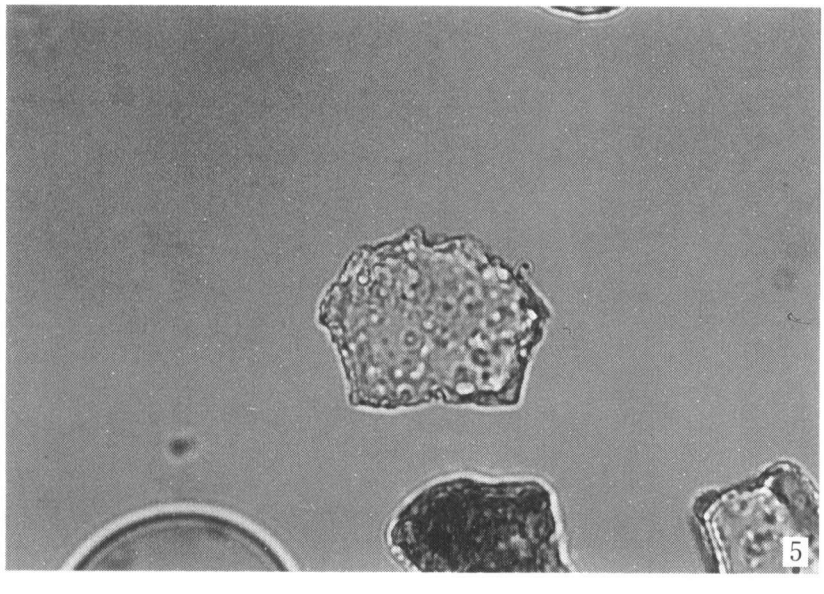


写真 2





植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）

第2節　空港跡地遺跡出土近世陶磁器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1．分析の目的

この胎土分析では，蛍光X線分析法により空港跡地遺跡から出土した近世の陶磁器を分析し，以下の事柄について検証した。

(a)　香川県大川町の富田焼採集資料と空港跡地遺跡出土遺物を形態，技法的，肉眼観察により比較検討したところ，富田焼の可能性がある資料がみられる。[1] そこで，胎土分析を実施し，分析ではどのように分類されるか。

(b)　空港跡地遺跡出土の京焼風陶器碗は，形態，技法的特徴から肥前産（佐賀県，長崎県）と考えられるが，[1] 胎土分析では，どの生産地に推定されるか。京焼風陶器碗は肥前（佐賀県，長崎県）や高知県高知市尾戸窯で生産されていたことがわかっており，これらの生産地との比較検討をする。

2．分析結果

分析方法は，従来から実施している方法で行った。[2]

分析の結果，近世陶磁器の胎土分析でもK，Ca，Sr，Rbの4元素に顕著な差があることからこれら元素の比をとり（K／Ca，Sr／Rb），X－Y散布図により検討した。分析資料は第4・5表に挙げた65点の陶磁器である。

第261図の散布図は，富田焼の生産地である香川県大川郡大川町吉金窯跡と信楽焼の生産地である滋賀県信楽町漆原C窯跡出土土器の分布範囲に，空港跡地遺跡出土の富田焼と考えられる資料をプロットした散布図である。この散布図から，ほとんどの土器が吉金窯跡の領域に入るか，分布領域の近くにプロットしている。ただ，763の陶器徳利のみが信楽焼の漆原C窯跡の分布領域に分布した。

第262図の散布図では，空港跡地遺跡出土の京焼風陶器碗が肥前（佐賀県伊万里市鍋島藩窯）か高知市尾戸窯のどちらの胎土に推定されるか検討した。この結果，357，371，379，380，491，510，702，703の8点の碗が高知市尾戸窯の分布領域に入り，402，489，511，580の4点は尾戸窯の分布領域の周辺付近に分布した。そして，581の碗のみがかなり離れて分布した。

第263図の散布図は，空港跡地遺跡から出土した肥前，備前，丹波，瀬戸美濃の土器と富田焼（吉金窯），信楽焼（漆原C窯），高知市尾戸窯，佐賀県伊万里市鍋島藩窯との比較を行った。この結果，空港跡地出土の肥前産は，512，588，696，708，788と520，565の二つに分かれた。そして520（肥前磁器染付皿），565（肥前陶器灰釉皿）の2点は高知市尾戸窯の分布領域にプロットした。また，備前産は一つにまとまり，丹波，瀬戸美濃は吉金窯の領域に分布した。

3．まとめ

以上のように分析結果から，事実関係について報告した。ここでは，これらの分析結果について簡単にまとめ，若干の考察を加えてまとめとしたい。

(a)　第261図では，生産地である富田焼（大川町吉金窯）と信楽焼（漆原C窯）の分布領域が明確に識別できたが，空港跡地遺跡から出土した形態，技法的に富田焼と考えられる資料が，富田焼の分布領域

にすべて入らない結果となった。

これらの分析結果を踏まえて，今回の空港跡地の資料の生産地を推定すると，

・富田焼と推定されるもの……408，409，637，657，714，790，792，801，818

(637と714と792は肉眼的に胎土が類似しているが,[3] 分析では637と792が類似している。)

・富田焼？……656，658，798

(富田焼の分布領域付近にプロットしている。)

・信楽焼……763

以上のように推定されるが，生産地である吉金窯，漆原C窯の分析点数が少なく，資料点数を増やせば生産地の分布領域が広がることが予想され，今後資料を増やして再検討が必要である。

(b) 空港跡地遺跡出土の京焼風陶器碗の生産地推定では，8点（357，371，379，380，491，510，702，703)が尾戸窯の領域に入り，これらは尾戸産と推定された。また，402，489，511，580は尾戸窯の分布領域の周辺にプロットし，尾戸産と確実に推定するに至らなかった。そして，581は鍋島藩窯の分布領域近くにプロットした。

この分析結果でも生産地の窯跡資料の分析点数が少なく窯資料の分布範囲に問題があり点数を増やせば分布領域も広がることが予想され，窯資料のデータを増やし再検討を要する。

(c) 空港跡地遺跡から出土した肥前，備前，丹波，瀬戸美濃産の各資料を富田焼，信楽焼，尾戸窯，鍋島藩窯と比較すると，備前産が明確に識別され，肥前産は二つのグループにわかれた。この二つにわかれた肥前産のうちの一つである520，565の皿は，高知市尾戸窯の領域に分布し，尾戸窯と胎土的にはほぼ同じ分析結果となった。この結果より，肥前地方にも複数の胎土の窯跡が存在するすることが予想され，今回の分析では京焼風陶器碗が尾戸窯に推定されたが，生産地資料が不足していることは否めず，今後これら窯跡資料の蓄積をし再検討しなければならない。

また，丹波，瀬戸美濃産は富田焼（吉金窯）の分布領域に入り，富田焼が分布する領域には，他地域の複数の窯が分布する可能性があることを示唆する結果となった。しかし，丹波，瀬戸美濃産はFe，Ti量が富田焼（吉金窯）と異なるようで識別が可能である。

この分析を実施するにあたり以下の方々，機関から御教示，資料提供を頂いた。記して感謝いたします。

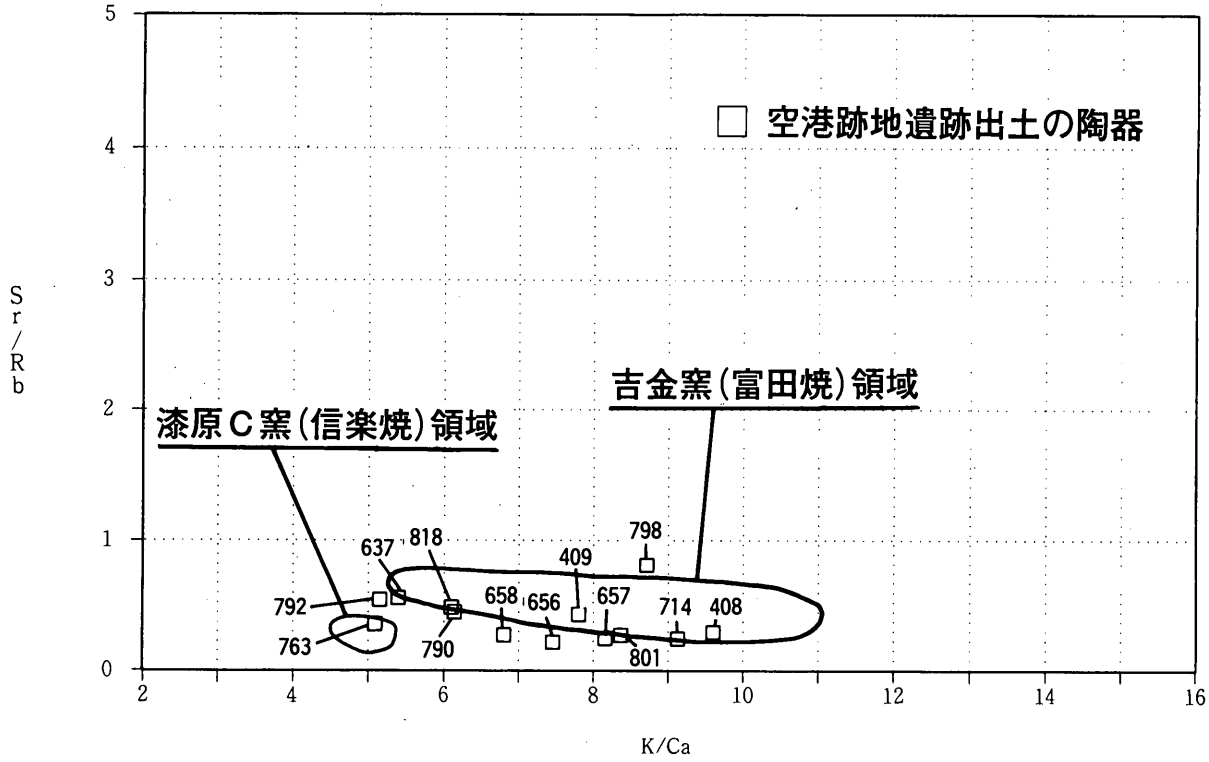
森下友子，浜田恵子，藤方正治，（財）香川県埋蔵文化財調査センター，佐賀県伊万里市教育委員会，佐賀県立九州陶磁文化館（敬称略）

註

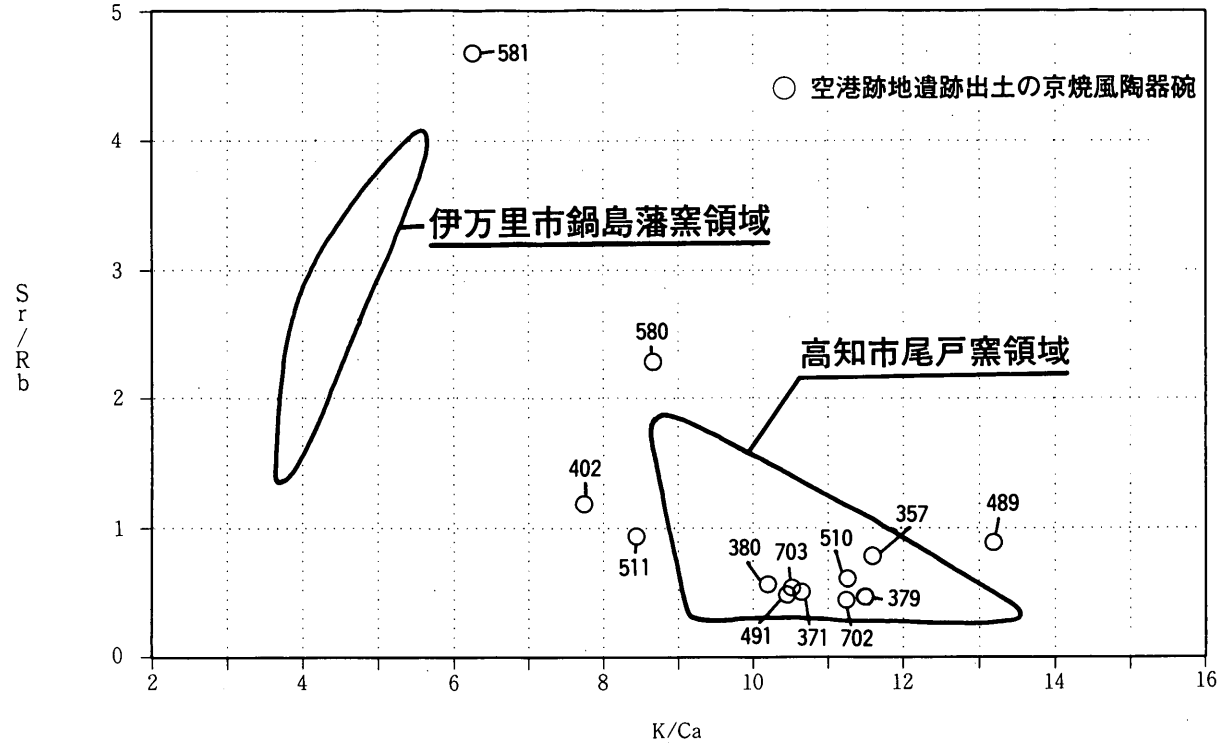
(1) 陶磁器の形態，技法的な考古学的な分類は，森下友子氏による。

(2) 白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学的分析（III)」『自然科学研究所研究報告』13号　岡山理科大学　1987

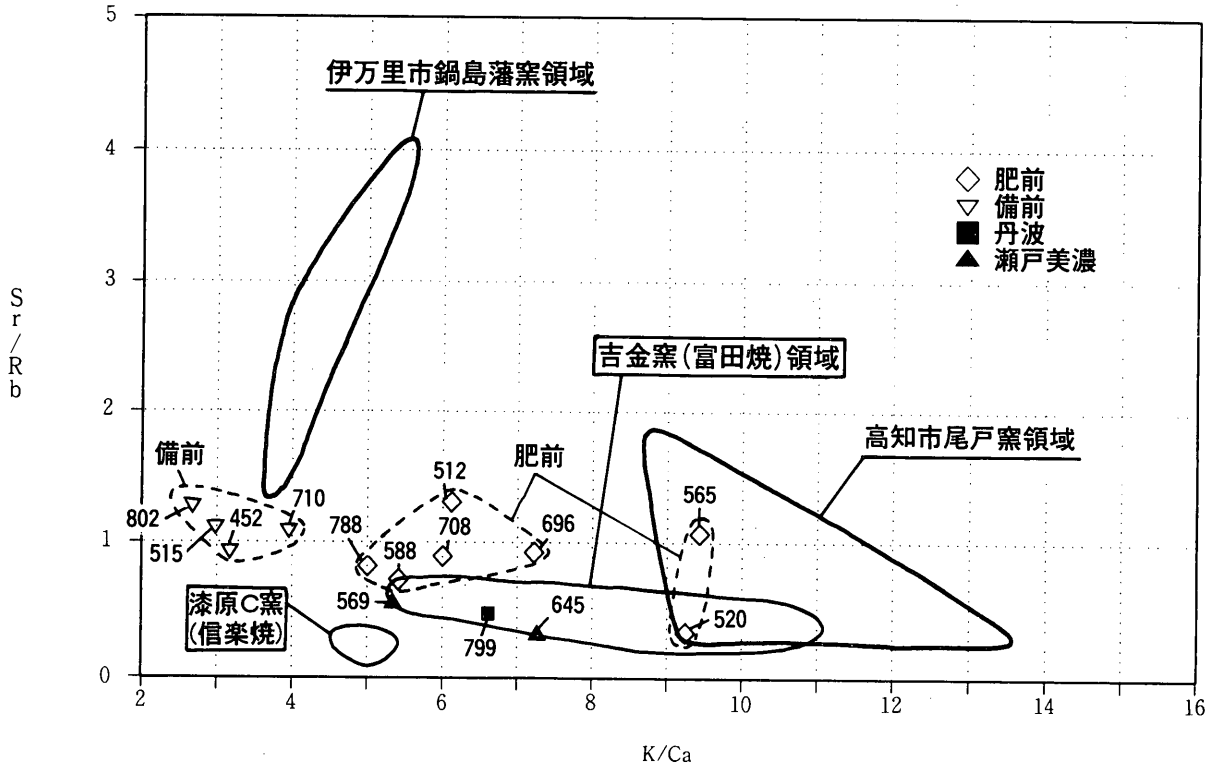
(3) 註(1)と同じ



第261図　空港跡地遺跡出土の陶器と富田焼，信楽焼との比較



第262図　空港跡地遺跡出土の京焼風陶器碗と尾戸窯，鍋島藩窯との比較



第263図　空港跡地遺跡出土の陶磁器と富田焼，信楽焼，尾戸窯，鍋島藩窯との比較

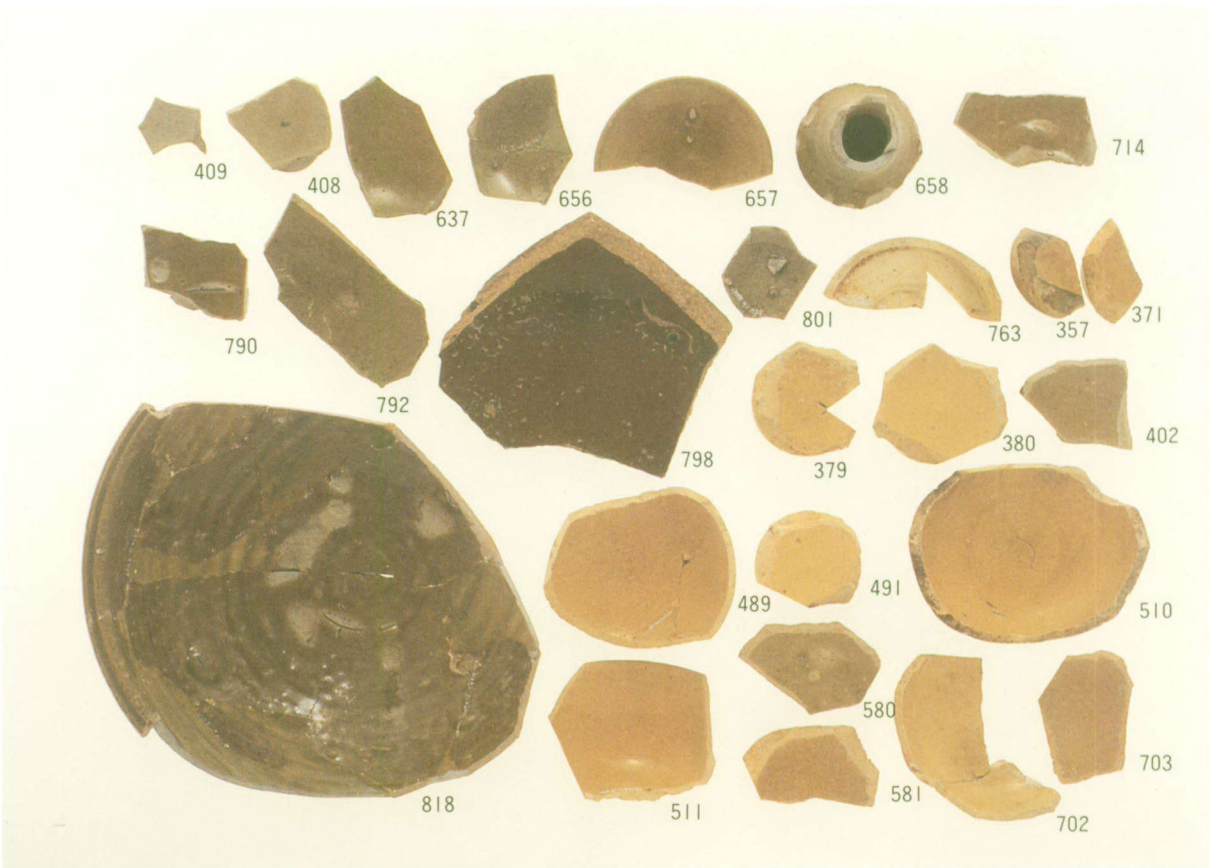
遺物番号	種類・器形など	出土地・採集地	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
408	富田焼陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 60	3.27	2.19	61.82	0.90	29.59	0.34	46	175
409	富田焼陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 60	3.93	1.52	62.65	0.44	27.77	0.50	68	166
637	富田焼陶器土瓶	空港跡地遺跡 SDi 41	2.24	3.02	75.39	0.86	19.83	0.42	68	127
656	富田焼？陶器灯明受皿	空港跡地遺跡 SDi 41	3.39	2.02	60.84	0.40	29.14	0.46	34	168
657	富田焼陶器灯明受皿	空港跡地遺跡 SDi 41	3.62	2.21	67.61	0.46	24.65	0.44	43	186
658	富田焼？陶器台付灯明受皿	空港跡地遺跡 SDi 41	3.03	2.44	63.17	0.59	27.63	0.45	51	199
714	富田焼陶器鉢	空港跡地遺跡 SDi 42	3.42	2.38	72.89	0.78	22.32	0.38	48	212
790	富田焼陶器鉢	空港跡地遺跡 SXi 05	2.77	3.11	74.73	0.83	20.88	0.45	69	161
792	富田焼陶器鉢	空港跡地遺跡 SXi 05	2.36	3.33	75.20	0.60	19.84	0.46	61	119
798	富田焼？陶器甕	空港跡地遺跡 SXi 05	2.83	3.36	82.14	0.56	16.11	0.33	91	114
801	富田焼陶器灯明受皿	空港跡地遺跡 SXi 05	3.85	1.37	69.19	0.29	22.27	0.46	46	181
818	富田焼陶器鉢	空港跡地遺跡 SXi 06	2.78	3.07	74.30	0.85	20.71	0.46	71	156
763	信楽徳利	空港跡地遺跡 SDi 46	3.53	1.22	60.74	0.35	28.96	0.70	68	208
357	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 40	3.34	1.59	66.85	1.04	24.16	0.29	92	119
371	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 43	2.77	2.00	70.69	0.90	23.23	0.26	57	116
379	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 47	2.79	1.72	67.67	1.11	26.38	0.24	53	116
380	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 47	2.84	1.58	67.85	0.88	24.66	0.28	60	108
402	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 60	3.40	1.35	69.52	1.00	22.01	0.44	139	118
489	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 88	3.38	1.72	70.54	0.96	23.01	0.26	119	136
491	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 88	2.68	1.30	66.95	1.02	27.45	0.26	52	110
510	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 100	3.28	1.47	69.84	0.96	23.26	0.29	70	118
511	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SKi 100	3.27	1.77	74.59	0.50	19.97	0.39	104	112
580	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SDi 41	2.51	1.85	75.10	0.62	21.07	0.29	219	96
581	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SDi 41	2.27	2.12	69.77	0.89	23.89	0.36	457	98
702	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SDi 42	3.09	1.42	71.97	0.93	22.92	0.28	55	128
703	京焼風陶器碗	空港跡地遺跡 SDi 42	2.84	1.91	69.92	1.11	23.47	0.27	65	122
645	瀬戸美濃陶器水甕	空港跡地遺跡 SDi 41	2.01	1.68	72.53	0.90	23.83	0.28	34	97
569	瀬戸陶器馬の目皿	空港跡地遺跡 SDi 41	1.39	1.23	71.66	0.89	24.21	0.26	48	82
799	丹波陶器甕	空港跡地遺跡 SXi 05	2.92	3.02	78.00	0.50	17.57	0.44	65	133
512	肥前陶器刷毛目鉢	空港跡地遺跡 SKi 100	2.50	5.20	73.44	1.09	17.53	0.41	155	118
588	肥前陶器刷毛目鉢	空港跡地遺跡 SDi 41	2.07	6.57	72.48	1.08	19.03	0.38	73	101
708	肥前陶器刷毛目鉢	空港跡地遺跡 SDi 42	2.20	5.31	73.31	1.03	19.05	0.37	87	96
788	肥前陶器刷毛目鉢	空港跡地遺跡 SXi 05	2.04	5.51	71.98	1.12	19.89	0.41	78	94
520	肥前磁器染付皿	空港跡地遺跡 SDi 41	3.23	2.46	75.75	0.51	17.50	0.35	49	138
565	肥前陶器灰釉皿	空港跡地遺跡 SDi 41	2.65	2.81	75.65	0.92	19.14	0.28	125	116
696	肥前陶器灰釉皿	空港跡地遺跡 SDi 42	2.77	2.88	77.92	0.71	17.65	0.39	115	122
731	土師質土器五徳	空港跡地遺跡 SDi 42	2.29	8.06	63.15	0.82	19.36	0.91	125	95
452	備前焼灯明受皿	空港跡地遺跡 SKi 78	2.36	4.17	75.06	0.73	19.31	0.74	127	136
515	備前焼灯明受皿	空港跡地遺跡 SKi 103	2.18	4.34	73.89	0.79	19.45	0.74	119	107
802	備前焼灯明受皿	空港跡地遺跡 SXi 05	2.17	3.83	74.69	0.69	18.81	0.81	138	109
710	備前焼鉢	空港跡地遺跡 SDi 42	2.32	4.25	80.82	0.57	14.77	0.59	114	104

第 4 表　空港跡地遺跡出土近世陶磁器・土師質土器の胎土分析結果（%）　ただし，Sr，Rb は ppm

遺物番号	出土地・採集地	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
サンプル吉 1	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.00	3.39	66.55	0.92	26.15	0.28	61	164
サンプル吉 2	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.03	3.17	63.85	0.89	27.08	0.39	92	159
サンプル吉 3	香川県大川郡大川町吉金窯跡	2.86	3.91	67.64	0.90	24.47	0.27	81	151
サンプル吉 4	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.06	2.02	66.59	0.56	24.94	0.57	110	173
サンプル吉 5	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.04	3.58	57.23	0.91	28.86	0.34	53	166
サンプル吉 6	香川県大川郡大川町吉金窯跡	2.74	4.42	65.21	0.95	24.55	0.39	68	145
サンプル吉 7	香川県大川郡大川町吉金窯跡	2.95	2.58	66.74	0.85	25.80	0.46	96	170
サンプル吉 8	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.37	1.67	66.32	0.61	24.62	0.51	97	186
サンプル吉 9	香川県大川郡大川町吉金窯跡	3.23	1.96	73.31	0.57	21.61	0.21	21	148
サンプル尾 1	高知県高知市尾戸窯	3.58	0.93	74.95	0.43	21.03	0.35	122	117
サンプル尾 2	高知県高知市尾戸窯	2.56	1.38	75.79	0.82	20.36	0.21	39	140
サンプル尾 3	高知県高知市尾戸窯	2.46	2.29	71.69	0.84	23.18	0.28	156	87
サンプル尾 4	高知県高知市尾戸窯	3.61	2.10	70.87	0.90	23.60	0.27	65	201
サンプル尾 5	高知県高知市尾戸窯	3.24	2.12	70.96	0.90	22.35	0.35	72	187
サンプル鍋 1	佐賀県伊万里市鍋島藩窯	1.73	1.51	67.81	0.97	26.74	0.31	289	72
サンプル鍋 2	佐賀県伊万里市鍋島藩窯	2.62	1.03	67.58	0.72	24.94	0.72	164	118
サンプル鍋 3	佐賀県伊万里市鍋島藩窯	1.96	1.31	65.85	0.95	27.25	0.49	193	73
サンプル鍋 4	佐賀県伊万里市鍋島藩窯	2.00	1.32	66.31	1.00	27.17	0.48	193	78
サンプル鍋 5	佐賀県伊万里市鍋島藩窯	1.97	1.32	66.31	1.00	26.98	0.49	195	71
サンプル信 1	滋賀県信楽町漆原C窯跡	3.18	1.24	60.50	0.37	29.69	0.64	34	179
サンプル信 2	滋賀県信楽町漆原C窯跡	2.99	1.50	58.34	0.43	30.93	0.63	61	195
サンプル信 3	滋賀県信楽町漆原C窯跡	3.62	1.20	61.08	0.34	28.82	0.73	58	207
サンプル信 4	滋賀県信楽町漆原C窯跡	3.12	1.34	58.87	0.37	30.55	0.65	58	198
サンプル信 5	滋賀県信楽町漆原C窯跡	3.11	1.41	58.43	0.38	30.75	0.60	54	206
サンプル信 6	滋賀県信楽町漆原C窯跡	3.03	1.72	59.48	0.41	29.30	0.66	52	187

第 5 表　近世陶磁器の胎土分析結果（%）　ただし，Sr，Rb は ppm

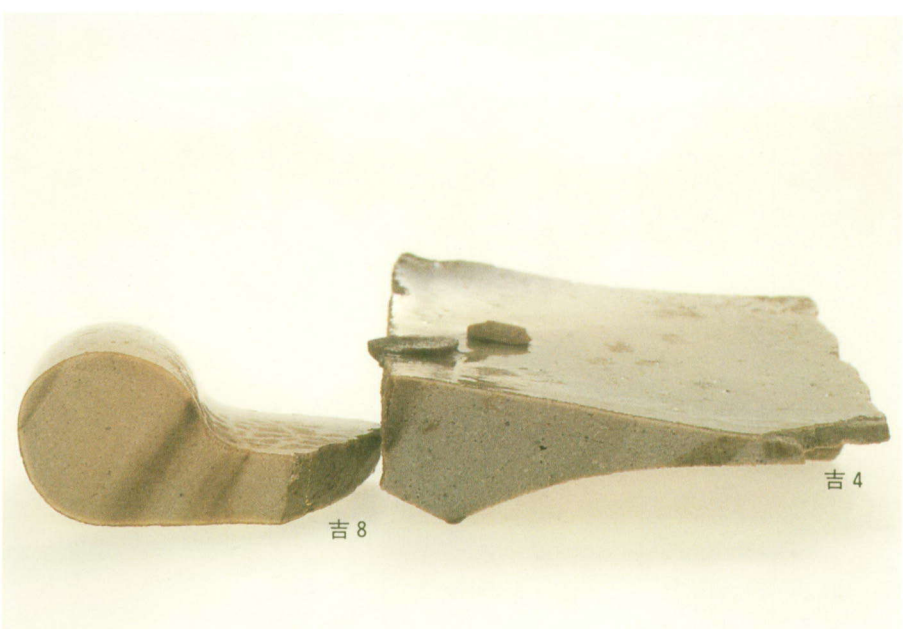
空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料



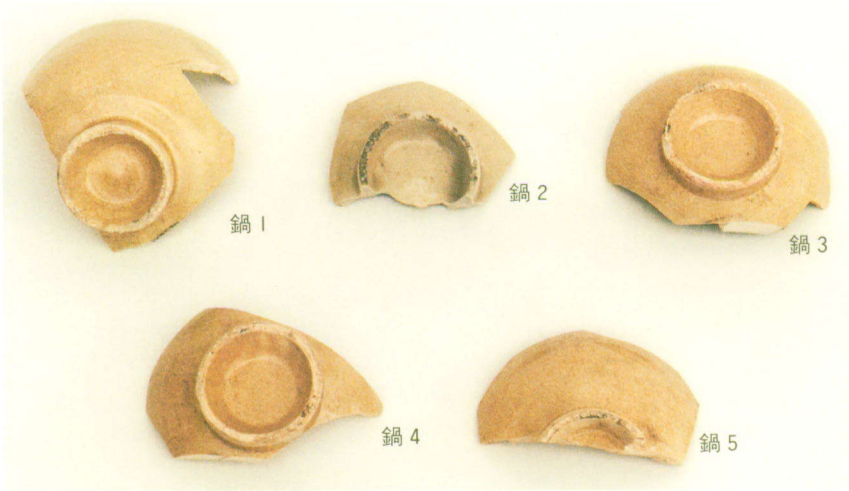
空港跡地遺跡出土陶磁器胎土分析資料

写真 4

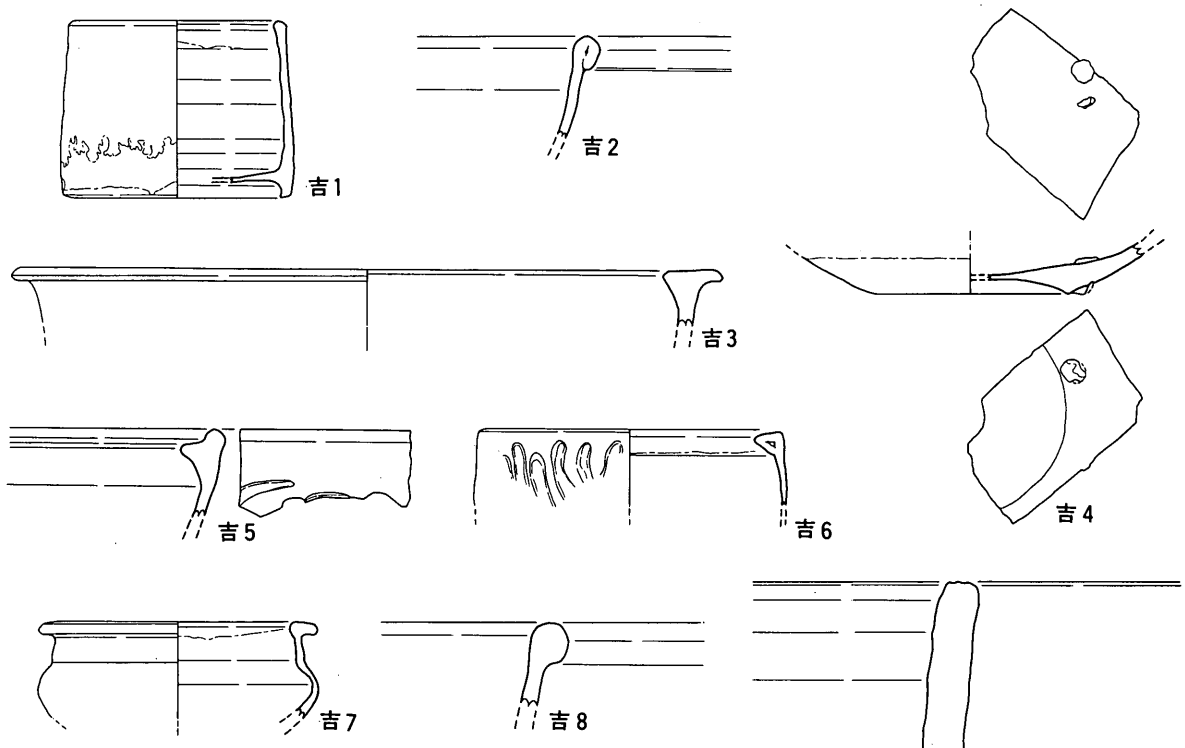
信楽・富田焼胎土分析資料



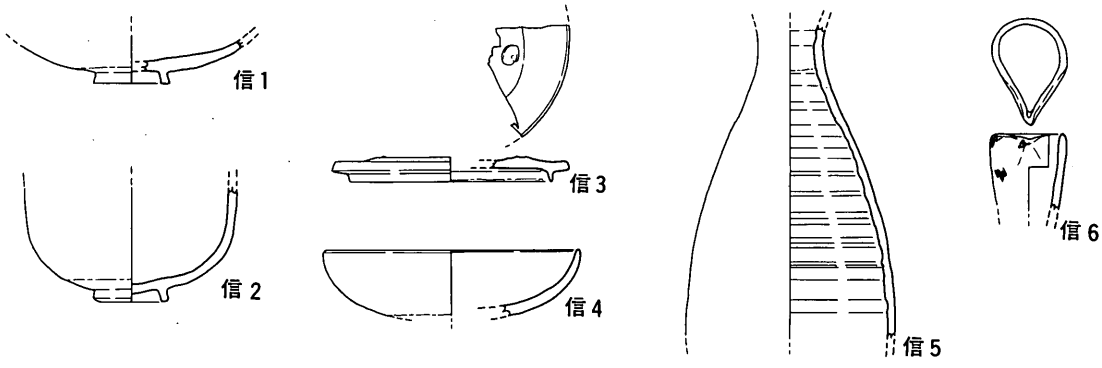
富田焼胎土分析資料



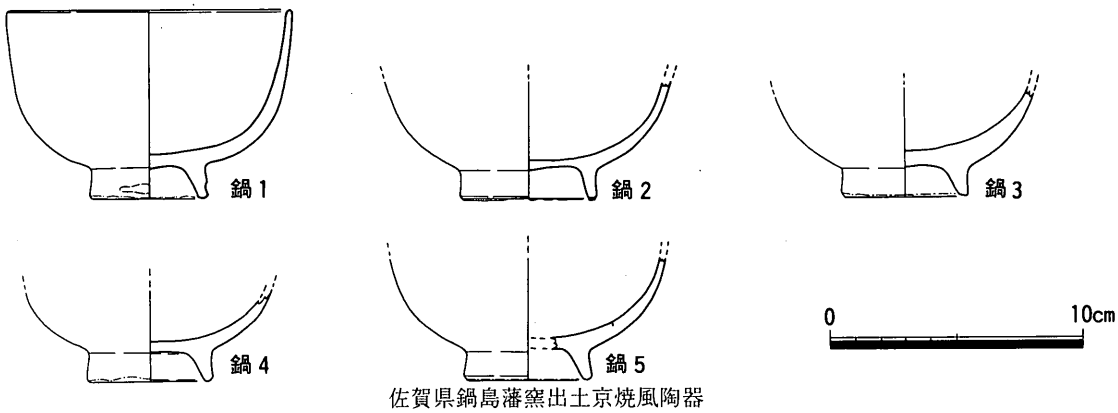
肥前・尾戸焼胎土分析資料



香川県大川町吉金窯跡採集陶磁器

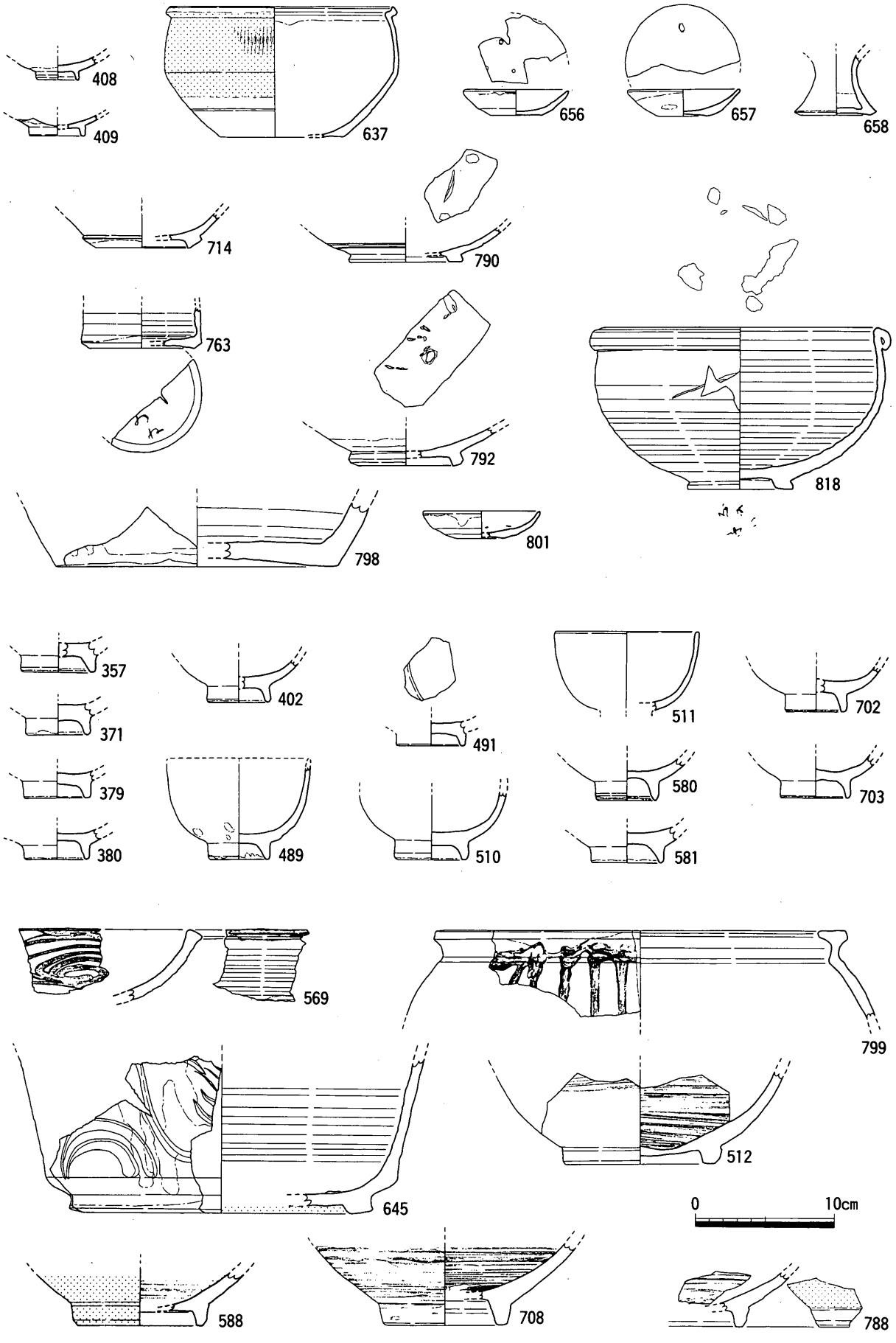


滋賀県信楽町漆原C窯跡採集陶磁器

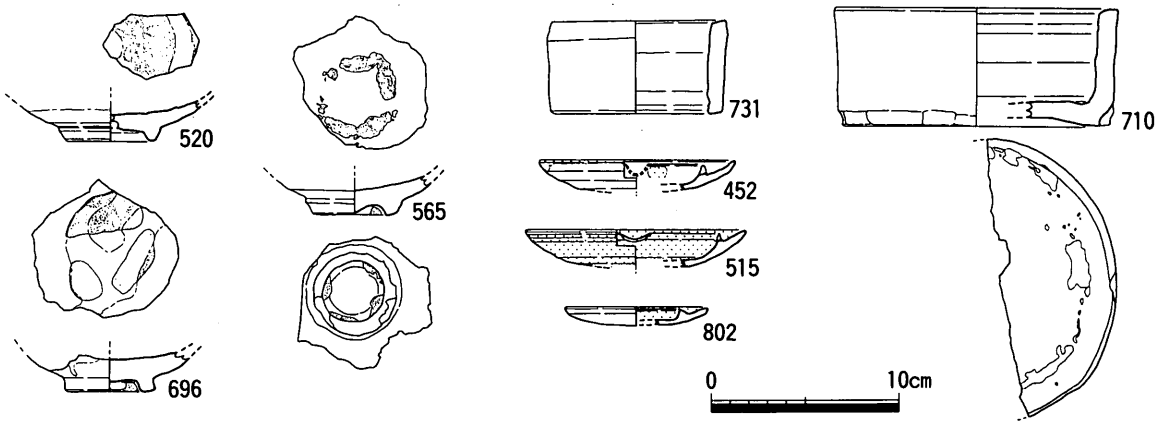


佐賀県鍋島藩窯出土京焼風陶器

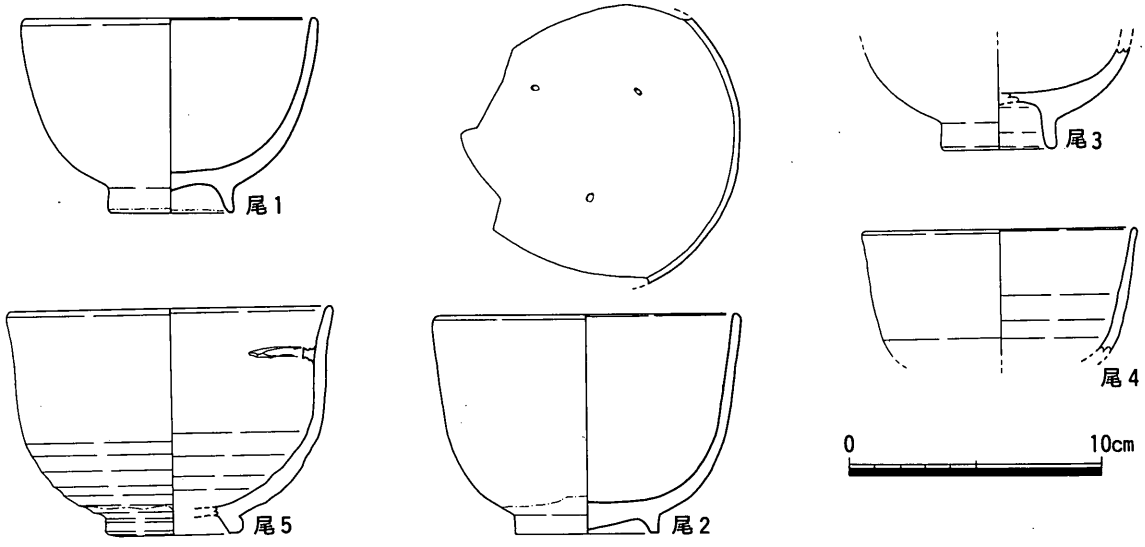
第264図　富田・信楽・肥前産陶磁器胎土分析資料（1/3）



第265図　空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料Ⅰ（1/4）



第266図　空港跡地遺跡出土陶磁器・土師質土器胎土分析資料２（１／４）



第267図　高知市尾戸窯跡採集陶磁器胎土分析資料（１／３）

第4章　ま　と　め

1．遺構の変遷

空港跡地遺跡Ⅰ地区では弥生時代から明治・大正時代の遺構・遺物を検出した。最も遺構数の多いのは江戸時代以降である。Ⅰ地区付近には寺社や屋敷地の伝承はなく，高松城下からも5kmほど南に位置する。Ⅰ地区で検出された遺構・遺物も特に目立ったものはなく，高松飛行場造成に至るまでは一般農民集落であったことがうかがわれる。本報告書では遺構を弥生時代から古墳時代，平安時代から鎌倉時代，江戸時代以降の3時期に区分し，報告した。細かい時期決定ができにくい遺構もみられるが，遺物から詳細な時期がわかる遺構を中心に，空港跡地遺跡Ⅰ地区の遺構の変遷を検討した。

①　弥生時代前期

Ⅰ地区の南東部では河川SRi 02が南から北東に向かって蛇行しながら流れる。SRi 02からは弥生時代前期後半の遺物が出土したが，南部のⅢ—26区から出土したものが大半を占める。同時期の集落は検出されていないが，河川内の南部から前期の土器が出土したことから，Ⅰ地区の南側に集落が存在する可能性が考えられよう。

②　弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は空港跡地遺跡Ⅰ地区全体で検出された。出土遺物は弥生時代後期中葉から後半の時期を示す。この時期になって初めてⅠ地区に集落が出現する。Ⅰ地区の北部から西部に掘立柱建物が4棟みられる。竪穴住居は検出されていない。掘立柱建物の中には遺物が出土しなかったものもみられる。だが，Ⅰ地区では柱穴や土坑から弥生時代前期・中期の遺物は全く出土していないことから，掘立柱建物はすべて弥生時代後期のものと考えられる。

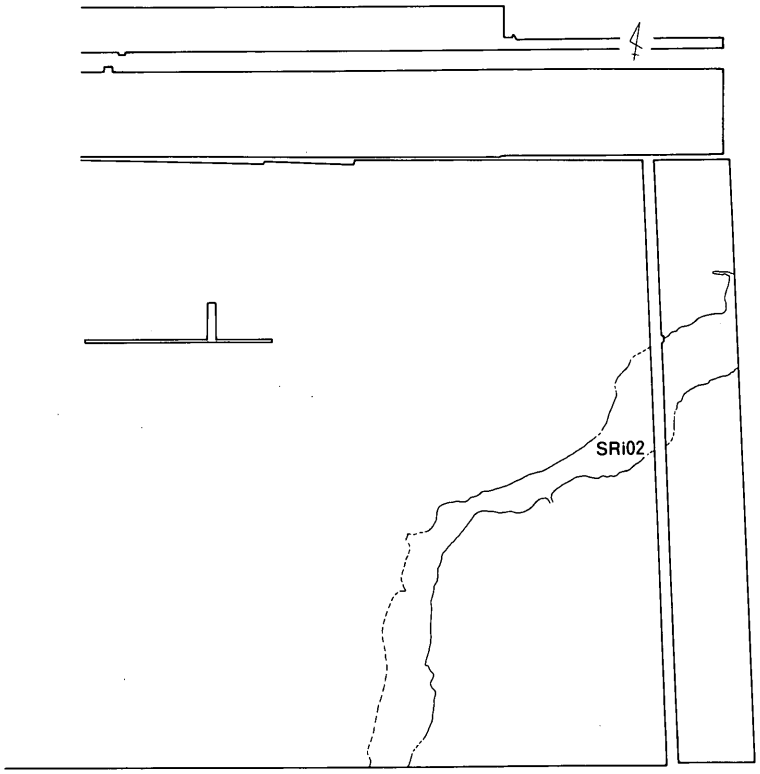
掘立柱建物の棟方向は一定していない。SBi 03・SBi 04は付近を走る溝と同方向である。掘立柱建物は梁間が1間の建物（SBi 01・SBi 02・SBi 03）と2間の建物（SBi 04）が存在する。Ⅰ地区の南部には建物はみられず，弥生時代前期同様，河川や溝が南西から北東方向に向かって走る。一方，集落が検出されたⅠ地区の北部では小溝ばかりで，方向も様々である。

③　古墳時代中期

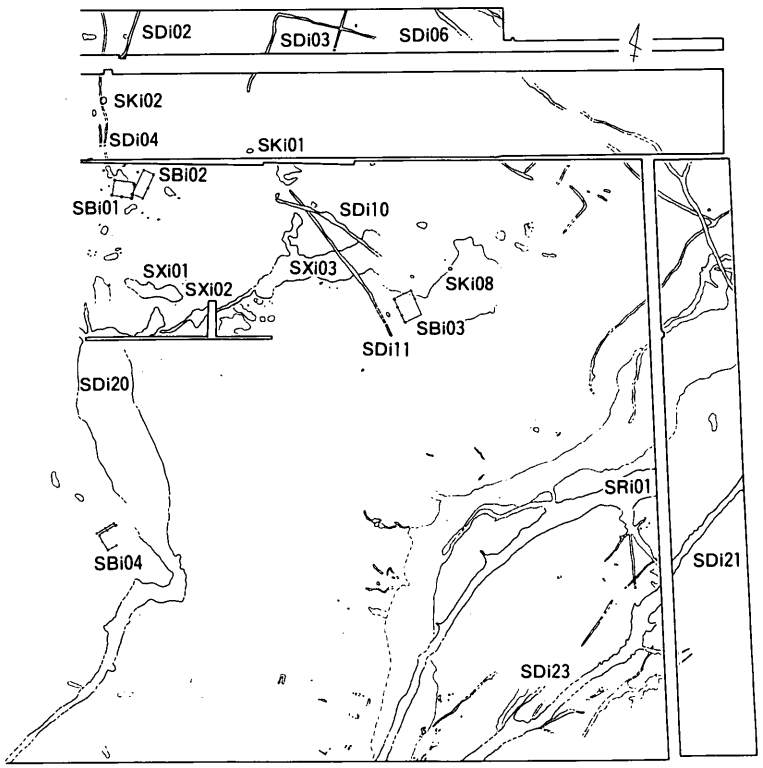
Ⅰ地区南東部では弥生時代後期の溝SDi 21が古墳時代中期に再掘削される。南西から北東に向かって走る。他の遺構は検出されなかった。

④　平安時代（10世紀）

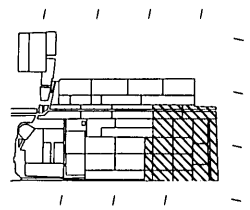
10世紀代の遺構はⅠ地区の北部と西部の2箇所で検出された。掘立柱建物・柱穴・土坑がみられる。掘立柱建物は4棟存在し，ほぼ同方向（W 5°～12° N，N13° E）を測る。また，建物の方向は周囲に残る条里形地割りの方向とほぼ一致することから，10世紀代には条里形地割りの方向と一致する地割りが存在していたことがうかがわれる。



① 弥生時代前期

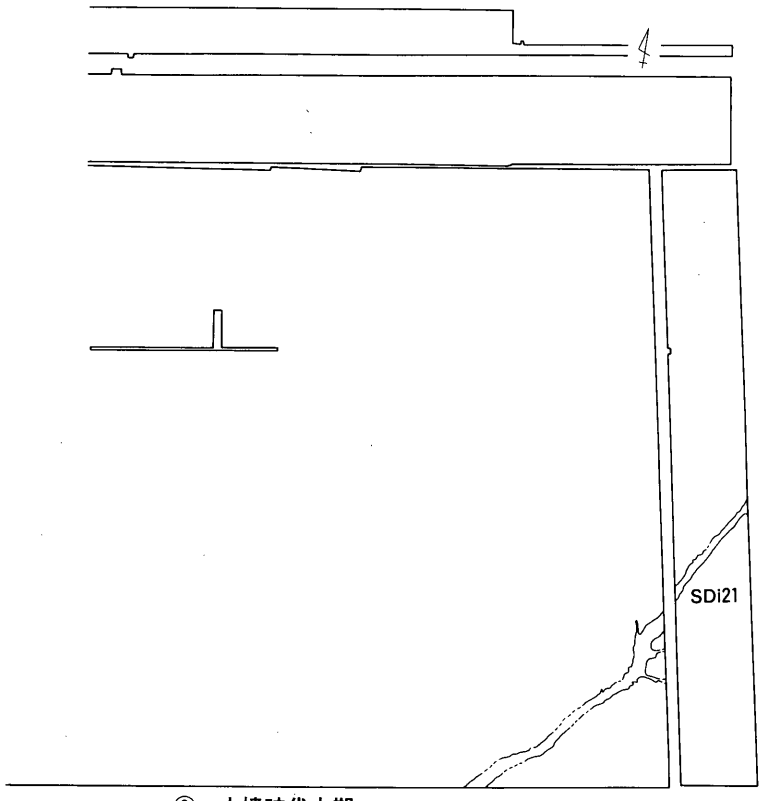


② 弥生時代後期

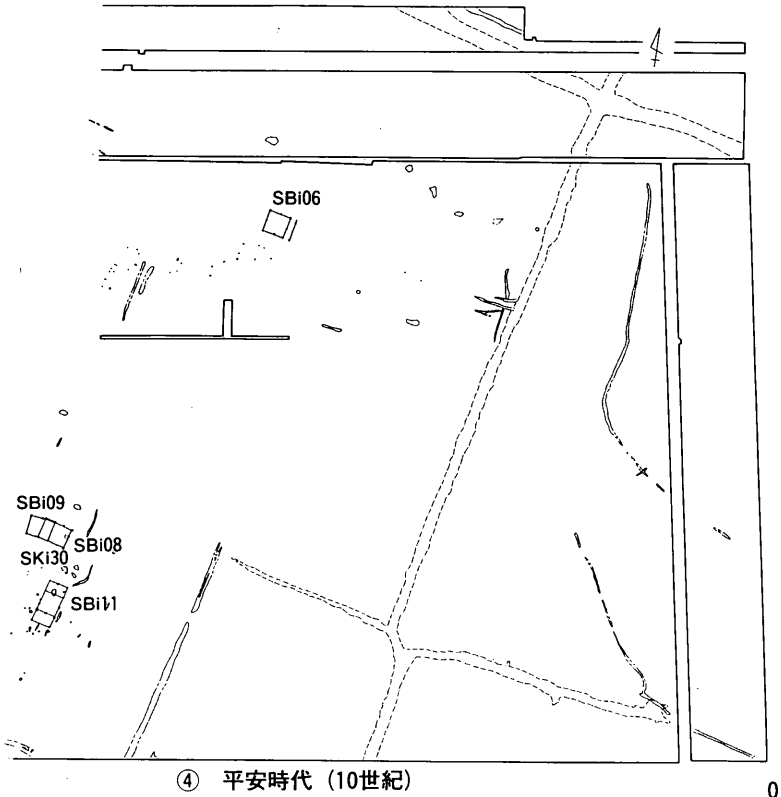


0 50m

第268図　遺構の変遷Ⅰ（1/1,500）



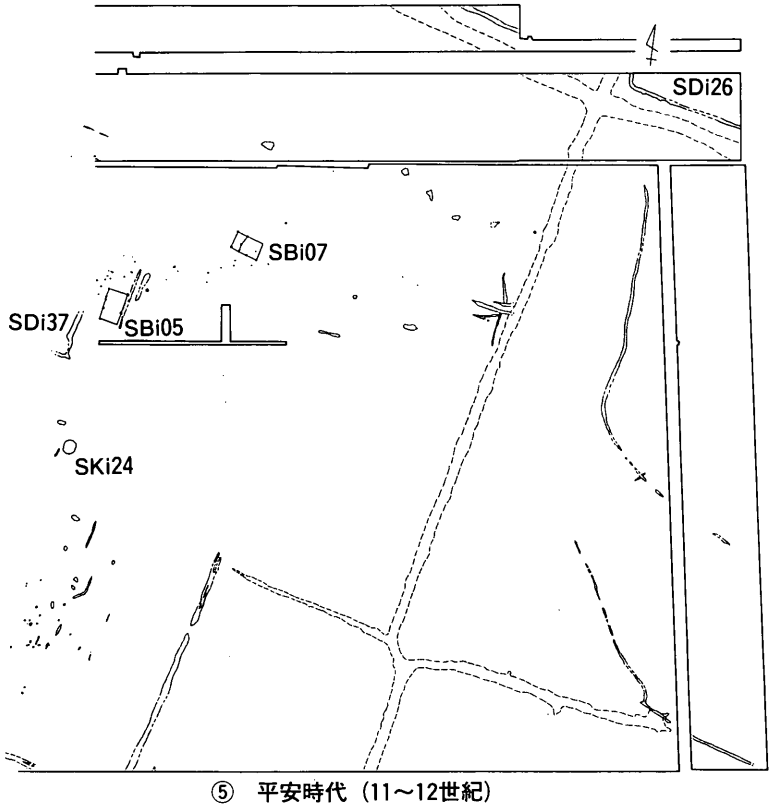
③ 古墳時代中期



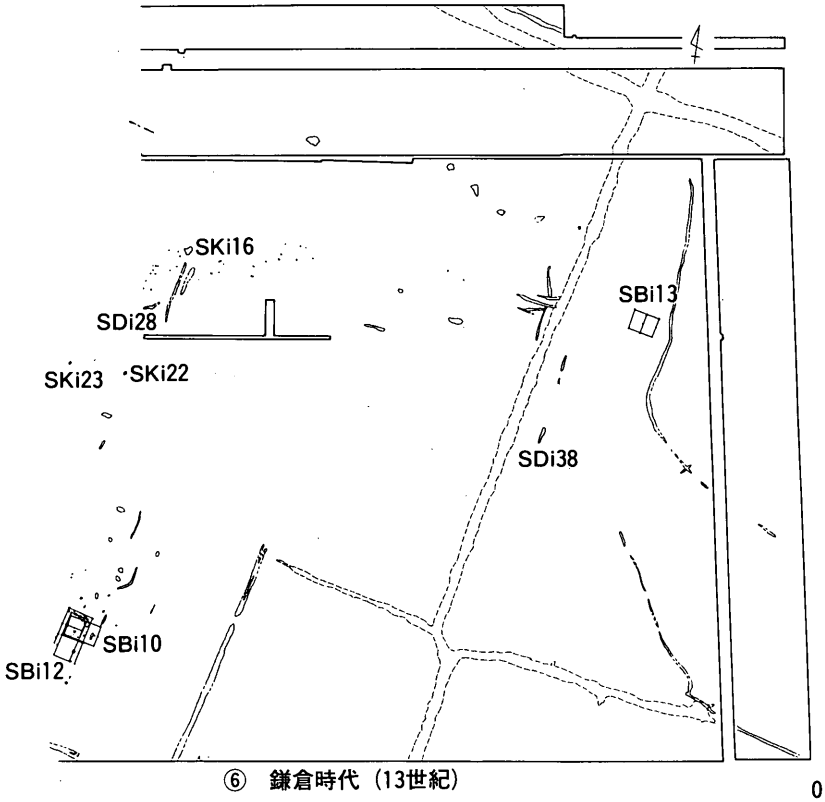
④ 平安時代（10世紀）

0 50m

第269図　遺構の変遷２（１/１,500）



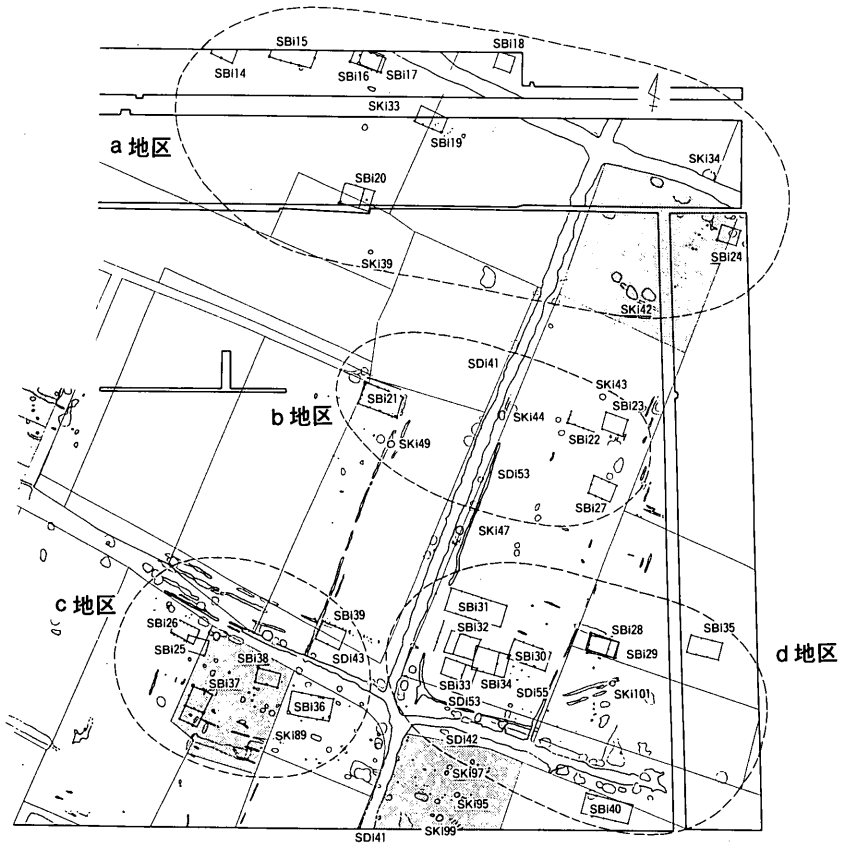
⑤ 平安時代（11～12世紀）



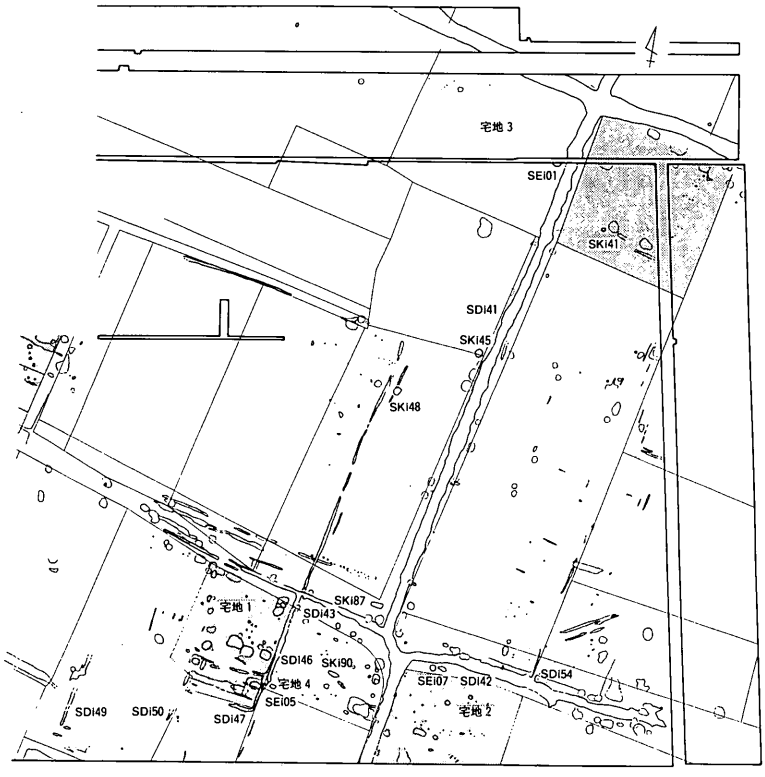
⑥ 鎌倉時代（13世紀）

0　50m

第270図　遺構の変遷３（１/１,500）



⑦ 江戸時代（17世紀から18世紀前半）



凡 例

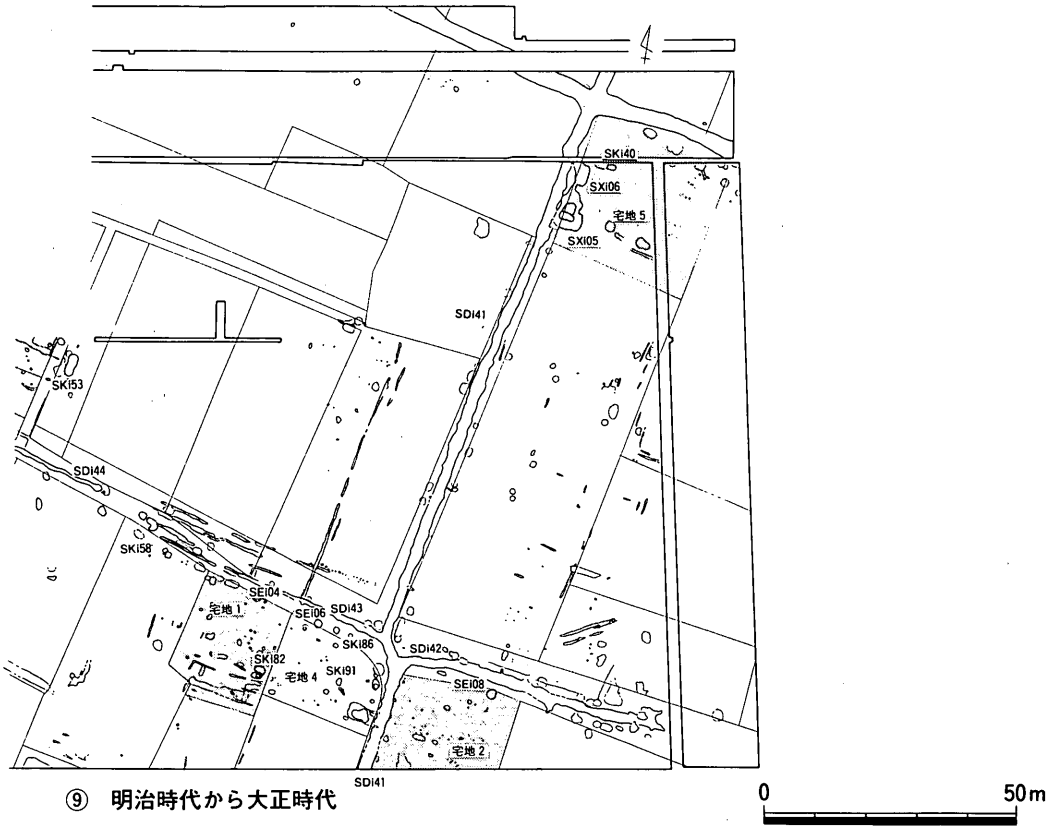
── 明治21年地籍図の地割り

□ 明治21年地籍図の宅地部分

⑧ 江戸時代（18世紀後半から幕末）

0 50m

第271図 遺構の変遷 4 （1/1,500）



第272図　遺構の変遷５（１/１,500）

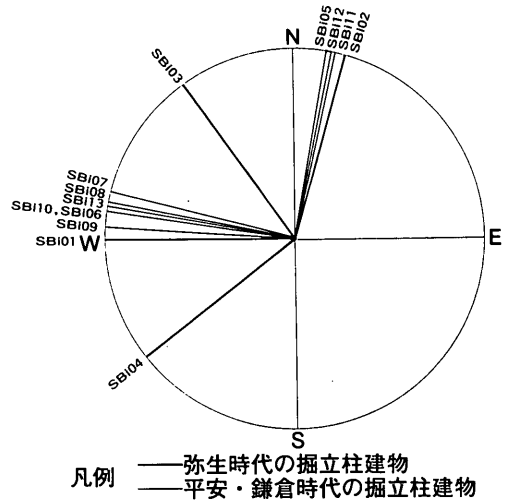
⑤　平安時代（11～12世紀）

11～12世紀の遺構はＩ地区の北部で検出された。北東部では溝が１条走る。北西部には掘立柱建物が２棟が存在し，柱穴・土坑・溝がみられる。掘立柱建物・溝はほぼ同方向を測り，周囲に残る条里形地割りの方向と一致する。

⑥　鎌倉時代（13世紀）

13世紀の遺構はＩ地区の西部と北部で検出された。掘立柱建物・柱穴・溝がみられる。掘立柱建物SBi 13には出土遺物がみられなかったが，周辺の遺構SDi 38から12世紀末から13世紀初頭の遺物が出土したことから，SBi 13も同時期の建物と考えた。掘立柱建物は３棟存在し，Ｉ地区南西部のSBi 10・SBi 12と北東部のSBi 13が検出された。

第273図は弥生・平安・鎌倉時代の各掘立柱建物の棟方向をグラフで表したものである。弥生時代の掘立柱建物の棟方向は様々であるが，平安・鎌倉時代の建物の棟方向はN10°ＥまたはW10°Ｎ付近に集中する。この方向は周辺にみられる条里形地割りの



第273図　弥生時代，平安・鎌倉時代の掘立柱建物の棟方向

方向とほぼ同じである。弥生時代の建物が微地形にあわせて建物の方向を決定したのに対し，平安時代頃には広大な面積を区画整理したことに伴い，建物の棟方向を地割りに合わせたのであろう。なお，溝SDi 13は南西から北東に向かって，条里形地割りの方向と異なる方向に走る。また，溝SDi 35・SDi 36もやや蛇行しながら南東から北西方向に向かって，条里形地割りとは異なる方向に走る。SDi 36からは遺物は出土しておらず，SDi 35からは黒色土器の小片が出土しただけである。SDi 35・SDi 36の埋土の特徴から平安時代から鎌倉時代の溝であると考えたが，詳細な時期については不明である。空港跡地遺跡内で平安・鎌倉時代頃に周囲の条里形地割りと異なる方向に走る溝がほかにも存在するのかどうか今後とも検討する必要があろう。

また，幅1.5〜4.5mの溝SDi 41は条里形地割りに沿ってⅠ地区の中央部を南北に流れる。この溝からは江戸時代以降の遺物が多量に出土したことから，同時期の溝として報告したが，12世紀後半から13世紀前半の中国産白磁片も出土しており，この頃から存在していたものと考えられる。

⑦　江戸時代（17世紀から18世紀前半）

Ⅰ地区を南北に流れるSDi 41や，東西に流れるSDi 42・SDi 43が存在する。これらの溝からは少量ではあるが，砂目積みの肥前陶器灰釉皿・鉄釉皿，砂目積みの肥前磁器染付皿が出土していることから，17世紀前半にも機能していたことがうかがえる。掘立柱建物からの出土遺物は少量であるが，いずれの遺物も17世紀前半から18世紀前半までのもので，18世紀後半以降と断定できるものはみられない。また，他の柱穴からの出土遺物の時期も17世紀から18世紀前半のものばかりで，18世紀後半以降のものはほとんどみられないことからも掘立柱建物は17世紀から18世紀前半に存在したものと考えられる。だが，土坑・溝など18世紀後半以降の遺構・遺物が多数検出されていることから，引き続き集落が存在していたものと思われるが，建物遺構は検出されていない。おそらく，この時期以降は建物の構造が変わり，柱穴を掘り込まない構造の石場建て建物に移行したのであろう。石場建て建物は掘り込みをもたないことから，遺構として残存せず，検出できなかったものと思われる。

空港跡地遺跡では掘立柱建物から石場建て建物への移行を18世紀中葉と考えたが，他の近世村落ではどうであろうか。神奈川県宮久保遺跡は複合遺跡であるが，近世村落の調査が行われている。この遺跡では17世紀中葉から19世紀前半の掘立柱建物が検出された。[1] また，同じ神奈川県内においては宮ヶ瀬遺跡でも近世村落の調査が行われている。宮ヶ瀬遺跡では18世紀後半以後は掘立柱建物は激減しており，この頃から石場建て建物に移行したものと考えられている。[2] 東京都八王子市宇津木台遺跡群では18世紀代までは掘立柱建物が存在するが，19世紀初頭になると石場建て建物に変化する。[3] これらの発掘調査成果をもとに，市川正史氏は18世紀から19世紀前半にかけて，しだいに「掘立柱」から「石ずえ」へ転換していったことを指摘した。[4] また，建築学的立場から調査を行っている吉田　靖氏は家別帳や改帳の調査を行い，長野県では17世紀代の民家は掘立柱建物が大半を占め，一部には石据え建物も存在したことを指摘した。さらに，民俗学的調査の結果から，高知県・長野県・新潟県の一部では18世紀後半でも掘立柱建物が残っており，沖縄県八重山地方では戦前まで掘立柱建物の家が相当数あったことを報告した。[5]

これらの調査例から空港跡地遺跡での建物構造の変化も全国的な流れと一致するものと考えられるが，村落内の建物配置や分布はどのようになっていたのであろうか。石場建て建物は遺構として検出されていないことから，分布や配置については不明である。ここでは、建物位置がわかる掘立柱建物群の

棟方向	江戸時代の掘立柱建物	10世紀代の掘立柱建物	11・12世紀代の掘立柱建物	13世紀代の掘立柱建物
W 3° S	SBi 29			
WE	SBi 36			
W 2° N	SBi 40			
W 3° N	SBi 25 SBi 35			
W 4° N	SBi 28 SBi 31 SBi 34			
W 5° N	SBi 15 SBi 24 SBi 32 SBi 38	SBi 09		
W 6° N	SBi 20			
W 7° N	SBi 33			
W 8° N	SBi 21 SBi 22 SBi 23 SBi 30			
W 9° N		SBi 06		SBi 10
W10° N	SBi 18 SBi 27			SBi 13
W12° N	SBi 16 SBi 17 SBi 39	SBi 08		
W13° N	SBi 14 SBi 19			
W14° N	SBi 26			
W15° N			SBi 07	
N 9° E			SBi 05	
N11° E	SBi 37			
N12° E				SBi 12
N13° E		SBi 11		

第 6 表　平安時代から江戸時代の掘立柱建物の棟方向

分布について検討を行う。

空港跡地遺跡 I 地区では掘立柱建物の近隣の建物群を 1 グループとして考え，SBi 14～SBi 20・SBi 24 を a 地区，SBi 21～SBi 23・SBi 27を b 地区，SBi 25・SBi 26・SBi 36～SBi 39を c 地区，SBi 28～SBi 35・SBi 40を d 地区と 4 地区に分類した。a 地区は I 地区の北部に位置する。この地区には 8 棟の建物が存在するが，棟方向をみるとW 5 ～ 6 ° N（SBi 15・SBi 24・SBi 20），W10～13° N（SBi 18・SBi 16・SBi 17・SBi 14・SBi 19）の 2 グループが存在する。b 地区は I 地区の中央部に位置する。この地区には 4 棟の建物が存在する。棟方向は SBi 21・SBi 22・SBi 23がW 8 ° N，SBi 27がW10° Nを測る。c 地区は I 地区の南西部，SDi 41の西岸に位置する。この地区には 6 棟の建物が存在する。棟方向は SBi 36・SBi 25・SBi 38がWEからW 5 ° N，SBi 26・SBi 39がW12～14° N，SBi 37がN11° E を測る。a 地区と同じように 2 グループに分かれる。d 地区は I 地区の南東部 SDi 41の東岸に位置する。この地区には 7 棟の建物が存在する。棟方向は SBi 31・SBi 34・SBi 28・SBi 32がW 4 ～ 5 ° N，SBi 33・SBi 30がW 7 ～ 8 ° N を測る。また，北東に少し離れた場所に位置する SBi 35はW 3 ° N，南東に少し離れたSBi 40はW 2 ° N を測る。SBi 28と重複する SBi 29はW 3 ° S を測る。なお，SBi 28とSBi 29の新旧関係は明確ではない。以上のように I 地区では17世紀から18世紀前半の掘立柱建物は条里形地割りにほぼ同方向に配置されるが，27棟の建物の棟方向は17° の差がみられ，a・c・d・e 地区の建物群の棟方向は少なくとも 2 グループずつに分類されることがうかがわれる。また，各地区の小グループはW 6 ° NとW 7 ° N を

境にして，Ⅰ地区全体ではW３°ＳからW６°Ｎ，Ｗ７°ＮからW14°Ｎの２グループに分類される。掘立柱建物からの出土遺物は少なく，建物の詳細な時期は不明である。このため，方向差は時期差によるものかどうかは不明であるが，周囲の地割りの変化に伴うものと考えられよう。周囲の遺構の方向を検討すると，昭和19年に廃絶したSDi 41はN13°Ｅ，SDi 42・SDi 43はW13°Ｎを測る。SDi 41からは12世紀後半から13世紀前半の遺物が出土したことから，すでに同時期には存在していたものと考えられる。この溝は長期間機能したが，この間には，当然溝の再掘削が行われたものと推定される。Ⅰ地区では長期間存在した溝はみられるが，17～18世紀代に短期間存在した溝はみられないことから，この時期の溝の方向は不明である。SDi 46からは19世紀の遺物が出土しており，19世紀の溝と考えられる。溝方向はN13°Ｅを測り，ほぼ同方向の溝SDi 41・SDi 42・SDi 43は19世紀以降に廃絶することから，これらの方向に近い棟方向W７°ＮからW14°Ｎの建物群のほうが新しいのではないかと推察できよう。

なお，前掲の論文で市川氏も指摘しているとおり上層農民から下層農民へと徐々に建物構造が転換していったものと思われるが，空港跡地遺跡で検出された建物の性格や集落の階層的位置付けについては，他の近世集落の建物との比較や文献史料との対比を行い，今後とも検討を重ねなければならないであろう。

⑧　江戸時代（18世紀後半から幕末）

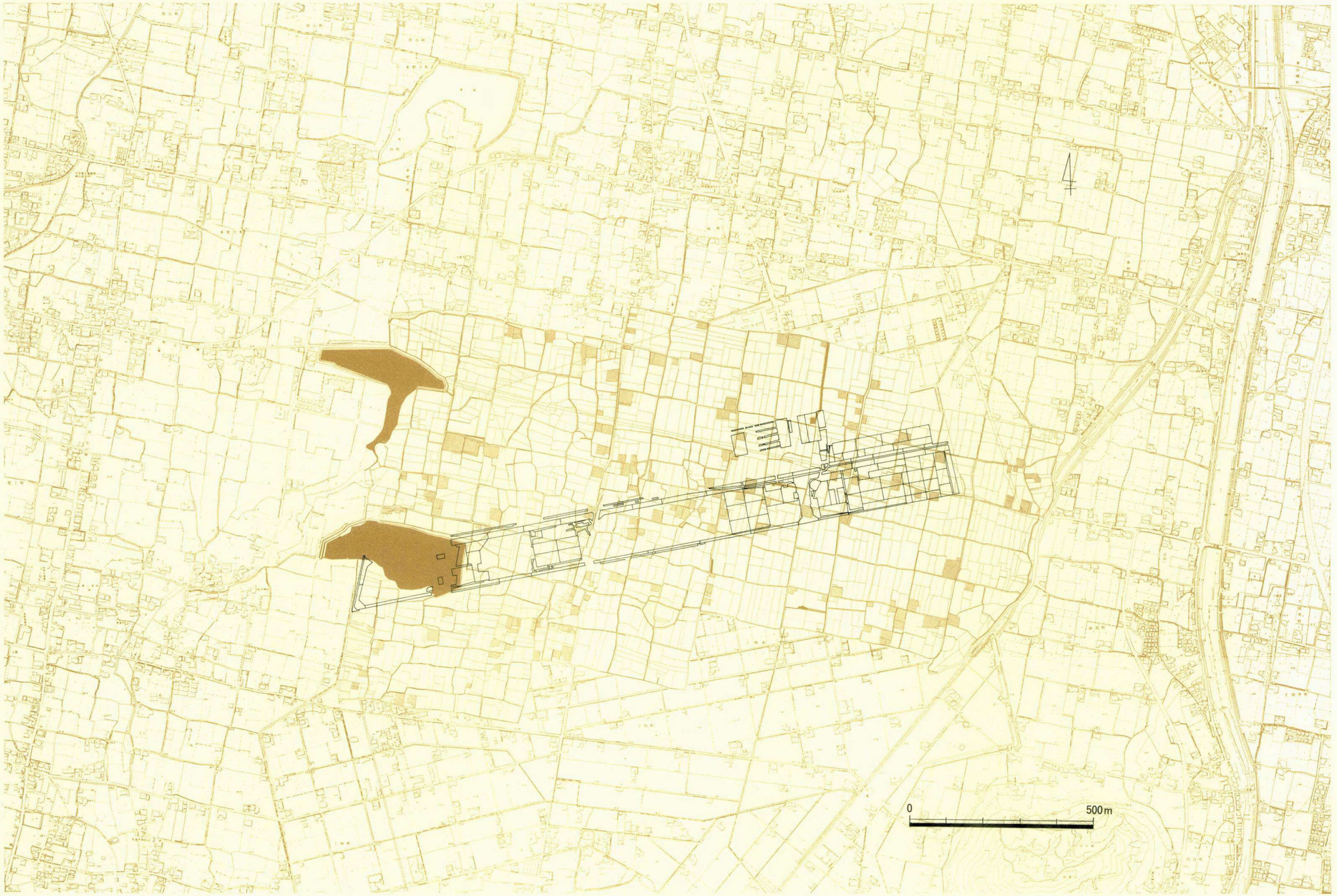
前述のように，この時期には地面に柱穴を掘り込む掘立柱建物は存在しない。建物はすべて石場建て建物になったものと考えられる。遺構が検出されていないことから，建物の位置や規模については不明であるが，遺物を廃棄したと考えられる土坑や井戸の存在から屋敷の位置が推定できる。土坑はⅠ地区の南部SDi 43の南岸やSDi 41の西岸に数多く存在する。19世紀には井戸SEi 01・SEi 05・SEi 07が存在する。また，SEi 05の周囲には遺物を廃棄したと考えられる土坑も数基存在する。井戸の存在から，少なくともⅠ地区には第271図のように宅地１～３があったものと推定される。なお，後述する明治21年の地籍図にも宅地１・２は宅地として記載されている。また，SDi 43の南岸には溝SDi 46・SDi 47が南北に走り，前代に引き続きSDi 41・SDi 42・SDi 43も存在する。

⑨　明治時代から大正時代

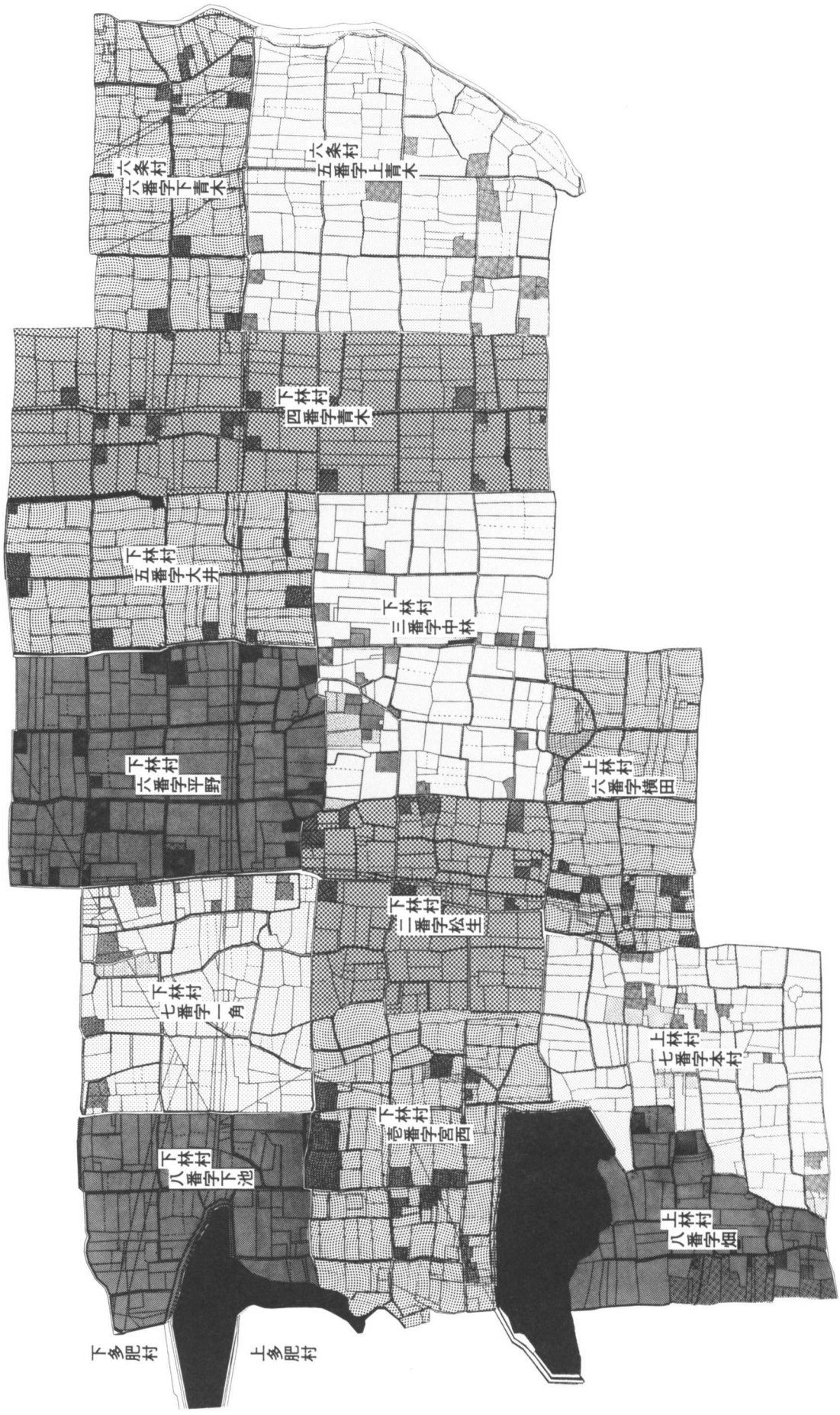
前代に引き続き，SDi 41・SDi 42・SDi 43が存在する。宅地１には井戸SEi 04や土坑が存在することから，前代に引き続き屋敷が営まれたものと考えられる。また，宅地１の東側には明治時代の井戸SEi 06が存在することから，この場所も宅地であったものと考えられる（宅地４）。

Ⅰ地区北部のSDi 41の東岸では石組をもつ方形土坑SXi 05・SXi 06がみられる。両者はいずれも隣接する溝SDi 41からの取水口がみられる。また，両者は小溝によって連続していることから，同時期に存在したものと考えられる。同様の石組をもつ遺構は観音寺市一ノ谷遺跡[6]や丸亀市郡家田代遺跡[7]のほか空港跡地遺跡Ｈ地区SK 32[8]がみられる。郡家田代遺跡SX 03では方形土坑内に石組が施され，隣接する現在の水路に向かって，取水口がみられる。石組は3.5m×2.0～2.15mを測る。埋土からは18世紀代の遺物が出土した。観音寺市一ノ谷遺跡SX 101も石組をもつ方形土坑で，現在の水路に接しており，取水口がみられる。石組は1.8m×1.3mを測る。18世紀後半から19世紀中葉の遺物が出土した。空港跡地遺跡Ｈ地区SK 32も溝に接する。18世紀後半の遺物が出土した。これらの石組をもつ方形の土坑はいずれも水路に接し，水路からの取水口がみられることから，洗い場ではないかと考えられる。

第274図　明治21年地籍図（1/5,000）



第275図　明治21年地籍図（1/10,000）



第276図　明治21年地籍図

また，空港跡地遺跡 SXi 05・SXi 06の東部には井戸 SEi 02がみられることから，この付近は宅地であったと考えられる（宅地５）。一ノ谷遺跡 SX 101の周辺も宅地，郡家田代遺跡でも SX 03の周辺では建物や井戸が検出され，宅地であったことがうかがわれる。空港跡地遺跡Ｈ地区 SK 32も周辺で土坑が数基検出されていることから，宅地であろう。このように洗い場と考えられる遺構はいずれも宅地で検出されていることから，日常生活物の洗い場であったものと推定される。

19世紀の井戸 SEi 07が検出された宅地２には井戸 SEi 08が検出されている。出土遺物がないため年代は不明であるが，後述する明治21年の地籍図にも宅地として描かれていることから，SEi 08は明治時代の井戸と思われる。明治21年の地籍図に描かれている宅地１・２・５からは同時期の遺構が検出され，明治時代の宅地であることが検証された。また，地籍図には描かれていないが，宅地２からも同時期の遺構が検出された。明治21年以前に廃絶した遺構の可能性が高い。

２．明治21年地籍図と遺構の変遷

空港跡地遺跡付近は飛行場造成に伴う区画整理の結果，地割りは大きく改変されている。高松法務局には飛行場造成以前の明治21年に測量を行った地籍図が保存されている。この地籍図は１/1,200の縮尺で，字ごとに作成されており，空港造成以前の地割りや，宅地・田・畑・墓地・山林などの地目が表されている。第274図は明治21年の地籍図をつなぎ合わせ，空港跡地遺跡の調査区を重ね合わせたものである。また，第275図は高松平野の地形図に地籍図の図面を重ね合わせ，さらに，その上から空港跡地遺跡の調査区を重ね合わせたものである。これらの図をみると空港造成以前には空港跡地遺跡付近にも条里形地割りが広がっていたことがよくわかる。第276図は地籍図の字名を記した図である。この図から空港跡地遺跡は下林村・上林村・六条村の３村にまたがっていることがうかがわれる。調査地区ごとにみると空港跡地遺跡Ａ地区は下林村壱番字宮西と二番字松生と上林村七番字本村と八番字畑，Ｂ地区は下林村二番字松生，Ｃ地区は下林村二番字松生と三番字中林，Ｄ地区は下林村三番字中林と六番字平野と五番字大井，Ｅ地区は下林村六番字平野と五番字大井，下林村四番字青木，Ｆ地区は下林村三番字中林と四番字青木と下林村五番字大井，Ｇ地区は下林村四番字青木と六条村六番字下青木，Ｈ地区は下林村四番字青木と六条村五番字上青木，Ｉ地区は六条村六番字下青木と五番字上青木，Ｊ地区は下林村四番字青木に当たる。

Ｉ地区内では明治21年には宅地が３箇所存在し，その他は田となっている。前述のように地籍図で宅地とされた場所には必ず井戸等が検出されており，検出遺構とも矛盾はない。なお，地籍図によると宅地１は398m²，宅地２は458m²，宅地５は669m²を測る。

SDi 41・SDi 42・SDi 43はＩ地区の中では幅広であることから，基幹水路と考えられる遺構である。地籍図をみると，これらの遺構と一致する場所に水路が描かれている。一辺110m前後の格子状に水路が張り巡らされていることから，これらの水路は条里形地割りの坪境となることがうかがえる。SDi 41からは江戸時代以降の遺物が多量に出土したが，12世紀後半から13世紀前半の遺物も出土した。また，SDi 41の方向をみると10～13世紀代の掘立柱建物の方向とほぼ一致する。これらのことから，SDi 41は10世紀には存在しており，この頃には周囲の条里形地割りも施行されていたものと考えられる。

幅広の溝は坪境と一致したが，次に，地籍図に描かれている田・宅地との地境と検出遺構を比較したい。Ｉ地区の南部に位置する溝 SDi 46・SDi 47の場所は地籍図では宅地と田の地境で，SZi 03も田の地境に当たる。SDi 46からは18世紀後半から19世紀中葉の遺物が出土した。遺物の年代は地籍図の作成の30年

ほど前になることから，地籍図の地割りは作成の30年ほど前までは遡り得ることがうかがえる。他に地籍図と一致する遺構はSBi 21の西側で検出された東西に走る溝がある。本報告書ではこの溝については報告していないが，この溝からは肥前陶胎染付や大谷焼の小片が出土した。陶胎染付は18世紀前半のものであるが，大谷焼は1784年以降生産されたことから，18世紀末以降の所産であると考えられるので，この溝は18世紀末以降のものと推定される。

掘立柱建物SBi 19・SBi 20・SBi 24は地籍図に描かれる地境の上に位置する。掘立柱建物は17世紀から18世紀前半に比定されることから，細かい地割りについては18世紀前半までは遡れないと思われる。また，SDi 41の西側を南北に走る溝SDi 45は検出長が45mであることからも当然，当時の地境に位置すると考えられるが，地籍図には表されていない。なお，SDi 45からは遺物が出土していないため年代は不明である。

Ⅰ地区で検出された遺構と明治21年測量の地籍図の検討から，地籍図に描かれている条里形地割の一部は10世紀代にはすでに存在したと考えられるが，坪内の細かい地割りに関しては作成の100年ほど前の18世紀末頃までしか遡れないものと推定される。

3．出土遺物

① 土器胎土について

本報告書においては含有物と色調の違いから土器胎土を大きく3分類し，それぞれ胎土1～3類として報告した。例言でも示したが，再度その分類を記す。

胎土1a類：茶褐色系の色調を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を多く含む土器胎土

胎土1b類：灰色系の色調を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を多く含む土器胎土

胎土2類　：結晶片岩を含む土器胎土

胎土3類　：その他の土器胎土

瓦質土器に関しては含有物の観察が不可能なものがみられたが，その場合は胎土分類不明として報告した。また，肉眼観察による分類を行ったが，明確なものだけ胎土1a類・胎土1b類としたので，胎土3類と分類した中にも胎土1a類・胎土1b類は含まれるものと思われる。観察の結果，空港跡地遺跡Ⅰ地区出土の弥生時代から古墳時代の土器は胎土1a類と胎土3類，平安時代から鎌倉時代土器についてはすべて胎土3類，江戸時代以降の土器胎土に関しては胎土1a・1b類と胎土3類となった。

胎土1a類に関しては以前，太田下・須川遺跡整理時に筆者が奥田　尚氏に砂礫種構成による土器胎土の分析を依頼し，両名がその特徴と土の採取地について検討を行った。[9] 奥田氏によれば胎土1a類の土器胎土は角閃石・長石・石英を多量に含み，閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主として含むものである。高松平野において閃緑岩質岩起源の砂礫がどこに分布しているのか調べるため，各地の土砂の採取を行い，分析を行ったところ，高松市御厩町の津内山，高松市勅使町の石清尾山丘陵南端付近の土砂に閃緑岩質岩起源の砂礫が含まれていることがわかった。胎土1a類土器は高松市上天神遺跡とその東に隣接する高松市太田下・須川遺跡においては，すでに弥生時代中期に出現する。両遺跡では胎土1a類土器は後期以降も多量に出土しており，高松平野の遺跡の中で最も出現率が高いことからも，両遺跡が分布の中心であることは明らかである。石清尾山丘陵南端は両遺跡から5～6km北西に位置する。一方，津内山は10km西方に位置しており，前者のほうが両遺跡から近いことから土器胎土の採取地の可能性が高いものと考えられる。なお，奥田氏には空港跡地遺跡の遺構面下の土の分析も依頼したが，胎土

１ａ類とは異なる砂礫構成を示した。したがって，空港跡地遺跡出土の弥生土器のうち胎土１ａ類土器の土の採取地は石清尾山丘陵南端付近の可能性が高いものと考えられよう。

ところで，弥生時代の土器だけではなく，江戸時代以降の土器にも胎土１ａ類はみられる。茶褐色を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を多く含むが，弥生時代の土器胎土と比較すると，金色を呈する雲母が多く含まれている。また，江戸時代以降の土器には胎土１ｂ類土器も多くみられる。肉眼観察では胎土１ｂ類の含有物は胎土１ａ類と同じである。おそらく，焼成方法によって，土器胎土の色調が異なるだけで，土は同じものであると思われる。

前述のように閃緑岩の分布地の一つに高松市御厩町の津内山がある。津内山周辺は御厩焼の生産地で知られている。御厩焼は江戸時代から生産がはじまったやきもので，現在も３～４軒の製陶業者がみられる。伝承によると享保３（1718）年頃，木田郡元山村に生まれた彦四郎（1797年没）が尾張の瀬戸で陶法を学び，津内山の粘土を採掘してここに窯を開いたのが始まりである。釉薬を使用しない土瓶等の生産は享和年間（1801～1804年）から盛んになったらしい。[10] 現在では焙烙・火消し壺・お宮形などの雑器や，土管・植木鉢が生産されている。江戸時代において御厩焼がどのような特徴をもつ土器を生産していたかは古文書等からも不明であるが，胎土１ａ類土器・胎土１ｂ類土器は津内山の土の砂礫構成とも合致することから，御厩で生産された御厩焼の可能性が高いものと考えられよう。

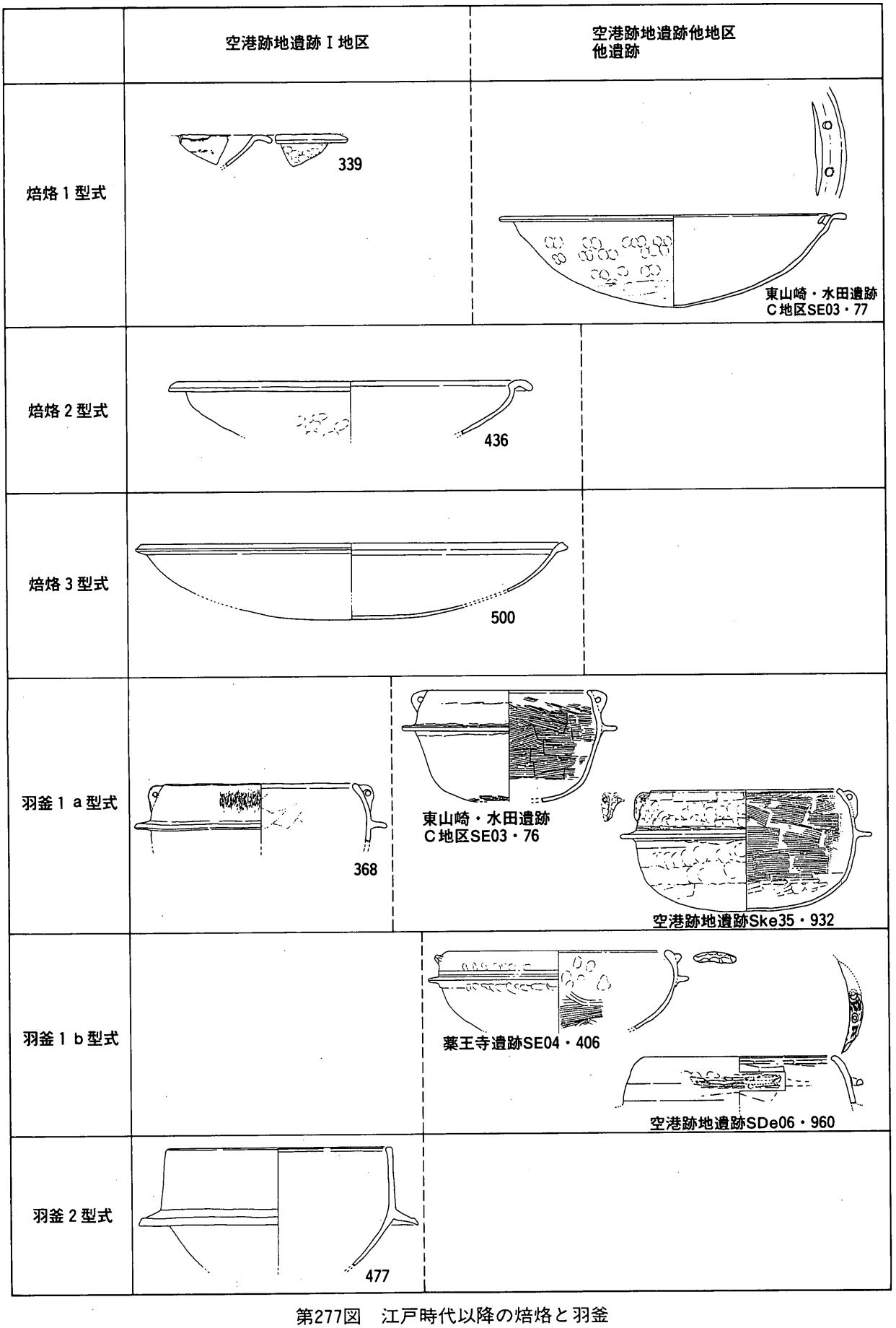
② 江戸時代以降の土器・陶磁器の特徴と年代について

空港跡地遺跡では多量の遺物が出土したが，大部分が江戸時代以降のものである。遺物は柱穴・井戸・土坑・溝などから出土した。土坑は建物の近くから検出されることが多く，出土遺物には完形品を含まないことから，大部分の土坑は遺物を廃棄するために掘られたものと考えられる。最も遺物量の多い遺構はＩ地区の中央部を走るSDi 41であるが，前述のように，この溝は長期間使用されており，長期にわたって遺物が廃棄されていることから，様々な時期のものが含まれている可能性が高い。SDi 41のような基幹水路に比べ，土坑は比較的短い間，使用または開口していたと考えられることから，土坑の出土遺物を中心にして江戸時代以降の遺物の特徴や生産時期について検討する。なお，土坑の開口期間は一様ではなく，再掘削の可能性も考えられる。また，陶磁器は土器に比べ，割れにくいという性格から，長期間使用されているものも多いので，廃棄年代と生産年代がかけ離れているものも多く，陶磁器の生産年代が共伴する遺物の生産年代とは必ずしも一致しないことを考慮する必要があろう。

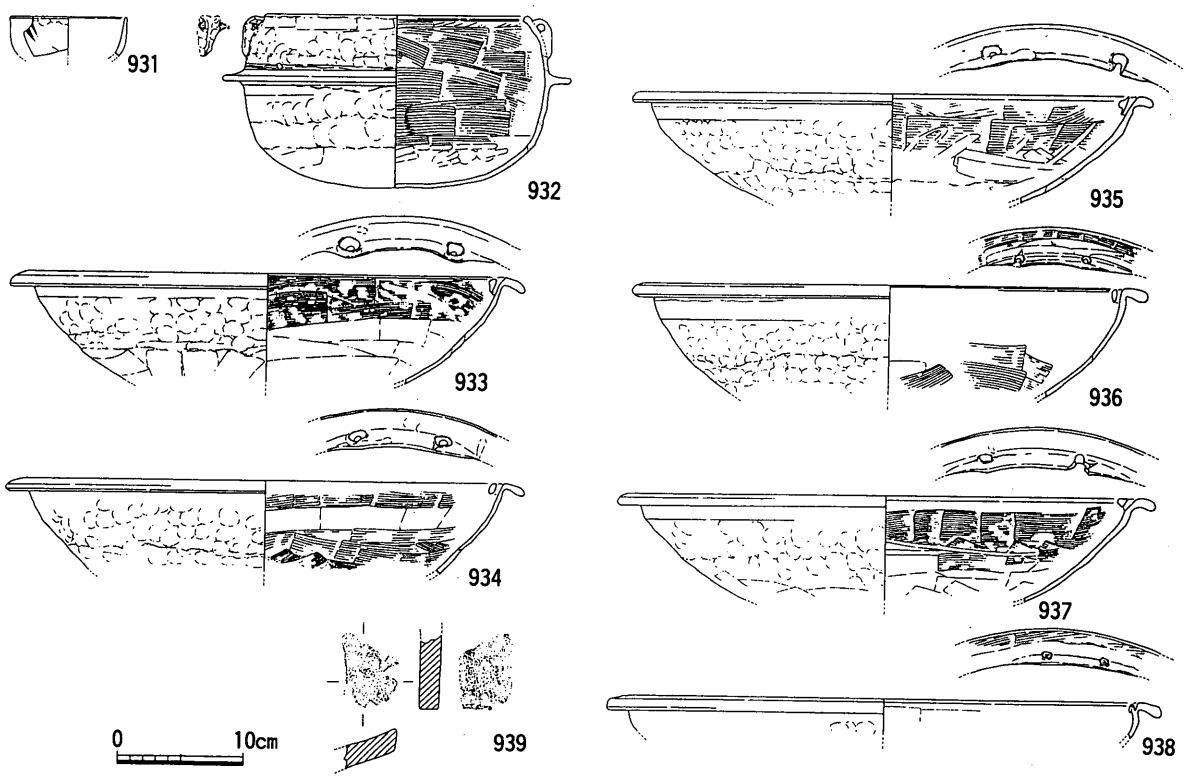
江戸時代以降の遺物の中で肥前や瀬戸美濃産の陶磁器については生産地での資料や研究が蓄積され，遺物の年代観がほぼ確定しているが，在地で生産された陶磁器や土器などについては資料が少なく，生産年代の不明なものが多い。香川県における江戸時代以降の土師質土器や瓦質土器に関しては御厩焼を中心に佐藤龍馬氏や濱野圭司氏によって，その特徴等がまとめられている[11]が，ここでは空港跡地遺跡Ｉ地区出土の土師質土器・瓦質土器の特徴を検討したうえで，年代の確定している陶磁器との共伴関係を整理し，土器の生産年代について検討を行う。

〔焙烙〕

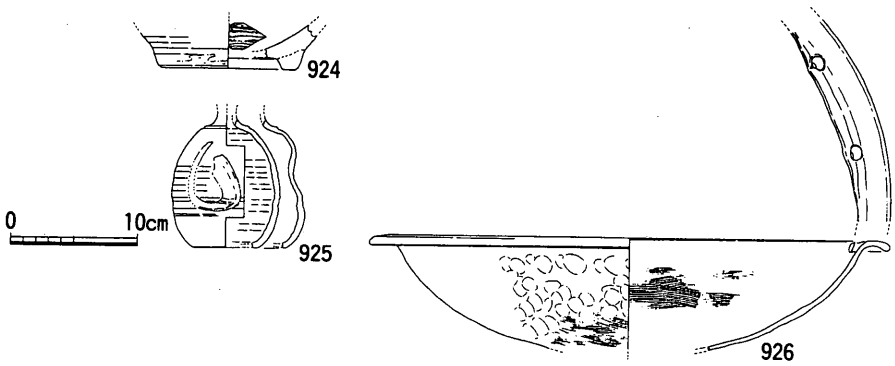
焙烙は調理具のひとつであるが，土師質と瓦質の２種類がみられる。また，型を使用して成形するものと使用しないものの２種類がみられ，型を使用するものは瓦質のみとなる。焙烙については佐藤・濱野両氏によっても検討されているが，ここではＩ地区出土の焙烙を中心に検討する。焙烙は体部の形態によって３型式に分類できる。この分類は基本的に佐藤氏の分類と同じである。



第277図　江戸時代以降の焙烙と羽釜



空港跡地遺跡Ske35



空港跡地遺跡Ske25

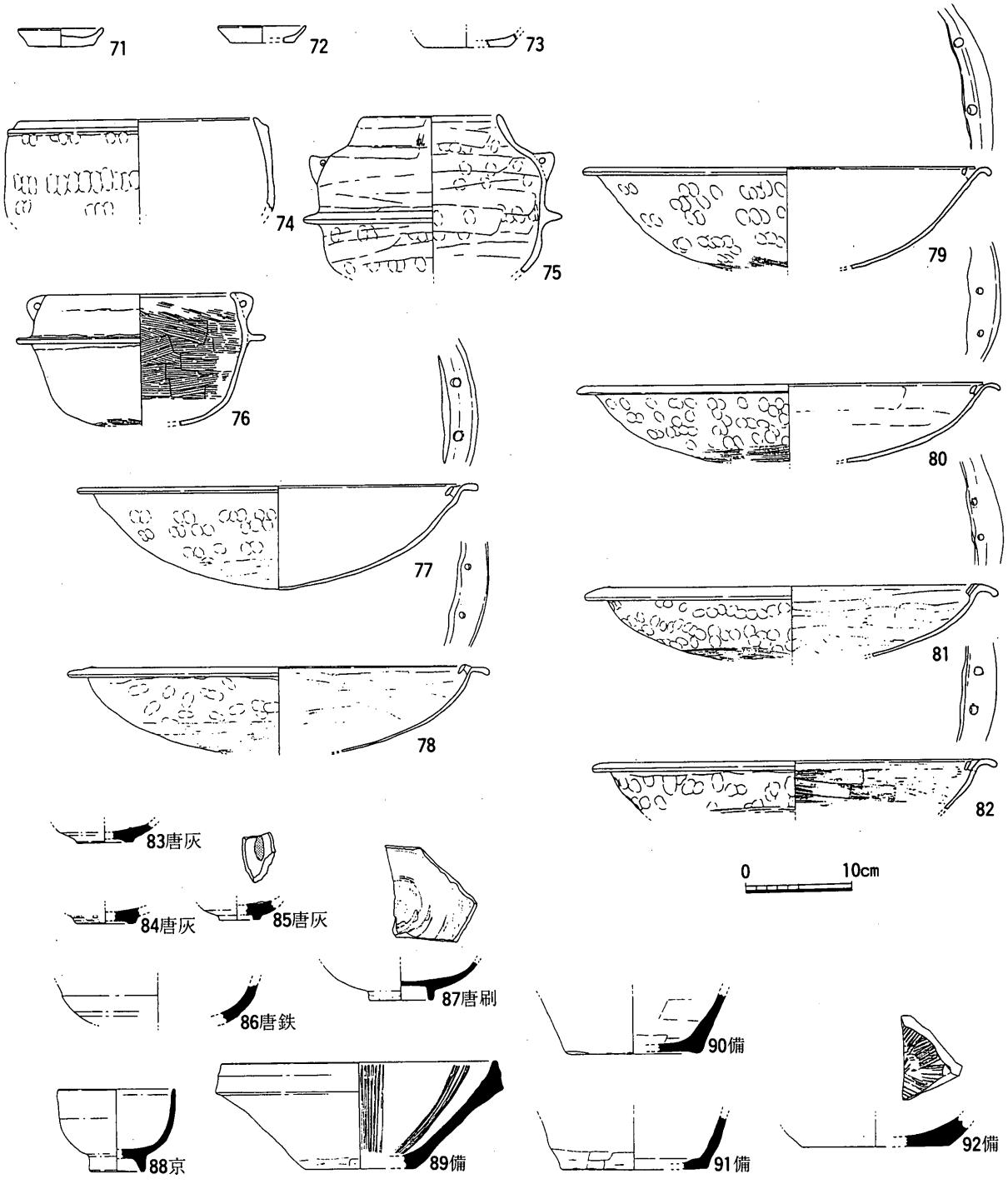
第278図　空港跡地遺跡E地区出土遺物（1/6）

焙烙1型式　粘土紐成形である。丸底を呈し，底部から体部にかけて緩やかなカーブを描き，皿状を呈する。口縁部はなめらかに屈曲し，外反する。内耳には2個の穴があく。土師質土器と瓦質土器がある。

焙烙2型式　粘土紐成形である。丸底で，体部上半が屈曲して立ち上がり，口縁部が強く外反する。内耳には2個穴がみられるが，下まで貫通しないものが多い。瓦質土器が多い。

焙烙3型式　外型を使用して成形する。外面には離れ砂が付着する。口縁部は少し外反し，口縁端部に面をもつ。内耳や把手はない。瓦質土器だけであるが，焼成不良のものについては部分的に土師質の部分もみられる。

空港跡地遺跡I地区においては焙烙1型式は口縁部破片が少量出土しただけで完形品はみられない。柱穴SPi 370では口縁部破片であるが，焙烙1型式（281）が出土した。共伴遺物には，18世紀前半の肥前陶胎染付碗がある。土坑SKi 88でも口縁部破片であるが，焙烙1型式（492）が出土した。その他に，



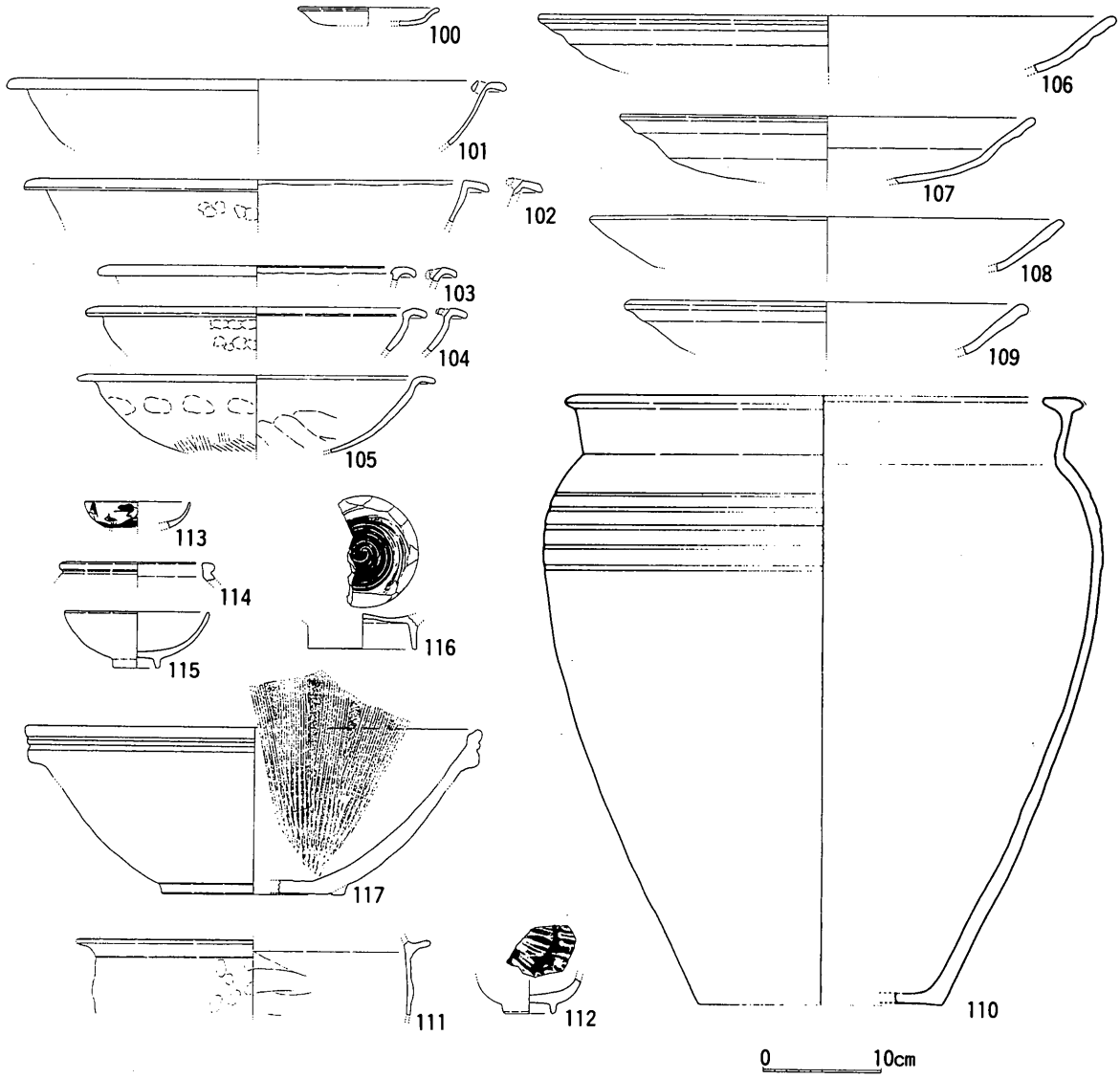
第279図　東山崎・水田遺跡C地区SE 03出土遺物（1/6）

18世紀前半から中葉の肥前磁器染付猪口，18世紀前半の肥前陶器刷毛目碗，17世紀後半から18世紀初頭の京焼風陶器碗が出土した。土坑SKi 33でも口縁部破片であるが，焙烙1型式(339)が出土した。その他には17世紀後半から18世紀前半の肥前陶器刷毛目片口鉢が出土した。以上のように空港跡地遺跡I地区では焙烙1型式は17世紀後半から18世紀前半の陶磁器と共伴する。

空港跡地遺跡I地区では焙烙1型式は口縁部しか出土していないが，他の地区ではどうであろうか。空港跡地遺跡ではC地区とE地区の報告書しか刊行されておらず，大部分が未整理であるため空港跡地遺跡内の資料は少ない。I地区の北西に位置するE地区では，土坑SKe 25・SKe 35からも焙烙1型式が

出土している。[12] SKe 25では肥前陶器刷毛目鉢，備前焼徳利が供伴する。肥前陶器刷毛目鉢は17世紀後半から18世紀前半のものである。備前焼徳利は体部に凹みがみられる。本来人形が貼り付けられていたものであるが，剝がれ落ちたのであろう。備前焼徳利の詳細な生産年代は不明であるが，18世紀以降のものと考えられる。SKe 35では焙烙1型式が5点，焙烙2型式が1点のほか瓦質土器羽釜・京焼系色絵陶器碗が出土した。京焼系色絵陶器碗は笹文を描く。18世紀から幕末までのものと思われる。

その他の遺跡では焙烙1型式は高松市東山崎・水田遺跡や，善通寺市永井遺跡で出土した。高松市東山崎・水田遺跡は空港跡地遺跡Ⅰ地区の北東1.5kmに位置する。井戸C地区SE 03からは焙烙1型式が6点出土した（第279図）。[13] その他，土師質土器小皿・羽釜・茶釜，肥前陶器灰釉皿，肥前陶器鉄釉鉢，肥前陶器刷毛目皿，京焼風陶器碗，備前焼擂鉢，備前焼壺が出土した。肥前陶器灰釉皿は胎土目積み，砂目積みの両方がみられる。前者は1580～1610年，後者は1600～1630年のものである。肥前陶器鉄釉鉢は17世紀代，肥前陶器刷毛目皿は内面に蛇の目釉剝ぎが施されており，18世紀のものである。京焼風陶器碗は17世紀後半から18世紀前半，備前焼擂鉢は第Ⅲ期で，13世紀末から14世紀中葉のものと第Ⅵ期，17世紀中葉から18世紀頃のものがみられる。供伴する陶磁器は最も新しいもので，17世紀後半から18世紀



第280図　永井遺跡 SK 060出土遺物（1/6）

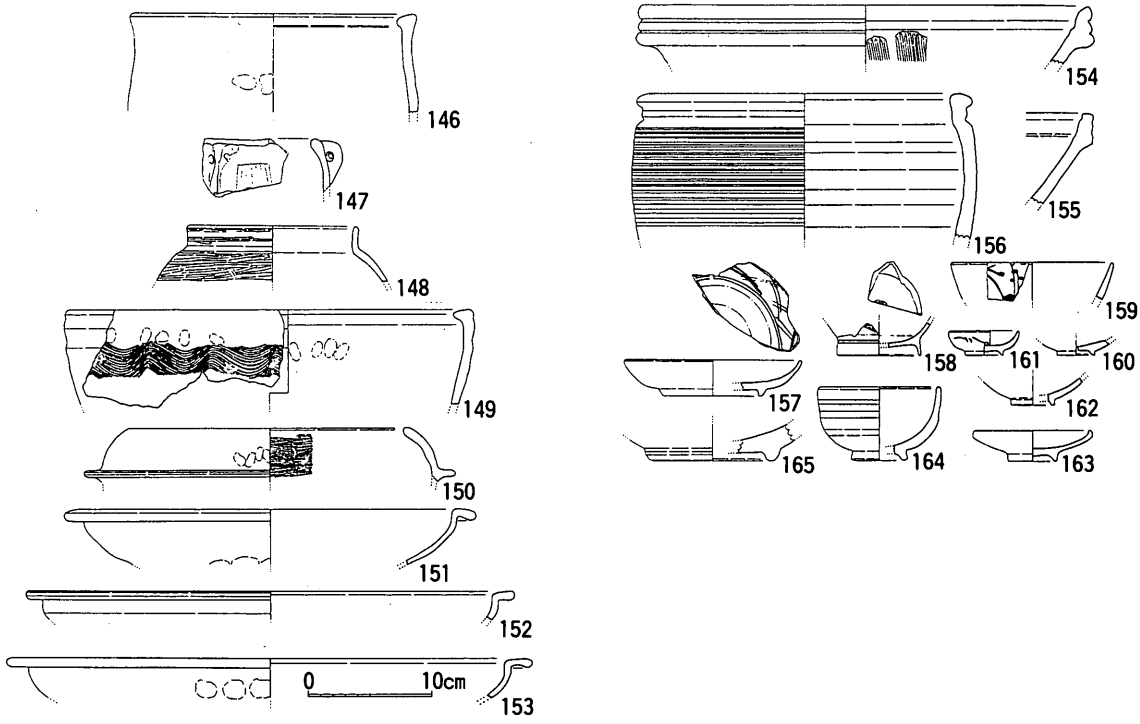
前半頃のものである。

永井遺跡 SK 060からは焙烙 1 型式と肥前陶器刷毛目碗・肥前陶器刷毛目鉢・備前焼擂鉢が出土した。肥前陶器刷毛目碗・鉢は17世紀後半から18世紀前半のもので，備前焼擂鉢も口縁部の形態から17世紀末から18世紀前半のものと考えられる。

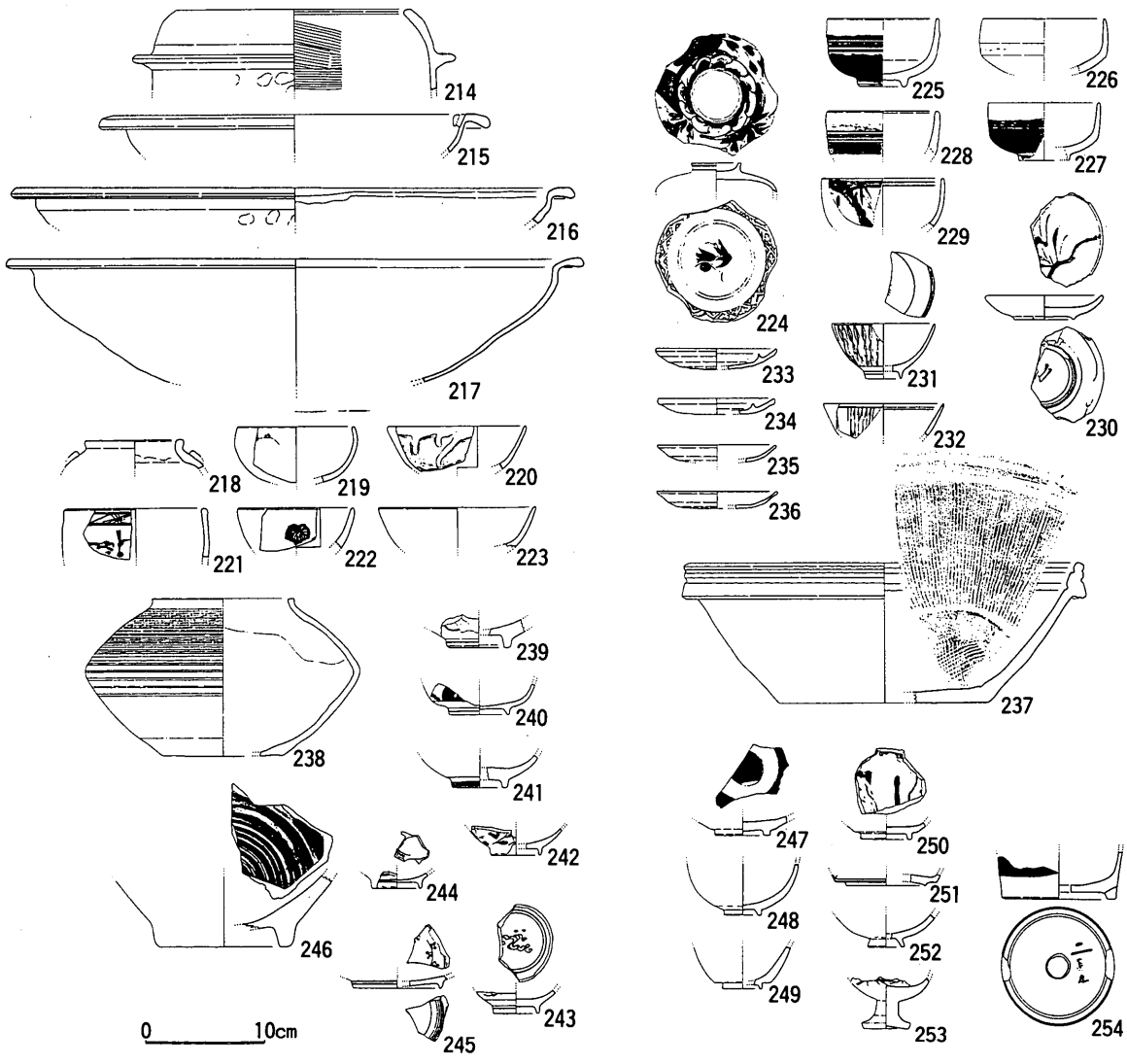
陶磁器は割れにくいという性質から，伝世して使用されることが多い。したがって，比較的壊れ易い焙烙と同時に廃棄されたものでも，陶磁器の生産年代は遡ることが多いと考えられる。だが，各遺構から出土した陶磁器の中で最も新しい陶磁器の生産年代は18世紀前半頃に集中することから，焙烙 1 型式はこの頃生産されたものと推察されよう。

焙烙 2 型式は空港跡地遺跡 I 地区では土坑 SKi 70・SKi 71・SKi 90，井戸 SEi 04・SEi 07において出土した。土坑 SKi 70からは土師質土器羽釜・瓦質土器羽釜が出土しているが，陶磁器は出土していない。SKi 71においては焙烙 2 型式の口縁部破片，瓦質土器羽釜や肥前陶器刷毛目皿が出土した。肥前陶器刷毛目皿は18世紀代のものである。SKi 90では19世紀代と考えられる行平鍋の蓋と共伴する。SEi 04からも 2 型式の焙烙，肥前陶胎染付碗・肥前系磁器染付碗・瀬戸美濃陶器灰釉皿・信楽陶器碗・備前焼灯明受皿・堺または明石擂鉢・陶器擂鉢等が出土した。肥前系磁器染付碗には明治・大正時代の型紙摺や明らかに明治時代以降のものと考えられる陶器擂鉢もみられる。また，肥前系磁器染付碗には広東形を呈するものと端反り形の 2 種類がみられる。前者は19世紀前半，後者は1820～1860年のものである。信楽陶器碗も端反り形で18世紀末から19世紀代，堺または明石擂鉢は白神分類II型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものである。出土遺物の一部には明治・大正時代のものもみられるが，陶磁器は19世紀前半のものが多い。SEi 07では焙烙 2 型式と肥前系磁器染付碗が出土した。その他，土師質土器蓋や瓦質土器もみられる。肥前系磁器染付碗は広東形を呈し，19世紀前半のものである。

他遺跡では善通寺市永井遺跡で焙烙 2 型式が出土している。永井遺跡土坑 SK 096では焙烙 2 型式と



第281図　永井遺跡 SK 096出土遺物（1/6）

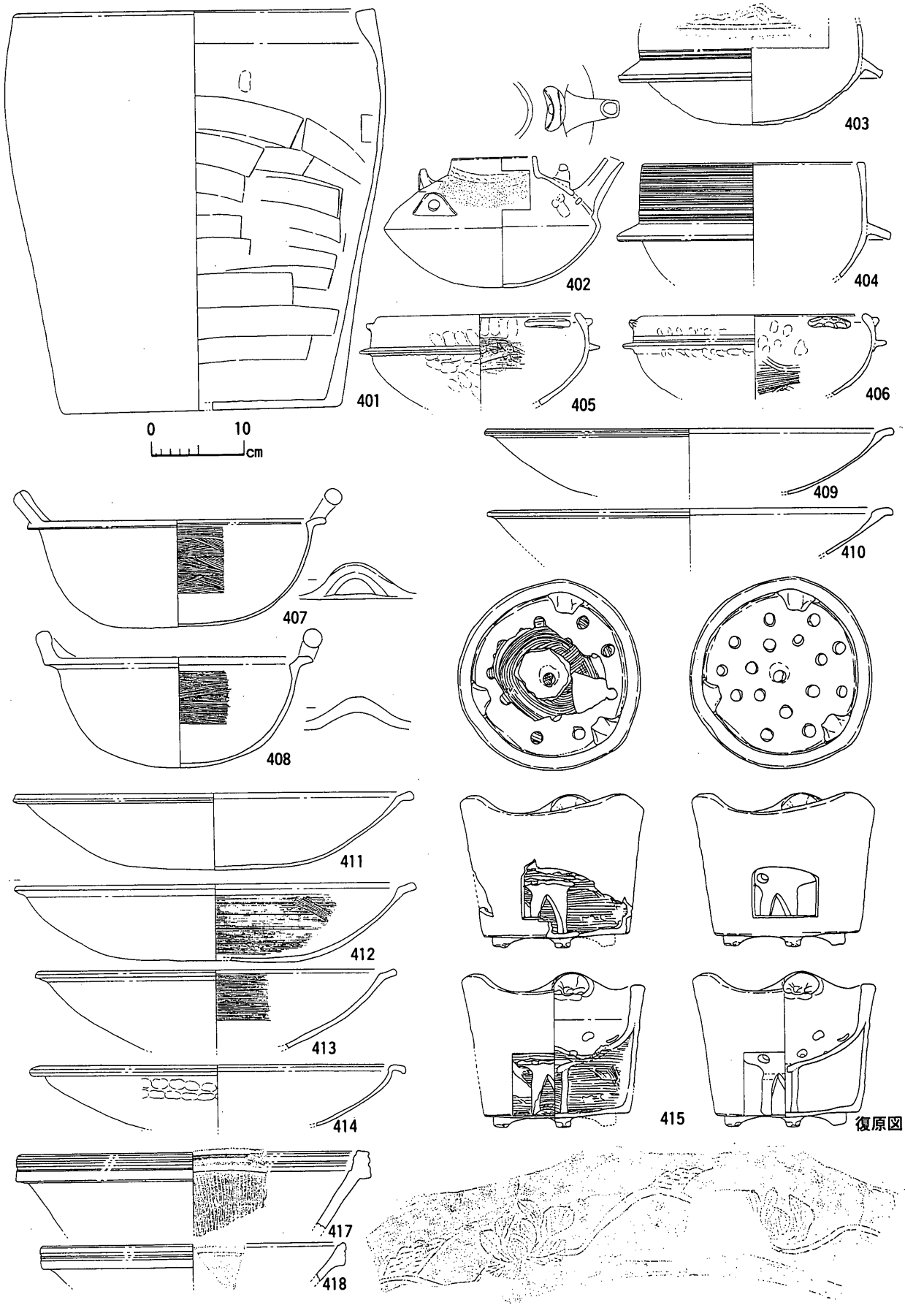


第282図　永井遺跡 SK 105出土遺物（1/6）

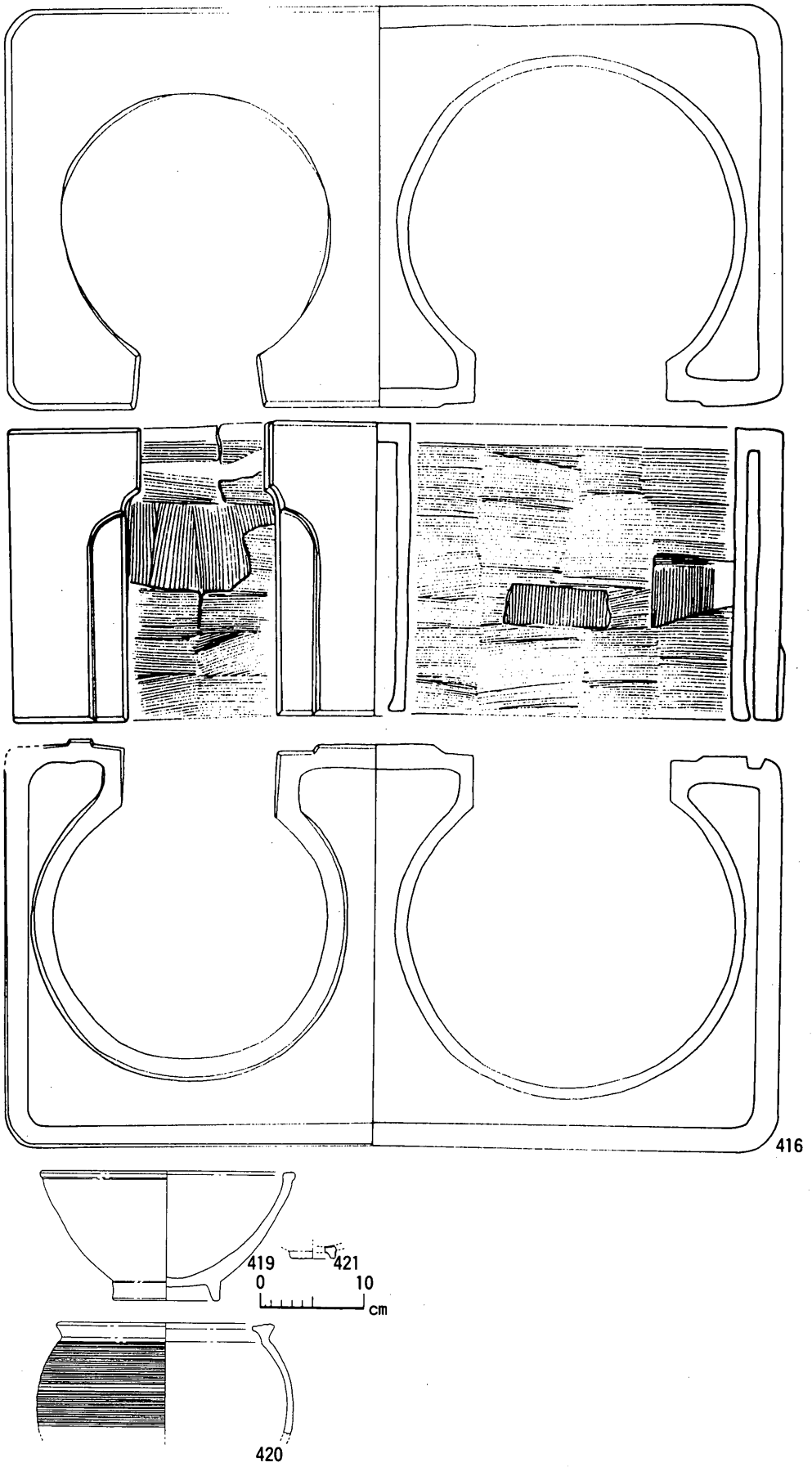
備前焼擂鉢・備前焼水屋甕・堺擂鉢・肥前磁器染付皿・肥前系磁器染付碗・肥前系磁器染付猪口・瀬戸美濃陶器腰錆碗・瀬戸美濃陶器蓋などが出土した。[14] 肥前磁器染付皿は内面に蛇の目釉剝ぎがみられ，斜め格子がみられる。18世紀代のものである。肥前系磁器染付碗は広東形で，19世紀前半，肥前系磁器染付猪口は18世紀後半，瀬戸美濃腰錆碗は18世紀後半から末のものである。共伴する陶磁器の年代は18世紀から19世紀前半である。

永井遺跡 SK 105では2型式の焙烙と肥前陶器青緑釉皿・肥前陶胎染付碗・肥前磁器染付碗・肥前系磁器染付蓋・肥前陶器刷毛目鉢・瀬戸美濃陶器腰錆碗・瀬戸美濃有耳壺・堺擂鉢が出土した。肥前陶器青緑釉皿・肥前陶器刷毛目鉢は17世紀後半から18世紀前半，肥前陶胎染付碗は18世紀前半のものである。肥前磁器染付碗はコンニャク判や一重網目文が施されるものがある。前者は18世紀代，後者は17世紀後半から18世紀前半のものであろう。堺擂鉢は口縁部の形態から白神分類II型式のもので，18世紀後半から19世紀初頭のものである。瀬戸美濃陶器腰錆碗は体部の形態から18世紀後半のものと，19世紀前半のものがある。瀬戸美濃有耳壺は19世紀前半のものである。陶磁器については時期幅があるが，最も新しいものは19世紀前半である。

以上のように焙烙2型式と共伴する陶磁器の中で最も新しいものは19世紀前半のものである。焙烙1



第283図　薬王寺遺跡 SE 04出土遺物Ⅰ（1/6）



第284図　薬王寺遺跡 SE 04出土遺物 2 （1/6）

型式は18世紀前半と推察されることから，焙烙2型式は18世紀後半から19世紀前半頃に生産されたものと考えられよう。

焙烙3型式は土坑SKi 40・SKi 65・SKi 85・SKi 86・SKi 91等，空港跡地遺跡Ⅰ地区でも比較的多く出土している。SKi 91からは焙烙3型式と肥前系磁器染付碗・磁器色絵碗・陶器透明釉蓋が出土した。肥前系磁器染付碗は端反り形を呈することから1820～1860年のものと考えられる。磁器色絵碗は産地は不明であるが，19世紀後半のものであろう。SKi 40では焙烙3型式と肥前系磁器染付碗・肥前系磁器染付鉢・瀬戸美濃陶器染付碗などが出土した。肥前系磁器染付碗は端反りであることから1820～1860年のもので，肥前系磁器染付鉢は型紙摺であることから，明治・大正時代のものである。瀬戸美濃陶器染付碗は広東形を呈し，19世紀前半から中葉のものである。また，明治時代の瀬戸美濃製品の可能性が高い磁器染付碗もみられる。共伴する陶磁器はいずれも19世紀代のものであるが，江戸時代には遡れないものもみられる。土坑SKi 65では焙烙2・3型式と肥前系磁器染付碗・陶器透明釉蓋等が出土した。肥前系磁器染付碗は型紙摺であることから，明治・大正時代のものである。土坑SKi 85では焙烙3型式と型紙摺の肥前系磁器染付碗・型成形の羽釜・土師質土器甕が出土した。肥前系磁器染付碗は型紙摺であることから，明治・大正時代のものである。SKi 86では焙烙3型式と瀬戸美濃陶器腰錆碗・大谷焼陶器甕が出土した。瀬戸美濃陶器腰錆碗は19世紀前半のものである。

空港跡地遺跡Ⅰ地区では焙烙3型式は19世紀以降，特に明治時代以降の遺物と共伴する例が多い。空港跡地遺跡の西方7～8kmに位置する薬王寺遺跡[15]でも江戸時代以降の遺構・遺物が検出されている。井戸SE 04からは焙烙3型式が5点出土した。いずれも瓦質である。その他，型成形の瓦質土器羽釜，型成形の土師質土器七厘，瓦質土器置き竈，焙烙2型式1点，堺擂鉢，備前焼擂鉢，瀬戸美濃陶器腰錆碗が出土した。堺擂鉢は白神分類のⅡ型式で，18世紀後半から19世紀初頭のものである。備前焼擂鉢は口縁部の形態から19世紀代，瀬戸美濃陶器腰錆碗も高台部の形態から19世紀初頭から幕末のものと考えられる。瓦質土器置き竈は江戸時代の遺跡での出土例はないことから，明治時代以降のものであろう。また，焙烙2型式も出土しているが，18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる堺擂鉢等，古相の遺物も出土していることから，これらと同時期のものと考えられる。焙烙3型式はおそらくSE 04でも新しい時期の遺物に伴うもので，明治時代の遺物とともに廃棄されたものと推察される。

これらの資料から，焙烙3型式は明治時代の遺物の共伴例が多いことがうかがわれるので，焙烙3型式は明治時代に生産されたものと考えられる。以上から，焙烙1型式は18世紀前半頃，焙烙2型式は18世紀後半から19世紀前半頃，焙烙3型式は明治時代以降に生産されたものと考えられよう。

〔羽釜〕

羽釜については粘土紐成形のものと型成形のものがある。粘土紐成形のものは一部土師質のものもみられるが，大部分は瓦質である。型成形のものはすべて瓦質である。形態で分類すると羽釜は大きく以下のように分類される。

羽釜1a型式　粘土紐成形である。羽釜の把手は縦方向に付く。

羽釜1b型式　粘土紐成形である。羽釜の把手は横方向に付く。

羽釜2型式　　型成形である。瓦質土器のみである。

羽釜1a型式は前述の東山崎・水田遺跡井戸C地区SE 03で出土した。前述のように供伴する遺物は焙烙1型式と17世紀後半から18世紀前半の陶磁器が多い。

羽釜2型式は空港跡地遺跡Ⅰ地区土坑SKi 68・SKi 83・SKi 85で出土した。SKi 68では羽釜3型式の

ほかに肥前系磁器染付鉢・土師質土器甕が出土した。肥前系磁器染付鉢は19世紀初頭から幕末のものである。SKi 83でも羽釜2型式と肥前系磁器染付蓋・肥前系磁器染付碗・肥前陶器灰釉皿・陶器灯明受皿・土師質土器大甕が出土した。肥前系磁器染付蓋は19世紀前半のものである。肥前系磁器染付碗は広東形・端反り・型紙摺があり，19世紀前半から明治・大正時代のものである。肥前陶器灰釉皿は17世紀前半のものである。SKi 85からは羽釜2型式と焙烙3型式・土師質土器甕・肥前系磁器染付碗が出土した。肥前系磁器染付碗は明治・大正時代のものである。

前述の薬王寺遺跡井戸SE 04からも羽釜2型式が出土した。前述のように明治時代の遺物とともに廃棄されたものと考えられよう。

前述のように型成形である焙烙3型式は明治時代以降のものであると考えられるが，共伴する陶磁器の年代から型成形の羽釜2型式も，明治時代以降のものであることがうかがわれる。明治時代になって焙烙と同時に羽釜も型成形を行うようになったものと推察される。

〔土師質土器風呂釜〕

空港跡地遺跡I地区では井戸SEi 01・SEi 04，土坑SKi 65，溝SDi 41から出土した。底部のあるもの（SEi 04・307，SDi 41・671）と無いもの（SKi 65・420）がみられる。SEi 01・293は体部破片のため底部の有無は不明である。これらと共伴する陶磁器をみるとSEi 01では肥前系磁器染付碗，陶器行平鍋または急須の把手がある。肥前系磁器染付碗は広東形を呈し，19世紀前半のものである。陶器把手も19世紀代のものであろう。SEi 04では端反り形・広東形・型紙摺の肥前系磁器染付碗等が出土した。これらの碗は19世紀から明治・大正時代のものである。SKi 65では陶器透明釉蓋，明治・大正時代の型紙摺の肥前系磁器染付碗が出土した。SDi 41からは様々な時代の遺物が出土しているため，時代は特定できない。

丸亀市郡家一里屋遺跡の土坑II区SK 62からも底部のある風呂釜が出土しているが，共伴遺物はみられない。[16] また，善通寺市永井遺跡土坑SK 109でも底部のある風呂釜が出土している。[14] その他，型成形の瓦質羽釜（羽釜2型式），粘土紐成形の羽釜（羽釜1ａあるいは1ｂ型式），焙烙2型式，肥前陶胎染付碗などが出土した。型成形の羽釜2型式が出土していることから，廃絶年代は明治時代以降と推察される。共伴する遺物から，風呂釜はいずれも明治時代以降に廃絶したことがうかがえる。江戸時代の遺跡からの出土例も少ないことから，主に明治時代以降に生産されたものであろう。

なお，空港跡地遺跡I地区出土の風呂釜の胎土はいずれも胎土1ａ類であることから，御厩で生産されたものであろう。

〔火鉢・火消し壺・焜炉・五徳・瓦灯傘〕

火鉢と火消し壺については深めのもので，蓋が付くものを火消し壺，浅めのものを火鉢と分類したが，完存するものは少なかった。また，火力を調整するための窓が付いているものを焜炉とした。火鉢はSPi 376（288），火鉢または火消し壺のどちらか不明なものはSDi 41（670）・SDi 43（757）・SXi 05（805）がある。SPi 376からは他に出土遺物がないため，共伴遺物からの年代推定は不可能である。遺構埋土を比較するとSPi 376の埋土が黄色シルトブロック混じり灰色砂質シルトであるのに対し，掘立柱建物の柱穴埋土はいずれも淡灰色砂質シルトで，掘立柱建物の埋土とは異なる。おそらくSPi 376は掘立柱建物よりもかなり新しい時期のものと思われる。

火鉢または火消し壺が出土したSDi 43からは19世紀から明治・大正時代の端反りや型紙摺の肥前系磁器染付碗，18世紀後半から19世紀初頭の堺擂鉢，2型式の焙烙などが出土した。SXi 05からは17世紀末から18世紀前半の肥前陶器刷毛目鉢や，19世紀から明治・大正時代の広東形や型紙摺の肥前系磁器染付

碗，18世紀後半から19世紀代の丹波陶器甕，3型式の焙烙が出土した。SDi 41は様々な時期の遺物が出土しているため，時期の特定は不可能である。これらの共伴遺物から，火鉢または火消し壺（757・805）は明治時代以降の遺物である可能性が高い。

焜炉（666・667）は昭和19年に廃絶したSDi 41から出土した。SDi 41からは様々な時代の遺物が出土しているため，時期は特定できない。

瓦灯傘（736）は灯明皿の上にかぶせて使用するもので，風で火が消えるのをふせぐものである。736は昭和19年に廃絶したSDi 42から出土しており，出土遺物も17世紀から明治・大正時代と幅広いため，共伴遺物から時期を特定することは不可能である。

空港跡地遺跡Ⅰ地区で出土した火鉢・火消し壺は明治時代以降のものが多い。焜炉や瓦灯傘は時期不明である。一方，東京都内では江戸の遺跡の調査が多数行われているが，火鉢や火消し壺は17世紀からごく一般的にみられる。[17] 江戸のような都市では火鉢や火消し壺は早くから生活に取り入れられており，空港跡地遺跡のような一般農民集落では普及が遅れていたのではなかろうか。

〔源内焼〕

空港跡地遺跡SDi 41からは源内焼陶器皿（574）が出土した。源内焼は交趾様式で，内面に型による文様を施し，三彩を用いる。江戸時代の本草・物産学者平賀源内は現在の香川県大川郡志度町の出身である。源内は宝暦2（1752）年長崎に遊学したが，その後讃岐に帰り，宝暦5（1755）年源内焼を開始している。源内焼の陶工は松山（赤松松山）・源吾・舜民（脇田舜民）・民山で，松山の記録によると源内の指導を受けて源内焼を開始したらしい。[18]

574はSDi 41から出土していることから，共伴遺物から時期は特定できないが，釉薬も薄く，陶印もみられないことから，源内焼の初期のもので，18世紀代のものと考えられよう。[19]

③　土師質土器・瓦質土器の生産地について

胎土1a土器・胎土1b類土器は前述のように御厩で生産された御厩焼であると推定した。Ⅰ地区で出土した土師質土器や瓦質土器は焙烙・羽釜・土瓶・蓋・火鉢・瓦灯傘・五徳・大甕・甕・風呂釜・焜炉・井筒・土錘と様々な器種がみられた。一方，胎土をみるとその大部分が胎土1a類土器・胎土1b類土器であることから，大半の土器が御厩で生産されたものと推定される。また，様々な器種がみられたことから，御厩においては土師質土器・瓦質土器の多器種生産が行われたことがうかがわれる。

焙烙の胎土を観察すると，瓦質土器の一部には胎土分類不明なものもみられるが，焙烙1～3型式は胎土1a・1b類が大多数を占める。前述の東山崎・水田遺跡出土井戸C地区SE 03出土77は焙烙1型式であるが，肉眼観察では本報告書の分類による胎土1a類土器である。奥田氏の観察によると77の砂礫は閃緑岩質岩起源の砂礫が分布する地域のもので，津内山の土を使用した可能性が高い。[20] 前述のように，陶磁器との共伴関係から焙烙1型式は18世紀前半に生産されたものと推察される。空港跡地遺跡Ⅰ地区出土の1型式の焙烙も胎土1a・胎土1b類が大半を占めており，これらの土器も御厩付近の津内山の土を使用していると考えられることから，18世紀前半には御厩で土器生産を行っていた可能性が強い。

ところで，伝承によると御厩焼は木田郡元山村に享保3（1718）年頃生まれた彦四郎（1797年没）が始めたものであるらしい。彦四郎は瀬戸で修行したのち，御厩で製陶を開始した。何歳頃から御厩で製陶を始めたのかは全く不明であるが，彦四郎の年齢から考えると18世紀前半には既に御厩で土器生産を

行っていた可能性が高い。

なお，佐藤氏は前述の論文で，小比賀家に保存されている陶祖彦四郎が製作したと伝承される手水鉢は外型成形であり，彦四郎よりも後出する時期のものであると指摘している。[21] だが，筆者の実見では外型成形ではなく，粘土紐成形によるものと観察された。また，胎土は茶褐色を呈する胎土１ａ類土器で，津内山の土であることは間違いない。したがって，この手水鉢は江戸時代に製作されたもので，彦四郎が生存中の18世紀代のものと考えても差し支えないであろう。

空港跡地遺跡Ｉ地区で出土した土師質土器・瓦質土器の大部分はその胎土の特徴から，18世紀前半以降生産が始まった御厩焼であると推察した。今後とも江戸時代の土師質土器・瓦質土器を対象に，有効な方法による胎土分析を行って，以上の推察を検証していく必要があろう。

④　江戸時代土器・陶磁器の器種組成

空港跡地遺跡Ｉ地区からは江戸時代の土器・陶磁器が多量に出土した。これらはいずれも一般農民が使用していたもので，集落内に廃棄された遺物であると考えられるが，これらの遺物を17世紀から18世紀前半，18世紀後半から幕末の２時期に分け，各時期の土器・陶磁器の器種組成についての検討を行い，空港跡地遺跡での使用傾向や土器・陶磁器の流通について検討を行う。

遺物の数量化については，報告書に掲載した土器・陶磁器をそれぞれ１点として，計算した。遺物の時期については生産地での年代観を基準とした。なお，18世紀代と比定された遺物に関しては両時期に0.5点ずつ加えた。年代観の不確定な土師質土器・瓦質土器に関しては最も新しい陶磁器の年代と同時期のものと考えた。明治時代以降に廃絶した遺構からの出土遺物でも，江戸時代に生産された陶磁器に関しては数量化を行った。特定遺構に特定種類の遺物を廃棄した可能性も考えられるため，ここでは包含層を含むＩ地区全体から出土した土器・陶磁器と，土坑から出土した土器・陶磁器の両資料を比較した。

〔土器・陶磁器の種類〕

土器・陶磁器の種類を比較すると，Ｉ地区全体の資料で17世紀から18世紀前半においては土師質土器・瓦質土器が12%，陶器が70%，磁器が18%，18世紀後半から幕末においては16%，54%，30%となる。土坑資料では17世紀から18世紀前半においてはそれぞれ16%，67%，17%，18世紀後半から幕末においては27%，41%，32%となり，Ｉ地区全体の資料と土坑資料において大きな差はみられない。17世紀から18世紀前半と18世紀後半から幕末の資料を比べると，後者の時期には，土器の割合が僅かに増加し，磁器の割合は倍近く増加するが，陶器の割合は減少する。

陶器の減少と磁器の増加については陶磁器の主要生産地である肥前においても同様の傾向を示す。18世紀後半以降は陶器の碗・皿類はほとんど生産されなくなり，陶器の生産は壺・甕類に限られるようになる。長崎県波佐見諸窯でもこの頃から，くらわんか手と呼ぶ国内向けの日常雑器碗を多量生産した。一方，瀬戸美濃においても1800年頃から磁器生産を開始し，砥部などの地方窯でも磁器生産を行った。このように生産地や生産量が増加することに呼応して，磁器が入手し易くなり，空港跡地遺跡においても磁器の使用が増加したものと思われる。また，土器の増加は御厩において土器生産が開始されたことを反映しているのであろう。

なお，18世紀後半から幕末においては前代ではみられなかった陶器火鉢・土瓶・急須，磁器紅猪口などの器種が出現する。種類の増加も生産地での状況と呼応する。土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器のいずれにおいても用途に応じた特定器種が新たに出現したことにより器種が豊富になり，地方の農村で

土器・陶磁器の種類		17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
		Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
土師質土器 瓦質土器	羽釜	3	3%	3	7%	6	2%	6	7%
	焙烙・鍋	9	9%	4	9%	19	6%	7	8%
	土瓶					1	1%未満	1	1%
	蓋					3	1%	1	1%
	大甕・甕					12	4%	8	9%
	火鉢・焜炉・十能					3	1%		
	その他					2	1%		
	不明					2	1%	1	1%
陶　器	皿	16	16%	7	15%	14	4%	3	4%
	小碗	0.5	1%			23.5	7%	11	14%
	中碗	27	27%	15	33%	9	3%	3	3%
	小杯					1	1%未満		
	蓋					6	2%	1	1%
	鉢	13	13%	5	11%	23	7%	3	3%
	徳利	1	1%			13	4%	1	1%
	擂鉢	8.5	9%	2	4%	32.5	10%	4	5%
	壺・甕	3	3%	2	4%	26	8%	3	3%
	灯明受皿・受台					19	6%	6	7%
	火入れ					2	1%未満		
	土瓶					3	1%		
	鍋または急須					5	2%		
	火鉢					1	1%未満		
磁　器	皿	6.5	7%	1.5	3%	19.5	6%	3.5	4%
	小碗					4	1%	2	2%
	中碗	3.5	4%	3.5	8%	53.5	17%	14.5	18%
	小・中碗不明					4	1%	1	1%
	小杯	0.5	1%			3.5	1%		
	蓋					3	1%	1	1%
	鉢・段重	3	3%	1	2%	7	2%	1	1%
	徳利	2	2%	1	2%				
	瓶	1	1%			1	1%未満	1	1%
	火入れ	0.5	1%未満	0.5	1%	0.5	1%未満	0.5	1%
	猪口	0.5	1%未満	0.5	1%	2.5	1%未満	2.5	3%
	紅猪口					3	1%		
	神酒徳利					1	1%未満		
	仏飯器	0.5	1%未満			0.5	1%未満		
	仏花瓶					1	1%未満		
合　計		99点		46点		330点		86点	

第７表　土器・陶磁器の種類

ある空港跡地遺跡でもこれらを使用するようになったのであろう。

器種が豊富になったことに伴って，従来からみられた皿・碗の割合に変化はみられるのであろうか。第11表は陶磁器だけを取り上げて，その種類を表したものである。鉢をＡとＢに分類しているが，鉢Ａは向付等の飲食具，鉢Ｂはこね鉢等の調理具である。17世紀から18世紀前半においては皿・碗はⅠ地区全体の資料では61%，土坑資料では70%，18世紀後半から幕末においてはⅠ地区全体の資料で45%，土坑資料では61%といずれの資料でも減少する。また，皿だけについてみると17世紀から18世紀前半においてはⅠ地区全体の資料で26%，土坑資料では22%，18世紀後半から幕末においてはⅠ地区全体の資料で12%，土坑資料で10%と約半分に減少する。小碗・中碗を含めた碗全体でみると17世紀から18世紀前半においてはⅠ地区全体の資料では35%，土坑資料では48%，18世紀後半から幕末においてはⅠ地区全体の資料で33%，土坑資料では51%とほとんど変わりはないことから，飲食具の中でも皿だけが大幅に減少していることがうかがわれる。小碗・中碗についての分類や小碗・中碗の比率については後述する。

産　　地	17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
	Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
肥前	61.5	61%	26.5	58%	29.5	9%	10.5	12%
京焼風陶器	13	13%	9	20%				
肥前系	0.5	1%	0.5	1%	55.5	17%	13.5	16%
瀬戸美濃					55	17%	15	17%
備前	8.5	9%	2	4%	26.5	8%	10	12%
堺または明石	1	1%			26	8%	1	1%
丹波・三田					3	1%		
京焼系					2	1%	1	1%
信楽	0.5	1%			11.5	3%	1	1%
松尾・中国	1	1%			2	1%		
大谷					18	5%	3	3%
富田・源内					14	4%	2	2%
在地土器	12	12%	7	15%	48	15%	24	29%
不明	1	1%	1	2%	39	11%	5	6%
合　　計	99点		46点		330点		86点	

第８表　土器・陶磁器の産地

皿の種類		17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
		Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
陶器	肥前	14.5	65%	5.5	64%	0.5	2%	0.5	8%
	肥前系	0.5	2%	0.5	6%	0.5	2%	0.5	8%
	瀬戸美濃					10	30%	2	31%
	京焼系					1	3%		
	源内					1	3%		
	松尾					1	3%		
	産地不明	1	4%	1	12%				
磁器	肥前	5.5	25%	1.5	18%	11.5	33%	2.5	38%
	肥前系					5	15%	1	15%
	中国	1	4%			1	3%		
	三田					1	3%		
	産地不明					1	3%		
合　　計		22.5点		8.5点		33.5点		6.5点	

第９表　皿の種類

碗の種類			17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
			Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
陶器	中碗	京焼風陶器	13	42%	9	49%				
		肥前	14	45%	6	32%				
		瀬戸美濃					9	10%	3	10%
	小碗	瀬戸美濃					15	16%	8	26%
		大谷					1	1%		
		京焼系					1	1%	1	3%
		富田					2	2%	2	6%
		信楽	0.5	2%			4.5	5%		
磁器	中碗	肥前	3.5	11%	3.5	19%	7.5	8%	5.5	17%
		肥前系					39	42%	8	26%
		瀬戸美濃					2	2%		
		産地不明					5	5%	1	3%
	小碗	肥前系					1	1%		
		瀬戸美濃					1	1%		
		産地不明					2	2%	2	6%
	小・中碗不明						4	4%	1	3%
合計			31点		18.5点		94点		31.5点	

第10表　碗の種類

〔土器・陶磁器の産地〕

第8表は土器・陶磁器の産地の表である。この表には京焼風陶器の産地は記載していない。空港跡地遺跡で出土した京焼風陶器はすべて呉器手碗である。[22] 呉器手の京焼風陶器碗は，発掘調査によって佐賀県伊万里市鍋島藩窯等において生産されていることがわかっているが，高知県尾戸窯採集の資料にも佐賀県で生産された京焼風陶器碗と極めて類似する碗が含まれている。このように呉器手の形態の京焼風陶器碗の生産地については佐賀県と高知県の両方が考えられる。そこで，空港跡地遺跡Ⅰ地区出土の京焼風陶器碗の産地を特定するため，白石純氏に胎土の分析を依頼した。分析の結果は前章のとおりである。分析によると，空港跡地遺跡Ⅰ地区出土京焼風陶器碗は肥前よりも尾戸の領域に入るものが多くみられた。だが，白石氏も指摘しているとおり生産地での分析資料が5点ずつと数少ないことから，この分析結果は再検討を要するもので，今後とも分析資料を蓄積する必要があろう。

肥前では呉器手の京焼風陶器碗は17世紀後半から18世紀前半に生産されたものと考えられている。また，尾戸窯は1653年に開窯したことが明らかである。[23] Ⅰ地区で出土した17世紀後半から18世紀前半の土器・陶磁器中，京焼風陶器碗以外の肥前産は刷毛目皿や陶胎染付碗などがみられ，全体の61%とほぼ2/3近くを占めている。一方，尾戸窯で生産された第267図尾2・尾5のような形態・釉薬の碗は空港跡地遺跡では全く出土していない。尾戸窯の製品の中で呉器手の形態の碗だけが各地に流通することも考えられない。また，肥前産の陶磁器がこれほど多量に出土しているのに京焼風陶器碗が全く入らないことは考えにくいことから，本地区で出土した京焼風陶器はすべて肥前産と考えたほうが無難であろう。

なお，肥前系と記載したものは肥前の技術系譜をひく砥部などの地方窯の製品を含んでいる。

器　　種	17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
	I地区資料		土坑資料		I地区資料		土坑資料	
小碗	0.5	1%			27.5	10%	13	21%
中碗	30.5	34%	18.5	48%	62.5	22%	17.5	28%
小・中碗不明					4	1%	1	2%
皿	22.5	26%	8.5	22%	33.5	12%	6.5	10%
蓋					9	3%	2	3%
鉢A（向付等の供膳具）	3	3%	1	3%	6	2%		
小杯	0.5	1%			4.5	1%		
猪口	0.5	1%	0.5	1%	2.5	1%	2.5	4%
徳利	3	3%	1	3%	13	5%	1	2%
瓶	1	1%			1	1%未満	1	2%
壺・甕	3	3%	2	5%	26	9%	3	5%
擂鉢	8.5	10%	2	5%	32.5	12%	4	6%
鉢B（こね鉢等の調理具）	13	15%	5	12%	23	9%	4	6%
土瓶					3	1%		
鍋・急須					5	2%		
火入れ	0.5	1%	0.5	1%	2.5	1%	0.5	1%
灯明受皿・灯明受台					19	7%	6	10%
火鉢					1	1%未満		
段重					1	1%未満		
紅猪口					3	1%		
神酒徳利					1	1%未満		
仏飯器	0.5	1%			0.5	1%未満		
仏花瓶					1	1%未満		
合　　計	87点		39点		282点		62点	

第11表　陶磁器の器種

京焼風陶器碗をすべて肥前産に含めると，17世紀から18世紀前半で肥前産はI地区全体の資料で74%，土坑資料で78%と，ほぼ3/4を占めることになる。この時期には県内で生産された陶磁器は高松藩の御用窯である理兵焼があるが，理兵焼と推定される陶器は空港跡地遺跡からは出土していない。前述のように土師質土器・瓦質土器は高松市御厩町で生産されたものが大部分を占めているが，17世紀から18世紀前半において御厩焼を含む土師質土器・瓦質土器はI地区全体の資料中で12%，土坑出土資料中で15%と肥前産よりもはるかに少ない。土器・瓦質土器は羽釜・焙烙などの調理具ばかりで，人数分の数を必要とする碗・皿などの飲食具はみられないので，出土点数が少なくなることによるのであろう。

また，18世紀後半から幕末においては肥前産はI地区全体の資料で9%，土坑資料で12%，肥前系を含めてもI地区全体の資料で26%，土坑資料で28%と前時期までと比べるとはるかに少ない。この時期において最も多いのは瀬戸美濃製品である。大阪の堺擂鉢，兵庫の明石擂鉢・三田青磁・丹波焼，滋賀

		17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
		Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
陶器	肥前	43.5	64%	18.5	60%	0.5	1%未満	0.5	1%
	京焼風陶器	13	19%	9	29%				
	肥前系	0.5	1%	0.5	2%	0.5	1%未満	0.5	1%
	瀬戸美濃					49	28%	14	40%
	備前	8.5	13%	2	6%	26.5	15%	10	29%
	堺・明石	1	1%			26	15%	1	3%
	丹波					1	1%未満		
	京焼系					2	1%	1	3%
	信楽	0.5	1%			11.5	6%	1	3%
	松尾					1	1%未満		
	大谷					18	10%	3	9%
	富田・源内					14	7%	2	6%
	産地不明	1	1%	1	3%	28	16%	2	5%
合　　計		68点		31点		178点		35点	

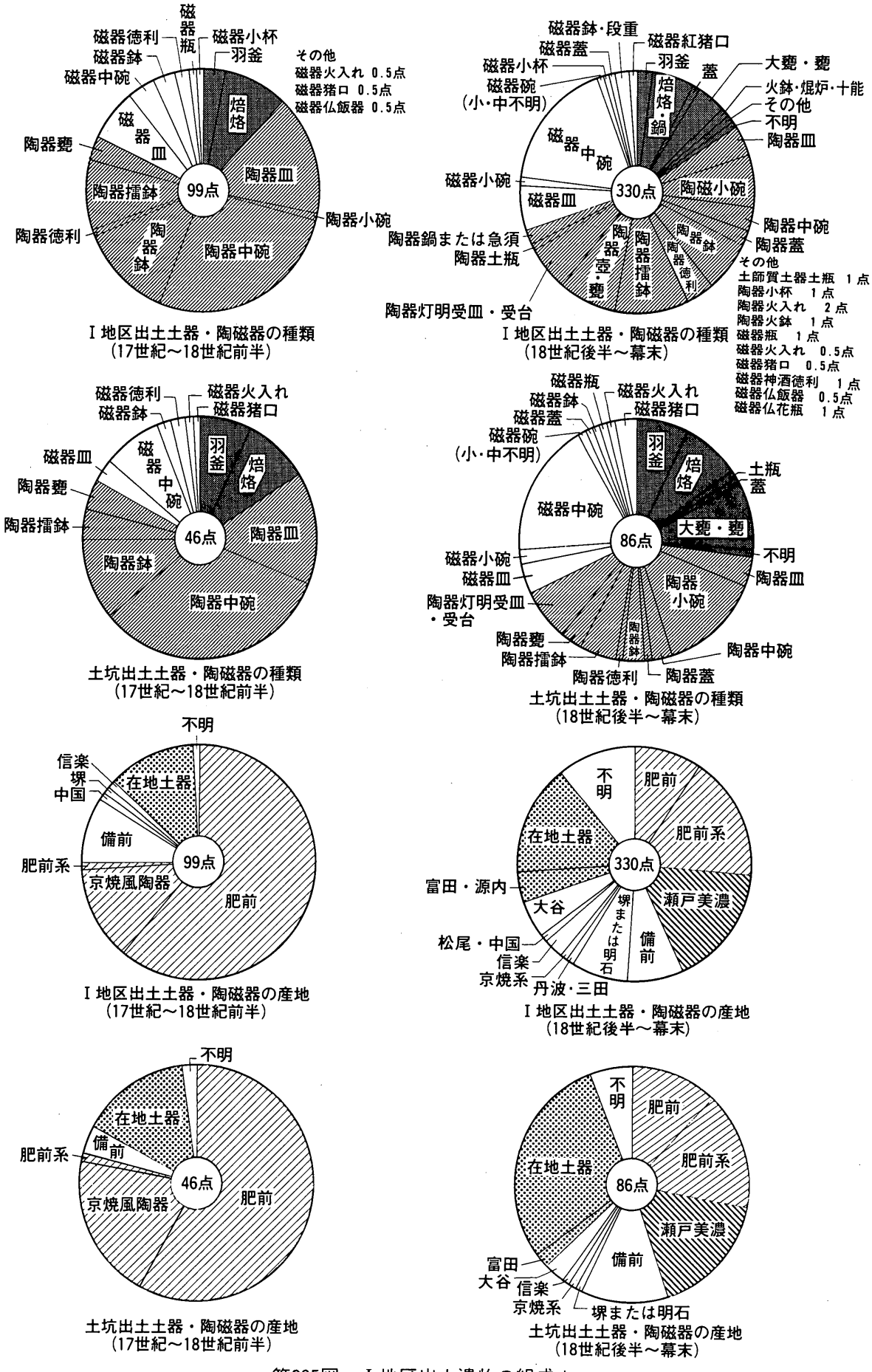
第12表　陶器の産地

		17世紀から18世紀前半				18世紀後半から幕末			
		Ⅰ地区資料		土坑資料		Ⅰ地区資料		土坑資料	
磁器	肥前	17	94%	8	100%	29	28%	10	37%
	肥前系					55	53%	13	48%
	瀬戸美濃					6	6%	1	4%
	中国	1	6%			1	1%		
	三田					2	2%		
	産地不明					11	10%	3	11%
合　　計		18点		8点		104点		27点	

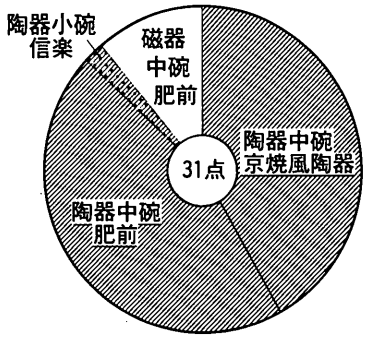
第13表　磁器の産地

の信楽焼，徳島の大谷焼，熊本の松尾焼など県外の製品や県内の富田焼・源内焼など多様な生産地の陶磁器類がみられる。江戸時代後半期になると，各藩は殖産政策に基づき，地方窯を多数誕生させたが，空港跡地遺跡での出土状況もこれによるものであろう。これらの窯はいずれも小地域を供給対象とすると考えられていたが，熊本県の松尾焼など遠隔地の陶器が空港跡地遺跡でみられるのは非常に興味深い。その他，18世紀代の中国清朝からの舶載磁器皿が2点出土した。

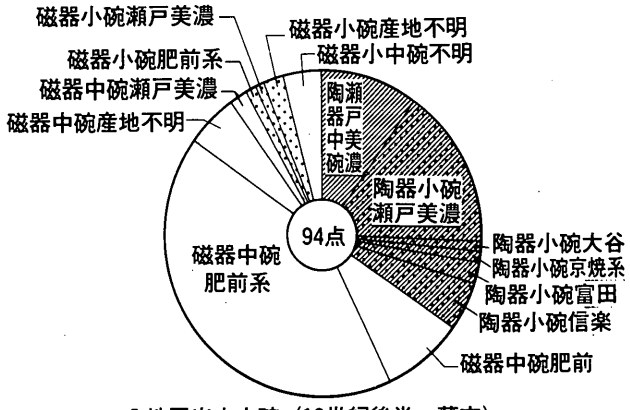
第12・第13表は陶器・磁器の産地を表す。陶器・磁器別で産地をみると，陶器においては17世紀から18世紀前半においては京焼風陶器を含めた肥前産がⅠ地区全体の資料で83%，土坑資料で89%と大半を占めるが，18世紀後半から幕末になると肥前は1%未満と少量になる。一方，瀬戸美濃がⅠ地区全体の資料で28%，土坑資料で40%と最も多く，備前，堺・明石，大谷，富田・源内，信楽の順となる。



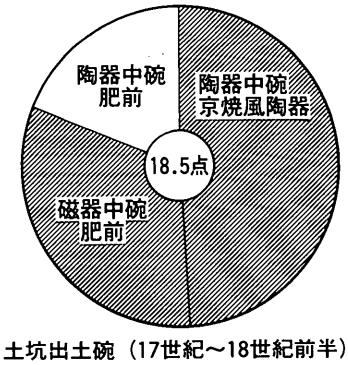
第285図　Ⅰ地区出土遺物の組成 1



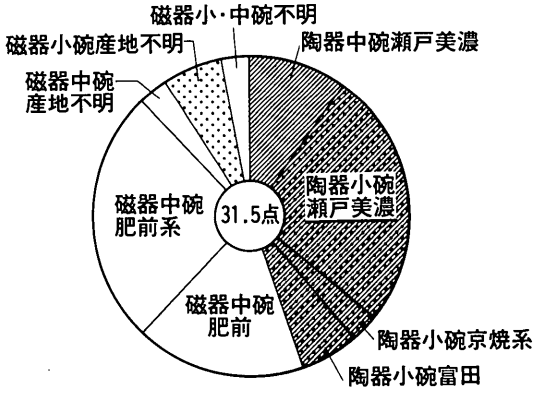
Ⅰ地区出土碗（17世紀～18世紀前半）



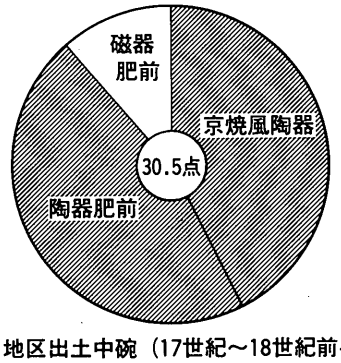
Ⅰ地区出土土碗（18世紀後半～幕末）



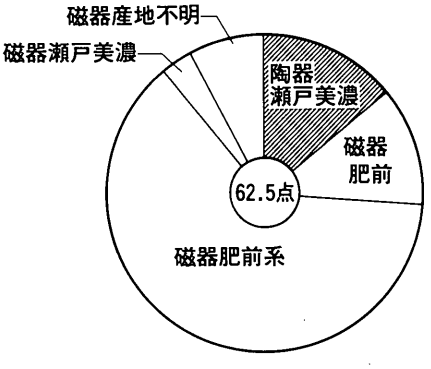
土坑出土碗（17世紀～18世紀前半）



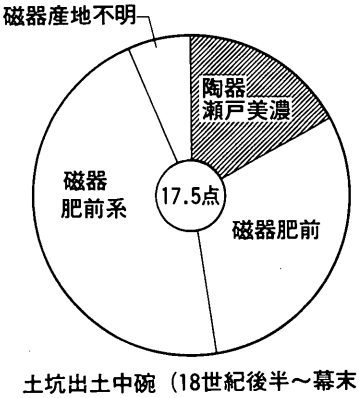
土坑出土碗（18世紀後半～幕末）



Ⅰ地区出土中碗（17世紀～18世紀前半）

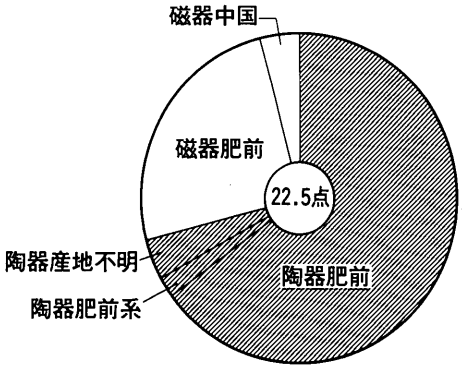


Ⅰ地区出土中碗（18世紀後半～幕末）

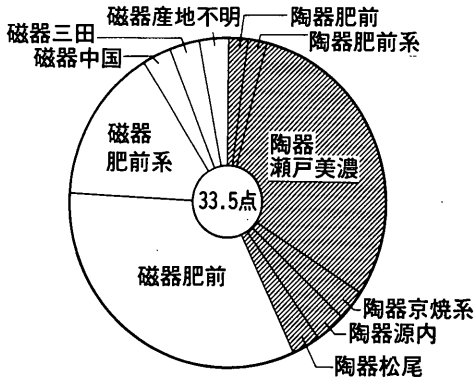


土坑出土中碗（18世紀後半～幕末）

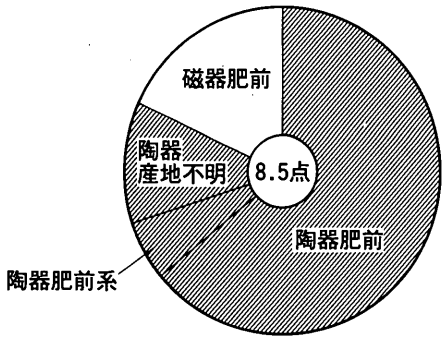
第286図　Ⅰ地区出土遺物の組成２



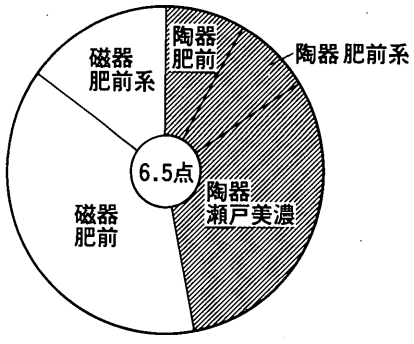
Ⅰ地区出土皿（17世紀～18世紀前半）



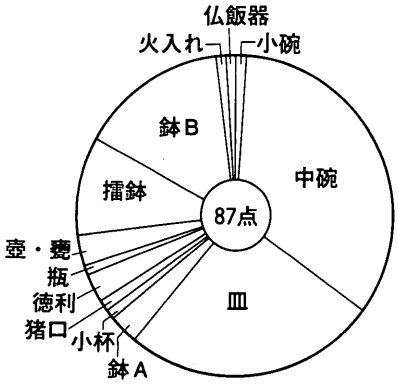
Ⅰ地区出土皿（18世紀後半～幕末）



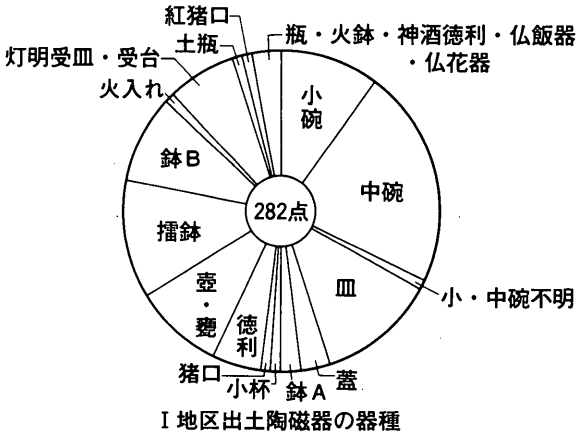
土坑出土皿（17世紀～18世紀前半）



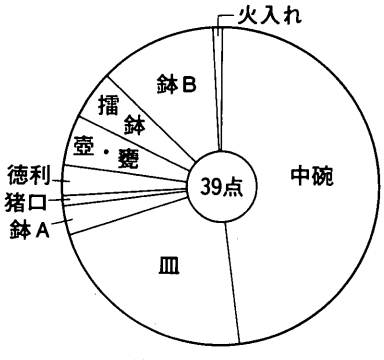
土坑出土皿（18世紀後半～幕末）



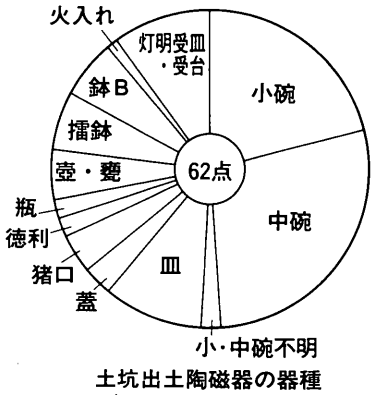
Ⅰ地区出土陶磁器の器種
（17世紀～18世紀前半）



Ⅰ地区出土陶磁器の器種
（18世紀後半～幕末）

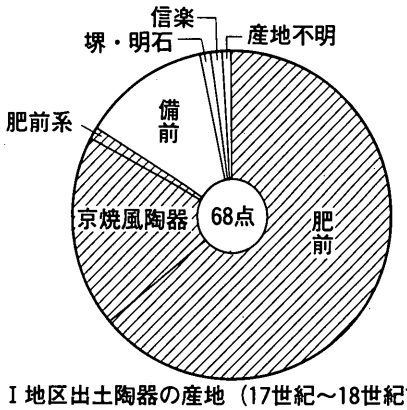


土坑出土陶磁器の器種
（17世紀～18世紀前半）

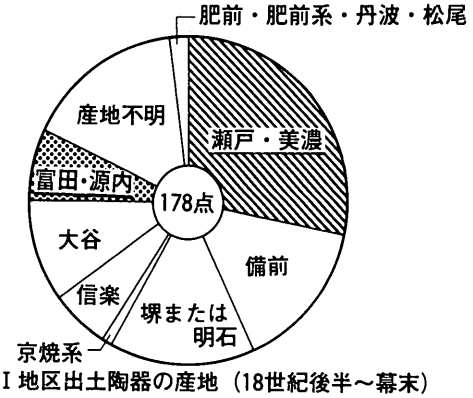


土坑出土陶磁器の器種
（18世紀後半～幕末）

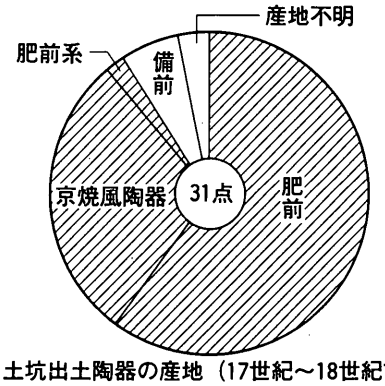
第287図　Ⅰ地区出土遺物の組成３



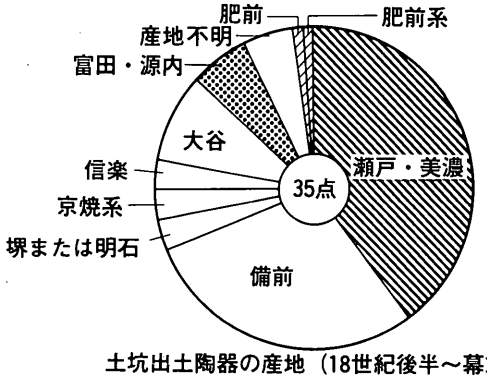
Ⅰ地区出土陶器の産地（17世紀～18世紀前半）



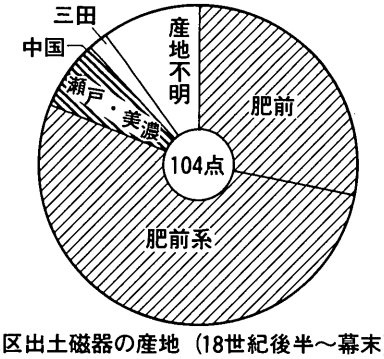
Ⅰ地区出土陶器の産地（18世紀後半～幕末）



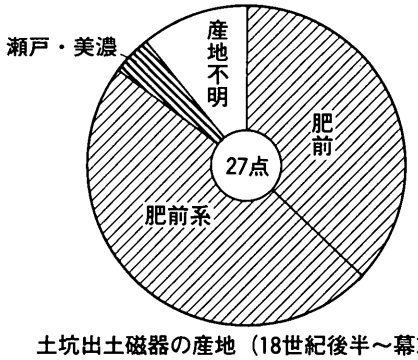
土坑出土陶器の産地（17世紀～18世紀前半）



土坑出土陶器の産地（18世紀後半～幕末）

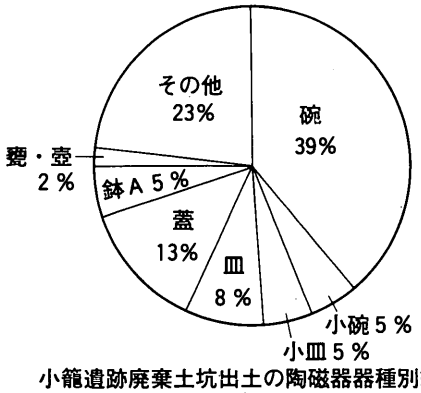


Ⅰ地区出土磁器の産地（18世紀後半～幕末）

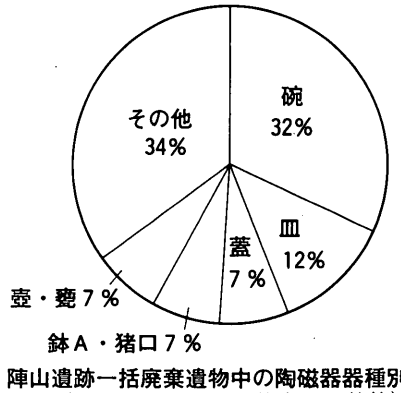


土坑出土磁器の産地（18世紀後半～幕末）

第288図　Ⅰ地区出土遺物の組成 4

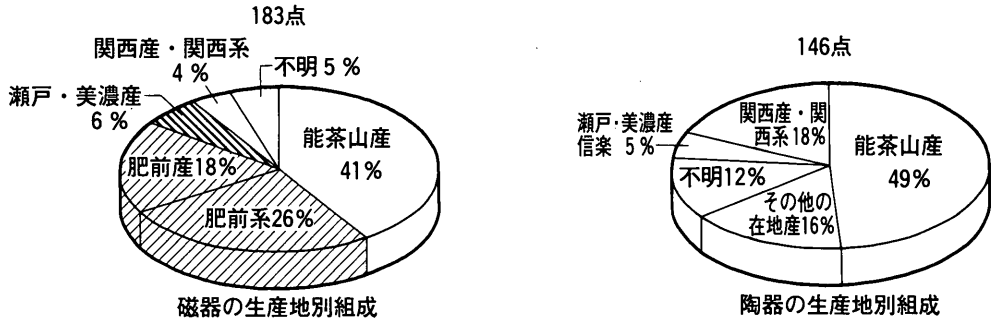


小籠遺跡廃棄土坑出土の陶磁器器種別組成
（口縁部点数より算出した数値）



陣山遺跡一括廃棄遺物中の陶磁器器種別組成
（推定個体数をより算出した数値）

第289図　高知県小籠遺跡・陣山遺跡出土陶磁器の器種組成



浜田恵子「陣山遺跡出土近世陶磁器の検討」『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』1997より引用

第290図　高知県陣山遺跡出土陶磁器の産地別組成

	磁　器	陶　器	陶磁器計	陶磁器中の比率	瓦質土器	土師質土器	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率
碗	95(149)	9 (22)	104	31.6%			104	28.3%
中碗	64(103)	4 (12)						
小碗	11 (20)	4 (9)						
小杯	20 (26)	1 (1)						
皿	17 (46)	23 (24)	40	12.1%		12(31)	52	14.1%
小皿	15 (42)	22 (17)				12(31)		
五寸皿	1 (1)							
大皿	1 (3)	1 (4)						
鉢	11 (22)		11	3.3%			11	2.9%
猪口	7 (13)		7	2.1%			7	1.9%
蓋	16 (19)	8 (9)	24	7.2%			24	6.5%
盃台	1 (0)		1	0.3%			1	0.2%
擂鉢		7 (16)	7	2.1%			7	1.9%
こね鉢・片口		5 (13)	5	1.5%			5	1.3%
鍋（行平・土鍋・熔烙）		10 (33)	10	3.0%		3(14)	13	3.5%
急須・土瓶・水柱		9 (3)	9	2.7%			9	2.4%
瓶（徳利・その他）	12 (9)	24 (10)	36	10.9%			36	9.8%
壺・甕		23 (25)	23	6.9%			23	6.2%
涼炉・焜炉・七輪・火消し壺		1 (3)	1	0.3%	1 (1)	10(18)	12	3.2%
灯明皿		7 (7)	7	2.1%			7	1.9%
火鉢		4 (8)	4	1.2%	6 (7)		10	2.7%
香炉		1 (1)	1	0.3%			1	0.2%
火入れ	2 (5)	7 (12)	9	2.7%			9	2.4%
紅皿	12 (17)		12	3.6%			12	3.2%
合子・段重	6 (8)		6	1.8%			6	1.6%
水滴	3 (0)		3	0.9%			3	0.8%
餌鉢		8 (9)	8	2.4%			8	2.1%
その他	1 (0)		1	0.3%	2 (4)	4 (5)	7	1.9%
計（点）	183(288)	146(195)	329(483)	99.3%	9(12)	29(68)	367	99.0%
陶磁器・土器中の比率	49.8%	39.7%			2.4%	7.9%		

第14表　陣山遺跡出土一括破棄遺物の器種別出土点数と組成比
（点数は推定個体数，括孤内は接合前出土口縁部点数）

	I区			II区			廃棄土坑			III区			IV区			V区		
	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期	1期	2期	3期
瀬戸・美濃	0	0	0	4	1	8	0	0	16	0	1	7	1	0	0	0	0	4
肥前	2	5	0	4	2	16	1	12	12	0	12	3	2	1	0	0	3	4
波佐見	0	1	0	0	2	3	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	1	0
内野山	0	6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
広瀬向山	0	0	0	0	0	2	0	0	13	0	0	11	0	0	0	0	0	0
能茶山	0	0	1	0	0	71	0	0	123	0	0	13	0	0	0	0	0	5
尾戸	0	7	0	0	14	15	0	2	2	0	6	6	0	3	0	0	4	0
信楽	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
備前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
堺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
志戸呂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0

第15表　小籠遺跡出土遺物産地別組成

磁器については17世紀から18世紀前半においては肥前産がほぼ100％を占めていたが，18世紀後半から幕末において肥前産・肥前系はＩ地区全体の資料で81％，土坑資料で85％である。19世紀頃から瀬戸美濃でも磁器生産を開始したが，Ｉ地区全体の資料で６％，土坑資料で４％みられる。その他に三田産が出現し，産地不明の磁器が増加する。

〔碗〕

遺物の報告では大きさによる分類は行わず，一括して碗と報告したが，ここでは径10～12cm程度，器高５～７cm程度のものを中碗，径５～９cm程度，器高４～５cm程度のものを小碗に分類した。その大きさから中碗の用途は飯碗，小碗は湯呑み碗と考えられる。[24]

17世紀から18世紀前半までは碗全体の中で中碗の占める割合はＩ地区全体の資料で98％，土坑資料で100％を占める。18世紀後半から幕末までは中碗はＩ地区全体の資料で67％，土坑資料で56％と減少し，小碗の割合がＩ地区全体の資料で29％，土坑資料では41％と増加する。

碗全体の中で陶器中碗は17世紀から18世紀前半ではＩ地区全体の資料中87％，土坑資料で81％と大半を占めるが，18世紀後半から幕末ではＩ地区全体の資料で10％，土坑資料で10％と減少する。一方，後者の時期には磁器中碗はＩ地区全体の資料で57％，土坑資料で46％と大幅に増加する。17世紀から18世紀前半においては陶器・磁器中碗は肥前産だけであるが，18世紀後半から幕末では陶器中碗には肥前産のものは無くなり，瀬戸美濃産だけとなる。また，この時期では磁器中碗において肥前産と肥前の技術系譜をひく地方窯の製品も含めた肥前系と合わせるとＩ地区全体の資料中87％，土坑資料で99％と大部分を占める。前述のように肥前では17世紀後半以降，陶器から磁器生産に漸次移行し，18世紀後半以降になると陶器碗・皿はほとんど生産されなくなる。空港跡地遺跡での中碗の変化も生産地での変化に呼応するものであろう。

なお，小碗は18世紀後半から幕末に増加し，陶器が大半を占めるが，瀬戸美濃産のものが最も多く，信楽・富田・大谷・京焼系も少量含まれる。磁器は肥前系や瀬戸美濃がみられるが，少量である。

〔皿〕

皿については17世紀から18世紀前半まではＩ地区全体の資料では71％，土坑資料では82％と陶器が大半を占める。また，産地は肥前が最も多く，その大半を占める。前述のように，18世紀後半から幕末においては器種別では皿が減少するが，皿の中でも磁器が過半数を占めるようになり，Ｉ地区全体の資料

では57%，土坑資料では53%を占める。磁器皿の産地は肥前が最も多い。陶器皿は瀬戸美濃産がその大半を占める。その他は京焼系・源内焼・松尾焼がみられる。

〔他遺跡との比較〕

空港跡地遺跡Ⅰ地区出土の土器・陶磁器の組成を検討したが，次に他遺跡との比較を行う。ここではほぼ同時期の遺構・遺物が検出された高知県南国市陣山遺跡・小籠遺跡を取り上げてみたい。第14表は高知県南国市陣山遺跡の器種別の出土点数と組成比を表す。陣山遺跡付近には18世紀後半から19世紀前半にかけて郷士屋敷が存在しており，郷士屋敷の移転や片付けに伴い廃棄された遺物が多量に出土している。[25] 同じ高知県内の南国市小籠遺跡でも17世紀から19世紀の集落が検出された。伝承・文献は残っておらず，遺構も掘立柱建物や土坑で，特に目立ったものは検出されていないことから，空港跡地遺跡同様，一般農民集落であったものと考えられる。[26] これらの両遺跡においては浜田恵子氏や藤方正治氏が詳細に出土遺物を分析している。[27]

小籠遺跡においては土坑から18世紀後半から19世紀代の遺物が多量に出土した。藤方氏によるとこれらの土坑出土陶磁器の中で碗・皿・鉢A・蓋等の酒器を除く飲食具の占める割合は全体の7割である。一方，浜田氏によると陣山遺跡では酒器を除く飲食具の占める割合は58%である。第11表をみると空港跡地遺跡では18世紀後半から幕末において飲食具の占める割合はⅠ地区全体の資料で50%，土坑資料で64%である。資料によりばらつきが認められるが，飲食具の占める割合は小籠遺跡より少なく，陣山遺跡と同程度であろう。

飲食具以外の器種ではどうであろうか。第14表は陣山遺跡の陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比であるが，この表をみると陶磁器中擂鉢の占める割合は2.1%である。空港跡地遺跡の18世紀後半から幕末において，陶磁器中擂鉢はⅠ地区全体の資料で12%，土坑資料で6%と，陣山遺跡よりかなり多い。小籠遺跡においても擂鉢の出土点数は僅かである。空港跡地遺跡では17世紀から18世紀前半においてもⅠ地区全体の資料で10%，土坑資料で5%を占め，時期による変化はほとんどみられない。陣山遺跡・小籠遺跡よりも空港跡地遺跡のほうが擂鉢の出土量が多いのは，擂鉢の生産地である備前に近く，堺や明石とも比較的近いことから，擂鉢を入手し易かったことによるものであろう。

その他，瓦質土器・土師質土器の占める割合にも差異が認められる。18世紀後半から幕末において空港跡地遺跡では瓦質土器・土師質土器の占める割合はⅠ地区全体の資料で16%，土坑資料で27%であるが，陣山遺跡においては10.3%と低い。空港跡地遺跡は18世紀以降土器生産が行われた御厩焼の生産地に近いことから，瓦質土器・土師質土器の出土点数が多いのかもしれない。

また，土師質土器・瓦質土器の器種も異なる。陣山遺跡の瓦質土器・土師質土器の器種の内訳をみると土師質土器小皿・焙烙・焜炉・火鉢などがみられるが，この中で最も多いのは土師質土器小皿で，土師質土器・瓦質土器の1/3を占める。一方，讃岐においては土師質土器小皿は17世紀代を最後に姿を消しており，空港跡地遺跡の江戸時代の遺構からは1点も出土していない。その他の器種を検討すると，陣山遺跡では陶器灯明受皿・受台が土器・陶磁器中1.9%と少なく，小籠遺跡でも出土点数は少ない。空港跡地遺跡ではⅠ地区全体の資料で6%，土坑資料で7%となり，両遺跡を比較するとかなり多い。なお，陣山遺跡や小籠遺跡出土の土師質土器小皿を観察すると煤が付着しているものがあることから，灯明受皿として使用していたことがうかがわれる。陣山遺跡の土師質土器小皿をすべて灯明受皿と考えると，灯明受皿・受台の占める割合は5.2%となり，空港跡地遺跡とほぼ同比率となる。讃岐では灯明受皿は陶器だけであるが，土佐では土師質土器小皿と陶器灯明受皿の両方が使用されていたものと推定される。

その他の器種をみると陣山遺跡では陶磁器中で紅猪口が3.6%，合子・段重が1.8%，神仏具（神酒徳利・香炉）が2.1%出土している。一方，空港跡地遺跡では紅猪口はⅠ地区全体の資料で1%，土坑資料で0%，合子・段重はⅠ地区全体の資料で1%未満，土坑資料で0%，神仏具はⅠ地区全体の資料で1%，土坑資料で0%と，これらの器種が占める割合は非常に低い。陣山遺跡は郷士屋敷，空港跡地遺跡は一般農民集落であることから，浜田氏の指摘どおりこれらの器種の出土量の差異には遺物所有者の経済力や業務の特殊性が反映するものと考えられる。

次に，出土した陶磁器の産地を比較する。磁器については陣山遺跡では地元の能茶山産が41%，肥前系が26%，肥前産が18%，瀬戸美濃産が6%を占める。一方，空港跡地遺跡ではⅠ地区全体の資料で肥前系が53%，肥前産が28%，瀬戸美濃産が6%となる。土坑資料では肥前系が48%，肥前産が37%，瀬戸美濃が4%である。讃岐においては18世紀後半以降，大川町富田で磁器生産を行った。富田産の磁器は透明釉が厚く塗布され，一見してそれとわかるが，空港跡地遺跡では富田産と考えられる磁器は1点も出土していないことから，富田での磁器生産は高知の能茶山とは比べものにならないほど小規模なものであったことがうかがわれる。また，19世紀頃から生産を開始した瀬戸美濃産磁器に関しては陣山遺跡・空港跡地遺跡ともほぼ同比率を示す。

陶器についても陣山遺跡では能茶山産が49%と半分近く占め，次にその他の在地産16%，瀬戸美濃・信楽産5%と続く。空港跡地遺跡においてはⅠ地区全体の資料では瀬戸美濃が28%，備前が15%，堺・明石が15%，大谷が10%，地元の富田・源内が7%，信楽が6%を占める。土坑資料でも瀬戸美濃が40%と最も多く，備前が29%，堺・明石が3%，大谷が9%，地元の富田・源内が6%，信楽が3%を占める。空港跡地遺跡では地元の陶器は少量で，瀬戸美濃産が最も多い。また，備前や阿波に近いことから，備前焼や大谷焼の出土比率も高い。

18世紀後半から幕末において陶器・磁器ともに陣山遺跡では地元産の製品が約半分の比率を占めていたが，空港跡地遺跡では地元産のものはごく僅かであった。土佐に比べ，讃岐では陶磁器生産は非常に小規模で，当時の主力生産地である肥前・瀬戸美濃産の陶磁器が多量に流入していたことがうかがわれる。

ここでは空港跡地遺跡出土土器・陶磁器の組成の特徴と土佐の資料との比較・検討を行い，商品流通や使用者による器種の差異を指摘した。しかし，空港跡地遺跡と讃岐の他遺跡との比較検討を行っていないため，讃岐の中で空港跡地遺跡の器種組成が一般的なものであるのかどうか検討の余地がある。現在，高松城下の発掘調査も行われていることから，町と村による差異など，今後とも比較検討を行う必要があるだろう。

註

(1) 國平健三・市川正史『宮久保遺跡Ⅱ』神奈川県埋蔵文化財センター　1988
(2) 冨永樹之『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ』財団法人かながわ考古学財団　1996
(3) 梶原　勝・渋江芳浩ほか『宇津木台遺跡群Ⅸ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会　1987
(4) 市川正史「近世民家について―文献資料と考古学資料の接点を求めて―」『神奈川考古』第25号　神奈川考古同人会　1989
(5) 吉田　靖『日本における近世民家（農家）の系統的発展』奈良国立文化財研究所　1985
(6) 西岡達哉・片桐孝浩・岡田静明ほか『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊　一の谷遺跡群』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990
(7) 佐藤竜馬ほか『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊　郡家田代遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996
(8) 大山真充ほか『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成4年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1993

(9) 奥田　尚「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995
森下友子「胎土1類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995
(10) 『香川県の諸職』香川県教育委員会　1989
豊田　基「御厩焼と香西焼」『日本の伝統工芸』10　四国　1985
(11) 佐藤竜馬・濱野圭司「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』III　1995
佐藤竜馬「近世土器の形態」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊　郡家田代遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996
(12) 蔵本晋司ほか『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　空港跡地遺跡II』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社　1997
(13) 蔵本晋司・森下友子ほか『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1992
(14) 渡部明夫『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊　永井遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1990
(15) 廣瀬常雄・西村尋文『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1994
(16) 和田素子『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊　郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1993
(17) 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質火鉢について―麻布台1丁目遺跡出土資料を中心に」慶應義塾大学考古学研究会二十周年記念論集　1986
(18) 豊田　基「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成』10　四国　1982
(19) 豊田　基氏のご教授による。左　光挙「平賀源内作陶のみかた」『陶説』第156号　1966
(20) 奥田氏によると焙烙の表面にみられる砂礫は閃緑岩起源のものが主を占めて，僅かに自形の石英がみられるもので，火山ガラスなども含まれており，沖積地の砂礫混じりの土と推定される。山地から平地部に差し掛かったような場所の砂礫で，石清尾山丘陵南端や津内山山麓付近の砂礫とも同じである。
(21) 佐藤竜馬・濱野圭司「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』III　1995
(22) 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社　1989
(23) 丸山和雄「四国のやきもの」『日本やきもの集成』10　四国　平凡社　1982
(24) 井汲隆夫ほか『内藤町遺跡―放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会　1992
(25) 浜田恵子ほか『陣山遺跡　陣山北三区遺跡―あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書―』(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997
(26) 出原恵三・泉　幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡III』(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997
(27) 浜田恵子「陣山遺跡出土近世陶磁器の検討―土佐，地方郷士階級の陶磁器消費実態と在地製品の普及―」『陣山遺跡　陣山北三区遺跡―あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書―』(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997
藤方正治「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」『小籠遺跡III』(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997

凡　　例

残存率　径を測定した部位と，径に対する残存率を記載した。

色調　『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編）を基準とし，色名を記載した。

土器胎土　土器胎土による分類は本文例言に示したとおりである。

胎土１ａ類・胎土１ｂ類については含有物は記載しなかった。

胎土３類については胎土３類と記載せず，含有物とその大きさを記載した。

大きさは小　径0.5㎜以下

中　径0.6～1.0㎜

大　径1.1㎜以上とした。

胎土２類はみられなかった。

第16表　遺物観察表

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
1	弥生土器甕	SPi 27	断・外：にぶい橙(2.5YR6/4)，胎土1a類		摩滅	底径：5.3cm	底部1/4		
2	弥生土器高杯	SPi 27	橙(5YR6/6)，胎土1a類		摩滅		体部破片		
3	弥生土器甕	SKi 02	内：にぶい褐(7.5YR6/3)，外：にぶい褐(7.5YR5/3)，胎土1a類			口径：14.1cm	頸部1/8		
4	弥生土器甕	SKi 02	断：褐灰(10YR5/1)，内・外：にぶい黄橙(10YR7/3)，白色砂粒(小・中・大)少量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(中)微量		内：指押さえ，外：剝落		口縁部破片		
5	弥生土器壷	SKi 05	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		内：頸部上半刷毛目，頸部～体部上半指押さえ，体部下半ヘラ削り，外：頸部～体部刷毛目，頸部らせん状沈線，体部下半ヘラミガキ	口径：17.7cm	口縁部1/4		図版47
6	弥生土器甕	SKi 05	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中)多量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		内：指押さえ後ナデ体部摩滅，外：口縁部指押さえ，体部摩滅，体部下半刷毛目後ナデ	口径：14.9cm，器高：20.4cm，底径：6.2cm	底部完存		図版47
7	弥生土器甕	SKi 05	断・外：明赤褐(5YR5/6)，内：明赤褐(5YR5/6)，黄灰(2.5Y5/1)，胎土1a類		内：指押さえ，剝落，外：摩滅	口径：16.0cm	口縁部1/4		
8	弥生土器(底部)	SKi 05	橙(5YR6/6)，胎土1a類		内：ヘラ削り，外：ヘラミガキ	底径：5.5cm	底部完存		
9	弥生土器甕	SKi 05	断・外：にぶい褐(7.5YR5/4)，内：にぶい橙(7.5YR6/4)，灰(5Y4/1)，胎土1a類		内：ヘラ削り，外：ヘラミガキ	底径：6.0cm	底部1/2		
10	弥生土器(底部)	SKi 05	断：にぶい橙(7.5YR6/4)，内・外：にぶい黄橙(10YR7/2)，白色砂粒(小・中)多量，茶色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小・大)多量		外：摩滅	底径：4.6cm	底部完存		
11	弥生土器(底部)	SKi 05	断：明赤褐(5YR5/6)，内：灰白(2.5Y8/2)，外：黄灰(2.5Y6/1)，透明砂粒(中)多量，白色砂粒(小・大)多量		摩滅	底径：4.8cm	底部ほぼ完存		巻頭図版2
12	弥生土器(底部)	SKi 05	内：にぶい褐(7.5YR5/4)，外：にぶい赤褐(5YR5/4)，胎土1a類		内：ヘラ削り，外：ヘラミガキ	底径：5.6cm	底部完存		巻頭図版2
13	弥生土器甕	SKi 05	にぶい褐(7.5YR5/4)，胎土1a類		内：ヘラ削り，外：ヘラミガキ，底部ナデ	底径：6.0cm	底部1/4		巻頭図版2
14	弥生土器高杯	SKi 05	橙(5YR6/6)，胎土1a類		脚部穿孔，口縁部ヨコナデ，脚部摩滅，内：ヘラミガキ？（井桁状），外：ヘラミガキ	口径：22.8cm，器高：16.8cm，底径：17.6cm	脚部完存		図版47
15	弥生土器壺	SKi 08	浅黄橙(10YR8/3)，白色砂粒(小・中)多量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量			口径：18.0cm	口縁部1/8		
16	弥生土器壺	SKi 08	断・内：にぶい黄橙(10YR7/2)，外：にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小・中・大)少量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量		内：摩滅，外：体部上半刷毛目後ナデ，体部下半ヘラミガキ	口径：7.0cm	口縁部1/4		
17	弥生土器高杯	SKi 08	内：にぶい黄褐(10YR5/3)，外：にぶい黄橙(10YR6/3)，胎土1a類		杯部ヘラミガキ(摩滅)	口径：12.8cm，器高：7.7cm，底径：4.3cm	底部完存		図版47
18	弥生土器鉢	SKi 08	内：にぶい黄橙(10YR7/3)，外：にぶい黄橙～にぶい橙(10YR7/3～5YR7/3)，白色砂粒(中・大)少量，赤色粒子(小)少量		外：摩滅，弱い沈線	口径：20.9cm，器高：11.8cm	口縁部3/4		図版47
19	石鏃	SKi 13			サヌカイト製	2.7×1.4cm，0.4cm			図版56
20	弥生土器甕	SKi 14	オリーブ黒(7.5Y3/1)，胎土1a類		摩滅	底径：5.0cm	底部1/4		
21	弥生土器甕	SDi 02	断・内：黄灰(2.5Y5/1)，外：浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(中・大)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(中・大)少量，赤色粒子(小)少量		摩滅	口径：16.2cm	口縁部1/4		巻頭図版2
22	弥生土器(底部)	SDi 02	断・外：にぶい黄橙(10YR7/2)，明赤褐(5YR5/6)，内：にぶい黄橙(10YR7/2)，胎土1a類		摩滅	底径：5.2cm	底部ほぼ完存		
23	弥生土器甕	SDi 02	断・内：にぶい黄橙(10YR6/3)，外：灰黄褐～赤橙(10YR4/2～10R6/6)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(大)微量		内：ヘラ削り，底部指押さえ，外：ナデ，底部ナデ，二次焼成を受ける	底径：4.4cm	底部完存		
24	弥生土器高杯	SDi 10	断：にぶい褐(7.5YR5/4)，内・外：暗褐(7.5YR3/4)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
25	弥生土器壺	SDi 11	断・内：にぶい褐(7.5YR6/3)，灰(5Y4/1)，外：にぶい褐(7.5YR6/3)，胎土1a類		摩滅	口径：14.0cm	口縁部1/4		巻頭図版2
26	弥生土器壺	SDi 11	橙(5YR6/6)，胎土1a類		内：指押さえ，外：刷毛目	口径：9.2cm	頸部1/4		
27	弥生土器(底部)	SDi 11	にぶい黄橙(10YR6/4)，透明砂粒(小・中・大)多量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(小・中・大)少量		摩滅	底径：4.6cm	底部ほぼ完存		
28	弥生土器甕	SDi 11	浅黄橙(10YR8/4)，白色砂粒(小・大)多量，灰色砂粒(小)微量，赤色粒子(中)少量		内：口縁部摩滅，外：刷毛目		口縁部破片		
29	弥生土器(底部)	SDi 11	断・内：黒(7.5Y2/1)外：赤(10R5/6)		摩滅	底径：9.0cm	底部1/5		
30	弥生土器(底部)	SDi 11	内：灰白(10YR8/2)，外：灰(5Y4/1)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(小・中・大)多量		摩滅，外：底部ナデ	底径：5.6cm	底部完存		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
31	弥生土器(底部)	SDi 11	断・内：灰白(2.5Y8/2)，外：にぶい黄橙(10YR6/4)，白色砂粒(小・中・大)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量		摩滅	底径：5.3cm	底部1/2		
32	弥生土器高杯	SDi 11	断・内：にぶい褐(7.5YR5/3)，外：にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		内：杯部摩滅：外：ヘラミガキ		脚柱部1/4		
33	石鏃	SDi 19			サヌカイト製	2.0×1.7cm，厚さ0.3cm			図版56
34	弥生土器壺	SDi 20	断：にぶい黄橙(10YR6/4)，内・外：にぶい黄褐(10YR5/4)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
35	弥生土器壺	SDi 20	断・外：にぶい褐(7.5YR5/4)，内：にぶい黄橙(10YR6/4)，胎土1a類				口縁部破片		
36	弥生土器壺	SDi 20	断・内：灰黄(2.5Y7/2)，外：明黄褐(10YR7/6)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(大)少量		剝落	口径：21.2cm	口縁部1/8		
37	弥生土器壺	SDi 20	橙(5YR7/6)，胎土1a類		内：指押さえ，外：刷毛目	口径：19.2cm	口縁部1/5		
38	弥生土器壺	SDi 20	にぶい橙(7.5YR7/4)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(大)多量		摩滅，内：指押さえ	口径：11.8cm	口縁部3/8		
39	弥生土器壺	SDi 20	橙(5YR6/6)，胎土1a類		摩滅	口径：16.2cm	口縁部1/8		
40	弥生土器壺	SDi 20	橙(7.5YR7/6)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中・大)多量		摩滅，外：沈線	口径：17.1cm	口縁部1/8		
41	弥生土器壺	SDi 20	断：灰(5Y4/1)，内：浅黄橙(10YR8/3)，外：灰白(10YR8/2)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(中)少量		内：指押さえ(摩滅)，外：刷毛目(摩滅)		頸部1/4		
42	弥生土器壺	SDi 20	橙(7.5YR6/6)，胎土1a類		内：指押さえ，外：摩滅		頸部1/8		
43	弥生土器壺(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR7/2)，外：黄灰(2.5Y5/1)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，赤色粒子(大)微量		外：摩滅	底径：7.1cm	底部1/4		
44	弥生土器壺	SDi 20	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		内：指押さえ，外：摩滅		体部1/6		
45	弥生土器甕	SDi 20	断・内：浅黄橙(10YR8/3)，外：にぶい橙(7.5YR7/4)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(小・中)多量		外：タタキ後ナデ	口径：19.0cm	口縁部1/8		
46	弥生土器甕	SDi 20	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(大)多量，赤色粒子(中)少量		口縁端部沈線	口径：19.2cm	口縁部1/6		
47	弥生土器甕	SDi 20	断・内：にぶい黄褐(10YR5/3)，外：にぶい褐(7.5YR5/4)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(小・中)少量		外：摩滅	口径：12.9cm	口縁部1/8		
48	弥生土器甕	SDi 20	にぶい黄橙(10YR7/4)，橙(5YR6/6)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(大)少量，赤色粒子(大)少量		外：ナデ，剝落	口径：18.0cm	口縁部1/8		
49	弥生土器甕	SDi 20	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中)少量，茶色砂粒(中)微量，赤色粒子(小)微量		摩滅	口径：16.6cm	頸部1/4		
50	弥生土器甕	SDi 20	橙(7.5YR7/6)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)多量，黒色砂粒(中)微量		摩滅	口径：14.8cm	口頸部1/8		
51	弥生土器甕	SDi 20	断：明褐(7.5YR5/6)，内：灰黄(2.5Y7/2)，外：浅黄(2.5Y7/3)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(小・大)少量		内：体部指押さえ後板ナデ，外：摩滅	口径：17.7cm	頸部1/8		
52	弥生土器甕	SDi 20	浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(中)微量，赤色粒子(大)微量		摩滅	口径：16.2cm	口縁部1/4		
53	弥生土器甕	SDi 20	断・内：黄灰(2.5Y6/1)，灰白(10YR8/1)，外：浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(大)少量，赤色粒子(大)微量		外：体部板ナデ	口径：11.8cm	口縁部1/8		
54	弥生土器甕	SDi 20	断・暗灰黄(2.5Y5/2)，内：にぶい褐(7.5Y6/3)，外：橙(7.5YR6/6)，胎土1a類		摩滅	口径：15.4cm	口縁部1/8		
55	弥生土器甕	SDi 20	橙(7.5YR6/6)，胎土1a類		摩滅	口径：15.7cm	口縁部1/8		
56	弥生土器甕	SDi 20	灰黄褐(10YR5/2)，胎土1a類		摩滅，内：剝落		頸部破片		
57	弥生土器甕	SDi 20	にぶい黄橙(10YR7/4)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)少量		摩滅		体部破片		
58	弥生土器(底部)	SDi 20	内：にぶい黄褐(10YR5/4)，断・外：にぶい黄橙～褐灰(10YR6/4～10YR4/1)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(大)少量		内：摩滅，外：底部ナデ	底径：7.7cm	底部完存		
59	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR7/2)，外：浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(小・中)多量，白色砂粒(小・中)少量		摩滅，外：底部指押さえ後ナデ	底径：5.5cm	底部完存		
60	弥生土器(底部)	SDi 20	断・外：黄灰(2.5Y5/1)，内：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小・中・大)少量，赤色粒子(小・中)少量		摩滅，外：底部ナデ	底径：4.6cm	底部1/2		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
61	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：灰白(2.5Y8/1)，外：灰黄(2.5Y6/2)，白色砂粒(小・中・大)多量，灰色砂粒(小・中・大)微量		内：摩滅，外：底部板ナデ	底径：6.2cm	底部完存		
62	弥生土器甕(底部)	SDi 20	断：灰(5Y5/1)，内・外：橙(5YR7/6)，胎土1a類		外：刷毛目，底部摩滅	底径：7.1cm	底部1/4		
63	弥生土器甕	SDi 20	断：黄灰(2.5Y5/1)，内：にぶい橙(7.5YR7/3)，外：にぶい黄(2.5Y6/3)，胎土1a類		外：底部ナデ	底径：6.7cm	底部3/8		
64	弥生土器甕	SDi 20	にぶい黄橙(10YR7/3)，白色砂粒(大)少量		ナデ	底径：4.0cm	底部完存		
65	弥生土器(底部)	SDi 20	橙～灰黄(2.5YR6/6～2.5Y7/2)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(大)微量		内：ヘラ削り，外：底部ナデ	底径：4.2cm	底部7/8		
66	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR7/3)，外：褐灰(10YR4/1)，胎土1a類		摩滅	底径：5.3cm	底部3/8		
67	弥生土器(底部)	SDi 20	断・外：浅黄橙(10YR8/4)，内：浅黄橙(10YR8/3)，白色砂粒(小)多量，茶色砂粒(小)少量		外：底部ナデ	底径：3.1cm	底部完存		
68	弥生土器(底部)	SDi 20	浅橙(5YR8/4)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(中)少量，赤色粒子(大)微量		摩滅	底径：2.5cm	底部完存		
69	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：赤褐(5YR4/6)，外：にぶい黄橙(10YR6/4)，透明砂粒(中・大)少量，白色砂粒(中・大)多量		摩滅	底径：5.5cm	底部完存		
70	弥生土器(底部)	SDi 20	黄灰(2.5Y4/1)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中・大)多量		外：底部ナデ	底径：4.6cm	底部ほぼ完存		
71	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR6/4)，外：褐灰(10YR4/1)，胎土1a類		摩滅	底径：5.8cm	底部完存		
72	弥生土器甕	SDi 20	浅黄橙(10YR8/3)，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)多量，黒色砂粒(小)少量		摩滅	底径：2.5cm	底部完存		
73	弥生土器(底部)	SDi 20	断・外：にぶい橙(7.5YR7/4)，内：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)少量		内：摩滅，外：ナデ		底部1/2		
74	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR6/4)，外：にぶい黄(2.5Y6/4)，胎土1a類		摩滅，底部指押さえ後ナデ	底径：3.7cm	底部5/8		
75	弥生土器(底部)	SDi 20	橙(5YR6/6)，胎土1a類		外：底部ナデ	底径：5.2cm	底部1/2		
76	弥生土器(底部)	SDi 20	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		外：板ナデ，底部ナデ	底径：5.5cm	底部1/2		
77	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR7/4)，外：にぶい橙(5YR7/4)，胎土1a類		外：摩滅，底部ナデ	底径：5.2cm	底部完存		
78	弥生土器(底部)	SDi 20	にぶい橙(7.5YR7/4)，胎土1a類		外：ヘラミガキ	底径：4.7cm	底部完存		
79	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄褐(10YR4/3)，外：黒褐(2.5Y3/2)，胎土1a類		摩滅	底径：8.6cm	底部3/4		
80	弥生土器壺または甕(底部)	SDi 20	断：オリーブ黒(5Y3/1)，内：にぶい黄橙(10YR6/4)，外：にぶい黄(2.5Y6/3)，胎土1a類		底部指押さえ後ナデ	底径：3.8cm	底部完存		
81	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：にぶい黄橙(10YR7/3)，外：灰(5Y4/1)，胎土1a類		摩滅，外：底部指押さえ後ナデ	底径：6.9cm	底部3/8		
82	弥生土器(底部)	SDi 20	断・内：褐灰(10YR6/1)，外：灰(7.5Y4/1)，胎土1a類		内：指押さえ後ヘラ削り，外：摩滅，底部ナデ		底部1/2		
83	弥生土器(底部)	SDi 20	内：灰黄褐(10YR6/2)，断・外：にぶい黄橙(10YR6/4)，胎土1a類		内：板ナデ，外：摩滅	底径：5.5cm	底部5/8		
84	弥生土器甑	SDi 20	断：灰(7.5Y4/1)，内：灰黄(2.5Y7/2)，外：にぶい黄橙(10YR7/4)，白色砂粒(中・大)多量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(中・大)多量		底部焼成後穿孔	底径：4.2cm	底部1/2		
85	弥生土器高杯	SDi 20	内：浅黄(2.5Y7/4)，断・外：にぶい黄橙(10Y7/2)，白色砂粒(小・中・大)少量，灰色砂粒(小)少量		摩滅		口縁部破片		
86	弥生土器高杯	SDi 20	内：浅黄橙(10YR8/3)，断・外：黄灰(2.5Y5/1)，白色砂粒(小・中・大)多量，赤色粒子(小)微量		摩滅		口縁部破片		
87	弥生土器高杯	SDi 20	明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類		摩滅	口径：16.0cm	口縁部1/2		
88	弥生土器高杯	SDi 20	内：橙(7.5YR6/6)，断・外：にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
89	弥生土器高杯	SDi 20	断・外：にぶい橙(7.5YR7/4)，内：橙(5YR6/6)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
90	弥生土器高杯	SDi 20	断：にぶい黄橙(10YR7/2)，内：橙(2.5YR6/6)，外：橙(5YR7/8)，胎土1a類		摩滅，内：赤彩		杯部1/8		
91	弥生土器高杯	SDi 20	明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類		摩滅		杯部1/4		
92	弥生土器高杯	SDi 20	にぶい黄褐(10YR5/4)，胎土1a類		摩滅		脚柱部3/8		
93	弥生土器高杯	SDi 20	断・外：にぶい黄橙(10YR6/3)，内：にぶい黄橙(10YR6/4)，胎土1a類		内：摩滅		脚柱部3/8		
94	弥生土器高杯	SDi 20	橙(5YR6/6)，胎土1a類		ナデ		脚柱部1/2		
95	弥生土器高杯	SDi 20	明赤褐(5YR5/6)，胎土1a類		摩滅，内：脚部板ナデ		脚柱部完存		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
96	弥生土器高杯	SDi 20	明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類		外：摩滅		脚柱部5/8		
97	弥生土器高杯	SDi 20	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		穿孔2個1組	底径：19.2cm	底部1/4		
98	弥生土器高杯	SDi 20	明赤褐(5YR5/6)，胎土1a類		穿孔単位不明，摩滅	底径：19.0cm	底部1/8		
99	弥生土器高杯	SDi 20	明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類		摩滅，穿孔		脚部1/8		
100	弥生土器高杯	SDi 20	内：にぶい橙(7.5YR7/4)，外：にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小・中・大)少量，灰色砂粒(小)少量		摩滅		脚柱部完存		
101	弥生土器高杯	SDi 20	内：黄灰(2.5Y5/1)，外：灰白(2.5Y8/2)，透明砂粒(小)多量，白色砂粒(中・大)多量		摩滅		脚柱部完存		
102	弥生土器高杯	SDi 20	内：にぶい褐(7.5YR6/3)，外：にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小)少量，花崗岩(小)多量		摩滅		脚柱部1/2		
103	弥生土器ミニチュア壺	SDi 20	にぶい黄橙(10YR7/4)，胎土1a類		内：指押さえ，外：摩滅	口径：5.4cm，器高：8.2cm，底径：2.7cm	ほぼ完形		図版47
104	弥生土器壺	SDi 21	断：黄灰(2.5Y4/1)，内・外：浅黄(2.5Y7/3)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(中)少量，茶色砂粒(中)少量，灰色砂粒(小)少量			口径：18.5cm	口縁部1/8		
105	弥生土器壺	SDi 21	浅黄(2.5Y7/3)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中)多量，茶色砂粒(中)少量		口縁端部沈線，内：指押さえ，外：刷毛目後ヨコナデ	口径：16.0cm	口縁部1/4		
106	弥生土器壺	SDi 21	にぶい黄橙(10YR7/2)，胎土1a類		内：体部指押さえ		頸部1/2		
107	弥生土器壺(体部)	SDi 21	にぶい黄褐(10YR5/3)，胎土1a類		内：体部上半指押さえ，体部下半ヘラ削り，外：刷毛目		体部1/4		
108	弥生土器壺(底部)	SDi 21	断：黄灰(2.5Y6/1)，内：にぶい黄(2.5Y6/3)，外：明褐(7.5YR5/6)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(大)多量，灰色砂粒(大)多量		摩滅	底径：10.0cm	底部1/4		
109	弥生土器甕	SDi 21	にぶい黄橙(10YR6/3)，胎土1a類		摩滅	底径：7.2cm	底部1/4		
110	弥生土器甕	SDi 21	灰白(2.5Y8/1)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(小)少量		内：指押さえ，外：タタキ，底部ナデ	底径：6.0cm	底部1/4		
111	弥生土器甕	SDi 21	断・内：にぶい橙(7.5YR7/4)，外：黄灰(2.5Y4/1)，胎土1a類		外：底部ナデ	底径：5.2cm	底部1/4		
112	弥生土器高杯	SDi 21	にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類		摩滅		杯部完存		
113	弥生土器高杯	SDi 21	橙(7.5Y6/6)，胎土1a類		摩滅		脚柱部完存		
114	弥生土器高杯	SDi 21	断：黄灰(2.5Y5/1)，内・外：にぶい黄(2.5Y6/3)，胎土1a類		ヨコナデ，内：ヘラミガキ	口径：22.8cm	口縁部1/8		
115	弥生土器高杯	SDi 21	灰黄褐(10YR6/2)，胎土1a類		剝落，摩滅	口径：22.4cm	口縁部1/10		
116	土師器甕	SDi 21	にぶい黄橙～にぶい褐(10YR7/3～7.5YR5/3)，透明砂粒(小・中・大)多量，白色砂粒(小・中・大)多量，赤色粒子(大)微量		内：体部上半指押さえ，体部下半ヘラ削り後ナデ，外：体部上半ヘラ削り後指押さえ，体部下半～底部ヘラ削り後ナデ	口径：11.8cm，器高：11.1cm，底径：1.8cm	ほぼ完形		図版47
117	弥生土器または土師器高杯	SDi 21	灰白～にぶい橙(5YR7/4～10YR8/1)，白色砂粒(中・大)少量，雲母(中)微量		内：絞り目，外：ヘラミガキ		脚柱部完存		
118	弥生土器または土師器高杯	SDi 21	断・内：橙(7.5YR7/6)，外：灰黄(2.5Y7/2)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(中)少量，茶色砂粒(中)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(中)少量，雲母(小)微量		内：絞り目，外：刷毛目		脚柱部完存		
119	須恵器杯蓋	SDi 21	断：黄灰(2.5Y5/1)，内：灰(N4/)，外：灰白(N7/)，青灰(5PB5/1)，白色砂粒(小)微量		内：口縁部沈線，外：天井部回転ヘラ削り	底径：10.9cm	底部1/4		
120	弥生土器甕	SDi 22	断：灰黄(2.5Y6/2)，内・外：にぶい黄褐(10YR6/4)，胎土1a類		ヨコナデ，外：刷毛目	口径：18.8cm	口縁部1/8		
121	弥生土器または土師器甕	SDi 24	赤橙(10YR6/6)，透明砂粒(小・中)多量，白色砂粒(小・中)多量，赤色粒子(中)微量				口縁部破片		
122	弥生土器甕	SRi 01	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		摩滅	口径：17.8cm	口縁部1/8		
123	弥生土器甕(底部)	SRi 01	断・外：にぶい黄橙(10YR7/2)，黄灰(2.5Y4/1)，内：にぶい黄橙(10YR7/2)，白色砂粒(中)少量，茶色砂粒(小)少量		外：底部ナデ	底径：4.5cm	底部3/4		
124	弥生土器甕(底部)	SRi 01	断・内：にぶい黄橙(10YR6/4)，外：にぶい黄褐(10YR5/3)，黒(5Y2/1)，胎土1a類		内：摩滅，外：ヘラミガキ，底部ナデ	底径：7.2cm	底部1/4		
125	弥生土器(底部)	SRi 01	断・内：浅黄橙(10YR8/3)，外：にぶい黄橙(10YR6/4)，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(中)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		摩滅	底径：5.0cm	底部完存		
126	弥生土器甕(底部)	SRi 01	断：オリーブ黒(5Y3/1)，内：黄灰(2.5Y4/1)，外：灰黄～褐灰(2.5Y7/2～10YR4/1)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(小・大)多量		内：摩滅，外：刷毛目，底部刷毛目，ナデ	底径：4.2cm	底部完存		
127	弥生土器(底部)	SRi 01	断：黄灰(2.5Y4/1)，内：浅黄橙(10YR8/3)，外：浅黄橙(10YR8/3)，黒(7.5Y2/1)，白色砂粒(小)多量，赤色粒子(中)微量		外：底部ヘラ削り	底径：4.6cm	底部3/4		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
128	弥生土器高杯	SRi 01	にぶい黄橙(10YR7/2)，胎土1a類		ヘラミガキ		口縁部破片		
129	弥生土器高杯	SRi 01	黄灰(2.5Y7/2)，胎土1a類		穿孔，ヘラミガキ，内：脚柱部板ナデ		脚柱部完存		
130	弥生土器高杯	SRi 01	にぶい黄橙(10YR6/3)，胎土1a類		摩滅		杯部完存		
131	弥生土器高杯	SRi 01	浅黄橙(10YR8/4)，胎土1a類		摩滅，内：杯部ヘラミガキ，外：脚柱部ヘラミガキ	口径：26.6cm	口縁部1/4		
132	弥生土器高杯	SRi 01	明赤褐(5YR6/5)，胎土1a類		摩滅		杯部1/2		
133	弥生土器製塩土器	SRi 01	断・外：にぶい黄(2.5Y6/3)，内：黄褐(2.5Y5/3)，胎土1a類		摩滅	底径：2.6cm	底部完存		
134	弥生土器壺	SRi 02	断：灰白(10YR8/2)，内・外：灰白～褐灰(10YR8/2～10YR4/1)，白色砂粒(中・大)多量，桃色粒子(大)微量		外：沈線，摩滅	口径：11.0cm	頸部1/5		図版48
135	弥生土器壺	SRi 02	浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(小・中)多量，白色砂粒(小・中)多量		内：口頸部指押さえ後板ナデ，外：ヘラミガキ，頸部及び体部刻み目突帯	口径：16.0cm	口縁部1/8		図版48
136	弥生土器壺(底部)	SRi 02	断：褐灰～にぶい赤褐(10YR4/1～5YR5/3)，内：褐灰(7.5YR5/1)，外：にぶい黄橙(10YR7/2)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(大)微量		外：底部摩滅	底径：8.8cm	底部1/4		図版48
137	弥生土器壺(底部)	SRi 02	断・内：灰褐(10YR5/1)，外：灰黄褐(10YR5/2)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(中)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部ナデ	底径：7.5cm	底部完存		図版48
138	弥生土器壺(底部)	SRi 02	内：灰白(10YR8/2)，外：灰黄褐(10YR6/2)，白色砂粒(小)多量		内：摩滅，外：板ナデ，底部ナデ	底径：10.4cm	底部完存		図版48
139	弥生土器壺(底部)	SRi 02	浅黄橙(10YR8/3)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(大)少量		内：指押さえ，摩滅，外：底部ナデ，摩滅	底径：11.8cm	底部3/4		図版48
140	弥生土器甕(底部)	SRi 02	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(小)多量，黒色砂粒(小)微量，赤色粒子(小)微量		内：指ナデ，外：摩滅	底径：4.9cm	底部完存		図版48
141	弥生土器甕	SRi 02	にぶい黄橙(10YR7/2)，白色砂粒(大)多量		内：指押さえ，外：摩滅		口縁部破片		図版48
142	弥生土器蓋	SRi 02	にぶい黄橙(10YR7/3)，黒(2.5Y2/1)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(大)多量，茶色砂粒(大)多量，灰色砂粒(大)多量		外：天井部ナデ後刷毛目	天井径：4.2cm	天井部完存		図版48
143	弥生土器高杯	SRi 02	断・内：にぶい黄橙(10YR6/4)，外：にぶい黄褐(10YR5/4)，胎土1a類		内：杯部ヘラミガキ		脚柱部完存		
144	弥生土器または土師器甕	SRi 02	断・外：にぶい橙(5YR7/3)，内：淡赤橙(2.5YR7/4)，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(中・大)少量，桃色粒子(大)微量		摩滅		口縁部破片		
145	石包丁	SRi 02			サヌカイト製	7.6×4.7cm，厚0.9cm			図版56
146	石包丁	SRi 02			サヌカイト製	11.3×6.6cm，厚1.0cm			図版56
147	石鏃	SRi 02			サヌカイト製	1.6×1.9cm，0.3cm			図版56
148	弥生土器甕	SXi 02	橙(5YR6/6)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
149	弥生土器(底部)	SXi 02	断・外：橙(7.5YR7/6)，内：灰(7.5Y6/1)，白色砂粒(小・中・大)多量，灰色砂粒(小・中・大)多量		摩滅	底径：6.6cm	底部1/2		
150	石鏃	SXi 02			サヌカイト製	2.2×1.8cm，0.4cm			図版56
151	弥生土器甕	SXi 03	明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類		摩滅		口縁部破片		
152	弥生土器(底部)	SXi 03	断・内：にぶい橙(5YR6/4)，外：灰褐(7.5YR5/2)，胎土1a類		摩滅	底径：8.3cm	底部1/4		
153	弥生土器甕	SXi 04	にぶい赤褐(5YR5/4)，胎土1a類		内：摩滅	口径：11.4cm	口縁部1/10		
154	弥生土器高杯	SXi 04	断・外：黄褐(10YR5/6)，内：にぶい黄橙(10YR6/4)，胎土1a類		摩滅		杯部破片		
155	弥生土器壺	包含層	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		口縁端部沈線，内：体部指押さえ，外：頸部刷毛目後ナデ，体部刷毛目	口径：17.0cm	口縁部1/4		図版47
156	弥生土器壺	包含層	断：灰白(2.5Y7/1)，内：褐灰(10YR6/1)，外：にぶい黄橙(10YR6/3)，透明砂粒(小・中・大)多量，白色砂粒(小・中・大)多量，雲母(中)微量，赤色粒子(中・大)微量				頸部破片		
157	石匙	包含層			サヌカイト製	3.9×3.1cm，厚0.6cm			図版56
158	土師器小皿	SBi 06	断・外：灰白(10YR8/2)，内：橙(5YR7/6)，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：5.6cm	底部3/8		
159	土師器杯	SBi 06	断・内：浅黄橙(7.5YR8/3)，外：にぶい黄橙(10YR7/4)，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.5cm	底部3/8		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
160	土師器杯	SBi 06	橙～灰白(5YR7/6～7.5YR8/2)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.9cm	底部完存		図版57
161	土師器杯	SBi 06	にぶい黄橙(10YR7/4)，灰白砂粒(小)微量		外：底部摩滅	口径：11.8cm，器高：2.6cm，底径：6.8cm	口縁部1/5		図版57
162	土師器杯	SBi 06	断・外：浅黄(5YR8/3)，内：橙(5YR7/6)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：体部～底部摩滅	口径：10.8cm，器高：2.9cm，底径：6.6cm	口縁部1/4		図版57
163	黒色土器椀(A類)	SBi 06	断・外：にぶい黄橙(10YR6/3)，灰黄褐(10YR6/2)，内：黄灰(2.5Y4/1)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		摩滅	口径：14.7cm，器高：5.5cm，底径：7.3cm	口縁部3/8		図版48
164	黒色土器椀(B類)	SBi 07	黒褐(2.5Y3/1)，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(小)少量		内：回転ナデ後ヘラミガキ，外：底部回転ナデ	底径：6.5cm	底部1/8		図版59
165	土師器杯	SBi 08	浅黄橙(7.5YR8/4)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ		底部破片		
166	土師器土鍋	SBi 08	にぶい黄褐(10YR5/3)，胎土1a類				口縁部破片		
167	須恵器杯	SBi 09	内：灰(N7/)，外：灰(N5/)，白色砂粒(小)微量				口縁部破片		
168	須恵器杯	SBi 09	灰(N6/)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)多量，灰色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：7.2cm	底部1/2		
169	土師器小皿	SBi 10	浅黄橙(10YR8/4)，白色砂粒(中)微量，赤色粒子(中)少量				口縁部1/8		
170	土師器杯	SBi 10	灰白(10YR8/1)，透明砂粒(中)微量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量				口縁部破片		
171	土師器椀	SBi 10	内・外：灰白(7.5YR8/2)，断：灰(N4/)，白色砂粒(小・中)少量，黒色砂粒(大)少量		外：底部ヘラ切り後ナデ		底部破片		
172	土師器杯	SBi 11	橙(2.5YR6/8)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小・中)微量		外：底部ナデ	底径：5.8cm	底部1/4		
173	土師器杯	SBi 11	橙～浅黄橙(5YR7/8～10YR8/4)，透明砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量		摩滅，外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：5.6cm	底部1/2		
174	土師器杯	SBi 11	内：灰白(7.5YR8/1)，外：浅黄橙(7.5YR8/3)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部ナデ	底径：6.7cm	底部1/4		
175	土師器杯	SBi 11	内・断：橙(2.5YR6/8)，外：橙，透明砂粒(中)微量，黒色砂粒(中)微量		外：底部ナデ	底径：7.2cm	底部1/8		
176	土師器小皿	SBi 11	浅黄橙～橙(7.5YR8/4～5YR7/6)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量		摩滅	器高：1.3cm	口縁部破片		
177	土師器小皿	SBi 12	橙～灰白(2.5YR6/6～5YR8/2)，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(中)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転糸切り	口径：6.6cm，器高：1.1cm，底径：5.7cm	口縁部1/8		
178	土師器小皿	SBi 12	内・断：橙(5YR6/6)，外：にぶい橙(5YR7/3)，白色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)微量，雲母(小)微量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転糸切り	口径：7.0cm，器高：1.2cm，底径：6.0cm	口縁部5/8		図版57
179	土師器小皿	SBi 12	明褐灰(5YR7/2)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(中)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転糸切り	口径：7.2cm，器高：1.5cm，底径：6.5cm	ほぼ完形		図版57
180	土師器杯	SBi 12	淡橙(5YR8/4)，白色砂粒(小・中)少量，黒色砂粒(小)少量			口径：10.5cm	口縁部1/4		
181	土師器小皿	SBi 12	にぶい橙(5YR6/4)，白色砂粒(小・中)少量，赤色粒子(小・中)微量		外：底部回転糸切り	口径：7.2cm，器高：1.1cm，底径：6.1cm	口縁部1/4		図版57
182	土師器小皿	SBi 12	橙(2.5YR7/6)，白色砂粒(小・中)少量，黒色砂粒(小)微量，赤色粒子(小・中・大)少量		摩滅，外：底部回転糸切り	底径：7.1cm	底部1/4		
183	土師器杯	SBi 12	灰白(5YR8/2)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		摩滅	口径：12.1cm	口縁部1/4		
184	土師器杯	SBi 12	浅黄橙(7.5YR8/6)，雲母(大)微量，赤色粒子(小)少量		内：沈線		口縁部破片		
185	土師器小皿	SBi 12	灰白(10YR8/1)，透明砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り，板目痕	口径：7.8cm，器高：1.3cm，底径：5.8cm	底部3/8		図版57
186	土師器小皿	SBi 12	浅黄橙(7.5YR8/6)，白色砂粒(大)微量，黒色砂粒(中)少量，赤色粒子(大)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.9cm，器高：1.3cm，底径：5.9cm	口縁部3/8		図版57
187	土師器杯	SBi 12	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小・中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：7.3cm	底部1/4		図版57
188	須恵器椀	SBi 12	断：灰白(N7/)，内・外：灰白(N6/～N7/)，白色砂粒(小)微量，灰色砂粒(小)微量		軟質	口径：12.6cm	口縁部1/8		図版59
189	土師器杯	SBi 12	浅黄橙～橙(7.5YR8/3～7.5YR7/6)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(小・中)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転糸切り	口径：11.5cm，器高：2.3cm，底径：7.6cm	ほぼ完形		図版57
190	土師器杯	SBi 12	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小)微量		外：沈線	口径：11.6cm	口縁部1/8		
191	土師器杯	SBi 12	灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)微量		摩滅	底径：6.9cm	底部1/4		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
192	土師器小皿	SBi 12	外・断：浅黄橙(7.5YR8/2)，内：灰白(7.5YR8/2)，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(中)少量，赤色粒子(小・中)少量		外：底部回転糸切り	口径：7.2cm，器高：1.3cm，底径：5.4cm	底部1/2		図版57
193	土師器小皿	SBi 12	内・断：浅黄橙(7.5YR8/4)，外：にぶい橙(7.5YR7/3)，白色砂粒(中)微量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：6.7cm，器高：1.5cm，底径：5.5cm	口縁部1/4		図版57
194	土師器小皿	SBi 12	内：灰白(10YR8/2)，外：浅黄橙(7.5YR8/4)，赤色粒子(小・中)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：8.5cm，器高：1.4cm，底径：6.2cm	口縁部1/4		
195	土師器小皿	SBi 12	内・断：淡赤橙(2.5YR)，外：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.3cm	底部1/4		
196	須恵器こね鉢	SBi 12	内・断：灰(N6/)，外：灰，口縁端部暗灰(N3/)，白色砂粒(中)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(中)少量		外：口縁部黒色化	口径：27.2cm	口縁部1/8		図版59
197	土師器小皿	SPi 121	灰白(2.5Y8/2)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転糸切り後ナデ	口径：8.9cm，器高：1.3cm，底径：6.7cm	完形		図版58
198	土師器小皿	SPi 121	橙(5YR7/6)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：8.4cm，器高：1.4cm，底径：5.6cm	底部完存		図版58
199	土師器小皿	SPi 121	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小・中・大)多量，黒色砂粒(小)少量，雲母(小)少量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：9.1cm，器高：1.7cm，底径：3.0cm	完形		図版58
200	土師器杯	SPi 121	灰白(7.5YR8/1)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)少量，赤色粒子(中・大)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ		口縁部破片		
201	土師器椀	SPi 121	灰白(10YR8/1)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)少量，雲母(小・中)少量		外：底部ナデ	口径：15.0cm，器高：5.5cm，底径：6.4cm	口縁部3/8		図版59
202	黒色土器椀(A類)	SPi 121	内・断：灰(N4/)，外：浅黄橙(7.5YR8/6)，白色砂粒(小)多量，茶色砂粒(大)微量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量		内：ヘラミガキ，外：指押さえ，底部ナデ	底径：5.4cm	底部1/2		図版59
203	黒色土器椀(A類)	SPi 121	断・外：灰白(10YR8/2)，内：褐灰(10YR4/1)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，雲母(小)少量，赤色粒子(小)微量		内：摩滅，外：体部指押さえ，ヘラミガキ，底部ナデ	口径：14.8cm，器高：5.4cm，底径：6.0cm	底部5/8		図版48
204	土師器小皿	SPi 122	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(小・大)少量，茶色砂粒(大)微量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：10.1cm，器高：1.9cm，底径：6.5cm	底部3/4		図版58
205	土師器小皿	SPi 122	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量			口径：10.8cm，器高：1.9cm，底径：7.2cm	口縁部1/8		
206	土師器小皿	SPi 122	断・内：灰白(10YR8/1)，外：橙(5YR7/6)，灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：10.3cm，器高：2.2cm，底径：7.2cm	口縁部1/2		
207	土師器小皿	SPi 122	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(大)少量		外：底部ナデ	口径：11.9cm，器高：2.0cm，底径：8.0cm	口縁部1/4		
208	黒色土器椀(B類)	SPi 122	灰(N4/1)，灰白～にぶい橙(10YR7/1～10YR7/3)，白色砂粒(小)少量，雲母(小)少量，赤色粒子(小)少量		回転ナデ後ヘラミガキ	口径：15.8cm	口縁部1/8		
209	土師器土鍋	SPi 123	断・内：浅黄橙(10YR8/3)，外：にぶい黄橙(10YR7/3)，透明砂粒(小・中)多量，白色砂粒(小・中・大)多量，茶色砂粒(小・中)多量，雲母(中・大)微量，赤色粒子(小・中)少量		外：指押さえ後刷毛目後ナデ	口径：47.8cm	口縁部1/20		
210	黒色土器椀(B類)	SPi 124	断：黒褐(10YR3/1)，内・外：黒(2.5YR2/1)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量		内：摩滅，外：底部ナデ	底径：6.2cm	底部1/4		図版59
211	土師器小皿	SPi 125	褐灰～にぶい橙(5YR4/1～5YR7/4)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.6cm	底部1/4		
212	土師器杯	SPi 125	橙(2.5YR6/6～5YR7/6)，白色砂粒(中)微量，黒色砂粒(小)微量，赤色粒子(小)微量		外：底部ヘラ切り後ナデ	口径：11.2cm，器高：2.6cm，底径：6.9cm	ほぼ完形		図版58
213	黒色土器椀(A類)	SPi 126	断：灰白(10YR8/2)，内：褐灰(10YR4/1)，外：にぶい橙(7.5YR7/4)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(大)少		内：口縁部ヘラミガキ，摩滅		口縁部破片		
214	土師器小皿	SPi 127	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：6.9cm，器高：0.9cm，底径：5.2cm	底部1/2		図版58
215	土師器小皿	SPi 127	灰白～浅黄橙(10YR8/2～7.5YR8/4)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(小)微量，赤色粒子(中)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.5cm，器高：1.4cm，底径：6.0cm	底部1/2		図版58
216	土師器小皿	SPi 127	橙(5YR4/8)，白色砂粒(小)微量，赤色粒子(中・大)微量		外：底部回転ヘラ切り，板目痕	口径：7.9cm	口縁部1/2		
217	土師器小皿	SPi 127	にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小)多量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転糸切り	器高：1.3cm	底部破片		
218	土師器小皿	SPi 127	灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小・中・大)少量，茶色砂粒(大)微量，灰色砂粒(小・中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.8cm	底部1/4		
219	土師器小皿	SPi 127	断・内：淡黄(2.5Y8/3)，外：(にぶい橙7.5Y7/4)，赤色粒子(小・中)微量		摩滅，外：底部回転糸切り	底径：7.0cm	底部3/8		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
220	土師器小皿	SPi 127	灰白(10YR8/2)，灰色砂粒(小)多量				口縁部破片		
221	土師器小皿	SPi 128	灰白(2.5YR8/2)，灰(5Y6/1～4/1)，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.0cm	底部1/4		
222	土師器小皿	SPi 129	浅黄橙(7.5YR8/8)，透明砂粒(中)微量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(中)微量		外：摩滅		口縁部破片		
223	土師器小皿	SPi 130	にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り		底部1/8		
224	土師器小皿	SKi 16	断：灰白(10YR8/2)，内・外：橙(5YR6/6)，白色砂粒(小・大)少量，雲母(小)微量，赤色粒子(小)微量		外：化粧土，底部ナデ	器高：1.1cm	破片		
225	弥生土器製塩土器	SKi 22	灰黄褐(10YR6/2)，胎土1a類		板ナデ，外：底部煤付着	底径：3.3cm	底部7/8		
226	土師器小皿	SKi 22	にぶい橙～橙(7.5YR7/3～5YR6/6)，白色砂粒(小・中)少量，赤色粒子(小・中)少量		外：底部回転糸切り	口径：8.4cm，器高：1.4cm，底径：7.5cm	ほぼ完存		図版58
227	中国産青磁碗	SKi 23	断：灰白(N7/)，黒色砂粒(小)微量	施釉(オリーブ灰5GY6/1)	内：ヘラ彫り，外：鎬蓮弁		体部破片		図版62・63
228	土壁	SKi 23	にぶい褐(7.5YR6/3)，黒色砂粒(小・中)少量，赤色粒子(小・中・)少量			3.7×3.5cm，厚1.5cm	破片		図版60
229	土師器椀	SKi 24	灰白～にぶい橙(5YR8/1～2.5YR6/4)，白色砂粒(小・中・大)，赤色粒子(中・大)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：6.6cm	底部完存		図版58
230	黒色土器椀(A類)	SKi 24	断：にぶい橙(7.5YR6/4)，内：褐灰(10YR6/1)，外：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)微量		摩滅，剝落	底径：5.5cm	底部1/8		
231	黒色土器椀(A類)	SKi 24	内・断：暗灰(N3/)，外：灰白2.5Y8/2，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量		内：ヘラミガキ		口縁部破片		
232	須恵器壺	SKi 24	青灰(5PB5/1)，白色砂粒(中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ		底部破片		
233	土師器杯	SKi 25	淡黄(2.5Y8/3)，透明砂粒(中)多量，白色砂粒(中)多量，黒色砂粒(小)少量，赤色粒子(中)微量		摩滅，外：指押さえ		底部破片		
234	土師器小皿	SKi 27	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.0cm，器高：1.5cm，底径：4.5cm	口縁部3/8		
235	土師器小皿	SKi 27	にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小・中)微量，黒色砂粒(小)多量，赤色粒子(小・中)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ		口縁部破片		
236	土師器小皿	SKi 27	灰白(7.5YR8/2)，白色砂粒(中)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転糸切り	底径：5.4cm	底部3/8		
237	土師器小皿	SKi 27	にぶい橙(7.5YR7/4)，透明砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.4cm，器高：1.3cm，底径：5.0cm	底部1/4		
238	土師器小皿	SKi 27	内・断：橙(5YR7/6)，外：灰白(7.5YR8/2)，橙，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(大)多量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：6.6cm，底径：5.4cm	口縁部1/4		
239	土師器小皿	SKi 27	浅黄橙(10YR8/4)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.4cm，器高：1.2cm，底径：5.4cm	体部1/3		
240	土師器小皿	SKi 27	浅黄橙(7.5YR8/4)，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(中)微量，茶色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.9cm，器高：1.3cm，底径：6.1cm	口縁部1/4		
241	土師器小皿	SKi 27	橙(5YR6/8)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小・中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り		底部1/5		
242	土師器小皿	SKi 27	にぶい橙～橙(5YR7/4～5YR7/6)，白色砂粒(中)少量，赤色粒子(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：8.0cm，器高：1.2cm，底径：5.8cm	底部1/4		
243	土師器杯	SKi 27	灰白(10YR8/1)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(中)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	底径：4.5cm	底部完存		
244	土師器杯	SKi 27	浅黄橙(7.5YR8/3)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(中)少量，赤色粒子(小)微量		内：指押さえ後板ナデ，外：底部ナデ		底部1/4		
245	土師器杯	SKi 27	灰白(5YR8/2)，白色砂粒(中)微量，赤色粒子(小・中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：7.0cm	底部1/4		
246	土師器杯	SKi 27	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量			口径：13.2cm	口縁部1/8		
247	須恵器杯	SKi 27	灰(N6/)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量		外：底部回転ヘラ切り		底部破片		
248	土師器小皿	SKi 28	浅黄橙(7.5YR8/4)，白色砂粒(小・中・大)少量，赤色粒子(中・大)少量		外：底部回転糸切り	口径：6.9cm，器高：1.5cm，底径：5.8cm	底部1/4		
249	土師器小皿	SKi 28	橙(5YR7/6)，白色砂粒(中)少量，灰色砂粒(中)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：8.2cm，器高：1.3cm，底径：6.7cm	口縁部ほぼ完存		図版58
250	土師器杯	SKi 28	灰白(10YR8/2)，にぶい橙(5YR7/4)，透明砂粒(小)多量，白色砂粒(小・中)微量，赤色粒子(小・中)微量		外：底部回転糸切り	口径：11.9cm，器高：3.5cm，底径：7.6cm	底部完存		図版49
251	土師器小皿	SKi 29	橙(5YR7/6)，白色砂粒(中)少量，赤色粒子(中)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：6.6cm，器高：1.2cm，底径：5.0cm	口縁部1/4		
252	土師器小皿	SKi 29	内・断：橙(5YR7/6)，外：灰白(10YR8/1)白色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.4cm，器高：1.3cm，底径：6.2cm	底部完存		図版58

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
253	土師器小皿	SKi 29	橙(5YR7/6)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.4cm，器高：1.0cm，底径：6.2cm	口縁部1/8		
254	土師器小皿	SKi 29	灰白～橙(10YR8/1～2.5YR7/6)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，花崗岩(小)微量		外：底部ナデ	口径：7.5cm，器高：1.2cm，底径：4.9cm	底部完存		図版58
255	土師器小皿	SKi 29	橙～浅黄橙(5YR7/6～10YR8/4)，赤色粒子(小・中)少量		外：底部回転ヘラ切り	口径：8.6cm，器高：1.6cm，底径：6.7cm	口縁部7/8		図版58
256	土師器小皿	SKi 29	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小)微量，赤色粒子(小・中)微量		外：底部回転糸切り	口径：7.6cm，器高：1.4cm，底径：5.3cm	口縁部1/2		
257	土師器杯	SKi 29	断・外：橙(5YR7/6)，内：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小・中)微量，赤色粒子(小・中)微量			口径：10.1cm	口縁部1/4		
258	土師器杯	SKi 30	にぶい橙(7.5YR7/4)，白色砂粒(小・中)少量，赤色粒子(小・中)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：12.5cm，器高：3.8cm，底径：7.8cm	底部完存		図版48
259	土師器杯	SKi 31	灰白～橙(10YR8/2～2.5YR6/6)，白色砂粒(小)少量，赤色粒子(中)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：11.9cm，器高：3.2cm，底径：6.0cm	口縁部7/8		図版48
260	土師器器種不明	SKi 31	橙(7.5YR7/6)，白色砂粒(小)多量，赤色粒子(小)微量，花崗岩(小・中・大)少量		穿孔3箇所，外：刷毛目後ナデ	底径：20.3cm	底部7/8		図版48
261	土師器羽釜	SDi 26	にぶい黄橙(10YR7/3)，透明砂粒(大)多量，白色砂粒(中・大)多量，茶色砂粒(大)少量，黒色砂粒(中)少量，赤色粒子(中・大)少量		摩滅	口径：26.6cm	口縁部1/8		
262	土師器杯	SDi 28	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量		内：重ね焼き痕	口径：11.5cm	口縁部1/4		
263	土師器椀	SDi 28	断：褐灰(10YR4/1)，内・外：灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量		外：底部回転ナデ	底径：6.3cm	底部3/8		
264	土師器杯	SDi 37	浅黄橙(7.5YR8/6)，白色砂粒(小)微量		外：底部回転糸切り	口径：13.0cm，器高：3.4cm，底径：8.5cm	口縁部5/8		図版49
265	土師器小皿	SDi 37	にぶい黄橙(10YR7/4)，白色砂粒(小)多量，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り	口径：7.8cm，器高：1.6cm，底径：5.6cm	ほぼ完形		
266	中国産白磁碗	SDi 37	灰白(N7/)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量	透明釉	口縁部玉縁		口縁部破片		図版62・63
267	須恵器杯(底部)	SDi 37	灰(N6/)，白色砂粒(小)少量		外：底部回転ナデ		底部破片		
268	須恵器椀	SDi 37	断：灰白(5Y7/1)，内・外：灰白(5Y7/1)，灰(N5/)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量			口径：14.6cm	口縁部1/8		図版59
269	須恵器こね鉢	SDi 38	灰白(2.5Y7/1)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)少量		軟質，摩滅		口縁部破片		図版59
270	土師器小皿	SDi 40	灰白(2.5Y8/2)，透明砂粒(中)少量，赤色粒子(大)微量		摩滅，外：底部回転ヘラ切り	底径：6.4cm	底部1/8		
271	土師器杯	包含層	灰白(N8/)，灰(N6/)，灰黄(2.5Y6/2)，透明砂粒(中・大)多量，白色砂粒(中・大)少量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ	口径：7.9cm，器高：3.7cm，底径：7.4cm	口縁部1/4		
272	中国産青磁杯	包含層	灰白(10Y7/1)	内：青磁釉(オリーブ灰10Y5/2)，外：青磁釉(オリーブ灰2.5GY5/1)	外：蓮弁状の凹み，沈線		口縁部破片		図版62・63
273	肥前陶器鉢	SBi 22	橙(2.5YR6/6)，白色砂粒(小)少量	内：白化粧土(灰白2.5Y8/1)，外：鉄釉(にぶい黄褐10YR5/3)	外：畳付～底部無釉，内：白化粧土塗布後，流し掛け		底部破片		図版62・63
274	土師質土器焙烙	SBi 26	にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類				口縁部破片		
275	肥前陶胎染付碗	SBi 26	灰(N6/)，白色砂粒(小)少量	内：灰色釉(明オリーブ灰2.5GY7/1)，外：灰色釉，呉須(暗青)	貫入，外：染付		口縁部破片	中碗	図版62・63
276	肥前陶器刷毛目皿	SBi 26	断：にぶい赤褐(5YR5/4)，外：褐灰(10YR4/1)，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(中)微量，黒色砂粒(小)微量	内：白化粧土(灰白2.5Y8/1)，透明釉	外：ヘラ削り，無釉，内：白化粧土による刷毛目		体部破片		図版62・63
277	肥前陶器鉢	SBi 29	橙(2.5YR6/6)，白色砂粒(小・中・大)少量	白化粧土(灰白7.5YR8/1)，外：下半鉄泥(暗灰黄2.5YR4/2)，上半白化粧土	外：畳付～底部無釉	底径：10.6cm	底部1/4		図版62・63
278	肥前陶器鉄釉皿	SBi 30	にぶい黄橙(10YR6/3)，白色砂粒(小)少量	内：鉄釉(にぶい赤褐5YR4/3)	内：見込み砂目積み，外：無釉		底部破片		図版62・63
279	肥前磁器染付徳利	SBi 32	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉，外：呉須(暗灰・暗青)，透明釉	内：体部～底部無釉，外：染付網目文，丸文		体部3/8		図版62・63，巻頭図版1
280	肥前青磁皿	SPi 369	灰白(N8/)黒色砂粒(小)多量	青磁釉(明緑灰10GY7/1)	内：見込蛇の目釉剣ぎ，外：高台部～底部無釉，高台部下半砂付着	口径：14.2cm，器高：3.3cm，底径：5.2cm	口縁部1/8		図版62・63
281	土師質土器焙烙	SPi 370	にぶい黄橙(10YR7/4)，胎土1a類		穿孔1箇所		口縁部破片		
282	肥前陶胎染付碗	SPi 370	灰白(2.5YR7/1)，黒色砂粒(小)少量	内：灰色釉(オリーブ5GY6/1)，外：灰色釉，呉須(暗灰)	貫入，外：染付唐草文，畳付無釉	口径：10.6cm，器高：6.7cm，底径：4.8cm	口縁部1/4	中碗	図版62・63
283	瓦質土器焙烙	SPi 371	黒(N2/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)少量		外：煤付着		底部7/8		
284	瓦質土器焙烙	SPi 372	灰白(2.5Y7/1)，白色砂粒(小)微量，胎土分類不明				口縁部破片		
285	備前焼鉢	SPi 373	にぶい赤橙(10R6/4)，透明砂粒(中・大)少量，白色砂粒(中)少量，黒色砂粒(中)多量，灰色砂粒(小)少量		外：ヘラ削り	口径：14.3cm，器高：7.8cm，底径：14.9cm	口縁部1/4		図版62・63
286	肥前陶胎染付碗	SPi 374	灰白(N7/)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	内：灰色釉(灰N6/)外：灰色釉，呉須(暗灰)	貫入，外：染付		口縁部破片	中碗	図版62・63
287	土師質土器焙烙	SPi 375	にぶい黄橙(10YR7/2)，胎土1b類		外：体部指押さえ		口縁部破片		巻頭図版2

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
288	土師質土器火鉢	SPi 376	橙(7.5YR6/6)～明褐(7.5YR5/6)，胎土1a類			底径：30.9cm	底部1/8		巻頭図版2
289	肥前系磁器染付碗	SEi 01	灰白(N8/)より灰味がかる	呉須(暗青)，透明釉	外：染付，内：染付	口径：11.7cm	体部1/8	中碗	図版62・63
290	陶器灯明受皿	SEi 01	浅黄橙(10YR8/4)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰黄2.5Y7/2)	外：体部下半無釉	口径：11.2cm	口縁部1/8		図版62・63
291	陶器行平鍋か急須の把手	SEi 01	断：灰白(5Y7/1)，白色砂粒(小)少量	施釉(黄褐2.5Y5/4，オリーブ灰10Y7/1)	外：筒描きによる文様		把手部破片		図版62・63
292	土師質土器井筒	SEi 01	断：褐(7.5YR4/4)，内・外：にぶい橙(5YR6/4)，胎土1a類		内：指押さえ後ナデ，外：板状工具による押し引き		口縁部破片		
293	土師質土器風呂釜	SEi 01	にぶい褐(7.5YR6/3)，胎土1a類		内：指押さえ，外：板ナデ後ナデによる突帯，煤付着		体部破片		
294	肥前陶胎染付碗	SEi 04	灰(10Y6/1)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量	灰色釉(オリーブ灰5GY6/1)	外：畳付無釉		底部破片	中碗	図版62・63
295	肥前系磁器染付碗	SEi 04	灰白(N8/)	呉須(暗青)，透明釉	呉須滲む，外：染付，内：染付	口径：10.1cm	体部1/12	中碗	図版62・63
296	肥前系磁器染付碗	SEi 04	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付葉，外：染付，畳付無釉	底径：5.0cm	ほぼ完存	中碗	図版62・63
297	肥前系磁器染付碗	SEi 04	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付		口縁部破片	中碗	図版62・63
298	肥前系磁器染付碗	SEi 04	灰白(N8/)より灰みがかる	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺		口縁部破片		図版62・63
299	瀬戸美濃陶器灰釉皿	SEi 04	灰白(5Y8/2)	灰釉(灰白7.5Y8/2)	貫入，外：畳付無釉	底径：5.0cm	底部1/4		図版62・63
300	信楽陶器碗	SEi 04	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰オリーブ7.5Y6/2)	貫入，外：畳付～底部無釉	口径：9.1cm，器高：4.8cm，底径：2.4cm	口縁部1/2	小碗	図版62・63
301	備前焼灯明受皿	SEi 04	断・外：にぶい赤褐(2.5YR5/4)，内：赤褐(10R4/4)，白色砂粒(小)少量	内：塗り土(赤褐10R4/3)	内：桟付，桟部凹み，外：底部回転糸切り後ナデ，塗り土なし	底径：3.6cm	底部3/8		図版62・63
302	陶器擂鉢	SEi 04	黄灰(2.5Y6/1)，白色砂粒(小)微量	鉄釉(暗褐7.5YR4/4)			口縁部破片		図版62・63
303	陶器透明釉土瓶	SEi 04	にぶい黄橙(7.5YR6/4)，雲母(小)少量	外：透明釉	内：無釉		体部破片		図版62・63
304	陶器鉢	SEi 04	灰白(5Y7/1)	灰釉(オリーブ黄5Y6/3)	外：筒描き	口径：16.7cm	体部1/14		図版62・63
305	土師質土器焙烙	SEi 04	断：灰黄(2.5Y7/2)，内：暗灰黄(2.5Y4/2)，外：黒褐(2.5Y3/1)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量		外：煤付着		口縁部破片		
306	土師質土器焙烙	SEi 04	断：にぶい黄橙(10YR7/4)，内：灰白(2.5Y7/1)，外：褐灰(10YR5/1)，胎土分類不明，透明砂粒(小)微量，白色砂粒(中)微量		外：煤付着		口縁部破片		
307	土師質土器風呂釜	SEi 04	断：黄灰(2.5Y5/1)，内：灰黄褐，外：黒褐(10YR3/1)，胎土1a類		外：底部煤付着	底径：42.6cm	底部3/8		
308	堺または明石擂鉢	SEi 04	にぶい赤褐(2.5YR4/4)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(大)少量		外：ヘラ削り後ナデ	口径：37.2cm	口縁部3/8		図版49・66
309	土師質土器井筒	SEi 04	にぶい赤褐色(5YR4/3)，明褐色(7.5YR5/6)，灰褐(7.5YR6/2)，胎土1a類		内：指押さえ後ヘラナデ，指押さえ後ナデ，外：板状工具による押し引き	口径：65.5cm，器高：70.4cm，底径：71.1cm	底部7/8		図版49
310	肥前系磁器染付皿	SEi 05	断：にぶい橙(7.5YR7/4)，浅黄橙(10YR8/3)，内・外：灰白(7.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(白濁)	焼成不良，軟質，内：染付，外：蛇の目凹高台，染付	底径：7.0cm	底部1/8		図版64・65
311	肥前系磁器染付蓋	SEi 05	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：つまみ端部無釉，染付	口径：9.1cm，器高：3.0cm，つまみ径：3.6cm	口縁部1/2		図版64・65
312	肥前系磁器染付碗	SEi 05	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付岩波，外：畳付無釉，染付	底径：4.0cm	底部1/2	中碗	図版64・65
313	肥前系磁器染付碗	SEi 05	灰白(N8/)より灰みがかる	呉須(暗青色)，灰釉(灰白10Y7/1)	貫入，内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：6.0cm	底部1/4	中碗	図版64・65
314	瀬戸陶器刷毛目碗	SEi 05	灰白(5Y8/1)	白化粧土による刷毛目，口縁部深緑色釉	口縁部釉二重掛け，外：体部刷毛目，体部下半～底部無釉	底径：3.3cm	底部3/4	小碗	図版64・65
315	瀬戸美濃陶器鉢	SEi 05	灰白(2.5Y8/2)，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	灰釉(オリーブ灰5Y6/3)		口径：15.2cm	口縁部1/8		図版64・65
316	堺または明石擂鉢	SEi 05	橙(2.5YR6/6)，透明砂粒(中)少量，白色砂粒(中)少量，黒色砂粒(中)少量，灰色砂粒(中)少量				口縁部破片		図版64・65
317	富田焼？陶器行平鍋	SEi 05	灰白(5Y7/1)	内：灰釉(灰オリーブ7.5Y6/2)，外：鉄泥(灰褐5YR6/2～5/2)	内：口縁部内面無釉，外：飛鉋，煤付着，体部下半無釉	口径：16.3cm	体部1/4		図版64・65
318	信楽陶器灯明受皿	SEi 05	灰(5Y6/1)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰オリーブ5Y6/2)	貫入，内：見込み目跡1，外：無釉，煤付着	口径：9.9cm，器高：2.1cm，底径：2.5cm	口縁部3/8		図版64・65
319	瓦質土器鍋	SEi 05	暗灰(N3/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量，雲母(小)微量		外：煤付着		口縁部破片		
320	土師質土器大甕	SEi 05	断：にぶい赤褐(5YR5/4)，内・外：にぶい赤褐(5YR5/3)，胎土1a類		内：口縁部刷毛目後ナデ，体部指押さえ，外：体部指押さえ後板ナデ		口縁部破片		
321	土師質土器火鉢	SEi 05	灰褐～灰黄褐(7.5YR6/2～10YR6/2)，胎土1a類		内：口縁部煤付着，外：底部刷毛目後ナデ	口径：27.8cm，器高：9.3cm，底径：24.6cm	底部2/5		巻頭図版2
322	砥石	SEi 05			流紋岩	18.0×5.5cm，厚3.6cm			
323	漆器碗	SEi 05				底径：5.9cm			図版49
324	底板	SEi 05				31.4×12.9cm，厚1.0cm			図版61
325	底板	SEi 05				径28.3cm，厚1.1cm			図版61
326	土師質土器甕	SEi 06	にぶい橙(7.5YR6/4)，胎土1a類		摩滅，外：底部ヘラ削り後ナデ	底径：24.4cm	底部1/4		巻頭図版2
327	土師質土器甕	SEi 06	にぶい橙(10YR7/3)，胎土1a類		摩滅，外：底部板ナデ	底径：22.7cm	底部3/8		巻頭図版2

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
328	土師質土器焙烙	SEi 06	断：灰白(5Y7/1),内：灰(N4/),外：黄灰(2.5Y5/1),胎土1a類		内：煤付着	口径：36.8cm	口縁部2/8		
329	軒平瓦	SEi 06	断：灰白(10Y7/1)，内・外：灰(N4/)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(大)微量		瓦質	瓦当厚：2.0cm,垂れ長：3.5cm			
330	軒丸瓦	SEi 06	断：灰白(5Y8/1)，内・外：暗灰(N3/)，白色砂粒(中)(大)微量，茶色砂粒(中)微量		瓦質	瓦当径：13.0cm，瓦当厚：1.8cm			
331	土師質土器大甕	SEi 06	にぶい褐～にぶい橙(7.5YR6/3～6/6)，にぶい黄褐(10YR5/3)，胎土1a類		内：指押さえ後ナデ，外：口縁部板状工具による押し引き	口径：67.8cm	口縁部完存		
332	土師質土器井筒	SEi 06	内：にぶい黄橙(10YR7/2～6/3)，外：にぶい黄(2.5Y6/3)，灰黄褐～にぶい黄橙(10YR6/2～6/4)，胎土1a類		内：指押さえ後ナデ後刷毛目，外：板状工具による押し引き	口径：75.0cm，器高：41.8cm，底径：79.6cm	口縁部1/3		
333	肥前系磁器染付碗	SEi 07	灰白(N8/)より灰みがかかる	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付	口径：10.7cm	口縁部1/8	中碗	図版84・85
334	土師質土器蓋	SEi 07	にぶい黄橙(10YR6/3)，胎土1a類		内：剝落，摩滅，外：底部刷毛目	底径：16.2cm	底部3/8		
335	土師質土器焙烙	SEi 07	灰(5Y6/1)，胎土1a類				口縁部破片		巻頭図版2
336	土師質土器焙烙	SEi 07	断：にぶい黄橙(10YR7/2)，内・外：褐灰(10YR4/1)，胎土1b類		指押さえ，内：煤付着	口径：41.0cm	口縁部1/8		
337	瓦質土器器種不明	SEi 07	断：灰白(N8/)，内・外：灰(N4/)，胎土分類不明，白色砂粒(中・大)多量		外：型による文様		体部破片		
338	肥前陶器刷毛目片口鉢	SKi 33	灰白(10YR8/2)	鉄泥(にぶい褐7.5YR5/4)，白化粧土(浅黄5Y8/3)，透明釉	白化粧土による刷毛目		口縁部破片		図版64・65
339	土師質土器焙烙	SKi 33	褐灰(7.5YR5/2)，胎土1a類		口縁部穿孔，内：ヘラミガキ，外：指押さえ，煤付着		口縁部破片		
340	肥前陶器青緑釉皿	SKi 34	灰白(2.5Y8/1)	青緑釉(青灰10BG6/1)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：畳付～底部無釉，回転ヘラ切り	底径：4.8cm	底部完存		図版64・65
341	土錘	SKi 34	橙(7.5YR7/6)，胎土1a類		穿孔4	現存長：5.6cm,最大幅：6.7cm，最大厚：2.9cm	全体2/3		図版60
342	肥前青磁皿	SKi 39	灰白(N8/)	青磁釉(明緑灰10G7/1)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ,重ね焼きによる接着痕,外：畳付無釉，接着痕	口径：13.8cm,器高：3.3cm，底径：4.8cm	口縁部3/5		図版64・65
343	肥前陶器灰釉皿	SKi 39	断：灰白(5Y7/1)，外：灰黄褐(10YR6/2)，灰色砂粒(小・大)少量	内：鉄絵(灰オリーブ5Y5/3)，灰釉(2.5GY6/1)，外：灰釉	内：鉄絵圏線，砂目積み，外：体部下半～底部無釉，高台砂付着	底径：4.0cm	底部完存		図版64・65
344	肥前陶器甕	SKi 39	にぶい赤褐(2.5YR4/3)，外：黒褐(5YR3/1)，白色砂粒(大)多量	内・外：鉄釉(黒褐5YR3/1～暗赤褐5YR3/3)	自然釉(ゴマ状)内：格子目タタキ，外：円形浮文，体部上半格子目タタキ後刷毛目，体部下半格子目タタキ後ナデ		体部1/8		図版50
345	石臼	SKi 39			凝灰岩	18.3×12.6cm，厚7.5cm			
346	肥前磁器染付碗	SKi 40	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(中)少量，黒色砂粒(小・中・大)少量	内：透明釉，外：呉須(暗青)，透明釉	焼成不良，外：染付，畳付無釉	底径：3.6cm	底部3/4	中碗	図版67
347	肥前系磁器染付碗	SKi 40	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	透明釉(青みがかる)，呉須(暗青)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.5cm	底部完存	中碗	図版67
348	肥前系磁器染付碗	SKi 40	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉，砂付着	底径：4.0cm	底部3/4	中碗	図版67
349	肥前系磁器染付碗	SKi 40	灰白(N7/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.0cm	底部5/8	中碗	図版67
350	肥前系磁器染付鉢	SKi 40	灰白(5Y7/1)	内：透明釉，外：呉須(明るい青)，透明釉	内：染付型紙摺，見込み目跡1，外：染付，蛇の目凹形高台，底部周縁無釉	底径：11.0cm	底部1/8		図版67
351	磁器染付碗	SKi 40	灰白(5Y8/1)	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：10.6cm,器高：5.7cm，底径：4.2cm	体部5/8	中碗	図版67
352	磁器染付碗	SKi 40	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：呉須(明るい青)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：10.6cm,器高：5.1cm，底径：4.0cm	底部3/4		図版67
353	瀬戸美濃陶器皿	SKi 40	灰白(5Y8/1)	内：灰釉(5Y8/1)，外：灰釉，鉄釉	内：見込み目跡1，鉄絵，外：体部下半～底部無釉，底部回転ヘラ切り	口径：12.3cm,器高：2.1cm，底径：8.0cm	底部1/4		図版67
354	瀬戸美濃陶器染付碗	SKi 40	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉	貫入，内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.6cm	底部1/2	中碗	図版67
355	瀬戸美濃陶器染付碗	SKi 40	灰白(7.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須，透明釉(暗緑)	貫入，内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.0cm	底部1/2	中碗	図版67
356	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 40	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(灰白5Y8/2)，外：鉄釉(暗赤褐5YR3/2)	貫入，外：畳付無釉	底径：4.0cm	底部1/4	小碗	図版67
357	京焼風陶器碗	SKi 40	淡黄(2.5Y8/3)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	施釉(にぶい黄橙10YR7/4)	貫入，外：畳付無釉	底径：5.0cm	底部3/8	中碗	図版67
358	信楽陶器灯明受皿	SKi 40	灰黄(2.5Y7/2)	内：灰釉(灰黄2.5Y7/2)	内：貫入，桟付，桟部凹み，外：無釉，煤付着	口径：8.5cm	口縁部1/4		図版67
359	大谷焼鉢	SKi 40	断：灰(N5/)，外：にぶい赤褐(2.5YR4/3)，白色砂粒(小)微量	施釉(黒褐5YR3/1)	内：見込み目跡3，外：高台部～底部無釉	底径：8.0cm	底部1/4		図版67
360	陶器透明釉蓋	SKi 40	橙(5YR6/6)	透明釉	外：沈線	口径：15.2cm	口縁部1/8		図版67
361	陶器透明釉土瓶	SKi 40	にぶい橙(7.5YR6/4)，白色砂粒(小)微量	内：透明釉	外：無釉，煤付着	底径：7.4cm	底部1/5		図版67
362	備前焼甕	SKi 40	灰褐(7.5YR6/2)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	塗り土(赤褐10R4/4)	外面・口縁部内面塗り土，外：底部陶印	口径：7.6cm，器高：7.0cm，底径：4.9cm	底部7/8		図版67
363	陶器鉢	SKi 40	にぶい黄橙(10YR6/4)，白色砂粒(中)少量	外：施釉(褐7.5YR4/6)	内：無釉，外：体部下半～底部無釉底部回転ヘラ切り	底径：10.0cm	底部1/4		図版67
364	陶器鉢	SKi 40	明褐灰(7.5YR7/1)，黒色砂粒(小・大)少量	施釉(オリーブ5Y5/4)	外：体部帯状に剝離	口径：30.0cm	口縁部1/10		図版67

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
365	瓦質土器土瓶	SKi 40	内・断：灰(5Y6/1)，外：灰(5Y4/1)，黒色砂粒(小)少量，胎土分類不明		注ぎ口穿孔3箇所		注ぎ口破片		
366	瓦質土器焙烙	SKi 40	灰(5Y5/1)，内外：暗灰(N3/)，胎土1b類		内：煤付着		口縁部破片		巻頭図版2
367	瓦質土器焙烙	SKi 40	灰(N7/)，内外：灰(N4/)，胎土1b類				口縁部破片		巻頭図版2
368	瓦質土器羽釜	SKi 42	灰(N6/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，		内：ヘラナデ，外：刷毛目	口径：20.5cm	口縁部1/4		
369	瓦質土器羽釜	SKi 42	断：灰黄(2.5Y7/2)，内：灰(5Y4/1)，外：灰黄～黄灰(2.5Y6/2～2.5Y4/1)，胎土1a類		外：鍔下部煤付着	口径：16.8cm	口縁部1/4		
370	肥前陶胎染付碗	SKi 42	灰白(N7/)，黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(明オリーブ灰5GY7/1)，外：呉須(暗灰黄2.5Y4/2)，灰釉	貫入，外：染付，畳付無釉	底径：4.5cm	底部完存	中碗	図版51
371	京焼風陶器碗	SKi 43	浅黄橙(10YR8/3)，茶色砂粒(中)微量，灰白砂粒(中)少量	内：施釉(にぶい黄橙10YR7/3)，外：施釉(灰白5Y8/1)	焼成不良，貫入，外：畳付無釉	底径：4.3cm	底部3/8	中碗	図版64・65
372	土師器土鍋	SKi 44	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(小・中)少量，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(中)微量		内：指押さえ後ナデ，外：指押さえ後板ナデ		口縁部破片		
373	肥前系陶器皿	SKi 44	灰黄褐(10YR6/2)，黒色砂粒(小)少量	施釉(灰黄褐10YR5/2～灰オリーブ7.5Y5/2)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：体部下半～底部無釉	口径：11.8cm，器高：3.6cm，底径：4.8cm	底部1/4		図版64・65
374	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 44	灰白(2.5Y8/1)，白色砂粒(大)微量	内：灰釉(灰白5Y8/2)，外：鉄釉(黒褐2.5Y8/1)	外：畳付無釉	底径：4.9cm	底部完存	小碗	図版64・65
375	備前焼擂鉢	SKi 44	断：明赤褐(2.5YR5/8)，内・外：暗赤灰(10R4/1)，白色砂粒(小・中・大)少量，橙色粒子(中・大)多量		376と同一個体の可能性，外：ヘラ削り後ナデ	口径：31.4cm，器高：12.4cm，底径：13.7cm	口縁部1/8		図版64・65
376	備前焼擂鉢	SKi 44	赤橙(10R6/6)，白色砂粒(大)多量，橙色砂粒(大)少量		375と同一個体の可能性，外：ヘラ削り後ナデ	底径：14.6cm	底部1/4		図版64・65
377	肥前系磁器染付猪口	SKi 45	淡赤橙(2.5YR7/3)	内：透明釉(灰白5Y8/1)，外：透明釉，呉須(暗青)	焼成不良，外：染付，畳付無釉	口径：6.6cm，器高：2.3cm，底径：3.2cm	底部完存		図版64・65
378	肥前系磁器染付瓶	SKi 45	断：灰白(N7/)，内：灰黄(2.5Y6/2)	外：透明釉(灰白5Y8/1)	焼成不良，内：無釉，外：畳付無釉	底径：6.9cm	底部3/8		図版64・65
379	京焼風陶器碗	SKi 47	灰白(2.5Y8/1)	施釉(黄7.5Y7/3)	貫入，外：畳付無釉	底径：4.6cm	底部7/8	中碗	図版64・65
380	京焼風陶器碗	SKi 47	灰白(10YR8/1)	施釉(灰黄7.5Y7/2)	貫入，外：畳付無釉	底径：4.45cm	底部完存	中碗	図版64・65
381	備前焼擂鉢	SKi 49	内・断・口縁部外端面：橙(5YR6/8)，外：橙(5YR6/6)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小・中)微量，茶色砂粒(小・中)少量		片口，外：体部下半回転ヘラ削り，底部指押さえ後ナデ	口径：29.2cm，器高：11.5cm，底径：11.8cm	口縁部3/8		図版66
382	瓦質土器羽釜	SKi 49	黄灰(2.5Y6/1)，胎土1a類		内：刷毛目，外：鍔下部～体部煤付着		鍔部破片		巻頭図版2
383	土師質土器大甕	SKi 52	内：にぶい黄橙(10YR7/2)，口縁部外：にぶい橙(7.5YR7/3)，底部外：にぶい黄橙(10YR6/4)，にぶい橙(7.5YR7/3)，胎土1a類		内：体部上半指押さえ後板ナデ後ナデ，体部下半指押さえ後ヘラナデ後ナデ，外：体部上半板ナデ後ナデ，体部下半ヘラナデ後ナデ，底部刷毛目	口径：52.4cm，底径：45.5cm	底部3/4		図版51
384	肥前系磁器染付碗	SKi 53	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.9cm	底部ほぼ完存	中碗	図版68・69
385	陶器蓋	SKi 53	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	外：コバルト釉(明るい青)	内：無釉，外：天井部無釉，墨書「七合」	径：3.0cm	蓋部1/2		図版68・69
386	土師質土器大甕	SKi 54	内：にぶい橙(7.5YR7/4)，外：にぶい黄橙～橙(10YR7/3～7.5YR7/6)，胎土1a類		内：指押さえ後刷毛目後ナデ，外：底部刷毛目	口径：39.0cm，器高：45.4cm，底径：33.2cm	ほぼ完形		図版49
387	土師質土器大甕	SKi 55	口縁部内：にぶい褐(7.5YR5/3)，底部内：灰黄(2.5Y6/2)，褐灰(10YR4/1)，口縁部外：にぶい橙(7.5YR6/4)，底部外：灰白(2.5Y8/2)，にぶい橙(7.5YR7/4)，胎土1a類		内：指押さえ後板ナデ，体部上半・底部摩滅，外：体部上半・底部刷毛目，体部下半板ナデ	口径：55.0cm，底径：43.2cm	ほぼ完形		図版51
388	瓦質土器焙烙	SKi 57	灰黄褐(10YR5/2)，胎土分類不明，白色砂粒(小・中)少量				口縁部破片		
389	肥前系磁器染付碗	SKi 58	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付，外：染付型紙摺		体部破片		図版68・69
390	中国産青磁鉢	SKi 60	灰白(N7/)	青磁釉(明緑灰10GY7/1)	内：片切り彫り，外：畳付無釉		底部破片		図版68・69
391	肥前系磁器染付皿	SKi 60	灰白(2.5Y7/1)，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉(灰白5Y8/2)，外：透明釉，呉須(青)	焼成不良，貫入，内：見込み蛇の目釉剝ぎ，アルミナ砂，外：畳付無釉	底径：4.8cm	底部3/4		図版68・69
392	肥前陶胎染付碗	SKi 60	灰白(5Y7/1)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	内：灰色釉(灰7.5Y6/1)，外：灰色釉，呉須(暗青)	貫入，外：染付	口径：10.2cm	口縁部破片	中碗	図版68・69
393	肥前陶胎染付碗	SKi 60	灰白(N7/)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量	内：灰色釉(灰白7/)，外：灰色釉，呉須(暗青)	貫入，外：染付		口縁部破片	中碗	図版68・69
394	肥前磁器染付碗	SKi 60	灰白(N8/)，白色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：呉須(暗青)，透明釉	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，砂付着，外：染付，畳付無釉	底径：4.0cm	底部7/8	中碗	図版68・69
395	肥前磁器染付碗	SKi 60	灰白(N8/)，茶色砂粒(中)微量，黒色砂粒(中)微量	内：透明釉(青みがかる)，外：呉須(暗青)，透明釉	外：染付，底部「大明年製」崩れ銘		体部1/4	中碗	図版68・69
396	肥前磁器染付碗	SKi 60	灰白(N8/)，灰色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：呉須(暗青)，透明釉	外：染付，畳付無釉	底径：4.5cm	底部1/4	中碗	図版68・69
397	肥前磁器染付碗	SKi 60	灰白(N7/)，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉，外：呉須(暗緑)，透明釉	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：染付発色不良	口径：10.0cm	口縁部1/8	中碗	図版68・69
398	肥前白磁鉢	SKi 60	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	透明釉(青みがかる)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：体部下半～底部無釉，高台内砂付着	底径：4.4cm	底部1/2		図版68・69
399	肥前磁器染付猪口	SKi 60	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉，外：呉須(暗青)，透明釉	外：染付花，氷裂文，花，畳付無釉	底径：5.6cm	底部1/4		図版68・69

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
400	肥前青磁火入れ	SKi 60	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	青磁釉(明緑灰7.5GY7/1)	外：畳付無釉	口径：6.0cm，器高：5.2cm，底径：4.2cm	底部1/4		図版68・69
401	肥前陶器灰釉皿	SKi 60	にぶい橙(7.5YR7/4)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(にぶい褐7.5YR6/3)	内：見込み砂目積み，外：無釉		底部破片		図版68・69
402	京焼風陶器碗	SKi 60	灰白(2.5Y8/1)	施釉(灰オリーブ5Y6/2)	貫入，外：畳付無釉	底径：4.2cm	底部3/8	中碗	図版68・69
403	瀬戸美濃陶器染付皿	SKi 60	灰白(5Y8/1)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(7.5Y7/2)，鉄釉(黒褐10YR2/3)，呉須(暗青)，外：灰釉	内：鉄釉と呉須による染付，外：畳付～底部無釉	口径：11.2cm，器高：4.6cm，底径：4.0cm	底部完存		図版68・69，巻頭図版1
404	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 60	灰白(2.5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(明オリーブ灰5GY7/1)，外：灰釉，鉄釉(黒褐10YR3/2～黒10YR2/1)		口径：9.0cm	口縁部1/8	小碗	図版68・69
405	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 60	灰白(5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(灰白5Y7/2)，外：灰釉，鉄釉(黒褐10YR2/3)		口径：9.5cm	口縁部1/8	小碗	図版68・69
406	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 60	灰白(7.5Y7/7)	内：灰釉(灰白10Y7/1)，外：灰釉，鉄釉(灰褐7.5YR4/2)			口縁部破片	小碗	図版68・69
407	瀬戸美濃陶器染付碗	SKi 60	灰白(7.5Y8/1)	内：灰釉(灰白5Y8/1～8/2)外：灰釉，呉須(暗青)	外：染付梅花文2箇所	口径：10.0cm	口縁部3/8	小碗	図版68・69
408	宮田焼陶器碗	SKi 60	灰白(5Y/1)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	外：体部下半～底部無釉	底径：3.0cm	底部完存	小碗	図版68・69
409	宮田焼陶器碗	SKi 60	灰白(5Y7/1)	透明釉	外：体部下半～底部無釉	底径：3.9cm	底部3/8	小碗	図版68・69
410	肥前陶器甕	SKi 60	赤褐(10R4/3)，白色砂粒(中・大)少量	外：鉄釉(暗褐7.5YR3/3)	口縁部内面無釉，自然釉(ゴマ状)付着		口縁部破片		図版68・69
411	備前焼灯明受皿	SKi 60	断：暗灰(N3/)，外：灰赤(10R4/2)，白色砂粒(小)微量	内：塗り土(暗赤褐5YR3/2)	口縁部内外面煤付着，外：体部塗り土なし	口径：10.6cm，器高：1.9cm	口縁部1/8		図版68・69
412	備前焼灯明受皿	SKi 60	赤橙(10R6/6)，白色砂粒(小)少量	塗り土(赤褐10R4/4)	桟付，桟部凹み3箇所，口縁部煤付着，外：口縁部塗り土なし，底部ヘラ切り後ナデ	口径：10.2cm，器高：1.9cm，底径：3.0cm	口縁部5/8		図版68・69
413	煙管	SKi 60							
414	京焼系陶器碗	SKi 61・SKi 62・SKi 63・SKi 64	灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	外：体部下半～底部無釉	底径：3.0cm	底部完存	小碗	図版68・69
415	備前焼徳利	SKi 61・SKi 62・SKi 63・SKi 64	内・断：にぶい赤褐(2.5YR5/4)，白色砂粒(小)少量	外：塗り土(にぶい赤褐2.5YR4/4)	内：塗り土なし	底径：6.4cm	底部1/4		図版68・69
416	肥前系磁器染付碗	SKi 65	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺	口径：9.6cm	口縁部3/8		図版68・69
417	陶器透明釉蓋	SKi 65	にぶい橙(5YR6/4)，黒色砂粒(小)少量	外：透明釉	内：無釉，外：天井部沈線	口径：7.9cm	口受部1/4		図版68・69
418	土師質土器焙烙	SKi 65	断：暗灰黄(2.5Y5/2)，内・外：黄灰(2.5Y4/1)，胎土分類不明，黒色砂粒(小)微量，白色砂粒(小・中)少量		外：煤付着		口縁部破片		
419	瓦質土器焙烙	SKi 65	灰(5Y7/1)，胎土1b類		外：煤付着		口縁部破片		
420	土師質土器風呂釜	SKi 65	内：浅黄(2.5Y7/3)，にぶい褐(7.5YR6/3)，外：橙(5YR6/6)，胎土1a類		外：板ナデ，貼付突帯(ヨコナデ)，穿孔，煤付着	底径：46.9cm	底部7/8		図版51
421	肥前系磁器染付碗	SKi 66	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺	口径：10.9cm	口縁部1/8		図版68・69
422	肥前磁器染付皿	SKi 67	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付扇，外：染付唐草	口径：13.8cm	口縁部1/8		図版68・69
423	瀬戸美濃陶器片口鉢	SKi 67	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	施釉(浅黄5Y7/4)	外：沈線，体部下半無釉	口径：12.6cm	口縁部1/4		図版68・69
424	堺または明石擂鉢	SKi 67	断：にぶい橙(5YR6/4)，内面・口縁部外縁帯：にぶい赤褐(2.5YR5/3)，外面体部：赤褐(10R5/4)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)多量				口縁部破片		図版68・69
425	土師質土器土瓶	SKi 67	にぶい橙(5YR6/4)，黒色砂粒(小)微量		外：底部回転ヘラ切り後ナデ，煤付着	底径：8.4cm	底部3/4		
426	肥前系磁器染付鉢	SKi 68	灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(小)少量	透明釉(青みがかる)，呉須(暗青)	内：染付，外：畳付～底部無釉，染付	口径：14.8cm，器高：6.6cm，底径：7.2cm	口縁部1/2		図版51
427	土師質土器甕	SKi 68	にぶい褐(7.5YR5/3)，胎土1a類			底径：18.6cm	底部1/2		
428	瓦質土器羽釜	SKi 68	灰(N5/)，胎土1b類		内：一部煤付着，外：鍔下部～体部煤付着		体部破片		
429	土師質土器甕	SKi 69	内：にぶい橙(7.5YR7/4)，外：橙(7.5YR7/6)，白色砂粒(小)多量，赤色粒子(小)微量		指押さえ後板ナデ，外：波状文，底部ナデ	口径：45.8cm，器高：37.7cm，底径：28.0cm	底部完存		図版51
430	瓦質土器羽釜	SKi 70	灰(5Y4/1)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量，		外：鍔下部煤付着		口縁部1/12		
431	瓦質土器羽釜	SKi 70	内・断：灰(5Y6/1)，外：灰(N5)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量		内：口縁部刷毛目，体部指押さえ，外：鍔下部～体部煤付着		口縁部破片		
432	瓦質土器羽釜	SKi 70	断：灰白(5Y8/1)，内：灰白(10YR8/2)，外：褐灰(10YR5/1)，胎土1b類		外：鍔下部煤付着		口縁部破片		
433	瓦質土器羽釜	SKi 70	暗灰(N3/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量		外：鍔下部～体部指押さえ，煤付着		体部破片		
434	土師質土器焙烙	SKi 70	にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類		外：指押さえ，煤付着		口縁部破片		
435	瓦質土器焙烙	SKi 70	灰(5Y6/1)，胎土分類不明，黒色砂粒(小)微量		内：刷毛目，外：指押さえ，煤付着		口縁部1/8		
436	土師質土器焙烙	SKi 70	灰黄(2.5Y7/2)，胎土1a類		外：煤付着		口縁部1/8		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
437	土師質土器甕	SKi 70	にぶい黄(2.5Y6/3)，胎土1a類		内：板ナデ，外：底部刷毛目後ナデ	底径：24.3cm	底部3/8		
438	土師質土器甕	SKi 70	灰白(10YR8/2)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(大)少量		内：刷毛目，外：底部ナデ		底部破片		
439	瓦質土器器種不明	SKi 70	黄灰(2.5Y5/1)，灰黄(2.5Y6/2)，胎土1b類		内：刷毛目，外：立体的に人面を浮き彫り		不明		
440	肥前陶器刷毛目皿	SKi 71	明赤褐(2.5YR5/8)，白色砂粒(小)少量	内：鉄泥(極暗赤褐2.5YR2/4)，白化粧土(灰白2.5Y8/2)による刷毛目，透明釉，外：鉄泥，透明釉	外：体部下半無釉		口縁部破片		図版68・69
441	瓦質土器焙烙	SKi 71	断：にぶい黄橙(10YR7/3)，内：黄灰(2.5Y5/1)，外：黄灰(2.5Y4/1)，胎土1b類		外：指押さえ		口縁部破片		
442	瓦質土器羽釜	SKi 71	灰(N6/)，胎土1b類		内：板ナデ，外：鍔下部～体部指押さえ，煤付着		体部1/4		
443	瓦質土器羽釜	SKi 71	内・断：灰(N6/)，外：灰(5Y6/1)，胎土1b類		外：鍔下部～体部煤付着		口縁部破片		
444	土師質土器焙烙	SKi 73	内・断：にぶい黄橙(10YR6/3)，外：暗灰黄(2.5Y4/2)，胎土1a類		外：指押さえ，煤付着		口縁部破片		
445	肥前磁器染付皿	SKi 74	灰白(N8/)，白色砂粒(小)少量	内：透明釉(青みがかる)，呉須(暗青)，外：透明釉	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，染付，外：畳付無釉		底部破片		図版68・69
446	肥前磁器染付碗	SKi 74	灰白(N8/)	呉須(暗青)，透明釉	内：染付五弁花文(コンニャク印判)，外：染付「大明年製」，畳付無釉	底径：4.2cm	底部1/2	中碗	図版68・69
447	肥前磁器染付碗	SKi 74	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(緑灰5G6/)，透明釉	外：畳付無釉，染付	底径：4.6cm	底部1/2	中碗	図版68・69
448	肥前陶胎染付碗	SKi 74	褐灰(10YR6/1)，白色砂粒(小)多量	呉須(暗青)，灰釉(灰)	貫入，外：畳付無釉，染付	口径：9.8cm，器高：6.9cm，底径：4.6cm	底部完存	中碗	図版51，巻頭図版1
449	肥前磁器染付皿	SKi 77	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：染付		口縁部破片		図版68・69
450	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 77	灰白(5Y7/2)	内：灰釉(灰白7.5Y7/1)，外：灰釉，鉄釉(黒5Y2/1)	貫入		口縁部破片	小碗	図版68・69
451	土師質土器大甕	SKi 77	内：黄灰(2.5Y6/1)，外：にぶい黄橙(10YR6/3)，胎土1a類		板ナデ，外：体部下半ヘラ削り	底径：47.0cm	底部完存		図版52
452	備前焼灯明受皿	SKi 78	断：灰白(N7/)，内・外：褐(7.5YR4/3)，白色砂粒(小)微量	内：体部塗り土(にぶい赤褐5YR4/4)，外：口縁部塗り土	桟付，桟部凹み	口径：10.4cm	口縁部1/4		図版68・69
453	円盤状土製品	SKi 79	赤褐(10R6/6)，白色砂粒(小・中)少量	鉄泥(暗赤褐5YR3/3)		径：2.4cm，厚：0.7cm	陶器破片		図版68・69
454	磁器染付碗	SKi 80	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青)，透明釉	内：染付(発色不良)，外：畳付無釉，染付(発色不良)	口径：8.2cm，器高：4.4cm，底径：3.4cm	口縁部1/4	小碗	図版68・69
455	肥前磁器染付碗	SKi 80	灰白(N8/)	内：呉須(暗青)，透明釉，外：呉須，透明釉，突帯鉄釉(褐7.5YR4/4)	内：染付，外：染付唐子絵	口径：12.0cm	口縁部3/8	中碗	図版68・69
456	瀬戸美濃陶器染付碗	SKi 80	にぶい黄橙～灰白(10YR7/4～7.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉	外：染付，畳付無釉，内：染付	底径：5.2cm	底部完存	中碗	図版68・69
457	瓦質土器羽釜	SKi 80	内・断：灰(N6/)，外：暗灰(N2/)，白色砂粒(小)少量，胎土1b類		外：鍔下部煤付着		体部破片		
458	土師質土器大甕	SKi 80	内：黒褐(10YR3/1)，にぶい黄橙(10YR7/4)，外：褐灰(10YR4/1)，にぶい橙(7.5YR7/4)，胎土1b類		内：指押さえ後刷毛目後ナデ，外：ヘラナデ後刷毛目	器高：55.9cm，底径：54.0cm	底部5/8		
459	土師質土器蓋	SKi 81	にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類		内：ヘラ削り後ナデ，刷毛目	口径：25.1cm，器高：2.45cm	口縁部5/8		
460	肥前系磁器染付碗	SKi 81	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	透明釉(青みがかる)，呉須(暗青)	内：染付，外：染付		口縁部破片	中碗	図版68・69
461	土師質土器大甕	SKi 81	口縁部内：灰白(5Y7/1)，底部内：灰白(2.5Y8/1)，灰黄(2.5Y7/2)，口縁部外：にぶい褐(7.5YR5/4)，底部外：灰黄(2.5Y7/2)，にぶい褐(7.5YR5/4)，胎土1a類		指押さえ後板ナデ，内：底部摩滅，外：体部上半摩滅，底部刷毛目	口径：50.6cm，底径：46.4cm	底部完存		
462	土師質土器大甕	SKi 81	内：明褐灰(7.5YR7/3)，外：にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類		板ナデ	口径：67.8cm	口縁部完存		
463	肥前系磁器染付碗	SKi 82	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺		口縁部破片		図版68・69
464	瓦質土器焙烙	SKi 82	灰白(2.5Y7/1)，白色砂粒(中)少量，胎土分類不明，黒色砂粒(中)少量		外：指押さえ，体部煤付着		口縁部破片		
465	肥前系磁器染付蓋	SKi 83	灰白(N8/)	透明釉(青みがかる)，呉須(暗青)	内：染付，外：染付，つまみ端部無釉	底径：5.0cm	底部1/4		図版68・69
466	肥前系磁器染付碗	SKi 83	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付		底部3/8	中碗	図版68・69
467	肥前系磁器染付碗	SKi 83	灰白(N7/)	呉須(暗青)，透明釉	内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：5.7cm	底部完存	中碗	図版68・69
468	肥前系磁器染付碗	SKi 83	灰白(N8/)	呉須(明るい青)，透明釉	内：見込み目跡1，染付型紙摺，外：染付型紙摺		体部破片		図版68・69
469	瀬戸美濃磁器染付碗	SKi 83	灰白(N8/)	呉須(明るい青)，透明釉	内：染付，外：染付		口縁部破片		図版70・71
470	肥前陶器灰釉皿	SKi 83	浅黄橙(10YR8/4)，白色砂粒(小)微量	内：灰釉(白色に発色)	外：無釉	底径：4.4cm	底部1/2		図版70・71
471	陶器灯明受皿	SKi 83	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	貫入，外：体部無釉	口径：10.8cm	口縁部1/8		図版70・71
472	土師質土器大甕	SKi 83	断：にぶい赤褐(5YR4/4)，内：にぶい赤褐(5YR5/3)，外：橙(5YR6/6)，胎土1a類		ヨコナデ		口縁部破片		
473	瓦質土器羽釜	SKi 83	断：灰白(N8/)，内・外：灰(N6/)，胎土1b類		外：鍔下部～体部煤付着		体部1/4		

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
474	土師質土器大甕	SKi 83	内：明赤褐(5YR5/6)，外：にぶい橙(5YR6/4)，胎土1a類		指押さえ後ヘラナデ，外：底部刷毛目	口径：85.7cm，器高：84.4cm，底径：62.1cm	口縁部完存		
475	肥前系磁器染付碗	SKi 85	灰白(N8/)	呉須(発色悪く，はじく，群青)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺		口縁部破片		図版70・71
476	肥前系磁器染付碗	SKi 85	灰白(2.5Y7/1)	呉須(群青)，透明釉	内：染付，外：染付型紙摺	底径：3.2cm	底部1/2		図版70・71
477	瓦質土器羽釜	SKi 85	灰白(N7/)，胎土1b類		鍔下部～体部煤付着	口径：24.3cm	口縁部3/4		
478	瓦質土器焙烙	SKi 85	黄灰(2.5Y6/1)，胎土1a類		外：煤付着	口径：37.0cm	口縁部1/8		
479	土師質土器甕	SKi 85	内：にぶい橙(5YR7/3)，外：にぶい橙(2.5YR7/4)，にぶい褐(7.5YR6/3)，胎土1a類		内：体部下半指押さえ後ナデ，外：底部ナデ	口径：29.0cm，器高：35.8cm，底径：25.6cm	底部1/2		図版52
480	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SKi 86	灰白(2.5Y8/1)，白色砂粒(小・中・大)少量	内：灰釉(灰白10Y7/2)，外：鉄釉(暗赤褐5YR3/6)	外：畳付無釉	底径：3.5cm	底部完存	小碗	図版70・71
481	瓦質土器焙烙	SKi 86	灰白(5Y7/1)，胎土1b類		外：煤付着		口縁部破片		
482	瓦質土器焙烙	SKi 86	灰白(2.5Y8/1)，胎土1b類？		外：煤付着	口径：42.8cm	口縁部1/2		
483	大谷焼大甕	SKi 86	橙(2.5YR7/6～6/6)，白色砂粒(小・大)少量，黒色砂粒(中)少量，灰色砂粒(中)微量	施釉(暗赤灰2.5YR3/1)	内：底部砂付着，外：底部無釉	底径：25.9cm	底部2/3		図版52
484	肥前磁器染付碗	SKi 87	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉(青みがかる)，外：呉須(暗青色)，透明釉	外：染付氷裂文，畳付無釉		底部破片	中碗	図版70・71
485	大谷焼甕	SKi 87	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	黒褐色釉(黒褐5YR2/2)	口縁端部無釉	口径：14.9cm	口縁部1/8		図版70・71
486	備前焼鉢	SKi 87	断・内：赤褐(10R5/3)，外：にぶい橙(7.5YR6/4)，白色砂粒(中・大)多量，黒色砂粒(中・大)多量，赤色粒子(小・中・大)多量		外：底部ヘラ切り後ナデ	口径：14.4cm，器高：7.5cm，底径：15.0cm	口縁部1/4		図版70・71
487	肥前磁器染付猪口	SKi 88	灰白(N7/)	呉須(黒青)，透明釉	外：染付コンニャク印判	口径：7.1cm	口縁部1/4		図版70・71
488	陶器鉄釉皿	SKi 88	断：黄灰(2.5Y6/1)，白色砂粒(小)多量，黒色砂粒(中)多量	内：鉄釉(にぶい赤褐5YR4/3)，外：口縁部鉄釉	溝縁，外：体部下半無釉	口径：11.5cm	口縁部1/8		図版70・71
489	京焼風陶器碗	SKi 88	淡黄(2.5Y8/3)	内：施釉(にぶい黄橙10YR7/3)，外：施釉，一部釉のかからない箇所あり	外：畳付無釉	底径：4.2cm	底部完存	中碗	図版70・71
490	肥前陶器刷毛目碗	SKi 88	橙(2.5YR6/6)	鉄泥(黒褐10YR3/2)，白化粧土(にぶい黄橙10YR7/2)による刷毛目，透明釉	内：刷毛目，外：刷毛目，畳付無釉	底径：4.4cm	底部1/2	中碗	図版70・71
491	京焼風陶器碗	SKi 88	灰白(2.5Y8/2)	施釉(浅黄橙2.5YR8/4)	外：畳付無釉	底径：4.6cm	底部3/4	中碗	図版70・71
492	瓦質土器焙烙	SKi 88	断：灰(N5/)，内・外：灰(N4/)，胎土1b類		外：体部指押さえ，ナデ		口縁部破片		
493	石鏃	SKi 88			サヌカイト製	2.4×1.3cm，厚1.4cm			図版56
494	肥前陶胎染付碗	SKi 89	灰(N6/)	灰釉(明オリーブ灰5GY7/1)	貫入，外：畳付無釉	底径：3.4cm	底部3/4	中碗	図版70・71
495	陶器蓋	SKi 90	灰(N5/)	内：暗緑色釉(灰オリーブ5Y5/3)，外：鉄泥	口縁部無釉，外：体部飛鉋	口径：14.0cm	口縁部1/8		図版70・71
496	瓦質土器焙烙	SKi 90	断：灰黄褐(10YR6/2)，内・外：黒褐(10YR3/1)，胎土分類不明，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量		内：体部下半刷毛目，外：指押さえ，煤付着	口径：44.0cm	口縁部1/8		
497	肥前系磁器染付碗	SKi 91	灰白(N8/)より灰みがかる	内：透明釉(青みがかる)，外：呉須(暗青)，透明釉	内：染付，見込み蛇の目釉剝ぎ，溶着痕，外：畳付無釉，染付	底径：10.0cm	底部1/8	中碗	図版70・71
498	磁器色絵碗	SKi 91	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉，外：透明釉，赤(圏線)，黒褐色の線描きの中を明るい青，薄緑色で塗る	外：色絵染付，畳付無釉	口径：8.8cm，器高：4.4cm，底径：3.3cm	口縁部1/4	小碗	図版70・71
499	陶器透明釉蓋	SKi 91	橙(7.5YR7/6)，白色砂粒(小)微量	内：透明釉	外：無釉，底部回転糸切り	口径：6.5cm，器高：2.3cm，底径：4.2cm	口縁部完存		図版70・71
500	瓦質土器焙烙	SKi 91	内・断：灰白～褐灰(10YR8/1～10YR4/1)，外：暗灰(N3/)，褐灰～黒褐(10YR4/1～10YR3/1)，胎土1b類		外：煤付着	口径：46.4cm，器高：8.3cm，底径：16.0cm	口縁部1/4		
501	備前焼擂鉢	SKi 92	明赤褐(2.5YR5/6)，口縁部外面：赤褐(10R4/4)		外：口縁部赤褐色化	口径：24.4cm	口縁部1/8		図版70・71
502	土師質土器大甕	SKi 92	にぶい黄橙(10YR7/3～7/4)，胎土1a類		ヨコナデ	口径：52.4cm	口縁部1/3		
503	土師質土器大甕	SKi 92	内：にぶい黄橙(10YR7/4)，外：橙(5YR6/6)，胎土1a類		内：指押さえ後ナデ，外：底部刷毛目(摩滅)	底径：44.2cm	底部7/8		図版52
504	土師質土器大甕	SKi 92	にぶい橙(5YR6/4)，胎土1a類		内：指押さえ後ナデ(剝落)		口縁部破片		
505	肥前陶器青緑釉皿	SKi 94	灰白(5Y7/1)，黒色砂粒(小)少量	内：青緑釉(明オリーブ灰2.5GY7/1)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：無釉	底径：5.8cm	底部完存		図版70・71
506	肥前陶器鉄釉鉢	SKi 95	赤(10R5/6)，白色砂粒(小)多量，灰色砂粒(小)微量	内：鉄釉(褐灰7.5YR4/1)	内：見込み砂胎土目積み，外：無釉		底部破片		図版70・71
507	土師質土器大甕	SKi 96	にぶい黄橙(10YR7/4)，胎土1a類		外：刷毛目後ヘラナデ，底部刷毛目		底部1/8		
508	肥前陶器鉢	SKi 99	明赤褐(2.5YR5/6)，白色砂粒(小・中)少量	鉄釉(黒褐5YR3/1)			口縁部破片		図版70・71
509	肥前磁器染付徳利	SKi 100	断・外：灰白(N7/)，内：灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(小)少量	外：呉須(暗青)，透明釉	内：無釉，外：畳付無釉，底部砂付着，染付	底径：7.0cm	底部完存		図版52
510	京焼風陶器碗	SKi 100	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(小)微量	施釉(浅黄2.5Y7/4)	貫入，外：畳付無釉	底径：4.4cm	底部完存	中碗	図版52
511	京焼風陶器碗	SKi 100	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	施釉(浅黄2.5Y7/4)	貫入	口径：10.2cm	口縁部1/4	中碗	図版70・71
512	肥前陶器刷毛目鉢	SKi 100	褐灰(7.5YR)，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(大)少量	内：白化粧土(灰白N8/)による刷毛目，透明釉，外：白化粧土による刷毛目，鉄泥(にぶい赤褐2.5YR5/4)	内：刷毛目，外：刷毛目，畳付～底部無釉	底径：10.8cm	底部5/8		図版52

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
513	肥前陶器刷毛目鉢	SKi 101	明赤褐(2.5Y5/6)，白色砂粒(小・大)少量，黒色砂粒(小)微量	鉄泥(黒褐10YR3/2)，白化粧土(灰白5Y8/1)による刷毛目	内：刷毛目，外：刷毛目，口縁端部無釉	口径：20.3cm	口縁部1/8		図版70・71
514	備前焼擂鉢	SKi 102	橙(5YR6/6)，口縁部外：灰褐(5YR5/2)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)微量		外：口縁部下端重ね焼き痕	口径：31.0cm	口縁部1/4		図版70・71
515	備前焼灯明受皿	SKi 103	赤灰(10R5/1)，白色砂粒(小)少量	塗り土(赤褐10R4/4)	内：桟付，桟部凹み，外：口縁部塗り土なし	口径：11.6cm	口縁部1/4		図版70・71
516	中国産白磁碗	SDi 41	灰白(5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	透明釉(灰白5Y7/2)	外：体部下半～底部回転ヘラ削り，無釉	底径：8.1cm	底部1/8		図版70・71
517	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(分厚く，白濁)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，砂付着，外：染付圏線，体部下半～底部無釉，砂付着	底径：4.5cm	底部1/4		図版70・71
518	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付蛸唐草文，外：染付		口縁部破片		図版70・71
519	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N7/)	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，見込み五弁花コンニャク印判，外：染付，畳付無釉，砂付着	底径：8.3cm	底部1/4		図版70・71
520	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N7/)，黒色砂粒(小)少量	内：呉須(暗青色)，透明釉，外：透明釉	貫入，内：染付，見込み蛇の目釉剝ぎ，アルミナ砂付着，外：体部下半～底部無釉	底径：4.8cm	底部1/4		図版70・71
521	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	型打成形，内：染付，見込み松竹梅，外：染付，底部「成〇年〇」，蛇の目凹形高台，底部周縁無釉	底径：9.0cm	底部1/2		図版70・71
522	肥前磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	内：白化粧土，呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)，外：透明釉	内：染付，墨弾き，見込み目跡1，外：体部白化粧土が流れる，底部目跡6	口径：22.9cm，器高：3.0cm，底径：11.8cm	底部1/2		図版70・71
523	肥前系磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	焼き継ぎ，内：染付牡丹唐草文，外：染付牡丹唐草文，蛇の目凹形高台，底部周縁無釉	底径：8.0cm	底部5/8		図版70・71
524	肥前系磁器染付皿	SDi 41	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	内：呉須(明るい青色)，透明釉，外：透明釉	型打ち成形，外：蛇の目凹形高台，底部無釉，内：染付	底径：7.2cm	底部完存		図版70・71
525	三田青磁皿	SDi 41	灰白(N8/)	青磁釉(白濁した淡青色)	貼付高台，型打成形，外：畳付無釉		底部破片		図版72・73
526	瀬戸美濃磁器染付皿	SDi 41	灰白(N8/)	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺「明治」，畳付無釉	口径：10.9cm，器高：2.2cm，底径：6.4cm	口縁部3/8		図版72・73
527	中国産磁器染付皿	SDi 41	灰白(7.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	釉分厚い，焼成不良，内：染付印青花，外：畳付無釉	底径：4.3cm	底部完存		図版72・73
528	磁器色絵皿	SDi 41	灰白(7.5Y7/1)	色絵(暗青色，赤色，緑色)，透明釉	内：色絵染付，呉須圏線，外：畳付無釉，色絵染付，底部呉須「大明製化年製」	口径：8.8cm，器高：2.3cm，底径：4.9cm	底部5/8		図版72・73
529	肥前系磁器染付蓋	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	外：染付，畳付無釉，内：染付	口径：9.2cm，器高：2.8cm，底径：4.0cm	口縁部5/6		図版72・73
530	肥前陶胎染付碗	SDi 41	灰白(N7/)，白色砂粒(小)微量	内：灰釉(明オリーブ灰2.5GY7/1)，外：呉須(暗青色)	外：畳付無釉	底径：5.1cm	底部1/4	中碗	図版72・73
531	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉(灰みがかる)，外：呉須(暗青色)，透明釉	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：染付		底部1/2	中碗	図版72・73
532	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.8cm	底部3/8	中碗	図版72・73
533	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：6.6cm	底部1/4	中碗	図版72・73
534	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：6.2cm	底部3/8	中碗	図版72・73
535	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：10.8cm	口縁部1/4	中碗	図版72・73
536	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.1cm	底部1/8	中碗	図版72・73
537	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.2cm	底部完存	中碗	図版72・73
538	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，一部橙色化(焼きムラか？)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる，ムラがある)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.1cm	底部1/2	中碗	図版72・73
539	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる，ムラがある)	内：染付，見込み目跡4，外：染付，畳付無釉	底径：4.0cm	底部7/8	中碗	図版72・73
540	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.2cm	底部3/4	中碗	図版72・73
541	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，見込み蛇の目釉剝ぎ，外：染付	口径：11.7cm	口縁部3/8	中碗	図版72・73
542	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺	口径：10.6cm	口縁部3/8		図版72・73
543	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，見込み蛇の目釉剝ぎ，外：染付，畳付無釉	底径：3.4cm	底部完存		図版72・73
544	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，見込み目跡5，外：染付型紙摺，畳付無釉	口径：9.4cm，器高：5.7cm，底径：3.3cm	底部完存		図版72・73
545	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：型紙摺染付，畳付無釉	底径：4.0cm	底部1/4		図版72・73
546	肥前系磁器染付碗	SDi 41	灰白(5GY8/1)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：型紙摺染付	底径：3.8cm	底部1/2		図版72・73
547	磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：10.0cm，器高：5.3cm，底径：3.6cm	底部7/8	中碗	図版53
548	磁器染付碗	SDi 41	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：3.6cm	底部1/5	中碗	図版72・73
549	瀬戸美濃磁器染付碗	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：9.8cm，器高：4.7cm，底径：3.0cm	口縁部1/4	中碗	図版72・73
550	肥前青磁鉢	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	青磁釉(明緑灰10GY7/1)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，砂付着，外：畳付～底部無釉，砂付着	底径：4.8cm	底部完存		図版72・73
551	肥前磁器染付鉢	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：呉須(黒青色)，透明釉	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，溶着痕，染付，五弁花コンニャク印判，外：畳付無釉	底径：6.2cm	底部1/4		図版72・73

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
552	肥前系磁器染付鉢	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	八角形，外：染付，蛇の目凹形高台，底部周縁無釉，砂付着，内：染付	底径：7.2cm	底部1/4		図版72・73
553	肥前系磁器染付鉢	SDi 41	灰白(N8/)	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：6.4cm	底部1/4		図版72・73
554	肥前系白磁鉢	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)微量	透明釉(青みがかる)	型打成形，内：見込み目跡1，外：蛇の目凹形高台，底部周縁無	底径：7.0cm	底部1/2		図版72・73
555	三田青磁鉢	SDi 41	灰白(N8/)	施釉(緑青色)	型押し成形，焼き継ぎ		底部破片		図版72・73
556	肥前磁器染付段重	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：呉須(暗青色)，透明釉	口縁端部無釉，外：染付，畳付無釉，底部砂付着	口径：14.2cm，器高：6.6cm，底径：10.2cm	底部3/8		図版72・73，巻頭図版1
557	肥前磁器色絵小杯	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	内：透明釉，外：色絵(赤色)，透明釉	外：染付唐子絵	口径：6.0cm	口縁部1/8		図版72・73
558	瀬戸美濃磁器染付小杯	SDi 41	灰白(N8/)	鉄釉(明褐7.5YR5/6)，内：透明釉，外：呉須(明るい青色)，透明釉	口唇部鉄釉，外：染付	口径：7.9cm	口縁部1/4		図版72・73
559	肥前磁器紅猪口	SDi 41	灰白(5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	透明釉(灰白7.5Y8/1)	型押し成形(蛸唐草)，外：体部下半～底部無釉	口径：5.8cm，器高：1.5cm，底径：1.8cm	底部完存		図版72・73
560	肥前磁器染付瓶	SDi 41	断・外：灰白(N8/)，内：灰白(2.5GY8/1)，黒色砂粒(小)少量	外：呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：無釉，外：染付		頸部1/4		図版72・73
561	瀬戸美濃磁器染付小杯	SDi 41	灰白(N8/)	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：5.9cm，器高：3.3cm，底径：1.9cm	底部1/4		図版72・73
562	肥前磁器染付仏飯器	SDi 41	断：灰白(N8/)，内：灰白(5Y7/1)，茶色砂粒(小)多量	内：透明釉，外：呉須(暗青色)，透明釉	外：染付，底部無釉	底径：4.2cm	底部5/8		図版72・73
563	肥前磁器色絵神酒徳利	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	外：色絵(赤色，緑色)，透明釉(青みがかる)	内：無釉，外：色絵染付，畳付無釉	底径：3.6cm	底部完存		図版72・73
564	肥前系磁器染付仏花瓶	SDi 41	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)多量	外：呉須(暗青色)，透明釉(緑みがかる)	内：無釉，外：染付		頸部完存		図版53，巻頭図版1
565	肥前陶器灰釉皿	SDi 41	灰(5Y6/1)	内：灰釉(灰7.5Y6/1)	砂目積み，外：無釉，体部下半ヘラ削り	底径：4.5cm	底部完存		図版74
566	肥前陶器鉄釉皿	SDi 41	灰黄褐(10YR6/2)，白色砂粒(小)微量，茶色砂粒(小・大)微量，黒色砂粒(小)少量	鉄釉(褐7.5YR4/3)	内：砂目積み，外：体部下半～底部無釉	底径：4.5cm	底部1/4		図版74
567	肥前陶器青緑釉皿	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量	内：青緑釉，外：透明釉(緑みがかる)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ，外：体部下半～畳付無釉	底径：6.0cm	底部1/4		図版74
568	松尾焼陶器皿	SDi 41	にぶい橙(2.5YR6/4)，白色砂粒(小)少量	鉄釉(灰褐7.5YR4/2)，白化粧土	内：象嵌(白化粧土)	口径：9.2cm	口縁部1/8		図版74
569	瀬戸陶器馬の目皿	SDi 41	灰白(5Y8/2)，白色砂粒(小・中)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量	鉄絵(暗赤褐5YR3/3)，透明釉	外：底部無釉，内：鉄絵馬の目		口縁部破片		図版74
570	瀬戸美濃陶器皿	SDi 41	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(大)微量	内：透明釉	外：無釉	底径：8.9cm	底部1/8		図版74
571	瀬戸美濃陶器染付皿	SDi 41	灰白(5YR8/2)，白色砂粒(小)少量	内：呉須(暗青色)，透明釉，外：透明釉	外：畳付無釉，内：染付	底径：5.8cm	底部1/4		図版74
572	瀬戸美濃陶器灰釉皿	SDi 41	灰白(5Y8/2)，茶色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量	灰釉(灰白7.5Y8/2)	外：高台部無釉	底径：4.6cm	底部破片		図版74
573	陶器皿	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)少量	透明釉	貫入，外：畳付無釉	底径：7.3cm	底部1/8		図版74
574	源内焼陶器皿	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)	内：三彩(緑色，黄色，茶色)，外：緑釉	型打成形，内：文様陽刻，三彩(残存不良)，緑釉，外：口縁部～畳付緑釉，底部無釉	口径：13.7cm，器高：3.5cm，底径：8.7cm	口縁部1/2		図版53，巻頭図版1
575	京・信楽系陶器皿	SDi 41	断・外：淡黄(2.5Y8/3)，灰色砂粒(小)少量	施釉(灰白5Y7/2)	貫入，外：体部下半～底部無釉	口径：8.3cm，器高：2.1cm，底径：3.2cm	底部1/2		図版74
576	信楽陶器碗	SDi 41	灰色(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰白8/)	外：体部下半～底部無釉	底径：3.0cm	底部3/8	小碗	図版74
577	陶器染付皿	SDi 41	灰白(5Y7/1)より灰みがかる	白化粧土，呉須(明るい青色)，透明釉，外：透明釉	内：見込み目跡？外：無釉		底部破片		図版74
578	陶器鉢	SDi 41	断・外：淡黄(2.5Y8/3)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	内：重ね焼き痕，外：体部下半～底部無釉	底径：7.4cm	底部1/4		図版74
579	肥前陶器刷毛目碗	SDi 41	にぶい橙(7.5YR7/3)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量，赤色粒子(小)微量	白化粧土(灰白2.5YR8/2)，鉄泥(にぶい褐7.5YR5/3)	外：畳付無釉	底径：4.0cm	底部3/8	中碗	図版74
580	京焼風陶器碗	SDi 41	灰白(2.5Y7/1)，白色砂粒(小・大)微量	施釉(灰オリーブ5Y6/2)	外：畳付無釉	底径：4.1cm	底部1/3	中碗	図版74
581	京焼風陶器碗	SDi 41	灰白(10YR8/2)，白色砂粒(小)微量	施釉(灰オリーブ7.5Y6/2)	貫入，溶着痕，外：畳付無釉	底径：5.0cm	底部1/2	中碗	図版74
582	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SDi 41	灰白(5Y8/1)，透明砂粒(小)微量	内：灰釉(灰白7.5Y8/1)，外：鉄釉(灰オリーブ5Y5/3)	外：沈線		体部破片	小碗	図版74
583	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)，白色砂粒(大)微量	内：灰釉(灰白7.5Y7/1)，外：鉄釉(黒10YR2/1)	外：畳付無釉	底径：4.2cm	底部1/2	小碗	図版74
584	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SDi 41	灰白(5YR8/1)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(灰白5Y8/1)，外：鉄釉(黒褐7.5YR3/2)	外：畳付無釉		底部破片	小碗	図版74
585	瀬戸美濃陶器染付碗	SDi 41	灰白(5Y8/1)	内：透明釉，外：呉須(暗青色)，透明釉	外：染付	底径：4.8cm	底部1/4	中碗	図版74
586	信楽陶器碗	SDi 41	灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(小)少量	灰釉(灰白7.5Y7/1)	貫入，外：底部無釉	口径：9.4cm，器高：4.6cm，底径：3.0cm	底部1/4	小碗	図版74
587	肥前陶器鉢	SDi 41	にぶい橙(2.5YR6/3～7.5YR7/3)，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(大)少量	内：鉄泥(褐7.5YR4/3)，透明釉，外：鉄泥(にぶい褐7.5YR5/4)，透明釉	外：回転ヘラ削り，体部下半～底部無釉	底径：8.6cm	底部1/4		図版74
588	肥前陶器刷毛目鉢	SDi 41	にぶい赤橙(10R6/4)，白色砂粒(小)微量	内：白化粧土による刷毛目，外：鉄泥	外：畳付～底部無釉	底径：9.0cm	底部1/4		図版74
589	肥前陶器刷毛目鉢	SDi 41	にぶい赤褐(2.5YR5/4)，白色砂粒(中・大)微量，茶色砂粒(大)微量，黒色砂粒(中)少量	内：鉄泥(暗赤褐5YR3/3)，白化粧土(にぶい橙5YR7/3)，透明釉，外：鉄泥	外：回転ヘラ削り，無釉，内：刷毛目	底径：10.0cm	底部破片		図版74
590	瀬戸陶器鉢	SDi 41	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(大)微量	鉄絵(黒褐10YR2/3，橙5YR6/6)，透明釉	内：鉄絵，外：鉄絵	口径：20.3cm	口縁部1/6		図版74

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
591	瀬戸美濃陶器片口鉢	SDi 41	灰白(5Y8/2)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(浅黄5Y7/3)，鉄釉(赤褐5YR4/6)	片口,口唇部鉄釉,内：見込み目跡4,外：体部下半～底部無釉	口径：15.2cm,器高：8.4cm，底径：5.8cm	底部完存		図版75
592	大谷焼鉢	SDi 41	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	施釉(暗赤褐5YR3/2)	外：体部下半～底部回転ヘラ削り，無釉	底径：7.0cm	底部1/2		図版75
593	備前焼鉢	SDi 41	赤(10R5/6)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，雲母(小)微量		外：底部ナデ	口径：14.0cm,器高：5.8cm，底径：15.0cm	底部7/8		図版53
594	陶器鉢	SDi 41	にぶい黄橙(10YR7/3)，透明砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量	灰釉(にぶい黄2.5Y6/4)	内：見込み目跡大2，外：体部下半～底部ヘラ削り，無釉	底径：9.9cm	底部3/8		図版75
595	陶器鉢	SDi 41	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰オリーブ7.5Y6/2)	内：見込み目跡3，外：体部下半～底部無釉	底径：9.4cm	底部3/4		図版75
596	陶器鉢	SDi 41	淡赤橙(2.5YR7/4)，白色砂粒(小・中)微量，黒色砂粒(中)微量	内：鉄釉(にぶい赤褐7.5R4/3)，外：鉄釉(灰赤7.5R4/2)	外：体部下半～底部無釉	底径：8.1cm	底部1/2		図版75
597	陶器鉢または甕	SDi 41	断：灰黄(2.5Y6/2)，黒色砂粒(小)微量	鉄釉(にぶい赤褐5YR4/4)	内：見込み重ね焼き痕，外：釉垂れ，底部回転ナデ，無釉	底径：12.7cm	底部7/8		図版53
598	陶器鉢または甕	SDi 41	断：灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(中)微量	鉄釉(黒褐7.5YR3/2)	内：見込み目跡3，外：畳付～底部無釉，底部回転ヘラ削り，墨書	底径：14.8cm	底部1/2		図版75
599	陶器鉢	SDi 41	浅黄(2.5Y7/3)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色，淡い緑)，施釉(灰白5Y8/1)	内：染付		口縁部破片		図版75
600	陶器鉢	SDi 41	灰白(N8/)	内：白化粧土，染付(呉須明るい青色，暗褐色)，透明釉，外：白化粧土，透明釉	内：染付，見込み目跡4，外：体部下半～底部無釉	底径：6.1cm	底部1/2		図版75
601	瀬戸美濃陶器小杯	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)	灰釉(灰白7.5Y8/2)	外：底部無釉	底径：2.8cm	底部ほぼ完存		図版75
602	信楽陶器徳利	SDi 41	灰白(2.5Y8/1)，黒色砂粒(小)微量	外：鉄絵(暗茶色)，施釉(灰白10YR7/1)	貫入，内：無釉，外：鉄絵		体部3/8		図版75
603	大谷焼徳利	SDi 41	赤(10R5/6)，白色砂粒(小)微量	施釉(褐7.5YR4/3)	内：無釉		体部1/3		図版76
604	大谷焼徳利	SDi 41	橙(2.5YR6/6)，白色砂粒(小)少量	外：施釉(にぶい褐10YR5/3)	内：無釉，外：畳付～底部無釉	底径：8.0cm	底部3/4		図版54
605	大谷焼徳利	SDi 41	断：灰(N6/),内：灰褐(5YR5/2),外：灰褐(7.5YR4/2)，底部外：灰褐(7.5YR5/2)，白色砂粒(小)少量	外：施釉(灰褐7.5YR4/2)	内：無釉，外：畳付～底部無釉	底径：8.3cm	底部完存		図版54
606	大谷焼徳利	SDi 41	断・内：にぶい赤褐(2.5YR4/4)，白色砂粒(小)微量	外：施釉(黒褐10YR3/2)	内：無釉，外：体部彫り字(白化粧土)，底部無釉	底径：10.0cm	底部1/4		図版76
607	大谷焼火入れ	SDi 41	にぶい赤褐(2.5YR4/3)，白色砂粒(小)微量	外：施釉(黒5YR7/1)	内：無釉，外：押し引き，体部下半～底部無釉	底径：8.0cm	底部1/8		図版76
608	大谷焼火入れ	SDi 41	断：灰赤(10R5/2)，内：赤褐(10R5/4)，白色砂粒(小)微量	外：施釉(赤黒10R2/1)	内：無釉，底部重ね焼き痕，外：沈線，畳付け～底部無釉	底径：8.2cm	底部1/4		図版76
609	備前焼徳利	SDi 41	断：明褐灰(7.5YR7/1)，内：にぶい赤褐(5YR5/4)，白色砂粒(大)微量，黒色砂粒(小)微量	外：塗り土(極暗赤褐2.5YR2/2)	内：塗り土なし	底径：7.8cm	底部3/8		図版76
610	備前焼徳利	SDi 41	断：灰(N6/，5Y6/)，内：にぶい橙(5YR7/4)，黒色砂粒(小)多量	外：塗り土(暗赤褐2.5YR3/4)	外：底部陶印，塗り土なし	底径：5.2cm	底部1/2		図版76
611	備前焼徳利	SDi 41	断：にぶい赤褐(2.5YR5/3)，内：褐灰(10YR4/1)	外：塗り土(黄灰2.5Y4/1～にぶい黄橙10YR6/3)	外：底部陶印，塗り土なし	底径：6.8cm	底部完存		図版76
612	陶器徳利	SDi 41	灰白(N7/)，白色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，施釉(淡黄2.5Y8/3)	外：体部文字入，畳付～底部無釉	底径：4.8cm	底部1/2		図版76
613	備前焼擂鉢	SDi 41	断：黄灰(2.5Y5/1)，内・体部外：橙(2.5YR6/6)，口縁部外：にぶい橙(5YR6/3)，透明砂粒(中)微量，白色砂粒(小・中)少量，黒色砂粒(中)少量				口縁部破片		図版77
614	備前焼擂鉢	SDi 41	断・体部内・体部外：赤(10R5/6)，口縁部内・口縁部外・暗赤灰(10R4/1)，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(中)微量，赤色粒子(中)微量			口径：30.0cm	口縁部1/8		図版77
615	備前焼擂鉢	SDi 41	断・体部外：にぶい橙(2.5YR6/4)，内：灰褐(5YR5/2)，口縁部外：褐灰(10YR5/1)，白色砂粒(小)少量			口径：36.8cm	口縁部1/14		図版77
616	堺擂鉢	SDi 41	断：赤(10R5/6)，内・外：赤灰(7.5R5/1)，白色砂粒(小・中・大)多量				口縁部破片		図版77
617	堺または明石擂鉢	SDi 41	断：明赤褐(2.5YR5/6)，内・外：にぶい赤褐(5YR3/3)，白色砂粒(大)少量		外：体部ヘラ削り		口縁部破片		図版77
618	堺または明石擂鉢	SDi 41	断：赤(10R5/6)，にぶい橙(7.5YR6/4)，内・外：にぶい褐(7.5YR5/4)，白色砂粒(小・大)少量		内：片口，外：ヘラ削り後ナデ	口径：36.1cm	口縁部1/8		図版77
619	堺または明石擂鉢	SDi 41	断・内：褐(7.5YR4/3)，外：にぶい赤褐(5YR4/3)，透明砂粒(大)少量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(大)少量，黒色砂粒(大)少量，赤色粒子(中)少量		外：体部ヘラ削り	口径：32.4cm	口縁部1/8		図版77
620	堺または明石擂鉢	SDi 41	断・内：橙(5YR6/6)，外：明赤褐(5YR5/6)，褐灰(5YR4/1)，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		内：卸目下部摩滅，外：ヘラ削り	口径：37.0cm	口縁部1/8		図版77
621	堺または明石擂鉢	SDi 41	橙(2.5YR6/6)，透明砂粒(大)微量，白色砂粒(中)多量，灰色砂粒(中・大)少量		外：ヘラ削り	口径：35.0cm	口縁部1/8		図版77
622	堺または明石擂鉢	SDi 41	断：赤褐(2.5YR4/6)，内・外：灰赤(2.5YR4/2)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(小・大)少量，		外：ヘラ削り後ヨコナデ	口径：29.7cm	口縁部1/8		図版77

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
623	堺擂鉢	SDi 41	断：赤(10R5/6)，内・外：にぶい赤褐(2.5YR4/3)，白色砂粒(大)少量		外：体部下半刷毛目後ナデ，底部ナデ	口径：30.0cm，器高：11.7cm，底径：16.2cm	口縁部3/8		図版78，巻頭図版1
624	堺または明石擂鉢	SDi 41	断：赤橙(10R6/6)，内・外：にぶい褐(7.5YR6/3)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量		外：ヘラ削り	口径：31.2cm	口縁部1/6		図版78
625	堺擂鉢	SDi 41	断・底部内・底部外：にぶい赤褐(2.5YR5/4)，体部内・体部外：灰赤(2.5YR4/2)，透明砂粒(中)少量，橙色砂粒(大)少量		外：回転ヘラ削り後ナデ，底部ナデ	底径：17.0cm	底部1/4		図版78
626	明石擂鉢	SDi 41	断・底部内・底部外：赤(10R5/6)，体部内・体部外：赤褐(10R5/3)，白色砂粒(大)少量		内：底部摩滅，外：回転ヘラ削り		底部破片		図版78
627	明石擂鉢	SDi 41	断・底部内・底部外：明赤褐(2.5YR5/6)，体部内・体部外：灰赤(2.5YR4/2)，透明砂粒(小)多量，白色砂粒(小・中)多量，茶色砂粒(大)微量		外：底部ナデ，砂付着	底径：15.2cm	底部1/2		図版78
628	明石擂鉢	SDi 41	断・底部内・底部外：赤褐(10R5/4)，体部内・体部外：黒褐(2.5YR2/1)，白色砂粒(中・大)少量		外：回転ヘラ削り後ナデ，底部回転ヘラ切り後ナデ	底径：15.6cm	底部1/8		図版78
629	陶器蓋	SDi 41	淡黄(2.5Y8/3)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	内：天井部無釉，外：沈線，つまみ一部無釉	口径：12.9cm，器高：4.6cm，つまみ径：3.9cm	つまみ部完存		図版79
630	陶器透明釉蓋	SDi 41	橙(5YR7/8)，白色砂粒(小)微量	透明釉		つまみ径：3.6cm	つまみ部3/4		図版79
631	陶器透明釉蓋	SDi 41	断・内：橙(5YR6/6)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量	外：透明釉	天井部穿孔，内：無釉，煤付着，外：沈線	口受径：9.2cm	口受部1/8		図版79
632	陶器蓋	SDi 41	浅黄橙(10YR8/3)，黒色砂粒(小)微量	内：透明釉，外：鉄泥(灰褐7.5YR4/2)，内：口縁端部鉄泥	口縁部無釉，外：工具による押圧後回転ナデ	口径：16.0cm	口縁部1/8		図版79
633	陶器蓋	SDi 41	浅黄橙(10YR8/3)，黒色砂粒(小)微量	外：白化粧土，透明釉	内：無釉，外：イッチン掛け	つまみ径：2.9cm	つまみ部完存		図版79
634	陶器透明釉土瓶	SDi 41	橙(5YR7/6)，白色砂粒(小)微量	外：透明釉	内：無釉，穿孔4箇所，刷毛目		注口破片		図版79
635	陶器土瓶	SDi 41	浅黄橙(10YR8/3)，黒色砂粒(小)微量	透明釉	煤付着，内：無釉，穿孔，外：貫入，体部下半～底部周縁無釉	底径：7.4cm	底部1/4		図版79
636	陶器土瓶	SDi 41	断：灰白(7.5Y7/1)，内：灰黄(2.5Y7/2)，白色砂粒(小・中)微量	外：染付(明るい青色)，白化粧土，灰釉(灰7.5Y5/1)	内：無釉，外：筒描き	口径：11.0cm	体部1/4		図版79
637	富田焼陶器行平鍋	SDi 41	灰(5Y6/1)，黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(灰オリーブ5Y5/3)，外：鉄泥(にぶい赤褐5YR4/3)	口縁部無釉，外：体部上半回転ナデ後飛鉋	口径：17.0cm	口縁部1/8		図版79
638	陶器土鍋または急須	SDi 41	浅黄橙(10YR8/3)	内：透明釉	外：無釉，煤付着	底径：6.0cm	底部1/5		図版79
639	陶器土鍋または急須	SDi 41	浅黄橙(10YR8/3)	内：施釉(にぶい黄2.5Y6/3)	内：見込み目跡1，外：無釉，煤付着	底径：6.8cm	底部1/3		図版79
640	陶器透明釉土鍋	SDi 41	橙(5YR7/6)	内：透明釉	外：刻み目，煤付着		体部破片		
641	陶器透明釉羽釜	SDi 41	にぶい橙(7.5YR6/4)，透明砂粒(小)微量，茶色砂粒(小)微量，雲母(小)少量	外：透明釉	内：無釉，外：鍔下部無釉，煤付着	鍔径：23.4cm	鍔部1/4		図版79
642	瀬戸美濃陶器甕	SDi 41	灰白(7.5Y8/1)，白色砂粒(小・中・大)少量	内：鉄釉(にぶい赤褐5YR4/4)，外：鉄釉，灰釉(青黒5PB1.7/1)流し	外：沈線	口径：24.0cm	口縁部1/5		図版80
643	瀬戸美濃陶器甕	SDi 41	灰白(10YR8/1)，白色砂粒(小)微量	鉄釉(赤褐5YR4/8)	内：見込み目跡1，外：体部下半～底部無釉，底部回転ヘラ切り，墨書	底径：5.7cm	底部1/4		図版79
644	瀬戸陶器水甕	SDi 41	断：淡黄(2.5Y8/3)，外：明黄褐(10YR6/6)，白色砂粒(大)微量，黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(浅黄5Y7/3)，外：灰釉(浅黄5Y7/3)，青色釉(青灰5B5/1)流し	外：一部無釉，文様ヘラ彫り	口径：33.0cm	口縁部1/8		図版80
645	瀬戸陶器水甕	SDi 41	断：淡黄(2.5Y8/3)，白色砂粒(中・大)少量，黒色砂粒(小・中)少量	内：灰釉(灰オリーブ5Y6/2)，外：灰釉(灰オリーブ5Y6/2)，青緑色～緑青色釉流し掛け，底部鉄泥(暗赤褐5YR3/2)	内：見込み目跡1，外：畳付無釉，文様ヘラ彫り	底径：21.0cm	底部1/6		図版80
646	瀬戸陶器甕または壺	SDi 41	断：灰白(5Y8/2)，白色砂粒(小)微量	内：鉄釉(にぶい赤褐2.5YR4/3)，灰釉(浅黄5Y7/3)流し，外：底部鉄泥(にぶい赤褐2.5YR4/3)，青緑色釉(緑灰5G6/1)流し		底径：14.8cm	底部1/4		図版80
647	大谷焼甕	SDi 41	にぶい赤褐(5YR5/4)，白色砂粒(小)多量	施釉(極暗赤褐5YR2/3)	口縁端部無釉	口径：15.4cm	口縁部1/8		図版80
648	大谷焼甕	SDi 41	赤(10R5/6)，白色砂粒(中)少量	施釉(黒褐7.5YR3/1)		口径：14.9cm	口縁部1/8		図版80
649	備前焼水屋甕	SDi 41	断・内：赤(10R5/6)，外：暗赤灰(7.5R4/1)，白色砂粒(小・中・大)多量	内：化粧土(赤10R5/6)	外：沈線	口径：31.2cm	口縁部1/8		図版80
650	備前焼甕	SDi 41	断・内：にぶい赤褐(10R6/4)，外：にぶい赤褐(2.5YR5/4)，白色砂粒(中)少量，黒色砂粒(中)少量，灰色砂粒(中)少量	内：化粧土(にぶい赤褐2.5YR4/4)	外：底部ナデ	底径：20.0cm	底部1/4		図版80
651	陶器甕	SDi 41	断：灰(5Y5/1)，底部外：灰褐(7.5YR6/2)，白色砂粒(小)微量	鉄釉(暗赤褐5YR3/6)	内：見込み目跡5，外：底部無釉	口径：18.8cm，器高：23.1cm，底径：12.0cm	ほぼ完形		図版55
652	瀬戸陶器瓶掛火鉢	SDi 41	灰白(5Y8/1)，透明砂粒(中)微量	内：鉄泥(褐7.5YR4/3)，外：灰釉(暗緑色)	外：綾杉模様印刻，底部凹み1箇所，無釉，墨書	底径：19.4cm	底部3/8		図版81

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
653	信楽陶器灯明受皿	SDi 41	灰白(5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰白7.5Y7/1)	貫入，内：桟付，煤付着，外：無釉	口径：10.1cm，器高：2.0cm，底径：3.9cm	口縁部1/8		図版81
654	陶器灯明受皿	SDi 41	灰白(5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(オリーブ黄5Y6/3)	貫入，内：桟付，桟部凹み，外：体部下半～底部回転ヘラ削り，無釉	口径：10.3cm，器高：2.0cm，底径：4.1cm	口縁部3/8		図版81
655	備前焼灯明受皿	SDi 41	断：橙(2.5YR6/6)，内・外：赤褐(10R5/4)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量	外：口縁部塗り土(にぶい赤7.5R4/4)，内：化粧土	内：桟付，桟部3箇所凹み，外：体部下半～底部無釉	口径：10.8cm，器高：2.0cm	口縁部1/2		図版81
656	富田焼？陶器灯明受皿	SDi 41	断・外：灰白(5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰オリーブ5Y6/2)	貫入，煤付着，内：見込み目跡3，外：無釉，体部下半回転ヘラ削り	口径：7.4cm，器高：1.8cm，底径：3.5cm	底部1/2		図版81
657	富田焼陶器灯明受皿	SDi 41	灰白(2.5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	灰釉(浅黄5Y7/3)	貫入，内：見込み目跡1，外：無釉	口径：8.1cm，器高：1.9cm，底径：3.5cm	口縁部1/2		図版81
658	富田焼？陶器台付灯明受皿	SDi 41	灰白(10Y8/1)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)微量	灰釉(灰オリーブ7.5Y6/2，灰黄2.5Y7/2)	貫入，外：体部下半～底部無釉，内：底部無釉	底径：5.2cm	脚部ほぼ完存		図版81
659	陶器火入れ	SDi 41	灰黄褐(10YR6/2)，白色砂粒(小)少量，黒色粒子(小)微量	白化粧土，灰釉(灰白10Y8/1)	口縁端部敲打痕(剝落)，貫入，内：無釉	口径：10.7cm	口縁部1/4		図版81
660	陶器蓋	SDi 41	灰白(2.5Y8/2)	灰釉(灰黄2.5Y7/2)	内：無釉	天井径：7.6cm，器高：1.2cm，口受径：5.7cm	天井部1/4		図版81
661	信楽陶器蓋	SDi 41	灰黄(2.5Y6/2)，白色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量	外：灰釉(暗灰黄2.5Y5/2)	貫入，内：無釉	器高：1.5cm，口受径：3.6cm	ほぼ完形		図版81
662	土師質土器五徳	SDi 41	にぶい橙(5YR6/4)，胎土1a類		透かし，底部二次焼成を受ける	口径：12.7cm，器高：4.5cm，底径：12.8cm	底部1/4		図版81
663	土師質土器焙烙	SDi 41	褐灰(10YR6/1)，胎土1a類		煤付着，外：指押さえ後ナデ	口径：43.5cm	口縁部1/9		
664	瓦質土器焙烙	SDi 41	断：灰白(5Y8/1)，内：灰白(5Y7/1)，外：暗灰黄(2.5Y4/2)，胎土1b類		型押し成形，口縁端部指押さえ後ヨコナデ，内：煤付着	口径：42.0cm	口縁部破片		
665	土師質土器蓋	SDi 41	灰白(2.5Y7/2)，胎土1b類		内：煤付着	口径：19.4cm，器高：2.7cm，底径：13.3cm	口縁部1/2		
666	土師質土器焜炉	SDi 41	断：にぶい橙(7.5YR7/3)，内・外：にぶい黄橙(10YR7/2)，胎土1a類		円孔1箇所，内：口縁部突起1箇所，煤付着，体部刷毛目，外：摩滅	口径：13.6cm	口縁部1/6		
667	土師質土器焜炉	SDi 41	浅黄(2.5Y7/3)，胎土1a類		型押し成形，穿孔，内：回転ナデ後刷毛目，底部回転ナデ		底部1/8		
668	土師質土器甕	SDi 41	にぶい黄橙(10YR7/3)，胎土1a類		内：刷毛目，ヘラナデ，外：底部刷毛目	底径：25.3cm	底部5/8		
669	瓦質土器羽釜	SDi 41	断：灰白(5Y7/1)，内：灰(5Y6/1)，外：暗灰(N3/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)少量		外：鍔部指押さえ後ヨコナデ	鍔径：30.6cm	鍔部破片		
670	瓦質土器火鉢または火消し壺	SDi 41	断：灰黄(2.5Y7/2)，内・外：黄灰(2.5Y4/1)，胎土分類不明，白色砂粒(小・中)多量，黒色砂粒(小)多量		内：煤付着，外：櫛描き波状文，煤付着	口径：27.8cm	口縁部1/8		
671	土師質土器風呂釜	SDi 41	灰黄(2.5Y6/2)，胎土1a類		外：煤付着	底径：52.0cm	底部1/3		
672	土師質土器大甕	SDi 41	内：灰白(10YR7/1)，にぶい橙(7.5YR6/4)，淡赤橙(2.5YR7/3)，外：にぶい橙(5YR7/4)，にぶい黄橙(10YR7/4)，灰白(10YR7/1)，橙(2.5YR7/6)，胎土1a類		内：指押さえ後刷毛目後板ナデ，外：口縁部板ナデ，指ナデ後刷毛目後板ナデ，底部刷毛目	口径：54.9cm，器高：64.2cm，底径：49.1cm	口縁部完存		
673	石臼	SDi 41			砂岩	25.0×18.6cm，厚10.7cm			
674	肥前磁器染付皿	SDi 42	灰白(2.5Y8/2)，黒色砂粒(小)少量	内：呉須(暗青色)，透明釉(白濁)，外：透明釉	貫入，内：染付，砂目積み，外：畳付無釉		底部破片		図版81
675	肥前磁器染付皿	SDi 42	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付扇の宝物，外：畳付無釉，染付	底径：8.4cm	底部1/8		図版81
676	肥前磁器染付皿	SDi 42	灰白(N8/)より灰みがかる，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付葡萄か蔓草，外：染付蔓草	口径：11.8cm，器高：4.0cm，底径：7.2cm	体部1/10		図版81
677	肥前系磁器染付皿	SDi 42	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉	口縁部玉縁，内：染付，外：染付	口径：15.5cm	口縁部1/4		図版81
678	肥前陶胎染付碗	SDi 42	灰(5Y5/1)	内：灰釉(灰N6/)，外：呉須(暗青色)，灰釉	内：染付	底径：4.8cm	底部3/8	中碗	図版81
679	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗灰青色)，透明釉	内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：5.8cm	底部1/4	中碗	図版81
680	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：5.8cm	底部完存	中碗	図版84・85
681	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：4.2cm	底部完存	中碗	図版84・85
682	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，茶色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：畳付無釉，染付	底径：4.5cm	底部完存	中碗	図版84・85
683	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)より灰みがかる	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，見込み岩波の崩れ，外：畳付無釉，染付	底径：4.1cm	底部1/4	中碗	図版84・85
684	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)より灰みがかる	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付	口径：10.8cm	口縁部1/4	中碗	図版84・85
685	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(暗青色)，透明釉(緑がかる)	内：染付，外：染付	口径：10.2cm	口縁部1/4	中碗	図版64・65
686	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付	口径：8.0cm	口縁部1/8	小碗	図版84・85
687	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(2.5GY8/1)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付型紙摺	口径：10.8cm	口縁部1/8		図版84・85
688	肥前系磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺		口縁部破片		図版84・85
689	磁器染付碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付	口径：10.4cm	口縁部1/4	中碗	図版84・85
690	肥前青磁鉢	SDi 42	灰白(2.5Y7/1)，黒色砂粒(小)微量	青磁釉(明緑灰10GY7/1)	波状口縁，内：ヘラ彫り		口縁部破片		図版84・85
691	磁器色絵碗	SDi 42	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	色絵(赤色)，透明釉	外：染付	口径：10.2cm	口縁部1/8		図版84・85

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
692	磁器色絵碗	SDi 42	灰白(N8/)	内：色絵(緑色),透明釉,外：色絵(赤色,緑色,茶色,青色),透明釉	内：染付,外：染付		口縁部破片		図版84・85
693	中国産磁器染付皿	SDi 42	灰白(2.5Y8/1),白色砂粒(小)少量,黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色),透明釉	焼成不良,内：印青花,外：畳付無釉	口径：10.0cm,器高：2.2cm,底径：4.4cm	底部1/2		図版84・85
694	肥前陶器青緑釉皿	SDi 42	灰白(5Y8/1)	内：青緑釉(灰オリーブ5Y5/3),外：青緑釉(浅黄5Y7/4)	内：見込み蛇の目釉剝ぎ,外：体部下半～底部無釉	底径：4.6cm	底部1/2		図版84・85
695	肥前陶器鉄釉皿	SDi 42	断・外：にぶい赤褐(2.5YR4/3),白色砂粒(中)少量	内：鉄釉(暗赤灰2.5YR3/1),外：鉄釉(にぶい赤褐2.5YR4/3)	内：砂目積み,外：底部回転糸切り,砂付着	底径：5.0cm	底部7/8		図版84・85
696	肥前陶器灰釉皿	SDi 42	にぶい橙(7.5YR6/4),白色砂粒(小)微量,黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(灰白5Y7/2)	砂目積み,内：一部無釉,外：無釉	底径：4.8cm	底部1/2		図版84・85
697	瀬戸美濃陶器皿	SDi 42	灰白(2.5Y8/2),白色砂粒(小)少量,茶色砂粒(小)少量,黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(灰白5Y8/2)	外：無釉	底径：6.6cm	底部ほぼ完存		図版84・85
698	瀬戸陶器皿	SDi 42	灰白(2.5Y8/2),白色砂粒(大)少量	内：呉須絵(暗緑青色),鉄絵(暗褐色),透明釉	貫入,内：染付,見込み目跡2,外：畳付～底部回転ヘラ削り,無釉	底径：10.4cm	底部1/4		図版84・85
699	瀬戸陶器皿	SDi 42	灰白(5Y8/2),白色砂粒(小)微量	内：吹墨(黒2.5GY2/1),外：鉄絵(黒2.5G2/1,にぶい黄褐10YR5/4)	内：吹墨,外：鉄絵沈線,畳付～底部無釉		底部破片		図版84・85
700	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SDi 42	灰白(2.5Y8/2),黒色砂粒(小)少量	内：灰釉(灰白7.5Y7/1),外：鉄釉(黒褐10YR2/2)	貫入,外：畳付無釉	底径：4.4cm	底部完存	小碗	図版84・85
701	瀬戸美濃陶器腰錆碗	SDi 42	灰白(5Y8/1)	内：灰釉(灰白2.5GY8/1),外：鉄釉(黒褐2.5Y3/2)	貫入	底径：3.6cm	底部完存	小碗	図版84・85
702	京焼風陶器碗	SDi 42	灰白(10YR8/2),黒色砂粒(小)微量	施釉(灰白5Y7/2)	貫入,外：畳付無釉	底径：4.2cm	底部1/3	中碗	図版84・85
703	京焼風陶器碗	SDi 42	灰白(10YR8/2),白色砂粒(小)微量	施釉(にぶい黄橙10YR7/2)	外：畳付無釉	底径：4.8cm	底部1/2	中碗	図版84・85
704	京焼系陶器碗	SDi 42	灰白(5Y8/1)	鉄絵(オリーブ黒5Y2/2),透明釉	口縁部無釉	口径：10.4cm,器高：5.0cm,底径：9.8cm	口縁部1/5		図版84・85
705	信楽陶器碗	SDi 42	灰白(2.5Y8/2),茶色砂粒(中)微量	灰釉(浅黄2.5Y8/3)	貫入,外：体部下半～底部無釉	口径：6.7cm,器高：4.4cm,底径：2.4cm	口縁部1/8	小碗	図版84・85
706	信楽陶器碗	SDi 42	灰白(5Y7/2),白色砂粒(小)微量	灰釉(灰白7.5Y7/2)	貫入,外：体部下半～底部回転ヘラ削り,無釉	口径：8.6cm,器高：4.5cm,底径：3.0cm	底部1/2	小碗	図版84・85
707	大谷焼鉢	SDi 42	にぶい赤褐(5YR5/3),白色砂粒(小)少量,黒色砂粒(小)少量	施釉(黒褐10YR3/2)	外：体部下半～底部無釉	底径：6.2cm	底部1/2		図版84・85
708	肥前陶器刷毛目鉢	SDi 42	淡赤橙(2.5YR7/3),白色砂粒(小)少量,赤色粒子(中)微量	鉄泥(にぶい赤褐5YR4/3),白化粧土(にぶい黄橙10YR6/3),透明釉	内：刷毛目,外：回転ヘラ削り,刷毛目,高台部～底部無釉	底径：9.0cm	底部1/4		図版84・85
709	肥前灰釉陶器鉢	SDi 42	断：にぶい褐(7.5YR5/4),外：黒褐(7.5YR3/2)白色砂粒(中)多量	内：灰釉(灰10Y5/1),外：灰釉(灰7.5Y5/1)	外：体部下半～底部回転ヘラ削り,無釉	底径：9.9cm	底部完存		図版84・85
710	備前焼鉢	SDi 42	灰赤(7.5R4/2),白色砂粒(中・大)微量,黒色砂粒(中・大)微量,赤色粒子(大)少量		外：体部下半凹み1箇所,重ね焼き痕,砂付着	口径：14.0cm,器高：5.9cm,底径：14.1cm	底部1/2		図版84・85
711	備前焼鉢	SDi 42	断・内：にぶい橙(2.5Y6/4),外：にぶい橙(5Y6/3),透明砂粒(小)少量,白色砂粒(小)少量,黒色砂粒(小)多量			口径：13.4cm,器高：7.6cm,底径：13.2cm	底部1/4		図版82
712	備前焼鉢	SDi 42	断：灰赤(2.5YR4/2),内：にぶい赤褐(2.5YR4/4),外：にぶい赤褐(5YR4/3),透明砂粒(中)多量,白色砂粒(小)少量,黒色砂粒(中)少量		外：陶印,重ね焼きのため底部一部剝落	口径：10.5cm,器高：6.1cm,底径：10.2cm	底部3/8		図版82
713	陶器鉢	SDi 42	断：灰黄(2.5Y6/2),外：灰黄褐(10YR5/2),白色砂粒(小)微量,茶色砂粒(小)微量,黒色砂粒(小)微量	内：鉄釉(にぶい赤褐5YR4/4),外：鉄釉(にぶい赤褐5YR4/4,灰黄褐10YR5/2)	内：見込み目跡2,外：体部下半～底部無釉	口径：18.3cm,器高：9.6cm,底径：7.9cm	底部1/2		図版84・85
714	富田焼陶器鉢	SDi 42	灰白(5Y8/1),黒色砂粒(小)微量	内：灰釉(オリーブ黄5Y6/3)	焼き膨れ,外：無釉	底径：6.6cm	底部1/4		図版83
715	大谷焼徳利	SDi 42	にぶい橙(5YR6/4),褐灰(10YR6/1),白色砂粒(小)少量,茶色砂粒(中)微量	施釉(赤灰2.5YR4/1)	外：底部無釉	底径：10.8cm	底部3/8		図版84・85
716	肥前陶器擂鉢	SDi 42	にぶい橙(2.5YR6/3),白色砂粒(小・中・大)少量,黒色砂粒(中・大)少量	鉄釉(褐灰5YR4/1)	内：体部無釉,外：体部無釉	口径：33.6cm	口縁部1/8		図版82
717	備前焼擂鉢	SDi 42	灰白(N7/),内・外：灰赤(7.5R5/2),白色砂粒(小)少量,黒色砂粒(小)少量		口縁部下端重ね焼きのため接着痕	口径：28.8cm	口縁部1/10		図版82
718	備前焼擂鉢	SDi 42	断：赤(10R5/6),内・外：褐灰(5YR4/1),白色砂粒(中)少量,茶色砂粒(中)少量,灰色砂粒(小)少量,雲母(小)少量,赤色粒子(小)少量				口縁部破片		図版82
719	備前焼擂鉢	SDi 42	断：明赤褐(2.5YR5/6),体部内・体部外：明赤褐(2.5YR5/6),口縁部内・口縁部外：灰赤(10R5/2),透明砂粒(中・大)多量,白色砂粒(小・中・大)少量,茶色砂粒(中・大)少量				口縁部破片		図版82
720	明石擂鉢	SDi 42	橙(2.5Y6/6),透明砂粒(大)少量,白色砂粒(中)少量,黒色砂粒(中)少量,赤色粒子(中)少量				底部破片		図版82

番号	種類・器形など	遺構名	胎土の色調・含有物・特徴	釉の色調	成形・調整・施釉の特徴など	法量	残存率	備考	図版番号
721	堺または明石擂鉢	SDi 42	橙(2.5YR6/8)，白色砂粒(小・大)少量，茶色砂粒(中)少量，灰色砂粒(大)微量			口径：31.2cm	口縁部1/4		図版82
722	堺または明石擂鉢	SDi 42	断：赤(10R5/6)，にぶい橙(5YR6/4)，内・外：にぶい赤褐(2.5YR5/3)，白色砂粒(大)少量，黒色砂粒(中)少量			口径：32.4cm	口縁部1/8		図版82
723	堺または明石擂鉢	SDi 42	断：赤(10R5/6)，内：赤褐(10R4/3)，外：赤褐(10R4/3)，にぶい赤褐(5YR5/3)，透明砂粒(小)少量，白色砂粒(大)少量，茶色砂粒(大)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，雲母(小)微量			口径：29.3cm	口縁部1/8		図版82
724	堺または明石擂鉢	SDi 42	断：灰(N5/)，内・外：暗赤灰(10R4/)，白色砂粒(中・大)少量，黒色砂粒(小)少量		片口		口縁部破片		図版82
725	堺または明石擂鉢	SDi 42	断・内：明赤褐(2.5YR5/6)，外：赤褐(10YR4/3)，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量		片口	口径：32.0cm	口縁部1/4		
726	瀬戸美濃陶器甕	SDi 42	灰白(7.5Y8/2)，白色砂粒(小・中)少量	鉄釉(にぶい赤褐2.5YR4/3)，灰釉(黒N2/)，緑色釉流し	外：畳付～底部無釉	口径：22.9cm，器高：26.4cm，底径：16.8cm	口縁部1/2		図版55，巻頭図版1
727	瀬戸美濃陶器甕	SDi 42	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(小)少量	鉄釉(にぶい赤褐5YR4/3)	外：体部下半～底部無釉	底径：14.4cm	底部1/8		図版83
728	陶器甕または壺	SDi 42	断・内：灰白(5Y7/1)，白色砂粒(小・大)少量，黒色砂粒(小)微量	外：鉄泥(明赤褐5YR3/3)，灰釉(オリーブ黄5Y6/3)流し	内：無釉，外：釉流し，畳付無釉	底径：10.2cm	底部1/2		図版83
729	陶器甕	SDi 42	黄灰(2.5Y6/1)，白色砂粒(小)微量，黒色砂粒(小)微量	鉄釉(にぶい赤褐5YR4/3)		口径：13.0cm	口縁部1/4		図版83
730	陶器甕	SDi 42	断：灰(5Y6/1)，内・外：にぶい赤褐(5YR4/4)	鉄釉(にぶい赤褐5YR4/4)		口径：20.0cm	口縁部1/8		図版83
731	土師質土器五徳	SDi 42	灰(5Y6/1)，胎土1a類			器高：4.6cm，底径：9.1cm	底部1/2		図版83
732	土師質土器焙烙	SDi 42	にぶい橙～浅黄橙(7.5YR7/3～10YR8/3)，胎土1b類		煤付着，外：体部指押さえ	口径：38.0cm	口縁部1/6		
733	土師質土器五徳	SDi 42	内：にぶい橙(7.5YR7/4)，外：橙(5YR7/6)，胎土1a類			口径：17.8cm，器高：6.2cm，底径：23.4cm	底部3/8		
734	土師質土器五徳	SDi 42	断・外：にぶい橙(7.5YR7/4)，内：灰褐(7.5YR6/2)，胎土1a類		円孔6箇所，内：突帯3箇所，煤付着	口径：23.9cm，器高：6.5cm，底径：29.2cm	全体1/2		
735	瓦質土器羽釜	SDi 42	断：灰白(N7/)，内・外：灰(N7/)，胎土1b類		外：体部上半ヘラによる押さえ，鍔下部煤付着	口径：24.0cm	口縁部1/8		
736	土師質土器瓦灯傘	SDi 42	淡赤橙～にぶい褐(2.5YR7/3～7.5YR5/3)，胎土1a類		円孔2箇所，長方形透かし2箇所，摩滅	底径：8.6cm	底部1/4		
737	瓦質土器羽釜	SDi 42	断・内：灰白(5Y8/1)，外：暗灰(N3/)，胎土分類不明，白色砂粒(小)多量，黒色砂粒(小)多量		型押し成形，外：鍔下部～体部下半煤付着	鍔径：28.8cm	鍔部1/4		
738	瓦質土器焙烙	SDi 42	灰白(7.5Y7/1)，胎土1b類		外：煤付着	口径：48.6cm	口縁部1/8		
739	瓦質土器焙烙	SDi 42	断：黄灰(2.5Y6/1)，灰白(2.5Y8/1)，内：灰白(2.5Y7/1)，外：黄灰(2.5Y6/1)，胎土1b類		外：煤付着	口径：48.2cm	口縁部1/4		
740	瓦質土器焙烙	SDi 42	断・外：黄灰(2.5Y5/1)，内：灰(N5/)，胎土1b類		外：煤付着	口径：49.8cm	口縁部1/4		
741	瓦質土器甑	SDi 42	断：灰白(5Y7/1)，内・外：暗灰(N3/)，灰白(N7/)，胎土1b類		底部穿孔1箇所，外：煤付着	口径：28.3cm，器高：22.5cm	口縁部1/4		
742	瓦質土器器種不明	SDi 42	断：灰白(N7/)，灰白(5Y8/1)，内・外：灰白(2.5Y7/1)，灰(N4/)，胎土分類不明，白色砂粒(中)少量		型押し成形，円孔1箇所	底径：19.4cm	底部1/8		
743	肥前磁器染付皿	SDi 43	灰白(N8/)より灰みがかる，白色砂粒(小)少量	呉須(黒青色)，透明釉	内：染付斜め格子，見込み蛇の目釉剝ぎ，外：畳付無釉		底部破片		図版83
744	肥前系磁器染付碗	SDi 43	灰白(7.5Y8/1)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：4.1cm	底部3/5	中碗	図版83
745	肥前系磁器染付碗	SDi 43	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(暗青色)，透明釉(青みがかる)	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.6cm	底部1/8	中碗	図版83
746	瀬戸美濃磁器染付碗	SDi 43	灰白(7.5Y8/1)，黒色砂粒(小)多量	呉須(暗青色，発色悪い)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：8.2cm，器高：4.6cm，底径：3.6cm	底部2/5	小碗	図版83
747	瀬戸美濃磁器染付碗	SDi 43	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)微量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	口径：11.2cm，器高：5.2cm，底径：3.6cm	底部1/4	中碗	図版83
748	肥前系磁器染付碗	SDi 43	灰白(N8/)，黒色砂粒(小)少量	呉須(明るい青色)，透明釉	内：染付型紙摺，外：染付型紙摺，畳付無釉	口径：9.7cm，器高：5.7cm，底径：3.5cm	口縁部1/2		図版83
749	瀬戸美濃陶器染付碗	SDi 43	灰白(5Y8/1)，白色砂粒(小・中)微量	呉須(暗青色)，透明釉	内：染付，外：染付，畳付無釉	底径：5.2cm	底部ほぼ完存	中碗	図版83
750	京焼系陶器蓋	SDi 43	淡黄(2.5Y8/3)	鉄絵(暗オリーブ7.5Y4/3)，透明釉	口縁部無釉，外：鉄絵(磁州窯写し)	口径：13.8cm	口縁部1/4		図版83
751	陶器透明釉土瓶	SDi 43	にぶい橙(5YR7/4)，白色砂粒(小・中)微量	外：透明釉	内：無釉，外：沈線	口径：9.6cm	口縁部1/3		図版83
752	堺または明石擂鉢	SDi 43	にぶい赤褐(2.5Y4/3)，灰(N5/)，白色砂粒(小)少量，茶色砂粒(小)少量				口縁部破片		図版83
753	備前焼擂鉢	SDi 43	にぶい橙(5YR7/4)	塗り土(にぶい赤褐2.5YR5/4)	内：塗り土，外：塗り土		口縁部破片		図版83
754	堺または明石擂鉢	SDi 43	断：にぶい赤褐(2.5YR4/3)，灰(N5/)，内：灰赤(7.5R4/2)，外：暗赤灰(7.5R4/1)，白色砂粒(小)少量，黒色砂粒(小)少量，灰色砂粒(小)少量，赤色粒子(小)少量			口径：36.0cm	口縁部1/8		図版83